五十年史

千葉県立千葉東高等学校





創立50周年を迎えた本校



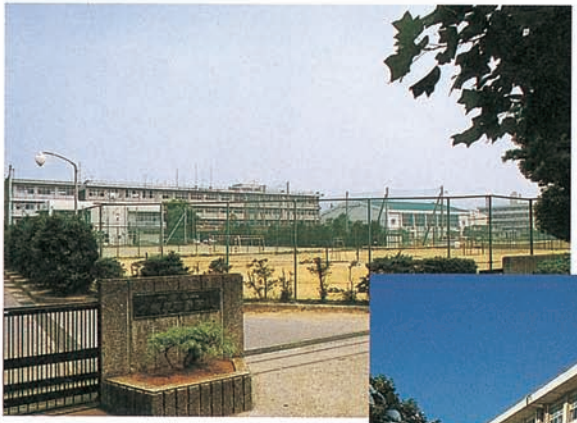


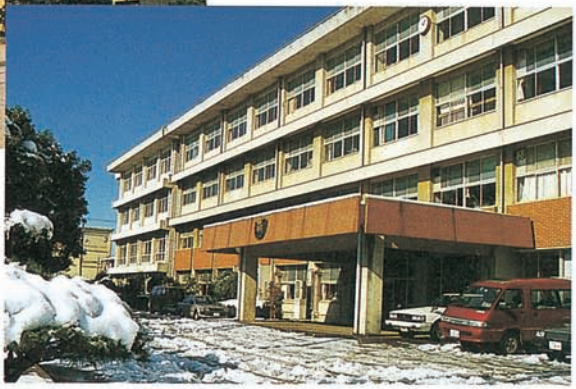
本校全景

東高の四季









東高今昔

全日制課程



葛城校舎の前に集合した第２回卒業生（同窓会総会にて）



なつかしい轟町校舎の玄関前ロータリー（三高時代）



衛生看護科（昭和41年度～60年度）の記念碑
（美術科平松生夫教諭のデザイン）

東高生の一日



椿の並木を通って登校





授業風景



学校行事さまざま
—PartI—



晴れて東高生となる日　入学式場へむかう新入生



文化祭（東雲祭）



校内球技大会





学校行事さまざま
—Part II—

マラソン大会



校内陸上競技大会

通信制課程



三高通信から東高通信へ



通信教育部から通信制課程となった年に
旧校舎前に集う卒業生（昭和36年）





卒業式風景
（昭和63年度）



生徒会誌「雑草」



校内作品展（昭和57年）

楽しい家族連れの運動会（昭和60年）





「四組生を囲む会」(昭和59年)



スクーリング時に発行する
「ザ・しゃろん」は昭和58
年から73号を数えている



新入生のオリエンテーションを兼ねた
合宿研修（東金青年の家）

夏季宿泊研修。昭和57年度以降
は年毎に場所を変えて実施

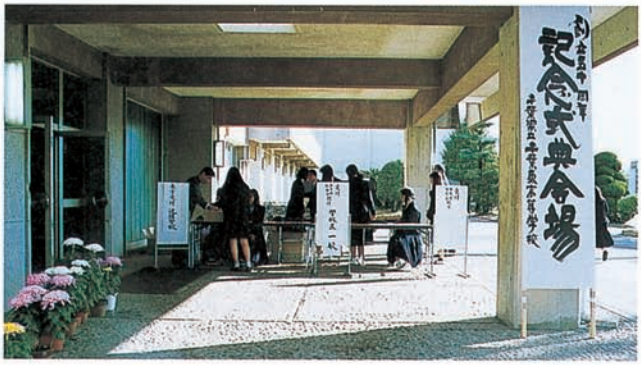




通信制課程の玄関と表札

創立五十周年

記念式典
於 本校体育館
時 十一月九日(土)





オープニングセレモニー



沼田武県知事の祝辞



記念曲の作詞友竹正則氏、
作曲間宮芳生氏の紹介

記念講演会と合唱コンクール



講演会
於 千葉県文化会館
時 十一月八日(金)
ノーベル賞医学生理学賞受賞
利根川進博士による講演
「真理探求の楽しさ」



合唱コンクール
予選 於 千葉県文化会館
時 十一月五日(火)
本選 於 本校体育館
時 十一月九日(土)



優勝した3年1組の熱唱

記念行事

美術・書道・写真展
於 セミナーハウス
時 十一月三日～九日



会場全景



（美術展）



（書道展）



（写真展）

祝賀会

於 千葉グランドホテル

時 十一月九日(土)











創立50周年（平成３年度）在職職員

巻頭言

校長　髙橋浩司



昭和十六年四月、本校が開校して今年で半世紀を迎えることになりました。

初め本校が千葉市立千葉高等女学校として千葉市の寒川町に開校したのは太平洋戦争の始まった年でした。それから千葉市葛城町へ移り終戦。昭和二十三年校名も千葉市立女子高等学校と変わり、それから県立に移管され、男女共学となって現在の千葉市轟町に移りました。昭和二十五年千葉県立千葉第三高等学校となり、更に昭和三十六年千葉県立千葉東高等学校となりました。この間昭和二十九年には通信制課程、昭和四十一年には衛生看護科がそれぞれ設置されました。衛生看護科はその後昭和六十年千葉県立若葉看護高等学校として発展独立いたしました。このように本校が幾多の曲折を経ながらも充実発展の一途をたどり、各方面から相応の評価をいただきながら推移してまいりましたのも、ひとえに県教育委員会をはじめ、関係各位、地域の皆様方の永年にわたるご援助のたまものと衷心より感謝申し上げます。

顧みますと本校は女子教育の充実発展を目差して設立されたわけですが、先にも述べましたような変遷により、現在は全校生徒の三分の二が男子生徒となり、大学進学熱のきわめて高い高校となっております。正に時代と共に成長発展をくり返して来た半世紀といえます。

創立五十年の今日、現況をみまわしてみますと、時代はまた変わろうとしております。生徒数の激減期を迎

え、豊かな生活と非常に多様化した価値観の中にあって本校の果す役割は何かを改めて考える必要があろうかと思います。そして、それは豊かな人間性を目差し、生涯にわたり学習するために必要となる学力としての基礎基本を教えること、いわば生徒達に人生の資本を与えることではないかと考えます。

来たるべき創立百周年に向けて、私どもはこの伝統と実績を踏まえ、さらに本校が大きく飛躍成長するよう努力する所存であります。

関係各位の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

総目次

口絵
巻頭言
第一章　創立五十周年記念事業
第一節　挨拶・式辞・祝辞……3
第二節　記念式典……14
第三節　記念行事……25
第二章　年表
第一節　全日制課程……55
第二節　通信制課程……76
第三章　沿革史
第一節　千葉市立千葉高等女学校（昭和十六年～二十三年）……91

第二節　千葉市立女子高等学校（昭和二十三年～二十五年）……100
第三節　千葉県立千葉第三高等学校（昭和二十五年～三十六年）……110
一　全日制課程……110
二　通信教育部……130
第四節　千葉県立千葉東高等学校（昭和三十六年～平成三年）……136
一　全日制課程普通科……136
二　全日制課程衛生看護科……166
三　通信制課程……194

第四章　回想・記録
第一節　回　想……207
一　歴代校長……207
二　全日制課程（旧職員　卒業生）……224
三　通信制課程（旧職員　卒業生）……267
第二節　記　録……276
一　教育課程……276
全日制課程……276
通信制課程……300

二　進　路……306
三　留　学……330
四　特別教育活動……352
全日制課程……352
通信制課程……398
五　全日制課程　PTA……401
六　通信制課程　振興会……410
第五章　資　料
第一節　現　況……413
第二節　歴代職員一覧……439
第三節　同窓会役員名簿……454
編集後記
題字　宮負一昭

第一章　創立五十周年記念事業



第一節　挨拶・式辞・祝辞
挨　拶……実行委員長　乾　泰宏……3
　　PTA会長
式　辞……校長　高橋浩司……4
祝　辞……千葉県知事　沼田武……6
祝　辞……千葉市長　松井旭……7
祝　辞……千葉県教育委員会　奥山浩……8
祝　辞……同窓会会長　小西一三……9
生徒代表挨拶……生徒会会長　佐々木克昌……11
第二節　記念式典
式典の記録……14
第三節　記念行事
一　記念講演―真理探究の楽しさ―……利根川進博士……25
二　創立五十周年記念歌制作発表・合唱コンクール……42
三　美術・書道作品展……46
四　写真展示……49
五　未来メッセージ・50余話……51

第一節　挨拶・式辞・祝辞

挨　拶



実行委員長・ＰＴＡ会長　乾　泰宏

県立千葉東高等学校創立五十周年記念式典にあたりまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

はじめに、本日ここに記念式典を挙行するに当たりまして、ご多忙中にもかかわらずご臨席を賜りました、沼田武県知事はじめ多数の御来賓の皆様に心から御礼申し上げます。

本校は太平洋戦争前夜の昭和十六年に開校され、爾来、今日に至るまで五〇年間、昭和の激動の中でさまざまな試練と幾多の変遷を経て参りました。

この間当校から巣立って参りました卒業生は二万有余におよび、今日見られるがごとく自由で個性的な校風と、優れた教育環境を有するに至っております。

これらは全て、県当局はじめ関係各機関、歴代の校長先生並びに諸先生方、同窓の諸先輩及び生徒の皆さん、通信制教育振興会の方々、期成会、ＰＴＡの父母の皆さん、こうした方々の並々ならぬご努力とご支援によって初めてなしえたことであります。

あらためて衷心より感謝と敬意を表する次第であります。

そうしてここに創立五十周年にあたり八項目にわたる記念事業を遂行いたすことができました。

ノーベル賞受賞、利根川進先生をボストンからお招きして開催されました記念講演会「真理探究の楽しさ」は、生徒諸君はじめ多くの人々の心深く勇気と感銘の印象を刻みつけたものと存じます。

友竹辰先生作詞、間宮芳生先生作曲の記念祝典曲「空の向うがわ」は地球のやさしさを願い、ながく歌い継がれるべき内容の、創立五十周年にふさわしいメッセージとなったと存じます。

生徒諸君が五〇年後の自分に語りかけた「未来メッセー

ジ・50」、記念歌を中心にした「合唱コンクール」など生徒全員参加のプロジェクトをはじめ、美術・書道作品展、写真で語る五〇年の歩み展、校史編纂等の記念事業も予定通り滞りなく完遂することが出来ました。

これも偏えに同窓会諸兄姉、ＰＴＡ父母など関係各位のご助力と本校教職員並びに生徒諸君のご尽力によるもので、改めてここに御礼申し上げます。

これらの記念事業は、校内に施設を建てるというかたちではございませんでしたが、参加した一人ひとりの心のなかに、意味深く、忘れ難い記念碑を打ち立てることになったと思います。

ちょうど五〇年前のきょう、昭和十六年十一月九日の新聞は「日米交渉が難航」という記事を大きく報じています。ちょうど一カ月後日本は米国に宣戦布告し太平洋戦争がはじまりました。日ならずして「学徒動員」や「女子挺身隊」といったことばが紙面に出て参ります。五〇年後の今日それを思いますと、平和と豊かさのこの尊さに感謝せずにはいられません。

そしてこれからの五〇年、人も心も更に平和で、更に豊かであることを念願し、次の時代を担う在校生諸君がその世界の実現に向かって邁進されんことを願わずにはいられません。

終りにあたりまして、重ねてご来賓各位、関係各位に対しまして、これまでのご支援に深く感謝を申し上げます。

私共も今後出来るかぎり本校の発展に努力してまいる所存でございますので、関係各位のますますのご支援ご指導をお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

平成三年十一月九日

式辞

校長　髙橋浩司



菊の香かおる今日の佳き日、沼田武千葉県知事をはじめ多くの来賓の方々のご臨席のもと、このように盛大に千葉県立千葉東高等学校創立五十周年記念式を挙行できますことは、私のよろこびとするところであります。ご臨席の皆さまに厚

く感謝申し上げます。また、このような御祝いの行事を開いてくださいました五十周年記念事業実行委員会の乾泰宏会長はじめＰＴＡ、同窓会、通信制振興会の方々に心から御礼申し上げます。

千葉県立千葉東高等学校の前身である千葉市立千葉高等女学校は、昭和十五年九月十九日千葉市議会においてその設置案が可決され、翌昭和十六年一月十五日文部省の認可を得て誕生したのであります。昭和十六年四月八日、都川のほとり千葉市港町十九番地において新入生二二〇名を迎えて入学式が行われました。以来、千葉市立千葉高等女学校は、昭和二十五年、県に移管され、千葉県立千葉第三高等学校と校名を変え男女共学になり、現在の姿のもととなりました。昭和二十九年には通信教育部を、昭和四十一年衛生看護科を設置して、時代の要請に応えて発展して来ました。昭和六十一年に衛生看護科は廃止されましたが、現在の県立若葉看護高等学校となっております。現在の千葉東高等学校となったのは、昭和三十六年、まことに幾多の変遷を経て今日に至ったのであります。

本日ここに歴代の校長先生はじめ諸先生方のご臨席をいただいておりますが、往時を偲び感無量のものがあるのではないでしょうか。幾多の困難な状況の中で、本校教育のために尽くされました諸先生方に対し、深く深く感謝と敬意を表するものであります。

五十周年という年は、千葉市立千葉高等女学校以来半世紀に亘る歴史に立ちながらも、来るべき百周年に向けて新たな第一歩を踏み出す年でもあります。そしてこの第一歩に私どもは千葉東高等学校からノーベル賞の受賞者を、という夢を託したのであります。昨日記念事業の一つとしてノーベル医学生理学賞の利根川進博士による五十周年記念講演会を開きました。ノーベル賞受賞者を真近かに見た生徒諸君は、恐らく生涯忘れ得ない感動を受けたものと思います。この感動、感激を語り継ぎながら、ノーベル賞を目指して次の半世紀の歴史を築いていくことを期待するものであります。時あたかも世界に誇る学術研究のメッカ、上総アカデミアパークが出来ようとする時、千葉東高校はノーベル賞に向けてその第一歩を踏み出したのであります。

正法眼蔵随聞記の一節「切に思いたるは必ず遂ぐべし。」を唱え、千葉東高等学校のいやさかを祈って五十周年記念式の式辞といたします。

平成三年十一月九日

祝辞



千葉県知事　沼田　武

菊華香る今日の佳き日、千葉県立千葉東高等学校創立五十周年の記念式典がかくも盛大に挙行されますことに心からお喜び申し上げます。

本校は、昭和十六年四月、四年制の千葉市立高等女学校として、地域社会の要望を担い、各方面からの多大の期待を寄せられて創立されたものであります。爾来五十年、着実な歩みのなかで、社会の要請に応え、数多くの優れた人材を世に送り出し、今日を迎えました。

本校関係者の皆様方のお喜びもいかばかりかと拝察し、ここに衷心より慶賀の念を表するものであります。

さて、本校の歴史を振り返りますと、決して平坦な道のりであったとはいえません。そこには幾多の苦難と試練が横たわっていたことを思わずにはいられません。創立時の港町仮校舎での授業、昭和十六年十二月、太平洋戦争の勃発、二十年空襲による校舎焼失、新校舎の建築中止による分散授業、隔日授業、また、二部授業等、満足な授業ができない状態が続いたと聞いております。昭和二十三年現在の地に移転してからも戦後の混乱のなかでしばらくは困難な状態が続いたということです。

しかしながら、このような多くの試練を歴代校長先生を中心とした教職員、生徒、卒業生、保護者、その他多くの関係者各位の愛校心に燃えたご尽力により、ひとつひとつ乗り越え前進しながら、今日の隆盛を見るに至りました。

この間、校名も幾度か変更され、三十六年に現在の校名千葉県立千葉東高等学校となりました。また、昭和二十九年に通信教育部が設置されて今日に及び、四十一年には衛生看護科も設置されています。

さまざまの苦難を乗り越え克服して五〇年、本校は名実ともに県下に誇る学校に成長しました。その歴史の頂点に現在の生徒諸君は位置しています。皆さんはここに学ぶ幸せを噛みしめ、本校の長い伝統を踏まえ、この学校で、これからの新しい時代二十一世紀を生きる糧を十分に身につ

け、この伝統を一層発展させてください。

県では、「豊かさを実感できるふるさと千葉」を目指した県づくりをすすめておりますが、生涯学習の基礎を培い、社会の変化に主体的に対応できる、二十一世紀の千葉を担う、心豊かなたくましい人間を育成する上で、学校教育の果たす役割はますます大きなものとなっております。すばらしい環境と優秀な生徒諸君に恵まれた本校の、次の社会に対して受け持つ責任の大きさは、はかり知れないものがあります。どうか、今日まで培われてきた輝かしい伝統の上に新たな世紀に向けて更に邁進されるよう願ってやみません。

最後に本校関係者の多年にわたるご苦労に敬意を表し、今日の佳き日を契機として、本校がますます飛躍されますよう祈念いたしまして、祝辞といたします。

平成三年十一月九日

祝　辞

千葉市長　松　井　　旭

本日、千葉県立千葉東高等学校創立五十周年記念式典が盛大に開催されましたこと、誠に喜ばしく心からお祝いを申しあげます。



貴校は昭和十六年、千葉市立千葉高等女学校として創立されて以来、市立女子高等学校、県立千葉第三高等学校、そして県立千葉東高等学校として幾多の変遷を経て、半世紀にわたり発展を続け、現在では県内でも有数の進学校として確固たる地位を築かれておりますこと、歴代校長先生をはじめ教職員各位の優れたご指導と保護者並びに地域の皆様方の献身的なご支援・ご協力の賜と存じ、心より敬意を表する次第でございます。

特に昭和二十年の空襲により校舎が焼失し、教室不足のため隔日授業を余儀なくされるなど大変なご労苦があったわけですが、一貫して自由で個性的な校風と伝統をめざし、今日まで数多くの優れた人材を輩出されておりますことに、心より敬意を表する次第でございます。

一方、私は市長就任以来教育の振興を市政の最重点施策

の一つとして取り組んでおりますが、児童・生徒一人ひとりのもつ可能性と創造力を最大限に伸ばせるよう、教育内容の充実に努めるとともに、教育環境の整備、児童・生徒の健康増進と体力増強等に各種の施策を強力に展開しているのでございます。

特に高等学校教育につきましては、二十一世紀に目を向け、国際化・高度情報化等、新しい時代に的確に対応できるよう心身ともに健全で優れた学識をそなえた次代の担い手の育成に努めて参りたいと存じております。

このような中で、高等学校教育の先導的役割を果たされております貴校が創立五十周年を迎えられましたこと、誠に意義深く存じているのでございます。

どうか皆様方にはこれを契機に貴校の発展のため、更には本市教育の振興のため、一層のご尽力を賜わりますようお願い申し上げます。

おわりに、千葉県立千葉東高等学校の今後ますますのご発展と皆様方のご健勝・ご活躍を衷心より祈念いたしまして祝辞といたします。

平成三年十一月九日

（代読　千葉市助役中橋芳弘氏）

祝　辞

千葉県教育委員会　奥山　浩



本日、ここに千葉県立千葉東高等学校創立五十周年記念式典が挙行されるにあたり、千葉県教育委員会から一言お祝いの言葉を申し上げます。

秋気天に満ち、万物亮亮たるこの佳き日、関係者が一堂に集い、本校の創立五十周年をこのように盛大にお祝いできることは、まことに慶賀の至りに存じます。

千葉東高校の創立は昭和十六年、太平洋戦争勃発の年に遡ります。当初は千葉市立の高等女学校として発足しましたが、戦争を挟んで、昭和二十五年に県立に移管され、男女共学の高等学校となり、三十六年千葉三高から現在の校名となりました。また、二十九年には県下で唯一の通信制

の課程を設置して、勤労青少年の教育のために広く門戸を開き、更に四十一年には衛生看護科を併置し、県立若葉看護高等学校の開設に至るまでの約二〇年間、広く時代社会の要望に応えるなど、教育多様化の方向に沿った貴重な実績をあげてきています。

太平洋戦争及び戦後の苦難と激動の時代のなかで、このように幾多の変遷を経て今日に至ったのですが、本校はこの間着実な歩みを続け、現在では名実ともに備わった県都の名門校として広くその名を馳せるとともに、地域社会の大きな期待を担っているところであります。

本校がこのように飛躍的な発展を遂げ得たのは、歴代校長先生を中心とした諸先生方のご指導、在校生の皆さんの先輩をはじめとする、ここに学んだ生徒たちの不断の努力、それを支えた地域の人々の協力や保護者の方々の熱意の賜と、これら関係者の方々に深く敬意を表する次第です。

「論語」に出てくる言葉に「五十にして天命を知る」という一節があります。これは孔子自身が苦難に満ちた自分の生涯を振り返って、五〇歳になった時、「自分の使命はなにか。天が自分に与えた運命はなにか」、すなわちそれは「文化のために努力することだ」と感知するに至ったと述べているのだ、と解釈されています。

創立時の苦難の歴史を経て半世紀、確固とした伝統を築きあげてきた本校に、現在課せられた使命、社会の期待はまことに大なるものがあります。それは、次の新しい社会を進んで担える心豊かでたくましい人間の育成です。本校に学ぶ皆さんは、ここに学ぶ幸せを噛みしめ、本校の長い伝統を踏まえ、この伝統を一層発展させるべく、より高い理想を追い求めて、より充実した日々を過ごすよう研鑽を積んでください。

最後に、千葉県立千葉東高等学校が、この創立五十周年をひとつの契機として、時代と社会の要請に応えながら、今後ますます発展されることを祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

平成三年十一月九日

祝　辞

同窓会会長　小　西　一　三

本日ここに、千葉県立千葉東高等学校創立五十周年式典が、かくも盛大に挙行され、卒業生の一員として誠に光栄に存じ感無量であります。衷心よりお祝い申し上げます。



この晴れの式典に同窓会の代表としてお招きいただきまして大変有難うございます。ご指名によりまして大変僭越ですが一言お祝いの言葉を申し上げます。

母校は昭和十六年に千葉市立千葉高等女学校として開校し、その後千葉市立女子高等学校、千葉県立千葉第三高等学校、そして千葉県立千葉東高等学校と改称され今日に至っております。この間には通信制の課程も併設され、また短期間ではあまりましたが衛生看護科も設置されておりました。思えば母校は戦前戦後の混乱、激動する社会の荒波を乗り越えて、栄え築きあげてきた五〇年。半世紀にわたる輝かしい尊い歴史があるのです。これは歴代の校長先生をはじめの諸先生のなみなみならぬご協力ご尽力の賜と深く感謝している次第であります。心から感謝の意をこめて拍手をお送りいたします。

さて、わたしが入学したのは昭和二十六年の「三高時代」で女子が大半をしめ、男子生徒は若干名で存在価値は薄く婿のようでした。校舎は旧陸軍兵舎の跡であちこちつぎはぎだらけ、雑巾がけをすると手に刺がかかる始末でした。また窓ガラスは品不足時代で盗難が多いためその防御策として印刷用青インクで一牧一牧に校名が書かれていました。誠にお粗末な環境で、学園生活としての生きがいなど全く感じられない惨めな時代でした。生徒自身もあまり積極的でないようでした。設備環境は別として、こうした活気のない雰囲気から脱皮し、活性化するには、諸先生をはじめ生徒会を中心に創意工夫をこらしました。その結果新たに誕生したのがラクビー部と剣道部でした。文化系関係では、弁論部や新聞部が新設され急遽男性の地位がクローズアップされたのでした。中でもラクビー部は今では県代表として全国大会出場まで成長しました。この成長した姿をみましても当時が懐かしく思い出されます。また、当時私は生徒会長に就任し、私達の年代が中軸となり、全校生徒の活性化を図ったりしました。その頃のことが今は懐かしく青春の一ページとしてインプットされています。

ところで、私は時折諸行事で母校へ出入りさせていただいておりますが現在の学園環境の施設設備は一段と充実し往時に比べ夢のように思えます。こんな恵まれた学園で全生徒が血気盛んに活動されてる姿を拝見しますと、男女共

学の調和のとれた清々しさを非常に強く感じます。

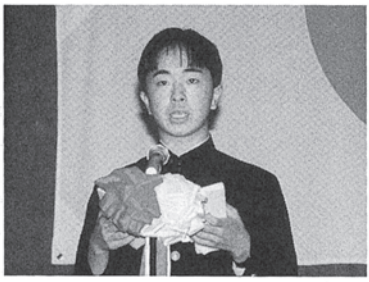
一方同窓会会員は今年で二万名を超え、政界、経済界、産業界、及び教育界にと広く各方面の中軸となり、大いに実力を発揮し社会の信頼を得ているところであり、今後も二十一世紀に向かって躍進して欲しいと願っております。また在校生におかれましても、勿論次代二十一世紀を担う有望な力強い人物に、成長されることを念願してやみません。

終わりにあたり、この五〇年を礎とし、更に六〇年、七〇年、……百年と記念日が迎えられますことを切望いたし、また同時に同窓会としても微力ながら従前にも増して協力をさせていただきたく思いますのでよろしくお願い申しあげます。

生徒代表挨拶

生徒会会長　佐々木　克昌

本日はお忙しい中、多数の御来賓の方々に御来場頂き、本校の創立五十周年をお祝していただきまして本当にありがとうございます。生徒一同、心から感謝申し上げます。



昭和十六年、太平洋戦争開戦の直前に千葉市立高等女学校として開校した本校も、今年創立五十周年という、大きな節目を迎えることになりました。

五〇年という時間の長さは、二〇〇万年という人類の歴史から見れば四万分の一、という非常に短い時間ですが、八〇年という人間の一生から見れば、決してひとことで片付けることの出来ない一人の人間の長い歴史であります。十年一昔、という言い方を借りれば、五〇年は五つも昔の大昔といえます。

実際に、現在本校の一一〇名の先生方で五〇歳以上の先生は二〇名であり、私たち生徒はもちろん、先生方の多くにとっても、五〇年前というのは自分で体験した時代でなく、書物をひもといて知る時代になってしまいました。

五〇歳、というのは私たちの両親と同じか、それよりやや上の世代であり、本校第一期生の先輩方は既に五〇年後の本校に学ぶ私たちの祖母の世代になっています。した

がって私たちが、世代の違った先輩達と話をすれば、考え方や生きた時代の違いを、きっと強く感じることでしょう。

五〇年、という時間は本当に多くのものを変えてしまいました。

この五〇年間に、本校は三回の校名変更を経て現在の校名となりました。また、共学化や通信制課程の併設、現在は若葉看護高等学校として独立された衛生看護科の併設をはじめ、数えきれないほど多くの変遷がありました。

そしてその間に、私たちを取り巻く社会にも、大きな変化がありました。

本校が創立した昭和十六年は、太平洋戦争開戦の年でした。そして、その後に続く戦争、日本有史以来の大変化ともいえる敗戦と焼け野原からの復興、それからの高度経済成長、今や世界有数の経済大国に数えられるに至った日本の現代史。それはまた、本校も共に歩んで来た歴史であり、私達の先輩方も歩んで来た歴史であると思います。

戦後、すべてが失われた中からスタートした生徒会活動も、社会の流れと共に活発になりました。

現在、私たちは過去の多くの経験を踏まえて、生徒会を運営することができます。それらはすべて、過去の先輩方や先生方が問題を乗り越えるために結集された知恵の結晶であります。そのような経験のない中から出発された黎明期の先輩方の苦労は、今の私たちには到底想像できません。

しかし、そうして活発になってきた生徒会活動も、昭和四十年代から顕著になった若者の社会への無関心の風潮により、何度か存続の危機に立たされたと聞きます。現在もややもすれば私たちは、生徒会は生徒の自主的活動の機関である、という原則を忘れているのではないでしょうか。五十周年という大きな節目を機に、もう一度この問題を考え直してみたいと思います。

そして、常に幅広い視野を持ち、新しいことに挑戦できる生徒会を目指し、伝統をただ守るのではなく、いつも問題点を見つめて、伝統を壊しながらも新しい伝統を築き、二十一世紀に向けて、「自由と平和とより大いなる飛翔」への決意を込めて、本校をより高く発展させていかねばならないと思います。

来賓の皆様、先生方、先輩の皆様方、私達千葉県立千葉東高等学校の生徒を、今後もよろしくお願い申し上げます。

創立五十周年式典に出席できた喜びにひたりながら、生徒を代表いたしまして、一言感謝の気持を申し上げて挨拶にいたします。

平成三年十一月九日


0 1 5 10 30 50
創立50周年記念
千葉県立千葉東高等学校

第二節　記念式典

式典の記録

「自由と平和と、より大いなる飛翔へ」の願いを込めて

―東高知命　創立五十周年記念式典挙行―

平成三年十一月九日、土曜日は雨あがりのさわやかな秋晴れの朝を迎えました。この日、千葉東高等学校創立五十周年記念式典が体育館を式場に行われました。

午前九時の受付開始前から、来賓の姿が見え始め、予定の一〇時には沼田県知事をはじめ多数の来賓のご臨席のもとに、音楽部による式典序曲（校歌混声四部合唱）が流れる中を静かに緞帳が上がりました。

式典は最初から最後まで放送委員の生徒二人、二年一組の森田淳子さんと二年五組の小川彰子さんのナレーションによって進行しました。校歌がハミングに変わるころ、森田淳子さんのナレーションが場内に流れます。

私たちの千葉県立千葉東高等学校は、今年、創立五十周年を迎えました。昭和十六年、日本が、あの太平洋戦争に突入していった年の春設立され、以来半世紀、激しく動く現代史の中で、幾多の変遷を重ねながらも、私たちの学校は、多くの方々の温かいご援助に支えられて、真理探究の情熱と、自由を愛する校風を育んできました。この間、ここ東雲が丘を巣立っていった卒業生は、二万四六九名を数えます。

今日、私たちはこの記念すべき日に巡り合えた喜びと、皆様の温かいご支援に対する感謝の念と、そして二十一世紀に向って「自由と、平和と、より大いなる飛翔へ」の願いをこめて、ここに集いました。本日の式典はできるだけ私たちの手で運営して行きたいと思います。不手際があるかもしれませんが、お許しください。

なお、担当しますのは二年一組森田淳子と二年五組小川彰子です。よろしくおねがいします。

開式にあたり、「君が代」を斉唱いたしますので、ご起立願います。

君が代斉唱の後、ナレーションにしたがって、開会のことば、乾実行委員長挨拶、校長式辞があり、更に来賓を代表して沼田武千葉県知事、松井旭千葉市長（代読　中橋芳弘助役）、千葉県教育委員会を代表して奥山浩教育次長の祝辞が続きました。特に沼田知事からは、祝辞に引き続いて、前日、文化会館で開催された利根川進博士の講演会に関連して、大要次のようなお話がありました。

利根川先生は千葉県としても非常に関係の深い方です。県

では科学振興をこれからの県政の中で大きく取り上げていこうということで、科学担当顧問として二人の先生をお願いしていますが、その一人が利根川進先生です。県の事業として、木更津と君津の丘陵地帯を使って上総アカデミアパーク構想を進めていますが、それはこの丘陵地帯約一、〇〇〇ヘクタールに二十一世紀にかけて、三〇年がかりという長い期間をかけて、水と緑を大切にする研究所の集積を、日本の国の最先端の研究集積を図っていこうというもので、その一つの核になる施設として上総DNA研究所を作る計画を県が中心になって進めています。DNA研究というのは遺伝子の解析研究をめざすもので、この遺伝子研究は二十一世紀の生命科学の最先端をいく研究になるだろうといわれています。世界でもまだDNA研究所をもっている国はないのですが、千葉県では、このDNA研究という二十一世紀の生命科学の最先端をいく研究所を、県自体が作っていこうということで上総DNA研究所という事業を、平成五年度、あと二、三年先には完成しようということで進めているところです。そこで、研究所をどういう規模にするか、どういう内容にしていくかということについて、利根川先生をはじめ五人の先生方に参画していただき、いろいろ知恵を出していただいて、だいたいDNA研究所の規模とか機能といったものがまとまりました。いまそれに合わせて事業を進めています。初代の所長には、日本のDNA研究の第一人者である、京都大学教授の高浪満先生になっていただくことが決まっています。その人を中心にして、上総アカデミアパーク構想の中心であるDNA研究所に日本の若手の学者を集めて、これからのDNA研究を進めていきたいと考えているわけです。このDNA研究が進んで参りますと、いま日本でも世界でもいちばん問題となっているガンというものが、撲滅される時期が来るだろうとまで言われています。そういう意味では千葉県を、たんに千葉県とか日本とかではなくて、人類の幸福をめざす研究の拠点にしていきたいということまで考えているわけです。そういうことについて利根川先生にたいへん力を添えていただいています。これから二十一世紀には、いろいろ千葉県の事業が展開されて参りますと、千葉の時代といわれる時期が必ず来るだろうと私たちは確信しています。しかし、二十一世紀の千葉県は、皆さんのような若い人びとに託すほかないわけです。私たちはそのレールを敷いていくということになるわけですから、これからひとつ大いに勉強していただいて、二十一世紀の千葉県、二十一世紀の日本を支えるような大きな人材に育っていただきたい、そう念願しています。

このあと、来賓紹介、祝電披露、更に須田義男本校第十一代校長をはじめ二四名の方への感謝状贈呈に続いて、出席者全員の合唱による校歌が会場一杯に響き渡り前半を終了しました。

後半は創立五十周年に因んで創作された記念歌の披露から始まりました。今度は小川彰子さんのナレーションが流

れます。

続きまして、本校音楽部による、創立五十周年記念歌をお送りします。

作曲は間宮芳生先生にお願いしました。間宮先生といえば、現在日本を代表する作曲家です。日本の民族音楽に強い関心をお持ちになり、その精神に深く根ざした独特の音楽を作られる世界的な作曲家です。その楽風は広く海外にまで知られ、数多くの音楽賞を受賞されています。先生には創立十周年記念歌も作曲していただいており、何か不思議なご縁を感じます。

また、作詞をされたのは友竹辰（しん）先生です。詩人としては辰というお名前をお使いですが、皆さんは歌手として、また、お料理番組に出演されるなど、幅広く活躍されている「友竹正則」という名でよくご存じでしょう。今回は、アメリカ版マザーグースとでも申しましょうか、わたしたちが今、いちばん大切にしなければいけない、優しさを、素晴らしいメルヘンの世界として創作してくださいました。

お二人の先生には、お忙しい中を今日の式典に駆け付けてくださいました。記念歌の披露に当たって、間宮先生が指揮を、友竹先生には音楽部の生徒とともに歌って、素晴らしい歌声をきかせていただけるとのことです。大変楽しみです。

それでは、作詞　友竹辰　作曲　間宮芳生「千葉東高校創立五十周年記念歌・空の向うがわ」をお送りします。ピアノ伴奏は三年一組沼野わか子さんです。

一番は友竹先生の独唱で、二番・三番は音楽部の混声四部合唱で披露された記念歌は、式場全体を大きな感動の渦に巻きこみまことに素晴らしいものでした。間宮・友竹両先生とも、何か壇上を立ち去りがたい雰囲気でしたが、時間の関係でアンコールというわけにもいかず、この記念歌を課題曲にした合唱コンクールの本選に進みました。小川さんのナレーションが流れます。

それでは、これから校内合唱コンクールの本選を行います。

出場するのは、十一月五日、千葉県文化会館で行われた予選会で、各学年金賞のクラスです。

なお、まことに突然でしかもお手数ですが、本日のお客さまに臨時の審査員になっていただきたいと思います。後で係が集めにまいりますので、お手元の審査カードにご記入のうえ、お渡しくださるようお願いいたします。なお、このコンクールの課題曲は、ただ今ご披露しました「五十周年記念歌」です。

予選を通過した四クラス、一年四組、二年一組、三年八組、三年一組が相次いで壇上に団結と調和の美を競いました。ご参会の来賓による厳正な審査の結果、自由曲に「Hallelujah!」を選んで登場した三年一組が最優秀賞を獲得しました。あふれんばかりの青春の熱意が満場を陶酔させ

たひとときでした。

この審査が行われる間を使って、もう一つのメインプロジェクトである「未来メッセージ・50」の収納式が行われました。ナレーションが続きます。

ステージの中央に、大きなカプセルが運ばれてきました。運んでくれたのは、二年生の鈴木君と一年生の吹越君です。ご苦労様でした。

「未来メッセージ・50」は、五〇年後の私たちへ、私たち自身が出す手紙です。五〇年後の未来に向って私たちはどのような人生を歩むのでしょうか。また、千葉東高校はどうなっていくのでしょうか。日本は、そして世界はどうなっているでしょう。私たちの生活から、世界の未来まで、いいえ、もっと大きく、地球や宇宙の未来まで豊かに想像し、未来の受け取り手である、五〇年後の私たちに宛てたメッセージなのです。

ところで、どんなメッセージが入っているのか、知りたいとは思いませんか。

そこで、生徒会長の佐々木君に生徒を代表して、五〇年後の生徒会長へ宛てたメッセージを読んでもらいましょう。

佐々木君が読み終わってメッセージをカプセルに入れたのに続いて、各学年及び通信制の生徒のメッセージが入れられ、最後に校長の手によりカプセルの蓋が閉められました。この蓋は西暦二千四十二年、創立百周年までは開けられることはないわけです。

収納式に続いて、合唱コンクール入賞クラスの表彰があり、その後、生徒会長佐々木克昌君（二年九組）から、二十一世紀を視野に収めて「自由と平和と、より大いなる飛翔へ」の誓いを込めて力強い挨拶がありました。最後に井辻先生の指揮、沼野わか子さんのピアノ伴奏で記念歌「空の向こうがわ」を全員で大合唱しました。式場は三度感動の渦に巻きこまれました。

半世紀に一度の逢いがたき式典に集い得た喜びと、創造の力を秘めた青春の高揚と混沌に、参会者一人ひとりの胸が言いしれぬ感動に満たされるなか、一二時一五分、式典の幕がおりました。

この日を祝ってご出席下さった方々は、来賓、地区内高等学校長、旧職員、学校関係者、ＰＴＡ・同窓会・通信制振興会の代表、一般招待者など一七二名（祝賀会一九五名）、それに全日制通信制職員約一〇〇名、全日制生徒一二五六名、通信制生徒代表一〇余名、あわせて一五五〇余名でした。

記念式典の流れ

〈緞帳おろしたまま〉主催者、来賓を案内してステージへ。幕内に着席して待つ。

式典序曲―音楽部による校歌　一、二番合唱

〈校歌の合唱が始まると同時に緞帳をあげる〉

ナレーター左手階段を登り、小演台の前に立つ

（校歌ハミングとなる）

N　私たちの千葉県立千葉東高等学校は、今年、創立五十周年を迎えました。昭和十六年、日本が、あの太平洋戦争に突入していった年の春設立され、以来半世紀、激しく動く現代史の中で、幾多の変遷を重ねながらも、私たちの学校は、多くの方々の温かいご援助に支えられて、真理探究の情熱と、自由を愛する校風を育んできました。この間、ここ東雲が丘を巣立っていった卒業生は、二万四六九名を数えます。

（ハミングここまで）

N　今日、私たちはこの記念すべき日に巡り合えた喜びと、皆様の温かいご支援に対する感謝の念と、そして二十一世紀に向って「自由と、平和と、より大いなる飛翔へ」の願いをこめて、ここに集いました。本日の式典はできるだけ私たちの手で運営して行きたいと思います。不手際があるかもしれませんが、お許しください。

なお、担当しますのは二年一組森田淳子と二年五組小川彰子です。よろしくおねがいします。

開式にあたり、「君が代」を斉唱いたしますので、ご起立願います。

（君が代伴奏のテープを流す）

N　ありがとうございました。ご着席ください。

N　では開会いたします。開会のことばをお願いします。

教頭　中央へ

（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

N　はじめに創立五十周年を記念するさまざまな事業を、中心になって推進してくださいました実行委員長の乾泰宏様のご挨拶をお願いいたします。

実行委員長中央へ

（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

N　次に、校長先生に式辞をお願いします。

校長　中央へ

（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

N　引き続き、本日ご臨席の方々から、お言葉をいただきたいと思いますが、ご紹介と

ご依頼を、教頭先生にお願いします。

教頭小演台の前へ

教頭　「本日は多数のご来賓のご臨席を賜わり、本当にありがとうございました。できますれば、なるべくたくさんの方々からお言葉をいただきたいのですが、時間の関係もございますので、三人の方々から、ご祝辞をいただきたいと思います。」

教頭　「最初に、公務ご多忙の中を本日の式典にご臨席くださいました、千葉県知事　沼田武様にお願いいたします。」

沼田知事中央へ

教頭　（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

「次に、本校は創立後の最も苦しい九年間を千葉市立の学校として、市にお世話になりました。そこで、千葉市を代表して、千葉市長　松井旭様のお言葉をいただきたいと思います。

（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

中橋助役中央へ

教頭　「来賓のお祝辞の最後に、本校五〇年の歴史を、様々の面で支えていただき、本校の発展に多大のご援助とご指導を賜わりました、千葉県教育委員会様のお言葉をいただきたいと思います。」

（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

奥山次長中央へ

教頭　「ありがとうございました。先程もお願いいたしましたように、本席でのお言葉は、時間の関係もございますので、以上に限らせていただきたいと思います。」

来賓紹介

教頭　「なお、ご来賓の詳細につきましては、お手元の印刷物でご承知くださいますようお願いいたします。」

祝電披露

教頭　「ここで、祝電を披露させていただきます。」

（千葉県議会議長・千葉市議会議長からの祝電を披露）

教頭　「そのほかたくさんの方々から同趣旨の電文を頂戴しております。ありがとうございました。この会場の入口のところに掲示いたしまして、ご披露に代えさせていただきます。」

N　ありがとうございました。では、引き続いて感謝状の贈呈式を行います。進行を宍倉先生にお願いします。

実行委員長・校長中央へ

宍倉　本校創立五十周年記念式典にあたり、ただ今から、本校教育の推進にご尽力され、

多大の貢献をなされた方々に感謝状を贈呈いたします。お名前を読み上げさせていただきますので、その場でご会釈ください。

（フロアーで）

「県立千葉東高等学校創立五十周年記念事業実行委員長及び校長感謝状

・創立四十周年以降　歴代校長
　須田義男様　森田章様
　齊藤志貴雄様
・同じく　歴代ＰＴＡ会長
　笹本功様　赤星喜一郎様
　池田憲彦様
・同じく　同窓会
　会長　小西一三様
　副会長　小林美代子様
　　高橋一郎様
　　長谷川直和様
・同じく　通信制振興会会長
　植草昭様　中山麗子様
・同じく　校医・薬剤師
　磯貝豊様　渡辺勲様
・財団法人　安田教育振興会様
・創立三十周年以降　永年勤続職員
　佐藤敦様　坂本あい子様
　安田末代様　野村典平様
　須賀賢悟郎様　亀忠夫様
　桜井功造様　野口宏様
　佐瀬八重子様

以上の方々を代表いたしまして、須田義男様　中央へお願いいたします。」

（感謝状贈呈）

実行委員長・校長・代表者席に戻る。

Ｎ　ここで、感謝状をお受けなされた方々を代表して、元本校校長、須田義男様よりお言葉があります。

須田先生中央へ

Ｎ　（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

ありがとうございました。ここで、本校の校歌を全員で歌いたいと思います。生徒の皆さんは起立してください。

Ｎ　指揮は二年三組境由紀さん

ピアノ伴奏は一年一組幸山良子さんです。

（校歌斉唱）

Ｎ　着席してください。

Ｎ　続きまして、創立五十周年記念歌の披露を行いますが、その舞台作りのためにしばらくお待ちください。

（知事退場）　教頭

（ただ今、県知事の沼田武様がお帰りです。

お忙しいところご臨席を賜わりまして本当にありがとうございました。皆様、拍手でお送りください。

（壇上の来賓フロアーへ）

〈緞帳を下ろす〉

〈緞帳下ろしたまま〉

N　それでは準備もできたようですので、本校音楽部による、創立五十周年記念歌をお送りします。

作曲は間宮芳生先生にお願いしました。間宮先生といえば、現在日本を代表する作曲家です。日本の民族音楽に強い関心をお持ちになり、その精神に深く根ざした独特の音楽を作られる世界的な作曲家です。その楽風は広く海外にまで知られ、数多くの音楽賞を受賞されています。先生には創立十周年記念歌も作曲していただいており、何か不思議なご縁を感じます。

また、作詞をされたのは友竹辰（しん）先生です。詩人としては辰というお名前をお使いですが、皆さんは歌手として、また、お料理番組に出演されるなど、幅広く活躍されている「友竹正則」という名でよくご存じでしょう。今回は、アメリカ版マザーグースとでも申しましょうか、わたしたちが今、いちばん大切にしなければいけない、優しさを、素晴らしいメルヘンの世界として創作してくださいました。

お二人の先生には、お忙しい中を今日の式典に駆け付けてくださいました。記念歌の披露に当たって、間宮先生が指揮を、友竹先生には音楽部の生徒とともに歌って、素晴らしい歌声をきかせていただけるとのことです。大変楽しみです。

それでは、校長先生、間宮・友竹両先生をご紹介ください。

緞帳を上げる

校長、両先生を案内し登壇。紹介して、指揮棒を間宮先生に手渡す。

N　それでは、作詞　友竹辰　作曲　間宮芳生（みちお）「千葉東高校創立五十周年記念歌・空の向うがわ」をお送りします。ピアノ伴奏は三年一組沼野わか子さんです。

素晴らしい記念歌をありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いします。

音楽部壇をおりる

N　それでは、これから校内合唱コンクールの本選を行います。

出場するのは、十一月五日、千葉県文化会館で行われた予選会で、各学年金賞のク

ラスです。
なお、まことに突然でしかもお手数ですが、本日のお客さまに臨時の審査員になっていただきたいと思います。後で係が集めにまいりますので、お手元の審査カードにご記入のうえ、お渡しくださるようお願いいたします。なお、このコンクールの課題曲は、ただ今ご披露しました「五十周年記念歌」です。

N　最初は一年四組で、自由曲は、作詞（丸山豊）作曲（團伊玖磨）「河口」。
指揮は押田格君、中山恵美子さん、ピアノ伴奏は、米本和代さん、杉山真知子さんです。

N　二番目は二年一組で、自由曲は、作詞（大木惇夫）作曲（佐藤真）「大地賛頌」
指揮は星創君、ピアノ伴奏は、木村真希子さんです。

N　三番目は三年一組で、自由曲は、作詞（ジェネンズ）作曲（ヘンデル）「Hallelujah!」
指揮は、松浦由枝さん、ピアノ伴奏は、沼野わか子さんです。

校長・生徒登壇

N　最後は三年八組で、自由曲は、作詞（北原白秋）作曲（多田武彦）男性合唱組曲「柳川風俗詩」より　Ⅳ、梅雨の晴れ間、
指揮は、山本宏樹君、伴奏は吉住健君です。

N　これで歌の発表を終わりますが、お手元の審査カードを集め、審査をする間に「未来メッセージ・50」の収納式を行います。
（タイムカプセルを運び入れる）
ステージの中央に、大きなカプセルが運ばれてきました。運んでくれたのは、二年生の鈴木君と一年生の吹越君です。ご苦労様でした。
「未来メッセージ・50」は、五〇年後の私たちへ、私たち自身が出す手紙です。五〇年後の未来に向って私たちはどのような人生を歩むのでしょうか。また、千葉東高校はどうなっていくのでしょうか。日本は、そして世界はどうなっているでしょう。私たちの生活から、世界の未来まで、いいえ、もっと大きく、地球や宇宙の未来まで豊かに想像し、未来の受け取り手である、五〇年後の私たちに宛てたメッセージなのです。

ところで、どんなメッセージが入っているのか知りたいとは思いませんか。
そこで、生徒会長の佐々木君に生徒を代表して、五〇年後の生徒会長へ宛てたメッセージを読んでもらいます。

生徒会長　佐々木克昌君メッセージを読む。読み終わってカプセルに入れる。

N　どうもありがとうございました。では続いて、各学年ごとにメッセージをカプセルに入れていただきます。
三年生のメッセージを三年六組の小川君に
二年生のメッセージを二年二組の大塚君に
一年生のメッセージを一年六組の神宮さんに
通信制のメッセージを一年A組の相澤君に入れてもらいます。お願いします。
ありがとうございました。

N　ここで、校長先生にご登場願って、ご自身のメッセージを入れていただいてから、蓋を閉めていただこうと思います。

校長ステージに

N　えっ!?　校長先生のメッセージの中身が知りたいとおっしゃるのですか、それは……五〇年後のお楽しみということにしたいと思います。

メッセージを入れて蓋を閉める。

校長退場　生徒続いて退場　カプセル運び去る。

N　どうやら無事に「未来メッセージ・50」も収納されました。タイムカプセルは今しばらく玄関に展示されたのちに、校内の然るべき場所に埋められる予定です。
これで、「未来メッセージ・50」の収納式を終わらせていただきます。ご協力ありがとうございます。

N　ここで、合唱コンクール本選の結果の発表を致します。発表を井辻先生お願いします。

井辻　「最優秀　三年一組」
「優秀　一年四組」「優秀　二年一組」
「優秀　三年八組」

N　続いて表彰に移ります。代表の生徒は壇上に並んでください。
（賞状・記念品　青柳）

校長　中央へ
代表生徒登壇

（表彰）　（介添　井辻）

壇をおりる。

N　ここで、私たち生徒を代表して、本校の生徒会長 佐々木克昌がご挨拶いたします。

生徒会長中央へ　（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

（来賓へ会釈）

N　最後に全員で五十周年記念歌を合唱したいと思いますのでご起立願います。お手元のしおりの中に歌詞及び歌譜がありますので、ご参照ください。指揮は井辻先生、ピアノ伴奏は沼野さんです。

N　ご着席ください。

N　長時間ありがとうございました。ここで、閉会の言葉をお願いします。

曽根教頭中央へ　（気をつけ　礼）――終わって――（礼）

〈緞帳を下ろす〉N　長い間本当にありがとうございました。これで創立五十周年記念式典は全て終了しました。ご協力ありがとうございました。

宍倉　ありがとうございました。それでは、係の先生方、お客さまをご案内願います。

＊生徒の入退場は生徒指導係で式場内での生徒への指示等は司会進行の係でお願いします。

記念祝賀会

――回顧と歓談――

記念祝賀会は、式典終了後、場所を千葉グランドホテルに移して行なわれました。午後一時を少し回った頃、吉田秀樹教諭の司会のもと、中山麗子通信制振興会会長の開会のことば、主催者を代表して小西一三同窓会会長の挨拶、来賓を代表して吉田治郎千葉市教育長の祝辞につづいて、来賓による鏡割が行なわれ、諸川芳雄第四代校長の年齢を超越した元気旺盛な乾杯の音頭で、祝宴が始まりました。畠山一郎第九代校長を始め、元校長の祝辞を織り混ぜながら、久しぶりの再会を喜び、過ぎし半世紀の歴史を懐かしみ、来る二十一世紀に想いを馳せる会話が、会場のあちらこちらに花を咲かせ、祝宴は歓談の渦と楽しい笑い声にいやがうえにも盛り上がりました。午後二時半、森田章第十二代校長の音頭による万歳三唱のうちに、尽きせぬ想いを残しながら幕を降ろしました。参加された人々は、本校全日制・通信制職員のほかに来賓・招待者百七十二名を数えました。

第三節　記念行事

一　記念講演―真理探究の楽しさ―

利根川　進　博士

皆さんおはようございます。

このたびは、千葉県立千葉東高等学校の創立五十周年記念に、このような晴れがましい場にお招きにあずかりまして本当にうれしく思っております。

実は今日の演題を知らせろという連絡が校長先生からあったのがもう二、三ケ月前になるんです。私は往々にしてその演題を考える時はまだ何をしゃべるか内容を考えていないんです。それで先程校長先生が今日の演題はここにあります「真理探究の楽しさ」であるとおっしゃいまして、ああそうだったなあ、そういう題を言ったかなあと思いました。それとは全く別に、私は私のどういうところをしゃべろうかということをここ二、三日考えておりまして、その内容が題と一致するかどうかはあまりはっきりしないんですが、お話ししてみます。

校長先生にうかがいますと、皆さんの多くの方が私と立花隆が書きました本を読んでいただいていることですのでその内容とオーバーラップする点もあるかもしれませんが、今日私がしたいと思っておりますことは、私個人の、主に皆さんの年頃からノーベル賞の対象になった研究をやったこの期間どういうことを考えてどういういきさつで私の半生が進んだか、そしてその中から何か皆さんに役に立つことがあるかもしれない。あるいは立たないかもしれませんけれど、役立つことを私は期待し、そういうことを取り出して、皆さんに申し上げたいと思ってここへ参りました。

今、校長先生からご紹介がありましたように私は昭和十四年生まれですから、皆さんよりもはるかに年長になりまして、計算してみますと、三十五年から三十七年ぐらいの年の差があるわけです。私は子供の頃は父の仕事の関係で、生まれたのは名古屋市なんです。育ったのは主に日本海側の北陸の富山県立山という有名な山がありますけど、その立山が見える富山県の大沢野町というところで小学校を過ごしております。そのあと中学校は今度は南国の四国愛媛県、愛媛県の南の方へ更に行きまして、漁村、村ではないんですが、町なんですけれども、三瓶町というところで中

学校を過ごしております。従いまして非常に豊かな山と海、自然に囲まれて自由な少年期を過ごしたということであります。ところが私が中学三年になりますときに、私の両親はもともと都会の出身だったもんですから、世間一般の親と同じように子供の教育、将来の教育ということを心配しまして、もう少し都会へ出て教育を受けなきゃいけないんじゃないかということを考えたらしく、中学三年になります時に、東京のおじの家に預けられまして、中学校の最後の一年間を東京で過ごしました。そして、その後運よく東京の日比谷高校というところへ入りました。日比谷高校っていうのは今はあまりそれほど、昔ほど有名な学校ではありませんが、我々の頃はですね、非常に有名な学校でありまして、いわゆる昔の一中と呼ばれていた学校が日比谷高校になったわけです。いわゆる受験校で、東大をはじめとして、有名大学に入る生徒の数が日本一という学校だったわけです。それでいわゆる学業成績の良い生徒が沢山集っていたわけであります。この学校は非常に当時からユニークなところがありました。例えば授業は昔の一中の伝統を継いで、普通の一時間授業ではなくて、二時間近い時間、百分、百分をですね一単位にして授業をやるという非常に緻密な授業をやる伝統を持った学校でして、一方でまた先生は勿論いらっしゃるのですけれども、先生が必ずしも話をするというだけでなくて、生徒にですね、前もってある課題を与えてですね、生徒が前へ出て、先生の役をして授業やっていくと、先生は教室の中に立っておられるんですが、時々議論がつかえたりしますと、先生が助言を出す、そういう非常に生徒の自立性といいますか、そういうものを非常に重視して教育をやっていた。そういう学校でした。私の記憶では勉強もみんなよくしたけれども、よく遊びもしたと、そういうふうに思っています。

この学校で、私ははじめて、ある意味で私の人生にとってのある挫折、と言うとちょっと言い過ぎですが、思いがけないことに遭遇したわけです。それはどういうことかと言いますと、不思議なことに、私より成績のいい生徒っていうのがいたんですね。それでそういうことは今までなかったもんですから、偉い、本当かいなと最初は思って、半年ぐらいは、信じられませんでした。成績表を見ますと自分の点の方が低いんですね。こんなことがあるのかなあと、はじめてその時思いまして、最初にそういう成績表をもらった時、これはなんかの間違いじゃないかとこう思ったんです。次の成績表をもらってもやっぱりおんなじような状態で、そのうちにもう私がですね、逆立ちしてもかな

わないぐらいなんでもできちゃう生徒というのがいるということが、それも一人や二人じゃなくて何人もいるということがわかりまして、これはまあ私にとりましては非常に思いがけない出来事だったわけです。私の成績はまあそうですね、サバを読んでもまあ中の上ぐらいで、それで、まあ、そういう新しい世界を見たということです。

当然のこととして、そのころその学校の生徒はなにしろ日本一の進学校ですから、ほとんどの生徒は東大に入ることを目指していたわけです。で私はこういう状態で、まあ無理をして受験勉強を一生懸命やれば、いずれは入ったかもしれませんけども割と早くこれはもう東大は私には無理だと自分で決めました。そして、京都大学という京都の大学を受験することにしたわけです。私はもうその頃からわりとそういうところは切り換えの早い方で「鶏頭となるとも牛後となるなかれ」という言葉がありますが、どうせやるなら、別のとこへ行って大将になった方がいいという考えで、京都大学を受けることにしたわけです。で、まあその頃は家族も大阪へ、関西に移っていましたので、そういう影響もあったかもしれませんが、いずれにしても京都大学に行くことにしたわけであります。

ところがですね、先ほど校長先生がいみじくもバラされましたけれども、一回目の試験はこれが通らなかったんです。それでまあ仕方がないんで、東京に中学、高校通して四年間おじの家にずっと一緒に住んでいたんですが、通らなかったおかげで予備校というところに通うことになりまして、四年ぶりに両親の元へ帰ることが出来たわけです。そこで両親のところから、その頃芦屋っていうところに住んでいたんですが、そこから予備校へ通った訳です。その頃私の通った日比谷高校には、何人か親友がいまして、特に三人ほどいつもいろんな事をやっていた親友がいたんですけど、彼らも当然のこと東大を受けたんです。三人ともスベッちゃって、お蔭で私は気楽でしたが、まあそういうことでした。

高校生の皆さんちょうど皆さんの年頃に、私はどういうことを考えていたのかなあと思って、いろいろ昔の事を思い出そうと思って今回努力したのですけれどもあまり特別のことは思い出さないのです。勉強は割と真面目にやったと思っていますが。英語とか化学、それから、社会の先生に有名な、皆さんご存知ないかもしれませんが、木下という、「原爆を許すまじ」という歌がありますけれどもそれを作曲した先生がいまして、そういういくつかの科目には非常に興味を持ちました。成績もその科目については良

かったんです。数学はもう何十年も旧制中学時代からずっと日比谷高校で教師をやっている先生がいまして、この先生が嫌いになりまして、それ以来なるべく数学は避けて人生を送ろうと、そんなふうでした。

運動の方はテニスなんかやっていましたけれど、特別にやったわけじゃないんです。何しろ日比谷高校っていうのはやっぱり勉強に時間を使う生徒が多いようで、余り運動神経の発達した人は少なかったものですから、駆けっこなんかやりますと私は速い方でした。例えば夏休みなんかは先ほどの友達と北海道を一周して、大雪山へ登ったりして、十分楽しく過ごしたとそのように私は記憶しております。いずれにしても、こういうことで予備校に入りまして、予備校で本当に受験勉強の仕方というのを私は習いました。で、模擬試験と言うのを受けますと、なるほど先生に教えられた通り勉強していきますと、模擬試験やるごとに成績が少しずつ良くなっていくんです。そういうことで受験という目標がはっきり定まってから一年間は、まあ結構、あまり暗くない一年で、結構楽しくやったように記憶しています。そうしまして翌年、二度目にやっぱり同じ京都大学の理学部というところを受けまして今度はなんとか通ったわけです。

私の家系は理科系の人が割と多いものですから、私の兄も大阪大学の物理学科に入っていまして、それから高校の時に化学が割と良かったものですから、なんとなく私はその理学部の化学科というところを専攻、受けて通ったんです。ところがこれは一九六〇年、私が入学したのは一九五九年です。ずい分昔の事で皆さんは全くご存知ないと思いますけれど、この頃はいわゆる六十年安保、日米安全保障条約の改定ということがありまして、この是非をめぐって非常に国中が、ある意味では騒然と、まあ少なくとも学園では騒然としていたわけです。私の父親は先ほども言いましたように技術系の会社員で、典型的な中産階級に属しておりまして、割と保守的な家庭でしたので、家庭内で政治の話をするっていうようなことはほとんど無かったわけです。それで日比谷高校にいた高校生のころも、皆さんはどうか知りませんがいろんな方がおられることと思いますが、私自身は高校生の時もそういう政治的な問題とか社会問題について真剣に考えるということは、まあほとんど無かったように記憶しております。ところが大学に入りましてクラス、何というんですかね、ホームルームって言うのですかね、お昼なんかに安全保障条約のことを「安保」というのですが、「安保反対！」と言って前へ出て演説をぶつ同

級生がいるわけですね。私はそれを見て唖然としまして、えー、ひょっとするとこりゃ自分はかなり成長が遅れているんじゃないかと、社会的成長が遅れているんじゃないかという心配をし、不安な気持ちになったのを憶えていますけど、一方でこういう人たちの演説が余りにも独善的で、論理に飛躍があるような気がしまして、本当かいなという気持ちを持ったのも憶えています。がしかし私は根がなかなか真面目な方ですから、できるだけ彼らの言ったことを真面目に聞いて、自分なりに論理的に分析して自然に彼らと、こういうことを議論するようになったわけです。その結果、私は特に学生運動を一生懸命やった人間じゃないんですけど、いわばシンパの一部の一人になりまして、条約が改定される年の、一九六〇年には街頭へ出てデモ行進なんかにも参加しました。結局、安保は国会で自然成立ということで通ってしまいまして、我々の間にはしばらくある意味の挫折感といいますか、虚脱感といいますか、そういう気分が漂っていたわけです。で私は先程も言いましたように父親たちと同じように大学を卒業して会社勤めをするつもりでずっといたわけです。それであまり自分の将来について自分で深く考えるという習慣もなかった。そういうことをあまりしなかったわけです。ところが今から考えますと、この、いわゆる安保闘争を通じて友人たち、友達とですね、いろんな議論をした結果、自分自身がこれからどのような人生をおくって行くべきだろうかと、そういう非常に基本的な問題を考えるようになったんではないだろうかと私は思っています。でこの時私は二一歳ですから、まあある人たちにとってはかなりの「おくて」だったというふうにも思われるかもしれませんが、初めてやっとですねえ、自分の人生について考えるようになった。

そこで、みなさんもきっと近い将来、なかにはもうそういうことを真剣に考えておられる方もおられると思いますけれども、大部分の方は近い将来、こういう時期を迎えられると思うわけです。で、私の場合は、いままで考えていた会社、父親と同じようにいわゆるサラリーマンになって一生やっていくということがどうも耐えられない、もっとなにかおもしろい人生はないのか、とそういう気持ちをこういう時期にもつようになりました。一つには、私はわりと人に指図されるのがきらいな方ですからなにかもっと自分自身の力で人に指図されることの少ない、そういう人生を送りたいという気持ちになりまして、そうしますと考えられるのは大学に残って研究者になるということ、研究者というのは大学、学界というのもいろいろむずかしい人間

関係がありますけれども、少なくとも自分の発想で自分の研究ができるという、そういう意味では自力にたよっているわけです。そういうことで研究者になるのも一つの手だと思ったんですけれども、私の所属していたのはさっきもいいましたように理学部の化学科というところで、化学科というのはご存知のとおり非常に伝統的な学問分野であります。長い伝統をもった学問分野で、非常に伝統的な積み重ねの上にたった学問になっているわけです。それからまた、そのころかいまみた化学教室の人間関係、教授・助教授・助手と、なかなかその日本の制度でいえば、研究者は一人前になれないんです。助手、助教授という方たちは、長い間下積みといいますか教授の下積みという状態になっていましてなかなか思うような研究ができないわけです。そういうことからどうもこういう徒弟的な人間関係に入るのもたえられない、といいますか魅力が感じられなかったわけです。で、今でもそれからもう一つは今でもほとんど変わっていないんですけれども、日本の大学の理学部というところは非常に研究室が貧困なんです。それで古い建物の暗い実験室の中でみなさん非常に努力をして研究をやっておられるわけですけれども、私はみなさんの大部分と同じように、これが若者の一つの力だと思うんですが、やはり人生というのはある程度カッコよくないとダメだと、こんなきたない所で一生すごすなんていうことはとてもたえられないと、そういう気持ちをもっていたわけです。あまりにもこれでは夢がなさすぎると、そういうふうに思ったわけです。そうしますといったいこれはどうしたらいいのか、自分はこういう化学科にまよいこんでしまって今まで考えていたサラリーマンになるのも気が進まないし、化学を研究していくのも気が進まない、どうしたらいいか、ある期間思い悩んだわけです。ここでも、しかし、突破口を開いてくれたのは友達なんです。そのころ、大学の三年生も終わりに近づいたある日に、私の友人の一人が分子生物学というまったく新しい、生物学と化学を折衷したような学問で、しかもそれが我々がふだん非常に神秘的に考えている生命のカギを対象にした学問分野がアメリカで、こういう分野が勃興しているということを教えてくれたわけです。それで私は実をいいますと子供のころにいなかに住んでいたんですけれども、昆虫を集めたり、草花を採集したりとか、そういう趣味はほとんどなくて、生物学にはまるで無知だったんです。それで高校では一度も私は生物学の授業というのはとってなかったわけです。で、大学の教養部に入りまして初めて単位をかせぐために「生物学概論」

というものをとったわけです。そこで私ははじめて人間の体というものは細胞というものからできている、そういうものが集まってできているんだということを聞きましてずいぶん感心したんです。で、さっそく私は数学を専門にしている友人に、「お前、人間の体というのは細胞でできているんだよ」といいましたら、その数学の友人が「お前、そんなことも知らんかったんか」といいまして、えらいバカにされたのを今でも覚えていますけれども、私の生物学の知識というのはこの程度だったんです。で、前の分子生物学のことを教えてくれた友人が「ぜひこの分野は非常におもしろい分野だから、そのことを知っている先輩に話を聞きにいこう」と私をさそってくれたわけです。それで私は一応「そうか」といって彼といっしょにその先輩の所に会いにいったんです。で、その方は今でも私は懇意にしておりますが、その人に会って私の期待といいますか、ひそかな期待は裏切られなかったわけです。すなわち、山田さんという方なんですが、その方は私よりも五年くらい先輩のやはり化学科の人だったんですが、こういう分子生物学に非常に興味を、実際に仕事はやっておられないんですけれども、興味をもっておられて、アメリカなどから来る論文をよく読んでおられたわけです。で、その時に、彼が、今発表されたばかりの遺伝暗号の解読実験というものについて説明してくれたわけです。私と違いまして、みなさんはきっと生物学をかなりご存知だと思いますので、既にご存知かもしれませんけれども、我々の体を構成しているのは、さきほどもいいましたように細胞からできているわけですけれども、細胞の中には、いろいろな種類のタンパク質が含まれているわけです。で、このタンパク質というのは異なったアミノ酸がいろんなふうにつながってできているわけです。ところが、このアミノ酸の配列というのは遺伝子の中のＤＮＡのヌクレオチドの配列に対応しているわけです。すなわちタンパク質の性質を決める情報は遺伝子の中に暗号として入っているわけです。この暗号がいったいどういうものであるか、これはもう本当にいわゆる一般的にいう暗号の解読とまったく同じ性質の問題になるわけです。ただこれは非常に、我々の生命の基本をなしている機構の暗号ですから、この解明というのは根本的な問題になるわけです。で、このころ、アメリカの東部海岸の国立衛生研究所というところにいたニーレンバーグという人と、それからドイツ人のマタイという二人の学者が、この問題を非常にエレガントな、優雅な実験で解いてしまったわけです。で、それは暗号がどうなっているかということをＤ

NAそのものを研究していくんではなくて、まったく発想の転換で、DNAをまず作っちゃうんですね。つまりヌクレオチドの配列があらかじめわかっているそういうDNAを合成しちゃうんです。そのDNAを使ってどういうアミノ酸配列のタンパク質ができるか、アミノ酸を、タンパク質を試験管の中でそのDNAをもとにして作っちゃうわけです。そういう実験をやることによって遺伝子の遺伝暗号の基本的な原理を解明してしまったわけであります。

私は、この話を聞いたとき非常に感心しまして、大学四年のこれから一年間、是非自分は化学に身を置いているけれども、なんとか分子生物学の将来分野に進むための準備にこの一年間を、あてようと思ったわけです。幸に、京大の学内では、ウィルス分子生物学を研究し始めた先生が、何人かおられたわけです。京都に今でもありますが、ウィルス研究所というのがありますけれども、そこには、アメリカから帰って来たばかりの日本人の若い研究者たちが、そこでしこまれたばかりの分子生物学を、日本で広めようと思って、何人かの方が、研究・勉強してたわけです。こういう研究者が、ときどき講演をやってくれるわけです。私はそれを、いろいろな所で手を廻して、どこで講演を、いつやるかということを調べまして、化学科の実験をそっちのけにして、そっちの方へ聞きに行っていたわけです。

そして、それと同時に、先ほど言った山田さんなどから、分子生物学の論文を聞き出してきて、もちろん英語の論文ですから、苦労して、辞書を引きながら、何回も何回も読み直して、そして自分なりに勉強したわけです。これを読んでいくうちに、私の決心はますます、確固なものになっていったわけです。その一つのきっかけは、もう一つの素晴らしい分子生物学の研究の論文を読む過程で、巡りあったわけです。今度はこれは、ヨーロッパで行われたもので、フランスのパリにパスツール研究所というのがありますけれども、そこに、フランス人のジャコブという人と、モノーという二人の研究者が協力して、一九六一年に、いわゆるオペ論争と呼んでいる遺伝子の働き方の原理をエレガントな方法で研究した論文があります。

その内容を苦労して読んで、だんだんわかってくるわけです。で、その結果、これは一級の推理小説でも、とても立ち向かえないほどの、仮説を立てて、その仮説に基づいて実験を組んで、その実験をやる。その実験を解釈して、仮説が正しかったかを調べる。そういうことを繰り返して、研究をやっていくわけです。その巧みさと、緻密さに、私は非常に驚嘆したのを覚えています。それで、先程言いま

した、遺伝子の暗号を解読したニーレンバーグも、今言いましたジャコブとモノーも、それぞれ後に、何年か後に、それぞれの仕事で、ノーベル賞を、ノーベル医学生理学賞を授与されているわけです。

私が読んでいる時にはもちろん、彼らはまだノーベル賞をもらっていなかったわけです。私のその分子生物学への船出と言いますか、非常に初期の段階で巡りあったというのは、なにか、ある意味で、運命的なものを感じることもあります。

しかしながら、正直に言いますと、分子生物学の研究をやっていこうと、決心した理由は、今言いました、学問内容に対する興味はもちろんあったけれども、それだけではなかったわけです。

私は、先程もいいましたように京都では数は少なかったけれども、アメリカで分子生物学の洗礼を受けて、日本へ帰って来た三〇歳そこそこの研究者がいまして、その人たちの講義を受けているうちに、彼らが醸し出す一種のかっこよさといいますか、そういうものに、惚れたという面もあったと思うんです。これらの人々は、何回も言っています様に、アメリカで、できたばかりの新しい学問分野、非常に希望と熱意に満ちた学問、その熱意そのものを日本に持ち帰って来て、そして、総体的に言いますと、非常に閉鎖的な日本の学界の雰囲気とは一味違った雰囲気を彼らは持っていたわけです。ちょっと大げさな言い方をしますと、彼らは非常に国際的に開けていて、しかも人類全体の知的な財産を増やしていくんだと、そういう人類全体の開拓者のような意気込みを持って、その研究をやっている。自然にそういう意気込みというものが、英語でいうとオーラといいますけれど、仏様の後ろに後光がさすように、人間、仏様でなくても非常に活気に満ちて、ある信念に燃えてやっている人というのは、一時、後光がさすがごとく、英語でオーラというんですけれども、そういう雰囲気を持っているんですね。まさしく彼らが、そういうその雰囲気を持っていた。それで、私はそういうものの雰囲気、そのオーラに感動した、そういうことで、この分野に入りたいと思った面もあったと思います。

もう一つ言いますと、のちほど私自身がアメリカに行って経験したことなんですが、ご存じのように、アメリカ人というのは非常に気さくなところがあります。あまりもったいぶらない。地位が上の人、下の人というような縦の関係というのは、あまり意識しないのです。だから、先生と生徒との関係というのも、非常に友達に近い関係といいま

すか、お互いに、生徒が先生を批判しても当然だという雰囲気なんです。それを先生が、権威とか、地位とかを利用して生徒をとっちめるというようなことをする雰囲気というのが非常に少ないわけです。これはまあ、学問をする上には、非常にいい人間関係なんです。学問というのは、往々にして、年齢とか、地位とかは、あまり発想とは関係しませんから、その若い非常に未熟な学生が、突然、その素晴らしいことに気がついたりするわけです。そういうものを育てていく環境というか、態度が、先生の側にないとそれが、つぶれてしまうわけです。そういう雰囲気というのを、このアメリカから帰って来た若い分子生物学者たちは、何年かアメリカで研究をやってきていますから、彼ら自身がそういう雰囲気を持っていたわけです。したがって、彼らがやる講義というのは、ちょっと古い日本の教授がやる講義とは雰囲気が違うんです。一見、討論をしているような雰囲気で、先生がわからないことがあると、すぐ素直にわからないというんです。後で調べようと。調べてまた話しをしようと、率直に対応するわけです。私は、こういう人々から習って、新しい学問分野で自分自身が一人前の研究者になり、そして今までちょうど、ジャコブやモノーやニーレンバーグのように、今まで、誰も気づかなかったような生命現象の根本にかかわるような原理をもし発見できるようになれば、これはもう、人生悔いはないだろうと、そういうふうに思いましてますます、この道に進もうと決心したわけです。

自信があったわけでもないんですけれども、とにかく問題は、人生をどう考えるかということに行き着くわけです。人間というのは、非常に未来に対する不安というのがあり、これは、人間に特有なものですから、生活の安定ということを考えるわけです。のたれ死にするのは嫌だという気持ちは誰でも持っているわけです。生活の安定ということを考える、だからあまり無茶な冒険をして失敗したら、大変だという恐怖をいつも持っているわけです。それで楽しみは、そこそこでいいと、楽しみをそこそこにすることによって安定を手に入れようということを普通は考えるわけです。

しかしながらですね、人類の歴史を見ていきますと、人類の文化を推し進めてきた、開拓してきた人々というのはですね、いろいろな人の伝記をお読みになるとわかると思いますけども、非常にまあ波乱万丈の人生を送った人というのが非常に多いわけですね。ということは、非常にその素晴らしいといいますか、ほんとうに人類に影響を与える

ようなことをやろうと思えばですね、ある程度のその不安定さ、人生における不安定さというのはやむを得ない。そのどこでバランスをとるかというところが、一番難しいと思うのですけども、まあ、私の当時の考えはですね、とにかく、何かおもしろいことをやらないと生きる価値がないという気持ちになれたわけです。そういう気持ちになれたということは、ある意味で私は、運がよかったと、そういうふうに思っています。まあ、当時ですね、分子生物学の京都学派のボスというのは、現在の慶応大学名誉教授で、実は、千葉県のその学問、研究の発展にも非常に寄与されておられます。千葉県の学術顧問をやっておられます、渡辺格という先生がおられますけれども、その先生が、そのウィルス研究所、京都の当時、ウィルス研究所の教授でおられたわけですね。

この先生は、日本の分子生物学のほんとうの開拓者でありまして、アメリカのサンフランシスコの近くのカリフォルニア大学で、分子生物学を習ってきて、日本で最初に、こういうことを始めた人なのです。ラッキーなことに、この先生の所属していたウィルス研究所の化学部が、大学院の学生を、正式に採るようになって、私はそこへ応募しまして、私は運よく一九六三年の四月にいよいよその分子生物学を目指して、大学院の学生になったわけです。

こういうことで、勇んで渡辺研究室に行ったのです、一ケ月もしないうちに、渡辺先生が私を教授室によびまして、「実は、自分は京都はもうやめるんだ、これから東京の慶応大学というところに新しい分子生物学の教室をつくるために移るんだ」ということを言われたわけですね。それで私もいっしょに来たいのなら来てもよいのだけれども、まだ、研究室も整っていないし、これからしばらく時間がかかる、「君が」君というのは私ですが、「君が来ても十分な教育ができるかどうかわからん、それにさらに加えて、日本全体を見ても、その分子生物というのはまだまだ日本には、教育体制が学生を教えるような体制が整っていない。君は分子生物学をほんとうにやる気があるのか。ほんとうにやりたいのなら、少々苦労しても、アメリカへ留学しろ」ということを言われたわけです。アメリカはもちろん先程も言いましたように分子生物学のメッカですから、いろいろなところに、分子生物学教室というのが、できてきていたのです。「もし、行く気があるならどこか探してやるから……」と、そういうことを言われたわけです。私は、この話を聞いたとき最初は、突然だったのでびっくりしたんですけど、内心では、これはしめたと、こう思ったんで

すね。といいますのは、さっきも言いましたように分子生物学を日本でやっていた人たちは、みんなアメリカでトレーニングを受けて帰ってきているわけですね、私もいずれは本場のアメリカへ行って分子生物学を習いたいとあるいは研究したいとこう思ったのですけども、とても学生の時に向うへ行けると思っていなかった。渡辺先生がたまたま、そういうことを言ってくださいまして、これで、いよいよ、もうすぐにでもアメリカに行けるという状態になったわけです。

そして、なかには、ご存じの方もあるかと思いますが、フルブライトという日米の間の留学制度があります。その試験を受けまして、これは、うまく、運よく通りまして、その同じ年の一九六三年の七月、つまり、京都大学の大学院には私は三ケ月しかいなかったのですね。

そこから、羽田を立ちまして、南カリフォルニアにあるサンディエゴという町がありますが、そこにあるカリフォルニア大学に、留学したわけです。日本はもう隔世の感があるほど豊かになりまして、海外旅行する機会も増えましたけれども、当時はですね、日本の外貨保有高というのが限られておりまして、外国へ出たくても、なにか特別なビジネスとか、政府の仕事とか、あるいは、留学、そういった特別なことがないと、外国へ出れなかったわけです。で、私は、そのフルブライト財団から、飛行機で飛ぶための旅費をもらいました。アメリカの大学は、日本の大学と違って、大学院の学生に、思いきり勉強させる制度が当時から既にとてもよく整っていたのですね。つまり、大学院の学生は、アルバイトとかそんなことをしなくてもですね、最低限食べていけるだけのいわば給料を国がくれるのですね。国あるいは州の政府がくれるのです。で、私は今でもおぼえていますが、年間にもらったのが二〇〇ドル、二〇〇ドルのお金をもらうことになっていたわけです。アメリカに渡るときは、何しろ、外貨を勝手に持ち出せないのですから、五〇ドルだけ、持って行っていいと財布の中に五〇ドルを入れて、あとは向こうまかせで、まあアメリカへ行ったわけです。これが二三歳のときでした。で、不安はなかったかと言いますと、これが不思議なことにですね、あまり、不安に感じたことをおぼえてないですね。非常に、とにかく非常にこれはうまい話で、大学、アメリカの分子生物学のメッカへ行けるというので非常によろこんでアメリカへ出かけました。

私の期待は、まったく、アメリカについてみますと、裏切られなかったですね。南カリフォルニアというのは、な

かにはいらっしゃった方、ロサンジェルスなどへ、なかにはいらっしゃった方がいらっしゃるかもしれませんが、非常に気候がいい。そして、カリフォルニア大学、サンディエゴのカリフォルニア大学というのは、まだできたばかりで、学生の数が非常に少ない、先生の数の方が多いぐらいで、学生は非常に大事にしてくれるのですね。それから、さっきも言いましたように、先生が非常に気さくで、学生がですね、勉強したければもう、いくらでも相手になってくれるといいますか、非常に丁寧に学生に教えてくれるのですね。それで、そういうことで、私は非常に充実した、大学院生活を送ったわけです。

まあ、いろいろ、紆余曲折はありましたけれど、五年後の一九六八年に、大学院を卒業しまして、そこで、まあ、研究者になる一人前の、まあ、一種の免状でありますところの、博士号というのをもらいまして、そのあと更に二年間、修業をつみまして、それで一九七一年に、今度は、分子生物学の学問をつかって新しい分野に分子生物学を応用していくこと、すなわち、免疫学、身体の抵抗、病原菌に対する抵抗を研究する分野ですけれども、そういう分野に分子生物学を応用すべく、アメリカから、ヨーロッパのスイスにあるバーゼル市という町へ移ったわけです。そこのまた新しくできた免疫学研究所へ、移ったわけです。ここでは、一〇年間かけて、研究をしました。その成果が、まあ、ノーベル賞だったのです。ノーベル賞をいただいたことになったのですけれども、その後、一九八一年、アメリカに戻りまして、今度は、カリフォルニアから反対側の東海岸のボストン市にある、マサチューセッツ工科大学で研究を続けて現在にいたっているわけです。

で、私の半生をこう振り返ってみますと、いろいろなことに気がつきますけれども、ひとつ非常に明らかなことは、今、簡単に申し上げましたように、人生のその要所、要所でですね、ほんとうにすばらしい友人、先輩、あるいは先生にめぐりあっているのです。もう、不思議なくらいそうなっているのです。

それから、また、もうひとつ気がつくことは、人生っていうのは、その、直線ではないんですね。決めた、何か決めてその通りずうっとこう行くと、そういう人生では、少なくとも私の場合は、そうじゃない。おそらく多くの方の人生もそうじゃないと、私は思うんです。で、まあ、中国の古い諺に、『禍福は糾える縄のごとし』と、いう諺、ありますね。これはですね、要するに、不幸と幸福とはですね、ちょうど縄が、こう、二本の藁をこう、束の藁をよったよ

うに、人生には現れてくるんだ、非常に運が悪いと思って意気消沈してるときにそのすぐ後に非常にすばらしいことが起こる。あるいは非常にすばらしいと思って、うきうきしていると、えらい不幸がすぐ待ち受けていると、これが、まあ、本当の人生だと思うんですね。人生というのは、その、挫折とその、成功がですね、入り混じって現れるものであって、自分の思い通りに行かないということでですね、嘆いてばかりいたんではですね、やっぱり、道というのは開けないわけです。自分の力量、それから、自分がおかれている環境、そういうものをよく見定めて、それで積極的に自ら、臨機応変に、軌道を修正する努力をして行かないといけないということを私は自分の半生から感じます。それから、与えられた人生、人から与えられた人生といいますか、生活の仕方、あるいは周りの人たちがですね、期待する、自分に期待する人生、そういうものを送るのではなくて、飽くまで自分が何をしたいか、自分が何をしたいかということを考えて、自分に適した人生、自分自身が興味が持てる、人生を送るということが、結局は、人生において、一番重要なことではないかと、そういうふうに私は思います。このことはですね、友人や私の例でも分かりますように、その友人とか先輩とか先生の、アドバイスを聞くなということではないです全く逆なんですね。アドバイスに耳を、十分に耳を傾けるというのは非常に有効なんです。しかしながら、このようなアドバイスというのはですね、自分がそういうアドバイスを求めるような立場に、自分が成ってないと、アドバイスというのはアドバイスにならないですね。すなわち、自分でどういうことをやろうか、ということを考えて、自分自身で考えて悩んでいる状態において初めて、アドバイスがアドバイスに聞こえる。そういう気持ちになっていないときには、いろんなことを言われても、これだ！という気持ちが自分の中に起こらないんです。したがって、結局は、人生というのは最終的には、自分が決めるものであると、自分自身の力で切り開いて行くものであるということを、やはり、肝に銘じて欲しいと、私は思うのです。

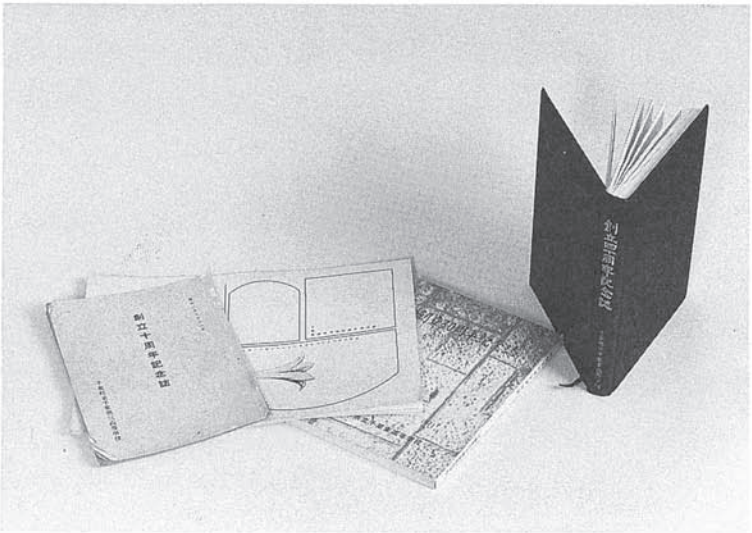
その自分で決めた、逆にいいますと自分で決めた人生であれば、それがどういう結果に成ろうと、まあ、思い通り、自分の思い通りやったという、少なくとも、そういう気持ちは残りますから、それで、すっきりした気持ちになれると、思うんですね。

皆さんのほとんどはこれから大学をめざして受験をされるわけですけれども、私は日本の受験制度、あるいはそれ

に伴う、それと深い関係にある小中学校、あるいは幼稚園からの教育のあり方については非常に強い疑念を持っております。しかしながら、きょうはこれについては申し上げません。ただ、皆さんに申し上げたいことは大学に入られてから、その大学の四年間、だいたい一八歳、一八、一九歳から二二、二三歳までの間非常に感受性が強い時代になるわけですけれども、この四年間を受験、往々にしてその受験ということが非常に大変なものですから、大学に入りますと、日本の大学の学生というのはアメリカの学生に比べると、いわゆる勉強をしないんですね、受験から解放されて、いわゆる、そのみな遊ぶのですね。ぼくはね、遊ぶことは結構だと思うんですけれども、こういうことを頭に入れておいて欲しいと思うんですね、それはですね、この四年間こそ、人生において自分がこれから何をするか、を見つける時期であると、すなわち、自分が何が好きか、何なら思いきり自分の人生をかけられるかということを模索する時期に、是非この四年間を使ってもらいたい。私は、大学の教育などというのはそれだけやれば、もう十分だと思うんですね。何をやるか、何をやりたいか、本当にやりたいことが見つかればあとはそれのための準備なり、勉強をするのはいつでもできるんです。大学なんか卒業してからでもできる。だから、私なんかの例でも見てもですね、最初の三年間は、ほとんど何もやってないですね、大学四年のときもですね、私は、いわゆる大学というのは、普通は、学位論文というのがあるんですね。論文書いてそれが通らないと本当は大学卒業できないんですけど、私は、学位論文というのはないんですね。それは、幸いなことに、私の教授、化学科の教授は、これでも私を通してくれたんですけれども、先ほど言いましたように、最後四年間の一年間はほとんど化学科の勉強なんか何もやっていないんです。いろいろんな所へ行って授業聞いたり、講義を聞いたり、分子生物学の講義を聞いたりして、化学の勉強は何もやってない。でも、私はその一年間の間に、何をやりたいか、これならおもしろいというものを、見つけることができたそのおかげで、私は、そのあとの道を、思いきり進むことができたそういうふうに思っています。したがって、結局最後で、ものをいうのは、自分が何をやりたいかを見つけることやりたいことが見つかればですね、自分に向いている、自分がやりたいということが見つかればですね、これで、ほとんど、人生はおもしろくなることが証明されたようなものであると、私は思っています。これで時間もだいぶになりましたので、この辺でもう切り上げたいと思

うのですけれども、まあ、一般的なことを言いますと今年は、一九九一年、だから二十世紀の終わりに近づいているわけです。それで、九年たつと二十一世紀になるわけです。皆さんの二〇代には我々は二十一世紀に入るわけです。それで将来は本当に皆さん自体にかかっているわけです。ご存知のように、色々最近はですね、日本とかアメリカとかいった、その国別の問題ではなくて、人類全体に係わるいろいろな大きな難問、難問が我々の目の前に現れてきているわけです。例えば、人口がどんどん増えていると、いったいこの地球という入れ物はこれだけ増えていく人間を、どうやって養って行くかという非常に大きな問題にあたるわけです。それから、化学工業が発展することによって環境が汚染されていく、それから、地球が温暖化していく、それから、石油エネルギーもエスティメイトがありますけれども、いずれは枯渇するわけです、新しいエネルギー源を見つけないと人類の将来はないわけです。これらの難問に立ち向かうに当たって人類が所有している、唯一にして、最も強力な武器が何であるか？　ということを、皆さんは考えられたことがあるでしょうか。それはですね、私の考えでは、はからずも、この武器、人間が持っている武器というのは人類を他の生物、諸々の生物と区別している、いわゆるホモサピエンス、人間というものに特有な能力、そのものなんですね。それは、何か？　すなわち、それはホモサピエンス、唯一、すべての生物の中で、唯一ホモサピエンスが持っている創造能力、クリエイティビティ、というのが、人間を人間たらしめており、また、人間に残された最も人間が備えている最も強力な武器になっているわけです。すなわち、よく、生物学者は言うんですけれども長い生物の進化の過程で人類が現れるまでは、生物はですね、環境の影響で進化してきてるわけですね、すなわち、人類というのは、自分で自分の進化に影響を与える能力を持った唯一の最初の種になっているわけです。したがって、こういう人間の創造能力、それから創造能力を発揮する根源になっている人類に備わった非常に強い好奇心、知らないことを知りたがる、そういう欲求、これは人間という生物、この脳の中に組み込まれた、人間を人間たらしめているものなんですね。で、この能力を発揮する以外には、この能力を最大限、発揮して使う以外に人類がこの地球上で生き延びていく道は無い。ということは、どういうことかといいますと、ますます、我々日本に限らず人間というのは創造能力、人間が持っている創造能力を最大限発揮させるような、そういう体制、教育システム、社会慣習、そういう

ものをですね、促進していかなくてはいけない状態に、現在なっているわけです。だから、最後にもう一度繰り返しますけれども、皆さんは、自分で、自分の人生を、設計する準備をして欲しいと思うわけであります。そして、皆さんが私の年齢になったときに、自分は自分の思う、自分の考えで思いきりやってきたと、思えるようにこれからの人生に果敢に挑戦してくださることをお願いして私の話を終えたいと思います。どうも長いことありがとうございました。



空の向うがわ

千葉県立千葉東高等学校
(創立50周年記念歌)

作詞　友竹　辰
作曲　間宮芳生



一
夢で　バラの花の　花粉になって
みつ蜂の　うしろ脚に　くっついて
青い空を　とんだ
白い東の空から
ダイダイ色の　西の空へ
お花畑の　上を　とんだ
たかく　たかく　たかく

二
すきとおった　北の空の　はしっこで
オーロラの　しっぽの先に　つかまって
流れ星に　なった
空の向うがわの
もひとつの空へ　つきぬけると
もう一つの　地球に　ついた
はるか　はるか　はるか

三
もう一つの　地球には
ひるもない　よるもない
装甲車もない
動物園もないし　文字もない
キリンの眼と　かぶと虫の肌をした
人たちが
少しかなしげに
蜂どりの　羽音のような
やさしい歌　うたってた
しずか　しずか　しずか

応援歌（一）



一
芙蓉の峰に雲湧きて
万波どよもす袖ケ浦
森羅乱るる色あれば
古き驕りの移ろいて
新鋭の意気旺なり
あかき血汐はたぎるかな

二
不屈の腕を画き
鉄脚ひたに天朔ける
熱球夜々の夢に入る
選手の胸を君知るや
いざ闘あけん高らかに
千葉東高 栄あれや

注
曲は旧名古屋陸軍幼年学校行進曲を使用

応援歌（二）



一
劫火しきりに襲い来て
荒涼の春 幾そ度
茨の道を とめ来つつ
集いて挙る 壱千余
今 東雲の丘の上
紫の旗 打ち立てん

二
洋々めぐる 黒汐の
豊けき力溢るれば
灼熱の意気火と燃えて
誓いも固し 壱千余
ここ轟の 丘の上
勝利の歌を高踊せん

注
曲は旧制第七高等学校寮歌「北晨斜めに」を使用

40周年記念学園歌

太陽のひかりの中で

作詞・作曲　岩松正治(3-8)
編　　曲　原沢健太(2-7)



一
昇る朝日の光を受けて
僕らの心がはずむ時
今日一日がここに始まる
東を見ろよ あの輝き
東を見ろよ あのきらめき
そうさ僕らは燃える魂
朝日に負けずにつっ走れ!!

二
沈む夕日の光を浴びて
僕らの心がなごむ時
今日一日の終りを迎える
西を見ろよ あのやさしさ
西を見ろよ あのぬくもり
くよくよするな明日になれば
燃える朝日が東に昇る
燃える朝日が東に昇る

校　歌

作詞　澤田繁二
作曲　石黒脩三



一　シャロンの花と　たたへたる
古きつたへの　谷の百合
清きほこりを　移し植ゑ
学びの園に　つちかひぬ
深きまなびの　かてなくば
汝をみなご　をとめさびせじ

二　アルプの山の　こごしきを
ふみやぶりたる　ますらをの
強きこころを　打ち樹てて
学びの庭に　はぐくみぬ
はげしきわざを　つまざれば
汝をのこら　をとこさびせじ

注　シャロンの花　純潔の象徴
（旧約聖書から）

10周年記念祭歌

作詞　澤田繁二
作曲　間宮芳生



一　すだく虫の音　うつろふ星の
影冴え　秋のさやけさ
まなびやに　年は移りて
十年経し　いさおしここに
たたへよや　われらが母校

二　よするさざなみ　袖が浦わの
夢遠く　思はるけし
この丘に　集ひて立てば
巓くは　松風のみか
ことほがん　われらが母校

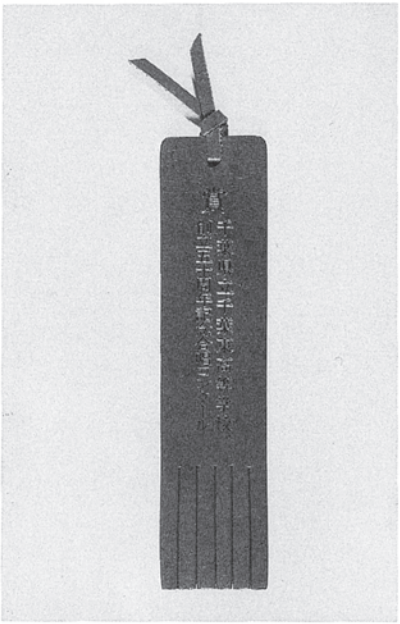
創立五十周年記念歌

本校は創立十周年を記念して校歌が作られ、同時に十周年記念歌が作られた。さらに四十周年には、生徒達から募集して四十周年記念歌が作られ、全校合唱コンクールを行った。この度五十周年を記念して再び記念歌を作ることとなり、井辻教諭（音楽）を中心に作詞作曲者を検討。作詞は友竹辰氏、作曲は間宮芳生氏に決定。七月九日、両氏が資料集めに来校。十月七日、記念歌「空の向うがわ」が職員、生徒に紹介され、二十四日、ＰＴＡ理事会でもテープ（音楽部合唱）で紹介された。

式典当日高橋校長より両氏の紹介後、間宮芳生氏指揮、友竹辰氏及び音楽部員による合唱が行われ、五十周年の意義ある日、新しい東校の第一声として参列者の心に強く響いた。

記念合唱コンクール

十一月五日（火）県文化会館大ホールで、五十周年記念合唱コンクールが全生徒参加で行われた。課題曲、五十周年記念歌「空の向うがわ」、自由曲の二曲で、一年四組、二年一組、三年一組、三年八組が予選を通過。九日（土）の式典当日、本選の結果、自由曲は「ハレルヤ」を歌った三年一組が最優秀賞に輝いた。



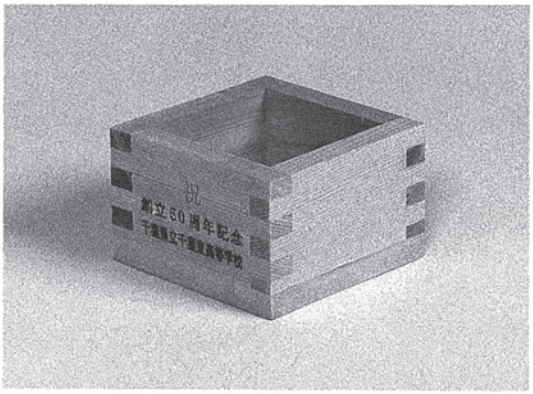
三　美術・書道作品展

この展覧会は五十周年記念週間中、平成三年十一月三日より九日まで、本校セミナーハウス二階の会議室（美術）と和室（書道）を使ってそれぞれ開催された。

出品者は、美術が歴代指導教諭四名と昭和三十一年卒業生を筆頭に平成元年卒業生まで総勢三八名の出品を得、また書道も歴代教諭四名と昭和二十七年の卒業生から六十二年の卒業生まで計二八名の参加を得た。美術・書道共に展覧会の趣旨に積極的に賛同して頂き、快く作品を提供して頂いた。

美術の出品者内には、大切に保管されてあった、高校時代に描いた大作を出品した方もおり、現在、在学中の御自分の子供さんにも初めて見せる絵だと語っていました。その子供さんからは、父親が自分の年齢と同じころ描いた絵を目のあたりにして、今の自分と比べて、何と絵に真剣にアタックしていたんだろうと、非常に感銘を受け、今更ながらあらためて父親を見直したという話も聞きました。

そんなエピソードを残した展覧会も、職員、生徒、来賓、卒業生等の多くの方々に鑑賞して頂き、作品の返却まで無事終了することができました。末筆乍ら、バックアップして頂いた、同窓会及び出品を快諾して頂いた、教師ならびに卒業生に深く感謝申し上げます。



美術

歴代指導教諭

草葉　章	
田野　英夫	
秋吉　匠	
平松　生夫	

卒業生

	卒業年度	画題	種別			
神戸　繁夫	昭和31	鉄路II	日本画	戸塚　主税	昭和36	裸婦	クロッキー
荘司　栄朗	昭和31	神々の座	油絵	清矢　秀雄	昭和45	自画像	油絵
大山　晃一	昭和31	ポーズ	油絵	内藤　立美	昭和45	作品	油絵
大島　浩子	昭和31	人形たち	水彩	森　隆夫	昭和46	二つの白い影	油絵
梅村　佳子	昭和31	風景	油絵	小山　博	昭和48	習作	コンテ
笠川　正夫	昭和32	裸婦	油絵	石戸　久嗣	昭和52	作品	油絵
佐野　康一	昭和32	八ケ岳	油絵	荒木　昌子	昭和52	スノーフレーク	水彩
椙村　真子	昭和32	人物	デッサン	秋山　宏基	昭和53	Tさんの青い肖像	油絵
富田　彰	昭和33	ヴィーナスの誕生	日本画	生田　裕人	昭和54	試合を前に	油絵
浮田　信行	昭和33	母娘	油絵	古谷　茂久	昭和60	家庭菜園	油・テンペラ
長谷川桂子	昭和33	花	油絵	小野　詳子	昭和61	人物習作	油絵
藤浪　秀一	昭和34	17才	油絵	柴山　真紀	昭和62	習作	デッサン
菊地　孝夫	昭和35	バラ	油絵	喜田　直哉	平成元	人物	油絵
水野　佳子	昭和36	カフェ	油絵	河瀬　蛙友	昭和37	恐山宇曽利湖	水墨
石川　法子	昭和37	あじさい	油絵	大崎　礼子	昭和37	風景	水彩
小川　敦子	昭和38	コスモス	油絵	田中　雅代	昭和40	X'mas Card	デザイン
斎藤みどり	昭和41	盛夏	油絵	長谷川金一	昭和42	少女	油絵

書　道

歴代指導教諭

安塚　正一（初代旭洞）

安塚　正明（二代旭洞）

宮負　一昭（丁香）

佐野　恵子（秋翠）

卒業生

		卒業年度	釈文
早川　悦子（錦蘭）		昭和　27	良寛詩
堀江　弘子（白鷗）		昭和　38	漢詩
関根　孝子（孤鷹）		昭和　39	談笑三軍却交游七貴踈
林　一己		昭和　40	聴則聾
川崎　清（錦洞）		昭和　41	季節
湯浅　昭弘（宗中）		昭和　42	山意向秋多
林　秀一（破響）		昭和　42	小鳥来る音うれしさよ
石井　希佳（渓山）		昭和　43	板さびし 幽人臨水坐
白井　孝		昭和　44	羅漢の耳借りて糸張る
西野　光文（光洞）		昭和　45	冬の蜘蛛
竹山真佐子		昭和　46	獨鶴鳴朝暾 忘れ草なにかを種と思ひしはつれなき人の心なりけり
遠藤　恵子		昭和　46	反照は楊林に入りたれば沙 湾は晩も未だ瞑からず。母牛と犢児とは水を隔てて相呼応せり
田中　香		昭和　48	放牛桃林野
高橋　敏行		昭和　50	一蓬秋雨睡初起
上田　豊子		昭和　51	半硯冷雲吟未成
金田　真澄		昭和　51	初心不可忘
尾崎　亘（龍洞）		昭和　52	煙生柳岸将垂縷
鹿野　美彦		昭和　54	至誠無息
安川　民恵		昭和　58	雪壓梅園半是花 日月火水 いとせめて恋しきときはむばたまの夜の衣を返してぞ着る
後藤　浩		昭和　58	臨庚贏來
川村　文徳		昭和　59	臨忽高帖

鶴岡小百合　昭和60　臨石門頌
磯辺喜代子　昭和61　落花流水
林　慶子　昭和62　白雲抱幽石



四　写真展示

「写真が語る五十年の歩み」というタイトルで写真展を行なったが、実際に展示したパネルは三十数点であった。会場のスペースの関係で制作したパネル全てを展示できなかった面もあるが、五十年を振り返るには適当な写真が少なかったことも確かである。

パネル制作にあたっては、「何か良い写真があれば」と同窓会等を通じて卒業生に呼び掛け、若干の写真・ネガの提供はあったものの、実際に展示用パネルにしたものは、つい最近のものを除き、四十周年史制作までに関連したもので本校に保管されていた写真、または、卒業アルバムからの複写に頼らざるを得なかったのが現状である。なお、今回の写真展では、創立四十周年時に制作されたと思われるパネルも数点、含まれている。

以下、展示作品について、概要を記す。

・千葉市立千葉高等女学校港町時代敷地
・轟町旧校舎全景（昭和四十年頃、航空写真）
・旧校舎正面玄関前（昭和四十一年頃、卒業アルバムより）

・旧正門からの校舎全景（昭和四十七年頃）
・校舎全景（昭和六十一年頃）
・校舎全景（平成二年九月東雲祭、航空写真）
・セミナーハウス（昭和六十三年三月落成、看護実習棟跡地）
・格技館（昭和六十年三月落成）全景、小体育館（一階）柔道場、剣道場（二階）
・第一回同窓会総会記念撮影（昭和二十一年三月葛城台の校舎にて）
・第二回卒業生同窓会総会記念撮影（昭和二十一年十一月）
・食糧増産（農作業）風景（市立高女時代）
・学徒動員出動宣誓文（昭和十九年十月十二日　永江栄氏所蔵）
・戴帽式（衛生看護科）
・実習風景（衛生看護科）
・衛生看護科記念碑
・授業風景四点（昭和四十年代後半～昭和五十年代前半）
・修学旅行（石舞台にて）
・夏季キャンプ（日光白根山にて）
・創立十周年記念祭（昭和二十六年十一月）
　研究発表会　英語劇「ジャン・バル・ジャン」（英語クラブ　小体育館）
・卒業アルバム（昭和三十四年度、昭和四十二年度）より各一点
・課外活動風景五点
　（音楽部、美術部、ラグビー部、軟式テニス部、ソフトボール部）
・仮装行列（運動会にて）
・校内球技大会（平成三年度、千葉県総合運動場）
・校内陸上競技大会（平成三年度、千葉県総合運動場）
・東雲祭風景（平成三年度）

五　未来メッセージ・50余話

澤井秀之

五名の職員がこの係を仰せ付かったのは、平成二年の十月のこと。夢のある企画でおもしろそうだとは思ったものの初めての経験。全員で手分けしての資料集めから開始し、図書館・博物館・印刷所・出版社などに教えを乞いました。

そんな時、一宮町が二年の十一月にカプセルを埋設した、との情報を得て見学に行きました。さっそく現場を案内してもらいましたが、白い御影石造りの記念碑がすばらしい。しかし総工費は我々の予算の五倍とか……。方法はいろいろあるだろうと自分に言い聞かせながら帰ってきました。

工夫のポイントはメッセージを書く紙と筆記用具でした。五〇年後でもはっきりと読めないと困るのです。保存の確実性から言えば、和紙と墨、でしょうが扱いにくい。結局、紙は酸性紙を避け用具は炭素系で、とのことで「中性紙と鉛筆」に決定、一六〇〇名余りのメッセージが集まりました。

西暦二〇四一年の十一月、メッセージはどんな状態で再び姿を現すでしょうか。開封式には現在の職員諸氏・生徒諸君の中のどなたかが立ち会ってくださることでしょうが、その折りには何卒よろしくお願いいたします。



第二章　年　表



第一節　全日制課程
昭和十五年度……55
昭和二十五年度……56
昭和三十五年度……57
昭和四十五年度……58
昭和五十五年度……67
平成元年度……73
第二節　通信制課程
昭和二十三年度……76
昭和三十年度……76
昭和四十年度……77
昭和五十年度……79
昭和六十年度……84
平成元年度……85

第一節　全日制課程

昭和15年度～昭和45年度

16・1・15　**千葉市立千葉高等女学校**（四年制）設立認可。一学年四学級（定員二〇〇名）。所在地、千葉市港町一九番地

2・24　県視学瀧熊之助本校校長に補せられる。

18・4・7　教室不足のため二部授業開始

11・1　新校舎一部落成。所在地、千葉市葛城町二一二番地

三年生移転

19・4・7　生徒の一部葛城町第二校舎及び第三校舎（元葛城アパート）に移転三か所分散授業

20・3・20　第一回卒業式（卒業生二一八名）

7・7　港町第一校舎戦災

9　新校舎建築中止。教室不足のため隔日授業開始

8・8　校長瀧熊之助県立千葉高等女学校長に転任。県立木更津高等女学校楠原信一本校校長に補せられる。

10・1　県立千葉中学校の校舎の一部を借用しての分散授業

21・4・1　五年制高等女学校となる。教室不足のため生徒の一部を千葉中、及び収納庫に収容して隔日授業解消

22・4・1　六、三制発足のため生徒募集中止

11・25　校長楠原信一千葉市教育民生部長に転任、教頭親泊朝晋、本校校長事務取扱に補せられる。

28　借用の県立千葉中学校の校舎一部焼失

29　教室不足のため第四・五学年は週一日、第二・三学年は週二日休校

23・2・29　校長事務取扱親泊朝晋本校校長に補せられる。

3・31　学制改革により千葉市立女子高等学校として認可される。

4・1　**千葉市立女子高等学校**と校名変更

17　新校舎に移転。所在地、千葉市轟町三番地。旧校地校舎を千葉市立第三中学校に委譲

5・15　千葉市立女子高等学校開校式（開校記念日）

24・2・17　県立千葉女子高等学校に第三棟貸与

3・31　校長親泊朝晋県教委事務局管理課高校係長に転任

4・6　東京都立城北高等学校教頭諸川芳雄、本校校長に補せられる。

12　建築中の第二棟大風のため倒壊（二四・一一・一一復旧）

26　新校章制定

27　生徒会発足

9・1　庭球コートを校舎裏に新設

26　千葉市立第五中学校に三教室貸与

10・27～29　第三学年昇仙峡、修善寺方面に研究旅行（第一回目の修学旅行）

11・22　職員・生徒・父兄・卒業生四者共同で県立移管問題について陳情

25・4・1　県立移管により**千葉県立千葉第三高等学校**と校名変更。一学級増加（以後一学年六学級）。この年よりはじめて男子入学

5・1　男子帽章制定

7・13　本館建築促進運動を起こし、県教委、市教委に陳情

10・25　第三学年関西方面研究旅行初めて実施（四泊五日）

11・10～11　第一回文化祭（展覧会、バザー、音楽、演劇、研究発表会）

26・1・19　第一回耐寒マラソン

7・26　校庭整地作業（二〇〇mトラック、野球場、庭球、排球コート）

9・18～1　本館新築落成、（小講堂、校長室、事務室、教務室、小使室、会議室、便所）

11・2～6　**創立十周年記念式典挙行**、校歌、応援歌制定、県下小中高校席書大会、音楽会、図画コンクール、生徒研究発表会、演劇鑑賞会、展覧会、バザー

27・5・30　女子制服制定

28・3・20　理科教室新築落成（物理教室、化学教室、地学教室、生物教室）

4・1　本年度入学生から第一学年七学級となる。

29・4・1　**通信教育部設置**（県立千葉第一高等学校及び県立千葉第二高等学校通信教育部を統合）

6・7　家庭科教室、普通教室新築落成、仮湯呑場を分解、体育器具置場として移築

30・4・8　第一棟改築落成（普通教室、通信教育部室、

更衣室）

7・20～9・5　校庭整地工事（グランド拡張）

10・10　通信教育部文部省実験学校に指名される。

32・3・1　通信教育部第一回卒業生三名

4・1　本年度入学生から第一学年定員三五〇名

8・31　体育館兼講堂新築落成

34・2・20　第二棟改築落成（普通教室、図書室）

3・31　校長諸川芳雄県立千葉商業高等学校長に転任

4・1　県立銚子商業高等学校長、石毛貞雄本校校長に補せられる。

35・4・1　努力目標設定、校内諸規程改訂

5・31　通信教育部校舎落成

11・19　第三棟改築落成（第二体育館、芸術科各教室、生徒会室）

36・4・1　**千葉県立千葉東高等学校と校名変更**

8・22　第三棟普通教室四を焼失（被害総額八、四九九、一〇〇円）

9・1　**創立二十周年記念誌刊行**

10・31　**通信教育部が通信制課程となる。**

37・4・1　本年度入学生から第一学年定員四〇〇名（八学級）

3　第二棟二階校舎新築（火災焼失による復旧）

38・2・26　校長室、教務室、事務室、保健室拡張工事、小講堂模様替、宿直室、放送室移転工事

4・1　本年度入学生から第一学年定員四五〇名（九学級）

29　日本放送協会学園高等学校（通信制の課程）の協力校となり第一回入学式挙行

7・8　通信制の課程、読売教育賞受賞（第一回）

39・3・16　急増対策新校舎竣工（二階建六教室、便所、更衣室等）

40・7・20　校長石毛貞雄県立東葛飾高等学校長に転任

21　県立国府台高等学校長内藤貫一本校校長に補せられる。

41・1・29　期成会発足

4・1　**衛生看護科**（定員四〇名）設置（第一学年発足）

12・28　校門、玄関前の舗装工事完了

42・1・25　新校舎建築第一期工事着工（四二・一〇・一三竣工総工費一四、二〇〇万円）鉄筋コンクリート四階建延面積四、六五九㎡

3・10　校長内藤貫一退職

11　教頭鬼島正雄校長職務代理に補せられる。

4・1　千葉県教育委員会教育次長沢田繁二本校校長に補せられる。今年度より普通科一学級減八学級となる。

10・13　第一期工事新校舎完成（普通教室、家庭科教室、書道、美術、社会科教室等）

12・5　プール建設用地の校舎取りこわし

43・1・17　プール建設工事開始（二五m七コース四三・七・二六竣工工費一、五三四万円）

4・1　本年度入学生から第一学年定員四三二名（普通科一学級四九名）

7・26　プール完成

44・3・10　衛生看護科第一回卒業生三一名

10　新校舎建築第二期工事着工（四五・三・二〇竣工、総工費一八、七〇〇万円）

31　校長沢田繁二県立千葉工業高等学校長に転任

4・1　県立佐倉東高等学校長村田泰次郎本校校長に補せられる。

1　本年度入学生から一学年定員四二四名（普通科一学級四八名）

4・19　いわゆる「生徒心得第九条問題」起こる。

9・30　学園封鎖事件起こる。

45・3・20　第二期工事新校舎完成（理科教室、視聴覚教室、音楽教室、図書室、教務室、事務室、校長室等）

4・1　本年度入学生から一学年定員四一六名（普通科一学級四七名）

9・2　新体育館工事着工（四六・三・三一竣工、総工費七八三〇万円）。

46・3・30　新体育館完成

昭和46年度

4・1　本年度入学生から一学年定員四〇八名（普通科一学級四六名）

6　始業式

7　入学式

8　対面式、離任式

26　一年宿泊研修会（第一団1、2、3、4、9組）青少年会館

27　二年生、スポーツ大会、スポーツセンター、三年生、遠足

28　一年宿泊研修会（後団5、6、7、8組）

5・22　ＰＴＡ総会

6・17　衛生看護科二年戴帽式
18　校内球技大会（本校及スポーツセンター）
21　生徒会本部役員及保健組合長認証式
　　校内体育大会球技の部表彰式（短縮四十五分）
7・3　衛生看護科一年病院施設見学
20　終業式
8・5　全校登校日
21　〃
9・1　始業式
4　衛生看護科三年校外実習オリエンテーション、校外実習開始
8　台風25号のため国鉄不通
11・1　**創立三十周年記念式典**〕会場設営等、事前準備
　　文化祭
2～3　**創立三十周年、新校舎落成記念式典**、東雲祭
10　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
13～18　二年修学旅行
12・20　球技大会（サッカー、バスケット）
24　終業式
1・8　始業式
2・4～5　整容講座（三年女子希望者）
7　降雪のため午前中短縮四五分授業
15　校内マラソン大会（検見川東大グランド）
3・10　卒業式
24　終業式

昭和47年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
8　離任式、対面式
25　千葉テレビ開局記念生徒九名出演
26　校外学習（一年マザー牧場、二年多摩動物園、三年上野公園）
27　鉄道ストのため臨休
6・2　校内球技大会（スポーツセンター）
21～7・17　衛生看護科二年実習
7・10～12　第一学年キャンプ
18　ノースバンクーバー親善学生来校
20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
4～11・6　衛生看護科三年実習

10・14～17　修学旅行
26　千葉テレビ看護科取材
11・2　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
12・19～21　校内球技大会
23　終業式
1・8　始業式
17　生徒会役員認証式
2・5　生徒会役員認証式
8　校内マラソン大会（東大検見川グランド）
23　分離椅子へ机の交換
3・10　卒業式
24　終業式

昭和48年度

4・6　始業式・新任式
7　入学式
9　対面式・離任式
27　国鉄・私鉄ストのため臨時休業
5・2　学年遠足（一年マザー牧場　二年多摩動物園　三年鎌倉、三浦半島、筑波山）
22～7・16　衛生看護科三年病院実習開始
29　PTA役員会
6・6　校内球技大会（スポーツセンター）
7・16　ノースバンクーバーより学校訪問
18　観劇（県文化会館）
20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
3～10・6　衛生看護科二年病院実習開始
29～30　東雲祭
10・3　衛生看護科一年病院実習
29　衛生看護科三年病院施設見学（国立下総療養所）
30　衛生看護科三年病院施設見学（ガンセンター）
11・4～8　二年修学旅行
12　衛生看護科三年病院見学（下志津病院）
15　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
30　私鉄ストのため四五分授業、六時限カット
12・4　国鉄ストのため一時限自習
20～22　校内球技大会
24　終業式
1・8　始業式
21　生徒会役員認証式

2・22　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・1　国鉄ストにより臨時休業
11　卒業式
20　講演会「能率的な学習方法について」
千葉大教授　四宮晨先生
23　終業式

昭和49年度

4・6　始業式・離任式・新任式
8　入学式
9　対面式
11　臨休（国・私鉄ストのため）
12　右同
13　右同（国鉄ストのため）
24　学年遠足（一年鴨川シーワールド）
（二年養老渓谷・子供の国・鋸山）
（三年行川アイランド）
6・1　生徒会前期役員認証式
3　村越主事（通信制）、八時四十五分、主事室で心筋梗塞のため逝去
12　校内球技大会（スポーツセンター）
米国高校生（ブクサー）到着
（教師夫妻・生徒一一名、計一三名）
18　交換学生（アメリカンフィールドサービス）一名
（マリアナさん）
7・8　豪雨のため交通機関乱れる
18　二・三年男子　格技大会
二・三年女子　ダンス発表会
20　終業式
8・10　全校登校日
9・2　始業式
4～25　衛生看護科二年病院実習開始
28～29　東雲祭
10・17　漢字テスト
30　衛生看護科三年国立下志津病院見学
11・1　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
17～21　二年修学旅行
19　臨時休業（国・私鉄ストのため）
22　衛生看護科三年国立下総療養所見学
27　臨時休業（国鉄スト）
28　国鉄ダイヤ混乱のため9時始業3限まで45分授業
12・2　生徒会本部役員認証式

11　ＰＴＡ研修会（13時30分～会議室）
「脳のはたらきと健康」萩原弥四郎千葉大教授
19～20　校内球技大会
21　音楽鑑賞会（10時～11時30分）（立川清登、是安享）
24　終業式
1・8　始業式
2・6　校内マラソン大会（スポーツセンター）
21　降雪のため第一時限カット、第二時限より平常授業
3・10　卒業式
20　講演「高校生の男女交際のあり方」
筑波大教授　相川高雄氏
24　終業式

昭和50年度

4・7　始業式、新任式
8　入学式
9　離任式、対面式
15　日米高校交流プログラムによる渡米生徒帰国
22　部・同好会顧問会議
5・2　遠足、一年…岩屋古墳、昭和の森、二年…上野、三年…鎌倉
8　交通スト（国鉄）のため臨時休業
9　交通スト（国鉄・私鉄）のため臨時休業
10　交通スト（国鉄）のため臨時休業
28　生徒会役員認証式
30　校内球技大会（スポーツセンター）
31～7・11　衛生看護科三年病院実習
6・16　ＰＴＡ期成会総会
18　フィリピン少女世界一周親善大使学校見学
23　ブクサー高校より先生ほか到着
25　衛生看護科一年国立千葉病院見学
7・19　終業式
8・9　全校登校日
9・1　始業式
3～23　衛生看護科二年病院実習
26　三時限より東雲祭準備
27～28　東雲祭
30　午後代休
10・1　就職試験開始
8　大雨、早く帰宅するよう指示

27～11・15　衛生看護科教育実習
29　衛生看護科三年下総療養所見学
30　二年修学旅行出発（A班赤穂泊B班天橋立泊）
31　二年修学旅行（A班琴平泊B班大山寺泊）
11・1　二年修学旅行（京都泊）、下校鈴繰上げ
4　衛生看護科三年下志津病院見学
20　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
26～12・3　国鉄ストにつき臨時休業
12・5　生徒会役員認証式
25　終業式
1・8　始業式
2・6　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・9　卒業式予行
10　卒業式
18　能楽教室（県文化会館大ホール）
19　救急法講習会
24　終業式

昭和51年度

4・6　始業式、新任式
7　入学式
8　離任式、対面式
14　国鉄、私鉄ストのため臨時休業
20～21　交通ゼネストのため臨時休業
5・4　三年学年遠足
一・二年は雨天のため中止、特別日程で授業（九時より二限のみ）
6・3　前期生徒会役員認証式
4～7・10　衛生看護科三年、病院実習
14　PTA期成会総会
16　校内球技大会（スポーツセンター）
18　衛生看護科一年病院見学（5・6限）
7・20　終業式
8・9　全校登校日
9・1　始業式、新任式
13　ホームルーム教育相談研修会（木村熏先生）
「問題をもった生徒の事例とその予防について」
17　千葉TV、衛生看護科撮影
25～26　東雲祭
10・8～12　二年修学旅行（奈良・京都）
15　下志津病院見学
19　校内陸上競技大会（スポーツセンター）

11・4　下総療養所見学
10　午後臨時休業（天皇陛下御在位50年記念式典）
12・1　後期生徒会本部役員認証式
22　演劇鑑賞（ゴーゴリ作「検察官」、県文化会館）
24　終業式
1・8　始業式
2・10　校内マラソン大会降雪のため中止
17　学校参観（朝鮮民主主義人民共和国教育文化職業同盟代表団一四名）
18　校内マラソン大会
3・10　卒業式
22　映画教室（「かけがえのない地球」「黄色いリボン」）
24　終業式

昭和52年度

4・6　始業式・新任式
7　入学式
8　離任式・対面式
16　私鉄大手（京成・東武等）ストのため一時間遅れで授業
20　国鉄・私鉄（京成のみ）ストのため臨時休業
21　私鉄（京成のみ）ストのため一時間遅れで授業
30　私鉄（京成のみ）ストのため一時間遅れで授業
5・11　学年遠足
一年　養老渓谷　5・6・8組
昭和の森　1・4・7組
房総風土記の丘　2・3・9組
二年　昭和の森　4・5・6・8・9組
養老渓谷　1・2・3・7組
三年　勝浦海岸
25　生徒会役員認証式
27～7・12　衛生看護科三年病院実習
6・1　校内球技大会（スポーツセンター）
3　校内球技大会　残り試合実施（体育館とグランド）
6　PTA期成会総会
10　衛生看護科一年病院見学（5・6時限）
7・20　終業式
8・9　全校登校日
9・1　始業式
新任式

3　衛生看護科二年病院実習開始
19　風雨強きため6時限終了をもって全生徒下校
24～25　東雲祭
10・12　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
13　第三学年進路志望調査
21　中間考査
31　AFS短期交換留学生二名来校
ルイーズ・エイムズ（㊛二の二）
ブライアン・フェラー（㊚一の一）
11・1　衛生看護科三年下総療養所見学実習
4　国鉄午前7時までスト（平常通りの授業）
11～15　二年修学旅行
12・1　一年合唱コンクール（5・6限）
2　生徒会役員認証式
23　音楽鑑賞会
24　終業式
1・9　始業式
2・17　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・10　卒業式
22　第一学年　校長講話（中国の話）
第二学年　野口先生講話（シルクロードの話）
24　終業式

昭和53年度

4・6　新任式・始業式
7　入学式
8　対面式
11　離任式
25　臨時休業（国鉄・私鉄ストのため）
27　生徒総会
5・4　遠足　一年　東京上野公園
二年　鎌倉、勝浦
三年　勝浦
31　PTA期成会総会
6・1　前期生徒会役員認証式
2　衛生看護科三年下総病院見学
6　衛生看護科三年下志津病院見学
9　校内球技大会（スポーツセンター）
10　衛生看護科三年病院実習開始
28　衛生看護科一年国立千葉病院見学
7・20　終業式
8・9　全校登校日

9・1　始業式、新任式
2　衛生看護科三年がんセンター実習
4～17　教育実習開始（13名）
4～22　衛生看護科二年病院実習
4～8　衛生看護科三年がんセンター実習
16～17　東雲祭
19～10・2　衛生看護科二年病院実習、衛生看護科教育実習
10・4　千葉TV、看護科及び数学授業を取材
12　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
25　日赤より献血感謝状を受く
11・25～29　第二学年修学旅行
12・1　生徒会役員認証式
21　能楽鑑賞
23　終業式、賞状伝達
1・8　始業式
2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・10　卒業式
24　終業式

昭和54年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
9　離任式
23　新二年、机・椅子交換作業
25　生徒臨時休業（国鉄・私鉄の双方ストのため）
5・4　学年遠足
一、二年　白里・片貝海岸
三年　東京・上野公園
19　PTA期成会総会
29～7・3　衛生看護科三年病院実習開始　国立千葉病院
31　前期生徒会役員認証式
6・1　校内球技大会（スポーツセンター）
13　衛生看護科一年病院見学（午後）
7・5　衛生看護科三年下志津病院見学実習
6　衛生看護科三年下総療養所見学実習
7　衛生看護科生徒集会（56年衛看移転について学校長の話、放課後、会議室）
9　衛生看護科三年がんセンター実習開始
20　終業式
8・10　全校登校日（全校集会は校長出張のため中止）

9・1　始業式
4　衛生看護科二年病院実習開始
12　校舎増築工事
14～15　東雲祭
10・18～22　二年修学旅行
25　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・27　国際交流米国派遣本年度中止
12・1　後期生徒会役員認証式
12～15　通信教育棟新築工事コンクリート打ち（1階）
20　演劇鑑賞会（県文化会館）
東京芸術座公演「あゝ野麦峠」
24　終業式
1・8　始業式
12　共通一次試験会場に貸与のため、臨時休業
17　通信教育棟生コン打ち
31　通信教育棟、生コン打ち作業最終回
2・16　校内マラソン大会（スポーツセンター）
25　北側、部室新築工事
26　木造校舎内の各部室の移転作業終了
3・3　木造校舎解体作業開始
10　卒業式
12　校内電話番号変更
19　幕張西高、説明会（新体育館）
24　終業式

昭和55年度

4・7　新任式、始業式
8　入学式
9　離任式、対面式
16　国鉄、京成ストにより臨時休校
26　旧通信教育棟、部室等の解体作業開始
5・2　遠足、一年生　白里片貝海岸
二年生　鋸山
三年生　勝浦海岸
28　衛生看護科三年病院実習
30　校内球技大会（スポーツセンター）
31～7・12　衛生看護科三年病院実習
6・2　前期生徒会役員認証式
7・19　終業式
8・9　全校登校日
9・1　始業式

3～10・1　衛生看護科二年病院実習
13～14　東雲祭
22　衛生看護科三年下総療養所見学
29～　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
10・14　台風一九号接近三時過全員下校
11・25～28　二年修学旅行
12・2　後期生徒会役員認証式
12～15　期末考査
19　音楽鑑賞会（東京混声合唱団演奏会、県文化会館）
24　終業式

1・8　始業式
10～11　共通一次試験会場（生徒臨休）
2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・23　一年特別授業（野村典、錦織先生「生命の神秘」）
24　終業式

昭和56年度

4・6　新任式・始業式
7　入学式
8　対面式・離任式
22　京成ストのため短縮四〇分六時限授業
23　京成ストのため短縮四〇分六時限授業
5・2　遠足（一年　九十九里海岸、二年　昭和の森・勝浦海岸、三年　上野公園）
16　PTA期成会総会
29　衛生看護科三年病院実習開始
6・1　校内球技大会（スポーツセンター）
4　前期生徒会役員認証式
7・20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
4～9・30　衛生看護科二年病院実習
19～20　東雲祭（テーマ「自由落下」）
29　LHR時創立四十周年記念学園歌決定のための投票
10・14　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
29　全通合同職員会議（四十周年記念式典の件）
11・2　創立四十周年記念校内音楽コンクール
4　**創立四十周年記念式典**
23～26　二年修学旅行（奈良・京都方面）
12・3　生徒会役員認証式

21　芸術鑑賞会　狂言鑑賞（県文化会館）
24　終業式
1・8　始業式
16～17　共通一次テスト会場（生徒臨時休業）
2・5　三年自宅学習
9　総武線事故のため短縮授業
10　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・8　生徒会誌「黎明」発刊（第一号）
10　卒業式
24　終業式

昭和57年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
10　新入生歓迎会
5・1　学年遠足一年九十九里・白里海岸、二年昭和の森（雨天のため中止、学校にてレク）三年上野公園
5・22　PTA期成会総会
29～7・9　衛生看護科三年病院実習開始
6・9　校内球技大会（スポーツセンター）
7・20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
4　台風一五号の接近により全生徒十三時三十分までに下校
6～8・27　衛生看護科二年病院実習開始
11　台風一八号接近により全生徒一五時までに下校
18～19　東雲祭
10・6　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・26～29　二年修学旅行
12・21　芸術鑑賞会　劇団手織座　深沢七郎「楢山節考」（県文化会館）
24　終業式
1・8　始業式
15　共通一次試験会場につき臨時休業
2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・10　卒業式
24　終業式

昭和58年度

4・6　新任式
7　入学式

26　京成電鉄ストのため始業一時間遅れ
5・4　学年遠足（一年南房総金谷オリエンテーリング、二、三年東京ディズニーランド）
21　ＰＴＡ期成会総会
6・1～7・9　衛生看護科三年病院実習開始
7　校内球技大会（スポーツセンター）
9　衛生看護科生徒集会（移転に関する説明会）
7・20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
5～28　衛生看護科二年病院実習開始
9　衛生看護科三年見学実習（千葉県がんセンター）
17～18　東雲祭
10・13　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・24～28　二年修学旅行
30　若葉看護高等学校開設準備委員会
12・19　音楽鑑賞会　こんにゃく座民話オペラ（県文化会館）
24　終業式
1・9　始業式
14　共通一次試験会場につき臨時休業
19　降雪多量のため授業四時限にて打切り
2・23　若葉看護高等学校開設準備委員紹介
3・10　卒業式
24　終業式、**衛生看護科離別式**

昭和59年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
5・2　学年遠足　雨天のため当初の予定を変更して実施（一年船の科学館、科学技術館、二年レクリエーション、三年科学技術館、船の科学館）
19　ＰＴＡ期成会総会
30　校内球技大会（スポーツセンター）
7・20　終業式
8・10　全校登校日
9・1　始業式
15～16　東雲祭
10・16　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・24～28　二年修学旅行
12・21　芸術鑑賞会　狂言大蔵流山本会「鎌腹」「棒縛」（県文化会館）

24　終業式

1・8　始業式

26　共通一次試験会場につき臨時休業

2・14　同窓会寄贈による校章、正面ポーチに設置

18　校内マラソン大会（スポーツセンター）

3・9　卒業式

23　終業式

昭和60年度

4・6　新任式、始業式

8　入学式

5・9　格技館落成式

16　PTA期成会総会

6・3　校内球技大会（スポーツセンター）

14　全校遠足（各学年とも、「科学万博」）

7・1　台風六号の影響により交通麻痺状態のため、午前一一時に放課

20　終業式

8・10　全校登校日

9・2　始業式

10・16　校内陸上競技大会（スポーツセンター）

11・14～18　二年修学旅行

29　千葉動労ストのため総武線不通。始業一時間遅れ。短縮四〇分授業六時限

12・20　芸術鑑賞会　前進座　山本周五郎作「柳橋物語」（県文化会館）

24　終業式

1・8　始業式

25　共通一次試験会場につき臨時休業

2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）

15　千葉動労ストのため一限遅れ二限授業にて放課

3・8　衛生看護科記念碑除幕式

10　卒業式

24　終業式

昭和61年度

4・7　新任式、始業式

8　入学式

9　対面式、離任式

16　新方式必修クラブ開始（部活連動式）

5・2　遠足（二、三年生ディズニーランド、予定は九十九里海岸歩行なれど雨により変更、一年内浦山県

民の森）
12　校内球技大会（スポーツセンター）
29　ＰＴＡ期成会総会
6・2　前期生徒会役員認証式
7・19　終業式
　一年生キャンプ（菅沼、日光白根山登山）
8・2　本校に落雷、弱電系被害
　9　全校登校日
9・1　始業式
13～14　東雲祭
10・13　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・16～19　二年修学旅行
12・19　芸術鑑賞会「岡村喬生バス独唱会」（県文化会館）
24　終業式

昭和62年度

1・8　始業式
2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）
26～27　入学学力検査
3・10　卒業式
24　終業式

4・6　新任式、始業式
7　入学式
8　対面式、離退任式
28　遠足（一年九十九里海岸／二年鎌倉／三年上野公園）
6・1　校内球技大会（スポーツセンター）
4　前期生徒会役員認証式
7・20　終業式
9・1　始業式
10・7　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
11・19～23　二年修学旅行（奈良、京都方面）
12・1　後期生徒会役員認証式
17　地震Ｍ５強震（午前11時８分）
22　芸術鑑賞会（狂言）
24　終業式

1・8　始業式
23　共通一次学力試験場となり生徒臨休
2・4　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・10　卒業式
24　終業式

昭和63年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
5・2　遠足　一年（九十九里海岸遊歩）
二年（横浜名所見学）
三年（一組川越市内見学、二組浅草、三～七組浅草・船の科学館、八、九組池袋、NHK、電力館）
6・1　前期生徒会役員認証式
2　PTA期成会総会
4　セミナーハウス開館式
8　校内球技大会（スポーツセンター）
7・20　終業式
9・1　始業式
17～18　東雲祭
10・6　校内陸上競技大会雨天により延期
11・1　校内陸上競技大会（青葉の森公園）
24～26　二年修学旅行（京都方面）
12・1　後期生徒会役員認証式
21　芸術鑑賞会（「十二人の怒れる男たち」東京芸術座）
24　終業式
1・9　始業式
21～22　共通一次試験（生徒臨休）
2・14　校内マラソン大会（スポーツセンター）
24　昭和天皇大喪の日（臨時休業）
3・10　卒業式
24　終業式

平成元年度

4・6　新任式、始業式
7　入学式
5・1　遠足（一年　横浜博覧会（雨天変更による）
二年　鎌倉
三年　横浜博覧会）
22　校内球技大会（スポーツセンター）
6・1　PTA期成会総会（期成会2・3・31で解散）
2　生徒会役員認証式
30　卒業認定会議（阿部ひろみに関する卒業認定）創立五十周年記念事業準備委員委嘱、創立五十周年記念校史編集委員委嘱
7・6　三年五組阿部ひろみの卒業式（留学中の単位認定

による卒業の第一号）

20　終業式

9・1　始業式

16～17　東雲祭

10・5　校内陸上競技大会（スポーツセンター）

11・26～29　二年修学旅行（関西）

12・1　後期生徒会役員認証式

5　臨時日課実施（ＪＲ動労ストによる）

19　防災訓練・全校集会

20　芸術鑑賞会（県文化会館大ホール、演目「わらび座合奏団」）

22　終業式

1・8　始業式

13　センター試験会場、生徒臨休

27～31　三年第三学期末考査

2・10　校内マラソン大会（スポーツセンター）

3・10　卒業式

24　終業式

平成2年度

4・6　新任式、始業式

7　入学式

9　対面式・離退任式

5・2　遠足　一年　昭和の森
　　二年　鎌倉
　　三年　上野公園

14　校内球技大会（スポーツセンター）

31　ＰＴＡ総会

6・1　生徒会役員認証式

29　二棟改修工事に関する打合せ

7・19　机椅子移動作業

20　終業式

21～23　一年キャンプ（御殿場「国立青年の家」）

9・1　机椅子復元作業、始業式

22～23　東雲祭

10・5　校内陸上競技大会（青葉の森公園）

31　二棟改修工事検査

11・20～23　二年修学旅行（関西方面）

30　後期生徒会役員認証式

12・20　芸術鑑賞会（狂言鑑賞、県文化会館）

22　終業式

1・8　始業式

12　センター試験会場、生徒臨休
2・18　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・9　卒業式
23　終業式

平成3年度

4・6　始業式、新任式
8　入学式
9　対面式・離退任式
5・13　校内球技大会（スポーツセンター）
14　遠足（一年　成田市方面、二年　鎌倉、三年　上野）
30　ＰＴＡ総会
6・10　五十周年記念実行委員会打合せ
7・19　卒業式（留学生二名）
20　終業式
21～23　一年キャンプ（山梨県西湖）
9・2　始業式・賞状伝達式
14～15　東雲祭
27　校内陸上競技大会（スポーツセンター）
10・11　台風二一号のため午前中授業
11・3～9　創立五十周年記念週間　美術・書道・写真展（セミナーハウス）
5　校内合唱コンクール（県文化会館）
7　五十周年記念式典予行
8　記念講演会　「真理探求の楽しさ」利根川進氏（県文化会館）
9　**創立五十周年記念式典、祝賀会**（本校、千葉グランドホテル）
17～20　二年修学旅行（京都方面）
12・24　終業式
1・8　始業式
11　センター試験会場、生徒臨休
2・1　降雪による交通遮断のため臨時休業
5　校内マラソン大会（スポーツセンター）
3・10　卒業式
24　終業式

第二節　通信制課程

前史

23・4・1　**県立千葉高等学校及び県立千葉女子高等学校に通信教育部**設置　国語甲を開講

5・20　高等学校通信教育規定公布、施行

24・4・1　通信教育教材第四種郵便物認可（100ｇまで四円）

6　全国通信教育研究会（全通研）連合会結成

25・5・29　中等学校通信教育指導要領補遺発令

国語甲に引き続き漢文ほか四科目を開講

26・8・31　千葉県高等学校通信教育規則公布、施行

28・8・18　高等学校定時制及び通信制教育振興法公布

29・4・1　**県立千葉第三高等学校**に統合して**通信教育部**を設置

12　県立千葉第一高等学校及び県立千葉第二高等学校より前年度生徒並びに新入生徒を引き継ぐ

通信制（千葉第三高等学校）

29・4・1　県立千葉第一・第二高校より本校に通信教育部を統合設置（専任教諭八名・事務職員二名）

6・1　通信教育機関誌「三高通信」創刊号発行

13　第一回入学式挙行（三一一名入学）

7・4　第一回本校面接指導実施（三十九年度まで月一回）

18　第一回巡回面接指導実施（柏・大原・佐原地区）

30・10・27　文部省実験校に指定される（協力校について）

三十二年二月七日協力校匝瑳高校で研究発表を行う

31・8・18　第一回合宿スクーリング実施（鹿野山、男女別各一泊二日、参加生徒四二名）

～20

9・2　第一回定期試験実施（本年度より試験定期化）

32・3・1　通信教育部第一回の卒業式挙行（三名卒業）

34・4・9　通信制独自の帽章、バッジ、ボタン制定

5・11　文部省実験校に指定される（通信教育における学習指導の効果的運営について）三十五年三月二十一日研究報告書を発表

35・4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる

5・22　通信教育部専用校舎竣工（6月20日移転）

8・19　法務大臣より感謝状を受ける（千葉刑務所における通信教育講座開講に対して）

36・7・15～17　第六回合宿スクーリング（本年度より会場を国立中央青年の家に移す、二五〇名参加）

10・31　「通信制の課程」となる（学校教育法の改正）

11・6～10　第一回修学旅行実施（奈良・京都方面）

37・3・24　第一回学習会連合研究交歓会を行う（於木更津、県立青年の家）

5・13　生徒会設立、第一回総会を行う

7・15　生徒会機関誌「雑草」創刊号発行

38・4・1　日本放送協会学園高等学校の協力校となる

7・6　読売教育賞（定時制・通信制部門）受賞（学習会の育成とそれに伴う研究実践に対して）

39・2・1　教科書・学習書の無償交付金第一回受領

4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる

40・4・1　本年度より学習規制実施。本校面接指導は毎月二回となり、巡回面接指導は廃止される

41・3・20　卒業式（第九回、八〇名卒）を単独で挙行

6・1　国鉄運賃割引制実現（面接指導用五割引回数券）

9・17　千葉東高校通信制振興会発会

42・3・19　卒業式（第一〇回、五九名卒業）を日本放送協会学園高等学校と合同で挙行することとなる

46・4・18　入学式（入学生三九一名）

5・9　生徒会総会（今年度より会費三〇〇円に値上げ）

6・10～11　全国通信教育研究協議会（盛岡）

27　第二〇回千葉県高校定通体育大会。バスケットボール女子、二部に優勝、他五種目に入賞

7・1　通信教育用郵便料金六円に値上げ（100gまでごとに六円）

17　働きながら学ぶ青年の会に斧木公博君ら六名参加（至一八日、国立赤城青年の家）

8・7　第一五回合宿スクーリング（御殿場市国立中央青年の家、参加者二五〇名）
～9
9・13　文部省主催全国定通研究協議会（東京）
10・3　第九回千葉県高校定通総合文化大会。絵画、被服その他に八点入賞
19　関東地区通信教育研究大会（新潟）
～20
31　体育祭
11・2　**創立三十周年記念並びに新校舎落成記念式典挙行**
6　学習交歓会（県立鶴舞青年の家、参加者三〇名）
～7
20　修学旅行（関西方面、参加者四六名）
～23
47・3・19　卒業式（卒業生一八一名）
4・16　入学式（新入生三九一名）
5・7　生徒会総会
6・8　全国高等学校通信教育研究大会（東京）
25　第二一回千葉県高校定通体育大会。バレーボール女子優勝、陸上女子総合三位
7・22　リーダー研修（県青少年会館四〇名参加）
8・5　第一六回合宿スクーリング（御殿場市国立中央青年の家、参加者二五〇名）
～7
9・30　学習交歓会（東金青年の家、参加者三〇名）
10・8　第一〇回千葉県高等学校定通総合文化大会。手芸、被服その他入賞
17　第二二回関通研大会（伊香保）
11・11　修学旅行（関西、四国方面、参加者一〇九名）
～14
48・3・18　卒業式（卒業生一七七名）
4・22　入学式（入学生四〇五名）
5・27　球技大会（全校生徒参加）
6・6　全国高等学校通信制教育研究会総会
9　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒六七名参加）。これより毎年の行事となる
～10
16　千葉県定時制通信制野球大会に参加
7・8　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
28　合宿スクーリング（御殿場国立青年の家・一七二名二泊三日）
9・16　一組生必修クラブ活動（本年度より実施）
10・11　関東地区通信教育研究協議会

～12
11・10　修学旅行（関西方面・生徒六四名）
～13
49・3・17　卒業式（卒業生一四三名）
4・1　被服科設置定員四五名、植草学園と技能連携実施（54年4月1日募集停止）
21　入学式（新入生三二五名、転編入生他七六名）
30　第一回市原刑務所通信教育講座開講式
6・6　全国高等学校通信制教育研究会総会
～8
9　新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒一一二名参加）
～10
10　千葉県定時制通信制野球大会に参加
7・7　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
27　合宿スクーリング（御殿場国立青年の家・一六一名）
～29
11・9　修学旅行（関西方面・生徒一三〇名）
～12
24　体育祭振替レクリエーション（全校生徒参加）
50・3・16　卒業式（一九一名）
4・20　入学式（新入生六一七名、転編入生他五五名）
27　第一回スクーリング（以後毎月二回実施）
託児施設設ける。託児開始（55年3月31日廃止）
5・31　新入生合宿研修（東金青年の家・生徒九四名参加）
～6・1
6・5　全国高等学校通信制教育研究会総会（岡山）
7・6　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）
26　合宿研修（御殿場国立中央青年の家・生徒一二二名参加）
～28
9・7　第一回生活体験発表会（発表者二名）
10・24　関東地区高等学校通信制教育研究協議会（本校）
11・15　修学旅行（関西方面二泊三日・生徒一三六名）
51・3・14　卒業式（二一四名）
4・1　NHK学校放送研究委嘱校となる。被服科定

員九〇名。不二学院と技能連携実施（53年4月1日募集停止）

18　入学式（新入生四三九名・転編入生他六一名）

5・14　新入生合宿研修（東金青年の家・四八名）

6・10　全国高等学校通信教育研究会総会（徳島）

7・4　千葉県定時制通信制体育大会（各種目に参加）

24　合宿研修（国立中央青年の家・八七名）

8・31　通信制職員室増築（四一平方メートル）

9・5　第二回生活体験発表会（発表者三名）

30　通信制職員室三四・一六平方メートル増築竣工（55年4月撤去）

10・1　関東地区高等学校通信教育研究会管理運営研究協議会（本校）

11・12〜13　関東地区定通研究協議会（銚子）

18〜19　関東地区高等学校通信制教育研究協議会（箱根）

25　修学旅行（関西方面・生徒一二〇名）

28　卒業式（一七五名）

52・3・13　入学式（入学者総数四七一・内転編入生他六三）

4・24　交通ストのため、当初の予定が一週間延期

5・13〜15　第五回新入生合宿研修（県立東金青年の家・生徒五四名参加）

28　定通教育三十周年記念式典（国立教育会館）

6・8〜10　第二四回全国高等学校通信教育研究会総会（大分）

21　関東地区高等学校通信制教育研究協議会定期総会（国立教育会館）

7・3　千葉県定時制・通信制体育大会（各種目に参加）

23〜25　合宿研修（御殿場国立中央青年の家・生徒九四名参加）

9・4　第三回生活体験発表会（発表者五名）

10・8〜11　修学旅行（関西方面・参加生徒数二一四）

16　定時制通信制文化祭（習志野高校）。体育祭

27　関東地区高等学校通信制教育研究協議会大会

12・12　全国定時制通信制三十周年記念誌完成

53・3・12　卒業式（二〇二名）
　23　入学式（入学者総数三八八名・内転編入六八名）
5・19　東金合宿研修（新入生徒四四名・職員八名）
6・11　機関誌「東高通信」三〇〇号記念発行
6・14　第三〇回全国高等学校通信制教育研究大会
　～16　（仙台　本校視聴覚研究発表）
　17　県定通野球大会準決勝に出場
7・2　二七回千葉県高等学校定通体育大会各部出場（全国大会出場・女子テニス・女子卓球個人・男子砲丸投げ）
　22　合宿研修（国立中央青年の家、生徒八四名・職員七名）
　～24
9・3　校内生活体験発表会六名出場（内集団生二名）
10・20　関東地区通信制教育研究大会（水戸南）
　22　体育祭（本校校庭）
54・3・11　卒業証書授与式。卒業生三六〇名（男子三六・女子三二四）
4・22　入学式（入学者総数二六三、内新入一九六）
5・27　生徒総会（生徒会会計決算と予算案の承認等）
6・2　新入生合宿研修（新一組生八〇名参加職員四名）
　～3
7・1　千葉県高等学校定通体育大会（テニス・男女優勝、卓球・女子団体と個人に優勝、男子団体三位）
　2　全国高等学校通信制教育研究会総会並びに研究協議会（国立教育会館）
　～4
　21　二組生以上合宿研修（御殿場国立中央青年の家、生徒六三名参加、職員七名）
　～23
8・25　通信棟新校舎建築着工（延べ一一一一・八一平方メートル）
9・2　校内生活体験発表会
　7　修学旅行・奈良、京都方面へ一二三名参加（一般生二五・集団生九八）
　～10
10・14　定通総合文化大会（匝瑳高校）。写真の部一位・絵画工芸の部二位、三位・被服手芸の部三位・書道の部佳作
　21　体育祭
　26　関通研国語部会（本校会議室・一九名参加）
11・25　第三回校内展実施

55・3・16　卒業証書授与式（二七二名）、終業式

31　通信棟新校舎竣工（一一一一・八一平方メートル）総工費一一五、七一一千円（昭和五十四年度国庫補助金四、五六四千円）

4・20　入学式（入学者総数三二七内新入二四六）

25　新校舎へ移転、旧通信制校舎の撤去

5・31　新入生合宿研修（新一組生徒七七名参加・職員七名参加）

〜6・1

12　全国高等学校通信制教育研究総会並びに研究協議会（芦原）

〜13

7・6　千葉県高等学校定通体育大会（テニス・男子個人優勝　柔道・団体三位　卓球・男子団体三位、女子団体二位　バスケット・ベスト4進出　陸上・五〇〇〇メートル三位）

8・2　御殿場合宿研修（全校生徒対象）於御殿場国立中央青年の家　生徒七二名・職員九名参加

〜3

9・7　校内生活体験発表会

10・12　千葉県定通総合文化大会（長生高校）

19　校内球技大会（校地整備の為体育祭の代りに実施）

11・20　関東地区高等学校通信教育研究協議会定期総会（宇都宮）

〜21

30　第四回校内展覧会実施

56・2・24　関東地区高等学校通信教育研究協議会管理運営部会（本校　二二名参加）

3・15　卒業式（二五六名）

56・4・19　入学式（新入三一四名　他六三名）

6・15　振興会総会

23　第二十三回全国高等学校通信制教育研究会（京都）

7・5　千葉県高等学校定通体育大会（卓球男女・各三位、テニス男女・各個人優勝、砲丸投・二位）

25　夏季宿泊研修（国立中央青年の家二泊三日）

10・11　第十九回千葉県定通総合文化大会（千葉高、珠算・絵画・合唱入賞）

18　体育祭（紅組優勝）

10・22　関東地区高等学校通信教育研究会（妙高高原）

11・4　**千葉県立千葉東高等学校創立四十周年記念式典**

12・13　第五回校内展覧会

57・3・14　卒業式（一八八名　男三七名　女一五一名）
4・18　入学式（新入一九四名　他七九名）
5・1　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
19　全通研大会（松江）
6・7　振興会総会
7・4　県定通体育大会（バレー女子、テニス入賞）
24　夏季宿泊研修（飯綱高原　二泊三日）
10・9　修学旅行（京都・奈良、二泊三日　四五名）
17　第二十回県定通総合文化大会（合唱・珠算・書道・絵画・被服手芸入賞）
24　体育祭（白組優勝）
11・19　関通研英語部会（本校）
12・5　第六回校内展
58・3・13　卒業式（一三七名　男四七名　女九〇名）
4・7　生徒二次募集実施（昭和六十二年度まで続く）
17　入学式（新入二〇九名　他一一八名）
5・28　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
6・14　振興会総会
21　全通研大会（高知）
7・3　県定通体育大会（陸上入賞）
23　夏季宿泊研修（国立赤城青年の家　二泊三日）
10・8　修学旅行（京都・奈良　二泊三日）
9　県定通総合文化大会（合唱・絵画・工芸入賞）
23　バレーボール大会（雨天のため体育祭中止）
26　関通研大会（埼玉）
12・4　第七回校内展
59・1・8　新年朝会（体育館）
3・11　卒業式（一四四名　男五九名　女八五名）
4・15　入学式（新入二一三名　他一〇八名）
5・12　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
6・14　振興会総会
16　県定通野球大会（本校野球部優勝）
7・1　県定通体育大会（バレー女子優勝、陸上・テニス入賞）
20　夏季宿泊研修（栃木県立那須青年の家　二泊三日　六一名）
8・7～18　全国高等学校定時制・通信制体育大会、野球大会出場（野球・バレー女子・テニス・陸上）

9・19　関通研大会（東京）

10・7　県定通総合文化大会（合唱・珠算・絵画・工芸・被服・生活体験発表入賞）

21　バレーボール大会（雨天のため体育祭中止）

28　県定通秋季野球大会（優勝）

11・23　修学旅行（京都・奈良　二泊三日　四五名）

12・9　第八回校内展

60・3・10　卒業式（一〇八名　男四一名　女六七名）

4・14　入学式（新入二二七名　他一一八名）

5・3　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）

6・15　県定通野球大会（優勝）

21　振興会総会

7・7　県定通体育大会（バレー女子優勝、テニス・陸上入賞）

14　定通全国大会出場選手壮行会（野球部・バレー部女子・テニス部女子・陸上部）

19　夏季宿泊研修（国立中央青年の家　三四名）

8・6　全国大会出場（野球部・バレー部女子・テニス部女子・陸上部）

～17

9・19　第三十四回関通研大会（天津小湊「ホテル三日月」において当番校として開催）

～20

10・6　県定通総合文化大会（合唱・珠算・絵画・工芸・被服手芸入賞）

27　県定通秋季野球大会（優勝）

体育祭

11・22　修学旅行（京都・奈良　二泊三日　四四名）

12・8　第九回校内展

61・3・16　卒業式（一〇三名　男二七名　女七六名）

4・13　入学式（新入三〇六名　他一五一名）

26　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）

6・11　全通研大会（東京　国立教育会館）

20　振興会総会

7・6　県定通体育大会（テニス・陸上入賞）

13　全国大会出場選手壮行会（テニス部・陸上部）

19　夏季宿泊研修（国立中央青年の家　九七名）

8・5　全国大会出場（テニス部・陸上部）

10・5　県定通総合文化大会（合唱・絵画・書道・工芸・写真・被服手芸入賞）

26　体育祭

11・1　修学旅行（関西　二泊三日　四三名）

12・7　第十回校内展

62・3・8　卒業式（一一〇名　男二五名　女七五名）
4・19　入学式（新入三四五名　転編入一七三名）
5・23　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
6・19　振興会総会
7・5　県定通体育大会（陸上・バスケット・卓球・テニス入賞）
12　全国大会出場選手壮行会（陸上部・卓球部・テニス部）
17　夏季宿泊研修（栃木県立宇都宮中央青年の家　九七名）（～19日）
8・4　全国大会（陸上部・卓球部・テニス部）
9・17　関通研大会（箱根）
10・4　県定通総合文化大会（珠算・工芸・写真・被服手芸入賞）
25　体育祭（雨天のため体育館で実施）
11・21　修学旅行（関西　二泊三日　二一名）
12・6　校内展
11　一組生保護者会を実施
63・2・7　四組生を囲む会
3・13　卒業式（九〇名　男二九名　女六一名）
4・17　入学式（新入三〇三名　転編入一三二名）
28　内規検討委員会　校務分掌検討委員会（以後、必要に応じて実施）
5・21　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
6・4　セミナーハウス開館式
14　全通研大会（大阪）
28　振興会総会
7・3　県定通体育大会（女子卓球・女子テニス・女子バレー・男子バスケット・陸上入賞）
10　全国大会出場選手壮行会（卓球部・陸上部）
15　夏季宿泊研修（国立磐梯青年の家　一〇九名）
8・9　全国大会出場（卓球部・陸上部・男子砲丸投げで二位入賞）
10・2　県定通総合文化大会（書道・絵画・工芸・被服手芸・珠算入賞）
11・11　修学旅行（金沢・福井　二泊三日　三八名）
27　校内展
元・2・5　四組生を囲む会（ドッヂボール大会）
3・12　卒業式（九四名　男三一名　女六三名）
4・16　入学式（新入三〇六名　転編入一四六名）
5・20　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）

6・13　全通研大会（福山市）
27　振興会総会
7・2　県定通体育大会（陸上・バスケットボール・バレーボール・卓球部入賞）
10　全国大会出場選手壮行会（陸上部・卓球部）
14　夏季宿泊研修（国立赤城青年の家　七八名）
8・8　全国大会（陸上部・卓球部・陸上砲丸投げで、巻田選手優勝）
10・8　県定通総合文化大会（音楽・珠算・写真・工芸・絵画・被服手芸入賞）
11・10　修学旅行（神戸・京都　二泊三日　三七名）
26　校内展
2・2・4　四組生を囲む会
3・11　卒業式（一一一名　男四〇名　女七一名）
4・15　入学式（新入生二八九名　転編入生一六九名）
5・19　一組生宿泊研修（東金青年の家　一泊二日）
6・13　全通研大会（松山）
17　県定通軟式野球大会（優勝）
22　振興会総会
7・1　県定通体育大会（陸上・バスケット・バレー・卓球入賞）
8　全国大会出場選手壮行会（野球部・陸上部・卓球部）
13　夏季宿泊研修（白樺湖亀屋ホテル　八〇名）
8・5～18　全国定通体育大会（野球部・陸上部・卓球部・男子砲丸投げ巻田選手優勝）
6・2　生徒総会
7　県職簿記講座開講式（以後七回実施）
12　第四十三回全国高等学校通信制教育研究会総会並びに研究協議会（鹿児島市）
23～30　第一回定期試験・追試験（二週に渉って年三回実施）
7・2　第三十八回全国高等学校定時制通信制軟式野球大会千葉県大会（優勝）
7　平成三年度通信制振興会総会
第四十回千葉県高等学校定通体育大会（陸上・バレー・バスケット・卓球・サッカー・テニス）
14　県定通体育大会表彰及び全国大会壮行会（優勝　野球部・陸上女子総合・女子八〇〇米・女子四〇〇米リレー　全国大会出場　野

球・陸上・卓球・テニス）

19～21　夏季宿泊研修（菅平　スイスホテル　五八名　二泊三日）

8・5～17　全国高等学校定時制通信制体育大会（東京各競技種目毎にそれぞれの会場で）

9・22　校内生活体験発表会（上位二名が関東地区大会と千葉県大会に出場）

10・7　県定通総合文化大会（珠算・書道・絵画・工芸・被服手芸入賞）

21　体育祭

11・9　修学旅行（宮城・岩手　二泊三日　二一二名）

11　定通新人体育大会（バレー女子・バスケット女子・卓球男女・サッカー・テニス男子参加）

25　第十四回校内展

3・3・10　卒業式（一二七名　男四三名　女八四名）

終業式　卒業生を送る会

4・3　第一回職会運営委員会（以後必要に応じ実施）

4～5　第二次生徒募集（新入七五名・転編入七六名が応募）

6　第二次入学選考会議

8　新任式・始業式・離任式

14　入学式（新入生二七四名　転編入生二〇三名）

18　市原刑務所開講式（以後六回実施）

21　第一回スクーリング（以後月二回程度日曜、月曜、火曜に実施。年間一六回）

27～28　新入生宿泊研修（東金青年の家　参加一〇八名　一泊二日）

10・6　第二十九回千葉県高等学校定時制通信制総合文化大会（於佐原高　金賞　写真・被服手芸入賞　生活体験・書道・工芸・写真・被服手芸）

13　体育祭

11・1　本校通信制課程が教育功労者として県教育委員会より表彰される

1　修学旅行（奈良・京都　二泊三日　二一二名）

9　**創立五十周年記念式典**

10　第五回千葉県定通新人体育大会（優勝　バスケット女子・卓球男子個人）

24　第十五回校内展覧会

4・3・8　平成四年度第一次新入生入学選考（五日間）
15　第三十六回卒業証書授与式（一一三名　男四九名　女八四名）
終業式　卒業生を送る会
17　平成四年度第一次転編入生入学選考（三日間）
23　入学選考会議（第一次分）



第三章　沿革史



第一節　千葉市立千葉高等女学校（昭和十六年～二十三年）……91
第二節　千葉市立女子高等学校（昭和二十三年～二十五年）……100
第三節　千葉県立千葉第三高等学校（昭和二十五年～三十六年）…110
一　全日制課程……110
二　通信教育部……130
第四節　千葉県立千葉東高等学校（昭和三十六年～平成三年）……136
一　全日制課程普通科……136
(一)　「創立三十周年記念誌」より……136
(二)　創立三十周年直前の紛争時代以降……144
二　全日制課程衛生看護科……166
三　通信制課程……194

第一節　千葉市立千葉高等女学校

（昭和十六年～二十三年）

1　創立とその前後の時代的背景

県立千葉東高等学校の前身である千葉市立千葉高等女学校（四年制）の設置案は昭和十五年九月に千葉市議会へ提出されている。この時の市議会は税制改革案や追加更正予算等の問題でかなり紛糾した模様であるが、本議案はほとんど反対もなく議決されている。当時の市議会議事録によると、

市議会議案第五十九号

市立高等女学校設置ノ件

高等女学校令第四条ニ依リ市立高等女学校ヲ設置スルモノトスル

昭和十五年九月十六日提出　九月十九日原案可決

千葉市長　永井準一郎

設置要項

一、校地、校舎

校舎新築完成迄旧市立工業学校ノ敷地建物ヲ仮用スルモノトスル

二、入学資格

尋常小学校ヲ卒業シタルモノ又ハ同等以上ノ学力アルモノ

三、修業年限

四ケ年

四、生徒定員及学級数

定員六百人　十二学級

五、授業料

市内　一人一ケ月　四圓五拾銭

市外　一人一ケ月　五圓五拾銭

六、開校年月日

昭和十六年四月一日

とあり、この段階で設置が本決まりとなった。文部省の認可指令は若干遅れて翌昭和十六年一月十五日に出た。昭和十五年、十六年といえばまさに大戦の危機が切迫して国際的緊張感が日増しに高まっていた重大時局であり、またわが国がいわゆる高度国防国家体制の強化を急ぎつつあった時代であることは周知のとおりである。

ここで当時の日本の時代相を概観する意味でおもな出来事を述べてみると、

昭和十五年九月二十二日　日本軍北部仏印へ進駐

二十七日　日独伊、三国条約（同盟）ベルリ

ンにおいて調印
十月十二日　大政翼賛会発会式、政党解消
十一月十日　宮城外苑で紀元二六〇〇年式典挙行
十二月七日　経済新体制確立要綱決定、企業経済団体再編成
昭和十六年一―二月　第七十六通常議会紛糾、政党不在の国会
四月十三日　日ソ中立条約成立
六月十八日　中華民国々民政府首席、汪精衛氏来朝、東亜新秩序建設に関し主要閣僚と会談
〃二十二日　新情勢（独ソ戦勃発）に対処するため重要国策決定
七月十六日　第二次近衛内閣総辞職
〃十八日　第三次近衛内閣成立
〃二十六日　日本・仏印共同防衛成立、同時に日本軍南部仏印に進駐
〃二十六日　英米両国対日資産凍結
十月十六日　第三次近衛内閣総辞職
〃十八日　東条内閣成立

以上のように平和が遠ざかり、次第に戦争の渕へ傾斜して行く当時の日本の姿が認められる。ことに昭和十五年十二月七日、閣議で経済新体制確立要綱が決定してから東亜共栄圏の確立を目指したいわゆる綜合的計画経済の遂行と、昭和十六年九月、重要産業団体令施行による統合経済の合理的な運営のため官民協力、職分奉公などの趣旨が強調されるようになると反射的に国民生活への締めつけが次第に強まり世の不安と絶望の影は漸く大きく立ちはだかってきたのであった。

また他方では生産力強化を目指してあらゆる手段が講ぜられ、生産工場は昼夜の別なく黒煙を吐きつづけて労働者も資本家もない有様であった。そうした状況下にも拘らず物資の不足はおおい難く、国民生活は次第に窮迫して、いわゆる耐乏生活を余儀なくさせられていったのである。このような時代潮流の中で市立高女は呱々の声を上げようとしていたのである。また当時、県下の学校生活や社会生活の実状がどのようなものであったか、その一端を窺い知るため、千葉毎日新聞（現千葉日報）の記事を二―三引用してみよう。

（昭和十六年一月十八日）　△　木更津高女生外套着用を禁止　▽「剛健の気風を養い銃後学生の本領とする質素の精神を涵養する目的で、木更津高女では三学期から外套着用を自発的に禁止する申し合せを行ない、さすが大和撫子と地元民から激励の声がしきりに上っている……」　△　児童が炭焼製造　▽「君津郡鎌足村矢那小学校では五年生以上

が炭焼製造を実習し村民を驚嘆させている……」

（〃　一月二十一日）　△　花壇が変じて耕地に更生　▽「東金高女の新体制と専ら評判の花壇を利用しての同校の野菜作りは地元民の注目を浴びていた……」

（〃　一月十八日）　△　禁酒禁煙の実行▽「君津郡周南村馬覚青年団支部では、農村新体制は先づ禁酒禁煙の断行からと団員の入営、応召の場合の外は茶話会程度となし、つとめて献金に拍車をかけるよう申し合せ、同地方の話題となっている」

（〃　一月十九日）　△　未亡人紊りに離婚し得ず、軍人遺族に福音　▽「司法省では今回家族制度の醇風美俗を保持するの主旨に立脚し『夫を失いたる妻紊りに離婚し得ず』との民法中改正法律案を今議会に提出することに決定……」

以上どれも時代の厳しさを物語っている。

ともかくこのような歴史的進行の時期に、市立高女の設置案が取り上げられ審議されていったわけであるが、率直にいってよくぞ設立が認可されたものと思うのである。それだけに当時設立の衝に当たられた方々の並々ならぬお骨折りが偲ばれて本当に頭の下がる思いがするのである。

2　千葉市の発展と高女新設を望む声

市立高女設置を望む声はその一～二年前から強い要望として、市民の側から出されていたようである。

あたかも千葉市はその頃、軍都としてあるいは産業都市として大発展の時期にあった。その契機となったのが昭和十年七月の総武本線、お茶の水・千葉間の複線電化開通である。これにより本市は東京と直結していわゆる衛生都市となり、首都圏に入ったのみならず、その地理的位置から帝都防衛の一翼を担うという重要な役割を演ずることとなった。本市には以前から陸軍歩兵学校、鉄道第一連隊等の軍関係機関が存在していたが、昭和十二年に入って新たに陸軍戦車学校が穴川に、昭和十三年には防空学校が小中台に進出して、いよいよ軍都の色彩を深めていった。また昭和十四年には日立航空機その他の主要産業の進出があって軍需景気も大いにあがっていた。こうした時代的社会的情勢に伴い、人口増加現象が目立ちはじめたのは当然である。昭和十年十月、人口わずか五万七、〇〇〇余の地方都市に過ぎなかった本市が、昭和十五年には、九万二、〇六一人、昭和十六年末には九万三、〇〇〇人に達した。こうした急激な人口増加現象は景気高揚には役立ったが、市民生活には良くも悪くも極端な影響を招く結果となったのである。若年層における上級学校進学の競争激化はその一つである。昭和十四年十二月現在、千葉市内に存在した既設

中学校・高等女学校・実業学校（いずれも旧制）は、

県立千葉中学校	（現千葉高校）	千葉市葛城町
〃　千葉高等女学校	（現千葉女子高校）	〃　新宿町
私立千葉淑徳高等女学校	（現明徳高校）	〃　登戸町
〃　関東中学校	（現千葉敬愛高校）	〃　穴川町
県立千葉商業学校	（現千葉商業高校）	〃　松波町
〃　千葉工業学校	（現千葉工業高校）	〃　花園町
私立千葉女子商業学校	（現千葉経済高校）	〃　新宿町
〃　千葉精華高等女学校	（昭和十五年四月廃校）	

の八校であったが、このうち女子関係学校は、千葉高女、淑徳高女および千葉女子商業の三校で（千葉精華高女は昭和十五年廃校）、激増する志願者を受け入れるには余りにも定数が少なかったのである。ことに千葉高女は県下唯一の五年制高女で、毎年志願者が多く競争率は最高であった。この現実は千葉市民に失望と不満をもたらす結果となり、それはやがて高女新設の声にかわっていった。

こうして市民の側から出た高女新設の要望は次第に高まっていったが、これを受けて市内の小学校校長、あるいは市関係有力者等が設置促進の労をとられたものといわれている。一方、当局もこうした強い世論の盛り上がりに応えて、ようやくその意志を固めるに至ったと伝え聞く。

（設置運動に関する陳情、署名、請願等の文書は、議事録あるいは市の保存文書から発見することが出来なかった）

昭和十五年二月二十五日付け千葉毎日新聞（現千葉日報）によれば、

県立千葉高女の入学志願者は年々増加の一途をたどり、昨年は二〇〇名の定員に対して三六七名であったが、本年は更に増加し四〇九名が『窄き門』を目指して押しかけ二・〇四倍の多数に上ったので、地元千葉市内有力者は一学級増加を要望した結果、二十四日の成績発表では定員二〇〇名の外に四八名の合格者を発表して可憐な少女群を喜ばせたが、これでも一・六一倍に相当し依然県下一の入学志願者を有することになるので、入学難緩和策として市立高女一校新設の儀がおこり、県議飯豊幸十郎氏は二十五日午後県庁に高瀬学務部長を訪問、市立高女新設問題につき県庁側の意向を打診した。市側の肚では県の補助金を得て明十六年度から実現を期する計画であるが、市立高女新設には県側も大乗気で、むしろ設立を慫慂している状態であるが、市の要望は補助金の交付にあるので現在のところでは海のものとも山のものとも判明せず、新年度に入ると共に同問題は表面化し市会の協議問題となるものとみられている。

とあり、この間の事情がよく記されている。

3　設置案議決と認可

そうした動きが次第に活発となり、大勢が漸く設置の方向に傾きつつあった時、更に具体的な構想を打ち出しその早期実現に尽力された方々が、当時、市視学であった尾形猛男氏や学務課長斉藤政次郎氏であり、あるいは永井準一郎市長、宮内三郎助役（元千葉市長）等であった。その構想によれば広大な市有地を予め確保し、当初は四年制高女として発足し、やがては家庭科の専門学校ないしは専攻科を設置するという遠大なものであった。また修業年限も五年制か四年制かで、だいぶ論議がかわされたようである。ともかくこうした市当局の姿勢と積極的な努力が実を結んで、市立高女設置の日は意外に早く訪れたのである。

ちょうどこの年（昭和十五年）はいわゆる皇紀二、六〇〇年に当り、各地で盛大な奉祝会が催されて国中が沸きかえっていたが、この年の半ば、梅雨降りしきる六月四日の市議会協議会で、それまでは時局がら支出増大や予算不足等で強い反対論や慎重論によって遮られてきた高女新設案が満場一致の賛成を得たのである。

これはちょうど時を同じくして市議会に提案されていた市税賦課徴収条例や市税独立税新設案等がほぼ承認されるという見通しが立って、市予算にゆとりが生ずるようになったためと思われる。

こうして市立高女設立は決定的となり、それに伴って学校の輪郭も次第に明らかにされていった。この段階で市が示した内容は次のとおりである。

一、定員六〇〇名　（各学年一五〇名宛）

二、第一年度より第一学年一五〇名宛を順次募集し第四年度を以って完成するものとする。

三、第一、二年度は旧工業学校々舎を仮校舎として使用し、第二年度において校舎を新築し、第三年度より新校舎に移転するものとする。

四、新校舎の設備概要（所要経費一八三、四〇〇円）

1、敷地　五、〇〇〇坪

2、教室　一二室（二五〇坪）

3、特別教室　七室（二七〇坪）

講堂

裁縫作法教室

家事教室

理科教室

音楽教室等

4、その他　職員室、応接室、使丁室、図書室

器具室、便所等（一一〇坪）

五、開校年月日　昭和十六年四月一日

六月の市議会協議会で賛成を得た市当局は、早速、県学務課の了解を得た上、正式予算案を市議会に提出した。こ

れが九月十九日の市議会で審議され、ついに原案可決の運びとなったのである。これについて同年九月二十一日付千葉毎日新聞は次のように報じている。

中等学校の入学志願者が激増して試験地獄を現出し『小さい世界』を恐威せしめているが、県もこれを認めて来年度は千葉中並びに千葉高女に学級増加の計画中である。また一般から市立高等女学校新設を要望されていたが、資材や財源難から実現の見込みなしと永井市長も言明していたが、税制改革を機会に財源にゆとりをみせたので漸く実現することになった。その案によると港町の工業学校跡を暫定的の校舎として明年度に三学級一五〇名を募集し、校長、教諭は第一年度は一〇名程度を採用して開校し、第二年度より漸次増加させるもので、校舎に使用される工業学校跡は六学級しか収容できないので第三年度には敷地を物色して新校舎を建設するという段取りである。新設の市立女学校は高等女学校令による四年制で、完成後は十二学級六〇〇人を収容し得るもので、これによって女子中等学校の入学難は相当緩和されることになり試験地獄と親心の苦悩は解消されることであろう。

また文部省の認可は翌昭和十六年一月十五日におりて、ここに千葉市民待望の市立高等女学校が誕生したのである。

4　市立高女発足とその全容

千葉市立千葉高等女学校創立時の内容は当初の構想とは若干の相違があったが、ほぼ同じで次のとおりであった。四年制、定員六〇〇名、一学年は一五〇名の三学級編成であり、所在地は、千葉市港町十九番地（都川大橋際、千葉職業補導所の存在した位置・旧千葉工業学校跡）。ただし昭和十八年度までに総経費二〇万円（起債）をもって別に新校舎を建設する。その計画は次のとおりである。普通教室一二、家事教室、裁縫作法室、理科教室、音楽教室等、特別教室七、修養道場（講堂）、図書室、その他職員室、応接室、使丁室、器具室等。ともかく当初は旧千葉工業学校跡の仮校舎からスタートすることになり、二月には早くも諸般の活動が開始された。またそれより、認可指令のあった翌一月十六日には生徒募集要項が次のように発表されている。

本年度四月　市立高等女学校に入学せしむべき生徒を左の通り募集す

一、第一学年募集人員　一五〇名
一、出願期日　二月一日より二十日まで
一、入学考査期日　三月八日、九日、十日の三日

県下の他の公立中等学校の生徒募集公示は、この三日後一斉に行われた。やがて二月に入り願書受付が始まると、千葉市内は勿論、船橋、市川、佐倉等の近隣都市はじめ遠

く成田、木更津、一の宮等からも応募者が殺到する有様で、当時県内の向学の子女の市立高女にかけた期待がいかに大きなものであったかが窺えるのである。また二月二十四日には県視学、瀧熊之助先生が初代校長に任ぜられたのをはじめ、当時、人格、学識共に抜群の先生方が選ばれて次々に着任し、四月にはほとんどの先生方が顔を揃え、ここに市立高女発足の陣容は整ったのである。

以下は草創期の先生方の顔ぶれである。

校長　漢文　瀧　熊之助
教頭　理科　林　勢　司
教諭　英語　市原　初雄
〃　美術　小川　恒雄
〃　体育　大関　たか
〃　国語　塚本　弥六
〃　理科　吉田さゆり
〃　家庭　外山富美代（新姓　真田）
〃　書道　安塚　正一
〃　家庭　金子　よね（新姓　島田）
〃　家庭　山越チエノ
〃　国語　森　俊雄
〃　家庭　鈴木　利枝（新姓　平山）
事務長　石井　恒之

三月八日から予定通り入学考査が開始されたが、定員一五〇名に対し受験生が二二〇余名の多きに達したため、仮校舎の狭い試験場では全員を収容することが出来ず二回に分けて試験を行うなど係の職員の苦労は容易なものではなかった。この第一回の入学考査に当たって大変興味深いエピソードが一つ残っている。

試験最終日の三月十日のことである。実は同じこの日に地元、千葉市議会では市立高女定員改正の議案が提出され、審議されていたのである。これについては去る二月の願書受付の段階で応募者数の予想以上に多いのをみた市立高女職員が、出来るだけ地域社会の要望を充たそうという主旨から市へ一学級増の申請を行ったことに発したものである。したがって議案内容は「市立高等女学校生徒定員『六〇〇名』を『八〇〇名』に改正し、昭和十六年四月一日からこれを施行するものとす」というもので、もしこれが議決すれば一学年の定員は直ちに一五〇名から二〇〇名となり受験生にとっては大変な朗報となる訳であった。そしてこの議案は同日議決された。あとは文部省の認可をとりつけるだけである。

そこで早速手続きをとり結果を待ったがなかなか返事がない。そもそもこの件ははじめから少し無理があったのであるが、折角ここまでことを運んだ以上なんとか合格発表

の前日までには認可指令が欲しい—みんなそう願っていた。しかしいっこうに連絡がない。そこでやむを得ず合格発表の方法を定員一五〇名（三学級）と二〇〇名（四学級）の二口に分けて待機することにした。

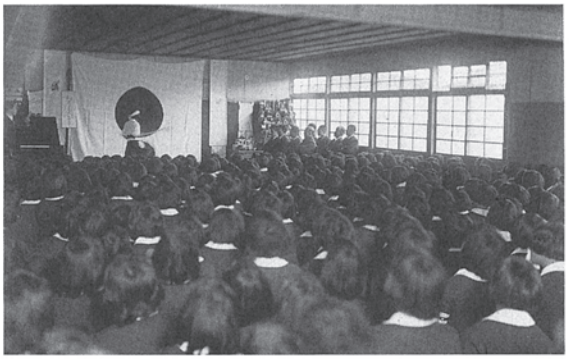
このような状況で発表当日を迎えたのである。発表は午後一時であったが、この日の朝、係の職員の一人、石井恒之先生が直接文部省に赴いて折衝に当たることになり、一同、その結果を待つことにした。発表の時間が刻一刻迫りみんな気が気ではなかったが、直前になって認可の電話連絡が入ったということである。—以上のエピソードは初代教頭、林勢司氏が当時を偲ばれて語って下さった回顧談であり、一部は昭和十六年、千葉市議会議事録から引用した。



開校式祝賀会

こうして幸先よく一学級増を実現した市立高女は全学級とも、在籍五五名の大型学級として受験生の大部分にあたる、二二〇名の入学を許可したのである。

昭和十六年四月八日、桜花咲き匂う都川のほとり新生市立千葉高等女学校の授業は第一期生二二〇名を迎えて開始された。



市立高女での雛祭り（地久節）

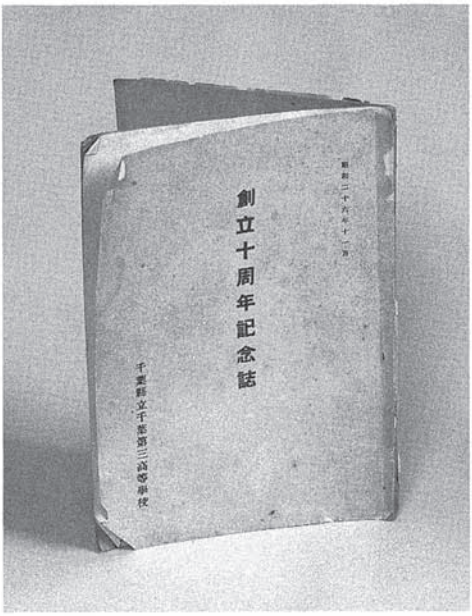
生徒の意気ごみは高く、また真剣そのものであり期待通りのスタートであった。

そして晴れの開校式は五月十五日文部省普通学務局中等教育課長　石丸敬次氏、県学務課長　高瀬五郎氏、千葉市長　永井準一郎氏、千葉市助役　宮内三郎氏（元千葉市長）、千葉市市議会議長　鈴

木亮氏等、多数来賓の臨席を得ておごそかに行われた。

挙式中特に、漢学者で人徳のほまれ高い瀧熊之助校長の挨拶（式辞）は進行するにつれて次第に熱気をおび「……本校の伝統、校風は皆さんの手によって創造されるのである。」と結ばれた時、生徒一同は感動して粛然とし、また不動の覚悟を新たにしたのであった。生徒代表、青木千恵子さん（新姓秋葉）の挨拶（答辞）も若さに溢れ潑剌たる意気を示して満場の好感を呼んだ。

この日以来、市立高女は瀧校長のもと、その訓えである、明朗、真剣、錬磨を軸とし智徳の涵養、人格の陶冶、身体の健強を目ざして中等教育の実を挙げるべく撓みなき努力を継続していったのである。



第二節　千葉市立女子高等学校

（昭和二十三年～二十五年）

1　敷地と建物の変遷

昭和十六年、創立当時の市立千葉高女は、千葉市港町十九番地にあった。この港町の建物は、最初寒川小学校として建てられたもので、せいぜい一二学級程度の小さい校舎で、敷地も狭く数千坪しかなかった。やがて寒川小学校が大きくなって、現在の地に移転した。そのあいた跡を、千葉市ではじめて作った市立高女の仮校舎にあてたのである。はじめ千葉商業、そのあと千葉工業が使い、更に青年学校等がつぎつぎに入り、最後に市の職業補導所が使って、そのあとを払い受けて、市立高女の敷地・建物にあてたわけである。したがって創立当初は、職業補導所がまだ教室の一部を使用している有様であった。

最初の入試は三月上旬に行われたが、三学級一五〇名定員に対し、二二〇～二三〇名応募者があった。できれば、特殊な生徒を除いて全部入れたいという職員の希望が強く、五五人で四学級作りたいということで、一学級増加の申請をし、入試発表直前に許可がおりた。かくて最初の入試では、受験者ほとんどを入学させたのである。受験者もはじめは市内のものが多かったが、やがて郡部（市原、佐倉、船橋方面）からも多く来るようになり、三年くらい立つと競争率もかなり高くなった。

当時の入試は全部口頭試問で、生徒の特性をみることに主眼がおかれた。伊勢神宮や皇居についての質問や、「親をどう思うか」といった考え方をただすものが多かった。中には考え方や性格に問題ありとして、いい成績でも落とされるものもあったという。入試の時教室が不足していたため、午前、午後の受験生をすれ違いにして、会わせないように苦心したこともあった。

三年目に入ると、八教室しかないのに一二学級の生徒が在学することになり、四教室分不足したため、やむを得ず二部授業も行われた。敷地も建物も手狭で、もっと広い所がほしいということと同時に、できれば専門学校くらい併設したいという考えで、現在の葛城中学校のあたりに、五〇〇〇～六〇〇〇坪の土地を求め、そこへ四教室と職員室を作った。後援会や奨学会が中心となり、千葉市と大差のない都市の学校を視察して、それを参考にして建築の予定だったが、いつになっても手がつかず、下三つ上二つの二

階建ての校舎（五教室分）が、ようやく十八年七月ごろに出来上がった。それまでの四か月は、教室不足のため二部授業を余儀なくされた。午前の部が帰るまでげた箱がないので、外に立って待っていなくてはならない。雨の日は、はき物・かさを持ってそばに置いて授業し、出口と入口を別にして入れ替えるわけだが、狭い廊下を六〇〇余人の生徒が出入りする、その混雑ぶりはたいへんなものだった。二、三年生が朝七時ごろから午前中授業、一年生が午後一時ごろから四時過ぎまで交替で授業した。この二部授業は、葛城の校舎が出来上がる十八年七月ごろまで続けられた。七月に葛城の校舎が出来て三年生（二〇〇余人）が引っ越し、ようやく二部授業が解消した。

しかし四年目に入ると、またもや教室が不足し、隣接の高橋アパートを地所ぐるみ買収した。新校舎が順調にできないので、そのアパートを改造し、うなぎの寝床みたいな長いへやを三へや、四教室に繰り入れて、葛城の新校舎と四教室と合わせて八学級をどうやら確保することが出来た。しかし葛城アパートは、明かりがとれなくて薄暗く、また、柱が中にあったりして、授業もやりにくく不便だったらしい。雨天の時など、約二〇〇メートル離れているので、わざわざかさをさして出かけねばならぬ不便さもあった。しかし職員も生徒も、戦時中のたいへんな時であり、わがままは言っていられなかった。かくて四年目の昭和十九年には、港町の校舎と葛城の第二校舎（新校舎）と第三校舎（元葛城アパート）の三か所で、分散授業が行われた。港町に半分（下級生）、葛城台に半分（上級生）と二つに分かれたため、職員の中には午前午後と分けて、掛持ちの人も少なくなかったという。

やがて、昭和十九年七月三十一日、学徒動員で、四年生はわずか三か月余りしかやらず、日立の蘇我工場へ動員された。そのため二年生が繰り上がって新校舎に入り、二、三年生は新校舎、一年生は旧校舎で授業することになった。つづいて、秋になると三年生が動員され、これも日立の蘇我工場で、主として飛行機



葛城町校舎と当時の職員

の部品製作にあたった。やがて港町の仮校舎が工場になって機械がすえ付けられ、一、二年生はすべて新校舎で授業した。

昭和二十年三月三十一日、第一回の卒業式は千葉中学の校舎を借りて厳粛に行われたが、戦争末期のあわただしい毎日であった。二十年七月十五日、港町の第一校舎が戦災で焼け、八月八日には、校長瀧熊之助氏が県立千葉高等女学校長に転任し、県立木更津高等女学校長楠原信一氏が校長に補せられた。そしてやがて終戦。

九月には、学徒動員で勤労奉仕に出ていた四年生が帰ってくる。以来、轟町の新校舎が出来るまで、千葉中学の一部（寄宿舎のあと）を借りて授業した。途中で千葉中の校舎が一部焼けたりしたが、葛城校舎の建築は、軍需向けが多くて材料が不足し、中途でとぎれていた。そこで農業小屋の予算五万円で、葛城校舎の前に収納庫を改造して二教室作り、急場をしのいだ。焼けた学校の復興や新たに中学校を建てなければならなかったので、女学校の増築までは、とても手が回らなかったのである。一学年四学級二〇〇人の生徒が、隔日授業をしたりして、その苦労はたいへんなものであった。二十一年四月、五年制に移管し、翌二十二年十一月には、校長楠原信一氏が千葉市教育民生部長に転出し、代わって教頭親泊朝晋氏が校長となった。二十三年四月、千葉市立女子高等学校と校名変更し、轟町の新校舎に移転したが、それは軍隊の建物で、てっとり早く、トタン屋根の倉庫四棟を改造したものであった。五月に開校式が行われ、やがて新校舎の建築にとりかかったが、二十四年四月には、建築中の新校舎第二棟が、台風のため未完成のまま倒壊した。しかしその年の十一月には、倒壊せる第二棟の改築が成った。かくて翌二十五年四月、県立移管により、千葉県立千葉第三高等学校と校名変更し、県立高校として新しく出発することになるのである。

2　施設・設備

港町の旧校舎は小さな建物があるだけで、戦前はいざという時退避できるように、防空ごうが掘ってあった。葛城校舎の方も、教室だけで手いっぱいで、特別教室や体育館もなかった。理科の実験どころではなかったのである。入学試験は教室を全部使えばどうにかやれたが、卒業式は校庭で立ったまま、あるいは千葉中学の一部を借りて、混乱した時期ではあったが厳粛に行った。図書（蔵書）は多少あったが、終戦時にあやしいものは焼却し、焼却するに惜しいものは穴を掘って埋めておいたが、湿気をくってみん

なだめになってしまった。

3　校外学習

遠　足

最初の二年間は、鵜の森・千城あたりに出かけた。寒げい古やマラソンの代わりに、実益を兼ねた麦踏みをやって、生産に役立たせようと、千葉寺あたりの農家に話したところ、たいへん有難がられた。それからヒントを得て、遠足を兼ねて検見川農場（現東大グラウンド跡）へ草抜きに頼まれて行ったこともあった。最初の入試のあと、港町まで父兄を連れて来て、校舎や授業を見せるつもりで、院内町の川島製作所に頼んで、机や椅子を運び込む予定だったが、約束に反して机が来ない。けっきょく授業ができず、急きょ鵜の森へ遠足に変更したこともあった。十八年五月ごろ、体力測定があり、二キロの砂をリュックに背負って、港町から津田沼小学校まで、三里半の行軍をしたこともある。朝早く出かけて夕方帰る一日がかりのきつい全校訓練であったが、途中でへたばった生徒はなかった。

マラソン

寒げい古は、全校マラソンを三週間くらい連続してやった。校庭の外を朝の始業前に走るのだが、遊び半分ではなく本格的な鍛練であった。不平など言ったら、一日中座らせられてしまうほどきびしいもので、一時間目など疲れて授業にならないこともあったという。

武　道

戦時中、なぎなたはよくやった。女性で当時二七、八歳の若い小沢先生が指導された。

学芸会

たいしたことはできなかったが、三月の地久節の日、ひな祭りを兼ねて、演劇や音楽会など多少はあったようだ。戦後、佐野先生が中心になり、千葉中学の講堂を借りて、歌劇を作曲して音楽会などやったこともある。後にヨーロッパに留学し、歌手になって社会的にも名を成した今道（旧姓川口）絹代さんなども、このころ活躍した生徒のひとりであった。

運動会

体育競技的なものが中心で、クラス対抗・学年対抗で行われた。食糧難時代であったから、食糧豊かな家庭の元気のある人が多く選手に選ばれた。小規模ではあるが、質実な内容のものであった。

修学旅行

戦時中は食糧増産や勤労奉仕などで、修学旅行どころで

はなかった。戦後ようやく復活の機運が盛りあがり、父兄からアンケートを取ってみたところ、よその学校もやっているので、子供はやりたくて親にねだり、父兄の大多数が実施することに賛成し、職員の大勢も同意見であった。しかし不賛成の意見をみると、生活の苦しみを訴えて、今実施するのは無理だと切々と書いてあるものもあり、当時の校長楠原信一氏は、子供にせがまれて親はむりに賛成しているが、これが親の本当の姿だと考えて許可しなかった。しかし、昭和二十四年から復活した。最初は市立女子高校の三回生が三年の時で、秋に伊豆・韮山方面へいもなど背負っての一泊旅行であった。

4　生徒会活動

昭和二十四年四月以前には、生徒会はなかった。終戦後、民主主義の時代になり、ようやく生徒会活動の要望が起こってきた。当時の親泊教頭がそれをうまく指導していた。もともと生徒会の自主的な活動は、アメリカ（占領軍）が作らせたものであり、規約を作り、GHQのブラウンさんが教育の指導に当たって、生徒会の指導をしてくれた。県下の正副会長や顧問が千葉女子高に集められ、その運営方法などについて指導を受けたのである。かくて二十四年四月二十七日、生徒会が発足したが、当時の生徒会の幹部はみな優秀な人たちであった。クラブ活動が行われるようになったのは、生徒会ができてから後である。以後、生徒の自発的な活動がようやく活発化してくるのである。

5　卒業生の進路

戦中戦後の混乱した時期は、経済的にも家庭の貧しいものが多く、進学どころではなかった。進学者は少なく、地方にはまだ工場が少なかったから、大多数が東京方面に就職したのである。

6　戦前の教育

初代校長瀧熊之助氏は、開校以来口ぐせのように言っていた。「この学校を立派に完成するまで、絶対に出ない。きみたちを踏み台にするようなことはしない」と。職員も瀧校長を中心に火の玉のように固まっていたし、その意気込みは大変なものであった。職員数は時間講師も入れて、普通の定数より多かったが、土曜の午後までも授業をやった。教育は何よりも教師を信用しなくてはだめだという考えから、瀧校長みずから方々を遍歴して歩き、自分で信頼できる教員をさがしてきた。校長は自分が気に入ったら、誰

が何と言おうと連れてきて、自分の思いのままに職員組織を固めた。教師の方も、校長が自分を信用し、目をかけて連れてきてくれたのだという気持ちから、しぜん情が移り、おのれを投げうって学校のために仕事した。

校長は部下の家族のことはもちろん、どこの部落のどんな子かなど、生徒の名前や家庭のことまでよく知っていた。教師たるものは、五〇人程度の生徒の名前なら、一週間くらいで覚えなければだめだと、つねづね言っていた。瀧校長は自分の意に添わないと怒ることも怒ったが、いいことはさっそく取りあげて職員会議にはかり、決まればすぐやらせてくれたので、怒られても気持ちよかったし、やる気も起こさせた。

最初の一、二年の間集めた職員は、小学校の経験者だけであった。授業がじょうずだからという理由からだったが、反面自分の学級にたてこもる欠点があった。競争意識が強く、それも、たとえば掃除など、自分の級の区域だけピカピカに磨いて、目立たせようとする傾向があった。

また、教頭みずから半分くらいの職員を連れて、市内の小学校を片端から見て歩き、他校を見学して研修をつんだ。付属小学校を除いて一二の学校があり、二か月に一校くらいの割で見学した。そのせいか、授業に対する巧拙、見方、考え方も、だいぶ変わってきたようであった。

校内では、教頭はどんな授業でも入っていって見て批評した。ことば使いや生徒の姿勢などが主であったが、裁縫や音楽の授業まで批評した。しかし、みんないやがらずによくやったという。

当時の平均持ち時間は二二、三時間、教頭も一二時間、多い時には、修身の時間も入れて一六時間くらい授業したので、生徒の顔はほとんど覚えていたという話である。

瀧校長は漢学者であり、明朗・真剣・錬磨をモットーとしていた。礼法を根幹とした教育をしたいということで、礼ということにやかましかった。

敬礼は三〇度からだをかがめて相手に注目する。最敬礼は四五度。それを職員が見ていて直すのである。また、字を書く時は、三〇センチ机から目を離す。それを、職員が教室をまわって、物差しをもって直したりした。ハチマキはまゆ毛の上一センチのところを、きちんとしめることになっていた。

また、体育の時間の集団訓練はすさまじかった。朝礼の時も、整列・ハチマキのしめ方・訓示など、激しい訓練をくたくたになるまでやった。いっせいにパッと揃ってできないとだめ、ひとりでもおそい人があると、やり直しであ

る。罰として行進をやらされた。そのあとはくたくたに疲れていて、ほとんど授業にならないくらいだった。もちろん今のように、ストーブなど入っていなかったし、窓ガラスがなく寒くても授業したのである。黒くて、からだの色で市立高女の生徒だとわかるくらい、集団訓練は徹底していてみものであった。体操の大関タカさんは、二年目で既に千葉県予選で代表となり、当時の千葉師範の女子部の先生を感心させたほどだった。それくらい、動作・礼法・体育など整然としていて、他校をしり目にかけていたのであった。

こうした瀧校長の教育方針や考え方は、末端まで徹底していたし、立派な考え方を持った人として、瀧校長の名は県下にひびき、信仰的にまで尊敬されていた。一般の気風として、当時の父兄は、瀧校長がえらいから、市立高女に入れて教育してもらうんだという気持ちで、子供を入学させていた。当時千葉高女は五年制だったが、市立高女は四年制であり、四年で早く卒業したいという人は、自分から希望して入ってきたのである。いやいやながらではなく、行きたいから行くんだという気持ちで入ってくるものが多かった。だから、職員も生徒も、四年制でも五年制の学校に比較して劣等感を持ったものなどなかった。実際に、家が豊かでなく、成績のいいすぐれた生徒もたくさん入ってきた。体育や数学の方面で、女高師（現お茶の水女子大）に合格するような優秀な生徒が、何人もいたのである。親も学校を信頼し、生徒もみずから希望して入ってくる以上、びしびし教育されても、強制されたような気は少しも持っていなかったし、それどころか、かえってしあわせになったと、あとでふり返って喜んでいた。

校長は職員に対し、職員は生徒に対して人情が厚かった。瀧校長は漢学者であり話もうまかった。入学式の時、引き受けた生徒は、愛情をもって必ず立派に育てあげてみせると、熱意をこめて話した。その話を聞き、心うたれて父兄は泣いた。また、最初の年の十一月ごろ、出身校の校長と受持ちの先生を呼んで、授業を二時間くらい見てもらい、本校ではこういうふうに教育しているということを実際に知ってもらった。そのあと、二部屋つづきの教室で、小規模な学芸会をやって見せ、生徒の作ったいも料理などを出していっしょに食べ、意思の疎通をはかったという。このように、戦前の教育は、切迫した情勢の中でも、つねにきびしさと愛情とをもって生徒のことを考え、よく行き届いたきめ細かな指導を心がけていたのである。

7　学徒動員

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、日本はハワイの真珠湾に奇襲攻撃を加え、アメリカ・イギリスに宣戦を布告して、太平洋戦争が始まった。

日華戦争から太平洋戦争へと進むに従って、軍事費の膨張はすさまじく、軍需工業は拡大に拡大を重ね、労働力を維持するため、学生や婦人まで工場に動員され、軍需品の生産に当たらなければならなかった。政府は、学徒の年間を通しての常時動員、教職員がこれを率先指導し、勤労管理するなどを強調した。すべて教育実践の一環として位置づけられ、勤労即教育という名目で、事実上、学校教育を破壊していったのである。

一九四三年（昭和十八年）、戦況が悪化すると、在学中の徴兵適齢の学徒は、いっせいに軍隊に動員され、中等学校生徒たちも工場に動員された。動員を免れた在学生も、報国団を結成し、戦時体制の強化にあたった。前同窓会会長永江栄さん所有になる認証書によると、昭和十八年四月六日の日付けで、「報国団第五分団分団長ヲ命ス」とあり、また同年八月二十一日付けの証書には、報国隊長の名前で、「報国隊第二中隊第一小隊分隊長ヲ命ス」と記されている。永江さんは当時まだ二年生であったが、もって学園をおおう戦時色が、いかに濃厚だったかがうかがい知られる。

また既に記したように、昭和十九年七月、四年生（第一回生）が日立の蘇我工場に動員され、つづいて同年十月には、三年生（第二回生）にも動員令が下った。当時三年生であった永江栄さんは、十月十二日、出動生総代として、次のような宣誓文を巻紙に書き、全校生徒・職員の前で朗読して、報国の決意を述べている。

宣　誓

憶ひ出も浅からぬ七月廿七日、四年生一同のお姉様方をお送りしてより此、に三ケ月有餘その間私達女学校生活の最後ともなるであろう机の上の勉強にいそしみながら一日千秋の思ひで出陣の日を待って於りました。その待ちに待った感激深き学徒動員令下り明日から直接生産戦に微力ながらも盡す事が出来るかと思ひますと私達は血湧き肉躍る喜びで一ぱいでございます。其の上笑って護国の防塞となれたのでございます。此の報国精神を範とし敢然増産戦士として出動する覺悟でございます。

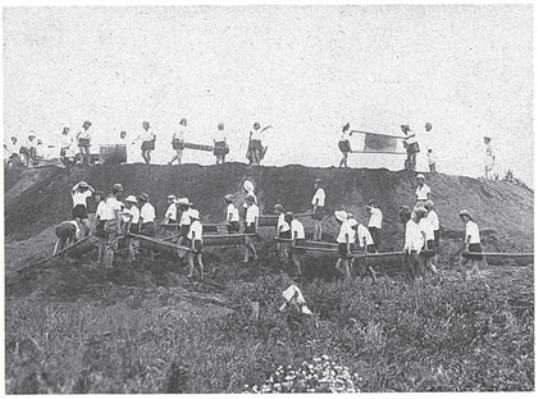
四年生のお姉様達は工場で規律と禮儀を守り皇国女学生として恥づかしからぬ立派な行動を取って居られます。私達も亦市立高女の名譽を汚さぬ様そして四年生のお姉様達に負けずに御奉公致すことを此、に校長先生始め諸先生方にお誓ひ申上げます。

かくて、あらゆる自由な文化活動は停止され、戦争をお

う歌する軍国調一色に塗りつぶされた。銃後にある者は、ひたすら無謀な戦争に熱心に協力するよりほかない状態に置かれ、またそうした教育が行われていたのである。

8　勤労奉仕作業

日本は急速な先制攻撃によって、戦いのはじめは軍部の計画どおりの戦況であったが、やがて戦況が逆転し、戦争が破局に近づくにつれ、日本の国内ではあらゆる生活必需物資が欠乏し、衣食住のすべてが極度の統制を受けていたが、人々は餓死を免れるために、食糧の闇買いに血眼となった。



勤労奉仕作業

本校でも、校地一万坪の八割くらいを使って校庭を耕し、小かぶ・白菜などの野菜を作り、職員生徒に持たせてやったり、市場へ出荷したりした。さながら農業学校並みであったが、何よりも生産しなくてはならなかったし、授業するのがやっとの状態だった。夏休みは農家の手伝いに行った。

こうして学徒動員を免れた一、二年生も、勤労奉仕作業等で授業時間を奪われ、その上、十九年十一月ごろから、たび重なる空襲警報の発令で、そのたびごと待避したり下校したり休校したりで、学園生活はますます破壊されていったのである。

9　戦後の荒廃期

昭和二十年八月十四日、忌まわしい戦争は終わった。しかし、長い間の激しい戦争の犠牲はあまりにも大きかった。戦争末期に悪化していた食糧事情は、戦争直後その極に達し、その他の物資もますます欠乏し、戦災の痛手に悩む国民の生活は、著しい窮乏状態に陥った。

終戦とともに、工場に勤労動員に出ていた上級生は次々に帰ってきたが、校舎が不足し、また食糧増産で授業どころではなかった。生徒はもっぱら作業が多くなり、葛城の敷地を畑にして、麦やさつまいもを作ったりした。また、山武郡の松尾横芝方面の農家へ買出しに行き、生徒に分け

てやってとても喜ばれたが、統制令違反ということで、読売新聞でたたかれた。しかし、法律より生きるためには仕方のないことであった。葛城台のアパート校舎の屋根に上って、とまっているハトをとって食べた宿直の職員がいたというが、それほど食糧難は深刻をきわめ、人々の窮乏は言語に絶していたのである。

戦後しばらくは、こうした荒廃した時代が続いたが、やがて人々は、その戦争の廃墟のあとに、民主主義と平和の日本を建設しはじめた。かくて一九四七年（昭和二十二年）三月、教育基本法が制定され、四月から六・三・三・四制による新学制が発足し、戦後の教育は新しい段階を迎えたのである。

10　戦前の教科書

昭和十三年二月、三省堂から発行され、本校でも創立当時使用していたと思われる「新編女子西洋史」を見ると、「各国各時代の女性が、国家・社会・家庭に貢献した顕著な史実を授け、以て女性の自覚を促し、日本婦人として取るべき態度をも啓発しよう」とする目的をもって編述されていることが、その緒言に明らかにされている。

歴史の教科書では、我が国の使命を述べて日本国民の覚悟をうながし、着々と戦時協力体制を整えていったのである。



戦前の西洋史の教科書

11　戦前の通知表

昭和二十年ごろの通知表をみると、わら半紙半裁程度の粗末な紙きれ一枚に、一学年分の成績と出席状況が簡単に記されている。所見欄がなく、教科科目数は二二科目と非常に多く、評定はすべて秀・優・良・可で記され、判定は何人中特・上・中・下で書かれている。

第三節　千葉県立千葉第三高等学校

（昭和二十五年～三十六年）

一　全日制課程

1　千葉市立女子高等学校から県立千葉第三高等学校へ

昭和二十三年四月、県下七六校の旧制中学校が整理統合されて、六六校の新制高等学校が発足した。うち一四校（本校はこの中の一校）が市立又は町村立の公立高校で、五二校が県立高校であった。しかし、これらは旧制中学校が概ねそのまま新制度によって昇格したものであったので、再検討をしなければならない問題点を多くかかえていた。すなわち、新制高等学校の性格からみて、総合制の採用・男女共学の実施・通学区域の設定等の困難な課題を解決し、一方において高等学校としての内容や施設の充実を図らなければならなかったのである。しかるに、当時の地方財政の状況・動向からみて、これらの高等学校をそのままの姿で維持・発展させることは、極めて困難であることは明白であった。これらの諸情勢の中にあって、連合国軍政部からの勧告もあって（ブラウン氏の教育六原則）、県教育委員会は、県下公立高等学校の再編成を緊要な事業として鋭意それに取り組まなければならなかったのである。

県教育委員会は、昭和二十四年十二月から翌二十五年二月までに開かれた。高等学校再編成審議会の答申を尊重して、学校配置の適正化及び通学区の合理化・学校経営の合理化による県民負担の軽減、高等学校の内容及び施設の充実・定時制教育の普及拡充・男女共学の促進を基本方針とし、総合制・学区制・男女共学及び市町村立高校の県立移管を実施し、高等学校教育全般の内容充実を企図するものとして、県下公立高等学校再編成の具体案を決定したのである。ここに昭和二十五年四月、県下公立高等学校六六校は県立四三校、市立三校に整理統合され、新たに分離校舎一八が誕生したのである。

このような県下公立高等学校の整理統合の嵐の中で、わが千葉市立女子高等学校も廃校か統合かという重大危機に直面したのである。高等学校設置基準、適正規模（生徒数六〇〇名以下は整理統合）、県や市の財政状況、特に千葉市は戦災都市であり、小中学校の校舎建築等その復興に多額の支出を要し、県立高校への移管条件を具備させることは非常に困難なことであった。独立校としての存続と県立

移管を目標として、本校関係者の多方面にわたる運動が展開されたのである。特に昭和二十五年二月二十二日、千葉市臨時市議会開会の当日、職員、生徒、卒業生、父兄の四者代表が合同で、加納市長をはじめ市当局への陳情が行われており、更に三月には、県当局あるいは地元出身県会議員等の方々にも何回か同様の陳情が行われたのである。よくこの危機を乗り切り、独立存続、県立移管を達成したわけであるが、当時の諸川芳雄校長をはじめとして職員、同窓生、父兄その他の関係者の労苦が偲ばれるのである。

次に当時の状況を、毎日新聞、千葉市議会及び県議会議事録によって紹介する。

毎日新聞千葉版　昭二十五年二月二十三日

市立男女高とも存続　千葉市急施市会

千葉市市会全員協議会並びに急施市会は二十二日午後一時から市議会場で開催、市の起債償還を延期する案と、高校再編成につき審議の結果、市立商業高校、市立女子高校問題を次の通り可決した。〈両校とも独立校として存続させる。〈女子高校本館の平屋三〇〇坪を新築しこれを寄附する。〈学校敷地七、七六二坪を寄附。〈寄附金一、八一九万四千五八円を二十五年八月末までに寄附。

千葉市議会議事録から（本件に関する部分）

昭和二十五年二月二十二日、左記事項について急施臨時市議会が開かれた。午後三時四十五分開会

議案第一四七号　寄附をなすについて

議案第一四八号千葉市起債及びその償還について

〈白井辰次議員〉

本案件は急施を要する問題でありますもので、一切の手続を省略していただいて、直ちに採決をお願いいたします。

〈鴻崎豊吉議員〉

出席が少し遅れたので質問致します。市立の商業高等学校と女子高等学校を県に寄附することにつきまして、固より賛成でありますが、学校の設備内容を充実して立派なものとして寄附したいと考えますが、如何にして充実したものといたしますか。

〈楠原信一教育長〉

設備内容を充実したものとして移管することは、まことに立派な御意見で、市の方としても、県からの要求もありますので、出来るかぎりそのように計りまして、議案に記載してあります通りに実施するもので、其の他に於いては大々的に修理を加えまして、恥かしくないものとするに充分な手をつくす考えであります。

〈鴻崎豊吉議員〉

斯く言うものは、唯立派なものとして移管したいと思う他はないのであります。

（「異議なし」と叫ぶものあり）

〈石塚正二議長〉

御異議ないものと認められて、本案は可決確定いたします。

議案第一四七号

寄附を為すについて

本市立商業高等学校及び女子高等学校移管に伴い同校敷地建物工作物設備その他を左記条件を附して寄附するものとす。

昭和二十五年二月二十二日提出（同日原案可決）

千葉市長　加納金助　印

記

一、両校とも独立校として存続すること。

二、計画中の建物（女子高等学校本館平屋三〇〇坪）は新築の上寄附すること。

三、学校敷地中現在借地七、七六二坪は昭和二十六年三月三十一日までに買収の上寄附すること。

但し買収までの借料及び買収費は市において負担すること。

四、寄附金壱千八百拾九万四千五拾八円は昭和二十五年度において金六百拾九万四千五十八円を経常費の歳入歳出決算の差額見込額として昭和二十五年八月末日までに県へ寄附する。残金壱千弐百万円は昭和二十六年度、二十七年度において分納すること。

但し決算終了後差額金に不足のある場合はその不足額を更に負担すること。

注　職員の給与を三年間市が負担するための措置

五、新制高等学校は設置基準（但恒久基準）によって昭和二十六年三月以後設備拡張を要するので、この際所要経費は本市において負担すること。

右二項より五項までの条件を履行しないで県から県立移管を取消されても異議なく直ちに承諾すること。

寄附目録

借地中の土地

所在地　千葉市轟町三番地　坪数　七、七六二　所有者住所東京都新宿区　所有者　大蔵省

建物目録

校　舎　波形鉄板葺木造平家建　七五〇坪五二五万円

便　所　日本瓦葺木造平家建　二〇坪　一〇万円

渡廊下　波形鉄板葺木造平家建　六七坪　二〇万一千円

計　八三七坪五五五万一千円

備品目録

理科用器具掛図標本模型（音叉、レンズ、顕微鏡、昆虫飼育器、テスター、動物解剖標本、鷲剝製、上皿天秤、足踏フイゴなど七十三点）　数学工作用具（大算盤、グラフ黒板、三角定規、コンパス、分度器など十点）　運動用具（拡声器、身体測定機器など六点）　その他図書十冊、机、椅子、黒板、下駄箱、戸棚、金庫、謄写版機、自転車、電話など　合計一、五五三点　金額　弐拾五万参百六拾四円八拾弐銭

県議会関係についてみますと、昭和二十五年三月三十日、三十一日の両日に開かれた臨時県議会において、審議されたわけですが、議事録から関連部分を抜き書きいたします。こ

こでは八つの案件が審議されましたが、第一号議案と第四号議案が県立移管にかかわる事案です。

第一号議案　昭和二十五年度千葉県歳入歳出追加予算

〈土屋留治副議長〉

議案の配布漏れはありませんか、―ありませんければ当局により提出議案に対する説明があります。

〈佐藤秀雄総務部長〉

只今配布に相成りました昭和二十五年度千葉県歳入歳出追加予算その他の議案につきまして、その概要を御説明申し上げます。……昭和二十三、四年度の災害復旧事業の翌年度繰越しの為の予算説明の後……

次に県立高等学校の整備統合を図るために、市川市立国府台高等学校外十校を県立とする外に、定時制高等学校につきましても同じくこれを県立に移管するため、高等学校費において二千六十七万余円、定時制高等学校費において七十五万余円を計上いたしたいのでございます。……

第四号議案　学校財産の取得について

〈林英一郎議長〉

……第一号乃至第八号議案の総括審議を行ないます。別に質疑もないようですから、議案に対する各常任委員会の審議の経過並びに結果を求めます。文教委員長。

〈福原実教副委員長〉

文教委員会の報告を致します。本委員会は昨日（三月二十日）教育長室において開催いたしまして、付託せられました第一号並びに第四号議案について審議致しました。

今県議会に提案されました教育費の総額は、歳入二千二百九十三万五千四百五十六円、歳出二千四百四十三万五千五百二十六円でありまして、主として市町村立高等学校の県立移管に伴う経費であり、その内容も人件費が主で、すべて既存の県立高等学校と同様の基礎をもって算出されておるのであります。

先に軍政部により勧告を受けました教育六原則（昭和二十四年二月九日勧告）に副いまして研究調査の結果、今般提案されたものでありまして、軍務当局より詳細なる説明を受け、活発なる討論の結果、本委員会は原案に対して全員異議なく賛成したのであります。以上御報告申し上げます。

以下各委員会の報告の後

〈堀越英次議員〉

議事進行について動議を提出いたします。今次の臨時県会に提出された議案は事業繰越に伴う追加予算その他緊急止むを得ざる議案のみでありますので、討論を省略し、直ちに採決あらんことを望みます。

（「賛成」と叫ぶものあり）

〈議長〉

只今の堀越議員の動議に御異議ありませんか。

（「異議なし」と叫ぶものあり）

満場御異議ないものと認めまして採決いたします。第一号乃至第八号議案について原案に賛成の方は御起立を願います。

（賛成者起立）

起立満場　よって第一号乃至第八号議案は原案通り可決確定いたしました。（拍手）

午後二時二十二分（三月三十一日）

議会での審議状況は以上のように簡単なようであるが、ここまでに至る経過の中に、いろいろと難かしい問題があったものと思われる。先に記述した県総務部長の説明の中に、市川市立国府台高等学校外一〇校の県立移管とあるが、この内容は次のとおりである。国府台高等学校、千葉市立商業高等学校、千葉市立女子高等学校、東金商業高等学校、御宿家政高等学校、勝浦高等学校、習志野農業高等学校、中正農業高等学校、松戸農商高等学校、八街高等学校、佐倉高等学校の一一校である。このうち県立の独立校として存続したのは、国府台高等学校、千葉商業高等学校、そして本校の三校であり、他の八校は分離校舎として近隣既存の県立高校に統合されたのである。

こうして、千葉市立女子高等学校は、県立移管により校名が千葉第三高等学校と変わるとともに、再編成の基本方針に従い、男女共学校に生れ変わり、再出発をすることになったのである。

2　施設設備

校舎建築等

昭和四十六年度、校舎の全面改築が一応の完成をみるとともに、分厚いトタン葺きの平家建て、長々と続く鰻の寝床のような旧日の校舎の面影は跡形もなく消え去ってしまった。母校の発展を喜ぶ卒業生も、なくなってしまった〝わが学び舎〟にさびしさを隠せないようである。県立移管のころから昭和三十五年までの旧校舎建築のあとをたどり、昔を偲んでみたいと思う。

千葉第三高等学校に名は変わっても、校舎はもちろんそのまま市立女子高のもの、前項で述べられているように軍用倉庫を改築したもので、一〇〇メートルにも及ぼうという長い平家が三棟並んでいた。屋根は黒い波形鉄板、柱は二度のお勤めで外から板を張って補強、窓にはガラスのないところが相当あった。ガラスには全て盗難よけに「千三高」の名入れ、床には穴があいており、釘の頭が出ているので上を向いて歩くことは不可能であったとのこと。電気工事と水道工事の完了したのが昭和二十三年三月六日、それ以前は職員室兼事務室に一ケ所しか電気が引いてなかった。以下年度を追って建築のあとをたどる。

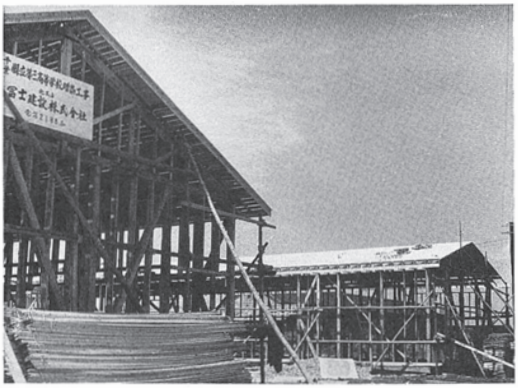
昭和二十五年七月十三日、本館建築促進運動を起こす。

これは県立移管について市の公約で、三〇〇坪の本館を新築の上県に寄附することになっていたが、放任しておいてはいつになるかわからないということで、PTAの組織を改めて役員を大増員して陳情団を作り、県や市当局に陳情を繰り返した。その結果、八月十五日、本館建築予算約五〇〇万円が競輪収入により充当され、その経費として市議会で可決された。

昭和二十六年三月三十日、本館建築着工。九月一日、新築本館竣工（小講堂、校長室、事務室、職員室、小使室、研究室兼会議室、便所、二六一坪　四五〇万円）。バラック建て三棟に対比すれば一応堂々たるもので、先生方や生徒一同大変な喜びようだったそうである。後に紹介するが、この年には運動場の整地作業が行われ、両者の竣工と兼ねて創立十周年記念行事が開催された。

昭和二十七年四月二十二日、正面玄関前庭に植樹実施。現在玄関真正面にある立派な松の木がそうである。五月一日、理科教室棟増築運動を起こし県当局に陳情を行う。新築本館はできたが、生徒が授業を受ける教室がいかにもみすぼらし過ぎる。さればといって、本館建築を行ったばかりで、現に使用している教室を直ちに改築というわけにはいかなかったので、理科教育の振興という旗標のもとに、在学中に全生徒が勉強に使える木の香新しい特別教室をということであった。これも努力が実って、十二月二十二日、理科室棟建築着工。翌二十八年三月二十日、同竣工（木造洋瓦葺き平家、物理化学準備室、化学教室、物理教室、地学生物準備室、地学教室、生物教室　一四〇坪　四五〇万円）。

昭和二十八年度から千葉市の人口増加とともに本校入学志願者が激増し、市内中学校関係の方々の猛烈な運動があって、学級増が行われ一学年七学級となった。三年後には都合三学級増加することになるので、それを見越して六月に再度校舎増築運動が起こされた。県教育委員七名が来校されて、視察、懇談が行われ、



校舎次々に増築される

一挙に二棟増築の特別措置がとられる方向に事が運んだのである。

昭和二十九年二月二十四日、右の二棟の建築着工、六月七日竣工、新築家庭科教室棟（第三棟の並び、木造平家鉄板スレート葺き、被服室、食物室、洗濯室、準備室等　一〇〇坪）普通教室五教室（木造平家原型スレート葺き　一二二坪）両者計　二二二坪、六五〇万円。この工事と同時に、男子生徒の増加から武道場を整備するということで、二月に小講堂で柔剣道ができるようにするため床面の改装が行われた。更にこの年には、昭和二十三年建築のバラック棟のうち、特に第一棟（最も細長い校舎）の腐朽化が甚しくなり、使用に耐えられないようになって来たので、五月に改築運動が起こされた。これも年次計画で逐次改築することが決定され、十二月十五日着工。

昭和三十年四月八日第一棟改築工事竣工（普通教室一〇、更衣室二、出入口四、通信教育部職員室三五〇坪、四五〇万円）。この年から全校二二学級となり、一、〇〇〇余名を同時に収容できる講堂兼体育館がなければどうにもならなくなってきたのである。入学式、卒業式などの式典、講演会、音楽会などの文化的行事も、更には雨天体育、バスケット、柔剣道など多方面に利用できる建物が緊要になってきたわけである。これにはしばらくの時日を要した。

昭和三十二年四月三十日、体育館兼講堂新築着工。八月三十一日、同竣工（バスケットボールコート一面分、体育教官室、体育器具庫、ステージ、二階観覧用部分、二一七坪　八〇〇万円）。

昭和三十三年二月には自転車置場が新設された。

昭和三十四年二月二十日には年次計画にもとづき、第二棟の改築工事が竣工した。（普通教室五教室、図書館一五〇坪）七月十日増築印刷室、応接室落成。九月七日、運動クラブ部室落成（理科室棟と体育館の間）

昭和三十五年十一月十九日、第三棟改築竣工（第二体育館柔剣道用、美術室、音楽室　一四〇坪）。

以上のように、年を追って校舎は整備されてきたとはいうものの、恵まれていたとはとてもいうことのできない環境の中で、大勢の同窓生たちが勉学にいそしんできたのである。

運動場の整備

市立高等女学校時代の項に述べられているように、本校が葛城町の校舎を新設の市立第三中学校（現葛城中学）に譲り、現在の轟町の地に移転して来たのは、終戦後まだ間もない昭和二十三年の四月十七日であった。この日全校の

女子生徒はモンペ姿で、それぞれ机や椅子、戸棚などをたずさえて、はるばる歩いて引越して来たそうである。この轟町の七、七六二坪（二万五六〇〇平方米余……後に拡張されて一万余坪、三万三八〇〇平方米余になる）の敷地は、当時の五〇〇名足らずの生徒数からみると広大な土地であった。千葉市の中心街からはいささか離れてはいるが、理想の学園建設を企図し、一大決意をもって移転して来たものと存念される。しかし、初めて見た校舎、校地のあまりのひどさに、生徒たちは新しい土地に移るという期待が大きかっただけに、がっかりさせられたようである。この敷地は、戦時中の陸軍省の陸軍被服倉庫の跡で、校庭といっても庭ではなく、入口といっても門柱が二本立っているだけ、境界線もはっきりせず、校庭の真中を市民は勿論、荷馬車が通り抜け、夏草の中を窓際をかすめて、アイスキャンデー屋が通るというような状況であった。軍施設であったので、空襲に備えた塹壕もそのまま、鉄棒の突き出た赤レンガとコンクリート造りの倉庫の土台の残骸、松の木と雑草の生い繁る土手とさつま芋畑。これらを取り片付けて簡単に地ならしをしたものであるから、運動場は高低、凹凸のひどい砂利だらけのものであった。体育の時間には整地作業、全校朝礼の後には必ず石拾いがあった。昭和二十六年、本館の新築工事と並行して、大々的な校庭の整地作業が計画実施された。この運動場造成の事業が、土建業者河瀬組の数名の労務者の助勢と、どうしても手に負えない巨大なコンクリートの塊（軍建造物の土台）除去のための県開拓公社のブルドーザーの応援を除けば、全く全校職員と生徒達の汗と血のにじむ努力によってなし遂げられたことは、現在の世道人心では至難の業であろうと思われる。当時の教務（学校）日誌によると、整地作業は、七月二十六日から九月十八日まで、八月十三、十四、十五日のお盆の日、豪雨の日、特別行事のある日を除いて、延べ四八日間、職員生徒の作業割当計画にもとづいて実施されている。

七月二十六日　木曜　晴　整地作業開始　河瀬組三名　一ノ一、一ノ二、二ノ四、出席四十四名　監督　池内　松本隆教官

七月二十七日　金曜　晴　河瀬組二名、二ノ一、二ノ四、出席四十八名、監督　愛敬　早崎　松本隆教官

七月二十八日　土曜　晴　河瀬組監督二名、土工七名、一ノ四、三ノ二、監督　山崎　早崎　松本隆教官

……

八月二日　木曜　晴　整地作業（本日より編成替）　一ノ二、三ノ五、職員　朝比奈　大河原　石田順、能率よく上る

河瀬組監督二名、土工六名

……

八月十日　金曜　晴　一ノ一、三ノ五、河瀬組監督一名、土工六名、職員　石田順　安塚　本日の気温三十五度、作業困難を極める。

……

八月二十四日　金曜　曇後晴　三ノ一、三ノ三、一ノ二、職員　石田誠　麻生　早崎　河瀬組監督二名、土工七名、県土木課伊藤氏整地作業にブルドーザー使用の件につき電話あり。

……

八月二十七日　月曜　晴　一年五十名　二年十名　三年十七名、職員　大河原　兵藤　早崎　河瀬組監督一名、開拓公社のブルドーザー来り作業す。威力を発揮す、県土木技師伊藤氏来校し種々助言を与えらる。

八月二十八日　火曜　晴後雨　生徒八十五名　割当日に欠席せし者、職員　綱島　鎌滝　佐々木、ブルドーザー活躍す

……

九月十三日　木曜　雨　整地作業二年女子は中止、二年男子全クラス雨の中を実施

……

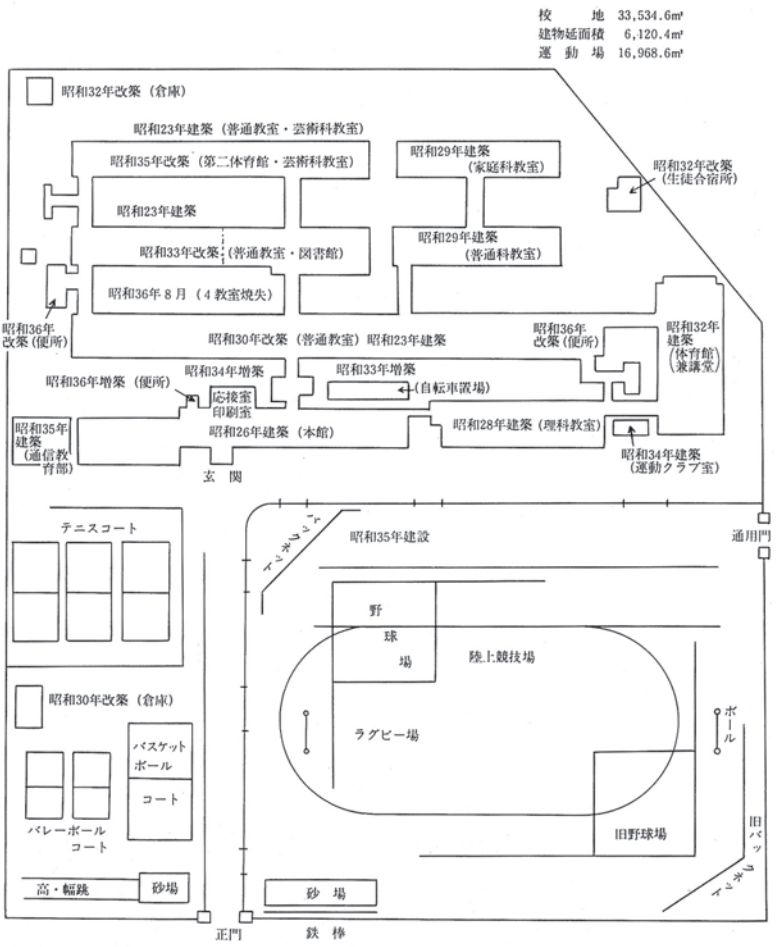
九月十八日　火曜　曇　男子生徒全員整地作業　作業組の女子生徒も除草、清掃に従事す。

この日で一応作業計画終了

当時の教頭沢田繁二先生の克明な記録のうちから、その一部分を抜き書きしたわけであるが、連日このような記述がなされている。病をおして出席し、叱られる生徒、病気の生徒にかわって参加する母親あり、先生方もみな土方姿。男子生徒は鶴嘴をふるい、もっこをかつぎ、女子生徒はリヤカーを引っ張り、担架をになう。酷暑の炎天下汗と土にまみれて、高所を削って穴や凹地（防空壕や塹壕跡）を埋めてならし、砂利、石は拾い集めて処理する（集められた砂利、石は大変な山をなし、後に骨材として土建業者に売却するほどであった）という整地作業が延々と続けられた。全く先生方と生徒達の母校愛に燃える勤労奉仕によって、漸く運動場らしい運動場ができあがったのである。運動場には、二〇〇米トラック、一〇〇米直線コース、野球場（ホームベースは東南隅三幸寿し側）、バスケットボールコート、バレーボールコートが作られた。九月二十二日にはこの完成を祝って、グラウンド開きの小運動会が催され、学年対抗の陸上競技、テニス、バレーボール、バスケットボールの試合が終日賑やかに行われた。自分たちの手で作り上げられたグラウンドでの運動会である。生徒たちの喜びと感慨は一入だったことであろう。

翌、昭和二十七年四月、テニスコートが一面増設されて二面となった。更に下って、昭和三十年の七月から九月に

かけて、第二次校庭整地作業が行われ、第一グラウンド（トラック部分）が拡張されるとともに、野球のバックネット（東南隅）が新設された。同時にテニスコート、バスケットボールコート各一面が増設された。



校地校舎全図

昭和三十三年には正門から入ってすぐ右側に鉄棒と砂場、左側に幅跳、高跳の助走路と砂場が作られた。翌三十五年には、バックネットの改築にあたり、近隣の民家からの苦情申し出（ファウルボールが飛んで来て困る）もあって、現在の玄関そばに場所を移して新設された。なお、大谷石造の正門は、昭和二十五年三月に卒業記念として寄贈されたものである。かくして、一応整備された校庭の状況に近づいてきたのである。

3　創立十周年記念行事

昭和二十六年、本館管理棟の新築落成、運動場造成事業の竣功をみるにあたり、その祝いも兼ねて創立十周年記念行事が実施されることになった。六月七日、八日、九日と記念行事計画について慎重な審議、検討が行われ、多彩な催物の実施計画が立案された。次いで六月二十八日記念音楽会の会場には県教育会館ホールがあてられることになり、その際新たに作られた校歌、応援歌の披露を行うとともに、第一線の音楽家を招いて記念演奏会を開催することになった。また、七月十二日には記念バザーについての職員生徒の連絡協議会が開かれた。記念式典と同時に文化祭が行われることになったので、生徒側も生徒会本部〈当時、会長平方（加藤）一枝、副会長武藤勇、書記積田（八幡）和子、房枝　功、会計尾身（青野）泰子、藤沢光章の各氏〉を中心に、各クラブ、委員会を通じて全面的に協力、参加することになった。更に九月八日ＰＴＡ、同窓会、学校側三者合同の実行委員会が図書室に於いて開かれ、準備が整えられたのである。

十月六日　創立十周年記念大運動会

快晴の空の下、全員七時半に集合し直ちに準備に入り、八時四十五分入場行進開始、開会式、生徒代表宣誓、合同体操が行われ競技に入った。紅白対抗戦で各種競技が展開され、応援合戦も華やかに行われた。呼びものはクラス対抗の仮装行列で、それぞれ工夫を凝らした扮装や奇抜なアイデアは観衆を大いに喜び沸かせ、特別招待参加の翠幼稚園児の可愛らしいダンスが花をそえた。また、小講堂を利用して開かれた食堂では、おそば、みつ豆その他の軽食が提供され、大変な賑わいで好評であった。多数の来賓、父兄の方々にも御参加をいただき、天候にも恵まれて盛況を極めた。



十周年記念大運動会

十一月二日　創立十周年、本館落成、運動場竣功記念式典

式典当日、空はどんよりと曇り今にも降り出しそうな天

候であったが、記念式典は小講堂を会場とし、定刻午前十時に開会、厳粛のうちにも盛大に挙行された。衆議院議員多田勇氏、県知事柴田等氏、県議会議員鈴木長治氏。県教育委員会からは委員長長戸路政司氏、委員時田米蔵、桜井茂尚の各氏、その他県庁関係の方々、市からは市長宮内三朗氏、教育委員長尾形猛男氏、教育長楠原信一氏、市議会議員山本秀一氏など、来賓百五十余名の方々の御臨席を仰ぎ、祝辞を賜わるという盛大さであった。



十周年記念音楽コンクール

十一月三日　記念祭　第二日

展示・発表会の部

本校としては第二回目の文化祭であったが、生徒会本部を中心に自主的、積極的に活動し研究を積み重ね、顧問の先生方の適切な指導助言もあって、恵まれない施設・設備のなかにありながら、極めて密度の濃い展示発表会が行われたのである。

主なもの、化学・電気・天気クラブ（水飴の製造工程、カリ化合物の生産と用途、イオン交換分離法の研究等）、生物クラブ（人体の解剖学的研究、蒸散作用の研究、自作植物標本展示、投影顕微鏡映写等）、社会クラブ（世界服装史、千葉市商店街、郷土の考古学研究等）、新聞委員会（報道写真展、新聞のできるまで）、文学クラブ（記念誌「蠟人形」発刊）、家政、被服、手芸クラブ（家計の比較研究、和・洋裁作品、刺しゅう、人形等）、茶・華道クラブ（点前、生花）、書道、美術クラブ（展覧会）、英語クラブ（小講堂において英語劇「ジャン・バル・ジャン」を上演）いずれも好評であった。また、家庭科教室を中心に行われたバザーも大変な賑いであったようである。

コンクールの部

近隣の中学校一一校を招待、生徒一、一六九名が参加して席書大会、音楽コンクール（於小講堂）、図画コンクール（本校周辺で写生大会）が開催された。書道の部審査委員長千葉大学教授浅見喜舟氏、音楽の部・千葉大学教授石黒一郎氏、図画の部・東京教育大学教授三苫正雄氏、この催しは歴史の浅い新設の高校として、近隣の中学への本校紹

介・PRも兼ねていたようである。

十一月四日　記念祭　第三日

音楽・演劇発表会が県教育会館において、午前中本校生徒対象、午後は一般人を対象に開催され、盛会を極めた。

音楽会

音楽クラブ員を中心とする合唱演奏、新作校歌、応援歌（第一、第二）の披露が行われた。校歌、応援歌とも作詩は、国文学に造詣の深い当時の教頭沢田繁二先生（元千葉高校長）が手がけられた。校歌については、歌人兵藤昌男先生に校閲をいただき、勅使川原安芸子先生（当時音楽担当）の母校武蔵野音楽大学教授石黒修三先生が曲をつけられたのである。応援歌第一番「芙蓉の峰に雲湧きて」は、陸軍幼年学校で使われた勇壮な行進曲をとり入れたものであり、第二番の「劫火しきりに襲い来て……」の曲は、旧制第七（鹿児島）高等学校寮歌からとり、「集いて挙る一千余」は、「集いて挙る七百余」であった。本校の発展がしのばれる。

記念演奏会

出演者　川口絹代氏（本校高女第四回　昭和二十三年卒、東京音楽学校卒、声楽）、塚本紀子氏（同高校第三回　昭和二十六年卒、国立音楽大学在学中、声楽）、大賀典雄氏（東京芸大出　声楽）、鈴木秀太郎氏（毎日新聞音楽コンクールヴァイオリン部門　第一位特別大賞受賞者）、井内澄子（東京芸大出　ピアノ伴奏）。当時の音楽界の第一線で活躍されていた方々で、その素晴らしい演奏は聴衆に深い感動を与えた。

演劇発表

堀江士郎作「女の家族」を上演、スタッフ、キャストのチームワークも良く極めて好評であった。これは後に同年十二月二日の県中央発表会において、知事賞を受賞、主演の茂古沼美子さんが個人演技賞を受けている。

同窓会総会

当日別に、本校小講堂において一一〇余名の卒業生が参集し、同窓会総会が開かれた。本記念事業については募金運動等を通じて、積極的な御協力を頂いた。

こうして、盛会裡に記念行事が行われたわけであるが、諸川芳雄校長のもと「発展途上のわが三高」を合い言葉に、成長、発展する本校の基礎が固められたのである。

4　男女共学の実施

六・三・三制の新教育制度の実施にあたっては、連合国軍政部の教育担当者からの強力な指導が行われた。中でも

男女共学制の実施は全く画期的なことであった。従来の日本の教育においては、だいたい小学校四年ごろから男女別学とするのが当然のならわしであった。それが小学校はもちろん、中学、高校、大学にいたるまで、男女共学が推し進められることになったのである。なお、当時の指導では、男女共学とは、同一教師のもとに、男女生徒が同一の教育課程により、何らの差別的な待遇を受けずに学習することであり、同一校内での分離教育を行うのはそうでないことが強調されている。

本校でも県立移管、千葉第三高等学校となるとともに、男女共学制を採ることになり、早速昭和二十五年度新入生二五三名のうちに、男子生徒六九名が入学してきた。全校生徒数六一二名のうちの六九名で、男子諸君はさぞかし心細く、戸惑ったことであろうと思われる。それ以来、次第に男子生徒の入学数が増加し、昭和三十一年度、三十二年度には男子の数が女子を超え、三十三年度から三十七年度までは女子が多く、三十八年度以降は男子の入学者がずっと女子を上回って現在にいたっている。

男女別学、男尊女卑の分離教育から、突如として男女が机を並べて学習するという、コペルニクス的転回を遂げるわけだから、実施当初は教育を行う側にも受ける側にも、いろいろな戸惑いや問題が起こってきたのは当然のことであり、当時様々な論議がなされた。特に男女共学の短所、長所ということが論議されたが、次のようなことがあげられている。

長所としては

①異性に対する正しい理解と認識を得やすい。

②女生徒に進取の気風が出て来て、卑屈になりやすいところが除去される。

③両性相互の間で、よい意味での競争心が呼び起される。

④男生徒の礼儀作法や躾、たしなみが向上する。

⑤同性愛的な心理状態におち入るようなことがなくなる。

短所としては

①当初は心の平静さを失い、ともすれば見栄をはり過ぎる傾向がでる。

②男生徒が軟弱になり、去勢されたようになる。反面、女性が男性化し行動が粗野、乱暴になる。

③男女の能力差、学力差が問題になる。

④教育課程の組み方に充分留意しないと、女生徒に過重負担になりやすい。

現在からみるとあまり当を得ていないような点もあるが、本校においてもいろいろと論議されたのである。男尊女卑

の風潮、社会通念の抜け切らない、また、若い男女の交際を危険視するような社会一般の状況から、一歩校門の外に出ると、ことさら別行動を取らなければならないような社会の人々の目は矯正されなければならないとか、男女の学力差については、従来の女子教育が男子に劣る教育しかしていなかった事実があったこと（女学校の方が中学校より学習内容の程度が低かった）を忘れて、心配しているのではないかなど。しかし、特に問題となり心配していた事は、男生徒が軟弱化するという点であった。本校のように、元女学校で大勢の女生徒の中に少数の男生徒が入ってくる場合、男子は容易なことではその環境に適応し得ないので、このような傾向が倍加されて、ひ弱で女性的な男子となり、剛健・闊達な男性の特質が失われてしまうのではないかと、当時の先生方は随分心配された。男子にふさわしい運動クラブを多数設置し、盛んにすることによって、この問題を克服する重要な手立にしようと考えて、多大の努力がはらわれた。特にラグビー、剣道などが盛んになり（ラグビーは県内高校での創始校であった）、県内優勝、関東大会、全国大会にもしばしば出場するほどになった。

家庭的な温かさと親しみの中に、互いに理解し合い、男女協力の上に、社会の発展と福祉に貢献することができるような素地を培う。新制高校発足当初の、男女共学の基本方針が受け継がれ、校歌にもあるように、男子は「をとこさび」し、女子は「をとめさび」して、男女共学の長所を発揮しようということが、本校の一つの目標となっているのである。

5　生徒会活動

本校における生徒会の発足は、新制の市立女子高等学校となってから一年間の準備期間を置いて、昭和二十四年四月二十七日であった（前述）。教育課程上、今まで課外といわれた活動が、特別教育活動という名のもとに、教科の学習と並んで重要な教育的価値をもつとされるようになった。特別教育活動は、教科の学習を補うとともに、それを発展させて個性を伸張させ市民的教養を身につけさせるものであるということで、新制高等学校を全人的教育の場とするため、大きく取り上げられるようになったのである。具体的には生徒会本部、生徒評議会、委員会、クラブ等の活動である。生徒が自律的に社会的な活動を計画し実行していくことは、為すことによって学ぶという、当時の新しい教育原理が最も良く展開される場として重視されたのである。生徒会会則を制定し、そのもとに行動する態度を養うこと

は、法治国家の市民となる準備であり、生徒達が学校の問題を自分達の問題として、教師の指導のもとに、より良い解決を求めて協力し努力することは、民主国家の良き形成者となるために、極めて有益であると考えられたのである。

当時の連合国軍政部の教育担当者は、生徒会活動の充実にも大いに力をそそぎ、学校内においても職員生徒とともに、その発展のため大いに努力した。昭和二十五年六月二十七、八日の両日、関東軍政部教育課の顧問マクマナス氏の指導のもとに、第二回生徒会の組織運営に関する研究集会が開催された。県下各高等学校の生徒会代表、顧問教師、校長等が参加し、当時の千葉第二高等学校図書館で行われた。本校からは生徒会長小林（間島）正枝さん、副会長平方（加藤）一枝さん、顧問山崎一郎先生が参加された。会は全体会議と分科会に分かれての熱心な研究討議が行われた。当時生徒会は発足したばかりで、一行事ごとに生徒会本部や顧問のはらわれる労苦は並大抵のものではなかったのである。したがって、各高校ともいろいろな問題をかかえて悩んでおり、生徒会活動

昭和二十六年度生徒会予算（五月二十二日総会承認）

委員会及び倶楽部	予算額（円）	倶楽部	予算額（円）
総務	四五、〇〇〇 〇〇	化学	七、四二五 —
本部	二〇、〇〇〇 〇〇	英語	二、八一一 六〇
予備	一四、四四七 三〇	文学	一、九二〇 六〇
小計	七九、四四七 三〇	書道	四、七五二 —
常置委員会		生物	七、四三四 九〇
放送	五、二九六 五〇	社会	八二一 七〇
図書	五七、九七四 三五	電気	七、六四二 八〇
厚生	三四一 五五	天気	五、三四六 —
美化	九、六二七 七五	小計	七七、九八二 三〇
新聞	二七、九五七 六〇	運動倶楽部	
保健	四〇、〇九五 —	卓球	一七、〇七七 五〇
小計	一四一、二九二 七五	陸競	一二、四三四 四〇
文化倶楽部		野球	四七、五二〇 —
音楽	三、九六〇 —	排球	一六、九五三 七五
美術	六、〇三九 —	篭球	一二、五二三 五〇
映演	一二、四七四 —	庭球	二〇、四一三 八〇
茶華	二、九五〇 二〇	ソフト	一一、五八三 —
家政	三、六九七 六五	山岳	六、二八六 五〇
被服	二、二九一 八五	小計	一四四、七九二 四五
手芸	三、四六五 —	総計	四四三、五一四 八〇
珠算	四、九五〇 —		

に関する研究も盛んになりつつあった。そういう時であったので、研究討議は非常に活発に行われ、マクナマス氏の適切な指導もあって、集会は大変に熱のこもったものとなった。小林さんは全体会議の司会者の一人に選ばれて大いに活躍され、会の運営にも積極的に協力されて貴重な経験を得られたとのことである。このような会への参加が生徒会の基礎固めに功を奏し、生徒会活動発展の飛躍台となったのである。次々に計画実施される新しい学校行事にも、また既存のクラブ、委員会活動等にも生徒会が大きな力を発揮することになるのである。先に述べたように、昭和二十六年夏の運動場整地作業にも生徒達の自主性が大いに発揮され、創立十周年記念行事にも生徒会を挙げて協力し多大の成果をおさめたのである。

その後、在校生の数が増加し男子生徒も増え、生徒会活動が活発化してくるにつれ、創立時に作成された生徒会会則では、運営上に支障を来たす不備な点も出てきたので、昭和二十七年度、さらに生徒会の発展を図るために、本部（会長松本一興氏、男子として初めて）を中心として、会則の全面的な検討改訂が行われた。現在施行されている条・章の原型はこのときに出来上った。昭和二十八年十一月には、市内の高校生徒会の代表者会議が千葉工業高等学校で開かれ（一高、二高、商業、明徳、関東、工業、三高参加）、生徒会の運営方針、年間行事のあり方、予算の決定方法、風紀問題等について研究討議が行われた。この会合はその後もしばしば行われ、情報交換により視野が広がるとともに、相互に良い意味での刺激を与え、生徒会活動の発展に大いに資するところがあった。大学進学の競争が激化するにつれて、やや沈滞気味の様相を呈することもあったが、千葉三高時代、学校の発展とともに生徒会活動も活発化し堅実な歩みを続けた。

6　伝統的行事の出発点

新制高等学校として再出発して三年目、県立移管、千葉第三高等学校となった昭和二十五年度、次のような行事が初めて実施されている。

戦中、戦後の苛酷な社会情勢と貧しい生活状況のために実施に踏み切れなかった宿泊研究旅行が、昭和二十四年十月に甲府昇仙峡、伊豆修善寺方面を目的地として、初めて（いわば第一回修学旅行）実施されたが、現在まで毎年実施されてきているような関西方面への修学旅行は、昭和二十五年十月に行われたのが、本校としては第一回目であった。四泊五日、参加生徒一一六名（事情により全員参加と

いうわけにはいかなかった)、引率職員団長諸川芳雄校長以下五名(山崎一郎、山口信夫、朝比奈英男、吉田さゆり、柴田希子の各先生)。やはり、京都、奈良を中心とする研究旅行であったが、交通事情も悪く、全くの食糧難、衣料難の時代で行き帰りとも夜行列車(現在のような新幹線、あるいは少し以前の特別列車のような立派なものではない)車中泊、主食はきびしい配給制度下、旅館宿泊と中食分として各自八合の米を袋につめて持参する。服装も新しいものを手にいれることは極めて難しくお母さんやお姉さんのお下りで、全く色とりどりであった。現在のような日程の余裕はなく、京都、奈良市内の神社、仏閣めぐりもそれぞれ一日で行うという強行軍であった。しかし、旅館での宿泊の夜の楽しさは今も昔も変らなかったようである。

第一回文化祭、昭和二十五年十一月十日、十一日、生徒会本部〈会長小林(間島)正枝、副会長平方(加藤)一枝、書記角田(斉藤)恭子、積田(八幡)和子、会計矢野(斉藤)英子、尾身(青野)泰子の皆さん〉、顧問山崎一郎先生。各クラブ委員会等が、文化祭の名において、今日行われているような音楽演劇等の発表会、書道美術等の展覧会、その他の文化系クラブの研究成果や労作の展示発表会、バザー等が初めて行われたわけである。従来は学芸会あるいは学芸発表会などといわれて小規模に行われたこともあったが、戦後の日本を軍国主義国家から文化国家に生れ変らせるということで、文化という言葉がもてはやされ、文化祭と呼ばれるようになり、生徒会の育成に力をそそいでいた当時、生徒の自主的な活動の場として極めて重要視された。それにしても生徒たちの手による初めての大行事、その労苦もさぞやと思われるのである。この努力と成果は翌年の創立十周年記念行事に受け継がれ、その後の発展の基礎となったのである。

読売新聞千葉版記事　昭和二十五年十一月十一日(土)付

県立千葉第三高校文化祭は、十一日音楽演劇発表、研究発表、展覧各会、バザー、十二日前日行事と同窓会総会、茶道実演があるが、十二日には本社新聞研究室植草委員が、新聞製作工程の講演を行う。

第一回耐寒マラソン、女子のコース　正門―県営住宅前―関東高校(現工商高)前―穴川十字路―天台弁天社(スポーツセンター陸上競技場前の弁天様)前往復、距離五千米。男子のコース　正門―作草部―穴川十字路―天台弁天社前―長沼十字路先折返し点往復、距離一万米。以後毎年実施され、伝統となっていたのであるが、自動車交通の激化によって中止せざるを得なくなり、昭和三十八年度を

もって終止符がうたれた。その後中止になったり、学校周辺をぐるぐるまわったりしたこともあったが、現在では検見川東大グラウンドにおけるクロスカントリー競争を経て、スポーツセンターでのマラソン大会に生まれかわっている。

7　帽章の制定

女学校時代の校章は、八咫の鏡を型どり、その中にオリーブの葉を描き、気高さとかおり高いものを表現した。八咫の鏡が用いられたのは女子が常に姿を正すという意味でつくられた。このデザインは本校美術担任の小川恒雄氏のものによる。八咫の鏡を型どったことはいかにも戦時中の時代風潮を示している。創立時から用いられたが、昭和二十五年四月一日、県立移管により校名が千葉県立第三高等学校となり、男子生徒の入学にともない帽章を制定することになった。

検討の結果、本校旧職員、生物担当の吉田さゆり氏の縁故の方で高橋春人氏（二科会員・商業美術審査委員）にお願いすることになった。第三高等学校の帽章の原案は氏のものによる。

原案の意図は、いかにも若人むきにして、颯爽生鮮感を与え、高校生の矜を高めようとする。月桂冠またはオリーブの葉は、あくまでも栄光を表わし、双翼は大空に張るようにして、希望を表現し、総体的構成は外へ外へ伸びる若人の心姿を表徴している。

氏の原案をもとにして第三高等学校の帽章が成立した。昭和二十五年から十年あまり、その帽章に親しんできたが、昭和三十五年以後、校章をふたたび改訂することになった。改訂の理由は、近隣の学校で本校のものとはなはだ類似したものがあり、生徒指導上不都合が生じやすく、また金質



高等女学校時代


千葉東高等学校
（現在のもの）


第三高等学校時代

も劣っているなどであった。現在の校章は元教頭草葉章氏が美術担当の教諭時代に起案修正された。

標　語

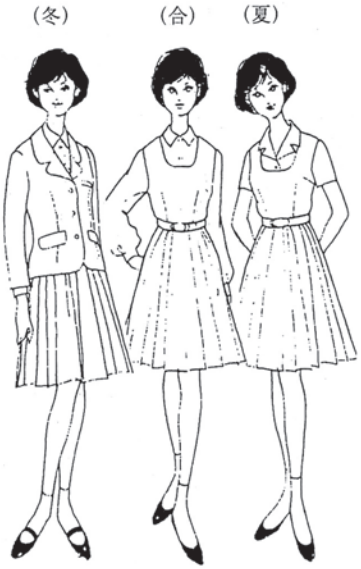
「花一輪さしてはぐくめよき校風」

花一輪のヒューマニズムを実行して、よき校風、よき家風、よき社会の建設に、切れ目なき精進を続けてゆきたい。われわれ一人では何事もできない。しかし、一人から、しかも小さい事から始めなければならないことを知るべきである。

昭和三十五年四月、以上のような努力目標の設定とともに、次の千葉東高等学校時代を迎えることとなるわけである。

8　女子制服制定

創立当初から制服はセーラー服と決まっていたが、戦時中のことでもあり、布地の不足などで実際はどんなものでも良かった。制服も本人の身体に合ったものは少なく、大ざっぱに大中小の三型に統一されて、身体のほうで制服に合わせて着ていた。昭和二十年の終戦から二十七年まで本校の制服は自由であったが、昭和二十七年五月三十日に、家庭科の教諭が中心となって現在のものに決定した。（図参照）



紺サージスーツと白ブラウスに本校のき章等を上衣の左胸につける。夏季は上衣を脱いでもよい。

・上衣 ― テーラー型シングル三つボタン
・ジャンパースカート ― 四角えり、ひだ数二四ベルト付き
・ブラウス ― 白ブロード長袖、えりは角型ショールカラー又はワイシャツ型

9　努力目標の設定

十年の長きにわたって、本校の基礎づくりと飛躍的発展のために、粉骨砕身の尽力をされた諸川芳雄校長がお隣り

の千葉商業高校に転任された。その後を受け継がれた石毛貞雄校長は、本校教育内容のなお一層の充実深化を図るために、全生徒職員の学校生活のよりどころとなる、次のような「努力目標」の設定を提案された。

努力目標の設定とその達成

つねに理想的あり方を探究し、師弟ともに考え、ともに語りあって、学校全体および個人としての努力目標をさだめ、その達成にはげみ、日々の向上進展をはかってゆく。

学校全体の共通的努力目標

1　自律節制

自らの生活において、また人間関係、特に新旧世代相互、労資相互、国家相互において、相互の自律節制ということがなければ、人類の願いである平和と幸福は、永遠に期待できないであろう。

2　研究創造

原子力時代、第二の産業革命といわれる日進月歩の時代であるから、あくなき科学的研究心と、積極的創造性は、何人にも強く要望されるところである。

3　親切奉仕

道義心を忘却してしまったような今日ではあるが、明日の歴史を作るという若人の使命を自覚し、日常生活の上において、善意にもとづく親切奉仕を進んで実践する実行人でありたい。

二　通信教育部

1　本校に設置されるまでの概況

高等学校の通信教育は、昭和二十三年一月九日付で文部次官通達「中等程度通信教育実施要領」が発せられ、次いで昭和二十三年五月に「高等学校通信教育規定」が定められて実施されることになった。当初は各実施校とも専任教員は一名いるかいないかであり、実施科目も国語甲だけで出発し、翌二十四年に人文地理・解析Ⅰ・地学の三科目、二十五年には漢文・一般社会・幾何・解析Ⅱの五科目というように逐次増加してはいったが、昭和二十九年度までは通信教育のみで卒業に必要な単位数を修得できなかった。従って、一部の科目の学習だけで満足できない者は、残りの科目を定時制で修得して、高等学校の



教科書と学習書

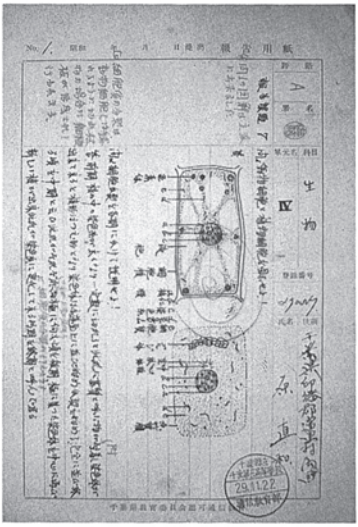
卒業資格を得るほかなく、このため通定併修（定時制からは定通併修）という制度が作られたのである。昭和三十年度になると、履修科目が二六科目となり、単位数にして一七九単位の実施が認められ、同年四月一日の文部次官通達によって、初めて通信教育のみによって高等学校卒業の資格が得られるようになったのである。

さて、千葉県では昭和二十三年三月十五日、高等学校課程として国語甲を、中学校課程（通信教育は高等学校と同時に中学校も発足したが、本県では昭和二十八年度打ち切られた）として国語・社会・理科を開講した。両者合わせて二三〇名の生徒を男女に分けて千葉高等学校と千葉女子高等学校の両実施校に収容し、それぞれ二名の専任教員によって学習指導が開始されたのである。しかし、教師も生徒も初めての通信教育のため、両者の努力は空回りに終わることが多く、四年目の昭和二十六年度になって初めて一六名の単位修得者を出すという状況であった。そこで昭和二十七年度に従来の男女別を改め、千葉県を南北に区分して両実施校が分担することになった。このため全県に散らばっている密度の極めて小さい生徒の掌握がいくらか楽になり、本校の他に県内各地の施設を巡回して行う面接指導も実施されるようになったため、単位修得者が増加しだした。これに勢いを得て実施科目も増加させたが、全国平均一六科目の中にあって、本県では六科目（国語甲・解析Ⅰ・幾何・一般社会・人文地理・地学）しか開講できずに、その指導も多くを兼務教員に任せる始末で、少ない専任教員（両実施校は昭和二十五年度より校名が千葉第一高等学校・千葉第二高等学校と変わったが、専任教員は依然として主事を含めて二名ずつしかいなかった）と少ない運営予算（昭和二十八年度は両実施校合わせて三七万八〇〇〇円）では、他県に遅れをとるばかりという状態が続いたのである。

このころ、全国的に通信教育に対する関心が増大し、実施科目の増加や、通信教育のみで高等学校卒業の資格取得を要望する声が高まっていた。本県でも昭和二十九年三月、千葉県教育委員会は両実施校を統合してその陣容を強化することを決定し、揺籃期を終えた千葉県の通信教育は、同年の四月より本校（当時の千葉第三高等学校）において実施されることとなったのである。

2　千葉第三高等学校時代

本校に統合設置された通信教育部は、校長及び主事と教諭八名、事務職員二名で出発した。生徒は新入生を含めて



当時のレポート

四八六名で、まだ系統的に各教科を履修するには至らなかったが、新たに日本史・世界史・一般数学・生物・英語・書道の六科目が開講されて、格段の充実をみたわけである。

しかし、通信教育を少しでも知っているのは極く少数の者だけで、仕事はまず教員の学習というわけであった。幸いと言おうか、提出されるレポートは僅かしかなく、時間は充分あった。当時は「だれでも、いつでも、どこでも」というのが通信教育のキャッチフレーズであり、生徒は自分の好きな科目を都合のよい時に勉強し、随時その学習結果をレポートとして提出し、あるいは時間を作っては登校して面接指導や試験を受けるというような自由な学習をしていた。したがって、期限を決められていないということが学習の遅々として進まない原因ともなっていたため、教員の方は歯痒い思いをしながらも割に暇だったのである。

そこで、通信教育に関しては白紙の状態の教員は、直面する指導研究はもとよりのこと、通信教育の過去の分析から将来の在り方に至るまでを検討して、連日のように討議を重ねた。これが後日の本校通信教育の発展に大いに役立ったのである。一方、県の学務課・指導課・社会教育課の指導後援のもとに、「人の集まるところには必ず通信教育が忍び寄る」と噂されたほど、積極的に各方面への啓蒙を行った。昭和二十九年度に定通併修（註1）が実現したのを始め、後の学習会（註2）の母体となった青年学級との関係も芽生えるなど、殻に閉じこもらずに外部に向かって精力的な活動が繰り広げられた。

註1　定通併修とは、定時制に在籍する生徒が通信制で一部の科目を履修する制度である。この年、松尾高校二川分校六八名・船橋高校定時制四三名が併修し、翌年には更に校数、生徒数が増え、昭和三十二年度まで続いた。同様に、通信制に在籍する生徒が、定時制で一部の科目を履修する通定併修の制度も設けられている。

註2

学習会とは、面接指導の回数が少なく、自宅で孤独な学習を強いられているので、生徒が自発的に集まって互いに励まし合うために生まれた小グループで、その内容は学習を主体としているが、レクリエーションの要素も含んでいる。このころはスクーリングも弱体で、生徒間の横の連絡はほとんどなかったために、友人と一緒になれる学習会は非常に効果的であったが、その維持にはかなりの努力が必要であった。最盛期には二十数箇所で活動していたが、スクーリングの強化された現在はやや衰退している。

昭和三十年度は、通信教育が一人立ちできた年である。すなわち、この年、文部省は通信教育のみによる高等学校の卒業を認めたためである。これを受けて、館山市で開催された東日本地区定通教育研究協議会に、本校から管理運営に関する中心資料を提出することになり、前年に続いての部内研究と生徒の実態調査を実施した。この資料をもとに「教育課程の編成、指導組織特に協力校による指導の充実強化、放送利用の方法とその基準、他の教育機関との関連強化」について協議が行われ成果をあげた。これを機に社会教育的色彩が強く、かつ「だれでも、いつでも、どこでも」を看板とした本校通信教育の姿が、徐々にではあるが普通の高校教育に近付きつつ発展してきたわけである。

なお、この年に「通信教育における協力校の運営について」（註3）文部省より実験校の指定を受け、県立匝瑳高等学校の協力を得て研究を重ね、幾つかの問題提起を行った。

註3
協力校とは、通信教育の面接指導のために施設設備・講師等を提供してくれる学校のことで、本校への通学が困難な生徒のために設けられ、本校からも若干の教員が講師との連絡や指導のために出張してスクーリングを行う。学校以外にも公民館等の施設だけを借用して生徒を集め、教員がこれらを巡回して面接指導を行う場合もある。

昭和三十一年度は、卒業をめざしての種々の試みが実施段階に入った年である。生徒の修得単位に応じてクラス分け（イロハの三組に）をしたり、面接指導の回数を増やすために本校スクーリングだけでなく、銚子・館山等県内数箇所に定期的な巡回スクーリングに出かけたり、それまで随時行っていた試験を定期化（年四回、六・九・十二・三月実施）したり、生徒相互間及び教師生徒間の心の結びつきをねらって、初めて合宿スクーリング（於鹿野山神野寺、男二五名・女一七名）（註4）を行ったりした。

しかし、この年、最大の出来事は、最初の卒業生を出したことである。いずれも編入学者ではあるが、三名が卒業できた。

註4

合宿スクーリングは、孤独な生徒を勇気づけ、あわせて消化しきれぬほど多かった体育の面接時間を与えるために始められた。内容には、各教科の指導も加えられたが間もなく消えて、体育とレクリエーションを通して仲間づくりを第一の目的とするようになった。初めは、一泊二日男女別に実施したが、三回目から男女一緒で二泊三日に改められた。

通信教育で一人でも多く卒業生を増やすため、また、一人でも脱落者を減らすため、種々の試みが次々に実行され多大の成果をあげていった。新入生がとりつき易いように工夫された教育課程の八つのコース（註5）、少しでも答え易いように考えられた報告課題や補助教材、どうすれば魅力がでるか検討された面接指導、生徒の孤独感を和らげるよう努力されたホームルームやクラブ活動の運営等々の相乗効果である。



第1回合宿スクーリング

たまにしか会うことのできない生徒は職員を頼りにし、職員もまた親切に応対したので、相互の関係は他の課程には見られない密接さが生まれ、この伝統は今に受け継がれている。

註5

生徒の好む科目から学習できるように六つのコース（A～F）が用意され、その後准看護婦の高看進学用のGコースと、農業科目を取り入れたHコースが追加された。いずれも標準修業年限を五年間とし、入学時には通信教育に慣れさせるために、ごく少ない履修ですむように配慮して編成された。しかし、元来生徒の学習時間がまちまちであることから、四年に短縮したり六年以上に引き伸ばすことも、あるいは途中で他のコースに乗り換えることも自由なもので、教育課程は生徒一人一人について考えられるのが通信教育本来の姿とされている。

一方、外部との連携も活発に行い、県職員の研修（昭和三十五年度より）や千葉刑務所の受刑者の教化（昭和三十年度より）のお手伝いをしたり、「何でもやってみる」との態度を保持していた。これらのことが認められて、昭和三十四年度には文部省実験学校の指定を受けて「通信教育における学習指導の効果的運営について」の研究をし、また

三十五・三十六年度にはＮＨＫ通信高校講座放送研究委嘱校も引き受けるなど、全国に「千葉三高」の名を轟かせたのである。

昭和三十四年度に宿願かなって通信教育専用校舎の建築国庫補助を受けることができ、翌三十五年に二階建ての新校舎が落成した。それまで全日制の図書室の片隅や、逆冷暖房完備の手狭な部屋で我慢してきた通信教育関係者は、当時学校中で二階建てはここだけの新築独立校舎に移転した。これで本校の通信教育部は名実共に基礎づくりが終わり、ひとつの峠を越えたのである。



巡回（地区）スクーリングの変遷

年　度	地区数	回　数	会　場　校	そ　の　他
29	9	平　均 年２回	東葛高　銚子商　匝瑳高 多古高　佐原二高　成田 小　八街校舎　大原高 木更津二高	月１回、１～３会場へ教員２名ずつが出張指導。生徒数は10名内外。
30	8	平　均 年３回	東葛高　銚子商　匝瑳高 佐原二高　成田中 大原高　安房一高 木更津二高	月２回、１～３会場へ教員２～４名が出張指導。出席生徒は10名内外。匝瑳高は、10月に協力校実験校に指定され、以後は講師３名を提供して毎月実施。
31	4	毎　月 １　回	野田高　銚子高　大原高 館山高	月１回、教員が２～３名出張。生徒数は多くて20名。
32～35	2	毎　月 １　回	銚子高　館山高	毎月１回、４～５名の教員が出張指導。生徒数は５～30名。
36～39	2	毎　月 １　回	銚子高　館山高	同上。ただし、同じ日に本校でも小規模のスクーリングを実施。

（備考）　巡回スクーリングは、全て日曜日に実施した。この他に、定期試験も上記会場で実施した。

昭和40年度以降は、本校でのスクーリングを月２回実施し、巡回スクーリングは全廃された。

第四節　千葉県立千葉東高等学校

（昭和三十六年～平成三年）

一　全日制課程普通科

(一)　「創立三十周年記念誌」より

1　校名の変更

昭和三十六年三月十七日付千葉県報第七四八号で、千葉県学校設置規則の一部を改正する規則が公布され、同年四月一日より、県立高等学校のいくつかが同時に校名変更になり、本校は「千葉県立千葉東高等学校」となった。

それまで本県の県立高校の校名は、たとえば、「千葉第一高等学校」というように、地区によっては、第一、第二という順序をあらわすかのような校名がつけられていた。こういう名称は、学校に序列をつけているようで好ましくないということがしばしばいわれていたが、やっとそれらの校名が改められ、第一、第二という字句は校名から姿を消したわけである。本校は、昭和二十五年四月一日に県立移管になってから十一年の間、「千葉第二高等学校」―通称「三高」―の名で多くの人々から親しまれてきた。一高、二高というのは県内にいくつかあったが、三高というのは県内でたった一校だけのものであったので、卒業生や在校生の中には、その名に強い愛着をもっていた者の多かったのは当然のことであるかもしれない。しかし、現在では「三高」の名は、歴史のかなたに去って、すっかり「東高」になじんでいる。ちなみに、そのときの校名の変わり方をいくつかあげて、県下の様子をみてみると、「千葉第一高等学校」のように、「第一」とついていたのは旧制の中学校であるが、これらは、単に「第一」をはぶいて「千葉高等学校」のようになった。「第二」がついていたのは、旧制の高等女学校で、これらがいろいろな変わり方をした。「千葉女子高」、「木更津東高」、「安房南高」、「茂原高」等という具合に、「第二」のかわりに、「女子」をつけたり「東」、「南」をつけたところもあれば、長生第二高校（旧



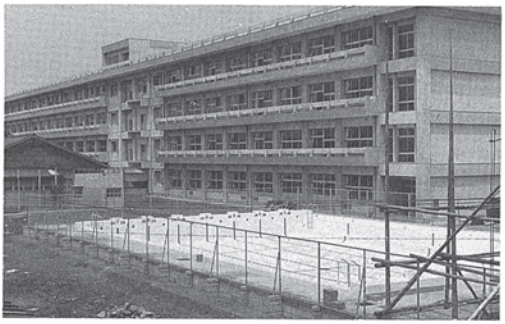
旧門標

制の茂原高等女学校）のように茂原高となって、元の名にもどったところもあるわけである。「北」とか「西」は、寒々とした感じがするとか、陽が沈む方角で繁栄隆昌という感じがしないなどということから敬遠され、そのかわり、学校の位置に関係なく、「東」や「南」が用いられている。本校では「第三」をとりのぞいたあとどうするかということで、職員会議でも話し合われた。全く新規に校名を考えるか、あるいは、千葉市も将来もっと大きく発展することであろうから、本校の大発展を願って、「千葉中央高」としてはどうかなどという意見もあったが、結局「千葉東高」ということで落ちついたわけである。

2　施設・設備の充実

三六・八・二二　第二棟普通教室四を焼失

この教室は三十四年に、図書館（現柔道場）と一緒に建てられたもので、当時の本校では、新しい明るい校舎で、一年生の教室に当てられていた。八月二十二日といえば夏休み中もちろん火の気はなかったはず。あとでわかったことであるが、原因は、学校教育に反感を持ったある浮浪者の放火ということであった。しかしこの焼け跡には、二階建てのモルタル校舎が、翌三十七年の四月にはできあがった。一階は主として生物関係の教室、準備室で、二階は普通教室にあてられた。二階建教室というのは本校ではここだけで、ずいぶんよいのが出来たと、そこへ入る生物の先生や生徒をうらやんだものだが、あとで聞いてみると、大変お粗末な建築で、二階で生徒達がちょっとはねたりすると、一階の天じょうからはパラパラとごみが落ちてくる始末、昼食時などは特に困ったというはなしであった。これが現在の一棟と二棟の谷間にあって、生徒会関係の部室や掃除用具収納の物置きなどに利用されている。今にも崩れそうな、あのモルタルの建物である。これも近い将来には、違法建築物ということでとり払われる運命にあるとか。



新校舎着々完成

三八・二・二六　校長室、教務室、事務室、保健室拡張工事、小講堂模様替、宿直室放送室移

転工事

生徒の数が年々に増加し、それに従って職員数も多くなってきたため、右のような拡張工事が行われた。放送室も、当時のものは施設・設備ともに非常に粗末なものであったが、係の先生の指導を仰ぎながら十二分の力を発揮して活躍した。学校の放送コンクールでも何回か入賞したほどである。

この年に、天じょうの低い暗い教室全部に蛍光灯がつけられ、雨の日でも何とかがまんのできる明るさになった。

三九・三・一六　生徒急増対策校舎竣工

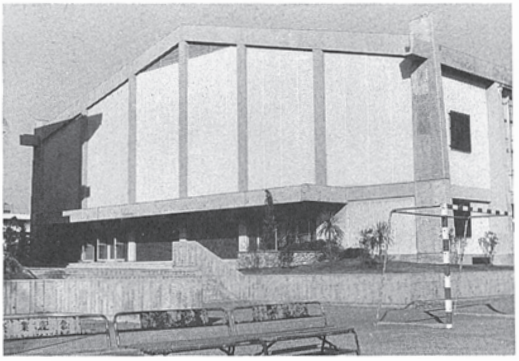
三高時代から校舎の裏側（北東部）にあった小さな職員住宅（後には生徒の合宿所に使用）がとり払われ、そのあたりに木造二階建六教室ができ上った。便所も、女子更衣室も、それから昇降口もあり、この建物は一年生が主として使用した。しかしこの校舎は、四十二年の終りころにはとりこわされてプール用地となってしまった。いくら急増対策のバラック校舎だとしても、まだまだ使えるもので、土地でもあったら合宿所として残して置きたいものだった。

四一・一二・二八　校門玄関間舗装工事完了

校門から玄関までのでこぼこ道がきれいに舗装され、登下校が非常に楽になった。朝、校門を入ると、道の両側に植えられた小松の緑が、玄関前の大きな松の植込みまで続き、「さあ、きょうも張り切ってやろう！」といった一種の学園らしい雰囲気を作っていてくれるような気がする。これより少し前に、グラウンドが整備され、全校生徒で小石拾いなどという奇妙な行事（？）は解消され、同時に体育時の生徒のけがも激減したということである。

四二・一・二五　新校舎建築第一期工事着工

四三・一・一七　プール建設工事開始



新体育館完成

四四・三・一〇　新校舎建築第二期工事着工

四五・九・二　新体育館工事着工

石毛校長は昭和三十七年ごろから、校舎の全面改築の希望を県に出しておられたようであるが、具体的に動きはじめたのは四

十年度であった。しかしこれも県の都合で、いつになるかは判然としなかった。普通高校のモデルになるようなものを作りたいという石毛先生の指示に従って、各教科その他の関係者たちは一応の平面図を書いて出したが、青写真になるまでには至らなかった。

四十年の八月に国府台高校から代わって来られた内藤校長は、千葉東高のオンボロ校舎にはびっくりなさったようである。四十一年度の夏休みには古い校舎のうち一番うしろの第二体育館（武道場）、芸術科、家庭科関係の校舎がとり払われ、四十二年には新年早々にくい打ちが始った。人が歩いてもガタピシひびくほどの古い木造校舎には、ズドンズドン、ガガガ……といった鉄筋コンクリート建築の騒音が遠慮会釈もなく入り込み、授業も一時停止ということも何度かあったが教師も生徒も、新しい立派な校舎の一日も早く完成することを願ってがまんしたものである。そしてその年の十一月には全校生徒揃って、新しい校舎に引越した。校舎建築の途中で内藤校長が退職なさったことは非常に残念ではあったが、続いての沢田、村田両校長の下で、プール、特別教室などを含む第一棟、第三棟が次々と建てられ、四十六年三月には大きな体育館兼講堂まで完成した。ここで初めて、千葉東高校の新校舎全面改築が完了したわけである。昭和二十三年、轟の丘に建てられた木造の校舎は、およそ二十年でその跡かたもなくなり、鉄筋四階建のコンクリート校舎にとって代られたが、この今の校舎は一体いつまでここに建っていることになるのであろうか。多分現在ここに学ぶ生徒たちのこども、いや孫たちの代になっても、この姿をそのままとどめていることであろう。「僕のひいじいさんも、この学校で勉強したんだってよ」などという光景を想像してみよう。

3　制服その他服装のこと

千葉第三高校の初期に制定された制服は、千葉東高校と校名が変っても、そのまま引き続いて用いられた。男子は黒の詰襟服、女子は紺の背広衿ジャケットにジャンパースカート、角えりの白ブラウス。しかし遠い明治の昔から、若い学生、特に女学生の服装はその時代時代の流行の影響を無視することができず、スカートの長さが長くなったり短くなったり、靴下やソックスの色が問題になったり、はては髪のふくらませ方やリボンの色や幅にまで、若い乙女たちは神経を使い、一律に定められた服装に対する一種の反抗を試みた者も多い。これに対して教師は服装検査なるものを行って、乱れた服装を正すよう指導をしたものであ

る。服装については、教師の側にも硬軟両派があり、三十七年ころの職員会議録をみると、ある若い教師は「時代も変ってきているので、制服改定など検討する必要があると思う。帽子についても、生徒を納得させるだけのものがない」などと発言している。一方、県下の女子教育の先覚者と定評のあった石毛校長は、「女子高校生の清純美の体現をさしあたっての目標にして、女子の規律指導を徹底したい」と、女子生徒の生活指導をきびしく行ってほしいというような意向を示された。

三十八年の夏には、上着を脱いだ男子のワイシャツを一定の型のものにしようとか、そのワイシャツの胸に校章をつけさせようとか、登山帽のような略帽をかぶってもよいなどの問題も出たが、これらは生徒にあまり歓迎されず、永続きしなかった。なお、夏になると必ず出る服装の問題に、女子のジャンパースカートがあった。ブラウスの上に背中も胸もあるジャンパースカートでは暑かろう。夏だけ普通のプリーツスカートにするか、あるいは制服のスカートを全面的に変えてしまっては、などということで、これは三高時代から、毎夏出される服装問題であった。そこで、全校の女子生徒を集めて、そのことについて話しあったり、各クラス毎に討論させてみたこともあったが、いつもきまって同じ結論が出てきた。それは「やはりわたしたちはジャンパースカートの方がよい」ということである。男女共学の教室で、男子と隣り合った場合、薄地のブラウスでは胸のあたりが気になってしまう、というのが大多数の賛成派の言い分であった。衣料事情、経済事情がよくなってきたため、夏季には、薄地の布でスカートを作らせて着用するようになったし、また格好という点からも、ジャンパースカートが好まれるようになって来ていたので、スカート改定の問題は立ち消えてしまった。

学校の制服というものは、三高時代くらいまでは、学校に着て行くだけでなく、外出時にはこれを用いるものが多く、教師も「外出する時は制服制帽で」と指導したものである。ところが、東高になったころからこの線がしだいに崩れてきた。帰宅後は、どこへ行くにも制服を着ないで私服で行く。このことは別に本校に限られた現象ではなく、全国的、あるいは世界的な風潮のようである。まず大学生が模範（？）を示した。昔は大学生の象徴だった角帽と黒サージの詰衿服、これをさっさと脱ぎ捨てて背広を着はじめたが、これもしだいに崩れてきて、くたくたのジーパンにズック靴といういでたちで、ボサボサ髪をふり立ててご登場とあいなったわけである。こうなると、ひとり高校生

のみしかつめらしい制服制帽などとはナンセンスとばかり、昭和四十年代になると制服撤廃論を持ち出す高校生も出て来たわけである。しかし、現在―昭和四十六年のこのいま、我が千葉東高では男子も女子も、千葉三高時代の制服をそのまま受けついで、毎日愛用しているのである。ただ、登下校の際には、いま流行の長い髪の毛の上に、千葉東高のシンボル―あの記章のついた黒い帽子をのせた姿は、非常に少なくなってきていることはいなめない事実である。

4　卒業生の進路・活動状況

千葉東高になってからの第一回の卒業生は、本校を卒業してやっと十年にしかならず、まだ、特に目立った活動をしていない者が多いが、そろそろ社会の中堅として、堅実な動きをし、着々と地歩をかためているというところであろう。あと五年ないし一〇年先が楽しみである。

千葉三高当時は、男生徒の数よりも女生徒の数の方が多かったが、千葉東高となってからは、京葉工業地帯の発展や、団地の造成による人口増等、社会情勢の変化の影響によるためか、次第に男生徒の数が増加し、女生徒の数が減少していきこ三、四年の間は、男女の割合が三対一の比率になっている。卒業後の進路も、就職希望者が徐々に減少し、昭和四十年度以降はその数が一〇〇名にみたず、特に四十六年度は、まだ年度途中ではあるが、僅か八名しか

年度別　大学・短大・各種学校合格者数一覧表

年度			36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
大学合格者数	国公立	新卒	1	10	1	16	16	16	18	21	4	12
		旧卒	7	6	3	5	1	9	8	4	15	10
	私立	新卒	58	63	96	113	147	170	138	107	105	163
		旧卒	29	50	36	26	30	53	68	113	127	97
短期大学			4	16	20	27	42	41	49	33	23	35
計			99	145	156	187	236	289	281	278	274	317
各種学校			0	5	14	19	32	42	30	24	30	40

いないという結果がでている。これは、裏をかえしていえば、年々進学希望者がふえているということである。男生徒は、一〇〇%大学進学希望者とみてよいし、女生徒も、上級学校へ行って、特技を身につけてから就職するという傾向があらわれている。

就職関係

就職については、多難な三高時代にくらべ、東高時代は非常に恵まれている。京葉工業地帯の開発にともなって、新しい工場、そして銀行などが次々に建てられ、若い労働者を求めてきたからである。

昭和三十年代の我が校の生徒数は、女子と男子は大体において半々であり、その女子生徒の過半数は就職を希望した。彼女達の中には、一発で目指す企業に合格できず、数回受験してようやく合格するという例も相当数あったが、それにしても希望者の大多数は一流といわれるところに就職していった。特に昭和四十年代になると、女子の入学者数が激減し、反面求人側は千葉県の発展にともなってますます増えてきたので、就職はよりどりといった形になってきた。これらの就職をして行った卒業生の、その後の活躍振りははっきりつかめていないが、大体において、「東高出身者は、明るくて仕事振りはまじめ、熱心である」「男女

就職状況　　（　）内は男子数

業種	38年度 13 (14)	41年度 99 (33)	44年度 37 (18)	おもな就職先
金融関係	47 (35%)	17 (17%)	9 (24%)	千葉銀行、三井銀行、住友銀行、日本勧業銀行、第一銀行、安田信託銀行、日本生命、明治生命、千葉信用金庫、富士銀行など
生産関係	39 (29%)	29 (30%)	2 (5%)	川鉄、日本建鉄、久保田鉄工、旭硝子、三井造船、三井石油化学、日立製作所、住友化学、丸善石油、キッコーマン醤油等
商業関係	15 (11%)	12 (12%)	9 (24%)	三越、平田倉庫、三井物産、三菱商事、大丸、千葉日産、千葉トヨタ、野村貿易、三菱地所等
運輸通信	16 (12%)	11 (11%)	3 (8%)	京成電鉄、千葉鉄道管理局、電電公社、東海汽船、全日空、日本航空等
官公庁	8 (6%)	9 (9%)	2 (5%)	千葉県庁、千葉市役所、郵政省、運輸省、外務省、日本海事検定協会、市川市役所、船橋市役所等
サービスその他	7 (6%)	21 (21%)	12 (33%)	東京電力、ホテル・オークラ、ホテル・パシフィック、日本交通公社、近畿日本ツーリスト等

共学のよい面を身につけているので、他の仲間や会社にもすぐになじむ」というふうな評判が企業側から返ってきているようである。

男子の就職者は年々その数が減ってきているが、就職して行った卒業生諸君は、それぞれの職場でよくつとめ、その職場での模範的、中心的人物として活躍している者が多いときく。

就職先を地域別にしらべてみると、そのほとんどが、千葉市およびその周辺と東京である。これは就職した者の大部分が女子であるため、自宅より通勤できることを企業側もまた本人も希望しているということのせいもあるが、一方、これらの地区からの求人だけで、十分にすきな企業をえらぶことができるという地域的な利点と、東高の名声をこれまでに築いてくれた先輩達の努力のおかげも見のがせないことがらであろう。年度別就職状況は前頁の表のとおりである。

5　生徒会活動

千葉東高時代の生徒会活動の中で、最も大きな話題は、生徒心得第九条―集会及び掲示は、事前にホームルーム担任又は顧問教師を経て、校長の許可をうける―に関連した一連の動きである。折角、生徒たちの自主的な活動の場として生徒会活動が認められていながら、昭和四十年を過ぎるころからしだいに、生徒自身が生徒会活動に無関心の風潮を示し始め、それがだんだんと深刻になって、昭和四十五年からは、生徒会本部役員への立候補者がいないため、役員選挙も満足に行えなくなり、前の役員の任期が切れると、本部役員不在という、まことに憂慮される状態がいつもおこっている。しかし、予算の編成、東雲祭（文化祭）などが近づくと、必要やむを得ないということで、何とか役員選挙ができるという奇妙な現象を呈している。この間、昭和四十三年度から四十四年度にかけては、「集会、掲示等の自由」を標榜して、生徒心得第九条の改正とか撤廃が問題になり、何度も生徒総会を開いて（四十二年度までは、特に問題もなく、生徒総会は定例に年二回開催することで済んでいた。）話し合いがなされた。

昭和四十三年度から、高校生の三無主義―無気力・無関心・無責任―とか、高校の予備校化などということが、生徒間の話題になりはじめた。また、男女交際について、男女共学の長所・短所について等の題で、討論会をひらくようになり、そのうちに、なんでもよいから話し合おうということで集まったり、生徒心得第九条についての討論会も

ひらかれるようになった。これらの討論会に集まる生徒は、いつも大体一定した顔ぶれであることが多かった。討論会をもつということは、このころになってはやり出したことである。

6　修学旅行の変遷

三高時代の終りごろと同様、十一月の中・下旬に二年生が関西旅行を行っている。行く先は、その年々によって多少異なるところもあり、吉野へ行ったり、四国にまで足をのばした年もあるが、主軸はいつも奈良・京都で、宿泊も京都が中心である。ただ、昭和四十年代になると、市川、船橋地区出身の生徒の中には中学時代に関西旅行に行った者が多く、また神社仏閣めぐりばかりが修学旅行でもあるまいなどという声も出てきたりして、修学旅行を再検討する機運が出てきた。修学旅行を行うべきかとか、旅行の目的、行き先などについて、職員、父兄、生徒を対象にアンケート調査をしたり、各クラスで討議してみたりしたが、結局、関西旅行の形が現在まで継続している。ただ、五、六年前から、クラス単位で見学コースを選ぶ方法が採用され、更に四十六年度では、奈良吉野地方を数人のグループで自主的に見学することも実施され、その結果は生徒、教師ともに高く評価しているようである。

東京―京都間の乗物は、長い間、修学旅行専用車（ひので号、わかくさ号）を利用していた。このころは大体帰りは一泊車中でというやり方で、費用の節約をはかったわけであるがこの車中泊を生徒はこの上もなく楽しいものとしていたようである。ところが、四十二年ごろから新幹線を利用するようになって、朝千葉を出て、その日のうちに京都見物の一部を済ませ、そして帰りは午後京都を立って夕食は家でなどということになってしまうので、この車中泊の楽しみや冒険は味わうことができなくなった。

修学旅行の費用は、四十一年十一月実施の京都・奈良・四国地方の旅館四泊、車中泊一泊で一人約一万二、〇〇〇円で、五年後の四十六年十一月実施、奈良・京都四泊では一人約一万七、二〇〇円であった。

(二)　創立三十周年直前の紛争時代以降

1　学園紛争と千葉東高再建の時代

激動の七〇年代

一九七〇年代を前に、日本は明治一〇〇年式典の可否、安保条約の可否、沖縄返還運動、ベトナム反戦運動などいやがうえにも政治的関心が盛り上がっていた。美濃部革新

都知事の誕生も日本を沸き返らせる事件であった。

こうしたなかで日大封鎖事件、安田講堂事件、東大を初めとする入学試験中止などのいわゆる大学紛争が高校に飛び火し、四十四年、大阪の卒業式粉砕事件、東京の学園封鎖事件を皮きりに全国で紛争が頻発した。千葉県でもこの年、生徒の政治活動を禁止する趣旨の四月十一日の教育長通達「高等学校生徒指導の充実強化について」がかえって生徒の政治活動の呼び水となった。県内のいくつかの学校で紛争が起こり、中には機動隊が導入される事態にまで発展した学校もあった。

東高「生徒心得九条問題」のはじまり

東高でも四十四年三月十九日の生徒総会を取材した朝日新聞の記事が二十日の朝刊に載り、これが引き金となって生徒の運動が一気に盛り上がった。中心となった生徒の要求は校内における表現行動については許可を要することを規定した生徒心得九条の撤廃であった。文化祭の出し物、部活動機関誌の内容、校内に掲示するポスターへの一部教師の指導を当時の生徒は検閲・統制と取ったのであった。

東高の問題をめぐって外部の学生の政治団体と呼応した生徒が連日のようにビラを撒き、集会への参加などを訴えた。五月十五日学園封鎖予告が出され、警察の指導が入るなど、校内は一気に緊張した。六月二日の生徒総会では校長の見解と生徒会の要求が食い違い、紛糾したが、校長の病気休業もあって夏休みの後話し合いが継続されることとなった。

長い二学期

二学期はいきなりヘルメットグループのシュプレヒコールで幕が開けられた。九月一日、体育館における始業式のさなか、校庭に数人のヘルメット学生が乱入し、「始業式粉砕・教育長通達反対」などと叫びながらデモンストレーションを始めたのである。職員が飛び出して校外へ排除し、始業式は無事終了したが、長い熱い二学期を予感させる事件だった。九月二十六日には生徒総会で校長が改めて生徒に説得した。生徒の中にも、暴力を否定し、生徒の総意をまとめ、話し合いで事態を解決しようとする動きが強まってきた。

校舎封鎖事件

その矢先の九月三十日、突如何者かによって三階の階段が机・椅子により封鎖された。警備員や教師が近づくと牛乳瓶が飛んできた。学校は二日間の休校を宣し、長期戦に備えたが、封鎖グループは午前中に逃げ去った。続いて十月四～五日の文化祭を期しての再封鎖の予告と、学内集会

を呼び掛けるビラが撒かれた。文化祭当日封鎖は無かったものの、グラウンドでの集会が予告通り決行され、他校生も参加して騒然となったが、まもなく解散させられた。

続く討論

こうしたセンセーショナルな事件はこれ以後は無く、校内での話し合いに移ってゆく。生徒は生徒会に結集し、それぞれが自分の頭で学校について考え、改革への夢や希望を持って行動した。クラス単位の真剣な討論が各クラスで行なわれ、「クラス決議」をビラにして早朝の校門前で登校する生徒に配るクラスすらあった。縦割り集会、授業時間を短縮しての生徒総会が積み重ねられ、最後は全生徒の参加によるアンケートや賛否の投票が行なわれ、生徒心得九条問題は終結した。

この「紛争」のなかで、東高生の自主的活動の一つの要求が力でなく話し合いで実を結んだ。この年の文化祭の出し物のレパートリーの拡大を求める生徒側の要求が職員会議で承認されたのである。生徒会長と顧問の粘り強い話し合いと、職員会議における生徒会顧問の情熱が教職員に理解され、生徒の主張が受け入れられたのである。要求自体はあるクラスの「靴磨き」を出し物として認めるかどうかという他愛ない問題ではあったが、生徒側からすれば「紛争」の中の目に見える成果といって良いだろう。

会議を重ねる教職員

「紛争」時、教職員も、いつ何が起こるか分からない状況の中で、悩み、疲れつつも生徒と向かいあった。度重なる職員会議では、様々な意見が出され、激しい議論が続いたが、何よりも事態を救ったのは、最後には職員会議の決定に全員が従い、全職員が行動を共にしたことである。五月の封鎖予告のときはほとんど校長の専決で、指名された一部職員を中心に警備体制が敷かれたが、十月五日の文化祭の封鎖予告に備えた際は、ほぼ全職員が不測の事態から学校を守ろうと教室に貸し布団を持ち込んで泊り込み、二時間交代で校舎内外を巡回したことが良い例である。深夜、酒に酔った青年が東高を突っ切って近道をしようとしていたとき、野球のヘルメットをかぶり、護身用のバットを持った数人の職員に遭遇して腰を抜かした話は暫く教職員間の語りぐさになった。

「九条問題」終結

生徒心得九条はほぼ一年がかりで討論されたが、結局は撤廃はされず、条文も改正されなかった。ただし、学校側が「顧問・担任の許可を学校長の許可と見なす」「正常な学校運営を妨げたり、政治・宗教目的や事実を曲げたもの、

名誉毀損に当たるもののほかは原則として自由」という趣旨の「運営要領」を生徒に示し、生徒の了承を得たのであった。同時に暴力行為も全国的に下火となり、学園に平和が戻った。この渦の中で幾人かの生徒が「紛争の季節」の犠牲となって退学したのは痛ましいことであった。

紛争は多くの人々に学校のあり方を考え直させ、改革を模索させたが、全体としては「暴力」が「鎮圧」されると共に、旧に復した。

紛争後の虚脱感

全国の高校生たちの改革の夢は挫折感に取って代わられた。紛争後、ある種の虚脱の時代が後を追った。無気力・無責任・無関心といういわゆる三無主義という言葉が流行語になったのはこの時期である。漠然とした社会批判、学校教育批判だけが残り火のようにくすぶりつづけた。

たとえばそれまで何らかの親しみをこめて、教師にはそれぞれあだ名がつけられていたが、この頃から生徒は教師の名を陰で呼び捨てにするようになった。高校生のオートバイ乗車が流行しはじめ、四十六年には県下で初めて死亡者が二〇人の大台に乗った。暴走族の妄動もこの頃から激化した。彼等を中心に「先公」という言葉が教師の代名詞として生徒の中に広がった。

千葉東高も例外ではなかった。生徒たちにとって見れば結果として学園生活が一変したわけではなかった。結局は元に戻っただけではないかと受け止めたものも多かった。事実あれから二〇余年経った現在の生徒手帳には紛争の原因になったときのままの生徒心得九条「集会および掲示は事前にホームルーム担任または顧問教師をへて校長の許可をうける」が記載されているが、あれほどの膨大なエネルギーを費やして確認された「九条運営要領」を記憶しているものは今や誰もいない。

紛争の季節が終ると、本校でも従来見られなかった現象が生じてきた。他人の傘を帰りがけに盗っていってしまうケースが黙過出来ない状態になり、傘立をやめ、昇降口からポリバケツで教室に持ち込むよう対策をとることになった。ガムの吐き捨て、便所の落書きが増え、机の落書きがひどくなり、入学試験検査のときには机の表面をカバーするためにセルロイドの下敷きを全教室に配布せざるをえないほどであった。生徒の心の歪みに対応するために教育相談室が開設された。

生徒会の崩壊と再建

こうした風潮を反映してか四十五年前期役員はついに立候補するものがなく、生徒会役員空白のまま半年が過ぎた。

四十六年・四十七年後期役員も同様だった。とびとびに空白になるのは、とにかく役員がいないことには生徒会予算が成立せず、部活動ができなくなることから、教師たちによって必死に一部生徒を説得し、形を整えたからである。同じく「紛争」を経験したお隣りのある高校はその当時生徒会を廃止して以来再建されていない。

四十六年四月、たまりかねた生徒会顧問から「生徒会正常化」案が職員・生徒に提案され、心ある生徒を動かして、中央委員会を六回開くなど一年がかりで生徒会会則を抜本的に改定し、四十七年五月の職員会議を経て、何度かの調整審議の後生徒総会で決定され、四十七年十二月六日施行された。新しい生徒会規約の前文には次のように記されている。

「我々、千葉県立千葉東高等学校の生徒会の全会員は、自らの責任ある自主的判断と行動を通じて、学校生活のより一層の進歩発展・民主化を計るための組織として生徒会が必要であると確信する…」

生徒と教師のきずなを求めて

教職員は生徒と教師の関係を密にしようと四十五年六月に、一年生全員を二団に分けて宿泊研修会を催した。さらに、紛争時代、教職員側からの改革運動として教職員組合を中心として全国でサマーキャンプ運動が発展していた。四十五年夏には、千葉県でもいろいろな学校の生徒が一堂に会し、人生、友情、愛などについて夜遅くまで討論し、レクリエーションに興じていた。ラストのキャンプファイヤーでは半信半疑で保護者役として参加した教師までが感動の涙を流したという。だが、当該校教師の参加を条件としているとはいえ、校外の第三者機関に生徒指導を委ねるのには賛否両論があり、本校ではこれを学校行事として取入れるほうが自校の生徒に責任が持てるということから宿泊研修会を発展させて、一学年サマーキャンプの実施に踏み切り四十七年から実施した。

第一回のキャンプ場は日光中禅寺湖畔の菖蒲が浜・千手が浜キャンプ場であった。入学して最初の夏休み、生徒たちは狭いバンガローでゲームに興じ、中学校時代の思い出を語りあい、高校生活への夢を語り合った。屋外では燃えない薪の煙にむせ、教師と生徒が励ましあって山頂を目指し、上り詰めた山頂の涼風に身を任せつつ、昼食を分かち合った。千葉東高に活気が戻った。これ以後一年サマーキャンプは東高の行事としてすっかり定着し、白根山菅沼キャンプ場、御殿場中央国立青年の家、富士西湖キャンプ場など場所を変えながら現在に至っている。

木造からコンクリート校舎へ

四十二年、生徒棟（第二棟）、四十五年、管理棟（第一棟）および連絡棟（第三棟）が完成し、千葉東高は木造二階建の黒褐色の建物から白亜の四階建の堂々たる校舎を持つ近代的な高等学校に装いを改めた。四十三年七月にはプールも竣工、校門からの通用路も側溝付きのコンクリート道路になった。

行事の移り変り

新校舎の落成は東高のダイナミックな変貌の一つの象徴であった。例えば、これまで、運動会があった。それは騎馬戦、仮装行列に象徴される、今や思い出の風景になっているものであった。女子はブルマーと鉢巻でダンスを、体育部はグラウンドにマットを敷いて模範演技を披露した。借物競争に見物の父母や地域の人が手を貸し、教師も赤白に分かれて競技に参加した。しかし、時代が進み、スポーツが盛んになり、千葉県でも総合スポーツセンターが天台に作られると、生徒から、本物の会場を使って競技を楽しみたいという度重なる強い要望が出され、これを受けて四十三年十月三十一日、第一回の校内陸上競技大会が開催され、運動会は翌年から廃止された。騎馬戦やダンスは無くなった代わりに生徒たちはマンモススタンドに囲まれた、広いトラックの中で、国体の選手になったかのような気分に酔いながら、幅跳び、高跳び、円盤投げ、砲丸投げで一センチを争い、短距離に、リレーに一秒を競いあった。

また、それまで、冬の最大の行事は耐寒訓練であった。正月ぼけの覚めやらぬ始業式直後からの一週間、希望者とはいうものの全校生徒のおよそ三分の一が参加するもので、柔道・剣道・マラソンの三分野にわたり、まだ夜の明けやらぬ東高のグラウンドや体育館で白い息をはきはき汗を流すのである。最終日の納会での汁粉づくりには家庭科の教師・食物部、母親やOBが腕を振るい、参加者はお椀の温もりでかじかんだ手を温め、たちのぼる湯気で凍った気管を和らげた。だがこれも四十四年から校内マラソンに切り替えられた。場所は検見川の東大グラウンドである。ここはクロスカントリーができる起伏に富んだ広大な芝生の敷地である。係が要所要所に目印の旗を立て、コースを作り、生徒はあえぎあえぎ丘を越え、一気に駆け下った。マラソン大会はその後天台スポーツセンター構内に移されて現在に至っている。また四十四年六月からは校内球技大会も始まった。第一回目はスポーツセンターのソフトボール会場を利用して大会を開いたが、次第にバレーボール・サッカーに切り替えられた。

時代とともにかわるならわし

この間、多くの古き物がなくなっていった。丁度木造校舎の取り壊しと並行するように、四十二年から教師による宿日直制度が廃止され、かわって制服に身を固めた警備員制度が発足した。木造事務室脇の宿直室での泊りにあたった新任教師に年配の教師が、「昔、泥棒が寝ている教師の布団を跨いで行った」などの経験談で脅かすのがならわしだったが、それも過去の物語となった。

卒業式後、父母が教師に酒肴をもてなす謝恩会も旧弊として廃止された。卒業式には全職員にＰＴＡからの記念品とお祝いの折詰、二合瓶の清酒が配られるならわしであったが、これもなくなった。教育費の父母負担の中にこのようなものが入ることに対する批判がようやく強まってきた頃でもあった。またこの頃からマイカーブームに入り、教職員の大半がマイカー通勤するようになり、飲酒運転を誘うようなことは慎むべきという内外の声も高まってきていたことも理由の一つである。古きものとして最後まで残っていたのは卒業生歓送会、いわゆる予餞会であったがこれも四十七年二月を最後に廃止された。

高度成長の中で

教師のマイカー通勤に象徴されるように、日本は昭和四十年代の後半からいわゆる高度成長時代に入った。全国で建設の槌音が響き、東高周辺の風景も一新した。そのしわよせが公害となって社会問題化し、本校でも光化学スモッグ警報発令により、運動部の練習が中断されるようなことが起こり始めるのはそれからおよそ一〇年後である。

木造の西千葉駅舎が改築された。駅から東高までの通りが舗装され、ゴム長や雨靴登校が姿を消していった。途中の交差点にあるひなびた交番も二階建のコンクリートの建物に代わり、その向かいの木造の児童福祉事務所は取り壊されて、自衛隊地方連絡部に生まれ変った。

高度成長の上げ潮ムードは社会に自由な気風、より豊かな暮しを求める願望を呼び起こした。労働運動が盛んとなり、春闘が盛り上がりを見せた。四十七年から五十四年頃まで、四、五月を中心に毎年交通ストライキが決行された。本校もこの対策として、休校や始業時間の繰り下げが制度化された。生徒たちは思いがけぬ休みに歓声をあげたものである。その中でも五十年十一月二十六日から十二月三日までの一週間にわたる国鉄労働組合の「スト権スト」の時は生徒も教師も政府と組合の代表によるテレビ討論を見ながら国民の権利や義務について考えざるをえなかった。

急増する進学率

経済成長と国民の生活向上とともに高校進学ブームが起こり、高校進学率が急上昇した。同時に大学進学希望者が急増し、本校でも就職する生徒が激減した。四十一年三月卒業生の就職は九六名であったが、四十六年三月には三一名となり、この年の六月を最後に生徒の就職模擬筆記試験や模擬面接は中止になった。四十七年三月の就職者はたったの一一名であった。

新設校ブーム

高校進学率の上昇、ベビーブームによる人口の自然増、東京近郊のベッドタウン化、京葉工業地帯の発展による首都圏人口の社会増を反映して、東高を取り巻く地帯に高校新設ブームが到来した。四十七年の千葉南高を皮きりに、四十九年検見川、五十年千葉北と連年千葉地区に高校が新設され、五十九年までの一二年間で普通高校が一五校新設された。これはこの間千葉県下に新設された高校のおよそ二〇パーセントが東高から手の届く範囲に新設されたことを意味していた。

新設校が増えれば増えるほど、東高は年を追って「伝統校」の地位に押しあげられていった。しかも、従来のこの地ではもっとも古い伝統校である千葉高を除けば、あるいは女子高、あるいは実業高校という特色を持っていたがゆえに、共学の普通高校希望者に敬遠され、かわって千葉東高への入学願望が高まり、これが相対的に本校の合格最低点を押しあげていったことは否めない。四十九年には国公立大学合格者は二二名に及んだことはその一つの例と見て良い。しかし、単なる社会的事情だけが東高人気の原因だったのであろうか。

東高人気の秘密

本校は教育方針で一、生活態度の確立助成、二、進路指導の強化充実と並んで、三として男女共学の長所発揮が掲げられている。その説明文には「調和と、清純な雰囲気の中に、男女が互いに理解しあい、共にその特性を生かして、社会の発展と福祉に貢献できるような資質を養う」とある。四十二年には男女共学が成功している例としてＮＨＫテレビの取材があり、昼休みに男女でバレーボールに興じる風景や社会科の班別発表学習で女子生徒が活発に発言している風景が朝の番組で紹介されたりもした。

また、教師の指導も厳しいところは厳しかったが、規則規則で生徒をがんじがらめにするようなこともなく、全体としては伸び伸びしていた。また、本校の努力目標の中で学力の充実と共に、基礎体力の向上が掲げられていることから、特に部活と勉強の両立を主張する点は教職員に共通

しており、卒業生もそれを誇りにしているようなところがあった。こうしたいわば東高気質が次第に地域の中学生や父母の共感を呼び、人気が高まっていったのである。であるから、当然父母も学校に勉強一本やりを期待せず、文武両道・伸び伸びした教育方針を陰で大らかに理解し応援してくれていた。それがまた相乗的に東高の校風となり、多くの近隣の中学生の憧れの的になっていったのである。

2　躍進の時代

国際交流のはじまり

四十六年十一月二日、千葉東高創立三十周年記念、新校舎落成記念式典が東雲祭第一日に盛大に挙行され、職員・生徒は来賓を迎え、記念式典歌に託して新たな将来を誓いあった。その誓いにたがわず創立三十周年を境に東高は躍進の時代に入る。その一つの象徴は国際交流教育の採用であった。四十七年にはＡＦＳおよびロータリークラブによる留学生の交換が始まった。アメリカ・カナダ・オーストラリアから留学生を迎え、またこれらの国へ東高生が飛び立っていった。また千葉市とノースバンクーバー市とが姉妹都市になった関係で、両市間の高校生交流が始まり、本校から第一回の交流使節団が派遣された。四十八年からは日米高校交流プログラムが開始された。カリフォルニア州サンタクララ市のエミール・ブクサー高校との交流が始まり、以後数年にわたり東高生が彼の地を訪問し、ブクサー高生が東高を訪れた。こうして外国人と学園生活を共にすることから、東高生は外国の文化や習慣を知るとともに、日本とは何かを考え、日本文化を他国との比較の中にとらえていった。それは今までの東高のあり方を考えさせる刺激となった。

目覚ましい部活動の活躍

この頃ラグビー部が驚異的な発展を示し、四十七年から連続一〇回にわたって関東大会に出場した。書道部は四十九年、日本武道館主催の全日本書初め大展覧会の団体の部で全国一位の座に輝き、以来五年連続その座を明け渡さなかった。五十一年には放送委員会がラジオ部門で県代表となり、全国大会で入賞を果たした。国際親善という言葉のもたらす平和で愛に満ちた雰囲気、各種コンクールでの華やかな活躍は東高の名をいやがうえにも高め、中学生の東高指向を強めていった。

総合選抜制の導入

四十八年からは学習指導要領の改定に応じて本校の教育課程も改定されたが、この時は従来二年生で振り分けられ

ていた文理コースの選択を三年生に改めた。少しでもモラトリアムを与え、生徒に進路をじっくり選択させようとの配慮からであった。

五十年より総合選抜制が実施された。これは当時漸く学校間格差の弊害が社会的問題になり、既に東京などをはじめ、多くの都府県で総合選抜、または小学区制が実施されるなど、入試選抜制の改革が全国的に話題になっていたことから、千葉県でもこれに踏み切ったのである。四十九年の教育庁指導課の文書では「……高校においても、入学者の学力分布が学校間で著しく差異が生じ、それが固定化することによって、父兄や生徒の間に、いわゆる一流校二流校といった見方を生み出し、それが生徒に無用な劣等感や不適応症状をもたらすなど、高校教育にも様々な弊害を招いております」とその趣旨を表明している。千葉県の総合選抜制は県下の一部の普通高校をいくつかのブロックに分け、上位二〇パーセントのものは優先的に志望校に合格となるが、残りのものはその得点・通学距離その他を勘案して学校群の各校に平等に振り分けるというものである。

東高にとっての総合選抜制

本校は千葉高・千葉女子高・千葉南高・千葉市立高とともに第一学校群所属となった。第一回の学校群選抜の結果、本校はそれまでの入学者の得点にくらべ、得点分布の上限と下限が大幅に広がった。つまり、二〇パーセント条項の規定により、振り分けを嫌った一部受験生は安全を期して、本来、より合格最低点の高い学校へ出願すべきものが本校を希望したことによって、入学最高点は大幅にアップしたといえよう。また、一年目を教訓にして、受験生、中学校、塾の側は鋭い傾向と対策を講じたので、その結果二年目、三年目と本校受験生の学力検査平均点は着実に上がっていったのである。

大学進学率の飛躍的向上と共通一次試験

東高の人気上昇に比例して、大学進学実績は劇的に飛躍した。すなわち、四十九年三月卒業生の国公立合格者は二二名、五十年三月は三二名、五十一年三月には四六名に達し、この年本校初の東大合格者を出した。

だが、進学熱は受験競争の激化をもたらし、高校教育界に様々な歪みが現われるようになった。大学入試に抜本的手直しが行なわれることになり、五十二年十二月、共通一次試験が全国で実施された。受験生は戸惑い、悩んだが、この年三月の東高卒業生は国公立五四名、私立二四一名の合格者を出し、千葉大合格者は三八名を数え、出身校別で県下のトップとなった。また、現浪あわせて国公立合格者

が初めて一〇〇の大台を突破したのである。しかも、この年の卒業生は総合選抜制による本校第一回卒業生であった。五三年、総合選抜制二期目の卒業生は国公立で八二名の合格者を出し、千葉大進学者数は五三名に達し、その出身校別で全国一位の座を獲得した。千葉東高にとって総合選抜制は本校の特色を一層充実させるとともに、その廃止はまた、各校毎の偏差値輪切りを激化させたものの、本校にとっては実施前の年の平均点をなんと六〇点も上回る結果となった。

総合選抜制の廃止

ちなみに、総合選抜制時代に県教育庁の指導主事をしていた坂倉孝氏は、県内のある研究機関誌上で、総合選抜直前の四十九年入学の生徒と総合選抜制下の生徒の現役大学合格者を比較しつつ、「第一学校群において、千葉高の成績（現役大学合格者数）は四〇パーセント減である。それと対照的に千葉女子高、千葉東高、千葉南高、千葉市立高の上昇は著しい」と分析し、このまま行けば千葉高をトップとするピラミッド型から八ケ岳型に移行するチャンスだったし、学校間格差解消や入試競争の緩和に大きな成果があったはずだと述べている。本校は総合選抜制の実施と、川上県知事の公約にもとづくたった三年での廃止という「政変」をバネに進学校の地位を確立したといえば皮肉になるだろうか。

文武両道の追求

これ以後、進学者の実績は一貫して向上し、国公立入学者は常時一〇〇名前後の実績を上げ、私立大では早稲田・慶応など、一流校への進学を恣にしている。

ただし、ここに至るまで、東高の教職員・父母は単に大学進学率、有名大学進学一途にあらゆるものを犠牲にして邁進してきたというものでは決してない。前述したように、男女共学、文武両道の充実は一貫して追求してきた。このことは進学実績における一つのピークともいえる五十三年合格者のうち、国公立合格者八二名中の四七名、私立合格者一六五名中の六四名が多忙をきわめる生徒会役員、部活動の熱心な部員であったことに象徴される。ましてや部活に高校時代の全エネルギーを注ぎ、浪人して捲土重来を期したものは、部活での辛い練習、試合での緊張、時間の無駄のない利用法などの経験を受験勉強にフルに生かし、現役生以上に目的を達成していることは言うに及ばない。父母もこの方針を良く理解し、生徒の試合や発表会に足を運び、観客席から声援を送り、共に喜びの、また悔しさの涙を分かち合ってくれた。こうした父母の存在を抜きに東高

の発展を語ることは出来ない。

東高躍進の尊い礎

四十三年、若さと情熱で生徒に接していた山口道夫教諭が夭折。さらに学園紛争時代三学年主任として紛争の波の中で生徒の矢面に立ち、また心ならずも退学する生徒を見送らねばならない激動の時期を支えてきた藤本明弘教諭が五十二年に亡くなられた。翌年、おおらかさと細やかさを身上として東高音楽教育に献身し、後の音楽部の栄光の礎を築かれた西山タカ子教諭が亡くなられた。この前後、生徒にあって、一時は手術で身体の一部を切り取ってまで東高に通い続け、ついに病気再発のため帰らぬ人となった何人かの者もいた。彼等の生への努力、東高への愛校心に対しては言葉を詰まらす以外になす術を知らない。本校の発展の陰に、このような方々の犠牲、それによる無言の激励のあったことを職員・卒業生ともに忘れてはならない。

3　県下に、全国にその名をとどろかす千葉東高—創立四十周年前後—

施設の充実へ

創立四十周年を前に東高は第二の建設の時期を迎える。五十五年、木造のまま取り残されていた通信制の校舎が取り壊され、第一棟の西側に接続する四階建コンクリート校舎に変えられる工事が開始された。同時に現在の中庭にあたる、当時部室として使われていた旧校舎を取り壊した。この際、千葉市大空襲のときのものと思われる錆付いた焼夷弾の空薬莢が出てきた。当時はこの辺りも猛火に包まれたのだろうか。それとも知らずにその跡に校舎が立てられ、戦後三五年を経て日の目を見たものである。これはしばらく社会科の貴重な教材として歴史の時間に生徒に提示されていたが、五十周年を記念してタイム・カプセルに入れて長く保存することになった。

グラウンド大改修

同年、グラウンドの総合整備工事が着工した。文武両道の追求という方針通り、本校は部活動が盛んで、余り広くないグラウンドにはいつも運動部員がひしめいていた。野球部とサッカー部、ラグビー部は時間帯を分けて折り重なるようにしてグラウンドを使用していた。その間を縫って陸上競技部がランニングを繰り返していた。そもそもサッカー部自体、その活動を承認されるまではあちこちのグラウンドを流浪するという苦労をなめていたから、ソフトボール愛好の生徒が同好会を作り、部として承認されるまでに長年を要したのもグラウンドの狭さゆえである。そこ



グラウンド改修工事始まる

へきて従来の校門から玄関まで通る通用路はそうでなくても広くないグラウンドを二分し、その分使用範囲を狭めていた。今回の整備は通路を校地の西端に寄せ、グラウンドを寸土の無駄なく生徒に使わせようとの配慮から計画されたものであった。

学校のたたずまいは一変した。先輩たちが毎日登下校した校門とそれに続く小柄な松並木の通用路、その松の下の芝生の土手は姿を消し、バレーコートとテニスコートを分ける柳の並木もなくなった。門の脇に聳え立っていたゆかりの老木やバックネット裏のざくろの木も姿を消した。錆びたバックネットやテニスコートのフェンスは撤去され、巨大なコンクリートポールを林立させた防球ネットがグラウンドを取り囲んだ。一時は校庭から緑が姿を消し、あたかも新設校のようになってしまった。この大変貌には過去を懐かしむOB・在校生や職員から様変りを嘆く声も少なくなかったことは確かである。

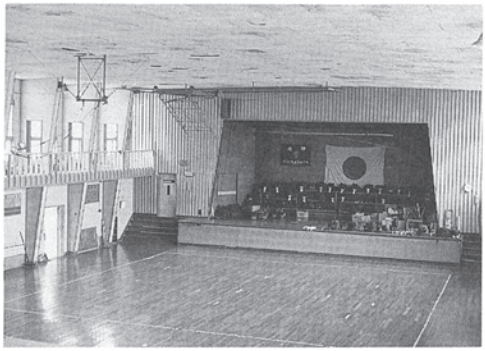
だが、この結果、野球場のダイヤモンドが整備され、陸上用のトラックは若干変形しながらも三〇〇メートルの大きさになり、短距離用の直線コースも十分確保された。野球部のライト線へのファールボールが下校途中の生徒を襲う危険もなくなり、野球部員は安心して打撃練習ができるようになった。

ただずまいを変えた東高

新しい通用路の両脇には本校の伝統を記念するとともに、永遠の繁栄を願って、古事記・日本書紀の太古の時代から日本に伝わる椿の木が植えられた。これは久留里産の「太神楽」七〇本である。そして玄関前には九十九里から大型トラックで運んできた、その巨大さと常緑の葉に本校の発展と繁栄を象徴するかのような楠の巨木が植えられた。出来たばかりの通信棟の突端には本校の校章の一部である月桂樹が植えられた。旧通路を彩っていた松の並木はグラウンドと校舎を隔てる境に一本一本丁寧に移植された。真夏の移植作業であったが、ついに一本も枯れなかった。松の

下には芝が植えられ、かつて玄関前にあった大きな庭石とともにバックネット裏を小さな庭園にし、所要で訪れる父母や来客、登下校の生徒の心を潤している。校庭の南に移ったテニスコートには道路塀に沿ってまてばしいの木が植えられ、年を経るごとに豊かな緑を増し、かつての柳に代わって夏の日のテニスコートに涼しい木陰を作っている。

木造校舎の部室にかわって、第二棟校舎の東側にしゃれた部室が建設され、焼夷弾の掘り出された木造校舎跡は小さなコンサートや小集会のできるコンクリート敷きのモダンな中庭に生まれ変った。周囲を昔ながらの青桐やヒマラヤ杉が囲んで、それらは教室に緑の光を送り込んでいるが、中央に大きく育っている欅の木が現在でも心持ち東に傾いているのは、中庭が完成した五十六年秋に激しい風台風が襲い、植えたばかりの欅の木を直撃し、このために傾いたのである。現在は東雲祭の縁日の出し物会場として、昼休みのゴム毬野球・バレーボール・コートとして生徒に利用されている。



旧体育館内部

部活動更に発展

このグラウンド総合整備工事に呼応するかのように、五十五年の運動部の活躍は目覚ましかった。ラグビー部は関東大会の常連であったが、この年も、新人戦、総体ともに県大会優勝という快挙を果たした。だが、この年の正月、ラグビー部監督小川武久教諭が思わぬ交通事故で亡くなられていた。若潮国体のフィフティーンとして千葉県教員チームを優勝に導く原動力となったほどの、抜群の力量を持つ、兄貴のように明るく厳しい小川監督に絶大な信頼を寄せていた部員たちは衝撃に打ちひしがれたが、悲しみを乗り越え、スタンドに遺影を掲げて奮闘したのであった。また女子山岳部が前年の男子優勝に続いて総体で優勝し、全国大会に参加した。ソフトボール部が総体でベスト4に進出、陸上競技部は三部門で関東大会出場を果たした。また女子バスケットボール部も県新人戦でベスト8に進出した。

模範を示す教職員

こうした各部の目覚ましい活躍の陰には教師たちの自主的研究の努力が反映していることも見逃せない。理科の野村典平教諭は昆虫の羽化などを徹夜の観察で写真に撮り、五十二年、五十四年と全国自作教育教材コンクールで全国最優秀賞を取り、生徒を励ました。また、養護教諭の安田末代教諭は長年の功労により、養護教諭五十周年記念会で文部大臣表彰を受けられ、看護科の永井弘子教諭は産業教育奨励賞を受賞されている。歴代の音楽・美術・書道の各先生方も毎年のように個展・リサイタルを開き、研鑽と努力の見本を生徒に示している。さらに東高の歴代校長はほとんど千葉県教育功労賞並びに文部大臣賞の表彰を受けていることも、生徒に東高生としてのプライドを沸き立たせる一因となっている。

4　創立四十周年以後の千葉東高―内面的充実の時代

中学生の「憧れの東高」へ―

五十年代前半には本校はすでに有名進学校の名を県下に鳴り響かせていた。この頃数年おきに取った生徒の意識調査でも、本校入学の動機として四十九年には「通学に便利」という消極的な回答がトップで三四パーセントだったが、五十五年には「東高に憧れた」が、四十九年の二一パーセントに対し七三パーセントに飛躍している。したがって教師たちは一二〇校前後の中学校から集まってくる各中学でのトップレベルの生徒を預かることになる。と同時に彼等の多くは現今教育界の最大の悩みとなっている偏差値体制にどっぷりとつかり、そしてそこをくぐり抜けてきた戦士と規定しても良いだろう。したがって、良きにつけ、悪しきにつけ進学校に則した体質改善をせざるをえず、また進学校としての新しい悩みに遭遇することになった。

「進学校」への脱皮

部活動でいえば五十三年から、今まで在校生部員と共に寝泊りして指導に当たっていたOBの合宿所同宿は一切禁止となった。朝練習も原則として禁止となり、下校時間を厳しくして無制限な部活動を規制した。保護者からの声が強くなってきたのである。

また生徒は皆、事の善悪をわきまえ、つまらぬことで教師と衝突したり、枠を踏み外したりすることがない。時代の流れもあって、五十四年から学帽は事実上廃止された。このため制服を脱いだ時の男子の身元を明らかにするため、ワイシャツに校章を、との議論もあったが立ち消えになった。自習時間の教師による監督制がいつしか廃止された。監督がいないからといって他の授業が妨げられたり、生活

指導上の問題が生ずるということもなくなったからである。同じような理由で夏休みの途中の登校日も設けないことになった。五十七年から三年三学期の家庭学習中の定期的な登校日も廃止された。また各行事も前年の方式にもとづいて進めてゆけば滞りなく進行する。こうして東高の年間行事計画は次第に合理化され、スマートになっていった。

高校紛争の際に各校で粉砕のターゲットになった卒業式についてみると、本校では紛争直後から「仰げば尊し」が廃止され、ステージから来賓席・校長・教頭席が撤去されていたが、紛争時代が遠くなるにつれて生徒・教師から見直しの声が出、「仰げば尊し」が復活し、来賓席などがステージ上に戻り、答辞も生徒代表が参列者に背を向け、校長に対して読み上げる旧来の形式に戻っていった。紛争直後の卒業生は答辞作成委員会を作り、集団で三年間を総括し、代表が読み上げるというものだったが、それも過去の思い出の彼方に消えていった。

様変りする東高生

新しい問題が起こってきた。生徒のなかには本校の文武両立の方針に反して学校に大学進学の目的達成のみを要求するものも出てきた。彼等は文化祭やスポーツ大会を休んで予備校に通うようになった。教室の掃除責任を果さずに東京の予備校に駆けつける生徒も出てきた。また、教師も反社会的行動に走る事もない限りは生徒に付き切りで指導する事もない。教師と生徒、生徒と生徒の間の人間関係が希薄になった。新しい生徒たちは核家族化による向う三軒両隣といった地域関係の崩壊と、それに伴うガキ大将を中心とする地域の子供集団の消滅の中で成長してきた生徒たちなのである。

学習指導要領の改正による教授内容の量的、質的変化は、学校現場に詰め込み教育なる造語を生み、受験指導中心の学校教育の是非が以前より増して取り沙汰されるようになった。心のつながりに変わって、細かい校則、教師の体罰の横行など管理主義的指導が教育界全体に広がって来るのもこの頃である。校内暴力と力の指導の悪循環が中学を中心に教育荒廃の名でマスコミを賑わすようになった。

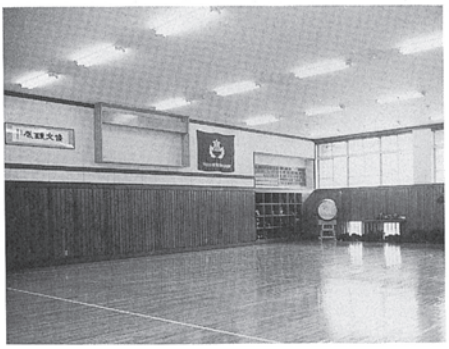
中学の教育荒廃のあおりが高校に持ち込まれてくる。本校も例外ではない。授業の始め・終りの挨拶で生徒は教師に頭を下げなくなった。司書の先生が少なからぬ図書の紛失を嘆き、図書室内での飲食や残り物の放置に頭を悩ましたうえ、「館内飲食禁止」の張紙をせざるを得なくなった。養護教諭は生徒が保健室を休憩室のように使い、留守中に冷蔵庫の中の私物の牛乳がなくなる事に驚いていた。こう

した風潮に関連して遅刻も増えてきた。五十八年には遅刻する生徒は一日平均二〇人程度だったが、三年後の六十一年には三九人へとほぼ倍増した。

複雑な生徒の心理

こんな頃、五十六年九月の東高の東雲祭にショッキングな展示があり、毎日新聞の取材するところとなった。当時の一年生が東高生一九〇人にアンケートし、その意識を調査したものであるが、その中で「先生を殴りたいと思ったことがある」という項目に五四パーセント、「自殺を考えたことがある」には女子の五八パーセント（全体では五一パーセント）の生徒がマルをつけたのである。前年の相談係のアンケートでは九〇人の一年生のうち、四四人が劣等感に悩んでいるという結果が出ている。憧れの東高に入学していながら、一方で現実の教育体制や、学校・教師に反感を持ち、ひそかに自分に劣等感を持つという、進学校生徒独特の複雑な感情を如実に表わしている。

不登校・ノイローゼになる生徒が急増した。五十九年三月のＰＴＡ会報では「学校不適応に対する家庭教育の備え」という生活指導部長の記事が載った。そこでは「家庭教育においては両親の意志統一が必要。母親は世話をやきすぎないよう、父親は仕事至上主義で子育て回避型は良くない。また過度な期待・過大な目標を負わせることは子供を殺す。子供の適性を見極め、自分で学習の目標や計画を立てさせることが必要。家庭に団欒（だんらん）の場を、個室を与えただけで家庭の中に会話がないと子供部屋が治外法権になる。体を動かす活動に参加させることは勉強を効果的にするためにも必要」など、現代の教育問題を先取りするような内容であるが、これも、進学校ならではの問題への対策の現われであろう。六十年には本校卒業生がビルから飛び降り自殺をし、こうした悲しい記録はその後も後を絶たない。



武道館内部

生きつづける文武両道の伝統

もちろんこれは時代の反映であり東高に限った事ではないし、相変らず部活動は盛んで、五十八年度の生徒の部加入率は平均八〇パーセント、二年生においては実に九二パーセントという他校に類例のない数である。が、

社会風俗の急速な変容の影響で、生徒の趣味・嗜好も敏感に変化し、この間、体操部・ダンス部・社会科学研究部・聖書研究同好会・JRC（平成二年再建）・弁論部・話術研究同好会などが姿を消して行った。一方、漫画文化の隆盛は漫画研究同好会を生み、フォークソング同好会がロックの波に乗って登場し、軟式庭球部は国際的テニスブームの中で、男子は五十九年、女子は六十一年硬式庭球部に移行した。窯の設置以後は陶芸同好会も発足した。

また、部活動においても、ラグビー部は関東大会の常連に甘んずることなく奮闘し、五十八年、ついに念願の「花園」出場を成し遂げ、以後六十四年までに都合四回の全国大会出場を成し遂げ、特に六十年度大会では千葉県未踏の三回戦に進出し、六十一年元日には広島工業と戦った。

文化系では音楽部が六十三年度と平成元年度においてNHK全国学校音楽コンクール関東甲信越大会で連続して金賞を獲得し、特に元年度の全国大会では銅賞の栄誉に輝いた。美術部はこの年、全日本学生美術展で二名が特選に選ばれた。

教師も生徒に負けていなかった。六十二年に理科の盛口襄教諭が試験管の中でダイヤモンドを合成するという大発明を成し遂げ、テレビで全国に紹介されるという快挙をやってのけた。そして、これに触発された化学部の生徒がこの研究を発展させて「簡易熱フィラメントCVD法によるダイヤモンドの合成」にまとめ、平成元年度千葉県児童生徒化学論文展で最優秀賞を獲得した。

「灰色の受験校」を避ける努力

学校側も行き過ぎた受験競争に東高が巻き込まれないよう努力した。五十七年度の学習指導要領の改定は、従来の詰め込み主義の反省にたって「ゆとりと充実」をうたっていた。東高ではこれをとらえ、生徒がゆとりを持って授業や学問に取り組めるようにと、教育課程改定の準備を始め、二期制の導入、一単位時間を九〇分とするなどの斬新な案を検討したが、教職員の定員や各教科の単位の配分などで壁にぶつかり、この案は御蔵入りになった。

しかし、少しでも理想を実現しようと、三年生において「自由研究」なる二単位時間を設定し、生徒に受験知識ではなく、真の学問に触れさせる時間として提供した。その内容は「近代における自我と愛」「人権と現代」「英文連読演習」「有機化学」などのユニークなものであった。「自由研究」は、その後教師の転任などによる科目としての不安定要素、自学自習の本来の目的を必ずしも満たさないことなどから見直しの声が出、平成元年度には選択科目に解消

されたが、丸暗記的知識の詰め込みを克服しようとした努力は「伸び伸びした教育を」との東高の伝統に前向きの貢献をしたといえる。

一方既に四十八年度以来、文部省は学園紛争の反省にたって、学習指導要領の中に「必修クラブ」を盛り込み、生徒と教師の「ふれあい」の時間としたが、これまた、施設・設備の不足の問題、生徒の多様なニーズに応ずべき教師の不足の問題、週一回だけの時間割の中の「ふれあい」の限界の中で、多くの高校では旧来の部活動に吸収されていった。本校も、一部のクラブを除き、部活動と連動して進められている。公立高校を生徒にとって魅力あるものにするには更に深めた国民的討論が必要であろう。

ピークを迎える東高

このようなプラスマイナスの錯綜する風潮の中にあって大学進学率は向上の一途をたどり、六十一年一月には三年生の進学希望者は九九パーセントを越え、国公立志望者は八三パーセントを上回った。六十二年三月には大学合格者は国公立一四三名、私立三一五名となった。

しかし、ここまで来れば東高もこの後相変らずうなぎ上りの発展ということは理論的にも難しくなる。大学合格率は高値安定という状況を呈してくるし、部活動も連続して覇権を維持することもそう簡単なものではない。東高はいよいよ充実期に入ったといえるであろう。

看護科の独立

東高五十年の中葉を飾る出来事としては、四十一年に東高の一翼をになって発足して以来、二〇年間、県下に先駆けて、命を預かる使命を持った看護婦を育成するべく設置され、その目的遂行のために実績を重ねてきた衛生看護科が五十九年、若葉看護高等学校として独立し、東高から去って行ったことであろう。科は異なっても、看護科の生徒たちは実に積極的に生徒会運営や部活動に参加し、この間の東高の発展に大きく貢献していた。

それだけに、分離問題に直面した看護科在校生の心情は複雑だった。教師と生徒は集会やクラス討議を重ね、東高入学の看護科生徒は卒業まで困難を承知のうえで東高の課外活動を共にするというけなげな決意をし、



衛生看護科記念碑（裏面）

部員は幕張から毎日東高に駆けつけて、普通科生と喜び、悲しみを共にした。こうして六十一年三月、最後の看護科生が本校体育館での卒業式に臨み、東高卒業生として巣立って行ったのである。

彼女たちは去るに当たって東高の玄関前の植込みに校章の月桂樹と看護のシンボルであるランプのマークを組み合わせた小さな記念碑を残して行った。今もそれは芝生の中に可愛らしい姿を留めている。

校舎管理の機械警備化

五十七年には高校の警備員制度が廃止になり、機械警備に変わった。人間と違って機械は「待った」や例外が通用しない。これによって東高の教育活動にマイナスが生じては困る。本校教師は教職員の勤務時間の厳守と部活動指導・教材研究その他の残業などの教育活動との矛盾をどう統一して機械警備を導入するかを熱心に討議し、結果として全員一致でもっとも合理的な解決策に到達した。現在、機械警備になって以後、生徒も教師も何不自由なく部活に、教材研究に建物を自由に使っているのは東高の他校にないリベラルな面の反映ということができる。

施設・設備の充実

施設設備も、六十年五月の格技館落成をもって大建築工事は基本的に終り、自転車置場の創設、屋上補修工事、校地を囲む塀の改築といった工事がなされ、同窓会寄贈の大きな校章が正面玄関に掲げられ、朝日に輝いて登校する生徒を激励している。

この年、茨城県筑波で科学万博が催され、全校生徒はこの地を遠足の地に選び、最先端技術の粋に目を見張った。コンピュータに象徴される情報化社会への我が国の移行は目覚ましく、それと並行して学校管理も大きく変わってゆく。

この年から進路指導室にコンピュータが導入され、模擬試験の成績などのランキング・偏差値などが短時間でデータとなって教師・生徒に還元されるようになった。

六十三年よりＦＩＮＥシステムを導入し、受験産業から全国の受験情報を受け取り、新しく導入された入試センター試験にも対応しつつ、進学態勢を一層充実させることとなった。

本校の入学学力検査試験処理にもコンピュータが利用され、入試業務は大幅に簡素化された。平成二年からは学期末・学年末のデータもコンピュータにインプットされるようになり、平成三年度からは各教科の準備室に一台ずつコンピュータが配備されることになった。教師たちはこうし

て出来たゆとりの時間を教材研究や生徒との触れ合いに利用することになる。また、高性能印刷機、コピー機も設置され、生徒に配布する資料・プリントづくりに大きく貢献している。

かつてない大地震発生

六十二年十二月十七日午前十一時八分、突如かつて経験したことのない大地震が千葉一帯を襲った。震度五～六、マグニチュード六・六の千葉中部沖地震である。幸い生徒のほとんどは学期末の変則日程のため下校していたが、学校側は直ちに残っている生徒を校庭に避難させ、一安心したところで下校を命じた。校内はいたるところに亀裂が生じ、洗い場のタイルが剝落した。事務室の受付け窓上の大きなガラスが割れて落ちた。職員室のロッカーが倒れ、化学室の薬品が落下、美術室の高価な石膏像が粉々に砕け散った。校舎の老朽化に拍車をかける忌まわしい災害であった。その前年の八月二日、本校に落雷があり、電気系統の一部が故障したのも珍事であろう。

地震後の大改修

だが、六十三年には研究会や生徒の合宿に大きな貢献をすることになるセミナーハウスが完成した。平成元年には全館の水道管が取り替えられ、これにともない家庭科調理室も全面改装された。体育館の古いパイプ椅子が交換され、教室の傷ついた机椅子が交換された。久しく待望されていた工芸室も新設され、生徒は粘土をこねながら、造形の喜びを味わうことができるようになった。防球フェンスが増設され、グラウンドやテニスコートの土が入れ替えられ、散水施設が改善された。

地震によるひびなどで損傷、老朽化した校舎に対し、幸いなことに平成二年度に第二棟（生徒棟）内外の塗装・床の張り替え・教室出入り口の交換・生徒ロッカーの新装・便所の完全改修などの全面大改修が夏休み中に行われることになった。教師も生徒も机・椅子や備品の移動と復元に汗を流したが、校舎は完成当時から二四年ぶりに、見違えるような清潔さと明るさに満ちた建物に生れ変わった。平成三年には体育館南側に新たに部室ができるなど、本校の施設の充実は歴代校長の努力もあって目を見張るものがある。

このため昭和四十一年、本校の施設整備の促進と円滑化をはかることを目的に二三年間活動してきたＰＴＡ期成会は平成二年をもって基本的に所期の目的を達したとして解散され、平成三年度からは教育振興費と名を改めて徴収することになった。施設・設備面でも東高は充実期に入った

といえよう。

新しい環境のもとで

千葉東高を取り巻く環境も大きく変わった。遥か以前に遡るが、田畑デパートの火事や千葉経済学園の火災、本校門前の家の火災などは火の粉や煙が本校にまで降りかかり、肝を冷やすようなこともあった。

生徒の通学に関しても、道路舗装の充実から自転車通学が飛躍的に増えた。それはまた自動車の増加による交通渋滞のため、バス通学に支障を来すようになったからともいえよう。このため生徒指導部の重要な指導分野に自転車の安全指導が加わった。

電車通学生にとっては総武線に東船橋、幕張本郷が新設されたこと、京葉線が開通したことも若干の便利さを誘っているであろう。特に平成三年にモノレールが千葉駅まで開通したことは一層東高通学を便利にするとともに、より広範な中学からの東高入学希望者の増加を呼ぶであろうことが予想される。なお、本校の裏を通って旧鉄道連隊演習場を引き取って利用していた国鉄レールセンターの軌道が外され、アスファルトの道になったのも二～三年前のことである。午後の定期便が作草部郵便局前の遮断機のない踏切を通過する度に甲高い警笛を鳴らし、昼下がりの授業を一時中断させ、生徒の居眠りを覚ましたのも懐かしい思い出となった。

新しい峰をめざして

平成三年五月十五日、千葉東高校は創立五十周年を迎えた。一週間に及ぶ式典行事のうちにはノーベル医学生理学賞受賞の利根川進氏の講演を配し、式典歌は作詞が友竹辰、作曲が間宮芳生（みちお）という堂々たる顔触れであった。式当日には沼田県知事から直々に祝辞を頂き、来賓には各校の校長、多くの卒業生、旧職員、父母が居並ぶという盛大なものであった。合唱コンクールは東高の歴史と伝統に恥じない高度な力量を多数の来賓の前に披露した。

今、千葉東高等学校は半世紀の壁を破った。都川べりの千葉市職業補導所の建物を仮校舎として教職員一四名、生徒二二〇名でスタートした学校は教職員六八名、全校生徒一二五六名を擁する学校として、その所在地轟の町の名にふさわしく全県下に勇名をとどろかす、押しも押されもしない名門校として聳え立ったのである。

二　全日制課程衛生看護科

はじめに

本校五十年の歴史のうち昭和四十一年四月から昭和六十一年三月までの二〇年間、ここに衛生看護科が設置され看護教育が行われた。巣立っていった卒業生は、総数八六〇名を数える。

高齢化社会に突入した現在、ますます看護職への期待は高く卒業生は、それぞれの立場で有意義な活躍をしておられ、心強い限りである。

また本衛生看護科は、昭和五十九年、千葉県立若葉看護高等学校創立に伴い、その母体として移行、単科高校となった。

その伝統と実績は確実に受け継がれ、若葉の恵まれた学習環境のなかで、地域社会の要請に答え得る生徒の育成を目指して、いよいよ発展している。

このたびの校史発刊にあたり、二〇年間の衛生看護科の足跡が記念碑と共に残ることを願って、本校に設置されるに至った経緯と、発展的にその役割を終えたこと等を、纏めた。

1　衛生看護科設置にいたる時代背景

昭和三十年代半ばからの日本経済急成長に伴い、医療需要は急速に高まり、看護要員の不足が深刻になった。

当時の我が国看護教育機関は、五校の短大の他は、各種学校としての養成機関にまかされていた。

なかでも准看護婦養成施設は、教育機関であると同時に労働力確保の感があったことは否めなかった。そのうえ臨床実習では、徒弟制度の色が濃く先輩が後輩を指導する技術教育に重きが置かれていた。中学校卒業後二年間の専門教育を終えると、都道府県の准看護婦試験に合格しなければならないから、年齢や能力に応じた教育を行うことが難しく、盛りだくさんな内容を難解な表現方法や、医学用語の引用などにより指導せざるを得ないのが実情だった。また高校進学率が急上昇したことに伴い、入学志願者は減少し、入学した者の学力や意欲の不足も問題となった。

適性ある看護要員を求める声が高まると共に、その養成を各種学校から学校教育法に基づく教育にするべきであるとの主張が強まり、文部省初中局職業教育課では『准看護婦養成のための教育を高等学校教育に取り入れることが出来るか』について検討を進めた。

中央において、看護教育の向上と医療の近代化に即応できる看護婦養成が検討（註1）されているおり、全国に先駆けて、昭和三十九年四月神奈川県立二俣川高等学校（現在の神奈川県立衛生短期大学付属二俣川高等学校）が衛生看護科の単独校として設立された。

註1

① 昭和35年8月　文部省大学学術局看護学視学委員は、「准看護婦教育を高等学校の教育課程に組み入れて学校教育にのせる」意見を提言

② 昭和37年11月　文部省中央産業教育審議会が行った「高等学校家庭科教育の振興方策について」の建議の中で「女子の適職分野を開発するため、高等学校に新たに女子の職業学科たとえば准看護婦を養成する学科などを設ける必要がある」と述べる。

③ 昭和38年3月　厚生省医療制度調査会が、「医療制度全般についての改善の基本方策に関する答申」において、「看護教育を振興するためには、教育機関を学校教育法上の学校とする具体的方策を検討する必要がある」と述べる。

④ 昭和38年8月　文部省初中局職業教育課は、准看護婦養成施設の高等学校への転換の機運が高まったのは、次のような理由によるとの意見を述べる。

＊ 医療の進歩に対処するため看護者の資質を向上させる必要がある。

＊ 患者との人間関係を良くするためには看護教育においても、技能教育だけでなく一般教養面での教育を重視する必要がある。

＊ 高校進学率の上昇に伴う、准看護婦養成施設への入学者の減少等により、看護者の不足傾向はますます深刻となる。

＊ 後期中等教育の拡充という社会的要請にも合致する。

など

⑤ 昭和39年2月13日付　文初職第88号「高等学校における看護教育を主とする学科の設置について」の文書をもって、この学科設置の基本方針、高等学校における看護に関する学科の目標、学科の分類および名称、学級規模、教育課程、施設・設備、教員組織について示し高等学校における看護教育を位置付けた。

これには、高等学校における看護に関する学科の目標について「准看護婦養成というような幅の狭いものだけではなく、女子の一般教養としての家庭生活に必要な衛生・看護などに関する知識および技術を習得させるとともに、看護に関する専門知識・技術を必要とする仕事に従事する者を養成し、あわせて社会人としての人格識見を養う、というように幅広いものでなければならない。」とし、看護に関する学科は、高等学校設置基準第六条第二項にいう「厚生に関する学科」に該当すること。教科・科目は学校教育法施行規則別表第三に規定する「その他特に必要な科目」に

該当することなどが述べられ、時代の要請に応じて弾力的に運用することができるとした。

⑥　高等学校看護科の教育課程は、高等学校の学習指導要領の定めるところにより編成すると同時に、卒業者が准看護婦試験の受験資格を取得するためには、指定規則第八条第三号に定める教育内容に合致しなければならない。

（文部省大学病院課資料）

2　本校に衛生看護科が設置された経緯

当時県下は人口増に伴う急激な医療需要の増加が、深刻な看護要員の不足を来たした。また本県でも高等学校進学率の上昇は、准看護婦養成所入学志望者減少の一因となった。前項で述べたような時代背景であったから、当時の高木教育長（県医師会副会長）の肝入りで、県立高校に衛生看護科を併設するべく調査が始められた。折しも前述のように、昭和三十九年、神奈川県立看護高等学校が設立され、全国の注目を集め、翌四十年には十六学科の新設を見、その増加は著しいものがあった。

本県でも県下数校の候補があげられ、入学希望者のアンケート調査を行う等、設置にむけて具体的な取り組みがなされた。

県下に一校ということから、通学に至便である本校にしぼられ、ちょうど校舎全面改築の時期であったから、建築の促進を条件として、衛生看護科の併設が取り上げられ、職員会議を重ね、検討の結果、決定したということである。

引き続き教務部による調査・学校視察が行われ、この年（昭和四十年）十二月、千葉県教育委員会より文部省あて千葉県立准看護婦学校指定申請が提出された。

昭和四十一年二月には教諭一名が発令され、教育課程及び施設・設備の検討調査に当たった。以下その主なものを列記する。

二月二十八日　第一回生　志願者数＝四八名　受験者数＝四七名
三月五日　合格者発表＝三一名
三月九日　玄関脇会議室を実習室に転用するべく工事始める
三月十日　教育課程案を教育委員会に提出
教科書の選定　実習服デザイン発注
三月十一日　非常勤医師講師　手続き上の問題で全員取り消しとなり苦境に立つ
三月十六日　非常勤医師講師及び実習病院依頼の件再交渉により承諾を得る
三月二十八日　備品購入計画具体化　入札準備・予算提出

＊　千葉県立千葉東高等学校衛生看護科設置当初の概要

課程・学科　　全日制の課程・厚生に関する学科

修業年限　　三年

生徒数　　定員四〇名　（三学級）

昭和四十一年四月一日　保健婦・助産婦・看護婦法（以下「保・助・看法」と略す。）第二二条第一号に基づく学校として文部大臣の指定を受ける。

昭和四十一年四月七日　第一回生　入学式

入学許可＝三〇名　校長　内藤貫一

（この年全国衛生看護科　三七学科となる。）

実習施設

校内＝玄関脇の会議室を改造し、水道・湯沸かし器及びベッド一〇台を用意して実習室とした。リネン室及び器材室は中庭に臨時のプレハブ教室を急築

校外＝指定病院として国立千葉病院（千葉市椿森四一二）の協力を得て、四十二年度よりの（二・三年次）実習計画を立案

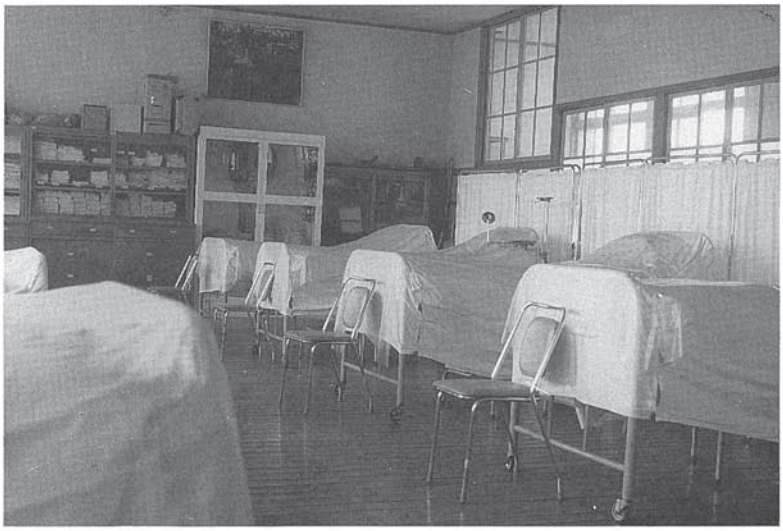
衛生看護科専任職員　教諭＝一名　実習助手＝一名

事務職員＝一名

医師講師（非常勤）四名

3　教科の目標と教育課程の変遷

前述したように設置当初、「学習指導要領」に示された



衛生看護科実習室

目標も、検討するだけの期間もなく、パイオニアである神奈川県立二俣川高等学校をモデルにした。

すなわち「現代女性としての教養を高めると共に、実生活に役立つ教育を施し、また将来家庭の主婦として子女の育成、家族の厚生に必要な生理医学についての知識と看護法を習得させ、人間性の涵養と品性の向上につとめる」を目標とした。(註2)

教育課程は(註1⑤⑥)にあげたように「その他特に必要な教科」に位置付け、職業教育を主とする学科として、普通科目の必修単位数を編成し、同時に准看護婦試験の受験資格を得るため、「保健婦・助産婦・看護婦学校養成所指定規則第八条別表四」に定める教育内容に合致するよう専門科目をも編成する必要があり、目標と同様、神奈川県を参考に(表1)のように決定した。

文部省では本校発足の四十一年に、「高等学校衛生看護科における専門教育の教科・科目参考例　看護」を示し、これに準拠するよう指導があった。

その目標を三項示し(註3)その冒頭に「看護に必要な知識と技術を習得させ、医療および家庭生活における看護を適切に行う能力を養う」とあり、職業教育と共に、高等学校女子教育としてのニュアンスがうかがえる。本校では四十二年度(第二回生)から四十七年度(第七回生)まで、これにのっとって目標を設定し、看護の科目・内容を四つに整理した教育課程に改訂した。(表2)

その後教育課程審議会の答申に基づき、参考例実施による意見などをもとに、四十五年はじめて学習指導要領　第二章第十三節に「看護」が位置づけられ、「看護に関する知識と技術を習得させ、看護を適切に行う能力と態度を……」(註4)と打ち出されたので、四十八年四月(第八回生)からこれが実施された。(表3)

ひきつづき検討が重ねられ、五十三年に再び指導要領が告示された。教科の目標は、特に「看護の基礎的・基本的な知識と技術を習得させ……」(註5、表4)と職業に関する学科の性格を一層明確にする方向で示した。

これは五十七年度(第十七回生)より実施となり、若葉看護高等学校へと継続した。

このようにして新設学科は、教育課程だけでも二〇年間に四回もの変遷を経て形作られてきた。

4　困惑の草創期

昭和四十一年四月、衛生看護科は発足したが、新しい特色ある学科は予想以上の困難をはらみ、看護に憧れ、動機

づけられて入学した白紙の一年生を前にした時、看護高校生として育てる責任の重さに、身のひき締まる思いだった。

今までにないタイプの看護教育をと、理想を掲げても規範となる指導要領も教科書も、まして指導書など皆無で、手探りの不安の日々だった。生みの苦しみなどと振り返るより、なにもかも整わなかった草創期の生徒たちが、逞しくついてきてくれたことを、今でもありがたく思っている。

校内の先生方は、他の学科に見られぬ特異な内容を理解することが、容易ではなかったにもかかわらず、時間をかけてその体質になじんでくださり、いろいろな立場からご指導・ご支援くださった。特に一回生を迎え入れてくださった山崎学年によって、校内にその軌跡が残され、看護科が位置付けられたと思う。

また独特の行事や、時間割り作成上の問題等では、教務の先生方をどんなに困らせたかしれない。

前述したように暗中摸索は、いろいろな形で支障を生み、県外の各校との情報交換も熱心に行われた。

昭和四十一年全国高等学校長協会に専門部会が発会し、同四十四年に第一回全国高等学校衛生看護科研究協議会が持たれたが、指導にあたるべき文部省に、専門教科調査官がおられず（家庭科と兼務であった）、看護科教科調査官が任命されたのは同四十六年であった。したがって、高校生に注射実習を必要とするか否か、安全な病院実習のありかたなど、教科内容についても校長会の重要な議題になったほどであった。

本校は中央に近く、しかも県立進学校に併設ということもあって、県外からの視察者が多く訪れ、教科内容への関心よりも施設・設備の不備が目につき、嘆きの種だった。たくさんのエピソードが残り、今では懐かしくも思える。

何分にも一般にはほとんど認識されていないのが実態であったから、二年目からは県下の中学校に向け、ポスターや案内書を配布し、市内中学へは出身生徒を伴って説明会に行ったりもした。

ともあれ一回生一〇組の生徒たちは、生徒会本部であった教室を（栗林用務員さんの手直しで整備）ホームルームとし、担任の心配をよそに学年ただ一つの女子クラスとしてスタートした。

学校行事は普通科九クラスと一緒に、夏のキャンプ・体育祭・文化祭・修学旅行に、また部活動・生徒会に、のびのびと活躍した。二年二学期には、新校舎三階の社会科特別教室で、戴帽式（学園紛争のあと行事削減のため四十四年で取りやめ、五十九年若葉校舎にて復活　註6）を行い、

不安と期待の病院実習に入った。

募集が全県一区のため、遠方からの通学者もあったが（勝浦・佐原・保田・松戸など）遠い生徒には、かえって遅刻もなかったと思う。

学習面では、普通教科の各科目とも優秀な先生方に恵まれ、ミニマムの必修単位であったが、行き届いた指導を得ることが出来た。

専門教科は、科目数こそ四つであったが、保・助・看法の指定規則により内容は十六に分けられ（表1）、指導も評価も煩瑣であった。看護理念を育て、その適性をのばし、基礎的知識及び基本的技術の習得を願って、夢中で取り組んだ。四十一年度は、医師による授業も四単位が組まれ国立千葉病院から伊藤・仙波・杉山・安井の四先生においでいただき、熱心な御指導がなされたが、臨床で御活躍中の医師講師に、毎週五〇分ずつの講義は、お願いしにくく、高校生にはなじみにくい二校時を通しての授業であった。したがって一単位の科目は、半年で終わるという変則的な形であったから、教務の先生方も戸惑われた。

その秋には伊藤先生のお骨折りで、千葉大第一解剖教室の見学をし、感想の中に「本の上に線書きされた平面の血管や神経を思い描いていたが、初めて管として腺として臓器を認識することができた」とあり、視聴覚教材の整わぬ当時がしのばれる。（この見学は三年くらい続く）

またこの他にも「救急法とその実際について」麻酔科の伊東先生の特別講義（四校時）を二年生対象に実施、四十三年一月には准看教育学会千葉県支部主催の症例発表会に一・二年生全員を参加させるなど、高校看護教育のなかに専門分野をどこまで盛り込むべきか、試行錯誤の跡が見られる。

姉妹校ともいうべき千葉県立衛生専門学院が昭和四十四年四月開校の運びとなり、四十三年十二月には一回生受験希望者一九名に補習授業（数学・化学）が一二日間行われ、あわせて准看護婦試験の受験準備講座も行われた。

5　専門教科の教科書

四十一年には高校用の看護教科書がなく、准看護婦養成所で使用されている「准看護婦教育教科書」（メヂカル書院）を採用した。

四十一年五月参考例（註3）が公示され、これに基づいて「高校看護」が二出版社より（医学書院・メヂカル書院）高校むけ教科書として発刊された。

五十年　国の予算が計上され、五十二年度　基準改訂が

実現　文部省著作教科書は、五十三年度学習指導要領案が発表された翌五十四年「看護基礎医学」が完成し、逐次「基礎看護」・「成人看護」・「母子看護」が発刊された。

6　看護実習

衛生看護科の最も強い特色は、教科の半分以上を占める看護実習にある。

校内では日常的な生活習慣、特に身だしなみから指導が始められる。ユニフォームは、家庭科の須藤・坂本先生の御意見で白の丸いカラーで、水色ワンピースとし、清々しく可愛らしいデザインにした。一・二年生は、三角布をかぶり、三年生は、戴帽式の後、ナースキャップをかぶった。



戴帽式

三年間の授業計画は（表5）のように基礎的な理論を踏まえた技術を校内で反復練習させ、その実践体験として二年後半から病院実習を展開する。

病院ではその目標（註7）のように、実際の患者を対象にする医療現場の中での学習であるから、その緊迫感・臨場感は校内学習とは比較にならない。

病院職員、ことに指導看護婦や、患者とその家族等々との人間関係も含めて、生きた学習の機会として大変貴重である。

看護の実践活動としては、ごく初歩ながら、看護実習生としての責任を担った実習は、高校生の体験学習として他に類が無い緊張の日々であり、昨今の勤労体験学習も、これほどに意義深いものにはなり得ないと思う。

本校では、幸いにも国立千葉病院を主な実習病院として、協力を頂くことができた。

一〇単位の実習をおえると、ほとんどの生徒が健康の大切さ、ありがたさを感じ、看護職への意欲を高めていることが事後の感想文に現れている。

また真摯な生徒たちの実習態度は、例えそれが未熟なケアであっても、患者やその家族の慰めとなったことが、実

習終了後しばしば送られてくる礼状に読みとれる。

病院の条件は年々変化し、実習の依頼も順次困難になった。すなわち診療の複雑化に伴う看護業務は多岐にわたり、加えて看護要員の不足・数校からの実習生増加・准看生が高校卒となった昨今では、本校の実習生が最年少である等がその理由である。

しかしその根底にあるのは、日本看護協会が看護婦の資質向上を求め活発に准看廃止運動を起こし、特に看護高校への入学募集を停止する運動が、五十四年度より全国的に進められ、これをうけて公立病院では実習協力に消極的になったことであった。

このように悲観的状況のなかで、患者の安全を守るに手一杯である現場への教育的配慮は求めにくく、実習が無事終了するまでの教員の労苦は、深刻なものがあった。

未熟な生徒の看護実践の指導を、指導看護婦との連携で進めたり、患者を含めた人間関係の調整・医療の近代化への自分自身の適応など、過重な負担を伴う教育実践であり、その成果を願いながら悩みも多かった。

反面、指導教員は患者の安全と共に、生徒の安全と心身の健康に配慮して、密着した行動をとるから、グループの生徒とは特に親密なコミュニケーションが生まれ、進路相談等プラス面も多くもつことができた。

前述のような理由で衛生看護科の実習期間が、准看護婦養成所に比較して短いことを理由に、即戦力にならない、看護界の未熟児との酷評を耳にすることもあった。

広範囲な看護活動の分野において、貢献できるだけの看護の心と基礎・基本の育成を目指し「十年後を見てください」と幾度つぶやいたかしれない。今立派に成長し、生き生きと活動している諸姉を見る時、報われた喜びと共に看護の同僚として手をたずさえている実感が湧いてくる。

回　想

衛看の臨床実習

（元教員、現土気高校養教）　田村照子

病院の中で生徒とともに一日をすごしてみて、最も注意をはらったことは、一つ一つの行為が看護倫理と知識・技術に添った真剣さが要求されることです。「まちがえました。」があってはならないために生徒も私どもも実習開始一週間位は心身ともに疲れて、控室での休憩時に入ると、ホットしたものです。しかし、患者の苦痛が解消して、髪をととのえてあげた時などは、患者のやすらぎの表情に接して、心から実習

のよろこびを味わったようです。

高校生にして衛生看護の知識・技術を体得することはほんとうにすばらしいことだと考えます。しかし、ひとたび資格を得、法律でいう「医師・歯科医師または看護婦の指示をうけて、傷病者もしくは褥婦に対する療養上の世話または診療の補助をなすことを業とする。」という定めによって職場にでたとき、恐らくいろいろな困難や疑問にぶつかるだろうということが想像されます。こんなことを考えた時私たちの指導のいたらなさだけでなく校内実習施設の不十分、実習時数の不足等により他の施設の卒業生より苦労するだろうと思うと手ばなしで衛生看護科の存在をよろこんでばかりはいられない気持です。

生徒たちが学習し体得したことは患者さんに直接影響していきます。観察の見逃し、報告忘れ一つでも生命に直接関連していく場合があることを考えますと、十分な知識と技術を修練できる教育の場が必要であることを痛感します。

（昭和四十四年十二月PTA会報より再掲）

衛生看護科の校外実習を終えて

三年九組　秋葉　しづ子（三回生）

九月二日から十一月十三日までの、四十四日間が私達の実習期間でした。

実習の内容は、受け持ちの患者を中心に、いろいろ介助をしたり、機能別にわかれて処置を見学、実習したりの毎日でした。

この期間中、私は、受け持ちの患者さんが容体悪化で死亡するという、貴重な体験をしました。それまで、身近に患者さんの死亡ということに直面したことのなかった私は、あらためて、人間の生命、死、看護について等、考えさせられました。私は、患者さんの安楽、清潔などを重点に心がけ、私なりに一生懸命やってきたつもりでした。安楽にできるよう、体位を工夫したり、いろいろ試みましたが、あまり効果や反応がなく、それだけに、何かいらだたしさを感じることもありましたが、とにかく患者の欲求を満たせるよう、私自身も満足できるような看護ができたらと思いつゞけました。しかし、今反省してみると、決して満足できるような看護ではなかったように思いますし、教科書だけでは勉強できない看護の難しさを感じました。患者さんが、目前で苦しんでいるのに、私達には、ただそれを心配することしかできず、直接どうすることもできないもどかしさを感じました。また反面、自分の判断で処置をしなければならなくなった時、果たしてあの時は適切な処置がとれたのかしらと、不安になります。

二年、三年の実習期間を通して思うことは、看護婦という仕事は重要であるのにかかわらず、看護婦の人数が不足しているということ。それですから、看護の方法も、受け持ち制から機能別にかわり、患者と接する機会が減少してきたようです。ということは、観察する時間がなくなってきていることであるし、看護婦と患者との人間関係を作る、だいじな時

間がなくなることであると思います。検温とか、注射とかの短時間に、患者の一般状態から、その他の欲求を聞きだしたり、察したりするのは、とても経験のいることだと思います。現に私は、自分の受け持ち患者の観察だけで、他の患者には、仕事そのものをやり終えることしかできず、観察まではとてもできませんでした。

私は、看護婦という職業を選んでよかったと思っています。

病院実習を終えて

二年九組　高　橋　京　子（八回生）

私たちは二学期早々、約半月の予定で病院実習に入りました。

控室から病棟までの長い廊下をいつも胸をドキドキさせながら歩きました。ナースステーション（看護婦詰所）にいって、元気よく「お早ようございます。」と挨拶をし、優しそうな看護婦さんの顔を見るとホットします。でも、こんなやすらぎは束の間、すぐきびしい仕事が始まります。

看護の仕事は三交替ですから、朝は夜勤の人から昼間の看護婦さんにいろいろと引き継ぎの連絡があるのです。その間約三〇分。そばでそれを聞いているだけで、私たちはもうヘトヘトになってしまいます。早口で独特な用語が使われるので、初めはわからなかったり、まちがったりしました。「ジケツ。」―何だと思いますか。それは「耳血」のことだったのです。今思い出してもふき出しそうになるんですけど。……十時ごろになると体温や脈拍の測定が始まり、患者さんの容態によっては、便通の回数や食欲の具合も尋ねます。

未熟な技術しか持たない私たちにとっては、患者さんとの交流はことばにたよるしかありません。患者さんはことばにとても敏感なのです。「大丈夫ですよ。」と言っただけで、安心してくれますし、またちょっと首をかしげて言い渋っていますと、とても不安そうな顔になってしまいます。ことばの重要さを身にしみて感じながら、毎日患者さんにどう話して接しようかと気をつかっていました。

ところが私自身、そのことばで悲しい思いをしました。病院では日に一回、医者と看護婦が患者の診察に歩くのです。私たちはまだ何もできない身ですが、見学だけでもしたいと思って、お医者さんの後について病室に入ろうとしたら、「チビさんはいらない。」と言われたのです。それもそうかと思って廊下に立っていたのですが、もう大人の社会に一歩足を踏み入れた気でいた私たちですのに、まだ自分たちは子供だということを思い知らされたような気がしました。

先輩の看護婦さんや付添いの先生方にご迷惑をおかけしながら、いろいろなことを教わり、これからの勉強が大変だと話し合いながら、お世話になった病院の門をあとにして、帰ってきました。

看護の道を選んで

三年九組　大沼　美弥子（一七回生）

看護婦を志して衛生看護科に入学し、生まれて初めての臨床実習を経験した。

初日のあの緊張感は忘れられない。それまでは患者、又は面会人として病院に足を運んでいたが、今度は看護婦としてである。いくら「自分は実習生だから……」と思っても、患者とその家族には、私も看護者と見られるので不安は大きかった。

病院では様々な患者さんと出会い、今まで知らなかった世界を体験することが出来た。患者さんが痛みで苦しんでいた時、なすすべを知らぬ私は、手を握って側にいただけであった。知識や技術の伴わないもどかしさを味わうと共に現場の看護婦の機敏な活動ぶりや患者との心のふれあいを見て看護の奥深さを知った。学習を積まなくては看護したいと言う気持を表現することは出来ない。

私は、看護の道を選んで良かったと思っている。進学したら、初心を忘れずに、ますます頑張るつもりである。

7　千葉県立若葉看護高校への移転

施設・設備の不備は、常に問題であった。全面改築の最後は通信制と共に衛生看護科特別教室建築とのことだったが、なかなか実現せず、実習室は設置当初の、玄関脇の旧会議室から、テニスコート前の校長室・職員室に四十三年移動し、仮住まいのつもりで、何度も設計案を書き直した。

四十四年度期成会総会では、第二期工事に引き続き体育館の新築や、衛生看護科並びに通信制の専用校舎の新築計画の推進について、関係各方面へ働き掛けているので、協力願いたい旨述べられている。

また五十年来、県財政は逼迫し、県費一般管理費等が大幅に予算削減となり、本校整備期成会事業としての衛生看護科棟（職員室・実習室・リネン室・備品管理室）体育館



衛生看護科記念碑

付属建物等の新設工事は県財政事情の好転をみてから実施となってしまった。

五十六年ごろ県の第五か年計画により、幕張の埋立地に衛生短大と看護単科高校設立の構想が決まり、俄かに移転の問題が浮上した。

県外の単科高校視察をはじめ、施設・設備計画等が着々と進められたが、在校生の処遇については、最も慎重に考えられ、生徒との話し合い、アンケート調査、保護者の意見をきく等、須田校長先生を中心にこまやかな配慮が続けられ、五十七年度ごろの入学式からは、新入生に予告もされた。

在校生は伝統ある千葉東高校に入学したのだからと、本校を卒業することを望んだので、数々の困難は予測されたが、他校の前例をも参考に検討し、本校に在籍のまま学習の場を新設校に移す方針を決めた。

予想以上に保護者からの反応が多様であり、説明会では活発な質問があった。

五十八年度、森田校長先生が着任され、看護科の移転という大事業を円滑に行うためには、思春期の生徒の心情を汲むことを大切にといわれ、前年度に継続しての移転準備と共に種々の配慮がなされた。

移転に関しては、学校を挙げての取組みであった。

同年四月に看護高校設立準備室が本校に設けられ、宮本先生が準備委員長として着任、精力的に活動された。先生は大変なご多忙のなかを看護科の生徒、特に当時の一・二年生に親しまれ、教育を受ける場を移動することについて、敏感になっていることを気遣われた。

衛生看護科記念碑除幕式について

1　日　時　　3月8日（土）　13：30～14：00
2　場　所　　記念碑前
3　参加者
　教職員など　＊衛生看護科関係職員若干名
　　＊校長及び衛生看護科運営連絡協議会のメンバー　8名
　　＊同窓会会長、同窓会事務局員
　生　徒　　＊衛生看護科3年生　41名
　　＊生徒会役員　11名
　　以上　60余名
4　式次第
　1、開式の言葉　教頭
　2、除幕　生徒代表2名
　3、挨拶
　　(1)　校長
　　(2)　同窓会会長
　　(3)　衛生看護科職員代表
　　(4)　衛生看護科生徒代表
　　(5)　生徒会会長
　4、閉式の言葉　教頭
　　司会　総務部長

いよいよ五十九年三月三十一日をもって本校衛生看護科は募集停止となり、同年四月より三年生（一七回生）・二年生（一八回生）は新築なった若葉看護高校校舎で学習することとなった。

該当学年では特に高橋・鈴木の両学年主任が、卒業までことのほか苦労された。PTA会報や学年通信に「わかば便り」を載せるなど、生徒の疎外感を和らげるべく心遣いがしのばれる。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

高橋学年通信昭和五十八年（わかばだより）

九組が若葉高校へうつって一学期たちました。九組の皆さんは恵まれた実習施設の下で、戴帽式・病院実習をへて一歩一歩看護のみちをあゆんでいます。専門職としての自負と希望にみちた学習のようすを、その手記から記録してみました。

「5月12日、私達はナイチンゲールの誕生日に無事、戴帽式を終えることができました。

看護の道をめざしてから、ようやく衛生看護科に入学し、もう二年目を迎えています。今までの専門教科の復習もままならぬうちに、中間テストをおえたらすぐにこのナースキャップをかぶって実習にいくのかと思うと、何だか申し分けないような、不安な気がしました。自分みたいに人間的にも技術的にも未熟な者が、これから何がやっていけるのだろうと思うと、本当に心配です。去年の実習なんて恥ずかしいことばっかりだったし、今度の実習では去年以上の知識・技術が望まれているのかと思うと、〝どうなの？ちゃんとできるの〟と自問してしまいます。自分では胸の中であんなこともできるようになりたい、これもしてみたい、と希望でいっぱいなのですが、この日は※金子先生に講演にきていただいて、先生の〝自分の子を愛するのは人の愛、人の子を愛するのは神の愛〟という、看護の愛は個人の愛を超えた、その上をゆくものだというお話にとても感動しました。これからはじまる病院実習は、今まで以上のものができるようになりたいし、そうなるのは大変だけれど、いつもうしろの方でひっこんでいないで、いろいろなことを経験しておきたいです。私はよくおちこむと、自分なんて看護婦には向いていないんじゃないかなって、よく思うけれど、ナースキャップをもらって、やっぱりこの道を選んで本当によかったと思いました。

これから、一生懸命がんばっていきたいと思いました。」

※（田中久子教諭のお骨折りにより参議院議員金子光氏に講演をいただきました。）

感想
――若葉看護高校に移って

三年　松田和子（一七回生）

若葉看護高校に移ってから、半年が過ぎました。最初は、実習室の設備もずっとよくなって、きれいな新しい校舎に大喜びしていましたが、全校生徒が一六〇人というのはやはり淋しいなあ、と思ったりしました。

今若葉では、校内文化発表会を目前にひかえて、生徒会や委員会の人達も、二年生を中心に頑張っています。また、部活動に関しても、若葉で新たに部をつくって頑張っている二年生もいるようです。

そんな毎日の生活の中で、私はふと、自分達はどこの生徒なのかと不安に思うことがあります。いろいろな行事で東高に行っても、もちろん自分達の教室はないし、どこへ行っていいものか、戸惑うこともあり、なんだか自分達がお客さんになってしまったような気持ちです。

一般の人達はなおさら私たちのことを理解しずらいのではないでしょうか。幕張で会う人達は、私達を若葉看護高校の生徒と思うでしょうし、病院実習に行ったとき、看護婦さんに、「今どうなっているの？」と聞かれたこともありました。みんなとても複雑な気持ちだったと思います。けれども、最近ではそういう気持ちも次第にうすれつつあります。半年間、若葉の校舎、若葉の先生、若葉の生徒達と学んできて、若葉を単なる学習場所と割り切って卒業していくのも、何だかおかしいような気もしてきました。

さて我々三年生も進路の志望先が決定してきました。高校の衛生看護科については、他の准看護婦学校よりも病院での実習が少ないという点で、最初はみんな不安を感じたり悩んだりしていましたが今はそれぞれの目標に向かって頑張っているところです。

学校行事では、学年遠足・球技大会・文化祭・芸術鑑賞・二年生の修学旅行等々、学年・教務・体育科・生徒会と綿密な連絡が取られた。

東高校生でありたい生徒の願いの一つに部活動が上げられる。若葉で授業を終え、急いで東高の部活に走る生徒の交通安全等が心配され、両校の生徒指導部では放課後の出校・登校のノートをつけさせるなど工夫もされた。

学年会議や成績会議等は両校で二重に開かねばならなず、何かと煩瑣なことが多かったが、生徒は大切にされ感想文にそれが現れている。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

今、若葉では

三年九組　石川直美（一八回生）

東高の校舎から離れて、一年半が過ぎました。離れる時は、「自

分達の勉強のためになることでも、若葉高へは行きたくない」と、先生方を困らせたものでしたが、今ではすっかり若葉高での生活に慣れ、後輩達とも仲良くしています。若葉高の設備は、看護婦を志す私達にとって、最高のものだと思っています。

さて、若葉高では11月9・10日と第一回此蔵祭が行なわれました。私達三年九組も参加させて頂きました。二百人の生徒数の文化祭ですから、きっとおもしろくないだろうと思い「参加したくないなあ」というのが、正直な気持ちでした。しかし、若葉高の一・二年生にとっては初めての文化祭です。後輩達は、看護高校の特性をいろいろな方に知って頂き、理解を得たいという気持ちで、一丸となって取り組んできました。看護棟を開放し、医療器機・器具を見て頂いたり、演示の場面を見学して頂きました。三年生も校内実習ノートを展示し、実習の成果を見て頂いたり、研究の冊子を作り、来校者に差し上げたりしました。(とはいえ、やはりお祭り気分もありましたが…) 東高と別れて勉強している私達にとって嬉しかったのは、その日、森田校長先生や一年生の時に現代社会を教えてくださった勝先生が、きてくださったことです。

そして、12日は体育祭です。日頃から練習を積み重ねてきた組み体操を披露したり、紅白に別れて女子同士で騎馬戦をしたり、球入れやパン喰い競争等をします。東高の陸上競技会で頑張ったように、若葉高の体育祭でも、活躍したいと思っています。

それぞれの行事が終わるたびに、私達看護科41人の団結力は、強くなってきましたが、それをいかして、これからも看護婦という目標に向かって、頑張っていきたいと思います。

8 進　路

卒業式の直前に三年生は准看護婦試験を受験し、三月末にその発表を迎えるが、各年度とも受験生の一〇〇%が合格している。

進路概況（表6）をみると、看護婦をめざして二年課程の看護学校進学者が圧倒的に多く、准看護婦就職者は設置当初に比し、減っている。

これは6で述べたように准看護婦制度の廃止が、日本看護協会から提案されて久しく、質の向上を求める現場の要請は、国公立病院に早く現れ、卒後すぐ准看護婦として就職する者の進路は狭められたことと、進学して看護の専門職を目指すように、指導したことによる。

第一回の卒業生を送った昭和四十四年四月に、千葉県立衛生専門学院が開校され、それに先駆けて昭和四十三年には高校衛生看護科専攻科が、倉敷中央高校と沼津市立高校に設置され、文部省でもその設置を積極的に推進し、看護婦資格の取得をめざす方向になった。

五十六年四月には千葉県立衛生短期大学が開校し、六十年十二月の進路調査では、本校最終の三年九組の全員（四一名）が進学希望であった。特にこの学年では県衛生短大へ三二名と集中、この年初めて推薦入学制度が取られ、本校の枠五名が内定している。（結果表6）

進学先の看護婦養成学校は全国的に数少なく、県内及び近県の志望校は狭き門であり、受験希望者が集中するとやむなく希望調整をするが、残念な結果をみることがある。しかし浪人してもそのほとんどが進学の意志堅く、翌年合格している。

また二年後の追跡調査によると、各学年とも看護婦資格取得後、なお助産婦か保健婦の資格取得を目指した者が少なくない。この方たちが専門職となり、看護婦・保健婦・助産婦として、看護界の一角を立派に支えていることはいうまでもない。（表7）

厚生省では慢性的な看護婦不足をかかえ、当面准看護婦廃止を考えていないとの見解であったが、看護界にとって質の充実は、大きな課題であることに変わりない。がしかし現実に高齢化社会を迎え、看護職員の職場も病院や診療所にとどまらず、老人ホームや在宅ケアなどの地域活動へと広がっている。卒後すぐに准看護婦として経験を積んだ者、保母として施設で働く者、養護教諭となった者、家庭にあって育児・介護にあたる者、家庭と仕事との両立を懸命に果たしている者、それぞれが実力をつけ中堅として活躍していることを、進路のまとめとして記すことが出来たのは嬉しい限りである。

衛生看護科に学んで

三年九組　松井　泉（五回生）

自分の将来に何かプラスとなるものをと願いながら、衛生看護科に入学して早や三年の歳月がたってしまいました。その間に得た学習の体験から、私は看護というものの重要性をますます痛感しています。

病気やけがで苦しんでいる患者さんたちに接して、その看護行為に、ひろく確かな知識と、失敗の許されない実技が要求されることを意識すればするほど、事の重大さを自覚せずにはおられません。二年、三年の病院実習に参加した時、理論と実際のくい違いに戸惑いを感じたり、また時には、対人関係のむずかしさや、その使命感の重圧にたじろぐこともあって、まだまだ一人前になりきれない自分の未熟さを嘆くこともありました。しかし、そのつど学友の励ましや、先生方の導きを得て、私なりの努力は続けて来たつもりです。そして、今私は高等学校の卒業を目前にして、こんなことを考

えているのです。

私は看護学の修得をめざして、さらに高等看護学院に進学するつもりです。そして、将来は、地域社会の保健活動に従事してみたいと思っています。福祉国家の建設をかけ声に、さまざまな政治的施策が進められてはおりますが、まだまだ日本の社会では企業のまき散らす公害の問題をはじめ、各種の医療対策や老人問題に対する解決策の立ち遅れが目立っています。これらの分野に、私のささやかな努力が少しでも役立つならばと、私は今意気ごんでいるのです。これからも一生懸命勉強して、単なる技術の修得者ではなく、社会の人々に心の通うりっぱな保健指導者になれるよう努めたいと思います。

衛生看護科で学んだことを誇りとして、私は自らの将来に希望をいだきながら、これからの日々をたいせつにして進んでまいります。

高橋学年通信昭和五十八年（わかばだより）

今回は、3―9の小北ゆかりさん（一七回生）の作文をいただきました。

「私の将来の夢は、もちろん看護婦になることです。でも正直にいうと「どうして看護婦になろうと思ったの」ときかれると、はっきり答えることができませんでした。

高校も将来が決まっているような学校を選んでいたのですが、入ってから何度も後悔していました。というのも、看護婦になりたい気持ちは単なるあこがれにすぎなかったことに気がつき、勉強も普通教科と専門教科の両立がうまくできなくそれがとても歯がゆく思えたからです。

しかし、こんな気持ちを一変させたのは、病院実習でした。授業でも、ものすごく沢山の疾患があることに驚いていたのですが、現実の病院では疾患のちがいだけではなく、個々のケースにおいても症状は、条件や環境でまるでちがい、それぞれ苦しみに耐えながら病気と戦っている人が大勢いるのです。こんなにもいろいろな人がいることに私はとても驚きました。いつも健康な人ばかりと接しているせいか、みんな今にも死にそうな人にみえました。と同時に、やろうとすれば何でもできる自分がとても恵まれた人間のように思えて来たのです。そして、自分の持っている能力は、自分自身のためだけに使うのではなく、自分の力だけでは生きてゆけない人々のために使うべきではないかという気持ちになったのです。過去の病院実習では、自分は看護婦に向いていないのではないか…と、大きな挫折感も味わいましたが、今ではそれよりも患者さんに自分のできる限りの力を貸すために、もっともっとたくさん勉強したいと考えるようになりました。進学したら僅か二年の短い期間ですが、精一杯がんばって勉強し幅広い知識と正確な技術を身につけた、心優しい看護婦になりたいと思います。」

衛生看護科で三年間学んで

三年九組　高　橋　良　枝（一八回生）

卒業を間近に控えた今、三年という歳月が過ぎたのだということを改めて感じる。思えば短い日々だった。しかし、私達はその三年間を互いに悩み、励ましあって、いわゆる青春時代というものを有意義に送れたのではないかと思う。

三年前の春、私達四十二人は千葉東高等学校衛生看護科に入学した。みんな看護婦を目指してここへ来た訳だが、授業には専門教科の看護の授業が多く、とても新鮮で興味のある反面、「私は看護婦に向いてないんじゃないか。進路を決めるのが少し早すぎたかもしれない」と何度も弱気になった。

そして一年が過ぎ、看護科が独立して幕張へ移転することになった。それは私達が入学する以前から決まっていたが、知らなかった人も多かったのでいろいろ問題になり、結局私達と一学年上の先輩は千葉東高校の生徒、今度の新入生（定員八十名）から若葉看護高校の生徒ということに決まった。

若葉高は看護の勉強をするには申し分なく、設備は最新式のものを取り入れて整備されていた。最初は移転を渋った私達も日々を過ごしているうちにこちらの生活にも慣れてきた。しかし、まだ東高と若葉の壁は乗り越えられず、なんとなく新入生とはうまくいかなかった。それは、私達が部活も学校の授業が終了してから東高へ通っていたことと、行事もみな東高と一緒だったことに問題があったのかもしれない。

しかし、時間の流れとは不思議なもので、いつの間にか若葉の生徒とも仲良くなり「私達は東高と若葉、二つの母校を持っている」というような気持ちになっていた。これは、その蔭に先生方の目に見えない御苦労があったればこそだろうと思う。

私達は看護科へ入って少し変わった高校生活を送った。二回の病院実習を通して「人間の命の尊さ、患者の苦しみ」というものも少しずつわかりかけてきた。移転や病院実習、いろいろなことがあった三年間だったが、この三年間の日日は私達にとってかけがえのないものとなるに違いない。

私の母校

三年九組　佐　藤　幸　子（一八回生）

私には、母校と呼べる高校が二つある。一つは千葉東高、もう一つはこの若葉看護高だ。高校生活の三分の一を東高で、三分の二を若葉高で過ごした。ただ二つの学校で学んだから母校が二つだというのではなくどちらの学校も、同じくらいに好きだし、同じくらいに思い出もあるからだ。東高のように伝統ある高校に入学し、生活した一年。それとは、全く逆に、生まれたての何もない若葉で生活した二年間。いろいろな現実が、私に教えてくれたものは、たくさんあった。中でも三年になったばかりのとき、病院実習との関係で東高の行事に参加できない事について話し合った時に改めて自分達が『二枚看板』という所にいる事を感じた。私は部活動に

東高に通っていたためそのような事は意識した事はなかった。『二枚看板』という立場はもともと私達が望んでいた事だ。入学が東高なら卒業も東高のままという単純な発想からだったが、後で不都合もあるとは思っていなかった。しかしそういう立場だからこそいろいろな体験ができたのだし良かったのかもしれない。若葉で勉強して良かったと思える事はたくさんある。東高の実習棟とは比較できない実習設備のすばらしさ。東高と若葉で、一ケ月に二度も球技大会に参加したり一年に二回も体育祭（東高は陸上競技会という）や文化祭を経験したり、両方に参加する事で別の事にしわよせがいった事もあったが、みんな楽しい思い出だ。また、東高とちがってアットホームな学校を味わうことができた。職員室も、教室数も小規模な事を感じさせる。校内で知らない先生はいない。東高と若葉高、対照的な二つの学校を見て感じたことは、学校をつくるのは私たち生徒自身なのだということだ。伝統の有無にかかわらず、学校は先生方がつくるのではない。無関心なままの生活は、箱におしこまれているクッキーのようなものだ。自分で問題を解決しなければ何も進みはしない。高校の三年間を楽しくすごすのも、後悔の毎日を送るのも、自分自身の考え方でどうにでもなると思う。また、〝協調〟〝妥協〟、この二つも必要だと思う。移転を反対していた二年前の自分には、今の自分を想像するのは無理な話だった。今、二枚看板の幕もおりる。しかし私達は東高衛生看護科十八回生として最後まで三年間おくれた事はうれしい。これも、面倒を承知で諸先生方が私達の我儘を理解し受け入れてくださったことにある。

私は卒業後も、母校が二つあると誇りをもって言える。

卒業生を送るにあたって

森田章　校長

昭和四十一年に設置されました衛生看護科が本年度をもって本校での役目を終え、若葉看護高等学校に引き継がれることになりました。まことにさびしい思いがいたしますが、本校から巣立った八百六十名の諸姉の御多幸を心からお祈り申しあげます。

（PTA会報再掲）

おわりに

千葉東高等学校衛生看護科が、轟の地に生まれ、問題の山積する中を一歩一歩前進して二〇年、人ならば成人式を迎える年に、発展的に閉じられたことは、まことに感慨深い。

註2

神奈川県立二俣川高校　教育目標

現代女性としての教養を高めるとともに、実生活に役立つ教育を施し、また将来家庭の主婦として、子女の育成、家庭の厚生に必要な生理医学についての知識と看護法を習得させ、人間性の涵養と品性の向上につとめる。

註3
高等学校衛生看護科教科・科目参考例（昭和41・5公示）
教科の名称　看護
教科の目標
1　看護に関して必要な知識と技術を習得させ、医療および家庭生活における看護を適切に行う能力を養う。
2　看護技術の科学的根拠を理解させ、その改善進歩を図ろうとする態度を養う。
3　社会生活や家庭生活における看護の意義を理解させ、看護に従事する者としての心がまえを身につけさせ、国民の健康の保持増進に寄与する態度を養う。

註4
学習指導要領（昭和45公示）
1　看護に関する知識と技術を習得させ、看護を適切に行なう能力と態度を養う。
2　看護技術の科学的根拠を理解させ、その改善進歩を図る能力と態度を養う。
3　看護の社会的意義を理解させ、看護に従事する者としての望ましい心構えと国民の健康の保持増進に寄与する態度を養う。

註5
学習指導要領（昭和53公示）
看護に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、看護の本質と社会的な意義を理解させるとともに、国民の健康の保持増進に寄与する能力と態度を育てる。

註6
戴帽式（capping ceremony）について
・　ナースのシンボルとされているキャップは、西欧の宗教的看護時代（看護尼が活躍した）の名残で、修道女が茨の冠をかぶり、一生を神に仕える誓いを立てたキリスト教主義看護に由来するという。また戴帽式は尼僧の入信式を模したものと考えられ、その道に進む者の決意を示すものとして伝統をもつ。
・　ナイチンゲールは九〇歳で生涯を終わるまで、看護の発展のために数多くの業績をのこした。なかでも看護教育をたいへん重視し、訓練された看護婦を多数世におくりだした。（養成所に入所した者に「着衣式」を行ったという、それが今日の戴帽式の由来であろうか）
・　アメリカでフリル飾りの沢山ついた帽子が流行したところ、ベルビュー病院では（一八七五年）「帽子は髪をおおうものであり飾りではいけない。見て美しく、品位を保ち患者に信頼をいだかせるものでなければならない」との方針がだされ、以後白帽子と白衣が用いられた。
※白は汚れなき清潔を象徴し、ナースキャップは人類愛を基盤とする看護の精神を表わす冠として、今日まで続いている。
・　かつて日本の看護教育には、日赤と聖ルカの二大主流があり、日赤では皇室の菊の紋章を象り一六葉のひだのある帽子をかぶった。一方一九二〇年聖路加病院に高等看護婦学校が発足し戴帽式が行われ、洋式のキャップが

用いられた。

・今日のように、全国的に広く行われるようになったのは、第二次大戦後である。GHQ（連合国軍最高司令部）の指導によりアメリカの看護教育が移入され、カリキュラムも戴帽式などの行事も、そのまま取り入れられた。各地の看護学校で現在もつづいて実施している所が多い。

・この式は看護学生が入学後の一定期間（普通六ケ月を予科期間として、適性を認められた者にキャップが与えられ、本科への進級がみとめられた）看護の基礎を学びつつ自分の適性を考え、志した進路を貫く新たな決意の確認をする、ひとつの区切りとして行われる儀式である。

・近年では、大学・短大など単位制をとる学校が増え、戴帽式の位置づけが困難となり廃止するところも少なくない。

・また現在実施している学校では、臨床実習に入る前に看護のシンボルであるキャップを与えている所が多い。

註7　看護臨床実習の目標

医療施設における看護の体験を通して、看護の科目で学んだ知識と技術を総合的に身につける。臨床実習中に当面した問題に取り組み、考え、実践する能力を養い責任、規律、協同を重んじて将来、看護に携わる者としての態度を身につける。



表1　千葉県立千葉東高等学校衛生看護科教育課程

昭和41年度

	教科	科目	実施単位	I 年	II 年	III 年	備考
普通教科	国語	現代国語	7	3	2	2	
		古典甲	2	2			
	社会	倫理社会	2		2		
		政治経済	2			2	
		世界史A	2			2	
		地理A	3	3			
	数学	数学I	5	5			
		数学IIA	2		2		
	理科	物理A	3			3	
		化学A	3		3		
		生物	3	3			
	保健体育	体育	7	2	2	3	
		保健	2		1	1	
	芸術	書道	2	1	1		
	外国語	英語A	9	3	3	3	
	家庭	家庭一般	4	2	2		
	普通科目計		58	24	18	16	
	教科	科目	内容	実施単位	I 年	II 年	III 年	備考
専門教科	看護	看護一般	解剖生理	2	2			
			細菌及消毒法	1	1			
			個人衛生	1	1			
			食餌療法	1		1		
			薬理概論	1	1			
			疾病と健康の社会的考察、関係法規	1			1	
		看護原理I	看護史及看護倫理	1	1			
			看護原理及実際	3	3			
		看護原理II	内科疾患及看護法	3		3		
			外科〃〃	2		2		
			小児科〃〃	2		2		
			産婦人科〃〃	1			1	
			精神科〃〃	1			1	
			眼歯耳鼻咽喉科〃 皮膚泌尿器科〃	1			1	
			理学療法	1			1	
		実習	看護実習	20		7	13	
	専門科目計			42	9	15	18	
教科科目計				100	33	33	34	
特別教育活動				6	2	2	2	
計				106	35	35	36	

表2

昭和42年度～47年度

学科類型		衛生看護科 I	衛生看護科 II	衛生看護科 III
国語	現代国語	3	2	2
	古典甲	2		
	古典乙I			
	古典乙II			
社会	倫理社会		2	
	政治経済			2
	日本史			
	世界史			A2
	地理	A3		
数学	数学I	5		
	数学II		A2	
	数学III			
理科	物理			A3
	化学		A3	
	生物	3		
	地学			
保体健育	体育	2	2	3
	保健		1	1
外国語	英語	A3	A3	A3
芸術	音楽	1	1	
	美術			
	書道			

学科類型		衛生看護科 I	衛生看護科 II	衛生看護科 III
家庭	家庭一般	2	2	
	被服I			
普通教科計		24	18	16
看護一般	看護原理	1		
	解剖生理	2		
	病原微生物	1		
	薬理	1		
	衛生		1	
	看護基礎技術	1		
	食餌療法	}	1	
	看護関係法規			
成人看護	内科系疾患と看護		3	1
	外科系疾患と看護		3	2
母子看護	母性看護			1
	小児看護		1	
看護実習	基礎看護実習	3	2	
	成人看護実習		5	8
	母子看護実習			5
専門教科計		9	16	17
特別教育活動		1	1	1
合計		34	35	34

表3

昭和48年度～56年度

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典Ⅰ甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学Ⅰ	3	2	2	7	
理科	物理Ⅰ			2	2	8
	化学Ⅰ		3		3	
	生物Ⅰ	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ	2				2
外国語	英語A	3	3	3	9	
家庭	家庭一般	2	2		4	
普通教科計		22	20	15	57	
看護	看護概説	2			2	
	看護基礎医学	4		1	5	
	成人看護		4	3	7	
	母子看護		1	1	2	
	看護実習	4	7	12	23	
専門教科計		10	12	17	39	
教科外活動	LHR	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34	102	

表4

昭和57年以降

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年	4年	単位数合計 科目	単位数合計 教科	備考
国語	国語I	4	4				4		
	国語II	4		3	2		5		
	国語表現	2							
	現代文	3							
	古典	4						9	
社会	現代社会	4	4				4		
	日本史	4		3			3		
	世界史	4							
	地理	4			3		3		
	倫理	2							
	政治・経済	2						10	
数学	数学I	4	3	2			5		
	数学II	3			2		2		
	代数・幾何	3							
	基礎解析	3							
	微分・積分	3							
	確率・統計	3						7	
理科	理科I	4	2	2			4		
	理科II	2							
	物理	4							
	化学	4			3		3		
	生物	4		2			2		
	地学	4						9	
保健体育	体育	7～9	2	3	2		7		代替保健2
	保健	2						7	
芸術	音楽I	2	○				2～0		
	音楽II	2							
	音楽III	2							
	美術I	2	○ 2				2～0		
	美術II	2							
	美術III	2							
	工芸I	2							
	工芸II	2							
	工芸III	2							
	書道I	2	○				2～0		
	書道II	2							
	書道III	2						2	
外国語	英語I	4	4				4		
	英語II	5		3	3		6		
	英語IIA	3							
	英語IIB	3							
	英語IIC	3						10	
家庭	家庭一般	4		1	2		3	3	代替1
看護	基礎医学	5～6	5				5		
	基礎看護	8～10	6	2			8		
	成人看護	12～14		8	4		12		
	母子看護	4～5			4		4		
	臨床実習	10～15		3	7		10	39	
特別活動	ホームルーム		1	1	1			3	
	クラブ活動		1	1	1			3	
計			34	34	34			102	

表5　看護実習の組み立て

昭和57年以降

	校内	病院
I年	基礎看護実習：日常生活と看護 診療と看護	
II年	基礎看護実習：診療と看護 成人看護実習：成人への一般的看護	成人看護実習：校内で学んだ基礎的な知識・技術（主に日常生活の援助）を成人患者に応用実践する。
III年	成人看護実習：成人疾患を持つ患者の基本的な看護 母子看護実習：母性と小児への基本的な看護	成人看護実習：患者の安全と安楽を考え、指導にしたがって基本的な看護を実践する。 母子看護実習：母性と小児への看護の実際を、見学や体験によって理解する。

表6　進路概況

各年度4月末日現在

年度		43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	計
卒業生数		31	31	38	37	35	40	40	39	34	39	38	38	41	40	39	41	38	41	680
看護学校進学	計	11	16	24	22	16	22	29	32	32	32	34	23	33	34	31	36	31	39	497
	県内	9	13	18	13	7	14	16	16	13	15	16	8	26	21	16	19	22	27	289
	県外	2	3	6	9	9	8	13	16	19	17	18	15	7	13	15	17	9	12	208
看護外への進学		1	2	2	1	4	8	5	2	1	1	2	0	1	0	0	2	0	0	32
准看護婦として就職	計	16	10	8	11	9	5	2	2	0	4	1	8	3	1	5	2	3	0	90
	県内	14	5	8	9	7	2	2	2	0	2	0	5	3	1	1	0	0	0	61
	県外	2	5	0	2	2	3	0	0	0	2	1	3	0	0	4	2	3	0	29
一般就職		1	2	2	1	4	4	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	16
家事従事・未定		2	1	2	2	2	1	3	3	1	2	1	6	4	5	3	1	4	2	45
看護婦及び准看護婦学校進学率	計	87%	84	84	95	71	68	78	87	91	95	97	85	87	87	93	93	91	95	
	進学	35%	52	63	59	46	55	73	82	91	85	95	61	80	85	80	88	82	95	
	就職	52%	32	21	30	26	13	5	5	0	10	2	24	7	2	13	5	9	0	
准看護婦試験合格者数		31	31	38	37	34	39	39	39	34	39	38	37	41	40	39	41	38	41	676

表７　千葉東高校　衛生看護科第17回卒業生（昭和60年３月卒　38名）追跡調査

昭和62年５月

看護婦国家試験受験資格取得者	29名	
看護婦国家試験合格者	29名	（内進学者3名・就職者26名）
看護婦学校在学中	7名	
一般大学在学中	1名	
准看護婦として就業中	1名	

＊看護婦国家試験合格者の進路内訳

進学者	千葉県看護大学校（保健婦）	2名
	千葉大医学部付属助産婦学校	1名
就職先	千葉県立がんセンター	3名
	千葉県救急センター	3名
	千葉県リハビリテーションセンター	3名
	千葉県立小児医療センター	3名
	千葉市立病院	1名
	千葉市立海浜病院	1名
	国立千葉東病院	1名
	川鉄病院	2名
	千葉療護センター	1名
	帝京大学附属姉崎病院	2名
	県外病院	6名
	（順天堂大付属浦安・東芝中央・榊原記念・横浜中央・東海大医学部付属・三井記念病院に各１名）	

＊卒業時進路

県内進学者	千葉県立衛生短大	14名
	千葉県立衛生専門	5名
	川鉄病院付属看護学校	2名
	国立千葉東病院付属看護学校	1名
県外進学者	東海大学付属看護短大	1名
	東京都内看護学校	7名
	神奈川県内看護学校	1名
就職者（准看護婦）		3名
その他浪人		4名

三　通信制課程

昭和三十六年十月三十一日付けの学校教育法の改定により、高校通信教育が「通信制の課程」として一人前に扱われるようになった。これまでの実績に加えて、いよいよ内容の充実期へと発展する。この年、月一回の本校スクーリングと銚子・館山で行われていた巡回スクーリングに加え、本校でもう一回行い、合宿スクーリングの会場を御殿場の国立中央青年の家（昭和三十六年から五十六年まで同一場所）に移した。

昭和三十七年度は生徒会の発足をみ、単位修得者の延べ数が在籍生徒数を上回り、やっと生徒一人一人が平均一科目以上を修得するようになった。このことは、生徒のレポート提出数の増加、スクーリング出席率の向上によるものであり、生徒の個別的指導より集団的指導がより効果的であるとの見方もできる。

昭和三十八年度からは、教育課程の八つのコースを四つに減らし、初年度の履修科目を三科目から四科目へ増やした。学習会の数も県下各地に二〇を超え、学習が順調に進むことに与っていたといえる。通信制教育に関する本校の研究実践が認められ、全国の通信制実施校にさきがけて、「読売教育賞」を受賞したのもこの年である。

翌年ごろから全国的に集団入学という新しい傾向が出始めて、本校にも植草学園で洋裁を学びながら通信制での勉強を同時に行うという生徒と、国立准看護学院（千葉）の生徒が集団で入学した。続いて松戸、下総の国立准看護学院の生徒も入学してきた。

昭和三十八・三十九年度の学習状況から、予め予告をした上で学習に関する規制措置をとることになった。つまり学習の進度を出来るだけ揃えるために、レポートの提出日を指定しようというものである。これに関してそれまで四つあった教育課程のコースも一本に絞られ、巡回スクーリングを全廃して本校で月二回の充実した面接指導を行うことになった。こうしたことは個人に適した学習を、好きな時に好きな所で行うという通信教育発足以来のやり方を、根本的に覆すものであり、数年後に「学習規制」という名称で全国的に流行し、失敗する例も多かったが、本校では先に定期試験の制度を設けるなどの積み上げがあったために、飛躍的な単位修得者の増加となった。そしてこの年には卒業生が八〇名に達し、卒業式を通信制だけで行えるようになった。

ただこの改革で、一部の生徒は遠隔地からの通学を余儀なくされたが、幸いにも昭和四十一年に国鉄の割引回数券が実現し、交通費を半減することができた。

昭和四十二年度には学習規制の効果があらわれて、遂に卒業生が一〇〇名の大台を突破し、四年前から協力校を引き受けていたNHK学園高等学校との、合同卒業式の模様が全国にテレビ放送された。

昭和四十三年度以降、過去の遺産を受け継いでなお実績をあげるという安定期が続くのである。昭和四十六年の時点で現況に触れれば、生徒の状況は次のとおりである。昭和四十年ごろまで若年化しながら増加し続けた生徒数は、以後横這いの状態となって一、三〇〇から一、四〇〇名の間を上下していて、そのほとんどが卒業コースを選んでいる。そして再び高年化の兆しを示し、また徐々に集団入学生（女子）の割合が増してきたため、女子が男子の二倍になっている。居住地は、千葉市を中心とした都市部への集中化が目立ち、農村地帯は極めて少なくなっている。したがって職業も男子では工業関係と公務員、女子では各種学校の生徒と看護婦の占める割合が多くなっている。

学習の状況について言えば、昭和三十七年度に延単位修得者数が在籍生徒数に等しくなった時の四倍以上に増え、毎年の卒業生は常に一〇〇名以上を維持している。また卒業生の修業年限もだんだん短くなってきた。これらに比べて通信制に携わる専任の教職員数は、七年前の一五名が二〇名になったにすぎない。試験前に集中する山積みのレポートを、丁寧に添削指導するにはかなりの努力が必要とされた。

昭和四十六年に創立三十周年を迎え、更にその後の一〇年間は本校通信制の最盛期であったと言えよう。入学生徒数のピークは昭和五十年度に六七二名に達し、卒業生の数は昭和五十四年に三六〇名を数えている。五十一年から五十六年にかけて、毎年二〇〇名台の卒業生を送り出している。このことは、三十九年から集団入学した生徒の増加と、更に技能連携による植草学園（四十九年から五十五年まで）および不二家政専門学院（五十一年から五十三年まで）との協力によるものが大きい。

一般生の中には、主婦の生徒も多く、特に子供連れで登校した場合のため、託児室（五十年から五十五年まで）も準備された。

生徒数の増加から、集団指導の必要が生じたことは前述のとおりだが、その方法に新入生合宿研修が第一回として、昭和四十八年に実施され、以後毎年五月に行われだした。

従来からの県職員研修及び千葉刑務所での受刑者教化活動に加えて、市原交通刑務所にも通信教育講座を昭和四十九年に開講した。

生徒会の活動として、第一回の生活体験発表会を開催したのは昭和五十年で、以後毎年の行事となり、コンクール形式で上位二名を関東地区大会と千葉県総合文化大会に派遣している。

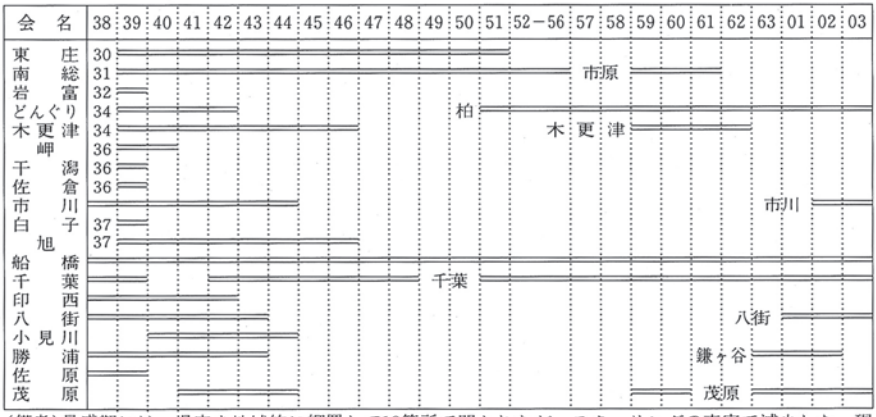
昭和五十二年の定通教育三十周年は、まさに通信教育の最盛期を迎えた時で、通信制の職員一同大童の状態でもあった。この年の修学旅行には、未曽有の三一四名が参加している。

昭和五十五年に四階建ての通信棟が竣工し、四階に多目的ホールを持ち二階には理科室を備え、各学年を一室ずつ収容できる広さを持っている。

定通総合文化大会への参加は歴史が古いが、校内の文化祭に相当する校内展覧会は昭和五十二年に始まっている。

技能連携の終息と共に、生徒数の一時的減少が昭和五十七年に訪れた。入学生徒の平均年齢が二七歳に上昇し、高年齢化の再来かと思ったのも束の間で、中学卒のピークを迎えるべく次の年から生徒の若年化が進み、新たな変動期に入るのである。

学習会の変遷



（備考）最盛期には、県内を地域的に網羅して18箇所で開かれたが、スクーリングの充実で減少した。現在は、週に１～２回、各地域の公民館で夜間に実施されている。

五十九年、野球部が県大会で初優勝し、念願の全国大会出場が決まった。この年はバレー部女子も県定通体育大会で優勝し、それまで全国大会出場常連の陸上、テニス部を加えて運動部の活躍が目立った。そのようなこともあって、全国大会出場のための寄付金を募り、在校生、卒業生、教職員、その他学校関係者の方々から援助をいただいた。翌年にも、野球部、女子バレー部が全国大会出場を果たし、野球部は二回戦まで進み、二試合を神宮球場で行っている。こうした部に刺激されたのか、サッカー、男子バレー、バドミントンがこのころから活動を始めている。

六十一年から、新入、転編入ともに志願者の増加が顕著となり、六十二年には、新入の志願者が定員の三五〇を超えるという、それまで誰も予想だにしなかった事態が起こった。新入生の場合、それまで行われていた県立高校の建設が終わったものの、中学卒は減少してはおらず、全日制を受験したが不合格となり、専門学校と兼ねて通信制を希望するというケースが目立った。また、中学校で長期欠席していた者など、精神的、あるいは身体的な悩み等を抱えている生徒が入学を希望するというのも、このころから増えている。転編入の場合、このころは編入の生徒（中退者）がほとんどで転入の生徒はわずかだった。編入の生徒は高校を中退したものの、社会に出て働いてみると、高校を卒業していないことが、予想以上に大きな壁となり、高校卒業の資格だけはほしいという切実な思いで入学を希望してきた者がほとんどである。新聞紙上では、高校中退者が全国で一年間に一一万人に及ぶという記事が取り上げられ、高校中退者の問題が社会問題に発展するという兆しさえ見え始めた。

こうした志願者の増加、特に若年者、転編入生の増加はそれまでの通信制を大きく変えていくこととなり、さまざまな問題が次から次へと出てくることになった。今後どのような方向に通信制が進んでいったらよいのか、明確な方向づけができるような状態ではなく、出てきた問題に対して、一応対処しておくというのが、教職員の正直な気持ちだったのではないだろうか。

それではどのような問題が出てきたのか。いくつかあげてみたい。まず、生活指導の問題。生活指導については、それまでほとんど必要がなく、これといった規則を生徒に提示するということもなかった。しかし、このころから、未成年者の喫煙がまず目立ち始めた。それまで日曜日のスクーリングでは、休憩時間階段の前の廊下で喫煙を認めていたが、六十三年からは、一つの教室を喫煙場所とし、年

度当初喫煙をする者を集めて、吸い殻等、自主的に管理させる指導を行うようになった。しかし、現在このやり方が必ずしもうまく行われているとは言えない。年々喫煙者たちに自主管理能力がなくなってきているのが現状である。またトイレで吸い殻を見付けるのも、少なくない。他に、盗難の問題。授業中授業に出席せず、校舎内をうろうろしている生徒。生徒間のトラブル。さまざまな問題が出てきたのはまず生活指導の面であろう。

次に学習の面について見ていきたい。

六十年ごろまでは、生徒の主体は、三〇代、四〇代の、いわゆる経済的に貧しく、高校に進学できなかった人たちだった。当然学習に対する意欲は強く、学力もかなり高いものを持っていたので、学習指導について教師が細かいところまで考えたり、一人一人の学力にあわせての指導するということもさほど必要ではなかった。しかし、さまざまな生徒が入学してくるようになると、必ずしも学習に積極的な生徒ばかりではなくなった。このような生徒に対して、学習に対する意欲をどのようにして持たせるか、また基礎的学力をいかにして身につけさせるか、通信という制度上からも容易には解決のつかない問題が浮上してきた。入学はしたものの、一、二年在籍してやめていく者も多く出てきた。平成元年にはこうした多様化した生徒の現状を考え、それまでのAコース、Bコースの選択を廃止し、六科目の中から二科目を三、四組生で選択するようにした。このことで選択の幅が広がり、生徒にとっては履修しやすくなったと言えるだろう。

三つ目の問題は、施設の面のことである。六十年ごろまでは日曜スクーリングは主に全日制の校舎、平日は通信棟で間に合っていたものの、入学者が多くなるといままでの施設では足りないという事態がでてきた。特に平日は当初授業で生徒が教室に入れないということがおこった。幸い、平成元年にセミナーハウスが完成し、平日スクーリングに利用できるようになったものの、施設面での悩みは多い。図書室が狭いこと。平日の生徒が自習できる場所が狭い図書室しかないこと。通信棟に水道、トイレがないこと。身体的に障害を持つ人が入学を希望しても、受け入れるだけの設備がないこと。(平成二年、通信棟の階段にてすりをつけた)通信制が社会的に注目をひくようになった割には施設設備の充実は遅れているのが現状である。

以上の三つのことが五九年以降の大きな問題であろう。その他、それまでと変わったことをいくつかあげておきたい。六二年、「通信制のしおり」が初めて作られた。それま

では、手刷りのプリントを五～六枚まとめてくばっていたが、生徒数も多くなったため、学習に必要なことを主にした冊子を作ることを計画し、他校の例を参考にしながら作成した。年々内容を充実して現在に至っている。次に夏季合宿である。それまで青年の家を利用していたが、平成二年から民間の宿泊施設を利用するようになった。これによって時間的に余裕のある研修ができるようになり、生徒にも好評だった。この年は白樺湖で行われている。その他継続手続きの際、学習計画書を提出し、担任の面接を受けるようになったのは六十一年。成績の記入の仕方が白カードから教科成績表になったのは平成元年。ここ数年で細かいことも含めるとたくさんのことが変更になったり、新たに実施されたりした。

平成元年度の卒業生が一一一名で、平均年齢は二九歳。十代の生徒が一九名。また転編入生四八名で、通信制の近年の特徴を反映するようになった。しかし、生徒たちが変わっても、通信制の卒業式が感動的であるのは変わらない。さまざまな困難に打ち勝って卒業までたどりついた彼らの笑顔は美しい。毎年、卒業生代表の答辞に涙を誘われるのも通信制ならではのことであろう。

平成三年度も大きな変化のあった年だった。四月、六十三年にやめた二次募集が行われた。新入の志願者は前年とほぼ同じだったものの、転編入生は予想以上に多かった。全体の在籍者が増えることを予想し、講師の方を増やし、職員室も手狭になったため、それまで全日制の用具置場として使用していた部屋をあけてもらい、事務を独立させた。体育用具室もスマートな応接室兼研究室に生まれ変わった。鏡用紙が改訂され、色別科目別になった。定通併修で定時制を三年で卒業したいという生徒が志願してきた。今後こうした生徒が増えてくることは確実である。転編入生の増加によって単位の認定のしかたが煩雑になったため、前在籍校で修得した単位を原則としてすべて認定することにした。四年三月に行われた入学選考では、新入と転編入がほぼ同数となり、近いうちに転編入が新入を追い越すことを予想させた。通信制が、中退者、あるいは現在籍校で不適応状態の生徒の受け皿の役割を果たすようになった。それは、一方では、通信制の良さが見直されたことであり、喜ぶべきだが、一方では、現在の学校教育が抱えている問題、矛盾をそのまま通信制に持ち込むことにもなったとも言える。

最後に、通信制の特徴である学習会について触れておきたい。五十九年までは木更津、市原、千葉、船橋、柏で行

われていたが、木更津、市原は二年後には活動を中止した。逆に鎌ケ谷、茂原が六十二年に、八街、市川は平成元年に活動を開始している。

千葉県高体連定通体育大会

本校の五十周年と定通体育大会四十周年とが、奇しくも平成三年度に記念行事を行った。この大会に初めて参加したのは定かでないが、昭和四十年の十四回大会には参加選手七十八名と明記されている。そして、十六回大会に女子が総合六位と記録されている。従って、この頃すでに複数の種目で、活躍していたようである。

県大会でのかっての優勝は、昭和四十四・四十五年連続と四十七年度にバレーボール部女子が、昭和五十二年に柔道部および昭和五十四年の卓球部女子がある。

最近の十年間で、通信制としての団体優勝は、陸上部の女子が平成三年度に総合優勝を遂げている。バレーボール部女子は昭和五十九・六十年に連続優勝している。バスケットボール部の男子は、平成元年および二年に続けて優勝した。卓球部は、男子が平成元年度、女子が昭和六十二年と六十三年度に連続して優勝した。

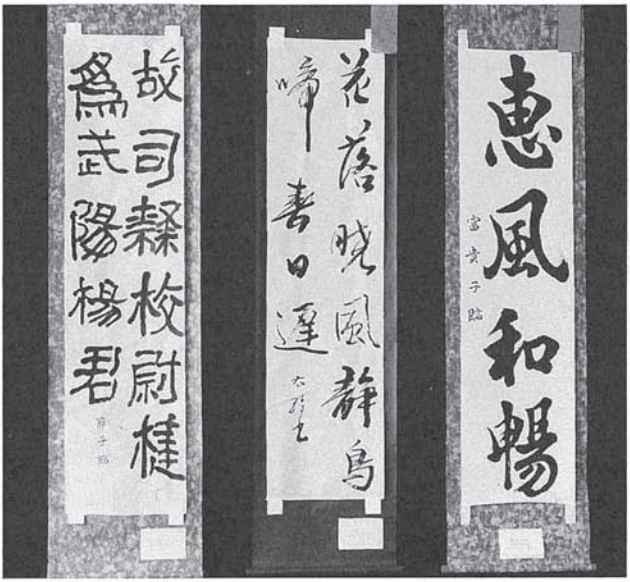
個人種目の優勝は、陸上競技のトラックおよびフィールドと軟式庭球の男女、卓球男子など延べ二十二名にのぼっている。この他、昭和六十二年度から始まった定通新人体育大会においても、前述の各部が活躍している。

千葉県定通総合文化大会

本大会は、平成三年度で第二十九回を数えている。昭和三十八年十一月十六日の第一回大会から参加していて、書道と写真の部で第一位に入賞している。以後、毎回参加して何かの部門で必ず第一位を獲得している。通信制の生徒数は、学校規模でいえば定時制の五校分ぐらいに相当するかも知れないが、各部門で優秀な成績を挙げられるのは、努力の結果である。

最近の十年間では、昭和五十六年度の第十九回大会において、絵画・珠算個人総合で第一位であった。翌二十回では、書道・絵画がそれぞれ第一位となった。二十二回は手芸被服・珠算、二十三回は珠算、二十四回は絵画、二十五回は手芸被服・珠算、二十六回は工芸・被服手芸、二十七回は合唱・珠算、二十八回は珠算が第一位を得た。平成三年度は、第一位に写真と被服手芸、第二位に書道・被服手芸、第三位に生活体験・書道・工芸・写真・被服手芸がそれぞれ入賞している。

応募点数や参加人数に関しては、昭和五十七年度に全部門に応募したが、平成三年度は二部門に参加できず、参加十九校中でも全部門参加は皆無であった。昭和五十七年度を最低に在籍生徒数は増加を続けているが、音楽、美術、書道等芸術部門への関心や、工芸、被服手芸、珠算等の技能的創造的な活動に対して、消極的な姿勢が感じられる。特に合唱のように、多人数で協力するような種目は、参加が困難となっている。



第四章　回想・記録



第一節　回　想

一　歴代校長……207
第四代……諸川芳雄……207
第七代……沢田繁二……210
第八代……村田泰次郎……211
第九代……畠山一郎……213
第十代……相川勝衛……215
第十一代……須田義男……217
第十二代……森田章……219
第十三代……齊藤志貴雄……222

二　全日制課程　旧職員　卒業生

国語……山根茂……224
国語……山泉彰……225
社会……山崎一郎……226
社会……勝輝夫……227
数学……白銀彦太郎……229
数学……朝日伊豆雄……231
理科……吉田さゆり……232
理科……青山克……233
理科……野村典平……235
美術……草葉章……238
家庭……須藤明子……240
英語……須賀賢悟郎……241
養護……安田末代……243
衛看……田村照子……244
事務……青山康子……245
市立高女一回生……平野登美子　本藤かつ子……246
市立高女二回生……永江栄……248
市立高女二回生……小林美代子……249
市立高女四回生……佐々木洋子……251
昭和二十八年卒……島田侑児……253
昭和三十一年卒……細川悦子……254
昭和三十六年卒……平賀正勝……256
昭和四十一年卒……植松紀子……257
昭和四十五年卒……佐藤充宏……258
昭和五十年卒……赤木幹子……260
昭和五十七年卒……保坂昌宏……261
昭和六十年卒……唐木勢以子……262
昭和六十二年卒……遠山裕……263
平成元年卒……原由也……264
平成三年卒……尾和一範……265

三　通信制課程　旧職員　卒業生

英語……亀　忠夫……267
昭和三十八年卒……坂田貞司……269
昭和三十八年卒……長谷川直和……271
昭和五十九年卒……手塚　眞……273
昭和六十三年卒……柴田文雄……274
第二節　記　録
一　教育課程
1　全日制課程普通科……276
2　全日制課程衛生看護科……294
3　通信制課程……300
二　進　路……306
三　留　学……330
四　特別教育活動……352
全日制課程
文化系部
文学部……352
物理部……353
化学部……353
生物部……355
地学部……356
音楽部……356
美術部……358
書道部……359
マンドリン楽部……360
吹奏楽部……363
食物・手芸部……366
ＥＳＳ……367
演劇部……368
写真部……368
茶華道部……369
運動系部
陸上競技部……370
剣道部……372
柔道部……373
サッカー部……374
卓球部……375
テニス部……377
バスケットボール部……379
バレーボール部……380
野球部……382
ラクビー部……384
水泳部……385

山　岳　部……386
ソフトボール部……390
同　好　会
歴史研究同好会……391
ＪＲＣ同好会……392
漫画研究同好会……393
フォークソング同好会……394
陶芸同好会……395
コンピュータ同好会……397
通信制課程
野　球　部……398
五　全日制課程　ＰＴＡ……401
六　通信制課程　振興会……410

第一節　回　想

一　歴代校長

回　想

第四代　諸川芳雄

私が千葉東高に勤務したのは昭和二十四年四月から三十四年三月の一〇年間の長期にわたる。戦争中は極端な軍部官僚による軍国主義で、学校は『皇国臣民錬成の道場』といわれた。戦後は国民は虚脱状態となり、食糧難に苦しみ、闇屋（ヤミヤ）は横行する。その客観状勢下でアメリカの占領下百八十度の転換をして日本の自由化、民主化が強行されつつあった。占領政策の一環として教育制度では六・三制を中心とする教育改革が急激に強行された。戦争の末期私は戦地にあり、東京の自宅は戦災全焼。昭和二十一年復員後、管理職として単身で在京。家族は千葉県外房の『御宿』海岸の小山荘に疎開中であった。本校二代目の校長楠原信一先生（初代の千葉市教育長に就任）と、三代目の校長親泊朝晋君（学生時代の親友。台湾帰り。四月から千葉県教育庁入りの予定）の二人が、私にぜひとも市立千葉高女の校長に就任するよう、たびたび来訪して懇請される。私は今更郷里東京を離れたくないと極力断わり続けた。三月末を過ぎて四月初めの最初の市教委で私を校長に発令してしまった。私の学生時代七年間の初期は大正デモクラシーの時代影響を受け、後期は国家統制のファッシズム時代である。大学卒業後は、石川師範（現、金沢大学）、岡崎師範（現、愛知教大）の管理職。東京府立女専の教授。十八年秋赤紙召集で戦地の第一線に引っ張られ中国奥地から奇蹟的生還できた老兵士の付録の人生である。年齢は四一歳で元気旺盛。校長として着任して驚いた。校舎は旧陸軍の被服倉庫でオンボロの木造平家建て。屋根はトタン張り。廊下は破れて穴だらけ。窓ガラスは破れ放題。一年前に葛城町の戦災バラック校舎から轟町の今の地に移転してきたばかり。校庭には境界線が無く一般人の通路となっている。運動場の片隅に『職員住宅』と称するお粗末なトタン張りのバラックがあって数世帯の先生方が住む。私は着任の第一夜は学校に泊まった。小使の大川老人は病妻のため通勤。宿直の先生は『職住』に住むため帰した。広い校舎に校長唯一人になる。夕食は携帯の米を七輪と土鍋で工事場のカンナ屑を燃して炊飯。当日、学校で配給の粉醤油をふりか

け、手製で竹箸を作って食べる。教室の隅に積んである綿のハミ出した垢だらけのフトンで眠る。これは鮮烈な印象として今も生々しく覚えている。先生方は極めて少人数で、女性教師が多い。男性教師の服装は配給のツメ襟カーキー色の国民服、国民帽、兵隊靴だ。生徒の服装もモンペ姿が多く、家庭科の授業は運動場で七輪と薪を使ってうちわをバタつかせての調理である。教頭の有田先生は長期病欠。私は校長兼教頭兼小使のごとし。そこで当面学校経営の緊急措置として、(1)校舎の全面的増改築、(2)職員組織の徹底的刷新強化と優秀男性教員の大量増員、(3)そのためには生徒の質の向上と学級増の強行を心に誓い斗魂を固めた。昭和二十四年GHQの占領政策として全国的に新制高校発足のために学校の再編成統合が強行され、西日本では五～六校を一校に統合、『ケインズ旋風』の名で騒がれた。千葉県は『ブラウン』という温厚な米軍人が教育の担当官である。私も県教育庁から高校再編成検討委員を委嘱された。千葉県では小規模校は分校・分離校舎の名で残された。当時県立千葉高女校長は本校初代の校長滝熊之助先生（翌昭和二十五年更迭（コウテツ）して岡部定先生が校長に就任）。千葉中校長は安田裕先生、千葉市立高女校長は私で、三人は仲良く緊密に交際した。高校再編成で本校は廃校か、県立移管か、の分岐点に立ったが、急転直下、本校と市立千葉商業校の二校が県立移管となった。転禍為福である。昭和二十五年四月から校名を県立千葉二高と改称。男女共学実施、学級増、教員増、事務組織の整備等で、学校の体裁をなしてきた。教頭として安房高から沢田繁二先生を抜擢スカウトして来任して頂いた。県立移管後、早速『校歌』と男子『帽章』を制定した。校歌『シャロンの花』は沢田教頭先生に作詞を委嘱、歌人兵藤益男先生の助けも得た。曲は音楽の勅使川原先生の母校武蔵野音大の石黒脩三教授作曲。帽章は吉田さゆり先生の親戚の図案家に依頼。『生徒会』も先生方の指導と生徒の協同作業で成立結成。昭和二十六年、校庭整地作業を計画した。全校の職員生徒の全員が自発的に夏休みを返上してツルハシ、鍬、を振い、リヤカーを引張り、流汗淋漓。七月から九月中旬まで毎日二か月間の勤労奉仕作業により、二〇〇米トラック、野球場、排球コート等を造り上げた。私もツルハシを振るった。全校を挙げての積極的協力一致の労働の精神的意義を高く評価したい。二十六年創立十周年記念式典を挙行。千葉市寄付の講堂の落成式と、新グランドを使って大運動会を同時に開催。朝野の名士多数列席。盛会であった。男子生徒が少数のために覇気不足の『女性化した男性』を痛感。新採用の綱島竹治先

生（剣道の達人、台南師範教授、埼玉与野市教育長の経歴者）の献策を容れ、剣道部とラグビー部を創設。たちまちにして両部は毎年県下で優勝。特に剣道部は国体に毎年多数の本校選手（永井・田島・湯本・清水・前島・伊藤等）が出場して全国的に有名になった。運動は東京教育大体育学部学生数人を非常勤講師として採用。その中の田中良君は教大のラグビー選手で後に宮城県体育課長として仙台で活躍。石原文吉君は後に大阪市立大教授、今は千葉大教授、大木昭一郎君は後に愛知県、福島県の体育課長、文部省スポーツ課長、を経て今は筑波大教授。それぞれ専門を生かして活躍中である。本校は昭和二十九年に通信教育部を新設した。それまで千葉一高、千葉二高に小規模で既存していたのを、統合合併して千葉三高に置き、規模の大拡充、専任教員の大増員をし、生徒（四、五〇歳の者もいた）も急激に増加した。一県一校の勤労青年の通信教育はマスコミを賑わした。通教主事の秋山利雄先生以下の先生方の結束奮闘努力は目覚ましいものがある。千葉刑務所からの懇請で収容者に数科目の出張教育に当る。秋山先生は文部省の勤労青年教育の担当の鮫島先生（後、鹿児島県教育長、熊本大教授発令時急死）と並んで通信教育の神様とも言える。頭が下る。千葉三高と並んで埼玉浦和高と、神奈川湘南高の三校が全国有数の通教実施校として盛名を馳せた。通教の三高校の校長主事の六人とは親交を結んだ。

当時私は多くの団体役職を背負わされ激忙を極めた生活であったが教職員の採用人事は最重要事として極めて慎重に扱い、県教育庁の親泊先生や相川先生の知恵も参考にした。一旦採用したら、後はホリっ放しにして自由奔放に思う存分活躍実践して頂く。優良教師確保が教育の要諦であり、学校発展の基軸である。若い溌剌颯爽、活気迫力の横溢した先生方が集まった。偶然とはいえ酒豪が多い。酒豪で学究的、勇猛で純情の活力の漲る先生方は、余剰エネルギーのほとばしりとして夜ともなれば一団となって千葉市の飲み屋を次々とハシゴで飲み廻り、ケンケンガクガクの教育論を闘わせる。夜一〇時過ぎ猛者の先生方が登戸町の私の家を一〇人くらいの集団で来訪。徹宵で流飲。大声で教育討論する姿は今も懐かしく思い出す。隣家の臼井荘一代議士の夫人が翌朝の話だが驚かれたらしい。「酔虎伝」の梁山泊だ。これらの猛者はいくら深酒をしても翌日は一分たりとも学校を遅刻せず生徒指導に頑張るという自負心と誇りを持っていた。飲ん平の多くはその後教頭から校長になり、あるいは教育庁入り、公私立の大学の教師になった。当時の勇士の名をあげると佐々木鉄太郎、寺田義栄、

草葉章、千田恭一、木島与左衛門、岩本層三、久保木千寿、菅宮和夫、松本貞雄、野村松三、松葉昭、等の先生方である。少壮気鋭の愛すべき青年将校だ。酒豪ではないが前記教頭の沢田繁二先生、通教主事の秋山利雄先生の外、木島清、綱島竹治、石田誠、中村忠久、佐藤定義、井下田博、剣持徹、佐藤清英、吉田孝一、宮本文彦、島田良二、白銀彦太郎、新谷敏夫、安田伉、等の先生方は一騎当千、それぞれ栄達された。女の先生では吉田さゆり、英語の松本正子、一条あき子等の先生方は地味だが頭の下る立派な先生だ。教育実践の『権化』として私は秘かに深く尊敬している。四十三年私が転出の時、山下教育長の懇請（コンセイ）で畠山（ハタケヤマ）一郎先生を千葉二高教頭から千葉三高教頭に採用した。

昭和三十年ごろ毎年学級増を断行。教職員は一〇〇人近く、生徒数も千数百人となり、共学も定着、生徒の質も年々向上した。施設面では理科教室棟、体育館、第二棟改築、通信教育棟を逐次完成させた。山下教育長より教育庁入りをたびたび懇請されたが考える所あり、お断わりした。私の校長在勤の後半は学校を不在にすることが多かった。県高校長協会、全国高校長協会常務理事（財政、給与、担当）、高体連（会長）、県体協（柴田知事が会長、私は副会長）、県定通協会、千葉市選管委員長、同県連、同関東連、同全国連役員、高校の書道、剣道、演劇の各連盟等多くの役職を負わされ、学校不在が多く、先生方や生徒諸君に申し訳ないと深く反省している。私が校長として思う存分働けたのは、先生方や生徒のおかげであり、また、ＰＴＡ、期成会、県庁、教育庁関係の方々の支持と協力の結果と深く感謝の気持が一杯である。有り難い。往事を回想し思い出の一端を述べた次第である。

千葉東高のことども

第七代　沢田繁二

私が千葉東高への赴任を命ぜられたのは、昭和二十四年の三学期のことで、当時の校長先生はお若いながら令名嘖々たる諸川芳雄先生でした。先生としても脂の乗り切った時代で、その先生に三顧の礼ではないが、私の勤務校安房高校までわざわざお出ましをいただいて、御懇請を受けたのです。学年としても中途半端であり、大学受験を控えた卒業期の生徒諸君を多く受け持っておりました。その上に私は教務的な仕事にたずさわることもなかったので、教頭職としてはズブの素人でありましたから、今から考える

と冷汗そのものでありました。

翌二十五年度は東高にとっては歴史的な一年で、県立移管、男女共学制の導入、校庭整備などの新体制が着々と施行され、創立十周年を迎えるという意義の深い一年となりました。当然校歌もという話になり、愚図愚図しているうちに〆切りの期日がやって来ました。こうなった以上自分が責任をかぶる気持で、一晩で書きあげたのが「シャロンの花」であり「すだく虫の音」でありました。その後私は百編になんなんとする校歌を依頼によって作製したのですが、今考えても「シャロンの花」にまさる詞はないと自負しています。ただ当時は女子生徒が多数で男子は数える程しかなかったので、最初の章句が「いましをみなご」という文句で現在の男子生徒数の状況に適合しないことおびただしいものでこの点忸怩たる思いがします。しかし、現在の男子多数、進学状況、生徒の運動部の活躍など誰一人予想できる者はなかったはずで、東高の意外な発展にはただ目を見はるだけです。それは時代のしからしむるものといえばそれまでですが、歴代の教職員、生徒諸君の努力の成果といっても過言ではありません。

最後に自分自身の心境を漂泊の詩人山頭火の句を引用させていただきながら述べてみたい。

〃青葉の奥へ道がなくなれば墓地〃

〃それもよかろう草が咲いている〃

八十歳の坂を明年に控え、この句の意味をかみしめ、かみしめ生きる努力を重ねています。

「生」の表と裏、それは人生の両面でありますが「雑草が花をつけるみたいに、私も人知れず生きて来ました。真剣に生きて来たかどうかは自分では判断がつきませんが

〃汝の道を歩め、人々をしてその言うにまかせよ〃

という西哲の言葉の通り、これからも己自身の道を信ずるままに歩くより他ありません。

思い出

第八代　村田　泰次郎

昭和四十七年三月定年退職で千葉東高を退いてから、早くも一九年経過。歳月の流れの早いのに今更ながら驚くばかりです。三年間お世話になった千葉東高を思い出すとき、着任をした年の秋、昭和四十四年九月三十日の早朝、校舎を侵入者によって封鎖されて、一日授業を中止した突発事件に強く胸を打たれるのです。こんなことは私の五〇年余

りの教職生活でも全く経験したことのないことで、学校の歴史に汚点を残したことは何と言っても申し訳なく、残念至極なことでありました。あの当時、西側校舎の四階で何やら分からぬことをわめきちらしている侵入者を摑まえてやろうと先生方が叫ばれたのを厳しく止めて、四階に駆け上がろうとされたのを止めてもらったのですが、得体の知れない何をするかわからぬ侵入者に立ち向かって、窮鼠猫をかむと言われるようなことが起こり、先生方にもしも万一のことがあってはならぬと思ったのであります。どこから侵入して来たのか、侵入者の人数や身元等、全く分からぬままにして、わめきちらしている声から全校の先生と生徒が遠まきにして校庭に集合、授業を中止して事態の推移を見守っているうちに、侵入者がいつの間にか姿を消してしまったのであります。逃走してしまったのに気付いたのはお昼過ぎでした。この事件が新聞に出て、その異常な事態に特に教育界は驚かされました。今は亡き畏友岡村忠雄さんが鞭撻激励のため学校に来てくれました。

「村田君、仏教の極意は何か知っているか」と言われて、知らないと答えると、

「いつ死んでもよいと思う心で居ることだよ」と強く激励されました。

大東亜戦争の末期に中千島の無人島「ウルップ」で独立守備隊の一員として応召していたとき、幾度か死線を乗り越えて来たことがある私にはピンと来るものがあって、心も体も軽くなり、この難事態に対応していくことが出来るようになりました。

第二の思い出は、着任した年の二学期の始業式であります。夏期休業に入る前から始業式は校庭で実施することを掲示して予告して来たのですが、当日は炎天酷暑であったので変更して体育館で実施しました。その時他校生約十人が「始業式粉砕」と叫びながら学校の正門から侵入して来ました。指導部長の先生を中心に元気旺盛な先生方が数名、体育館の外で警戒に当たって居られたので、直ちに侵入者を門外に押し出したのです。高校生らしかったがどこの高校生か分からず逃走してしまったのです。何を目的として千葉東高を目掛けて来たのか全く分からずじまいでした。後方で糸を引いている者が居るのではないか、特殊団体に関係する者の働きかけがあったのではないかと思われました。このようないかがわしい者との接触については、生徒本人の自覚は言うまでもなく、学校と家庭が細心の配慮により接触を避けるようにして、こんなことが二度と発生してはならぬと思いました。先生方と侵入者との揉み合いで

侵入者が落としていった手榴弾のようなものを発見したとき、これが始業式の最中にもしも投げ込まれたら、負傷者が出る悲惨な事が発生したであろうと、あの時胸を撫で下ろしたことが忘れられません。

学校の正常化のために先生方の御協力と生徒諸君のひたむきな努力のお蔭で、着任した年である昭和四十四年の暮れにはようやく落ち着いた静かな状態になって来たのであります。特に私は先生方の暖かいお心に支えられ、生徒会役員諸君とクラブ活動のリーダー諸君が学校正常化に向かっての強い推進力に鞭撻されて来たことを深く感謝して居ります。今や千葉東高は勉学やクラブ活動等に関して、県下屈指の名門校として発展して来ました。今後一層の御発展を心からお祈り申し上げます。

千葉東高等学校のいっそうのご発展を祈る

第九代　畠山一郎

創立五十周年を迎え、千葉東高等学校のいっそうのご発展をお祈りするしだいである。力いっぱい努力したかつての一日一日が走馬灯のように思い出され感慨無量である。

○石毛貞雄校長先生のこと

昭和三十四年、銚子商業高校長から赴任された先生は、さっそく千葉市内の松波町の一室に居住し、正しい校長としての姿勢を教頭の私に身をもって示してくださった。先生は何事にも積極的で冬の寒げいこには防具をつけて剣道の指導をされ、昼休みには通信制の職員とテニスを楽しまれ、明るいおだやかなご指導はいつまでも忘れることができない。校長室に花をかざり、静かに読書をされていたお姿はこれこそ校長のあるべき姿とありがたく思っている。先生の処世訓「親切・奉仕」はやがて青少年赤十字団の指導者として全県的に実績をあげていかれる。教育哲学をお持ちの校長像としていつまでも千葉東高等学校の歴史に輝く校長先生である。

○総合選抜制のこと

昭和五十、五十一、五十二年に高校入試に総合選抜制が採用される。高校入試の方法としていろいろと議論する。成功していると言われている先進県の実施経過を見学しあらゆる角度から検討する。一部の都市地域だけの採用であり多くの課題をかかえたまま三年間でとりやめとなる。

受験生にとって好ましいことであったが、教育的配慮にかけていることはなかったか、きびしい反省をする。第一

回の入試の時、関係学校の責任者が生徒のふりわけをしたことが今もなお心に残ることである。

千葉東高等学校に入学した生徒は入試制度にあまり影響されることなく順調に成績が向上してきたことは幸いなことである。

○国際理解教育の推進について

海外交流計画は若い高校生に海外の様子を視察し、青年時代に新鮮な体験を与えようとするものである。昭和四十九年が第一回で職員一名と生徒十数名が春休みの三月十四日より四月十五日までの四週間渡米する。アメリカからは、七月の夏休みのころほぼ同数の職員生徒が来校し、交互にホームスティをして交流を深めている。主催団体はニューヨークに本部のある「国際教育交換協議会（ＣＩＥＥ）である。第三回に原口与一氏（現佐倉西高校長、英語）を団長に生徒一一名が参加している。団員の井下田聡氏（現千葉北高校教諭、社会科、当時高校二年生）は生徒代表として帰校時全校生徒の前で、アメリカの高校生が高校生活を自由に楽しんでいること、わからないことは納得いくまで徹底して究明する等のことを感激をもって報告している。

夏期来校したアメリカの高校生の自由な服装に驚いたが、ホームスティの家庭の人々とも親密になり、帰国の朝学校の玄関で涙を流して別離を惜しんでいた。

ロータリークラブの交換生徒として毎年一名ずつオーストラリアや米国の留学生を一ヶ年間受け入れることになり、校内にはいつも外国人生徒がいる。松ヶ丘町の尾崎さん宅にホームスティしたシアトルの生徒を一ヶ月学校まで送迎したこともある。本校生徒もロータリーの交換生徒としてオーストラリアへ一ヶ年留学している。若い中の交流はこの上ない国際親善になるものである。

○教頭二人制のこと

昭和四十八年四月、教頭二人制が一部の高校に導入され、石毋田権兵衛氏が着任した。温厚な釵持教頭を助けて生徒指導等によく協力してくれた。充分教職員の理解を得られない面もあり、石毋田氏が二ヶ年で転任し、後に鈴木新一郎氏が着任する。鈴木氏転出の後は制度としての二人制教頭は中止となる。

○通信制課程のこと

今日は、在校生一〇〇〇名を超える盛況である。当時は生徒募集にでかけて中学側の理解を得るように努める。植草学園長植草こう先生のご理解で通信制入学と植草学園生徒との両立をはかり、出張してスクーリングをするなどの工夫もする。市川市の不二洋裁学校もやがて協力校となり、

生徒は飛躍的に増加する（やがて両校は独立高等学校となる）。

生徒の増加に伴い優秀な教職員も着任し、振興会組織もできて効果をあげる。昭和五十一年にはおされて全国通信制教育研究会長となり、この道の振興に努める。

昭和五十二年秋の園遊会にお招きを受け、皇太子殿下より「全国の通信制生徒はどのくらいの数ですか」、妃殿下より「スクーリングは大変でしょう」というご下問をいただき感激する。

ＮＨＫ学園千葉協力校は創立当時より千葉東高校におかれ、主として全日制の先生方の奉仕により運営されていた。やや年配の生徒たちがＮＨＫ学園に学び各地で活躍している。千葉東通信制の生徒増に伴い現在は愛国学園短期大学附属四街道高校に協力校がおかれている。

最後に在職中御協力いただいた教職員並びに同窓会諸氏に深く感謝する。

（愛国学園短期大学副学監）

伸びよ楠の大木

第十代　相川勝衛

昭和十六年四月に創設された千葉東高校が、戦後の変遷を経て創立五十周年というめでたい年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。私の回想は『創立四十周年記念誌』に載せていただき、今更の感もありますが、折角の要請でありますので、懐かしい旧任校の思い出のいくつかを述べさせていただきます。

私の東高とのご縁は、教育庁で高校管理を担当していた時期と創立四十年代最後に校長として勤務させていただいた三年間でした。昭和二十五年の高校再編成で千葉三高として男女共学校に転換してから、木田宏課長（後の文部事務次官）、親泊朝晋課長（前千葉市立女子高校長）等のもとで、微力ながら千葉三高の基礎がためにお力添えできたと思います。当時元気一杯の若い諸川芳雄校長の要請に応え、有為な教員を推薦できたことです。これらの人たちはその後県内外で枢要な職務につかれたことはいうまでもありません。次は、二十九年四月、文部省の政策転換による通信

制教育の統合で千葉三高に移管する原案を作成したことです。このようなご縁で、千葉東高とは特別な心の絆が続いておりました。

昭和五十三年四月から三年間、私の公職生活最後の仕事を千葉東高で勤務させていただいたことを光栄に思います。学校創設四十年史の終りの時期であり、名実共に県下屈指の高校としての転換期でありましたので、幾多の思い出があります。赴任当時、木造老朽施設の面積は二、五二三平方メートルに達し、県都随一（全面改築をじっくり見すえていた千葉女子高はそれなりに整備されていた）で、新校舎の西と北の校地はその都度の植樹が放置され、廃屋同然の旧校舎は生徒が屈託もなく部屋に使用していました。したがって就任最初の仕事が構内のクリーン作戦と新施設整備計画の作成でした。狭い校地の効率的利用をはかり、また隣接の民有地買収の方途まで考え、思い悩んでいる折に天からの啓示がありました。校地西側に入りこんだ学校の塀の外側にある防火用水池の三〇平方メートルが実は校地であることを確認できたことです。この地に移転後三〇年間気付かなかったことです。これで、市消防局と接衝し、大山財務課長の理解を得て、ここを通路にして通信教育棟を建設することができ、校舎裏側の休閑地を整理し、活用する計画が立てられました。

施設の整備計画は、五十四年度の通信教育棟と十三部屋の建設、五十五年度のグラウンド総合整備と植樹緑化でした。これらの経費は、植樹と暫定五部屋に要した九四五万円が団体費から支出された以外はすべて県費でまかなわれ、いまでも当時の教育庁関係者のご配慮を忘れられません。またグラウンドの計画作成にあたっては体育科の佐藤昭勝教諭の企画調整力に負うところが大でした。植樹については記念木として恥ずかしくない名木をと、関係者と九十九里に足を運び楠の大木と県木の槙を物色し、また久留里に出かけて椿の手ごろなものを求めました。楠は永遠に続くものを考えましたが、並木の椿は時代による植え替えも念頭に置きました。グラウンドの新計画は限られた校地の最大利用の観点からで、校史の上では大変革というべきものです。

校長の絶えず念頭に置くことは、建築や土木のようなことではなく、生徒のための教育活動であります。私の東高三年の生活は、いわゆる総合選抜制から単独選抜制に復した新入生との協同生活で、まことに意義のあるものでした。新入生が東高に誇りを感じ、自分の天分を十二分に伸長さる努力を続けることを期待し、職員ともども楽しい日々を

送ることができました。移り変わる生徒の実態に即した教員陣容を心がけ、男子校の長所を徐々に導入して生徒の向学心に応えられるようにすることです。幸いにして、単独選抜の生徒の学年主任は野村松三教諭で、部活動の指導で体得した緻密なデータに基づくきめ細かな指導によって、五十六年三月の卒業生がわが千葉東高に輝かしい新たな歴史を飾ってくれました。創立四十年にして東高の風格が確立したことはまことに意義深いことでした。このような生徒の意識の変化に応えるため、五十七年度からの新教育課程についても、教育庁の週三二時間の方針にもかかわらずあえて一時間を加えることを決めたわけです。修学旅行の三泊四日制の採用もこれらの方策の一部といえます。

生徒指導の充実のための学校経営のスリム化も時代の要請でした。東高の通信制とは別にNHK学園の通信教育への協力校でしたが、自校のそれの拡充と対策で手一杯でしたので、関係者の協議により円満に、他校への移管が五十五年から実施されました。また衛生看護科の施設改善は独立校への発展しか考えられなかったので、教育庁との折衝を始め、五十六年四月からの県の新五か年計画で採用され、若葉看護高校発足に一歩進んだわけです。これらは校地の狭い学校として当然解決すべきことと思ったからです。

東高在職三年、優秀な教員や事務職員に恵まれ、四十年史の最後の、しかも新時代への転換期に際会できたことを幸せに思っております。学校の教育環境の整理と整備、県下有数の進学校への基盤整備の時代であったかと思います。その後一〇年、東高は年々発展の足跡を残し、めでたく五〇年の歴史を飾られたことに改めて敬意を表します。

楠の大木は年ごとにみずみずしい若葉を増し、東高の発展を見守りながら、輝かしい歴史の証人として力強く成長してくれることを祈っております。

（東邦大学付属東邦中・高校長）

思い出すままに

第十一代　須田義男

創立五十周年、おめでとうございます。

昭和五十六年、東高に着任したその年に、四十周年記念式典を行ったのが、昨日のことのように思える。

しかし、もう一〇年。当時を振り返ってみると、大筋のところは前任の相川校長の立てられたものの踏襲で進むことが出来、具体的には細野教頭、通信制の松本教頭、横尾

事務長と優れたブレーンに加え、諸先生方の骨身を惜しまない積極的な活動と、PTA、同窓会の全面的なご協力のもとに、無事終了できた。校長は式典当日の式辞の想でも練っていればよかった。これがまた東高の良さであるかもしれないし、校長としてこれに勝る幸せはないとつくづく思うのである。関係各位に改めて御礼を申し上げたい。

このように一事が万事安心して仕事を任せることが出来る環境の中で、すばらしい生徒に恵まれて生活できたことは、誠に校長冥利に尽きるものであった。わずか二年間の在籍であったが、心よい思い出も多い。

看護科の分離独立の話は前々からあったようであるが、具体的に校舎建築のための設計が始まったのは、昭和五十七年ごろからであったと思う。私にすれば、可愛い娘たちを嫁がせるような気持で一ぱいだった。特に新校舎は新所帯に欠かせないものでゆるがせには出来なかった。所帯道具ともいえる諸設備についてはもちろんである。県当局にもわがままと思われるようなこともお願いしたが、ほとんどすべてかなえて下さったことは感謝に堪えない。看護科の永井先生ともども当時の担当指導主事であった五関先生（初代教頭、後校長）と何回話し合っただろうか。学級増に伴って必要と思われる合同講義用の二つの大教室、あるいは無駄とも言われそうな一教室分ぐらいのゆとり空間——情操面にも役立てればと考えたものであるが——等すべてかなえてくださった。諸施設、設備配置を考えた基本設計が出来あがってからも、何回手直しを頂いたことか。

また、新設校並みの設立準備委員の配置（昭和五十八年四月）も、森田高校教育課長にご配慮頂くことができた。

このように看護科独立に関係したすべての方々が、単なる事務的なかかわり方でなく、生徒のため温情溢れたお気持で当たって下さったことは幸せであった。

しかしその後も種々難問題が続いたと側聞したが、森田校長（設立準備委員長）、宮本準備副委員長（初代校長）等のご尽力によって、見事それ等を乗り切って、昭和五十九年四月、若葉看護高校として、晴れて開校できたことは誠に喜びに堪えない。今後の発展を祈る次第である。

また、あれは昭和五十六年であったか、七年だったのか、ラグビーの関東大会が甲府で開催され、東高が山梨の日川高校と対戦することになった時のことである。日川高校が私の出身校であることをどこで知ったのか、生徒達が「校長先生はどちらを応援するのだろう」と心配しているとのことが耳に入った。

そんなある日、何であったか忘れたが、生徒の集会が

あった。丁度よい機会、一応私の気持を生徒達に伝えておかねばと思い「日川高校は私の母校とはいえ、私は東高の校長である。日川を破るために、君達と一緒に応援しよう」と宣言?した。生徒の前での校長宣誓である。その時の我が意を得たというような生徒の笑みは忘れられない。

こんなことがあって少し後、山梨のテレビ局から電話があった。「先生は日川の先輩だそうですが、対戦するに当たっての感想は」ということであった。私は直ぐ答えた。「母校を破って恩返しをしたい。必ず勝つ」と。そして求められるままに何やかやと話した。後で考えれば少ししゃべり過ぎたようであるが、もう遅かった。

試合も終り、いつとはなしにこのようなことは忘れてしまっていた。しかしその翌年正月、日川のクラス会か何かで久し振りに山梨に帰った折、旧友の集中攻撃を受ける羽目になった。あの試合の放映中、私の話した相当部分をアナウンサーが紹介したらしい。テレビ応援も多かったらしく、皆知っていた。「須田、あのテレビでの言い草は何だ、言いたいことを言いおって」。裏切り者扱いである。「何を言うか、俺は千葉東高の校長だ。たとえ母校であろうとも敵は敵だ。東高を応援して何が悪い」。丁丁発止、試合をさかなに楽しい酒もはずんだ。東高が勝っていたら、一滴の酒も飲む暇もなかったかもしれない。

ラグビーといえば、教職最後の年の十二月、愚妻と一緒に花園のスタンドに座ることができたことは幸せであった。またその折、シードされて試合のなかった日川高校の斉藤校長が、先生方と一緒に寒い中、奈良の宿舎からわざわざ東高の応援に駆けつけて下さったことも感謝に堪えない。やはり母校とはよいものである。

思い出すままに書き連ねてきたが、思い出は尽きない。調和のとれたすばらしい学園であった。この五十周年という大きな区切りを、また新しい出発点として、更に発展されるよう祈りながら筆をおきたい。

（千葉敬愛短期大学初等教育科学科長）

創立五十周年によせて　―五年間の回顧―

第十二代　森田　章

創立五十周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。このたび校史発行にあたり、在職五カ年を回顧し、半世紀の資に供することができれば幸せである。

私が教職員人事異動事務に明け暮れていた、昭和五十八

年二月、来庁された須田義男先生が、「誰が私の後任に発令になるのかしれないが、千葉東という学校ほど多忙な学校はない。普通科だけでなく、看護科の移転問題はあるし、それに通信制があり、千葉刑務所の方からは所内に全教科履修の制度を設けよ、と強い要望はあるし、難問山積の学校だ」といわれた。他の学校にはみられない複雑な問題を抱え対外接渉の多い学校だからである。

はからずも須田先生ご退職の後任として登板し、昭和六十三年三月まで教職最後の五年間を勤務させていただいた。顧みて無我夢中、日々祈る思いで経過し、アッという間の五カ年であった。幸い、研究熱心なそして情熱溢れた優秀なる教職員に支えられ、どうにか、大任を果たし得たことを今でも感謝し、誇りにさえ思っている。

着任して、私が最も意を注いだことは、校内の施設設備の充実と、進学指導の強化、通信制にあっては、学力の充実と目標達成であった。

着任してから、一ヶ月程経過したある時、今井教育長に元気でやっておりますと、挨拶した折に「千葉東は極めて忙しい学校です。何しろ始業式を五回もやったんですから」と申し上げる。すると「校長さん！遅刻や欠席した生徒を別個に集めてやられるからでしょう。それで五回ということに」「いやいやちがいます。まず全日制の始業式、それから通信制、千葉刑務所、市原刑務所、それに県職員の簿記会計講座の開講式ですよ」「それは大変だ。しかしあなたなら出来ます。ごくろうさま」と、こんな会話をしたことが、今でも思い出される。なるほど、須田校長が話されたことがよくわかる。歴代の校長さんは難無くこれらの問題を処理されてこられたのだから敬服に値する。

昭和五十八年四月二日、非公式に着任したら役付きの先生方の出迎えを受けた。感激である。この一事で、さすがに素晴らしい学校だと思った。この席で「和を大切に、指導は厳しく願いたい」「学校で起きたことの全責任は私です」といった主旨のことを申し上げたのを憶えている。

戦前、女学校から発足して、旧制中学校と同じような男女構成を維持し、全国有数の進学校に発展した学校は、おそらく本校ぐらいであろうと思うと、地域社会の寄せる期待がいかに大きいことか。こんな要請を、歴代の校長をはじめ、全教職員や生徒が身をもって受けとめ、努力を積み重ねてきた姿が、今日の本校だと思う。

生徒は自由でのびのびと明るく、自主性を発揮し、通常の学習はもとより、クラブ活動でも多大の成果を挙げていることは、伝統化しているし、先生方もよく研修され、生

徒の学習に十分対応されている。当然のことといえば、当然かも知れないが、夜おそくまで燈火が見られることでも理解願えると思う。毎朝日課の打合せが、僅か五分間、極めて能率的に、しかもきめ細かな豊富な資料等によって処理されていることなど、他校では見られない現象ではないかと自負している。

私は「器は人の気を移す」という言葉が好きである。きれいな環境の中から清純で、正義を重んずる人材が育成されるという信念からである。

着任して、すぐ焼却炉の改築をお願いした。願いはかない、素晴らしい威力のあるものが出来た。環境美化のスタートである。次いで自転車置場三棟の増設。五十九年の武道館の改築工事もスムーズに進んだ。更にグランドの整備と散水施設の完成、校門椿並木に沿った防球ネットの敷設、県道沿い二〇〇メートル余のブロック壁の全面改築、図書館内の閲覧机の増設、視聴覚室の充実、生徒昇降口の改装、コンピュータ、ピアノの購入など教育条件の充実を図った。細かいところでは、校舎裏側の部室窓の金網張り（盗難防止策）等もしたが、なかんずく窯芸室の建設には苦労した。体育館の全面改修や、生徒棟、管理棟の改修工事等、次から次へと工事を続け、教職員や生徒に随分迷惑をかけたし、横尾、鳥取の両事務長には、ことのほか苦労をかけた。紙面を借りてお礼を申し上げたい。

この間、看護科の幕張移転に伴い、校舎建築工事と看護高校新設の許認可事務については、宮本先生に大変な苦労をかけたし、看護科の先生方にも衷心からの御協力をいただいた。昭和五十九年四月、素晴しい校舎の完成をみて、スムーズに移転出来たこと、感謝にたえない。そして独立、本県唯一の独立の看護高校として隆々発展していることは力強い限りである。

看護科の実習棟跡地に他校から羨望の的となっているセミナーハウスの建築と、椿並木沿いの万年壁の改築も県当局の格別な計らいで完成したことも、嬉しい限りである。今でもフルに活用されていることを耳にする時、苦労のかいがあったと思う。

全日制諸君の学習や部活動に取り組む、その姿勢と成果については、資料が示すとおり、めざましい活動振りで、文字通り「立派」という表現どおりである。在職中、国公立大学へ、一四三名もの現役合格者をみたこと、ラグビー部が全国大会に二回も出場し、三回戦まで勝ち進んだこと。音楽部が連続して県代表となり、NHK全国音楽コンクール高校の部で、関東甲信越大会、金賞、全国大会で銀賞の

栄誉に輝いたこと、などは私の脳裡に焼きついてはなれない快挙の一駒である。また通信制においても、野球部が、もう一つの甲子園に、庭球部や陸上競技部が全国大会に出場し、大活躍したことも忘れられない出来ごとであった。「多忙は常に前進」のとおり、多忙の明け暮れであったが、幸い健康にも恵まれ、責任感旺盛で熱情溢れる優秀な先生方に支えられながらの五年間は、他高校長からすれば羨望の的であったにちがいない。ありがたいことである。

時は移り、人はかわっても、連綿と続くこのよき伝統の上に、更に磨きをかけるべく精進努力を続けてほしい。そのことが二十一世紀を担う生徒諸君の将来への糧となることを忘れずに、常に若者らしく自己の限界に向けて挑戦してほしい。最後に在任中、御支援、御交誼いただいた各方面の方々に心からの御礼を申し上げ、併せて高橋校長先生を中心に師弟一如の御活躍とご発展を心からお祈り申し上げ五十周年の祝詞とします。

創立五十周年を祝して

第十三代　齊藤　志貴雄

創立五十周年、まことにおめでたく、心よりお祝い申し上げます。

昭和十六年、千葉市立千葉高等女学校として呱々の声をあげて以来五〇年、その間、特に戦後のベビーブーム、高校進学率の上昇、それに伴う新設校ラッシュ等々、社会の大きな変化につれ、幾多の変遷を経て今日の千葉東高校が存在するわけですが、それぞれの時代の教職員、生徒の皆さんの並々ならぬ向上への努力の賜と、深く敬意を表する次第です。

私が着任したのは昭和六十三年四月、在職僅か二年という短期間ではありましたが、名実共に名門校と目されている千葉東高校で、三九年間の教職生活の最後を飾ることのできたのは、本当に幸せなことでした。四月、門道の両側に咲き乱れる花に迎えられて着任し、優秀な教職員・生徒と対面、そこから生まれる落ち着いた、しかも明るく伸びやかな校風に接した時、本校の洋々たる前途が確信でき、

責任の重さを痛感したことを鮮かに思い出します。

本校は校地の狭隘さを除けば、一応、施設設備も整ってはいましたが、当面の課題は古くなった校舎の改修ということでした。しかしその前段として、テニスコート、多目的グラウンドを含む校庭の改修が急がれていました。幸い、県当局のご理解を得て立派に出来上がりましたが、もう一つの幸せは、前校長森田章先生、鳥取事務長さんのお骨折りで、細かい部分にも充分気配りの見られる、県下でも稀に見る立派なセミナーハウスの開館を迎えたことでした。本校は進学だけでなく、スポーツ・芸術・文化の部活動も極めて盛んであり、生徒の七、八割もが参加している現状から、この施設の完成は合宿、研修等に大いに活用され、各部の活動は全国、関東レベルでの活躍振りにも現れておりましたし、また、地理的条件にも恵まれている本校は、各種教育関係団体の会議、研修等にもしばしば使用され、その利用率の高さは目をみはる程でした。

校舎の大規模改修は、県の計画に従って、在任中には果たせませんでしたが、平成二年度、高橋浩司校長のご苦労の甲斐あって、普通教室棟が見違えるほどきれいになりました。そして本年度、五十周年記念式典が挙行される運びとなったことは、まことにご同慶にたえません。

仄聞するところによれば「未来メッセージ・50」として生徒を中心とした、作文・作品等をタイムカプセルに収め、五〇年後に開封される由、その中にどんな夢が描かれていることでしょうか。十年一昔ならぬ日進月歩の変化の激しい現代、五〇年後の本校がどんな姿になっているのだろうか、時あたかも高校生急減期に入り、高校改編が動き出し高校の個性化もはかられねばならぬ時代となり、総合制高校、国際高校等、新しいタイプの高校づくりが論議されています。本校の五〇年後の姿を直接見ることは叶わないでしょうが、楽しい夢を見させて貰っています。

もう一つ、私にとって貴重な経験となったのは、千葉県下唯一の通信制課程設置校なるがゆえに、通信制との関わりを持てたことでした。はじめての経験で、一からの勉強でしたが、生涯学習社会へ移行する中で、今後ますます重視されねばならぬ大切な教育だと強く感じました。そして卒業式の感動、苦労して卒業をかちとった輝く顔々、生徒の年齢にかかわりなく、人間として多くのことを彼等から学んだことでした。今後世の中の移り変わりの中でどんな方向に進むにしろ、一層の充実、発展を期待するものです。

在任中は極めて多忙ではありましたが、毎日に生き甲斐の持てる充実した二年間だったことを感謝しています。現

在、高等学校文化連盟の仕事に携わり、学校の外側から高校生を見ている旧職員の一人として、千葉東高校が五十周年を契機に、文字通り、文武両道にわたって輝かしい前進を遂げられるよう、切に祈っております。

二　全日制課程

創業・守成

旧職員（国語）　山根　茂

千葉東高校が、本年創立五〇周年を迎えると伺って、ふと「創業・守成」という故事を思い出しました。実は停年間際の六年間を、私は新設の高校で勤務しておりました。開設準備の期間が三か月しかなかったので、その戸惑いと苦労はたいへんだったと言わざるを得ません。この難題に直面して、何とか創業に漕ぎつけられたのは、関係者の協力があったればこそですが、そこに参画した私の取り組みに、数多の示唆を与えてくれたものは、かつて自分が東高に奉職して得た尊い体験でありました。

私が千葉東高校に在職したのは、昭和三十三年四月から昭和五十一年三月までの一八年間に及びます。立派な先輩や同僚の先生方、そして純真な生徒諸君に囲まれて、いわば成長期の教育の推進に専念しながら、校務運営の在り方をいろいろと習得させていただいたのです。この充実した経験が、私の心の支えとなり、後日他の新設高校経営の指標として役立ったわけです。

東高校に私が赴任したころは、まだ千葉三高時代であり、建物も木造の簡素なものでした。まもなく現在の校名に改まり、校舎の全面的な増改築も行われるようになりましたが、和やかな校風と愛校心に燃える意欲は、流動する歳月を経る中で脈々と受け継がれて、県都の有名校として発展し、当校ならではの実績を積み重ねて来ました。

半世紀前の草創期や、最近の学校の様子を直接見聞することに、私はめぐり合わなかったのですが、往年の市立千葉高等女学校時代に樹立された教育方針を定礎として発足し、前途の進展を期待されつつ築かれて来た学び舎において、それぞれの時勢の変遷に伴う社会的要請に応えた教育的成果があげられてきたことは、まことに喜ばしい限りです。

深思・意志・自負・自立を全うしていくことが、本校の伝統であると言われています。この精神的活力に導かれな

がら、私の二〇年近い人生も東高の校風の中で有意義にはぐくまれて来ました。歴代の諸先生の御指導のもとで、先輩・後輩の生徒諸君のたゆみなき努力、またそれを支援してくださった地域関係者の御尽力等によって、培われ磨き上げられて来たすばらしい校運は、いま五〇年の春秋を重ねて、「知命」のときを迎えています。この伝統を誇り高く掲げて、更に躍進する決意を誓うことが、その天命を知るゆえんではないかと思っています。

想い出づることども

旧職員（国語）　山泉　彰

このたび千葉東高校には、めでたく創立五〇周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申しあげます。

半世紀に及ぶ御校の輝く校史の中に、わずか（と申しましても私の教員生活では一番長い勤務校になります）九年間ではありますが、在籍させていただいて、想い出多く、充実した年月を過ごさせていただきましたことを、あらためて光栄に存ずる次第です。

村田校長先生にお声をかけていただき、畠山校長先生、相川校長先生より厳しく、かつ慈愛に満ちたご教導を現在に至るまで頂戴いたしておりますことを、ここに深く感謝申しあげます。

またその間、他県と新設校の経験しか持たなかった未熟な私を、親しくご指導くださった幾多の先輩、同僚職員各位の公私にわたるご厚情も忘れられません。

当時の生徒は、上昇気流にある学校の特色を遺憾なく発揮してくれました。進学については、あの子がと思う生徒が難関大学に合格しはじめました。運動系、文化系の部活動も、いずれも活発に成果を挙げていました。私自身は、卓球部、ＪＲＣ、フォークソング同好会などの顧問をつとめました。卓球部については、千葉公園体育館によく足を運びました。ＪＲＣは、畠山先生にすすめられて黒潮荘の研修会を皮切りに各種のトレセンに参加しました。フォークソングについては、私の担任した生徒が同好会創設の中心であった関係で、発足の経緯からかかわりました。やや異端児視されていたグループだったようです。

私の東高転入と同時に入学した学年の卒業生の何人かが現在、本県高等学校の中堅教師となって各校で活躍されていることは、誠に頼もしく、うれしい限りです。

東高に事務局が置かれた千高教研・国語部会の活動に関

する想い出も多いのですが、部会機関誌に掲載ずみですので省かせていただきます。

最後になりましたが、東高教頭先生時代よりご懇切なるご指導をいただき、本年三月にご退職された細野直先生はじめ四〇周年記念誌を編纂された先生がた及びこのたびの五〇周年誌編集にたずさわられた職員皆様のご労苦を拝察するとともに、新世紀にかかる東高一〇〇年にむかっての限りなきご発展をお祈り申しあげて、拙き文をとじさせていただきます。

（千城台高校校長）

思い出

旧職員（社会）　山崎一郎

私には、特別な宝物が三つあります。

その一は、「寄書きされた日の丸の旗」です。これは、昭和十九年七月十五日、臨時召集により、横須賀海兵団に入団することになった時、私の組の級長であった、川口絹代さんの学年全員が、私の武運長久を祈り寄書きしてくれたものです。私は入団後は、衛生兵として、土浦の霞ヶ浦海軍病院で、日本軍隊特有のきびしい基礎教育を受けることになりましたが、この寄書きの日の丸は、お守り同様に大きな勇気を与えてくれました。これに加えて、生徒諸君からの多くの慰問文は、病院幹部の評判ともなり、ひいては私の信望を高める一助ともなりました。そして基礎教育終了とともに、郷里に近い南房の州崎海軍航空隊付となり、やがて終戦をむかえ無事帰郷することができました。生徒諸君の祈りは私を本校に復職させてくれたもので、寄書きの日の丸は大切に保存してあります。

その二は、「天夢遺稿」です。この書籍は、終戦後滝校長が、現在の千葉女子高等学校に転任される際、先生から記念にいただいたもので、「郷里の偉人千葉天夢翁の遺稿」です。後この書籍を資料に房総史学第七号に天夢翁伝を書くことになりました。滝先生のことについては、「千葉県の教育に灯をかかげた人々」の第三巻を参考にしていただくことにして、ここでは、限りなくお世話になった、偉大なる教育者の象徴として大切にしています。

その三は「記念樹紅梅」であります。これは、私が本校での二十八年の思い出を残し、昭和四十六年三月退職した時、先生方から記念樹として紅梅を松本正子先生のお世話にて庭前に植えたものです。私の東高校時代の総括であり、

先生方の厚い友情を感じました。その後、美しい花が咲き、実を結び、大木に変身しつつありますが、東高校の発展を祝福するよう成長しています。

最後に、私は数年前より、第四の宝物の作成に努力しています。それは、毛筆による漢字（細字）五〇〇万字の書写です。（一万三〇〇〇字の方眼ノート使用）現在二一六冊目（約二八〇万字）になりましたが、実現したいと思っています。東高等学校のますますの発展を祈ります。

思い出しますこと

旧職員（社会）　勝　輝夫

古風な木造校舎が、東西に、細長く伸びて並び立ち、その南側の、やや低めで無造作に拡がった校庭の木製お立台の上で、私は、着任の挨拶をいたしました。傍には、同じその時、着任された幾人かの先生方が佇み、埃っぽい校庭には、目に染みるような（制服）黒と濃紺の二色が、左右に広がって、そこに、生き生きとした千余人の顔がありました。……これは、昭和四十一年のある春の日の光景で、私の東高における生活の第一日目でした。それから、昭和五十九年三月まで、一八年もの歳月をお世話になりましたが、在職期間が長かっただけに、いろいろな思い出がございます。

そのうち、特に印象に残っているものを取り上げてみますと、かつて、同じ記念誌編集に携わった者の一人として、――創立三十周年記念誌編集のこと――が、頭に浮かんでまいります。……昭和四十六年三月、私は、当時の学校長、村田泰次郎先生から、記念誌編集の委嘱を受けました。この作業に携わった方々は、ほかに、秋山一郎・岡本正義・須藤明子・曽根正之・高山孝・永井弘子・野村松之・佐瀬八重子の各先生方が、いらっしゃいました。編集に際し、私は、東高創立までの経緯課程を担当いたしましたが、作業に入って直ぐに、当時を物語る資料が、ほとんど残存していないことに気付きました。これは、終戦直前の米軍による空襲で、校舎が被災し、その際、多くの書類を焼失するという不運があったからです。市立高女時代も同様でした。……こうして、編集作業は、早々にして大きな壁に直面したのでした。それで「情報収集のために、歩きに徹すること」になった訳でございます。そして、まず、足を運んだ先が、東高揺籃の地、千葉市港町一九番地の校舎跡地です。ここは、戦後いちはやく、区画整理や地番変更が行

われ、既に住宅・商店・工場等が、入り組んで立ち並び、なかなか正確に、その敷地跡を確認することができませんでしたが、それでも、古くから、この地にお住いの市民の方々からの情報を辿り、現、港町一の二「君待公園」のあたりが、その中心であったことを、つきとめたのでございます。千葉市中央図書館にも通いましたが、ここに保存されておりました当時の新聞記事は、とても、役立ちました。また、千葉市役所内の市議会には、夏季休暇を利用し、野村松之先生と共に、足を運びましたが、あの戦時中の千葉市議会において、議決されました東高（市立高女高）設置案のほか、これに関連する議案等は、議会事務局で保管しておりました夥しい議事録の中から探し出したものでございます。

このほか、当時の為政者であった千葉市側の東高（市立高女）設置に関しての、考え方や、諸事情につきましては、元千葉市長、宮内三朗氏の私宅を、秋山一郎先生と共にお訪ねして、お伺いし、東高（市立高女）発足当初の詳しいお話や、エピソード等は、二代学校長、楠原信一先生を新宿町のご自宅に、また、草創期の教頭であり、理科ご担当の林勢司先生（千葉大教育学部教授）を佐原市のご自宅に、それぞれお訪ねして、お伺いしたものでございます。前記の方々、（今は、故人となられました）は、いずれも、ご高齢でいらっしゃいましたが、当時の状況を、逐一正確に、ご記憶されており、私共、深く感銘したものでございます。……以上のような経緯のうちに、漸く、創立に至った諸事情や、草創期の東高（市立高女）の輪郭を摑むことができたのでした。また、記念誌編集のそれぞれの分担において、ご尽力の先生方には、いずれも、通常のご勤務に携わりながらのお仕事で、随分、ご苦労なさったことと存じます。また、当時、教頭の草葉章先生、元教務部長の山崎一郎先生、学年主任の安塚正一先生（故人）はじめ、第一回卒業生の永江栄さん、平野登美子さん等、多数の方々の温かいご協力も決して忘れることはできません……創立三十周年記念誌は、こうして形を整えていったのでございます。……次に、いささか、趣が変わるのですが、――東校、校歌――についての回想を述べてみたいと存じます。「シャロンの花とたたえたる……」に、はじまるあの校歌は、歌詞・メロディ共に、断然素晴らしく、聞く毎に、心にひびく何かを感じたものでございましたが、はじめ、歌詞㈠番の最初、『シャロンの花』の由来が、よく理解できず（ただ聖書に関係が、あるらしいことは、察せられました）、新入生のオリエンテーションの際にも、なかなか話

題にのぼりませんでした。私は、このことに深い関心を持ち、いつしか授業で、中近東・イスラエルを、取り上げる時、幾許かの時間を割いて、かの校歌の一節を話題にしながら、地図上でシャロンの地名を確かめさせたり、時には、簡略ながら、視点を歴史・宗教においた授業展開等も、したのでした。……こうして時が流れ、何年か経ちましたある日、私の机上に、一冊の立派な装幀の図書が、配られておりました。

これが、創立40周年記念誌だったのでございます。そして、その記念誌の「とびら」に、著名な写真家、善養寺康之氏が、現地で撮影なさった、あの『シャロンの花』が、載っていたのでした。写真ではありましたが、この花が、至高至純の気品を発し、また、その香りが、あたりに立ちこめているかのように、私には、思えたのでございます。そして、その下段には、旧約聖書、雅歌、第二章一～三が、引用されておりまして、この時、はじめて私は、シャロンの花、及び、その正統の由来を知ったのでした。また、歌詞㈡番のはじめ、「アルプの山のこごしきを……」は、大変、含蓄の多い一節と思われますが、歌詞㈠番との関連において考えますならば、かの中世における〔遠征十字軍〕のうち、一部の騎士団が、アルプス越えのコースをとって、アドリア海あるいは、地中海沿岸に出で、船団を組んで聖地を目指した、あの歴史的事実が、ひらめきます。また、それと前後して行われ、世の語り草となったいわゆる〔少年十字軍〕の壮絶なアルプス越えも、頭に浮かんでまいります。……由来の詮索は、ここまでにいたしますが、いずれにしましても、「をとめさびせじ」、「をとこさびせじ」で結ばれる、あの東校の校歌は、それ程、深い意味と、奥行きをもって作詞され、また、その意を、輝くばかりに表わした作曲によって完成しております。……東高は、今や、あらゆる設備、施設を擁する白亜の殿堂に変身し、内容も一段と充実して世に広く知られるところとなりましたのは、周知の通りですが、更に、この誇り高き校歌と共に、限りなき発展と栄光を担われますことを祈念いたしまして、筆を措く次第でございます。

柔道部の創立と演劇部県大会初優勝

旧職員（数学）　白銀　彦太郎

昭和二十九年秋、柔道部の五人が講道館柔道初段にパスした。第七回生の及川保雄、及川慎一、長谷川道夫、大津

信治、小川毅の諸君で、この年四月転任して柔道顧問として生徒と稽古していた私にとって、千葉三高に開校以来初めて黒帯誕生は嬉しい出来事であった。

千葉三高柔道部誕生のころを及川保雄氏に伺うと、「昭和二十七年後半、熱心な数人の生徒は、自分たちで金を出し合って畳を一〇枚買い、リヤカーで空き教室（当時卓球場）に運び柔道の練習を始めた。このことが当時の沢田繁二教頭を動かし、佐々木鉄太郎教諭（故人）等の助力もあり、柔道用畳三〇枚が三十八年作成された」とのことである。道場は当時の小講堂（現在セミナーハウスの位置）（勿論当時は他に講堂や体育館はない）を剣道部と分けて使用し、練習終了後、柔道の畳は毎日小講堂の隅に積み上げていた。

柔道同好会ができ、翌二十九年、柔道部が正式に承認された。この部創立時代、生徒と柔道を稽古した顧問は、二十七年度は愛敬高輝教諭、二十八年度は朝比奈英男教諭（故人）、二十九～三十一年度白銀彦太郎教諭、三十一～三十三年度新谷敏夫教諭（故人）である。そのころ大湊大艦氏（故人）に月数回柔道コーチに来てもらったこと、私と新谷氏が柔道指導者講習会を受けに行ったことなど懐かしく思い出される。

演劇部、県中央発表会に初優勝

演劇部は、昭和二十四年以来県高校演劇コンクールに毎年参加しただけでなく、卒業生の予餞会、新入生歓迎会、文化祭など演劇部の活動は大変盛んであった。これは、熱心な顧問佐倉俊二（二十五～二十八年度）氏の賜でもあった。

二十九年これを引き継いだ私（柔道部と掛け持ち）は、演劇部生徒から学ぶことも多かった。二十九年県コンクール三位、三十年十一月二十七日、千葉県高校演劇コンクール中央発表会において初優勝（会長賞）を得た。この時の作品は長谷川行勇作「山小屋にて」演出今井光子（部長）である。当時の演劇部の活動は大変活発で、三十一年度では、千葉刑務所慰問公演を含め、年間七回の公演をしている。

第二回目の中央発表会の会長賞は、三十五年十一月で、上演作品は小幡欣治作「罪人」部長石橋清で、これは関東高校演劇選抜大会で東京の久保講堂で上演した。第三回目県大会会長賞は、三十九年十一月南勝彦作「国道の幽霊」部長林謙二でこの作品は翌年岡山の全国大会に出場した。その時の主役の一人が、いまの劇団ルネッサンス主宰大川義行氏である。私の一三年間の演劇部の思い出はつきない。

千葉東高校の思い出

旧職員（数学）　朝日　伊豆雄（東京理科大学講師）

耳を澄ませば「シャロンの花」の校歌が遠くから聞えて来るような気がする。この格調高い校歌が、第七代校長澤田先生の作詞によるものであることは、皆さん周知のことでしょうが、千葉東高校の教頭時代に作詞され（昭二十六年）その時代から歌い継がれているものと思っています。再度校長として来任された先生が、ある日、生徒・職員に校歌の由来を話されたことがあった。いつもそうだったが、話術巧みで平易な言葉でお話された。さすが現代国語の文学者大先生と感銘したものだった。私は、四〇年近くの教職を辞し、この校歌に送られて帰宅した日のことを今思い出している。

名実ともに育った千葉東高校、一九年の歳月お世話になり過ごした学校の、発展して来た日々のことを振り返って懐しさに堪えないものがある。もっとも、千葉東で終始された山崎一郎先生や、安塚正一先生（故人）、松本正子先生、吉田さゆり先生等々に較べれば、私の勤務年数は問題にならないのですが、先輩諸先生から伺ったことや、私の実感を、おこがましくも、限られた紙面で述べて見たい。

戦後（昭和二十三年四月）、戦災で追い回された学校が、やむなく先輩諸先生方と生徒諸氏が手に手に諸道具を持って、バラック兵舎の軍兵器廠跡地に移って来たというのだから驚きである。その兵舎は私が着任した時は一部改造、増築されてはいたものの、原形に近いまま使用されていた。県都にある県立高校がこんな状態であるのが不思議だった。おまけにトタン葺きのこの代用校舎が、俄かに大粒の雨でも降ると重機関銃まがいの音を立てるのだから、軍隊時代と錯覚するのだった。昭和四十年七月、第六代校長内藤先生が着任され、在任年数一年八か月の間に全面改築に着手し、現在の千葉東の礎を築かれたことにただただ敬服するばかりである。以後沢田、村田両校長先生と三代の校長先生方のお骨折りで、校舎の概要が出来上がったように記憶している。この土台の上に、今日の東高の全容が出来上がっている。

昔、寺子屋でも人材は育ったというが、旧教育環境で学んだ同窓生諸氏は、今母校が県下に誇る指折りの学校に躍進している様を目のあたりに見て、感慨いかばかりでしょ

うか。良い環境の下、文武両面はもとより集会一つ取っても、立派になった生徒諸君とお別れした日、教育とは何であるのかとしみじみ思った。今回創立五十周年を迎え慶賀至極、千葉東高校の今後ますますの発展を遥か東総の地より祈念いたしております。

心に残っていることども

旧職員（理科）　吉田　さゆり

昭和十六年四月、都川の河口の大橋のたもと、港町の古い校舎に希望に燃えた一回生二二〇名を迎えて千葉市立千葉高等女学校が誕生しました。真白い布に新しく絵筆をおろし、一筆一筆美しい伝統を積み重ねて行くべく生徒も職員も一丸となって励みました。人数も少なく、戦時中の厳しい時代であったせいもあり、学習、生活指導、運動、その他、一人一人にあたたかく触れながらかなり徹底した指導をしました。一例を挙げれば、基礎教育を重んじ平仮名を正しく書けない生徒が多いということで放課後、全員指導したり、正しい歩き方の指導などもしました。当時「道を歩いていても市立高女の生徒はすぐわかる。姿勢がよくてサッサッと歩くから」などといわれたものでした。

しかし、戦中、戦後、苦難の道を歩み続けたことに変わりありません。市立より県立へ、四年制より五年制へ、女子校より男子共学へ、また校舎も港町、葛城（今の葛城中）、更に轟町へと（港町の校舎は戦災で焼失）目まぐるしい程の変化をたどりながら発展の意気に燃えつつ五〇年経った今日県下でも有数な学校になったわけです。このことを考えますと感無量です。

港町の校舎は、千葉商業も、千葉工業もここで誕生し、工業のとき一部火災にあい四教室と職員室、校長室、宿直室、体育館、用務員室しかなく、ここでまた市立高女が誕生したのでした。創立二年目には体育館を区切って二教室とし、これでも足らなくて二部授業をし、三年目の半ばまで二部授業は続いたように記憶しています。十八年十一月やっと新校舎の一部が葛城町に落成し三年生が移りました。私は創立から三年過ぎた十九年三月家庭の事情で退職させていただき二十三年十二月再び就職、四十二年まで合計二三年余りお世話になりました。したがって戦災で港町の校舎焼失後の苦労はわかりません。

昭和二十三年四月現在の場所轟町へ移転したのでしたが、軍隊の資材置場であったとかでひどい建物でしたが、だん

だん改築されていきました。

その後のことで心に残っているのは昭和三十三年春休み生物クラブの二人の生徒が蜜蜂の群れを一箱もらって来てクラブ全員で研究を始め、四年後の三十七年、県の研究発表会で最優秀賞をいただいたことです。代々のクラブ員が研究を引き継ぎ、夏休みもほとんど休みなく熱心に研究を続けたことなど強く印象に残っています。

教員生活のなかで最も長く在職し、いろいろ思い出の多い千葉東高に感謝しながら心に残った二、三を記しました。

思い出の我がクラス

旧職員（理科）　青山　克

前任校でのこと、生徒に千葉東高に転任することを伝えたら、口々に「いいなー。いいなー」と言う。

昭和四十二年、その人気のある学校に着任した。すぐ三年理系の男子クラスの担任となった。約一年間砂塵よけの二重窓に球よけの金網のついた木造化学室から、しなる渡り板を飛び越えてH・Rに通う日々となった。教室は現在の校長室あたりで大きな柳の木が横にあった。

男子だけのため、さすがに元気良く、快活陽気で毎日部活動と遊びにのめりこんでいた。男のくせに座布団を敷いているのがいて、それをちぎっては、ばらまいたり、丸めて教室でキャッチボールをやったりで、いつも教室にはスポンジの屑が散乱していた。まだ制帽をかぶる規則で校庭で検査があったりしたが、一方ではこの年まで運動会をやっていた。東雲祭ではクラス全員の舞台出演を決めて、私も当時人気のテレビ映画「逃亡者」のリチャード・キンブルの役を熱演して、女生徒の拍手に良い気持になったりした。クラス参加は受験に支障があるとの批判もあったらしいが、生徒は千葉女子高校の制服を借りたりして大張り切りであった。翌年の国公立大へのクラスからの合格者は二名と記憶している。

四十四年に二年から持ち上がって、やはり男子理系の三年の担任となった。一学期早々にまずクラスの某君の詩の掲示撤去から校内がうるさくなり、いわゆる高校紛争が始まった。相変わらず皆元気一杯なのだが、何か雰囲気は川の水のよどみや急流のように不安定で、やりたい奴はどんどんやってくれといった感じで最後までクラスの落着きはなかった。しかし、討論は活発で、担任の私も答弁に困らないように教育基本法を読み直したり、にわか仕込みの知

識をあちらこちらからつめこんだりして、毎日毎日何が起きるのかわからない興味と対策に追われ、彼らのエネルギーに振り回された。そのくせ朝のHRで生徒は「同期の桜」の合唱なんかやって気勢を挙げていた。また、教科にもよるが、ある日の午後は三分の一近い生徒が消えていた時もあった。当時はマージャンが大流行していた。卒業式当日、式場の入口で入場するクラスの連中にお盆片手に「いくらでも良いから卒業記念品代の寄附をしろ」と呼びかけたのも今ではなつかしい。クラス会にはよく集まってくれる。

四十六年には初めて文系男女クラスの三年担任となった。紛争で学校が封鎖された時の一年生で、当時すぐ下校させられたのが不満で、三年生になってもまだ苦情をもらしたりしてその余波を持っていた。クラスは当時の風潮であった紛争の挫折感というのか、うるさいことはもう止めて高校生活は楽しく自由にやっていこうよ、というムードが強く仲良しカップルがえらく目立った。ロングホームルームはよく千葉公園に出かけて、カン蹴りゲームなんかやっていた。当時のHR日誌の一部を紹介する。「この頃のクラスではやるもの、内職、マージャン、花札、トバク、ベーゴマ、ケン玉、ボーリング、メンコ、飛行機、紙鉄砲、にわかカップル恥知らず。……」等とある。また、この頃はクラスで夏休みのキャンプ、合宿が流行しており、私のクラスも校内で一泊の合宿をやった。夜、礼法室で「人はなぜ結婚するのか」をテーマにして大討論会をやったが、女子の大乗り気に対して男子の消極的発言が目立った。終わってフォークダンスに肝試し、と生徒の企画はなかなか面白かった。一方模試は旺文社だったと思うが一般に私大志向であった。

その後、部長などで担任を離れていたが、総合選抜制、いわゆる学校群として入学した生徒に関心を持って一年生から持ち上がって、五十三年に文系の男女クラスの三年生担任となった。従来と違って、とにかく物わかりが良くて正面切って、たてつくことはあまりないし、出来が良いの一言に尽きた。担任が、ぐちゃぐちゃ説教する必要は殆どなかったが、クラス内では一部に中学校の時と違って皆が均一的のためか、個性の発揮が出来にくい雰囲気に反発して不満を持つ者もいたようだ。勉強はよくやり、ふざけるのは学校が彼等の息抜きの場となっているような感じを受けた。駿台とか代ゼミの話がポンポン耳に入って来るし、質問は増加するし、教師の方もしっかり勉強しないと必ずその隙を突いて来た。教師の力のあるなしを見定めて批判

する生徒も出て来た。共通一次というのが現れて、予備校のデーターに振り回され、ある者は一次テストのみ受けて足切りされ浪人してしまった。はっきり進学校の様相を見せ始めた年である。クラスで東大に合格した者が出て、現役では初めて、とのことで私も鼻が高かったが全体では有名私大が中心であった。

五十五年、久し振りに男女クラスの理系三年の担任となったが、文系と違って理系では二〇人余りの女子の力が強くて、懸命に担任が男子の尻を叩いたがなかなか動いてくれなかった。後期のクラス委員長は女子が選ばれ号令をかけていたが、男子の中には彼女にじろっとにらまれると恐いと噂していた。逆に彼女は後ろの席の男子名を知らず、全く眼中に男子を置いていないようでもあった。

しかし、放課後など男子の周囲を女子が取り巻いて、数学を教えてもらっている光景をよく見かけた。学校全体を取り巻く受験的雰囲気や、それに関連して高校教育そのものを疑問視して反発する生徒も出て、遅刻早退を一〇〇回越える者もいたが、全体的には明るい素直な、優等生揃いのクラスであった。創立四十周年式典当日のHR日誌をみると欠席一〇人としてあって、「絶対紅白まんじゅうが出ると思ったのに残念です」と記してある。クラスのアルバム用写真は、入ったことがないという彼等の希望で校長室で校長と一緒に撮ったのもおもしろかった。卒業式当日は私の名前から、「青い山脈」の大合唱でHRの最後をしめくくった。国公立大合格者は医学部を筆頭に十数名を数え、東西一流の大学を網羅していた。

さて、五十七年まで一六年間在職して脳裏に浮かぶのは、これ等の五つのHR以外に、校務分掌で教育相談係を新設したこと、また、顧問として同好会からスタートさせて関東大会に出場しサッカー部を創立したことといった思い出が強い。良き先輩、同僚、そして何よりも素晴しい生徒達に恵まれたことが、千葉東高として深く心に残っている。

思い出すままに

旧職員（理科）　野村典平

五〇年が過ぎ去ったのか、こんなことを思いながらペンをとり昭和十六年を思い出すと私が中学に入学し、第二次大戦が始まった年なのです。その後昭和十八年、戦況不利のため私は勤労奉仕として月に数回、陸軍兵器補給廠に兵器弾薬の梱包に汗水を流して働いた所が現在の東高なので

す。このように私と東高は昔から縁があったように思います。

私が千葉東高に勤務したのは昭和三十六年から五十六年の二〇年間でした。年齢的にも三十二歳から五十二歳と人生の一番充実した時だったと思います。千葉三高から千葉東高へと校名変更の年でした。校舎は平屋で戦前の兵舎の名残りが残っておりました。三十六年八月、火災で三教室が焼失し、その後に木造二階の校舎が出来ましたが、四十一年より新校舎の建築が始まり、四十五年、鉄筋四階の校舎が完成、翌年体育館も完成し、三十周年にしてかつての校舎の面影は消えました。また四十一年には衛生看護科の設置、四十四年には県で初の学園封鎖もありました。私の在職中初めの一〇年はいろいろな事があわただしく過ぎましたが、後の一〇年は比較的何事もなく年々進学率が向上し、県下で有数の進学校になりました。

在職中学校のため何の役にもたちませんでしたが、私の思い出を書かせていただきます。

〈クラブ活動〉〈ラグビー部〉昭和三十六年―四十年

当時の参加校は八校しかありませんでしたが本校は千葉工業、市立銚子と共に三強でした。春の大会後三年生が進学勉強のため活動をやめ、加えて部員不足で秋の大会は常に敗れ「花園」への夢は実現出来ませんでした。印象に残る試合は三十八年秋決勝で、千葉工業に16―15で敗れた試合でした。しかし個人的に秀れた選手がおり、大西君（三十九年卒）は明治大学で、坂内君（四十年卒）は早稲田大学でレギュラー選手として活躍しました。

〈山岳部〉昭和四十一年―四十八年

私が顧問になった当時は合宿に必ずOBが付き添って指導したため夏山合宿は一〇日～二週間と長く、また十二月と三月には北八ヶ岳双子池で雪上訓練を行っておりました。その中で印象に残る山行を挙げます。

(1) 四十一年夏合宿〈剣岳―薬師岳―黒部五郎岳―槍ヶ岳―徳本峠―島々〉というまさに北アルプス縦走でした。

(2) 四十二年夏山合宿〈会津朝日岳―丸山―銀山湖〉朝日岳より先は登山道はなく藪こぎをしながらの山行でした。両合宿とも天候に恵まれ、快適な山行でした。これら合宿に現市会議員竹内君（三十一年卒）、大谷（石崎）持田両君（三十九年卒）、佐藤君（四十年卒）には本当にお世話になりました。

〈野球部〉昭和四十四年―昭和五十五年

野球部長として十二年その間監督として木下、濱井両先生とOB磯野君（三十一年卒）、伊藤君（四十一年卒）と共

に頑張って来ましたが、夏の大会は四回戦進出が最高だったと思います。野球はドラマと申しますがこの間いろいろな好試合がありましたが、高野連より毎年出される年報の県の記録が一二年間に県の最高の四個となりましたのでこの記録の試合について書かせていただきます。

〈三振奪取〉二一個　千葉東藤代優投手対房総農（昭和四十四夏）

〈連続三振奪取〉一〇個　千葉東藤代優投手対房総農（昭和四十四夏）

公園球場での試合一回二死後ホームランを打たれたが以後四球一個ですばらしい記録を樹立しました。この試合は、8―1で勝ちました。

〈与四球〉一八個　流山杉山裕昭投手対千葉東（昭和四十五夏）

天台球場での試合毎回チャンスがありましたが、決定打がなく4―3で辛勝した試合です。

〈完全試合〉千葉工関根治史投手対千葉東（昭和五十三秋）

完全試合での負けは不名誉ですが、この試合の関根―山木の投手戦はすばらしく千葉工も八回二死までノーヒットノーラン、二死後二安打され、1―0で敗れた試合でした。

夏の大会の県予選のテレビをみながら書いているとさまざまの試合が思い出されます。

在職中四十年、四十二年（男子組）、五十一年（看護科）と三回の卒業生の担任をしました。何せ教師らしくない教師、新入生からは用務員さんと間違えられる教師です。十分なホームルーム指導は出来ませんでしたが、現在男子は四十代、女子は三十代で職場で中堅として活躍していることでしょう。四十年卒業生から中央大学文学部（哲学）教授須田君、北海道大学農学部助教授青木（武津岡）君が学者として活躍しています。

以上まとまりのない思い出を書かせて頂きました。在職中多くの先生方卒業生にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。又、在職中お亡くなりになられました、山口、藤本、西山、小川の四先生、一年時雄蛇ヶ池で水質調査中亡くなられた赤池君、山岳部で卒業後山で遭難された高岡、竹下、鈴木三君のご冥福をお祈りいたします。

今後の東高のますますのご発展を心から祈念してペンをおきます。

過ぎし日を顧みて

旧職員（美術）　草　葉　　章

私は千葉東高に二度勤務いたしました。最初が昭和二十八年四月から三十九年三月までの一一年間で、千葉三高から東高と諸川・故石毛両校長先生の時代で、次が昭和四十五年四月から四十七年三月までで村田校長先生の時代でありました。

千葉三高時代は一高、二高と比べ、ナンバーからいっても不利な立場にありましたが、諸川先生は「躍進発展途上の学校」といわれるのが口癖で、他校へ追いつき追い越せの掛声の下、沢田教頭先生以下、全校の先生方が文字どおりよく協力され頑張っておられました。

校舎は管理棟・講堂・理科教室棟と新しく、当時としてはまずまずでしたが、第二棟から第四棟までは、全くのバラックで、壁は落ちっぱなし、建具もお粗末で、冬は勿論暖房はなく、現在の生徒諸君には想像も出来ない状況でした。しかし学校では泣き言などいっておられない雰囲気で、とりあえずは壁にベニヤ板をはって土の落ちるのを防いだわけでしたが、全部終えるのに一か月くらいかかったかと思います。

当時は若い先生方が多かったせいもあり、運動も盛んにやりました。野球やバレーボールが主で、千葉商・緑中・椿森中の先生方と親善試合をしたこともありました。クラス対抗の優勝チームとラグビーを闘ったり、職員を二チームに分けて、試合をしたこともありました。学校行事でもよく働きました。運動の後とか、行事で働いた後ではよくご苦労申しに集って呑んだものでしたが、その方のというより、若手の兄貴株はなんといっても、強い情熱をもって教育に当たって居られた故佐々木鉄太郎先生で、一緒によく呑んでは、叱られたり気合を入れられたものでした。

千田・木島与・松本・久保木・野村松・菅宮の諸先生方とはよくご一緒しましたが、どんなに遅くなっても、翌朝遅れたり休んだりしたことはなかったし、仕事も一生懸命でした。

当時の生徒の諸君は全般におとなしく、特にこれといって問題はありませんでしたが、勉強の方はもう一歩というところであったかと思います。男子には制帽があり、必ず被るようになっていましたが、中には校門前で被るものも居たようでした。

昭和三十四年、諸川先生が千葉商へ転勤されたあと、石毛先生が来られ、教頭も寺村先生から畠山先生にかわられました。豪放磊落な諸川先生から緻密堅実な石毛先生にかわられ、学校の雰囲気も当然かわりました。「自律節制・研究創造・親切奉仕」を校訓として提示され、当時の書道の故安塚旭洞先生の揮毫を掲げ、全校集会の折によく話されたことを記憶しています。新しく道徳教育を唱導されたことでした。畠山先生は、職員室の掃除を生徒と共に自ら雑巾をとって、極めて積極的に率先躬行されていました。生徒手帳の改訂を一年がかりで行ったのもこの時代でした。

私は故池内先生の下で第七回卒業生を二年ごろから、山崎先生の下で第十回卒業生を卒業まで、安塚先生の下で第十三回卒業生を一年次のみ受け持ちました。今にして思えば反省すべきことばかりではなかったかと思います。クラブ活動では美術部を担当し、放課後は毎日何人かの生徒が来てデッサンや油絵を描いていました。その中には既に画家として立っている人もいますが、一方、グループをつくり、はじめ「グループ東」現在は暖流展と銘打って毎年展覧会を開いています。

修学旅行は五泊六日（車中二泊）でしたが、お米持参で旅館は大部屋、布団は短く大きな生徒は足を出して寝る始末、比叡山は途中までケーブルで登り、雪の山道を歩いて延暦寺に辿りつく風で、あらゆる点で現在とは比べものにならないものでしたが、それだけに懐かしさは格別です。

思いつくままに書いてまいりますと、きりがありませんので、紙数の関係でこの辺りでとどめましょう。

昭和三十六年千葉東高と校名変更、年を経るごとに、生徒の成績は向上し、県下有数の進学校に成長してゆきました。私自身は昭和三十九年四月転出、四十五年再び本校に戻りましたが、その前年大学紛争からつづいての高校紛争の波で、一時占拠を含む紛争に発展し、村田校長先生にはそれへの対応でたいへんご苦労されたと聞いておりますし、なお引続いての余波に随分神経をつかわれていました。生徒指導関係の先生方はたいへんなことだったと思います。

しかし、四十五年十一月二日、創立三十周年並びに新校舎落成記念式典がめでたく挙行され、生徒諸君も落ち着いて立派にこの式典を終えることが出来ました。

四十七年三月、村田校長先生は停年でご退職になり、私も二度目のお勤めを終えて転出しました。前後合わせて一三年間諸川・石毛・村田ご三人の校長先生に仕え、また先輩の先生方はじめ多くの先生方のご指導、ご協力を得ると共に多くの生徒諸君と過ごした本校での教員生活は私の一

生にとって、最も前向きに生きられた時代で、色々至らぬながら、どうやら勤めを終えられたことは本当に東高の皆様のお蔭で心から感謝申し上げる次第です。五十周年をお祝い申し上げますとともに今後の一層のご発展をお祈りしてお祝いの言葉と致します。

（愛国学園短期大学付属四街道高校副校長）

三高・東高二十年の思い出

旧職員（家庭）　須藤明子

創立五十周年おめでとうございます。

私は昭和三十年から五十三年まで二二年余を千葉東高校に勤務させて頂きました。戦前の女学校に数年勤めただけの微力な私が、大過なく何とか教員生活を終えることができましたのは、歴代の校長先生、そして大勢の同僚の先生方からの多大なご援助をいただき、そしてまた、至らぬ私にもかかわらずご寛容なおつきあいをいただき、さらにまた、同時に心やさしい生徒達に囲まれた毎日だったからなのです。ここに改めてお礼を述べさせていただきます。

何か思い出をというご依頼なので、沢山詰まった思い出袋の中から二三拾ってみることにしました。

〈食物クラブの活動〉　私が着任して間もなく、秋の運動会が開かれました。あのころの運動会には父兄、卒業生は勿論、近所のおばさん、子供たちまで見物に来ていました。そして仮装行列・クラブ対抗リレー・男子の騎馬戦・女子の美しいダンスに熱狂したものでした。この運動会のもう一つの呼び物が食堂の開催でした。管理棟のはずれにあった講堂兼体育館が食堂に早変わり。講堂裏の空地にかまどをつくったり、都賀小学校から給食用の大釜を借り受けたり、中国人のラーメン屋直伝の豚骨スープを用意するのも、女子だけのクラブ員の仕事でした。当日は、食堂主任佐々木先生の指揮下、先生方の絶大なご協力もあって、無事に閉店することができました。生徒たちは運動会に参加しながら、食堂関係の重労働に耐えていたようです。よく頑張ってくれました。

食物クラブでは、古い校舎のころは、夏休み・冬休みを利用して、運動系の合宿の食事作りに協力することもありました。部員は私の家に集って下相談などしたものです。

昭和四十年代に入り、新築校舎のよく整った食物室でのクラブ活動は一層盛んになりました。男子クラブ員も多くなり、幅広い活動が出来るようになりました。そして、料

理が出来上がる頃になると、他の部活をしていた友人たちが集って来て、楽しい試食が始まることもよくあったのです。私も加わり、生徒と教師の域を越えて、何でもよく話したものでした。そしてこの交流はいまだに続いています。三十年のころの部長さんとは、家族ぐるみのおつき合いを続けていますし、その後の部員の方々からも時々やさしい便りなどが届いています。私の退職時には、大学を休んで片付けの手伝いに来てくれたのも男女数人の旧部員でした。

〈東高生気質（かたぎ）〉　かつて私は「うちの生徒は都会的というか、打算的というのか、授業を受けなくなると素知らぬ顔」とか「東高生はのんびりし過ぎている。放課後もクラブ活動を楽しんでいたりしていて……。もっとガツガツ勉強しなくては」などという愚痴を教育熱心（？）な先生やお母様方からきかされたことがありました。しかし私は、自分の歩んで来た長い教員生活を通してみて、この東高生批判は的中していないと思います。授業に出ていた古い生徒達から便りが届いたり、道で声をかけられたりは当たり前のことでしょうが、こんなこともありました。四十年代の学園封鎖のころ、時々食物準備室で話し込んで行った活動家らしきあの人達に、数年後、電車の中やデパートなどで「あの時は大変お世話になりました」と丁寧に挨拶されたのです。

また三高時代担任をした女子クラスからは（当時は女子の進学は極く少なかったのですが）早稲田へ二人、青山へ一人合格しました。勿論クラブ活動は楽しんでいたようです。五十年のはじめごろの食物部員も、非常に熱心に部活を続けながらも、お茶大、千葉大その他の国立大へ数人が進学しました。今頃は、みんな立派な社会人・家庭人としてその実力を発揮しているようです。

〝明るくてやさしい、そしてクラブ活動なども楽しみながらやるべき勉学はきちんとやっている礼儀正しい生徒〟これが私の三高・東高の生徒に対する感想です。かつての教頭、校長沢田先生の作詞による校歌〝シャロンの花〟そのものです。清きほこりをつちかい、強きこころを打ち樹てて……千葉東高校の生徒たちは力強く前進し続けることでしょう。

木造から鉄筋へ

旧職員（英語）　須賀　賢悟郎

今まで記念誌には学校紹介のことばかり書いてきたが、

いつしか時が流れて、今度は自分が回想を書く番になった。私が東高にいたのは、昭和三十九年六月から六十二年三月まで、最初は通信制に九年ほど、それから全日制に移って一四年、合計二三年ほどでした。

不思議なことに、今しきりに思い出されるのは、現在の新校舎ができる前後の四十年代の前半のことなのです。たしか四十年の新学期からだと思いますが、私は全日制三年生の英書講読の授業を何時間か受け持っていた。一階平屋建ての木造校舎が三棟ほど鰻の寝床のように並び、歩くと廊下がぎしぎし軋む古い建物だったが、なんとなく木の香や風の通る匂いがした。当時ラフカディオ・ハーンの「骨董」という日本の古い物語集にある「幽霊滝の伝説」を読んでいて、「彼女はピチャピチャと道を急いだ〈she ran——picha-picha——〉」というところの「ピチャピチャ」という足音が面白いらしく、生徒はニヤニヤ笑っていた。

ハーンは西欧の思想や資本主義の影響でまさに消えようとする最も日本的な美しい心を見事にとらえた。しかし今また開発とか都市化など、より便利で機能的なものを求めて、日本の風土も人の心も変わっていき、何物かが失われていく。古い木造校舎と共に、玄関前のしだれ柳も松もザクロも、中庭の蜜蜂も池も花壇も消えた。毎年、薄紅色の可憐な花を咲かせていたバス停〈東高前〉のネムの木もばっさりやられた。

木造から鉄筋へと大きく変貌して、更にそれに追い討ちをかけるように学生運動が起こった。戦没学生の冥福と平和への願いをこめて建てられた「わだつみの像」が、同じ学生の手で、「意味がない」ということで破壊された。「ナンセンス」という言葉がゲバルト学生の間ではやったのもそのころで、問答無用だった。学園紛争があっちこっちで起こり、東大安田講堂の籠城事件では機動隊が導入され、紛争は本校にまで及んだ。当時校長だった沢田繁二先生や村田泰次郎先生の苦労が思いやられる。

私は一連の学生運動を機に、何かが突然崩れ去るのを感じたが、今や世界的規模で変動する世の中にいて、ますますその感が深い。もし「赤とんぼ」などの日本の古い歌に、日本的な心とか美意識が象徴されるとすれば、そういう感覚は次第に薄れて、新しい世代の日本的なものがまた生れてくるに違いない。

最後に、沢田先生が本校通信制の機関紙「東高通信六六号（昭和四十四年三月）」で述べられた言葉を引用したい。

「あの東大講堂の攻防戦の放送画面を、息をひそめて見

守り、その成行きに暗たんたる思いを禁じえなかった人は少なくないだろう。しかし、このような狂瀾怒濤の揺れ動きがあったとしても、私たちは将来に向い、若人の良識に向って絶望してはいけない」

過ぎし日を顧みて

旧職員（養護）　安田末代

平成三年、創立五十周年をお迎えされましたことを心よりお祝い申し上げます。

幾多の積み上げた道のりのうえに、大きな足跡の多くがきびしさのなかの喜びですと、声なき声がきこえてきます。

「光陰矢の如し」まさしく月日の経つのは早いものです。苦しかったこと、楽しかったこと、悲しかったことが、数々の想い出と、走馬灯のように心をよぎります。

思い起こせば、戦時中の馬小屋とお聞きした校舎に着任、毎日野球のボールはとんでくる、砂ぼこりは雨のように入ってくる。仕方なく窓に網をはり一時をしのいだものでした。休養室はとなりの宿直室を、薬品はほとんど出しておけない、こんな保健室でした。昭和四十五年ごろから、社会情勢の変化とともに、大きく変わりました。勉強中心の生徒が多くなったと思います。そんななかで保健体育科の先生方を中心に、生徒指導部、全職員の保健室に向けてのご協力は筆舌に尽くせぬご苦労の賜と心より感謝申し上げます。特に現職で他界された諸先生方が蒔かれた種の成長を今でもどこかで見守っておられることを信じております。

一方、生徒保健委員会の生徒もよく協力して下さいました。「白血病、骨肉腫」と、病気の生徒に対し予定表を作成、また全校あげての献血に病院に通ったことを思いだします。

更に「精神的な悩み」をもつ生徒も多くなってきました。通信教育部ともに一日中保健室から離れない、登校拒否で家族からの依頼、卒業生が病気中病院に来てほしいの電話で放課後とんで行く、家出の生徒を待って夜の一時過ぎに帰宅したこと、合宿中の生徒の高熱で学校医の先生とともに、一二時過ぎ帰宅したこと、時には家で一夜を明かし悩みを聴いたこと、ともに泣き、ともに喜んだこと、夏のキャンプ、秋の修学旅行の夜を徹して生徒指導の研修、東雲祭の研究のとりくみと、よく協力してくださいました。

常に皆様の温い心に支えられて、恙なく小さな私の歴史

に幸多く綴られて参りました。時折卒業生の声をきく集いに呼んで頂く機会も頂き、あの日も、この日もと想い出し感謝しております。今は永く捜し求めた、悠久の懐に漸く辿りついたように思えてならない、毎日を、安らいでおります。

皆様のご温情溢れるご指導、ご交誼の賜と深く感謝申し上げます。

東高校の益々のご発展、そして新しい文明を作りあげる、心と身体を持った原動力……、慈救のエネルギーがすべて導くことを信じております。ありがとうございました。

衛生看護科と生徒たち

旧職員（衛看）　田村照子

今から七年ほど前です。東高近くの三幸を会場に衛生看護科第二回生の同窓会があり、担任をされた須藤先生に加えて、永井先生と副担任であった私も招かれ、思い出や職業そして子育ての話題などに時を過ごしたことがありました。既に、衛生看護科は発展的解消をなし、若葉看護高等学校として歩みはじめており、会が終わってから連れ立って母校の玄関前の植込みに建つ「看護に志す者ここに学ぶ」の碑を訪ね、感慨深く眺めて帰りました。

私は昭和四十三年から、五十八年第十七回生の一年生担任を最後に、県立土気高等学校へ養護教諭として異動するまで、主として衛生看護科にかかわらせていただいた一人です。

この科は、特殊性として准看護婦試験受験資格を与えるので、専門教科の単位の規定が厳しく、これに伴う時間割作成や教科・部活動を指導された先生はご苦労が多かったと思います。生徒は学区が県内全域、野田市や八街町、久留里線の奥からの通学者もおり、本人の堅い意志と御家族の暖かい援助により通学できたものと思っています。

特に、病院実習となると朝も早く、生徒は八時二十五分までにナースステーションに集まり、緊張した表情でメモを取り行動計画を立ててから十五時まで実習しました。

病室へ生徒が出ると、青いユニホーム姿の高校生は珍しいので、「どちらの学校？」「衛生看護科って知らなかったね」とお客様扱いされたり、なかには「まあ、孫のような看護婦さんに看病してもらい、うれしいです」というひともいました。

一方、病院のスタッフからは、臨床実習するには技術が

未熟だと厳しい評価をいただき、高校の多様化と准看護婦制度に悩んだこともありました。しかし、生徒が意欲的に勉強したので、指導にあたる私たちも熱が入り、病院実習が終わると体重が三キログラムくらい減っていました。

こうして、校内・校外の多くの方の指導で育った生徒たちは、今は立派に病院や保健所などでスタッフの一人として活躍しており、その姿に会うと感激します。

一年時の菅沼キャンプ、これも印象深いものでした。二泊三日のランプ生活、全五食を薪による炊飯、四時起床に続く二五七八メートルの白根山登山。引率職員も炊飯生活です。ハードスケジュールを消化するには協力が第一であることを体験できました。この行事、朝シャンに慣れ、受験勉強に追われる今の生徒は、どう受けとめますでしょうか。

最後に、東高と若葉看護高校の発展を祈っております。

（県立土気高校養護教諭）

千葉東高の思い出

旧職員（事務）　青山康子

私が千葉東高に着任いたしましたのは昭和三十年五月一日、当時の諸川芳雄校長先生からのお話で急きょ赴任することになりました。事務室には事務長さん外私を含めて六名で私は学校中で一番年下の二二歳でした。周囲の先生方に支えられての無我夢中の毎日でした。事務室に私より一歳先輩でコスモスといわれていた西郡玲子さん（現川又さん）が何かとやさしく指導して下さいました。仕事熱心、暗算の大家、書道の達人、その上お人柄もすばらしく私の理想とする方でした。現在でも仕事上のことで初心に返れと自分自身をいましめておりますと当時の西郡さんが浮かび上がって参ります。なつかしく思い出されます。

三高と親しまれていたころの校舎は木造平屋建てのオンボロでした。全生徒を収容出来る体育館もなく小講堂と名のつく建物が校舎左隅（通信棟のあたり）にあって、入学式、卒業式などは生徒の代表者を出席させて行われました。女子生徒が半数以上を占めていた時代にもかかわらず、床

は抜ける、ガラスは割れる、机や椅子はこわれる有様で用務員さんは校舎内外の修理に追われていました。男子生徒の血気盛んなことには舌を巻くほどでした。

昭和四十二年警備員制度が発足されるまでは教職員の宿直制度があって、先生と用務員さんの二名が交代で校舎内を巡視していました。ある時の宿直室はそれらの先生方のたまり場と化し終電に乗りおくれると学校に戻ってくることになりますから、血気盛んなのは生徒に限られたことではありませんでした。

ショッキングだったのは四十四年の学校封鎖事件です。全国規模で大学、高校の学園紛争が続いていた頃です。市内で高校生のデモがあったりで落ち着かない空気がただよっていた九月、ついに東高にも覆面した生徒が教室棟を占拠し、登校して来た生徒達が教室に入れない事態になりました。管理棟は中に入れましたが事務室にはひっきりなしに問合わせの電話が鳴り応待に大変でした。非常持出の書類の整理もはじめていました。ハチマキ姿の校長先生、トランシーバーを持った先生方、多くの学校を巻き込んで揺れた当時の世相が思い出されます。

現在の管理棟の落成（四十五年）体育館兼講堂の落成（四十六年）校内の環境も充実し、東高は県内でも有数の進学校と発展しました。校舎を歩くとカンカンと音がひびき広々として大変きれいです。ただ思いますのは鉄筋のせいか冷やかさを感ずるのは淋しいことだと思います。

私にとって、あの木造校舎が何となく暖かい家庭的な雰囲気として忘れることが出来ません。

四半世紀をすごした千葉東高は私の母校の様な親しみを感じます。最後の三年間は娘がお世話になり、私はようやくにして娘と共に東高を卒業いたしました。

青春時代を共にすごした千葉東高、お世話になったなつかしい先生方の顔が目の前に浮かびます。千葉東高の限りない発展と創立五十周年を心よりお祝い申し上げます。

（県立千葉商業高校事務長）

おばあちゃんは、千葉東高校の卒業生

市立高女一回生　平野　登美子　本藤　かつ子

夏のある夕方、幼い孫の手を引いて買物の道すがら久しぶりに東高校の前を歩いてみました。歩道沿いのグランドから蟬しぐれと共に、若い気合のこもった掛声がはじけて来ました。思わず足を止めて「この学校はおばあちゃんが

きれいなお姉さんだったころにお勉強した学校よ。Mちゃんも大きくなったらこの学校へ来ようね。でもねここへ来るには、いっぱいお勉強しないといけないんだよ。だから一生懸命がんばろうね」熱っぽく語りかける私に「うん」と一つこっくりをした孫の頭をなでながら、改めて立派な校舎や広いグランドを眺めまわし五十年の歴史の重みを、しみじみと感じさせられました。想えば風雲急を告げる昭和十六年四月、私たち二一九名は、市立千葉高女一回生として入学いたしました。都川の河口港町の一隅の小さな学校、以前工業学校が使用していた平屋の古い校舎が一棟、それに鍵の手に続くトタン屋根のこれまた教室を二つ打ちぬいただけの多目的教室?……校庭もせまくボールを少し勢いよく投げれば、たちまち川の中へドボン、慌てて長い柄のついた網で拾い上げる等々、現在の恵まれた環境の中で高校生活を送っている方々には想像もつかないことばかりと思います。物質的には無に等しい戦時下の極度の耐乏生活の中で新設市立高女の私たちの教育には瀧校長先生始め諸先生方の筆舌に尽せぬ御苦労の多かった事を伺っております。明朗、真剣、錬磨の校訓のもと、諸先生方の精魂を傾けての教育愛と情熱に支えられて市立高女魂を叩きこまれたのでした。当時二列にきちんと並び胸を張ってさっそうと街の中を登下校する姿に「校章を見なくとも歩き方で市立高女の生徒だと遠くからでもすぐわかる」と賞讃されたものでした。時局柄勤労作業、学徒動員と学問的には恵まれなかった私達でしたが、戦火の中で生死を共にして培って下さいました市立高女魂はその後の私たちの生活の中でどれほど役立っているか計り知れないほどの偉大さで今も私たちの身体の中に脈打っております。今や県下屈指の進学校として全国にその名を知られるようになりましたことを心よりお喜び申し上げると共に、開戦の年に入学し、終戦の年に卒業した私たち一回生は、その四年間に先生も生徒も一丸となって命がけで母校の基礎作りをして来たことを今でも誇りに思って居ります。間もなく親、子、孫三代の卒業生を持つ家庭が出現すると思いますが、今立派に五十周年を迎えられた母校をバックにして、「おばあちゃんは東高の卒業生よ」と胸を張って言えることを心より幸いに思います。

私の学生時代

市立高女二回生　永江　栄

人生わずか五〇年と、昔の人はいったが、我が母校も、もう五〇年経ったのかと思うと、今更のように自分も、六〇歳をすぎたのだと、つくづく思ってしまう。日米開戦後、間もなくの入学だったが、まだのんびりしていたところもあった。

それが、制服がだんだんにもんぺになり、体育の時間も、軍事教練となった。校庭の隅に防空壕を掘り、あちこちへの勤労奉仕活動、なかでも忠霊塔建設のための、もっこかつぎはつらかった。今、護国神社へ行って見ても、どの辺のところを土盛りしたのか、見当もつかない。

腰を落ち着けて、勉強出来たのは、一年生の時だけ。二年生になったら、教室が足りなくて二部授業、英語は敵国語だからとなくなり、だから今もって英語はお手上げ。その内に、一回生が学徒動員、二回生の私たちも、時間の問題だなと思っていたら、すぐ後を追うように、昭和十九年の十月中ばに、動員令が下った。聖戦遂行。お国のため。ただそれだけに、全国民が一丸となって、つき進んだ時代だった。明日の命もわからず、よくがんばったと思う。先生方も、必死の思いであったろうと思う。

八月十五日以後、学生にもどったが、暫くは、市営墓地の草刈りや、誉田まで、線路伝いに歩いて、丸太をかつぎに行った。あれは、何のためだったのだろうか？

校庭の隅に、今度は小さな穴を掘り、コンロの代わりにし、お芋を煮て、家庭科の料理の実習をした。

四年生の、二学期、三学期と、どうやら授業を受け、昭和二十一年三月に、卒業させて頂いたが、学力の方は、もう、てんで駄目である。今の中学生にも、及ばないと思う。

でも、何とかあの戦後の、貧しい時代を生きぬいて来られたのは、あのぴーんと張りつめた時代に、しっかりとした良い教育を、受けたおかげだと思う。日常の挨拶の仕方、先生方、上級生に対する、敬愛の気持ちを表わす態度、つらいことを、皆で分かち合う思いやり、掃除の仕方まで仕込まれた。

それらは、一生の財産となって、身につき、その後の人生に、どれほどのプラスになったか、計り知れない。先生方に、感謝の念でいっぱいである。

長洲の木造校舎から、始まって、今は県下の有数の高校

へと発展した母校を思う時、感無量のものがある。そして、創立五十周年に、立ち会った我が身の幸せを思う。良い先生方、たくさんの同級生に恵まれ、今、また優秀な後輩たちを思う時、私の学生時代は、人生の華だったと思う。

在校中の思い出

市立高女二回生　小林　美代子

昭和十七年、市内で国民学校（小学校）六年卒業後女子が進学できるのは、県立千葉高女、私立千葉淑徳高女、私立女子商業と創立二年目の市立千葉高女四校だけであった。

校長先生を中心に、学校経営目標に向かって一致団結して歩んでいる新進気鋭のすばらしい学校と聞いていた私は、入学できた喜びと大いなる期待で胸おどる思いだった。

学校の敷地は、港町一九番地、東京湾にそそぐ都川の河口沿いにあり、三角形に近い台形になっていた。設立当時から、一時的な仮住まいと言うことで、広さは現在の東高の一〇分の一もなかった（七〇〇～八〇〇坪くらい）と思う。

校舎は、昭和十八年ごろには八～一〇教室くらいになっていたが、その一部は、やがて学校工場になり、昭和二十年七月七日空襲のため焼失してしまった。（第一校舎）

昭和十八年十一月一日、葛城町二一二に木造二階建校舎五教室が落成した。（第二校舎）その校舎は高台にあり、西は崖になっていた。二年くらいたつと西側の外壁の板がはがれていくのが一〇〇メートル位離れた道路から丸見えだったが、人も物資も大変不足していて、なすすべもなかった。

後に、市立第三中学校（現葛城中）になったところ。

昭和十九年四月七日、葛城町の民営アパート木造二階建てを市で買いとり（七万円だったと聞いた）三教室分に改造した。（第三校舎）畳を取り、壁を抜いたが、窓ガラスはやぶれたままであった。うなぎの寝床のようで、部屋と、廊下の境になっていた柱が黒板を見る時はじゃまになった。

教訓「明朗」、「真剣」、「錬磨」、礼儀作法（会釈、礼、最敬礼）や教練の指導（四列縦隊の行進）も徹底していた。

徒手体操は、極限までという指導を受けた。

髪の毛　一年　おかっぱ頭。前髪は眉（まゆげ）の上一糎の長さ。

二年　横わけ。耳の下あたりで切りそろえる。

三年　後を、二つに分けてしばる。

四年　分けた二つをそれぞれ三つあみにする。

鉢巻き　眉毛の上二糎位から髪の毛をおさえ、耳の上を通ってきちんとしばる。真横一直線のようになり、とてもきりっとしていた。

髪型によって一目で学年がわかり、上級生を慕い礼を失なわないように、下級生にはやさしく接するように心がけた。自分たちのおかれた立場を自覚し、自律、責任感が培われたと思う。今思えば、先生方が、一つ一つ考え、考えぬいたうえでの理にかなったご指導だったと、今あらためて、感謝せずにはいられない。

制服　昭和十七年一年生のころ、冬は紺、夏は白地へちま衿、ベルト付き。胸に徽章をつけた。スカートは、ぐるりと襞がついていた。式の時、靴下は、黒のストッキングをはくということになっていた。掃除の時は、三角巾をかぶり、白の体操服をきて、ブルマーをはいた。

昭和十八年二年生のころは、布地の不足から、スカートは四枚はぎのフレーヤーでもよいということになったが、それも、ほんのわずかの間に無理な状態になり、もんぺをはくようになった。

当時、日本は第二次世界大戦（大東亜戦争、太平洋戦争ともいう。昭和十六年十二月八日～二十年八月十五日）の真最中だった。勝ち戦（いくさ）の頃は、日の丸や日章旗の小旗を振ってねり歩く旗行列や、提灯（ちょうちん）行列がたびたび行われた。大人の人達は、国防婦人会という組織があり、白の割烹着にリレーのアンカーの使うような襷（たすき）をかけ、県庁前、本町、吾妻町、通町などの主な道路を行進した。

昭和十八年、戦況が思わしくなくなるにつれ、防空頭巾をかぶり、砂袋での消火、担架（たんか）での救助、三角巾での包帯の仕方などの訓練をした。敵が、日本に上陸したことを想定して、何百年も昔の戦のような竹やりの訓練も行われた。今思えば、信じられない感覚。うそ、馬鹿みたい、笑っちゃう。でしょうが、当時は、何が何だかわからなくてただ夢遊病者のように、でも真剣だった。そのころ空中からの攻撃をさけるための防空壕をあちこちに掘るようになった。「欲しがりません勝つまでは」、節約、廃物利用の徹底した時代でもあった。戦争がますますはげしくなり、男の人は次々に戦場へと召集されて行った。このように、戦渦の波は私達の意思に関係なく、老若男女を押し包み学生をも含めて銃後の守りを受け持つべく、巨大な参戦体制が国をあげて進展していった。この結果、当然のことながら、戦争に必要な物資の生産や、日常生活に必要な社会経済活動について可能なかぎり私たち学生も中心になって推進せざるを得ず、手初めは、参松（さんまつ）という飴工場や、郵便局に勤

労動員された。

昭和十八年十二月（二年）から、二十年八月（四年）の玉音を聞くまでの一年八か月。学徒動員として、蘇我の日立製作所（現川崎製鉄所）で、海軍の戦闘機の製作にたずさわった。同じ級の人も分散して作業に当たったので、それぞれ体験は異なっている。私のグループ一〇名は、「総組立」いくつものシリンダー（気筒）を組み合わせて、エンジン（発動機）を作り上げる。組立て―試運転―分解―洗浄―組立て―の工程を繰り返す。私は主として重いシリンダーを運び、冷たいガソリンや熱湯を使って洗浄する仕事を分担した。今流に言えば三K、危険、汚い、きつい内容であったが、やりがいのある仕事に選ばれたのだと、誇りにさえ思って一心不乱にがんばった。昭和二十年に入ると警戒警報や空襲警報の発令がその度を増した。千葉にもB29が爆弾や焼夷弾をあちこちに落とした。艦載機が飛んで来て低空から機銃掃射を浴びせるので、防空頭巾をかぶり、工場の建物から出て、海岸沿いをはうようにして防空壕に向かって逃げた。警報が解除され工場にもどってみると、天井に機銃掃射を受けた穴がいくつもあいていた。

昭和二十年八月十五日の終戦の日から二十一年三月二十九日の卒業の日まで七か月間、工場生活から学生生活にもどり、葛城の第三校舎や千葉中（現千葉高）から借りた教室で過ごした。終戦後は、急激に貨幣価値が変わりインフレーションとなって、衣食住、すべて困窮していた。食糧増産のため、校庭の周囲はもちろん、軒下まで畑にした。千葉寺球場や後の第一中学（現加曽利中）方面、六角堂、修練道場まで行って、さつま芋掘りに精出した。

このように私達の在校中は、勉学、施設、物資等すべての面で問題が多く、現在のような恵まれた学生生活とはほど遠いものであった。しかし、先生方を中心に私たちは一致団結してお国のためにと一途に若き情熱を出しきった中から不屈の精神がはぐくまれたと思う。学窓のみでは得られない生きた勉学をすることができ、今しみじみと当時の学生生活をなつかしみ、感謝しつつ、寄稿を終わらせていただく。

思い出すこと

市立高女四回生　佐々木　洋子

母校の五十周年記念事業の通知を手にし、大変懐しくひとり感慨に耽っております。五〇年経ったのでしょうか。

私が入学（昭和十八年）いたしましたころは、内申書と面接試験と何より厳しい審査は体力検定試験!!　当時はチビでヤセで体操嫌いの私には鬼の関門を漸く通過させて頂いた心境でした。新設間もない（三年目）学校、然も戦時中とあって校章も金属性でなく瀬戸物造りの粗末なもの、理科室も実験用テーブルが一セットあるのみ、また女学校でありながら調理実習室もなく、洋裁用の裁ち台を外に出してそこで御飯の炊き方等を教えて頂いた。全くの仮校舎生活。それすら二年生の半ばには学校工場と化し、飛行機の発動機づくりでモンペ姿に神風印の手拭い鉢巻きの勇姿で健気にも皇室の楯となる意気込みで校内一丸となり、学徒動員の日々を過ごしたものでした。日立本工場に出向しておりました。上級生の中に空襲による爆死を遂げた方があったことを知って驚いた両親が、やがて一家が絶えてしまう事への危機感で急きょ私と弟とを京都へ疎開させる事を決断。あの時の逼迫感は幾度想い出しても胸が痛くなります。現在平和馴れした若者には説明しても解かって貰えないものと思います。戦後戻って参り、亥鼻台に出来た校舎も足りず、千葉中（現在の千葉高でしょうか）に下級生が借り住い、食糧難に運動場も開墾して手に出来た血まみれのまめを互いに治療しあい乍らも作業に励んだものでした。そして漸く渇望して止まなかった本校舎が与えられると知った時、私共にとっては卒業寸前の頃でしたが嬉しくて、嬉しくて、先生始め在校生一同がそれぞれ机をしっかり持って長い道程をかみしめるように一生懸命歩いて運んだあの情景……他の人々にはまるで蟻の行列のように見えたでしょうが……私共には〝全校生徒が初めて一緒に勉強出来るんだ〟と叫びたいような歓喜に満ちた凱旋大行進だったように思います。

振り返ってみて、恥かしいことに私には勉強の思い出がなく学問の大切さを知り向学心に目醒めたのは卒業後二年も経ってからだったようです。しかしそのような女学生生活であっても「明朗」「真剣」「錬磨」この校訓だけは各先生方より心の中にびしりとお教え頂き、そのお蔭で逆境にあっても明るく振舞うたよやかさを身につけ現在まで歩んで参れたのだと思います。改めて培って戴いた先生方そして学友に心から感謝申し上げたいと存じます。

卒業後母校の校舎を拝見する機会もなく想像も出来ませんが、ラグビーの県代表を新聞で知ったり、大学受験シーズンには合格校別発表を雑誌で拝見して素晴らしい飛躍の母校の姿に隔世の感と感謝致しております。それは多分御立派な先生方のたゆみなき指導と生徒諸氏の向学心に燃え

た姿勢の賜物なのでしょう。

終わりに皆様のお力で母校がなお一層輝やかしいものとなりますよう心からお祈り申し上げます。

思い出すままに

昭和二十八年卒業生　島田侑児

私が在学したのは、昭和二十五年から三か年で、当時は戦後の混乱や、物不足からようやく解放されつつあったころである。

高校一年の六月に始まった朝鮮戦争は、消えかけていた戦時下の厳しい体験を再燃させ、私の心を暗い気持にした。

当時は、この戦争が日本を大きく経済的に浮上させる結果になるとは知るよしもなかった。

農村に疎開して、村の小さな中学校を卒業し、一時間をかけて自転車で通学していた私には、都会の高校生活は、生徒数や学習内容など驚くことが多かった。入学したころに、生徒の中に聞いたこともない曲をピアノで弾いたり、英語をペラペラ話す者がいることを知って、自分の田舎育ちの非力さをいやというほど実感させられたものだった。

社会が落ち着いたといっても、高校生活最初のころは、放課後の空腹を満たすパンも自由に手に入らぬ状況だった。服装などもバラバラで、男子は黒の学生服を着ている者が多かったが、ズボンは必ずしも一致しない状態であった。女子はセーラー服と背広形のスーツ姿が混在する有様で、現在のような制服で統一などということは考えられぬことであった。

校舎は木造で教室は一応そろっていたが、校庭は小石が多く、運動会前などの石拾いは定例行事だった。正面玄関はほぼ現在の位置で、校庭北側の一隅には職員住宅があって、家庭菜園にその一部が活用されていた。校庭の東側の周辺は住宅もまばらで、市営競輪場まで見通せた。各レース最終の一周を告げるベルの音が聞こえ、授業の退屈さを紛らわしてくれることもあり、今からするとのどかであった。

市立の女子高校から、県立千葉三高となり、男女共学の新制高校となったということで、その時入学した我々は新しい学校づくりの礎として、期待をされていたようであった。そこで、女子が多くややもすると沈滞気味になる男子の我々に対して、作法室等で叱咤激励が行われたことは現在でも記憶に残っている。当時の校長だった諸川先生は、

自ら進学希望の者を数人ずつ交代で校長室に招き、昼食を共にしながら指導をする熱の入れようであった。

また、のんびり中学校生活を送った私は、軍隊生活経験者の先生の荒々しい指導や、旧制高校的雰囲気の先生の指導により数多くの面で啓発を受けた。

そんな中で、忘れられないことは二か年半にわたって学級担任だった今はなき佐々木鉄太郎先生との出会いである。耐寒マラソンで生徒と共に走る先生の姿、割れ鐘のような大声で行われた漢文や早朝課外授業など、厳格な中にも一つの哲学を持って生徒に接しておられた先生の姿は、今の私の生活にも多くの影響を与えている。私の高校時代のさまざまな記憶の中でも、消し去り難い思い出の一つである。豊かさこそないが、活力に満ちた高校時代であった。

（教育庁学校教育部指導課長）

発展途上の千葉三高のころ

昭和三十一年卒業生　細川悦子

母校が創立五十周年を迎える記念すべき節目の年、私如き者に在校中の思い出をとのお話、身に余る光栄な事と感謝しつつ緊張して書きました。

私の入学した昭和二十八年には、市内に普通科の県立高校は三つしかありませんでした。この年から七組になり、まだ女子が多い時代でした。

「土着の生徒に比べ、転入生に秀れた者の多いのが、三高の特色だなあ」と嘆く先生がいらしたほど、転入生にはずばぬけて優秀な生徒がおりました。そのころ、三高だけが転入生を受け入れていたからのようです。

そういう生徒に啓発され、切磋琢磨していくようにとの諸川校長先生の教育的配慮は、さすがと今にして思います。

また全校生徒の集まりの時、必ず壇上より「発展途上の千葉三高……」と前置されて、口角あわを飛ばされ、「心頭滅却すれば火もまた涼し……」何事も信念を持って、一生懸命取り組むようにとの訓話、耳ダコと思いながらも、校長先生の気魄あふれる雰囲気の中で行われた剣道・ラグビー等の壮行会の様子は、いまだに心に残っています。

私たちの学校もだんだんよくなるのだと、希望を与えてくださったのだと思います。

集会後、全員で校庭の石拾いをした事も、拡張されたグランド整備のための人海戦術だったのでしょう。

発展途上にあった学校のおかげで、県下一立派な、尊敬

できる先生方が揃っていらしたのに、なぜもっと勉強しなかったのかと悔やまれます。特に三年間、持上りで手塩にかけてご指導くださった担任の佐々木鉄太郎先生には感謝しております。一昨年暮、お亡くなりになられ、クラス一同衝撃を受けました。国語の先生でしたのに、しばしばホームルームの時に、英語か数学の小テストをして、放課後までに返してくださる。勿論できなければ叱られました。

野球部の顧問もなさっていらした先生の猛烈なご指導にもったいない事ですが辟易したものです。

私達が当時の先生の年齢に達した時のクラス会で、ある男子の「あのころの先生の情熱と元気はどこからきていたのだろう」という言葉に居合わせた仲間が一様に、自分達と考え合わせて嘆息しました。授業中も容赦なく、男子にはビンタが飛びました。

それでも、三十五年経っても、クラスの仲間が集まれるのは先生の厳しい中にもあたたかなお心を感じ取っていたからかもしれません。ご冥福を祈るばかりです。

理科系の課目は選択だったのか、他の組の生徒と一緒に穴だらけの板壁教室から移動して、きれいな理科室での授業は何かほっとしたものです。

運動会の時、クラスで協力して趣向をこらし、仮装行列の準備を夢中でしました。

生徒会活動も、山崎一郎先生のご指導のもと、大変活発に行われていました。部活動には、全校生徒が参加していたように思います。私は文学部に所属していたので顧問の寺田義栄先生、宇野武朗先生、千田恭一先生に大変お世話になりました。機関誌「こみち」を発行するための予算獲得に苦労した事、広告取り、栄町の印刷屋へ寺田先生につれていっていただいた事、合評会、部員集めに奔走した事等懐かしく思い返しています。「こみち」が優秀な後輩たちに受け継がれ、大きなみちになっているような気がします。

文化祭に、講堂ですてきな先輩たちの歌声を憧れをもって聞いたり、演劇を観たりしました。講堂が狭かったせいか皆床に腰を下ろしていました。

卒業式も該当学年以外は、クラス代表の二名が出席して行われたほどでした。教育会館で、辻久子さんのヴァイオリンを聴いた事も印象に残っています。

三十年代前後の三高の進学率は二割弱くらいだったため、就職係の先生方が、職場開拓に種々の企業を回られて、生徒を採用してくれるようお骨折りくださいました。私も卒業後一年して、前任の松井代利子先輩が家庭に入られた後、

母校の図書室に四十一年三月まで九年間勤めさせていただきました。その間、池内先生はじめ朝比奈、宮本、古澤、木島、白銀の歴代図書部長の先生方、殊に何もわからない私に図書の分類、受入の仕方等、お教えくださった松本正子先生にはひとかたならぬお世話になりました。図書委員と蔵書整理に汗を流した事もなつかしい。

母校で恩師に目をかけていただき、好きな本に囲まれて何かと成長させていただく事の多かった幸運を感謝しております。

現在先生方の中に、卒業生が一〇名おいでとお聞きしました。これも母校の躍進の証と思います。どうか一丸となって、母校のますますの発展のためにお働きくださるようお願いいたします。各分野でめざましい活躍をしている同窓生の話を聞くのはとてもうれしく、誇らしい気がします。

二〇年来、図書の仕事の他に、同窓会事務局を一手にお引き受けくださっている佐瀬八重子先生に御礼を申し上げるとともに、母校がこれからも明るくのびやかな校風を失わずに、更なる発展をしていきますようにと祈ります。

回　想

昭和三十六年卒業生　平賀正勝

私が卒業した昭和三十六年は県立千葉第三高等学校最後の年であった。翌年より現在の県立千葉東高等学校に校名が変更になった年である。現在の校舎と違って当時は全校舎とも木造平屋造りの建物であった。生徒数約一〇五〇名の当時としては規模の大きい学校であった。人間の感性に訴え自身を掘り起こすという芸術の世界に身を置いた我々としては今振りかえると当時の木造建築が与えてくれたぬくもりが様々な個性を生みだし人間味あふれる先生方を始め個性豊かな生徒を輩出していた。印象深い事としては授業前の早朝より美術室で石膏デッサンをしていると向いの音楽教室からショパンのピアノソナタの音があふれて来、時折男女コーラスの歌声が我々部員の若い柔軟な精神を育んでくれたりもしたものだった。

ここで当時の美術クラブの紹介をしよう。総勢男女合わせて三五、六名の部員、指導して下さったのは顧問の草葉章先生である。クラブ費としては毎月三〇円、他に学校側

からは二、三万円の補助が出、それが運営費の全てとして使用されていた。彫刻像はブルータス・ミケランジェロ・ヴィーナス他一五、六体、また、イーゼル数は四、五〇脚くらいあったと記憶する。現在のように宅配宅急便のない当時としては諸先輩方が東京神田の文房堂より彫刻像を一体一体担いで運んでくれた大切な彫刻群であった。毎放課後美大へと進む者も、そうでない者も木炭を消す食パンを片手にデッサンをしたり、麻布を購入し作ったキャンバスに油絵を描いたりしてそれは盛況な活気に満ちた部屋の雰囲気であった。草葉章先生は大変熱心に放課後許される時間ギリギリまで指導して下さり、人間の生涯において最も大切な三年間を情操を育む美術部に籍を置けたことを画家として生きる今、有難く懐かしく思う。

当時の卒業生のなかには画家に、商業デザイナーに、また自身の人間形成としての制作に励んだりと様々であるがそのなかでもパイロット万年筆のデザイナーとして活躍している菊地孝夫氏のデザインによる万年筆等は大橋巨泉氏のCM「キャプリキ取れば、」の流行語を生み、また建築界においては都賀コミュニティセンターを始め千葉市の公的施設の建築設計を手掛けている長瀬精一氏、市内で画廊経営をされている戸塚主税氏等、当時の暖かい雰囲気はそのままに持続されており、草葉章先生を囲んで暖流会というOB会の展覧会を毎年開催し交流を暖めている。このたび創立五〇周年の慶賀にあたってますますの発展を心より祈るものである。

（画家）

東高の思い出

昭和四十一年卒業生　植　松　紀　子

周りは芋畑ばかりという幕張中学から東高へ入学した私は担任の先生が若くて情熱的ではつらつとしているのも魅力でしたが、都会の匂いのする同級生たちが大人っぽく見え、気後れがしていました。一つの中学から七〇～八〇名も入学したクラスメートなどは入学早々からわがもの顔で校内を友人達とかっぽしていて、ほんの数人しか入学しなかった幕中出身者など九クラスに分かれてしまえばどこにいるかもわからず、しばらくは孤立感でいっぱいでした。間もなく小関さんという色の白い女の子が色々話しかけてくれるようになり、やっと学校に馴染んでいきました。英語が得意な彼女は、外国のポピュラーソングを訳して私に

聞かせてくれました。それらのほとんどがラブソングで、聞くだけで私はどきどきしたものでした。ビートルズの歌の素晴らしさを教えてくれたのもその頃でした。そういう小関さんや、ピアノが得意で音大を目指す西原さん、ふっくら笑顔が優しい中山さんと仲よくなり、この四人でその頃流行していた交換日記を始め、三年間回し続けました。

両親ともクリスチャンで毎週教会にいっていた私は同じ教会の先輩に声をかけられ、週一回校内で行われている聖書研究会に参加しました。そこにはもう一人高橋さんという一年生がきていました。同じ高校一年生なのにこんなに人生について真剣に考えている人がいたのかと尊敬しておりましたが、ひっそりと隠れたような集まりかたの聖書研究会に対して「聖書研究会を同好会として学校に認めてもらいたい」と二人の意見が一致し、当時の石毛校長先生に話しにゆきました。他の先生方にも認めてもらえるよう何度も話しました。紆余曲折はあったもののついに坂本先生を顧問に迎え、同好会として認められ、二年生の秋の文化祭には同好会として展示室を一つもらったのです。

今でも続いているといいのですが……。

私たちの思春期は高校時代だと思います。「誰誰さんは素敵ね」とか「オールバックの君が教室の前をとおった」「房総西線の光源氏と一緒の車両に乗ったのよ」などという男子の噂話に大人の仲間入りをしたような、不良なのだろうかという後ろめたさをもちつつも耳を傾けていました。いま考えるとたわいのないことに悩んでいたものです。クラスメートの中には特定のボーイフレンドやガールフレンドがいる人もいて、うらやましく思っていました。

舟木一夫が歌った「高校三年生」もこの頃流行し、みんなで歌ったことも思いだします。

受験校ではあったけれどそれほど勉強に追われていたわけでもなく、子どもから大人になる微妙な時期を多くの友や素晴らしい先生方に影響をうけ、楽しく過ごした三年間でした。卒業してから四半世紀も過ぎてしまっている現在、全てが夢の中の出来事のように思われます。

（㈱百歳万歳社編集長）

東高の思い出

昭和四十五年卒業生　佐藤充宏

考えてみるともう二〇年が過ぎている。高校を卒業した時の年齢より更に生きてきた事になる。たぶん当時は、い

ろいろな思いがあったのだろう。大なり小なりの挫折、喜び、後悔。しかし二〇年の歳月はそれらを消化し、かくし味としての切なさをちょっぴり含む甘い思い出としてしまったかのようだ。一体、何をしていたのだろう。有体に言うと、勉強の記憶はほとんどない。いや勉強をしたという記憶はない。確か、入学して最初の試験、総合点でクラスで一番だったと思う。それに安心したか、あとは落ちる一方。まあ、当時それほど私も周りも成績のことは気にしていなかったのか、とにかく良くも悪くも皆ドングリの背比べであった。皆で渡れば恐くないの論か、総じて勉強はあまりしなかった。結果、先生方も飽きれるほどの出来ない学年ではあったようだ。もっとも先生の方も、さほど勉強の事を言わなかったように思う。諦めていたのかもしれないが。試験の時、皆でカンニングペーパーを廻していたら、やおら立ち上がって、「君たち、いい加減にしろよ!」と一言のみの先生、もちろんカンニングが良い訳ではないが、そこには先生と生徒の信頼関係の上に成り立ったキャッチボールがあったように思う。ちょっとつっぱった者、ワルもいた。でも、他人の心を解ろうとしない者、他人を無視するような者はいなかった。それだけ高校生活というものにゆとりがあった時代なのかもしれない。

当時、一番の関心事は、やはりおしゃれと異性のことである。一番と言わないまでも、いつの時代もそれは変わらないだろう。VANのボタンダウンのシャツを着て、細身のズボンに、リーガルのローファーを履く、それが我々の、カッコつけることであった。今でも、初めて四、八〇〇円(値段まで覚えている)の、赤茶のローファーを小遣いを貯めて手に入れた時の喜びを思い出す。「ホラ、コレ!」「買ったのォ」「いいなぁ」。校長の話は耳に入らない。朝礼で見せ合ったものだ。昼休み学校を抜け出して外に食事をしに行ったり、帰りにビリヤードに通ったり、そんな事ばかりが頭をよぎっていく。今思えばささやかな事である。そんな体験の積み重ねが、きっと今の私の一部分になっているのだろう。ただ、どれもこれだけはと言えるものがなかったのは残念ではある。勉強でもいい、運動でもいい、遊びでもいい。〝やった!〟というものが、結果はどうあれ、一つあれば生きる上でそれは何か大きな力になるのだろう。不幸にして私にはその経験がない。それは、今からでも遅くないかもしれない。

(NHKアナウンサー)

回　想

昭和五十年卒業生　赤　木　幹　子

千葉東高校は、私にとって大変貴重なありがたい学校だった。いま…もそうかどうかはわからないが、私のいた三年間、東高というのは大変のどかで平和な学校で、その時一五歳だった私には、その平和はなによりもかによりも必要なものだったからである。というのは私はそれまで本に溺れて育ったので、中学二年まで現実と本の中の架空の世界を完全に取り違えていたのである。こっちの方が本物だった！　と気づいてから、私は大急ぎでその本物の世界を取り戻しにかかったのだが、いま考えると私はずいぶん奇妙なクラスメートだったのだろう。自分のまわりに漂っているふわふわとした紙人形のように見えた人たちが、文字通り血や肉を備えた生身の人間になるのにほぼ二年ほどかかったような気がするが、それからも、よし、これでもうだいたい大丈夫だな、と思えるようになったのは、さらに一〇年程後であった。

私は毎日まわりの人たちとおしゃべり、遊び、その結果成績はガタ落ちしたが、その時の私にとって一番心底大事だったのは生身の人間になれるかどうかであり、知識などは二の次、三の次で、というより、その頃の先生方はたいていバランス良く、適度の知的刺激は授業で与えてくれていたので、知的な欲求に飢えることがなかった。

もし、あの時東高が受験一色だったり、先生たちが理不尽な態度をとるような所だったら……ということを考えると、いまでも本当にゾッとすることがある。当然学校はさっさとやめたろうが、その結果、同い年の友達はいなくなり、私はむこうの世界から帰れなくなったままになっただろうからである。

あの年ごろの子供たち同士の力というか共感能力というのは、大人にはとってかわることのできない場面を創り出すのだから。

そうしてたぶんその場面があるからこそ子供は学校に行くのである。同じ年ごろの人たちと会うために——。

そうしてまた、子供一人一人の顔つきや、能力、好みがみな違うように、その子にいま必要なもの、下手をすると本当にそれなしでは成長すらできなくなってしまうかもしれないもの、も違うのだろうと思う。

人によってはそれは確かに本であり、知識かもしれない。

しかし私にとっては、私がそこでぼうっとしてられる空間、もう一度世界を取り戻すまで、突っつかれないですむ時間、そうして私をかまってくれる友だちの笑い声であったのである。

あの時、友だちとしてではなくとも私のまわりにいてくれ、私の世界を人の存在感でいっぱいにしてくれたすべての人たちと懐かしい東高の校舎に心からの感謝を捧げます。いまの私がかろうじてマトモでいられるのは、すべてみなさんたちのおかげなのだから——。

（評論家）

ひがひがしき我が高校時代

昭和五十七年卒業生　保坂昌宏

「ひがひがしアワー！」エコーつきのこんな雄たけびと、ホルストの惑星のテーマ曲で始まる番組が、お昼の校内をお騒がせしていたのが、今から一〇年前。ちょうど東高創立四十周年の年で、私は高校三年の秋を迎えていました。ヒネクレテイルという意味の古語「僻々し」と、東高の「ひがし」の掛詞のようなこの番組は、不肖、私の文字通り僻々しいお喋りと、リクエスト曲などによって構成されていました。当番組も幾度の挫折の後、東高四十周年を迎え、三回に渡って、真面目に記念番組を放送したのです。そのタイトルは、「時代に伴う東高の変遷」（固い題ですが、実はかつて作った「時代に伴う大福のアンコの変遷」というふざけた番組にひっかけただけなんです。）第一部が、「東高の生い立ち」、第二部「学校封鎖周辺」　第三部「東高を考える」の三部構成。昭和十六年の創立から、高女・市女・三高・東高と移り変わった学校の歴史を駆け足でなぞりつつ、校歌の謎、東高校名の由来、東雲祭についてなどを折り込んでいきました。いつになく制作に力が入り、今だからいえますが、下校したのは、夜九時過ぎになったりしました。しかも、高三の秋と言えば、まさに追い込み、デル単なんかソラで言えなきゃならない段階でしょうが、私は、受験そっちのけで、十一月まで番組に没頭していました。

話は変わりますが、ラグビーの名門、東高で当時、もし部が勝ち進んで、一月の花園への切符を手にできたら、浪人覚悟で頑張る、でもそうでなかったら、必ず現役合格してやるというラグビー部員がいました。結局、その年は、花園の全国大会には届かず、その生徒は、千葉大に現役で

受かったそうです。浪人した私からすれば、実に見上げたファイトですが、まさに文武両道、これぞ、東高生の鑑と言えるでしょう。

つまり、東高には、夢を叶えてくれる雰囲気、理解してくれる環境があるのです。私の場合、当時、鈴木、山本両先生を始め、放送委員会活動に理解を示し、サポートして下さる先生方があり、更に、良き先輩や仲間がいました。

こんな自由な校風の例として、一年のころから予備校に通う東大一直線もいれば、他の高校生に影響されて、太いズボンをはき、授業をエスケープする者もいる。ラグビー命の男もあれば、私のように、放送活動に入れ込んで、それが高じて職業となる者もいる。私にとって、東高のあの放送室は、自分の人生を決めて（狂わせて？）しまった訳です。いずれにせよ、いろんな生徒がいて、いろんなことができる東高は最高の学園です。私の卒業は、もう「ひと昔」前で、今や、看護科実習室も、卓球室も、そして旧校門も姿を消したけれども、この東高の校風だけは、変わらないで欲しいと思います。

半世紀に渡る伝統を土台として、千葉東高の更なる発展を願ってやみません。

（日本テレビアナウンサー）

大好きな東高

昭和六十年卒業生　唐木　勢以子

「え、原稿!?」社会人二年めで会社ではまだ卵である私は、非常に驚いた。昭和六十年三月に卒業。大学に進学し、三年の時大学派遣で米国イリノイ州のCollegeで一年間学んだ。早大卒業後、日本航空に入社。現在、国際線スチュワーデスとして働いている。今年、四年制女子大生の人気企業ランキング一位になったのは嬉しいニュースである。仕事でおよそ五〇都市を乗務する。路線によっては、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ヒンズー語しか話さない乗客もいて、四苦八苦している。一期一会であり、毎フライト何が起こるかわからない緊張の連続であるが、見聞を広めるのに最高の職場だと私は思う。

母校を去って、早六年。思い出すのは、一日に二時間もある数学の授業。指名されているのに黒板に書くまでに、何人にも聞いて大騒ぎ。午後の古文の授業。先生の声が夢の向こうで響いていたり、後でノートの字が読めない事も。

東高は好きなことは何でもできる自由な校風を持つ伝統

校である。勉強もしっかりやるし、部活動も盛ん。文武両道青年の集まりといえよう。私自身は茶華道部、応援部にいた以外、青春をバレエに打ち込んだ。

多くの楽しかった思い出の中で、私の心に一番残るのは米国短期留学である。ヒアリングなどの約七倍の試験をくぐり抜け、生まれて初めて外国の地を踏んだ気持ちを今でも忘れられない。長い間、英語担当で東高の教壇に立っていらっしゃった桜井功造先生率いる私達一一人は、日本航空六便で成田を出発。約一か月の旅へと出た。ニューヨーク、ワシントン見学後、三週間ペンシルバニア州の家庭でお世話になりながら、高校に通った。同じ高校生でも大人びて見える彼らに最初はどぎまぎしながらも一緒に授業を受け、週末はパーティや教会へ行き、親戚や近所の人達に会って過ごした。派遣校は千葉東高の姉妹校だったので、私達は全校生徒の前でスピーチをし、剣道や盆踊り、歌を披露した。毎日が発見の連続で、私はこのような貴重な体験をさせていただいたことに深く感謝しているし、この経験はその後の一年留学、そして今の仕事にまでつながってきている、と思う。

おととし（平成元年）教育実習生として桜井先生、濱井先生のもと、一年生英語担当で再び母校に足を踏み入れることができた。いつの日かまた教壇に立ち、世界各国で見てきたことを皆に話したいと思っている。高校時代は社会に出る前に一番広く浅く学べる絶好の機会である。後輩の皆さん、一生懸命勉強してください。また、お世話になった先生方、本当に有難うございました。

（日航スチュワーデス）

高校時代——試行錯誤のとき——

昭和六十二年卒業生　遠山　裕

この度は創立五十周年おめでとうございます。

早いもので、私が東高を卒業してからもう四年が過ぎました。

今ふり返ると、東高での三年間は私にとり最も多感な時期だったと思われます。毎日が様々な刺激の連続でした。授業や交友、読書などにより得た雑多な知識の中で試行錯誤を繰り返していたような気がします。自分の将来について、何ができるのかということについて。

私の人生の転換点は高校二年の四月でした。私は幼時から音楽の教育を受けていたのですが、この時初めてプロの

音楽家になることを決意したのです。担任の先生（数学の金沢先生）に相談すると、「お前が芸大へ行く、と言い出すとは……」と、眼を丸くしてびっくりされましたが、早速入試へむけた勉強にとりかかれるよう色々ご指導していただきました。芸大の入試期間は他大学よりも長く、試験日と重なったため、卒業式に出席できなかったのは残念でした。

音楽の方面に進むということが決まった後も、私は往生際わるく色々な本を読んだり、音楽以外のことへの興味をもち続けていました。厚かましいことに、何でもやれそうな気がしていたのです。芸大に入学して、幼い頃から音楽一本で育ってきた人間に接した時、何だか居心地のわるさを感じました。高校時代に、色々なことに没頭したということ、そして様々な試行錯誤の中から音楽というもののすばらしさを発見したということは私にとって単なる思い出以上の貴重な経験です。

私は平成三年に芸大（作曲科）を卒業し、今は音楽家としての出発点に立っています。今の私は文字どおり〝音楽一本〟であり、それ以外のことに手をのばす余裕はなかなかありません。このような生活の中で、ふと高校時代を思い出すと、当時の自分のエネルギーの巨大さに驚いてしまいます。創作にたずさわる以上、このようなエネルギーを失ってはならない、と感じる今日このごろです。

……ところで創立五十周年にあたり、私の芸大での作曲の師匠である間宮芳生先生が記念曲を作曲なさることになりました。どのような曲になるのか、楽しみにしております。

（東京芸大大学院在学）

我が母校

平成元年卒業生　原　由也

我が母校、千葉東高校は創立五十周年を迎えられたということで、あの校風と伝統がやはり長い年月を経て創られたものなのだなあと実感すると同時に、私自身もそれらを創り上げた一員であったのだと思うと感慨深いものです。

お世話になった三年の年月は私のこれまでの人生の中で最も有意義なものでありました。なかでもラグビー部の一員として活動した経験、そこから得た教訓、そして何よりそこで育んだ友情は何ものにも変えられません。ラグビー部は東高の旧き重き伝統をひしひしと感じさせる場所であ

りました。全国大会出場を重ね、常に強くあろうとする部の気風の中にいる毎日は非常に緊張し、また充実していました。これはラグビー部に限らず他の部活動にもいえることで、卒業生は個々の部活に今でも非常な愛着と誇りを持っているように感じます。さて私が東高ラグビー部を知ったのは小学校六年の時です。少年ラグビースクールに入っていた私はある時、天台にあるラグビー場に行く機会がありました。そこで、黒とオレンジのジャージを着た選手たちが縦横無尽に走りまくり見事なゲームを繰り広げていたのでした。私は心の中で何度となくすごいなと感動したのを憶えています。私は高校は千葉東にしようと決めました。今となるとあの時、東高のラグビー部の試合を見ることが出来たということは私にとって幸運なことであったと思います。入学式を終え、すぐその日に入部をしました。憧れのラグビー部に入ることができ、私は夢中になって練習に打ち込みました。部員は先輩、同輩を問わず素敵な人ばかりで、ラグビーに明け暮れる毎日が楽しくて仕方ありませんでした。あっという間に一年が過ぎ二年生になりその冬には上級生が花園出場を果たしました。そして自分達の代となり、私は主将となりました。ラグビーがただ楽しいものだけではなくなりました。後輩を指導し、大所帯をまとめ、自らも向上してゆかねばならない。おそらく同輩も同じであったと思います。これが伝統を引き継ぎ、伝統を守ることなのだと思いました。勉強との両立もあり、合宿の時などはハードな練習の後、夜遅くまで勉強したこともありました。重圧ともいえる緊張の中、九月、十月と我々は勝ち進みました。準々決勝からはまさに薄氷の上を踏んで進むようでありましたが何とか勝ち抜き全国大会出場を決めました。残念ながら、私は決勝の時のことを全く憶えていません。しかし空白になっているその部分にこそ、私の高校三年間の総決算があった訳です。こんな三年間を誇りに思うと同時に、現在志望した大学生活をおくりながら、何と幸せな男だと思うばかりです。

（早稲田大学在学）

東雲祭についての思い出

平成三年卒業生　尾　和　一　範

東雲祭は何といっても東高生活最大のイベントの一つであろう。僕は東高在校中は生徒会役員であったため、その最大のイベントに大きく関わってきた。

ところで、僕が生徒会役員になったきっかけはというと、一年のクラス委員の選出の時のことである。僕は本が好きだったため、はじめは図書委員になろうと思っていた。そして、実際に図書委員になったのである。そんな時、僕のどこが見込まれたのか、クラス担任の先生に本部会員になってみないかと言われたのである。その先生は東高に赴任して間もなかったので、本部会員になると生徒会役員になる可能性があるとは知らなかったようである。もちろん、僕も知らなかった。結局、本部会員になることをひきうけ、あげくのはてには生徒会役員になってしまったのである。

こうして生徒会役員となり、二度の東雲祭の実行委員をつとめさせてもらった。とはいうものの生まれつき要領が悪いせいか、よく手落ちをしたりせっぱつまったりした。備品の分配に文句があるといってどなり込まれたり、電気ドラムの数が足りなくなって調達に奔走したりしたものだ。こんな調子だったからよけい疲れたのだろう。東雲祭を終えた時の感想は、もう二度とやりたくない、だった。

文化祭の実行委員なんて、いっけん割の悪い仕事に見える。忙しいし、部活には満足に出られないし、他人からは文句を言われるし。しかし僕にとってはその忙しさが逆によかった。二年生の時の東雲祭が終わった後、誰かに、「尾和君は文化祭の時は顔が輝いていたよなあ。」と言われたことがある。忙しくていやだなあと思っていたのも事実だが、その時の僕の心はけっこう充実していたのであろう。三年生になって初めてただの生徒として東雲祭に参加したが、その時活躍していた実行委員達を見ていると、またやってみたい気になったのである。

また、実行委員であったおかげでより多くの人を知ることができたのは、僕にとっては幸いだった。実行委員の仲間を通じての知り合いも増えた。僕はなかなか人と打ちとけないので、普通に学校生活をしていたら知り合いの数はもっと減っていたであろう。また他校の文化祭に東高の代表として招かれ、様々な交流ができたのもよかった。

僕は生徒会役員であり文化祭の仕事に携わって来たため、普通の学校生活を送るよりも多くの東高での思い出をつくることができた。そう考えれば東雲祭実行委員をやって、また生徒会役員になって本当によかった。

（図書館情報大学在学）

三　通信制課程

通信制に勤めた頃

旧職員（英語）　亀　　忠　夫

私が館山二中から通信制に赴任したのは、昭和三十四年九月で、まだ千葉三高と呼ばれていたころである。三十二年に初めて通信制による卒業生を出したということで、秋山主事（当時、教頭をそう呼んでいた）はじめ、通信の先生方は大変喜び、また誇りにもしていた。（三十三年二回目の卒業生の中の一人が現千葉東高教諭鈴木富士夫氏である。）まだ木造校舎で、全日制の一教室に間借りしていたが、翌年通信専用の二階建ての校舎ができてそちらに移った。その設計は先生方の知恵をふりしぼったもので、一階が職員室と印刷室、二階はかなり広い教室と面接室があった。やっと日陰者から陽の目をみたという感じであった。私自身もそうであったが、通信制の存在意義がまだまだ世間に認められていなかった。（あるいは、今でもそうであるかもしれないが）

そのころの想い出としては、鹿野山神野寺での合宿スクーリングがある。やがて参加者が多くなり、富士山麓の「国立中央青少年の家」に変わった時と較べると、とても家族的で、生徒と教師のふれあいが深く濃いものだったという印象が、今でも強く残っている。（この辺の事情については、四回卒業生大木進君編・著の「海のともしび―教育の原点」にくわしい。）

次に、生徒会を発足させたことがあげられる。通信生はなかなか全員がスクーリングで揃うことができず、生徒会活動をする時間的な余裕もなく、また負担をふやすことに親心が働いたためであろう、教師側に消極さがあった。でも、高校卒業資格となれば、特別教育活動は必修である。ホームルーム活動は活発にやっていた。せっかく入学してきても挫折する生徒が少なくなかったためである。生徒の自主的活動としての学習会活動も各地で行われ、教師がそのつど手分けして出席し、激励していた。（聞けば、現在も続いているとのこと）その成果が認められ読売教育賞を受賞したのは、昭和三十八年だった。（そのお蔭でＮＨＫの教育テレビに出演させてもらった。）当時は優秀な生徒が揃っていて、飛躍的に卒業生の数が増えつつあった。長谷川直和君、坂田貞司君、平野俊夫君、和田（現・後関）雪

子さん達が中心になって、（ほかにサポートする生徒が一杯いた）生徒会が発足した。顧問として側面援助したのは、高教組の執行委員にもなった山口道夫先生（惜しくも癌のため早く亡くなったが）と私だった。その機関誌に「雑草」と名付けたのは、坂田君だった。雑草のように強く、逞しくというのだ。当時の石毛校長は、「通信の生徒は雑草じゃないよ」と言って、あまり賛成ではなかったような記憶がある。初代生徒会長は平野君だった。彼は生徒会が軌道にのるまで、卒業をのばして活躍してくれた。生徒会が発足し、クラブ活動がスクーリングに組みこまれたのは、山川主事の時代に入ってからだと思う。やがて定時制・通信制の大会にも参加し、バレー部、野球部、陸上部、バスケ部等の活躍が新聞紙上に報じられたのを読むと、我がことのように嬉しい。生徒にとって、クラブ活動がスクーリングの一つの楽しみにもなっていれば、結構なことだ。

私は三十八年四月に後髪をひかれる思いで、全日制に移ることになるが、短かった通信制勤務で生徒には誠に申し訳ないと思っている。何故なら転任するのは、教師の背任のように思われるのだった。通信制に勤務した人なら誰でも、生徒の真摯な姿勢に頭が下がる思いがし、これこそ教育本来の姿ではないかと、反省させられるのである。私もその一人であった。全日制に移ってからも、通信制の生徒を引きあいに出して、「甘ったれるな」と生徒を励ましたものである。

昼休みに職員同士よく軟式テニスをしたのも、楽しい思い出である。校長や主事が「通信の先生方はデスクワークばかりだから」と率先奨励してくださった。雨の時は碁を打った。慣れてしまえば天国のような職場であった。教壇で直接授業をする機会が少ないことを除けば。赴任当時は百八十度の転換で、十二指腸潰瘍を患った。（通院だけで薬で直ったが）自分では気が付かなかったがストレスがあったのだろう。家計の方も、物価（特に家賃）が高くて閉口したものだった。館山では、同僚から借りて僅か五〇〇円の家賃で生活していたから。もう三〇年も前の話である。

最後に、通信制にいたおかげで、思いがけず稀な経験をすることになったことを書こう。それは、千葉刑務所に通信教育講座がもうけられ、英語を私が担当（ほかに、書道の安塚先生、簿記の山室先生がいた。）することになったことである。全日制に移ってからも続けて五年くらい（年五～六回）通った。刑務所では看守の案内でいくつもの扉をくぐって行く、特有な臭気の中を。少し恐かったのは一

回目だけで、私を心待ちにしている受講生（長期刑だが、勿論所内では模範囚ばかりである）に講義室であうのは、また別の感慨をもつのであった。中に、最後の授業の時「出所したら、先生の家に遊びに行きます」という生徒がいたが、遂に現れなかった。（今どうしているかしら）受刑者であれ、生徒の向学心には打たれる。

以上のように、教師として色々な意味で、忘れられぬ得難い貴重な体験をさせてくれたのが、通信制だった。

通信制の思い出（書道について）

昭和三十八年卒　坂田貞司

私が東高に入学したのは昭和三十二年の春だった。

昔の尋常小学校六年しか出ていない私にとって、文字を書くことが一番苦手でした。まして筆で字を書くなどとは思いもよりません。そのため三〇歳をこえるそれまでの人生にどれほどマイナス面を深くしたかはかりしれません。どうしても筆で字を書かなければならないとき、時によっては人前で書かせられるときのつらさ、恥ずかしさは他人には解からないものでしょう。

どの学科も大変にむずかしく困難であり、三〇歳を過ぎてからの勉学は、私の頭が固いせいか骨が折れたのですが、書道からは、成るべく遠ざかっていました。

でもなぜか残念でなりません。自分の一番弱いところと戦ってみなければ通信制で勉強した甲斐が無い。よしっ！書道に立ち向かってみよう、そう決心したのは最初入学してから三年は過ぎていました。

当時書道を担当していられたのは、全日制でも書道を教えておられた安塚旭洞先生でした。

最初の書道のスクーリングの時私は、自分が悪筆であり今までどれほどそのために苦労してきたかを先生に話し、自分のような者に書が習えるでしょうかとたずねました。そのとき先生のいった言葉が忘れられません。

「君こそ書道を習うのにもっとも適した人間なのだ。自分が字が下手なことをよく知っている。そのことが大切なのだ。下手だから習うのだ。うまく書ける人、自分はこの程度に書ければもうよいと思っている人は書道を習う必要はないのだ！自分は本当に下手なのだと自覚している君こそ書道を習うのに最適なのだ。さあ私と一緒に戦ってみましょう。がんばってください。」

私は、それから書道を通じての自分とのたたかいが猛烈

に火ぶたをきりました。安塚先生のかな・漢字、そのいずれも素晴らしいものでした。私は先生の筆さきから生まれてくる線・点・構成の美しさ、力づよさにぐんぐんと引きつけられてゆきました。そして私は良き師を得たことを知りました。私が書道に熱中しはじめた翌年の秋、千葉県定通文化大会で書道の部第一位を獲得しました。たった一行の書を書いて書いて、また書いていつの間にか夜がしらじらと明けてしまうこともたびたびでした。卒業の時には書星会の三段になっていました。それから長い間やはり自分は本当は字が下手なのだ、そういう思いが、書けば書くほどに、進めば進むほどに自分の欠点が思い知らされ、私をかきたてていきました。

いつの間にか私は全国組織のある会より書道一〇段をみとめられ、サンケイ国際展、サンケイ硬筆展、全日展等々、たくさんの中央展に入選・入賞を重ね、六〇歳を過ぎてから、ある私立大学の修士課程（書道専門課程）を卒業し、その全国組織の書道会の名誉教授に列せられました。

少しは人に認められる字が書けるようになったようです。だが、私の運命はそのような慢心を許してはくれませんでした。

三年ほど前、私は脳卒中にたおれ、右半身が自由にならなくなりました。幸い症状は軽かったのですが、字はまた書けなくなってしまったのです。右利きの人が左手で字を書かなければならないもどかしさに似て、私は再び字が下手になりました。

三十年前書道に夢中になっていった千葉東高通信制に在学中のころとは違った戦いが私のなかで静かに進んでいます。

私を書道好きにしてくれた安塚旭洞先生は、既に故人となられ、私も、もうすぐ六六歳、だがファイトにおとろえはありません。

思えばそのころがなつかしく、そして人と人との出合いの大切さ、もしあの時安塚先生にお逢いしていなかったならば、私が今いだいているファイトも生まれていなかったであろうし、もっと駄目な人間になっていたかもしれない。

私はよき時によき師にお逢いして私を活かすことができました。安塚先生のもとで書を習い、書の世界に名を成した弟子はたくさんいます。

私には師の域に達するまでに至りませんでしたが、師は私に大きなファイトを与えてくれました。ありがたいことです。

今はただ、師の御冥福をお祈りいたします。（合掌）

通信制の思い出

昭和三十八年卒　長谷川　直和

二十九年六月のある日、西千葉駅前の公衆電話から、千葉三高（今の県立千葉東高校）に電話した。

私「高校に入学したいのですが」

諸川校長「良く来たな！　こちらに秋山先生が待っているよ。すぐ来給え!!」

三高の門をくぐってから卒業まで八年の高校生活が始まった。

もちろん、勉強も大切だが、卒業までに飛び越えねばならないハードルの一つに「良き仲間」との出合いがある。

柏のドングリ会（リーダーは荒井和子さん）との清水公園、伊豆、赤城山、鳩の巣等への一泊旅行。

木更津青年の家（御関雪子さん、田丸智枝子さん他）での各学習会との交歓会（三十八年十月五日）

銚子地区（リーダー石田健美氏）での各新年会。銚子、八日市場、笹川三地区で役員、会場等持廻りとなっており毎年三〇名～四〇名が参加している。

笹川公民館（高橋先生指導）の柏、木更津、千葉地区との交歓会等想い出と共に、東高も県下屈指の優秀校へと発展していった。

当時小生は、県下にある協力校（銚子商業、木更津二高、館山高、佐原二高、八街高、匝瑳高、笹川公民館等）のほとんどに出掛けて行った。あるときは電車で、またあるときはオートバイで、雨にたたかれ、雪にさらされ、勉学に励んで?来た。高校での数多くのドラマのほとんどが、この学習会でのよきグループによって作られて行った。

次に現在と一寸違った点にふれて見よう。レポートを提出し、本校で試験を受ける事は同じだが、試験日は別に決まってはいなかった。

私「生物の第四回目の試験を受けたいのですが」

佐藤先生「準備しておくから、いつでも来なさい」

との事。三十年九月十八日、本校に出掛けて見ると、生物の先生は御出張でおられなかったが、職員室のわきに、机と椅子が置いてあり、生物の試験用紙が私を待っていた。

「鯨はなぜ獣なのか?、雑種強勢についてのべよ!!」

等々五問が書いてあった。悪戦苦闘の末、二時間余りたっただろうか?やっと出来上ったので、答案用紙を先生に渡し、オートバイの人となった。四～五日して佐藤先生から

採点票が届けられた。『あれは五問中、三問出来れば良かったのに云々』

『問題の提出をあやまり申訳ありません。それにも拘らず全問題に対しほとんど完全な解答を云々』（講評文のまま）と書かれてあった。

次に雑草について一寸ふれて見よう。私達の機関誌として、もっともふさわしい名前を付ける事になり、投票の結果もっとも人気のあった『雑草』に決まった。かくて坂田氏の「誌名に寄せる誌」平野会長の「創刊を祝して」及び東海林美智子さんの「一人旅」等を載せて三十七年七月、堂々と創刊号が出版された。

筆者『つまらぬ雑草を笑った動物達は純毛の毛皮こそ着ているが、今だに「飢え」と「寒さ」に悩まされ「天敵」と戦う為に、ハリネズミのように気を配らねばなりませんでした。征服するものされるもの、実はただ雑草として引き抜く前に稲として育て上げ、雑草を笑う前に麦として畠に植えただけの違いでしかなかったのです。甘い苺のジャムも、赤い大きな西瓜も恐しい熱病から命を救ってくれるキニーネも、ドイツパンも、ウグイス豆も、元はみんな雑草でしかなかったのです。（雑草二号に掲載）

次に鹿野山合宿スクーリングについてのべてみよう。三十四年七月二十七日私達の待ちに待った校外スクーリングが始まった。ソフトボール大会、ドッヂボール勝ち抜き戦等全員が笑いと汗に我を忘れて飛び廻っているうちに、キャンプファイヤーの時間になった。秋山主事先生の「火の神」が全員の喝采をあびた後、ドングリの「ズンガリガリガリズンガリコ……」で始まる「南洋の美人？」の踊りを始め仮装行列、のど自慢等が行われ、やがて我等の「底抜け床屋」の番になった。お客を椅子に掛けさせ、大きなハサミで首をチョン切るまねをしたり、大きなクシで髪をとかしたり、顔中石鹸をぬってお客にしかられたり……、やがて頭もきれいになったので帰りかけると、風呂敷包み（中はメリケン粉）が忘れてあるのに気が付いて、早速件の包みを持って客席に向かって飛んで行った。すると急に勝野君が立ち上ったので、いきなり顔に風呂敷包みごとメリケン粉をぶつけてしまった。勝野君ですか？　そうです、彼は初めから顔にたっぷり水を付けてあったので、見事に真っ白なメリケンマン？に変身してしまった。

通信教育も三十二年三月十日、栗原愛子さん、牧野実氏及び吉野博弼氏の三名を送り出してからはや三四年になりました。「分け登る麓の路は多けれど、皆々様と共に、同じ高嶺の月を見ようではありませんか!!」

通信制の思い出

昭和五十九年卒　手塚　眞

私が千葉東高通信制課程へ入学したのは昭和五十四年の春でした。その時、三六歳、一男一女の父親で仕事も中堅として多忙な時期でした。期待と不安の入り混じった気持で入学式へ出席すると、一〇代から六〇代までの幅広い仲間に出合うことができました。

通信制課程チャレンジの動機は、新聞で働きながら学ぶことのできる千葉東高通信制の紹介記事を読んだことがきっかけでした。仕事との両立、家族への負担を考えると迷いがありましたが、これまで体験することができなかった多くの仲間との高校生活へのあこがれと、社会を広く見ることの基礎となる知識の修得、国家試験等を受験するのに必要となっている高校卒業資格取得への気持は強く、チャレンジすることに踏み切りました。

授業が始まると、次から次へとおしせまるレポート提出日に追われ、仕事を終え家に帰ってから夜遅くまで教科書や参考書に取り組むことが続き、弱音が出たこともありました。しかし、スクーリングで学校へ行くと、私と同じような人、主婦と仕事を両立させている人、年配の人、若い人と会え、学生として同じ立場で語りあえ、相談できたことから弱気は吹き飛び、頑張ろうという気持になりました。

スクーリングの授業では、勉強に慣れない私たちに、先生方が真剣に取り組んでいただき、先生と私たちの二人三脚で少しずつではありましたが、確実に前進することができました。

クラブ活動では軟式テニス部に入り、真夏の太陽の下で練習し、定通大会に出場できたこと、生徒会活動に参加し、高校生活を意義あるものとする各種行事に先生方と一体になって取り組むことができ、皆で協力し生徒会ニュースを発行できたことは強く印象に残っております。

夏期合宿も楽しく思い出多いものでしたが、入学後初めて参加した御殿場合宿が思い出されます。集中登山、キャンプファイヤー、教室でのテーマ討議等が行われましたが、厳粛なムードの中で火の神が登場し、松明を持った従者により中央に組まれた薪に点火され、開始されたキャンプファイヤーはすばらしいものでした。炎のまわりで、各班の趣向をこらした出し物に興じ、皆でハミングで歌ったキャンプファイヤーの歌、詩の朗読に引き込まれ、現実の仕事や生活を忘れ、自然の中に自分を置き、自分を見つめ

ることができました。

また、高校生活の締めくくりとして、京都から奈良を訪ね、歴史や古典で学んだことを目前にし感激し、年を忘れ、車中や旅館で語り明かした修学旅行等、つい最近の出来事のように思われます。

思い出多い通信制を卒業して私が得たものは、困難があっても『やれば出来る』という自信、お互いに助け合うことの素晴らしさ、そして知識を広げることへの面白さを体験したことではないかと思います。

仕事においても、人生においても、自分で学習するプログラムを作れる人が重要といわれています。私も自分の人生を充実させるため、広い視野で地球を見つめるように心掛けるように努めつつ、仕事と併行して剣道、居合道、謡曲に趣味を広げるとともに放送大学での学習にチャレンジしているこのごろです。

通信制の思い出

昭和六十三年卒　柴　田　文　雄

私が通信制を知ったのは、七年前の県広報紙であった。強く心引かれるものがあって、早速問い合わせをした。

『この電話が一つの切っ掛けであり、人生の転機に繋がる事にもなるでしょう。チャンスは二度と巡って来ないかもしれないから、少々無理をしても、ぜひ入学しなさい…云々』と、力強く説得して下さった主は、英語科の久保雅一先生であった。三〇余年のブランクがあったが、〆切期日も差し迫っており急ぎ資料を取り寄せ提出、後日の面接を受け、審査の結果、合格となり、昭和五十九年四月十五日、入学式を迎えることとなった。一五歳から六〇歳代までの幅広い年齢層の中でも、特に高年齢の私は周りの若い人たちに圧倒される思いで、高校生活のスタートをきることになったが、式典の開始直前に、新入生三三一名の代表として、「誓いの言葉」を読み上げるようにとの指示を受け、このハプニングに、式の進行も上の空と成ってしまった。

多くの先輩たちが、学業と仕事を両立させながら自学自習の道を歩み、「卒業」という栄冠を手中に収めるための艱難辛苦は、一種のサバイバルゲームのような状況であったし、そうした実例が示すまでもなく、私たちの同期入学生も、一割強の三四名しか卒業出来なかったという、明暗を分ける学園生活に変わりはなかったのである。

千葉県立千葉東高等学校通信制課程。

いま懐かしい校名の響きと共に、ここに学んだ四年間を、静かに鮮やかに思い出している。

二〇余名のすばらしい先生方との出合いは、私にとって大変幸せな事であった。前向きの姿勢、責任感、奉仕の精神など、目に見えない教訓を身をもって実践し示していただいた。積雪などの早朝は、登校する生徒のために、率先して先生方と除雪を無言の行動で示された森田校長先生、一人ひとりの心に語りかけ、聞き上手・話し上手で生徒に慕われた松本教頭先生、英語の授業をウイットでスマートに進行された、ブラックライス氏こと黒米先生、レンズの奥に優しく親切な瞳が、キラリと光る恒吉先生は薬品の匂いといつも一緒。スリッパの音も高らかに現れまずは、「小言」で始まり、現代社会について熱弁を振るわれた小泉先生、ヤングマンからOBにまで皆んなに人気のあった河野先生は、体育に生徒会行事にと足さばきも軽やかであった。

美辞麗句より自分の言葉で本音を語れと指導された書道の瀬川先生、見た目通りの大きな懐で、難問愚問を一手に引き受けてくださった、家庭科の肝っ玉母さんこと小出先生、担任となった生徒の事は細大漏らさず掌握する、その記憶力の良さに驚かされた国語科の菅原先生等々……。

一方、生徒の中にも胸襟を開ける仲間たちが、事ある毎に惜しみない協力をしてくれた。私が労務災害で入院した時などは、学習の遅れを心配しての「お見舞」が、いつの間にかミニ学習会になってしまっていたこともあり、のちにこのことが、進級への励みになったことは、大きな喜びであり忘れ難いものとなっている。人と人とのかかわりの中で、教えられ助けられ、暖かい心の触れ合いに、通信制の真の姿を見い出したような気がする。それは私にとっては貴重な体験であり、実にすばらしい出合いであったと確信している。

通信制に入学を決意したころだったと思うが、「何を今更、その年で、何の為に!!」と、言った女房の一言は、卒業までの四年間、常に脳裏から消えることはなかった。いや、今も消えていないし、この先、生涯教育への激励として、また惰気満々の日々を送らないための警鐘として、女房からのプレゼントと解し有難く頂戴して置くことにしている。

第二節　記　録

一　教育課程

1　全日制普通科

創立三十周年（昭和四十六年）以前については、昭和二十三年度学制改革、学習指導要領の改訂（昭和二十六年、三十一年、三十八年）に伴い、四回の改訂を行っている。その時々の改訂に当たり、本校として特に配慮した点、個々の改訂理由等については詳細がわからず、教育課程表（表2～6）のみ掲載する。なお、千葉市立千葉高等女学校時代（昭和十六年四月～昭和二十三年三月）については各学年ごとの履修科目一覧（表1）を示す。

創立三十周年以後現在に至るまでの事については、その時々に特に配慮した点、改訂点、理由等を示し、かつ、創立三十周年以前と併せて教育課程表（表7～）も掲載する。

昭和四十八年度（表8）

学習指導要領の改訂に伴い従来の教育課程を改訂した。その編成に当たって特に配慮した点は次のとおりである。

(1)　従来二年生から分けていた文理コースを三年生から分ける。

(2)　この年度よりクラブ活動が各学年一単位設けられたが、総履修単位（一〇二単位）は従来と同じとする。

昭和五十五年度（表9）

三年の選択科目が少ないので特定科目（数学）に集中する傾向が強いため、選択科目に英語を加えて選択者の調整を図った。

昭和五十六年度（表10）

三年生のコース分けにおいて、当初、A、B、二つのコースを用意したが、大学進学との兼合いで、純粋のB（理系）を希望しているというよりは、数学の負担を多少軽減したコースの必要性を認め、Bコースの変形という形でCコースを設定した。

昭和五十七年度（表11）

学習指導要領の改訂に伴い教育課程を改訂した。その編成に当たり、特に配慮した点は、次のとおりである。

(1)　第一学年及び第二学年においては共通科目の学習を主とし、第三学年においては、文理の類型を設け、

進路に応じた学習ができるようにした。

(2) 「ゆとり」のあるカリキュラムという観点から総履修単位を従来の一〇二単位から九九単位（各学年二三単位）に減ずる。

(3) 第三学年に二単位の「自由研究」を設け自学自習の態度を養成する。なお、一つの参考例として昭和五十八年度中に各教科から提出のあった「自由研究」について、その概要を資料として揚げる。（表12）

昭和六十一年度（表13）

三年時の英語は、従来、学習指導要領の標準単位に基づきⅡB三単位、ⅡC三単位であったが、ⅡCについては二単位で履修可能なため、一単位分をⅡBに回し、ⅡB四単位、ⅡC二単位にした。

昭和六十二年度（表14）

学習指導要領に即し、音楽、美術、書道に工芸を加え、四科目の中から一科目選択にし、選択幅を拡げた。

平成元年度（表15）

次の四項目について改訂した。

(1) 第三学年時、理系クラスの国語については、現代文が必修で、古典は選択科目になっており、古典の時間不足を解消するために、二年次で古典を一単位増加し、三単位に変更した。それに伴って、現代文三単位を一単位減の二単位にした。

(2) 文系クラスの者が、センター試験で倫理と政治・経済で受験できるようにするために、従来、倫理と政治・経済から一科目選択であったものを、政治・経済を必修とし、倫理を選択科目に付け加えた。また、共通一次試験からセンター試験へとシステムが変わり、当初、試験期日が十二月と発表され、日本史・地理などが最後まで終わらないことが予想され、その対策として日本史・地理を一単位増の六単位にした。一単位減は同じ社会科の政治・経済から行った。

(3) 県より英語Ⅱについては、二学年にわたり履修したほうが効果的であるとの助言を得、二年次、英語Ⅱを三単位、ⅡCを二単位とし、三年次、英語ⅡC二単位を英語Ⅱに変更した。

(4) 自由研究は、科目の性格上、設定科目・内容に変動が生じやすく、また、生徒もそれに充分に対応できない場合もあり、自由研究開設当初の自学自習の態度を養成するという方針に、必ずしも適わない面

もでてきた。そこで、開講科目について大学受験等もある程度考慮した上で、文系、理系の特色を出し、それぞれ開講科目を固定し、その中から一科目選択する形にし、科目の名称も「自由研究」から「選択科目」に変更した。なお、「選択科目」について、その概要を資料として掲げる。（表16）

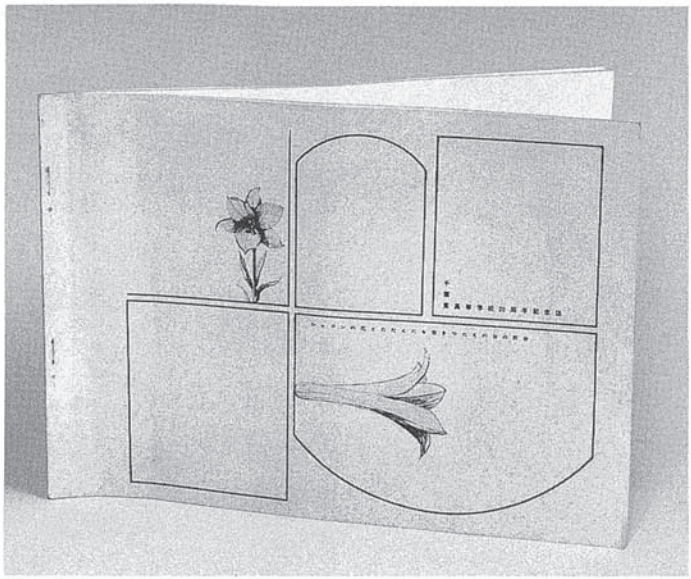


表1　千葉市立千葉高等女学校履修科目一覧（昭和16年度入学生）

科目	第1学年	第2学年	科目	第3学年	第4学年
操行	○	○	修身	○	○
修身	○	○	国文	○	○
講読	○	○	漢文	○	○
作文文法	○	○	文法	○	○
習字	○	○	作話	○	○
歴史	○	○	歴史	○	○
地理	○	○	地理	○	○
算術	○	○	数学	○	○
博物	○	○	物象	○	○
物理		○	生物	○	○
家事		○	家政		○
裁縫	○	○	育児		○
手芸	○	○	保健	○	○
音楽	○	○	被服	○	○
図画	○	○	体操	○	○
体操	○	○	武道	○	○
英語	○	○	教練	○	○
			音楽	○	○
			書道	○	○
			図画	○	
			実業科		○
			※外国語科		○

註　昭和18年度に戦時体制のため、教科・科目変更
※外国語科については、勤労奉仕が行われた

表２　昭和23年度

教科 ＼ 科目・単位数	科目	単位数（○印必修）
国語	国語	9 ○
漢文	漢文	2～6 2～6
社会	一般社会	5 ○
	東洋史	5
	西洋史	5 ｝○
	人文地理	5
	時事問題	5
数学	解析(1)	5
	幾何	5 ｝○
	解析(2)	5
理科	物理	5
	化学	5 ｝○
	生物	5
	地学	5
体育	体育	9 ○
外国語	外国語	5～15
音楽	音楽	6
図画	図画	6
工作	工作	6
書道	書道	6
実業	一般家庭(以下略)	7～14
必修科目単位数計		6科目（38単位）

表3　昭和26年度

教科＼科目・単位数	科目	単位数（○印必修）
国語	国語 (甲)	9 ○
	国語 (乙)	2～6
	漢文	2～6
社会	一般社会	5 ○
	日本史	5
	世界史	5 ○
	人文地理	5
	時事問題	5
数学	一般数学	5
	解析 (1)	5 ○
	幾何	5
	解析 (2)	5
理科	物理	5
	化学	5 ○
	生物	5
	地学	5
保健・体育	体育	9～11 ○
	保健	
外国語	外国語	5～15
芸能	音楽	2～6
	図画	2～6
	書道	2～6
	工作	2～6
家庭	一般家庭(以下略)	7～14
必修科目単位数計		6科目（38単位）

表4　昭和31年度

教科 ＼ 科目・単位数	科目	単位数（○印必修）
国語	国語(甲)	9～10 ○
	国語(乙)	2～6
	漢文	2～6
社会	社会	3～5 ○
	日本史	3～5
	世界史	3～5 } ○
	人文地理	3～5 } ○
数学	数学Ⅰ	6・9 ○
	数学Ⅱ	3
	数学Ⅲ	3・5
	応用数学	3・5
理科	物理	3・5
	化学	3・5 } ○
	生物	3・5 } ○
	地学	3・5
保健・体育	体育	7～9 ○
	保健	2 ○
外国語	第一外国語	3～15
	第二外国語	2～4
芸術	音楽	2・4・6
	美術	2・4・6 } ○
	書道	2・4・6 } ○
	工芸	2・4・6 } ○
家庭	家庭一般(以下略)	4 } ○
	農・工・商・水	○
必修科目単位数計		10～12科目(45単位)

（全日制のみ）三教科から6単位以上

表5　昭和37年度

教科・科目＼学年・学級		I年								II年							III年						
		1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
国語	国語甲	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	国語乙									2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	漢文	2*		2		2*		2*		2*2		2*2					2*2		2*2				
社会	社会																4	4	4	4	4	4	4
	日本史									4	4	4	4	4	4	4							
	世界史	5	5	5	5	5	5	5	5														
	人文地理									3*1			3*1				3△			3△			
数学	数学 I	6	6	6	6	6	6	6	6														
	数学 II									3	3	3	3	3	3								3
	数学 III																3△	3△		3△	3△		
理科	生物	5	5	5	5	5	5	5	5														
	物理									3*1			3*1				5*			5*			3
	化学									5*		3*1					3*1			3*1			
	地学																		3*1			3*1	
保健体育	体育	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2		2	2	2	2	2	2	2
	保健									1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1
外国語	英語	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
美術	音楽	2○		2○		2○				2○		2○				2	2○						
	美術	2○		2○						2○		2○				2	2○		2○				
	書道	2○		2○		2○				2○		2				2	2○		2○				2
家庭	家庭一般	2*		2*		2*		2*		2*2						2*2							
	被服																2*2			2*2			2
	食物																2*2			2*2			
増加科目													2							5			
特教活動		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
計		34								34							34						

表6　昭和38年度

教科 ＼ 学年・科目		1	2 文	2 理	2 一般	3
国語	国語甲		3	3	3	3
	国語乙		3	3	3	2
	漢文		○ 2		○ 2	◑2
	現代国語	3				
	古典乙Ⅰ	2				
社会	社会					4
	日本史		5	5	5	
	世界史					
	人文地理					×3
	地理B	4				
数学	数学Ⅰ	6	3	3	3	
	数学Ⅱ		3	3	3	
	数学Ⅲ					×3
理科	物理				△3	◐5◑3
	化学		3	5	△3	◑3
	生物	4				
	地学	2				◑3
保体	体育	男4女2	2	2	2	2
	保健		1	1	1	1
芸術		2	2	2	2	2
外国語	英語	6	5	5	5	5
家庭	家庭一般	2	○ 2		○ 2	
	被服					◑2
	食物					◑2
増加						5
特教活動		2	2	2	2	2
計		35	34	34	34	34

表7　昭和46年度

類型		文科			理科	
		I	II	III	II	III
国語	現代国語	3	3	2	2	2
	古典甲					
	古典乙I	2	3		3	
	古典乙II			3		3
社会	倫理社会		2		2	
	政治経済			3		2
	日本史			4		4
	世界史		B 2	B 2	B 2	B 2
	地理	B 4				
数学	数学 I	6				
	数学 II		B 5		B 7	
	数学 III			3		5
理科	物理		B 3	B 2	B 3	B 3
	化学		B 2	B 2	B 3	B 2
	生物	4				
	地学	2				
保体健育	体育	男4女2	男4女2	3	2	3
	保健		1	1	1	1
外国語	英語	B 6	B 6	B 6	B 6	B 6
芸術	音楽	2	2	2※	2	
	美術					
	書道					
家庭	家庭一般	女2	女2			
	被服 I			2※		
普通教科計		33	33	33	33	33
特別教育活動		1	1	1	1	1
合計		34	34	34	34	34

※印選択

表9　昭和55年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A	計 A	計 B	計 B
国語	現代国語	3	2	2	2	7	16	7	12
	古典 I乙	2	3			5		5	※2
	古典 II			4	※2	4		※2	
社会	倫理社会		2			2	16	2	14
	政治経済			3	2	3		2	
	日本史			4	3	4		3	
	世界史		2	2	2	4		4	
	地理 B	3				3		3	
数学	数学 I	6				6	14 ※2	6	17
	数学 II B		5			5		5	
	数学 III			3※2	6	3※2		6	
理科	物理 I		3			3	14	3	17
	化学 I		3			3		3	
	生物 I	3				3		3	
	地学 I	2				2		2	
	物理 II			3	3	3		3	
	化学 II								
	生物 II					3		3	
	地学 II								
保健体育	体育	男4 女2	男4 女2	3	3	男11 女7	男13 女9	男11 女7	男13 女9
	保健	1	1			2		2	
芸術	音楽 I	2				2	4	2	4
	美術 I								
	書道 I								
	音楽 II		2			2		2	
	美術 II								
	書道 II								
	音楽 III			※2	※2	※2	※2	※2	※2
	美術 III								
	書道 III								
外国語	英語 B	6	5	6※2	6※2	17 ※2		17 ※2	
家庭	家庭一般	女2	女2	※2	※2	4 ※2		4 ※2	
教科外活動	LHR	1	1	1	1	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	3		3	
合計		34	34	34	34	102		102	

註　※印は選択科目

表8　昭和48年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A	計 A	計 B	計 B
国語	現代国語	3	2	2	2	7	16	7	12
	古典 I乙	2	3			5		5	※2
	古典 II			4	※2	4		※2	
社会	倫理社会		2			2	16	2	15
	政治経済			3	3	3		3	
	日本史			4	3	4		3	
	世界史		2	2	2	4		4	
	地理 B	3				3		3	
数学	数学 I	6				6	14 ※2	6	17
	数学 II B		5			5		5	
	数学 III			3※2	6	3※2		6	
理科	物理 I		3			3	14	3	17
	化学 I		3			3		3	
	生物 I	3				3		3	
	地学 I	2				2		2	
	物理 II			3	3	3		3	
	化学 II								
	生物 II					3		3	
	地学 II								
保健体育	体育	男4 女2	男4 女2	3	3	男11 女7	男13 女9	男11 女7	男13 女9
	保健	1	1			2		2	
芸術	音楽 I	2				2	4	2	4
	美術 I								
	書道 I								
	音楽 II		2			2		2	
	美術 II								
	書道 II								
	音楽 III			※2	※2	※2	※2	※2	※2
	美術 III								
	書道 III								
外国語	英語 B	6	5	6	5	17		16	
家庭	家庭一般	女2	女2	※2	※2	4 ※2		4 ※2	
教科外活動	ホーム・ルーム	1	1	1	1	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	3		3	
合計		34	34	34	34	102		102	

註　※印は選択科目

表10　昭和56年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	3年 C	計 A	計 A	計 B	計 B	計 C	計 C
国語	現代国語	3	2	2	2	2	7	16	7	12	7	12
	古典Ⅰ乙	2	3				5		5	※2	5	※2
	古典 Ⅱ			4	※2	※2	4		※2		※2	
社会	倫理社会		2				2	16	2	14	2	16
	政治経済			3	2	3	3		2		3	
	日本史			4	3	4	4		3		4	
	世界史		2	2	2	2	4		4		4	
	地理 B	3					3		3		3	
数学	数学 Ⅰ	6					6	14	6	17	6	15
	数学ⅡB		5				5	※2	5		5	※2
	数学 Ⅲ			3※2	6	4※2	3※2		6		4※2	
理科	物理 Ⅰ		3				3	14	3	17	3	17
	化学 Ⅰ		3				3		3		3	
	生物 Ⅰ	3					3		3		3	
	地学 Ⅰ	2					2		2		2	
	物理 Ⅱ			3	3・3	3・3	3		3・3		3・3	
	化学 Ⅱ											
	生物 Ⅱ											
	地学 Ⅱ											
保健体育	体育	男4 女2	男4 女2	3	3	3	男11 女7	男13 女9	男11 女7	男13 女9	男11 女7	男13 女9
	保健	1	1				2		2		2	
芸術	音楽 Ⅰ	2					2	4	2	4	2	4
	美術 Ⅰ							※2		※2		※2
	書道 Ⅰ											
	音楽 Ⅱ		2				2		2		2	
	美術 Ⅱ											
	書道 Ⅱ											
	音楽 Ⅲ			※2	※2	※2	※2		※2		※2	
	美術 Ⅲ											
	書道 Ⅲ											
外国語	英語 B	6	5	6※2	6※2	6※2	17※2		17※2		17※2	
家庭	家庭一般	女2	女2				女4	女4	女4	女4	女4	女4
	食物 Ⅰ			※2	※2	※2	※2	※2	※2	※2	※2	※2
教科外活動	LHR	1	1	1	1	1	3	6	3	6	3	6
	クラブ	1	1	1	1	1	3		3		3	
合計		34	34	34	34	34	102		102		102	

註　A・B・Cはコース名、※印は選択科目を示す。

表11　昭和57年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	国語 I	5				5		5	
	国語 II								
	国語表現								
	現代文		3	3	2	6		5	
	古典		2	3	※2	5	16	2～4	12～14
社会	現代社会	4				4		4	
	日本史			○	○	5～0		4～0	
	世界史		4	5		4		4	
	地理			○ +	○ 4	5～0		4～0	
	倫理			○	2	3～0		2～0	
	政治・経済			○ 3	2	3～0	16	2～0	12
数学	数学 I	5				5		5	
	数学 II			○		3～0			
	代数・幾何		3			3		3	
	基礎解析		3	3		3		3	
	微分・積分				3			3	
	確率・統計			○	3	3～0	14	3	17
理科	理科 I	4				4		4	
	理科 II								
	物理		2	○	○ 4	5～2		6～2	
	化学		2	○ 3	○ +	5～2		6～2	
	生物			○	○ 4	3～0		4～0	
	地学			○	○	3～0	11	4～0	16
保健体育	体育	男4女2	男4女2	3	3	男11女7	男 13	男11女7	男 13
	保健	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽 I	○	○			2～0		2～0	
	音楽 II					2～0		2～0	
	音楽 III			○	○	2～0		2～0	
	美術 I	○ 2				2～0		2～0	
	美術 II		○ 2			2～0		2～0	
	美術 III			○ ※2	○ ※2	2～0		2～0	
	工芸 I								
	工芸 II								
	工芸 III								
	書道 I	○				2～0		2～0	
	書道 II		○			2～0		2～0	
	書道 III			○	○	2～0	4～6	2～0	4～6
外国語	英語 I	6				6		6	
	英語 II		5			5		5	
	英語 II A								
	英語 II B			3	3	3		3	
	英語 II C			3	3	3	17	3	17
家庭	家庭一般	女 2	女 2			女 4		女 4	
	食物			女※2	女※2	2～0	女4～6	2～0	女4～6
自由研究	（各講座）			※2	※2	2～0	0～2	2～0	0～2
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1		3		3
	クラブ活動	1	1	1	1		3		3
計		33	33	33	33		99		99

註　A・Bはそれぞれ文科・理科類型を、※印は選択科目を示す。

表12　昭和59年度３年次自由選択科目「自由研究」（２単位）開講予定一覧

講座No.	科目	講座名	定員	個人負担費用	学習又は活動内容・指導法
01	古典	古典講読	20	800	親鸞滅後、弟子の唯円が師の言葉を編んだ「歎異抄」を１年間をかけて精読する。文庫本で40頁程度。宗教、思想哲学に興味のある人の参加を望む。
02	現代文	近代における自我と愛	20	未	日本近代における自我と愛の関連について文学作品を通して考えてみる。但し、単に日本に、又文学にとどまらず、西洋哲学史、倫理思想史の中で自我とは何か、愛とは何かを考えたりする。受講者はこの種の問題を自己のそれとして考えている者であることを条件としたい。それ故「教える」という形式もとらない。
03	世界史	現代史研究	45		20世紀以降の歴史について、まず概括的な講義を行い、その後各自で20世紀の歴史の中で適当なテーマを見つけ出して自由研究を行う。その結果を最終的に原稿用紙10～20枚程度のレポートにまとめて卒業レポートとする。
04	政経	人権と現代	40	1,000	現在日本国憲法で保障されている人権が、歴史的にどのように認められるに至ったか、その過程を学習すると同時に、国際人権規約、難民の地位に関する条約などのような世界的宣言にも言及。さらに現在問題になっている種々の権利についても触れる。なお可能な限り英語の原典を使いたい。
05	物理	物理研究　I 〃　II 〃　III	120	500	将来、自然科学を専攻しようとする人のための、物理の基礎講座である。原則として第３学年で物理を選択した生徒を対象としている。内容は、物理演習、物理実験、物理副読本の輪読等である。
06	化学	化学課題研究	30	不定（論文作成費）	グループによる課題研究、及び授業でとり扱えなかった内容の研究と受験問題演習。課題研究は４～６人のチームで無機、有機両分野から自由にテーマを選び、文献調査、実験計画、実験、論文作成まで一貫した研究活動をやってもらう。２学期後半からは主として問題演習。
07	化学	有機化学	30		大学の理工系に進学したい生徒を対象に、化学IIで学習する有機化学の事実と理論を更に深く学び、演習を行い、応用力を養う。
08	生物	生物研究	20	特殊な場合を除き0	通常の授業形態では実施困難な継続的実験、調査を行う。当初は研究法やテーマの決め方等についての一般的な学習をし、その後はグループ、又は個人ごとにテーマを決め、計画・実施・まとめまでを年間を通して行う。
09	英語	速読演習	20	1,000	英文をある程度の速さで、その内容をとらえることを主眼におく。「比較的短い時間内に内容をつかむ」、即ち直読直解の力を養成することを目的とするが、時事英語、英字新聞、テープ教材等利用しながら演習形式で行う。必ずしも受験用教材を使用するとは限らない。積極的に英文を読もうとする意欲のある者が好ましい。
10	英語	英作文演習	20	1,000	ある程度まとまった日本文を英語に直す演習を、討論や添削指導もまじえて行う。英作文に関心のある人と一緒に日英語の表現の違いに着目しながら、いろいろ勉強したい。

表13　昭和61年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	国語 I	5				5		5	
	国語 II								
	国語表現								
	現代文		3	3	2	6		5	
	古典		2	3	※2	5	16	4～2	14～12
社会	現代社会	4				4		4	
	日本史			○	○	5～0		4～0	
	世界史		4	5		4		4	
	地理			○ ＋	○ 4	5～0		4～0	
	倫理			○	2	3～0		2～0	
	政治・経済			3 ○	2	3～0	16	2～0	12
数学	数学 I	5				5		5	
	数学 II			○		3～0			
	代数・幾何		3			3		3	
	基礎解析		3	3		3		3	
	微分・積分				3			3	
	確率・統計			○	3	3～0	14	3	17
理科	理科 I	4				4		4	
	理科 II								
	物理		2	○	○ 4	5～2		6～2	
	化学		2	○ 3	○ ＋	5～2		6～2	
	生物			○	○ 4	3～0		4～0	
	地学			○	○	3～0	11	4～0	16
保健体育	体育	男4女2	男4女2	3	3	男11女7	男 13	男11女7	男 13
	保健	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽 I	○	○			2～0		2～0	
	音楽 II					2～0		2～0	
	音楽 III			○	○	2～0		2～0	
	美術 I	○ 2				2～0		2～0	
	美術 II		○ 2			2～0		2～0	
	美術 III			○ ※2	○ ※2	2～0		2～0	
	工芸 I								
	工芸 II								
	工芸 III								
	書道 I	○				2～0		2～0	
	書道 II		○			2～0		2～0	
	書道 III			○	○	2～0	6～4	2～0	6～4
外国語	英語 I	6				6		6	
	英語 II		5			5		5	
	英語 II A								
	英語 II B			4	4	4		4	
	英語 II C			2	2	2	17	2	17
家庭	家庭一般	女 2	女 2			女 4		女 4	
	食物			女※2	女※2	2～0	女6～4	2～0	女6～4
自由研究	（各講座）			※2	※2	2～0	2～0	2～0	2～0
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1		3		3
	クラブ活動	1	1	1	1		3		3
計		33	33	33	33		99		99

註　A・Bはそれぞれ文科・理科類型を、※印は選択科目を示す。

表14　昭和62年度

教科	科目	標準単位数	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	国語 I	4	5				5		5	
	国語 II	4								
	国語表現	2								
	現代文	3		3	3	2	6		5	
	古典	4		2	3	※2	5	16	4～2	14～12
社会	現代社会	4	4				4		4	
	日本史	4			○	○	5～0		4～0	
	世界史	4		4	○ 5	○ 4	4		4	
	地理	4			○ +	○	5～0		4～0	
	倫理	2			○	2	3～0		2～0	
	政治・経済	2			○ 3	2	3～0	16	2～0	12
数学	数学 I	4	5				5		5	
	数学 II	3			○		3～0			
	代数・幾何	3		3			3		3	
	基礎解析	3		3	3		3		3	
	微分・積分	3				3			3	
	確率・統計	3			○	3	3～0	14	3	17
理科	理科 I	4	4				4		4	
	理科 II	2								
	物理	4		2	○	○	5～2		6～2	
	化学	4		2	○	○ 4	5～2		6～2	
	生物	4			○ 3	○ +	3～0		4～0	
	地学	4			○	○ 4	3～0	11	4～0	16
保健体育	体育	7－9	男4女2	男4女2	3	3	男11女7	男 13	男11女7	男 13
	保健	2	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽 I	2	○	○			2～0		2～0	
	音楽 II	2					2～0		2～0	
	音楽 III	2			○	○	2～0		2～0	
	美術 I	2	○ 2				2～0		2～0	
	美術 II	2		○ 2			2～0		2～0	
	美術 III	2			○ ※2	○ ※2	2～0		2～0	
	工芸 I	2	○							
	工芸 II	2								
	工芸 III	2								
	書道 I	2	○				2～0		2～0	
	書道 II	2		○			2～0		2～0	
	書道 III	2			○	○	2～0	6～4	2～0	6～4
外国語	英語 I	4	6				6		6	
	英語 II	5		5			5		5	
	英語 II A	3								
	英語 II B	3			4	4	4		4	
	英語 II C	3			2	2	2	17	2	17
家庭	家庭一般	4	女 2	女 2			女 4		女 4	
	食物				女※2	女※2	2～0	女6～4	2～0	女6～4
自由研究	（各講座）				※2	※2	2～0	2～0	2～0	2～0
特別活動	ホームルーム		1	1	1	1	3		3	
	クラブ活動		1	1	1	1	3		3	
計			33	33	33	33	99		99	

註　A・Bはそれぞれ文科、理科類型を、※印は選択科目を示す。

表15　平成元年度

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	国語 I	5				5		5	
	現代文		2	3	2	5		4	
	古典		3	3		8～6	18～16	5～3	14～12
社会	現代社会	4				4		4	
	日本史					6～0		4～0	
	世界史		4	6		4		4	
	地理				4	6～0		4～0	
	倫理				2	2～0		2～0	
	政治・経済			2	2	2～0	18～16	2～0	12
数学	数学 I	5				5		5	
	数学 II				※	5～0			
	代数・幾何		3		2	3		3	
	基礎解析		3	3		3		3	
	微分・積分				3			3	
	確率・統計				3	3～0	16～14	3	19～17
理科	理科 I	4				4		4	
	物理		2		4	7～2		8～2	
	化学		2	3		7～2		8～2	
	生物					5～0		6～0	
	地学				4	5～0	13～11	6～0	18～16
保健体育	体育	男4女2	男4女2	3	3	男11女7	男 13	男11女7	男 13
	保健	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽 I			※		2～0		2～0	
	音楽 II			2		2～0		2～0	
	音楽 III					2～0			
	美術 I	2				2～0		2～0	
	美術 II		2			2～0		2～0	
	美術 III					2～0			
	工芸 I					2～0		2～0	
	工芸 II					2～0		2～0	
	工芸 III					2～0			
	書道 I					2～0		2～0	
	書道 II					2～0		2～0	
	書道 III					2～0	6～4		4
外国語	英語 I	6				6		6	
	英語 II		3	2	2	5		5	
	英語 II B			4	4	6～4		4	
	英語 II C		2			2	19～17	2	17
家庭	家庭一般	女 2	女 2			女 4		女 4	
	食物			女		2～0	女6～4		4
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1		3		3
	クラブ活動	1	1	1	1		3		3
計		33	33	33	33	99		99	

註1　A・Bはそれぞれ文科・理科類型を、※印は選択科目を示す。
　2　男子の体育実技には格技（柔道・剣道のいずれかを選択必修）が、ふくまれます。

表16　選択科目講座内容

文系選択科目	
古典	「漢文を読む」 ①『史記』、『十八史略』を読んで、広大な中国大陸を舞台に織り成される人間模様や権謀術数の限りを尽くす天下取り、根強く生きる人間の息づかいに接する。 ②漢文の読解力を高め、知識を深める。
倫理	理系の倫理と同じ内容で、先哲によって展開された思索のあとを具体的にたどる。 1学期は主として現代人の精神生活を今もって規定している古代ギリシャ、インド、中国思想とユダヤ、キリスト、イスラム教など「思想の源流」について。2学期以降は「2つのR」に始まる西洋近代の思想とその発展としての現代の思想（社会主義、実存主義、プラグマティズム、現代ヒューマニズムなど）について。更に、そうした世界の思想の流れを背景に、日本の思想的伝統と明治から現代に至る思想状況について学習する。
数学II	国公立2次試験あるいは私立大学の入試で数学を必要とする者のための講座である。 基礎解析と代数・幾何の演習を行う。 なお、希望者が多い場合は試験を行う。
物理	選択必修の3単位の進行と併せ、充分に説明し切れなかった事項、実験、演習を行う。 特に、普遍的な法則から具体的な現象を理解し説明する能力を養い、物理的自然観を持つことに主眼をおく。
化学	時間数の関係で授業（3単位）で扱えない所の補充を行い、センター試験レベルに対応できるようにする。
生物	選択必修生物の時間内だけでは不足しがちな実験実習の補充と受験対策を中心とする。
地学	選択必修（3単位）で不足している内容（主に地球の大気、地球の歴史）を講義、演習等で補う。
音楽III	1学期：各自が自由に選んだ歌曲を練習し発表する。 2学期：J．S．バッハの「マタイ受難曲」鑑賞を中心に、中世ルネッサンス音楽の合唱作品に取り組む。 3学期：上記の続き。 （希望者には楽典問題の添削をしても良い。）
美術III 工芸III	美術・工芸合同で、授業内容を選択することで進める。次の分野から2つを選択し個人単位で作品を制作する。 ①絵画（油絵、水彩、デッサン）　美術 ②版画（木版、金属版）　美術 ③デザイン（基礎デザイン、ポスター）　美術工芸 ④工芸（陶芸、木工、鎌倉彫り）　工芸
書道III	篆・隷・楷・行・草書・仮名より好きなものを選択し、古典の臨書・創作を半紙、小画仙紙半切にて制作する。
英語IIB	長文読解、具体的な内容は未定だが、物語、エッセイ、伝記等の中から担当者が決定する。 真に英語を熱心に勉強しようとする意欲のある生徒を望む。（他に選ぶものがないので仕方なしに英語を選択するような生徒はお断わり。）
食物	昼休みに続いている時間は調理実習を毎週行う。あとの1時間は、その時間内でできる実習や食品加工的なものをとりあげたりする。今年は通年で個人研究を進めているので何時間か当てている。調理実習は、だいたい献立調理である。評価はペーパーテスト、実技テスト、レポートにより行う。費用は材料費1回平均300～350円。

理系選択科目	
古典	「古文を読む」 ①我国の代表的古典である『枕草子』、『徒然草』、『源氏物語』、『和歌』などを通して「あわれ」や「をかし」の世界に接する。 ②古文の読解力を高め、知識を深める。
数学II	理学部、工学部、医学部等を受ける者のために微分・積分の演習を行う。 希望者が多い場合は試験を実施する。
物理	問題演習を中心に、物理的思考力の養成に努める。
化学	問題演習を通じてより理解を深める。（2年次履修内容も含む）国公立2次試験、私立理系レベルに対応できる力を養成する。
生物	選択必修生物の授業時間内だけでは不足しがちな、実験・実習の補充、各自の個別テーマによる自由研究を、主に行う。
地学	地学の全範囲について演習を中心に授業を展開する。内容はセンター試験レベル以上のものである。

2　全日制衛生看護科

昭和四十一年度（表Ⅰ）

衛生看護科の教育課程は、学校教育法施行規則別表第三に規定する「その他特に必要な教科」に位置付け、職業教育を主とする学科として、普通科目の必修単位数を編成し同時に准看護婦試験の受験資格を得るため、「保健婦・助産婦・看護婦学校養成所指定規則第八条別表四」に定める教育内容に合致するよう専門科目をも編成する必要があった。衛生看護科が初めて高等学校に誕生したのは昭和三十九年度のことで、神奈川県の努力に敬服しながら、それを参考に最初の教育課程を決定した。

昭和四十二年度（表Ⅱ）

本校衛生看護科発足の昭和四十一年に文部省が「高等学校衛生看護科における専門教育の教科・科目参考例」を作成し、これに準拠するように指示されたので、第二回生からは、看護の内容を四科目に整理した教育課程に改訂した。

昭和四十八年度（表Ⅲ）

その後教育課程審議会の答申に基づき、参考例の実施による意見などを資料として、四十五年初めて学習指導要領の第二章第十三節に看護が位置付けられたので、四十八年四月、第八回生からこれが実施された。クラブの増加分と専門教科を中心にして、普通科の要望を加味し、この結果、総履修単位が従来の一〇三単位から一〇二単位に減じた。

昭和五十年度（表Ⅳ）

従来芸術については音楽が必修科目であったが、その必修科目を音楽、美術、書道三教科からの選択とした。

昭和五十七年度（表Ⅴ）

五十三年に再び新指導要領が告示され、五十七年度入学生から新教育課程になった。その編成にあたり特に配慮した点は、次のとおりである。

(1)　専門教科の履修単位を最低三九単位とし、普通教科とのバランスを保つ。総履修単位は従来と変わらず一〇二単位とする。

(2)　保健は基礎医学、成人看護、母子看護で代替履修をする。

(3)　家庭一単位を基礎医学、母子看護で代替履修をする。

表Ⅰ　昭和41年度

	教科	科目		実施単位	Ⅰ年	Ⅱ年	Ⅲ年
普通教科	国語	現代国語		7	3	2	2
		古典甲		2	2		
	社会	倫理社会		2		2	
		政治経済		2			2
		世界史A		2			2
		地理A		3	3		
	数学	数学Ⅰ		5	5		
		数学ⅡA		2		2	
	理科	物理A		3			3
		化学A		3		3	
		生物		3	3		
	保健体育	体育		7	2	2	3
		保健		2		1	1
	芸術	書道		2	1	1	
	外国語	英語A		9	3	3	3
	家庭	家庭一般		4	2	2	
	普通科目計			58	24	18	16
専門教科	看護	看護一般	解剖生理	2	2		
			細菌及消毒法	1	1		
			個人衛生	1	1		
			食餌療法	1		1	
			薬理概論	1	1		
			疾病と健康の社会的考察 関係法規	1			1
		看護原理Ⅰ	看護史及看護倫理	1	1		
			看護原理及実際	3	3		
		看護原理Ⅱ	内科疾患及看護法	3		3	
			外科〃〃	2		2	
			小児科〃〃	2		2	
			産婦人科〃〃	1			1
			精神科〃〃	1			1
			眼歯耳鼻咽喉科〃 皮膚泌尿器科〃	1			1
			理学療法	1			1
		実習	看護実習	20		7	13
	専門科目計			42	9	15	18
教科科目計				100	33	33	34
特別教育活動				6	2	2	2
計				106	35	35	36

表II　昭和42年度

学科		衛生看護科		
類型		I	II	III
国語	現代国語	3	2	2
	古典甲	2		
	古典乙I			
	古典乙II			
社会	倫理社会		2	
	政治経済			2
	日本史			
	世界史			A 2
	地理	A 3		
数学	数学I	5		
	数学II		A 2	
	数学III			
理科	物理			A 3
	化学		A 3	
	生物	3		
	地学			
保体健育	体育	2	2	3
	保健		1	1
外国語	英語	A 3	A 3	A 3
芸術	音楽	1	1	
	美術			
	書道			

学科		衛生看護科		
類型		I	II	III
家庭	家庭一般	2	2	
	被服I			
普通教科計		24	18	16
看護一般	看護原理	1		
	解剖生理	2		
	病原微生物	1		
	薬理	1		
	衛生		1	
	看護基礎技術	1		
	食餌療法	}	1	
	看護関係法規			
成人看護	内科系疾患と看護		3	1
	外科系疾患と看護		3	2
母子看護	母性看護			1
	小児看護		1	
看護実習	基礎看護実習	3	2	
	成人看護実習		5	8
	母子看護実習			5
専門教科計		9	16	17
特別教育活動		1	1	1
合計		34	35	34

表III　昭和48年度

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典I甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学I	3	2	2	7	
理科	物理I			2	2	8
	化学I		3		3	
	生物I	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽I	2			2	2
	美術I					
	書道I					
外国語	英語A	3	3	3	9	
家庭	家庭一般	2	2		4	
普通教科計		22	20	15	57	
看護	看護概説	2			2	
	看護基礎医学	4		1	5	
	成人看護		4	3	7	
	母子看護		1	1	2	
	看護実習	4	7	12	23	
専門教科計		10	12	17	39	
教科外活動	LHR	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34	102	

表IV　昭和50年度

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	現代国語	3	2	2	7	9
	古典I甲	1	1		2	
社会	倫理社会		2		2	10
	政治経済			2	2	
	日本史		3		3	
	地理B	3			3	
数学	数学I	3	2	2	7	
理科	物理I			2	2	8
	化学I		3		3	
	生物I	3			3	
保健体育	体育	2	2	3	7	8
	保健			1	1	
芸術	音楽I 美術I 書道I	2			2	
外国語	英語A	3	3	3	9	
家庭	家庭一般	2	2		4	
普通教科計		22	20	15	57	
看護	看護概説	2			2	
	看護基礎医学	4		1	5	
	成人看護		4	3	7	
	母子看護		1	1	2	
	看護実習	4	7	12	23	
専門教科計		10	12	17	39	
教科外活動	LHR	1	1	1	3	6
	クラブ	1	1	1	3	
合計		34	34	34	102	

表Ⅴ　昭和57年度

教科	科目	1年	2年	3年	計	
国語	国語Ⅰ	4			4	
	国語Ⅱ		3	2	5	
	国語表現					
	現代文					
	古典					9
社会	現代社会	4			4	
	日本史		3		3	
	世界史					
	地理			3	3	
	倫理					
	政治・経済					10
数学	数学Ⅰ	3	2		5	
	数学Ⅱ			2	2	
	代数・幾何					
	基礎解析					
	微分・積分					
	確率・統計					7
理科	理科Ⅰ	2	2		4	
	理科Ⅱ					
	物理					
	化学			3	3	
	生物		2		2	
	地学					9
保健体育	体育	2	3	2	7	
	保健					7
芸術	音楽Ⅰ	○			2～0	
	音楽Ⅱ					
	音楽Ⅲ					
	美術Ⅰ	○ 2			2～0	
	美術Ⅱ					
	美術Ⅲ					
	工芸Ⅰ					
	工芸Ⅱ					
	工芸Ⅲ					
	書道Ⅰ	○			2～0	
	書道Ⅱ					
	書道Ⅲ					2
外国語	英語Ⅰ	4			4	
	英語Ⅱ		3	3	6	
	英語ⅡA					
	英語ⅡB					
	英語ⅡC					10
家庭	家庭一般		1	2	3	3
看護	看護基礎医学	5			5	
	基礎看護	6	2		8	
	成人看護		8	4	12	
	母子看護			4	4	
	看護臨床実習		3	7	10	39
特別活動	ホームルーム	1	1	1		3
	クラブ活動	1	1	1		3
計		34	34	34		102

3 通信制教育課程

昭和二十三年に、国語甲のみを実施科目として高等学校の通信教育が発足した。翌二十四年に人文地理・解析Ⅰ・地学の三科目、二十五年に漢文・一般社会・解析Ⅱ・幾何の五科目というように逐次増加した。

昭和三十年度に二六科目、単位数一七九の実施が認められて、通信教育のみで高等学校の卒業資格が得られるようになった。

当時は科目単位の履修が中心で、生徒は好きな科目を都合のよいときに学習して、随時学習結果をレポートとして提出した。面接指導と試験は、生徒が登校したときに随時実施した。

昭和29年度（通信教育部設置当時）

教科	科目	標準単位数	本校
国語	国語甲1	9	3
	国語甲2		3
	国語甲3		3
	漢文Ⅰ	2～6	2
社会	一般社会	5	5
	日本史	5	5
	世界史	5	5
	人文地理	5	5
数学	一般数学	5	5
	解析Ⅰ	5	5
	幾何	5	5
理科	生物	5	5
	地学	5	5
保体	体育	9～11	9
	保健	2	2
芸術	書道Ⅰ	2～6	2
	書道Ⅱ	2～6	2
外国語	英語1	5～15	5
家庭	一般家庭	7～14	7
商業	簿記Ⅰ		2

昭和31年度改定（昭和32年度より昭和37年度まで実施）

普通科Aコース（AからHまでの8コースを設置）

教科	科目	標準単位数	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	計	備考
国語	国語(甲)	9～10	4※	3※	3※			10	共通
	古典(乙)	2～6				4		4	4または
	漢文	2～6						(2)	6単位
社会	社会	3～5					5※	5	共通
	日本史	3～5				5		5	共通
	世界史	3～5			5			5	5または
	人文地理	3～5						(5)	10単位
数学	数学Ⅰ	6～9	5※	4※				9	共通
	数学Ⅱ	3			3			3	0か3か
	数学Ⅲ	3～5				5		5	8単位
理科	物理	3～5					5	5	0か5単位
	化学	3～5			5			5	共通
	生物	3～5		5				5	共通
保体	体育	7～9	2※	2※	2※	2※	1※	9	共通
	保健	2			2※			2	共通
芸	書道	2.4.6					4※	4	共通
外	英語A	3～15				5		5	5か10単位
職業	家庭一般	4						(4)	F.Gコースのみ
	食物他	本校4						(4)	Fコースのみ
	農業一般	本校4						(4)	Hコースのみ
	農業経営	本校4						(4)	Hコースのみ
	商業簿記	本校2・4						(2・4)	C.E.F.H
	選択科目	本校5					5	5	Dコース以外共通
	合計		11	14	20	21	20	86	

備考

イ．※印は必修科目。

ロ．標準単位中の「本校」とは、本校で実施した単位数を示す。

ハ．Gコースは、高等看護学校進学用に編成。Hコースは、農業科目を取り入れ。

ニ．コースは柔軟性に富み、コースの変更、修業年限を4年間に短縮あるいは6年以上に延長すること等は自由。

昭和38年度改定

普通科（4年コースと5年コースを設置）

教科	科目	標準単位数	1年次	2年次	3年次	4年次	計	合計
国語	現代国語	7	3※	2※	2※		7	15
	古典乙Ⅰ	2		3	2		5	
	古典乙Ⅱ	3				3	3	
社会	倫理・社会	2			2		2	16
	政治・経済	2				3	3	
	日本史	3				3	3	
	世界史B	3			4		4	
	地理B	3	4				4	
数学	数学Ⅰ	6	3※	3※			6	10
	数学ⅡA	4			2	2	4	
理科	物理A	3				3	3	12
	化学A	3			3		3	
	生物	3		4			4	
	地学		2				2	
保体	体育	7～9	3※	2※	2※	2※	9	11
	保健	2				2※	2	
芸術	音楽Ⅰ	2			} 2※	} 2※	4	4
	美術Ⅰ	2						
	書道Ⅰ	2						
外	英語A	9	4	4	4		12	12
職業	家庭一般	4		(女4※)			6	6
	保育	本校2						
	家庭経営	本校2						
	農業一般	本校4		4		2		
	商業一般	本校4						
	商業簿記Ⅰ	本校2						
	商業簿記Ⅱ	本校2						
	合計		19	22	23	22	86	86
	特別活動	50	13	13	12	12	50	50

備考

イ．※印は必修科目。この他、古典乙Ⅰ・古典乙Ⅱから1科目、日本史・世界史B・地理Bから2科目、物理A・化学A・生物・地学から2科目。

ロ．芸術は、3年次で音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰの中から1科目を選択し、4年次で残りから1科目を選択する。

ハ．職業科目の中から、女子は家庭一般を必修して他に2単位、男子は家庭一般を除いて6単位を履修する。

ニ．5年コースは、1年次に13単位、以降18・18・22・15単位の順に履修する。

昭和48年度改定

（A）普通科

教科	科目	標準単位数	1年次	2年次	3年次 A	3年次 B	4年次 A	4年次 B	合計
国語	現代国語	7	4※	3※	3				10
	古典Ⅰ甲	2			4				4
	古典Ⅱ	3					3		3
社会	倫理・社会	2			2※				2
	政治・経済	2					3※		3
	日本史	3			4				4
	世界史	3		4					4
	地理B	3	4						4
数学	数学Ⅰ	6	4※	4※					8
	数学ⅡA	4				2		2	4 ---- B
理科	物理Ⅰ	3						4	4 ----
	化学Ⅰ	3			4				4
	生物Ⅰ	3	4						4
保体	体育	7～9	2※	2※	2※		2※		8
	保健	2		2※					2
芸術	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ	2 2 2			} 2※		} 2※		4
外	英語A	9	3	3		3	A		6 9 ----
家庭	家庭一般	4		女4※					4女
	被服	2～6			女2		女4		6 ----
	食物	2～6			女2		女3		5 ----
農	草花園芸	4～12					男4		4 ----
商業	商業一般	3～5		男4					4男
	商業法規	2～5					男3		3 ----
	簿記会計Ⅰ	3～5			男4				4 ----
	合計		21	22	21	22	21	20	85
	特別活動	50	13	13	12		12		50

備考

イ．※印は必修科目。この他、古典Ⅰ甲・古典Ⅱから1科目、日本史・世界史・地理Bから2科目、物理・化学・生物から2科目。

ロ．3年次でA（被服・食物選択または草花園芸・商業法規・簿記会計Ⅰ選択）コースとB（数学ⅡA・物理Ⅰ・英語A 3単位選択）コースに分かれる。

ハ．芸術は、3年次で音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰの中から1科目を選択し、4年次で残りから1科目を選択する。

（B）被服科（技能連携コース）

教科	科目	標準単位数	1年次	2年次	3年次	4年次	計	合計
国語	現代国語	7	3	2	2		7	
	古典Ⅰ甲	2				2	2	9
社会	倫理・社会	2			2		2	
	政治・経済	2				2	2	10
	日本史	3		3			3	
	地理B	3	3				3	
数	数学Ⅰ	6	3	3			6	6
理科	化学Ⅰ	3				3	3	
	生物Ⅰ	3			3		3	6
保体	体育	7～9	2	2	2	2	8	
	保健	2			2		2	10
芸	美術Ⅰ	2		2			2	2
外	英語A	9	3				3	3
家庭	家庭一般	4	4				4	
	被服材料	2～6		2			2	
	被服管理	3～4				2	2	
	服飾デザイン	3～4		2	2	2	6	42
	被服制作	8～20	4	4	7	7	22	
	手芸	3～6		2	2	2	6	
	合計		22	22	22	22	88	88
各教科以外の教育活動			13以上	13以上	13以上	13以上	52	52

○　被服科の技能連携は、昭和49年4月に植草学園、昭和51年4月に不二家政専門学院との間で開始された。植草学園では昭和55年4月、不二家政専門学院では昭和53年4月からの生徒募集より連携が停止された。

昭和57年度改定

普通科

教科	科目	標準単位数	1組	2組	3組 A	3組 B	4組 A	4組 B	合計
国語	国語Ⅰ	4	4※						4
	国語Ⅱ	4		4					4
	国語表現	2			2				2
	古典	4					3		3
社会	現代社会	4	4※						4
	日本史	4					4		4
	世界史	4			4				4
	地理	3		3					3
数学	数学Ⅰ	4	4※	3※					B 7
	数学Ⅱ	3				3		2	5
理科	理科Ⅰ	4	3※	3※	2※				8
	物理	4					4		
	化学	4							4
	生物	4							
保体	体育	7～9	2※	2※	2※		2※		8
	保健	2			2※				2
芸術	音楽Ⅰ	2			Ⅰ2※		Ⅱ2※		4
	音楽Ⅱ	2							
	美術Ⅰ	2							
	美術Ⅱ	2							
	書道Ⅰ	2							
	書道Ⅱ	2							
外語	英語Ⅰ	4	3	2					4
	英語Ⅱ	5				2		3	5
家庭	家庭一般	4		女4※					A 4
	被服	2～12			2		3		5
	食物	2～12			3		2		5
商業	商業法規	3～4		男4					A 4
	簿記会計Ⅰ	3～4			5				5
	簿記会計Ⅱ	3～6					5		5
	合計		20	21	19		20		80
	特別活動	40以上	10	10	10		10		40

備考

イ．※印は必修科目。家庭一般は女子のみ必修。

ロ．3組でA（被服・食物選択または簿記会計Ⅰ・Ⅱ選択）コースとB（数学Ⅱ・英語Ⅱ選択）に分かれる。被服、食物は女子のみが選択する。

ハ．理科は、4組で物理・化学・生物の中から1科目を選択する。

ニ．芸術は、3組で音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰの中から1科目を選択し、4組でそのⅡ1科目選択する。

(1) 平成元年度よりA、Bコースを廃止し、数学Ⅱ・英語Ⅱ・被服・食物・簿記会計Ⅰ・簿記会計Ⅱの中から3組で2科目、4組で残りから2科目を選択して履修することとした。

(2) 平成3年度より2組男子の履修科目の商業法規を商業経済Ⅰに、3・4組の選択科目の簿記会計Ⅱを商業法規に改定した。

二　進　路

創立五十周年を機会に、進路関係の資料を『進学』を中心にまとめた。出典は、学校基本調査に基づく県教委調査、本校進路指導部編集の『進路のしおり（資料編）』、創立三十周年記念誌、創立四十周年記念誌である。『就職』は、この一〇年間で九名、昭和六十二年度以降なかったので、就職者数のみにとどめた。

進路指導の観点から五〇年を振り返るとほぼ一〇年ごとに区切られそうである。

創立（'41（昭十六））から'61（昭三十六）まで

この間の具体的な資料はなく、

戦中戦後の混乱した時期は、経済的にも家庭の貧しいものが多く、進学どころではなかった。進学者は、少なく、地方には、まだ工場が少なかったから、大多数が東京方面に就職したのである。

との三十周年記念誌の記述から推測するしかない。

'62（昭三十七）から'70（昭四十五）まで

'63年版の『進路指導のしおり』から保存されており'62年三月卒業生から具体的状況が分かる。校名も現在の千葉東と変わり（'61）、戦後のベビーブーム世代が高校生となり、京葉工業地帯の発展、団地造成による人口増等経済発展による社会情勢の変化により、男子生徒が次第に増加し、男女比も現在の三対一となり、男子は、ほぼ一〇〇パーセント進学を希望し、女子も上級学校へ行って特技を身につけてから就職する傾向が強まっていった時期であることが、短大合格者の増加、就職者の減少から分かる。

'71（昭四十六）から'77（昭五十二）まで

就職は、'71（昭四十六）に一二となり以後'72を除いて一桁台、各種専門学校も、'73（昭四十八）には一桁台となり、一方'77（昭五十二）には、国公立大は一〇〇、私立大は四六九と大きく増加し、進学校として発展の道を確実に歩んできたことが分かる。

'78（昭五十三）から現在（'90（平二））まで

'79（昭五十四）年度入試（'78年度卒業生）より、国公立大入試で共通一次試験が導入され、原則一校しか受験できなくなり、私立大が難化、'87（昭六十二）年度入試からは、複数受験が復活、以後毎年、制度の変更がなされた。また、

第二次ベビーブームの世代が高校生となり、'92のピークに向かって増加、また進学志望率も当初の見込みを上回ったために私立大を中心に入試の難化が続いた。多少の変動は見られるが安定した実績を残し、進学校として着実な成果をあげている。これは、個々の生徒の努力の成果によるものであるが、その努力を支える本校のカリキュラムとその実現を目指すスタッフの指導の適切さをも示すものであろう。

進路指導の実務面でも大きな変化があった。情報処理機器の発達である。'82年に8ビットパソコンが導入され、進路指導票が、'82年（昭和五十七）入学生より廃止され、実力テスト、校外実力テスト、定期テスト等の成績データは、フロッピーディスクに記録され、必要に応じて担任、生徒に提供されることになった。'85年版より『進路のしおり』も基礎データ部分は、パソコンで編集され、翌年からは、浪人についても入試結果が処理されている。'88年（昭六十三）には、32ビットに増強され、現在では、進路指導関係の統計処理のほぼすべてがパソコン上で処理され入力終了と同時に結果が提供され、各データの関連処理もできるようになってきた。

大学選択の資料として、全国各大学の講義要項、学生便覧等の収集を進めており、また、'88年九月より、ファインシステム、'91年度末には、ハートシステムが導入予定となっており、志望大学の選択も条件検索で行えるようになっている。

資料について

(4) 最近三三年間の卒業生進路状況の推移は、(3) 千葉東高卒業生の進路状況を集計したものである。

原資料は、本校進路指導部編集の『進路のしおり』によったが、整合的でない部分は、現在確認できる範囲で妥当なものに修正した。三十周年記念誌、四十周年記念誌と異なる部分もある。また、'68短大のように明らかに脱落している（三十周年記念誌では、三三）と判断できるものでも他の資料の得られない場合は、そのまましるしてある。

共通一次導入以後の国公立大入試制度の変遷

'77/ 5	大学入試センター発足
'77/12	試行テスト実施
'79/ 1	第1回共通一次試験（5教科7科目1000点満点）
'82/ 1	産業医科大参加　倫社と政経の同時選択禁止 傾斜配点制度の導入
'85/ 1 / 2	新課程（現社、理科Ⅰ必修）　試験日程の繰下げ 平均点等の発表は中間集計値に変更（2月末には、最終集計値を発表）
'87/ 1	複数受験可能（連続ABD日程導入）　事前出願制（共通一次受験前に二次出願）　重願可能（同一日程に出願可能）　5教科5科目800点満点に変更
'88/ 1	事後出願制に変更。重願禁止
'88/12	大学入試センター試験試行テスト実施
'89/ 1	関西地区主要大学で分離分割制導入　理科で平均点の差により得点調整がなされる
'90/ 1	第1回大学入試センター試験　分離分割方式全国に広がる　5教科の制約がなくなり、入試科目が多様化　私大参加大学16大学　平均点等の最終集計の結果の発表は5月
'91/ 1	最終結果の発表が2月末に戻る　分離分割大学増加（複数受験制度の形骸化）

'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
360		366		364		362		361		362		406		399		415		425		424	
236	124	244	122	235	129	216	146	232	129	234	128	251	155	264	135	262	153	286	139	260	164
95		92		78		77		103		53		95		68		87		93		79	
68	27	51	41	39	39	33	44	67	36	27	26	52	43	43	25	43	44	56	37	38	41
90		65		72		73		60		71		106		83		99		115		137	
48	42	36	29	35	37	29	44	22	38	34	37	51	55	37	46	34	65	52	63	62	75
4		1		1		1		1		2				1							
	4		1		1		1		1		2				1						
13		12		12		11		13		21		12		9		3		4		6	
	13		12		12		11		13		21		12		9		3		4		6
5		4		5				6				1		3				2		1	
	5		4	1	4			1	5			1			3			1	1		1
4				1		1		5		2		2								1	
4				1		1		4	1	1	1		2							1	
149		192		195		199		173		213		190		235		226		211		200	
116	33	157	35	159	36	153	46	138	35	172	41	147	43	184	51	185	41	177	34	159	41
65		60		58		66		75		64		64		70		61		74		65	
54	11	51	9	47	11	50	16	57	18	54	10	53	11	57	13	47	14	62	12	59	6
96		95		74		112		122		103		109		141		159		150		136	
81	15	82	13	63	11	95	17	93	29	85	18	88	21	113	28	128	31	123	27	112	24
						1														1	
							1													1	
3				3		1		2		2		3		4		1		1		2	
	3			1	2	1			2		2		3		4		1		1	1	1

(1) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）概況

	卒業年度	'71		'72		'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
新卒業者	卒業者総数	385				363		361		362		360		359		359		360	
		295	90			261	102	246	115	257	105	232	128	237	122	250	109	247	113
	国公立大(学部)	20				22		34		43		44		46		74		56	
		12	8			16	6	24	10	29	14	24	20	24	22	46	28	35	21
	私立大(学部)	166				114		100		104		103		112		80		73	
		141	25			77	37	70	30	64	40	64	39	73	39	53	27	48	25
	国公立短(本科)	3				4		1				1		1				1	
		3				1	3		1				1		1				1
	私立短大(本科)	27				23		35		16		17		21		23		22	
			27			3	20		35		16		17		21		23		22
	その他	1								1									
			1							1									
	教育訓練機関等	22				5		7		7		4				3		2	
		3	19			1	4	1	6	1	6	2	2				3	1	1
	就職者	15				6		5		8		3		1		4		1	
		5	10				6	2	3	6	2	2	1		1	1	3	1	
	無業者(予備校)	131				189		179		183		188		178		175		205	
		131				163	26	149	30	156	27	140	48	140	38	150	25	162	43
過年度卒業者	国公立大(学部)	14				26		22		41		30		41		37		39	
		11	3			22	4	20	2	33	8	27	3	28	13	34	3	31	8
	私立大(学部)	119				90		164		157		67		75		83		107	
		117	2			83	7	150	14	134	23	60	7	63	12	68	15	91	16
	国公立短(本科)									1									
											1								
	私立短大(本科)	1				3		4				1		4		3		4	
			1				3	2	2				1		4		3		4

出　典：県教委　高等学校等卒業者の進路状況

'72 年度は、資料一部欠損により、正確さを期して割愛した

資料の見方について

卒業年度：例えば、90年度とは、1991年３月卒業者のこと

そ の 他：大学短大の通信教育部、大学短大の別科、高校等の専攻科

教育訓練機関等：専修学校への進学者を含む

就 職 者：防衛大学校等への進学者を含む

過年度卒：当該年度以前の卒業者の当該年度における進学状況

'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短
38		40		49		48		53		33		43		39		42		55		53	
28	10	31	9	38	11	40	8	43	10	23	10	34	9	33	6	41	1	54	1	49	4
44		32		38		22		34		33		59		55		55		59		65	
43	1	32		37	1	22		34		29	4	59		52	3	54	1	59		64	1
12		8		12		13		7		8		14		6		12		16		18	
12		8		12		13		7		8		14		6		12		16		18	
45		31		20		30		40		20		32		30		27		44		49	
44	1	30	1	19	1	29	1	40		20		32		30		27		44		49	
																1					
																1					
4		7		4		6		5		3		8		5		6		7		4	
4		7		4		6		5		3		8		5		6		7		4	
6		3		3		3		2		3		6		1		5		2		2	
6		3		3		3		2		3		6		1		5		2		2	
6		6		5		6		7		10		13		5		7		8		4	
6		6		5		6		7		10		13		5		7		8		4	
4		1				1		1		3		1								1	
1	3	1				1			1	3		1								1	
2		5		6		3		3		7		6		4		3		4		7	
2		4	1	6		2	1	2	1	2	5	5	1	3	1	2	1	1	3	6	1
28		28		24		25		19		19		21		6		24		11		14	
28		27	1	24		25		19		17	2	20	1	6		24		11		14	
7		8		2		3		4		4		4		4		1				3	
5	2	7	1	2		3		4		4		4		4		1				3	
6		1				2		2		4		6		6		6		6		2	
6		1					2		2	2	2	5	1	6		6		6		2	

(2) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）系統別

卒業年度	'71		'72		'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79	
	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短	大	短
人文科学	36				30		42		33		44		39		41		30	
	19	17			23	7	23	19	22	11	31	13	25	14	29	12	19	11
社会科学	95				50		38		27		31		50		41		43	
	93	2			48	2	37	1	26	1	31		49	1	40	1	39	4
理学	12				4		6		12		11		15		9		13	
	12				4		6		12		11		15		9		13	
工学	25				32		22		27		32		26		36		16	
	22	3			28	4	22		26	1	32		26		36		16	
商船							2		1									
							2		1									
農・水産学	4				4		8		5		9		4		3		4	
	4				4		7	1	5		9		4		3		4	
医歯学	2				1		3		3				5		1		1	
	2				1		3		3				5		1		1	
薬学	2				5		5		9		7		4		4		4	
	2				5		5		9		7		4		4		4	
保健													1					
													1					
家政	3				8		4		7		4		7		5		7	
	1	2			2	6		4	5	2	3	1	4	3	4	1	2	5
教育	17				11		17		17		15		17		28		27	
	13	4			9	2	11	6	15	2	15		15	2	25	3	24	3
芸術	5				6		5		3		3		5		1		4	
	4	1			4	2	2	3	3		3		4	1	1		4	
その他	19				12		19		21		9		7		8		3	
	18	1			8	4	17	2	21		5	4	6	1	2	6	3	

出　典：県教委　高等学校等卒業者の進路状況

'72 年度は、資料一部欠損により、正確さを期して割愛した

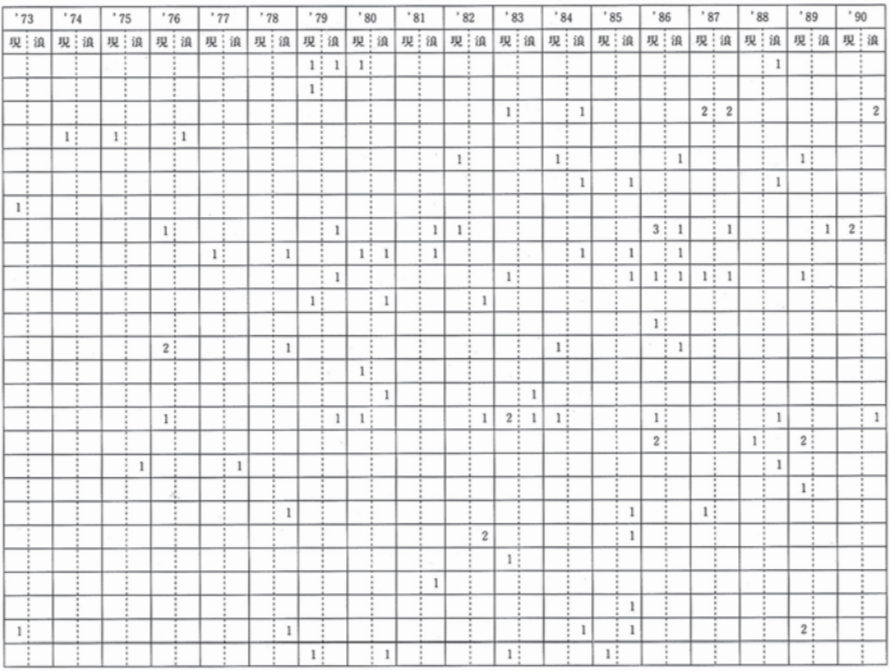
資料の見方について

卒業年度：例えば、90年度とは、1991年３月卒業者のこと

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流
	1				2		1		1	3		4	1			1	1	3	4	1	3	3	4	2	5	3	2	1	4	5	2	2	2	2	4
									1									1																
			1							1																								
	1		1				1								2						1		1										
		1			2																1								1		1		1
						1	1												1						2	1		1		1				
1				1	2		2	2		1	2	1	1	7	2	4	5	1	5	1	7	5	9	2	7	8	6	9	5	4	5	8	8	5	4
	1									1						1										1	1							
							1	1																	2								1
							1	1	2		1		1	1	1	1						1				1				3		1	1	
					1							1			2		2			1										1		1		
	1	1	1	3	1	4	1	1	4	2				1	1	2	2	1				1				1		2	1		2		
												2		1				1													1		1	
			1	1	1	1	2	1	3	3	1	3		4	4	6	4	5		5	4	8	5	3	2	4	4	2	3	4	2	8	5	3	4
		3			1	2		2				2						1		1						1			3				1		
	1	2		2		1		1						2					1		1	1	2		2		1		2			2	1	
1	1	1	3		2	2		2		3		1		2	1		1	1	1	1	1	1	2			7	8	4	3	8	3	3	3	5	2
10	7	9	8	19	11	15	8	21	17	47	6	28	16	50	26	42	23	39	22	43	19	44	20	26	17	32	20	21	12	46	21	37	20	42	17
					1		1		1	1	1		2		3		2	1			1	1	5		3	1	2	1	4	2	2	1	3		6
											1			1					1						1	1	1			1	1	3	1	1
1	1	1		1			2	2		2		2	3	2	1	6	2	5		3	2	4	1	1	1	3	1	3	1	4	4	6	2	8	
4	2	7	3	6	5	5	3	3	4	2		2		5	2	5		3	1	4	2	4	1	3		16	3	8	5	14	2	3	2	3	
1	1		1	3	2	3	1	3	1	3	1	1	1	1	2		1	2	1		2	5	2		2	2	3	3	2			2	2	1	4
			1								1	1			1		1	1						1		1	1	2		1	1		1	
		1					1				2			2	2	4	3		6	5	4	4	3	3	3	3	9	2	6	4	3	8	10	2	11
		1																					1				1			1				
2		2					2		1	1		2	3		2	2					2					1		1		1				
	1			1						1			1		2			1			1	1	1			5	1	4	1	2	1	3	1	2	1
	2	1		1	2	2		3	2	3	2			1	3	2	2	2	6	1	2	3		1		4	1	1	2	2		1	1	1	3
			1				1	1		1	4	1	1	1	1	2	1	3	1	1	8	1	4		1		2	1	8		2	2	8	1	
		1	1		1	2		3	2		2	2		6	7	5	4	3	9	7	2	6	5	6	5	14	10	5	10	7	3	5	4	8	5
									2		1			2	2		1		3	1		1				4	2	1			1		1	1	
				1												1						1					1			1		2	1	
						1											1													1				1
									1	2	1		1			1		1			2					1		2	2	1	3		1	1	1
																			1															
						2	1	1			1	1	1	2													1			1		2			
																							1								1			
	1	1		2		1		3		1	1			1		3	2		1	2	1	3	1	2		1	3	4	3	4	6	4	2		2
																					1	1			1		1							
									2		1			1	1		1				1			1	1				1	1		1	2	1	
																			1															
																	1	1	2		1	1	2			1	3	5	4	9	2	3	1	2	
									1			1																							1
								1																										
																			1															
																																		1
									1		1	1	1	1	1	3	1		2		3		1		1	5		2	1		1	1			
					1																			1			1							
					1																							1						
											1					1	1	2			1		3		1	4		2	3		2	2			1

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
北海道																														2
北海道教育																									1					
小樽商科																														
帯広畜産																			1								2			
弘前																	1													
岩手																			1											
東北																														1
宮城教育																					1									
秋田							1						1				2	1	1						1					
山形													1			1	1		3		2		1							1
福島																				1										
茨城					1										1				1		2	1		1	1		2			1
図書館情報																														
筑波			1		1				1				2				1													2
宇都宮					1																				2		1	1	1	2
群馬		1																												
埼玉	1	1												2	1			1	1		1			2	1	2	1	1		1
千葉					9	4		3	3	4		1	9		8		8	6	6	2	3	2	1	8	2	1	9	2	5	3
東京																														
東京医科歯科																														
東京外国語										1				1				1	1	2		1								
東京学芸				1	2		1		1	1			1	1	4		2			1	4	1	1	1	4	1	5	7	1	
東京農工													1								1								1	
東京芸術					1							1	1													1		1		
東京工業																					1									
東京商船								1																					1	1
東京水産																					1								1	1
お茶の水女子																														
電気通信												1									1			1			1	1	1	
一橋																			1										1	1
横浜国立														1							1									1
新潟	1														1		1			1				1			1			
富山																														
富山医科薬科																														
金沢							1														1									
福井医科																														
山梨																									1					
山梨医科																														
信州																					1					1				
岐阜																														
静岡																							1						1	
浜松医科																														
名古屋																														
名古屋工業																														
豊橋技術科学																														
三重																									1					
滋賀																														
京都																										1				
京都教育																														
京都工芸繊維															1															
大阪																														



'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
												1	1	1															1				
												1																					
																				1			1			2	2					2
		1		1			1																										
																		1				1					1			1			
																							1		1								
1																																	
						1							1			1	1							3	1		1				1	2	
								1		1				1	1	1							1		1								
													1							1				1	1	1	1			1			
												1			1			1															
																									1								
						2				1												1				1							
														1																			
														1						1													
						1							1	1				1	2	1	1				1					1			1
																									2			1		2			
				1				1																						1			
										1														1			1				1		
																		2						1									
																				1													
																1																	
																								1									
1										1												1		1						2			
												1			1					1													

																						1			1								1
1		1										1						1												1		1	
	1					2				2		3	1	4	3	4	2	2	3	3	3	6	4	2	2	3		2	4	1	2	6	2	2	7
	2	1		1	1			1		1	1	1	1	3			1		1		1	1		2	1	3	2		2	5	1	2	2		2
																		1															
1	1					2			1	1				1				1		1			1	1	1		1				1		1	
																												1				1	
																				2	1												1
																				1													
								1						1				1														1		
																				1													
																								1		6	2	1		5	2		2
																														1			
				1														1												1		2	1
																																	2
																														1			1
				1																		1											
																				1												1		

																															1			
							1												1								1							
																			1															

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

合格校＼卒業年度	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
大阪外国語																														
大阪教育																														
神戸																														
神戸商船																														
奈良女子																														
鳥取																														
島根																														
岡山																														
広島																														
山口																														
徳島											1																			
香川医科																														
愛媛																														
高知																													1	
高知医科																														
九州																														
九州芸術工科																														
佐賀																													1	
佐賀医科																														
長崎																														
熊本																														
大分																														
大分医科																														
宮崎医科																														
鹿児島																														
琉球																														
福島県立医科																														
高崎経済																					1			1	1					1
東京都立	1		1						1																1					
横浜市立				1																										
金沢美術工芸																														
都留文科									3								1												1	
岐阜薬科																														
静岡女子																					1								1	
静岡薬科																														
名古屋市立																														
京都府立医科																														
大阪市立																														
東京都立科学技術																														
釧路公立																														
大阪府立																			1											
姫路工業																														
下関市立															1															
静岡県立																														
北九州																													1	
九州歯科																														
札幌																														
酪農学園																														
岩手医科																														

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流
																															1		
			1																														
								1																					1				
1																				1													
				1																				1					1			1	
																	1																
							2	1																									1
																												1	1		1	1	
2	2	5	4	2	3			1		1	4		2	2	1	1		2		3		2		2	1	3		2	5	1	2		1	1
2														1	1			1	5		1		1		1	1			1				1
								1		1				1			1					2							2				
1																															2		
4		1	2	10	1	6	4	5	4	5	1	3	6	3	1	2			2	2	2	1	2		4		7	1	7	1	4	1	3	1	5
												1			1										1		1				2		2
																															2		
																										1	1	1	2	3	1	4		7	1
																											2		1			1		3
1												1																	1				
5	7	5	9	4	11	21	7	15	14	10	14	9	11	15	13	7	16	4	9	2	13	6	15	7	15	16	5	9	16	13	15	13	24	16	17
1		2																			1						1				1				5
		1																																	
						2		1		2		2		1	1	2												1	2	2		2		1	1
																											1					1	1	2
6	3	6	3	5	7	3	2	5	4	4	6	5	5	3	7	2	9	5	9	7	10	4	14	5	3	13	5	5	13	14	14	4	21	7	8
1	1			1		1				1	1	1		1					1					1	1				1	1		1	2	
7		2		2		5	1	4	2	1	1	1	2	1		5		1	1	2	1		4	1	1	1	1	2	1	1	1	3		7	3
1		1				2						1		2		3		2		4	1	3		6		7		1		3	1	4	1	1	
																											1				1			1	
																																1	1		
																												1		2	1			1	
																					1	1						1							1
		1		1				1	1			1		1	1	1	1			1		1		1				1						
	6	2	1		9	2	8	11	6	10	19	8	15	9	18	7	20	4	20	9	32	8	28	6	8	12	21	10	27	7	18	18	27	12	25
4	4	1	1	2			2	1		2	2	1	1							1			2		2		3		1		2		2		4
	6	4	4	5	5	2		4	3	2	5		4	8	5	1	4	1	2		3	1	1		5	2	5	3	2	3	1	3	5	3	2
											1	2		2	1	4	1	3	2	1			2	1	1	3	2		2	1		2	1	1	1
2													1																					2
2		2	1		2	2					4		7	1	4	1	2		2		1	4		2	1	1	8	1	5	3	12	2	15	5	15
3					1	2				1		1		1	1	1				3	1		1	1	1		1	2		2	1	1		2	
		1				4	2	2	3	1	1		3	2		2	2		5	2	2	2	1		5	3	3		1	1	4	2	4	3	7
				2								1		1		2		1		1				1	1					2				1
1	4	6	4	3	8	6	1	10	11	7	9	3	12	6	12	7	9	9	7	5	18	7	20	2	17	16	21	11	15	6	20	18	30	11	17
1	1					1			1					1	1		1	1	1				3						1	1			3		1
		1				1		1		2										1			1			1		2	1	1		1		4	2
								1		1			1				1					1		1	1					1		1		1
									1												1													
						1		2						1						1														
1																				2		1	2		1	2		1				2		5	1

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
東北学院																														
東北工業																												1		
宮城学院女子																														
流通経済																					1		1							
自治医科																														
獨協医科																														
跡見学園女子																	1		1				1		1					
東京国際													1												1					
城西																							1					1		
明海																														
獨協													1	1		2	3		6	1	2		3	1	1	4	5	1	4	1
文教																									1					
淑徳															2								2		1		1			
敬愛																							1							
千葉工業	4		4	2	3	3	6		8	6	8	2	7		4	1	14	2	8		8	4	4	5	9	9	3	7	6	2
千葉商科			1				2				2		4	1	2		1	1			1		1		1		3			
中央学院																									1					
神田外語																														
麗沢																									1					
駿河台																														
和洋女子	2						1				1		1		1		1		9				2		1					
青山学院	1	1		3	3		1		1	2		2			1		2	1	4	2	1	2	1	5		4	4	4	3	4
亜細亜									1																					
上野学園													1									1								
大妻女子											1								3				1							
桜美林																														
学習院					1					1			1						2			3		1		1	1	3	1	2
北里							1						1		3		1							1			1			
共立女子			1								1				2		1		1		1		2		2		2			1
共立薬科																					2						1			
帝京技術科学																														
八千代国際																														
東京情報																														
杏林																														
国立音楽																1	1								1	1	1		1	
慶応義塾		4		1				1		1		1				1		2	1	3		4		2	1	1	1	4		4
工学院	1	2					1	2	4	2	3		2	1	1	1	1	2	1	1	1	2		2	5	1		4	2	
国学院	1				3			1		1		2			1		1	1	3		1	7	1	6	1	3	4	4	6	6
国際基督教																														
国士館																	1		1		1	1	4		1					
駒沢									1		1	1	1		2		1	1	1	1	1		7	3	3	1	2			
実践女子	1						1		1								2						2		2		1			
芝浦工業				1		1	2												1	7				7			2	1		1
順天堂																	1	1									1		1	
上智		1						1	1	1		1				1	2		1	2	1	4	1	2	1	1	1		2	2
昭和																	1												1	
昭和女子			1							1	1								1	1	2				2					
昭和薬科																							1							
女子栄養																							1		1				1	
女子美術			1							1	2						1		1		2					1	1			
白百合女子																														

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
													1																				
2	3	1	3	1		5	1	3	8	1	2	2	3	1	1	1	2	1	2	1	2	1	4	1	3	7	3		5	6	6	5	14	5	5
	2							3	2				2	1	1	2	2	2	4	2	6		2		8	2	6	3	10	1	10	3	4	4	7
	1							2		1				1	1	1			1	3	1	4	1			2		1		2		8		2	2
			1								2			1			1			3		3				1	1	2		1		5	1	1	1
						1								1												1				1				
2	1	1	7	3	7	1	2	2	2	2	5	1	5	2	6		1	1	3		2	3	3	1	1	1	2	2	2		9	1	9	1	6
						1		3		3		1						1				1										1			
3	1	1	2	1		2		3	2	2	1			2	3	1	1			1		1			1	1	1		1	1			1	1	6
																										1									
						1					1																						1		
		1	1												1			1								1					1			
		1	1	1									1	1	1								1		1		1		1				1	2
16	11	13	11	15	29	10	6	12	18	9	16	7	24	12	19	8	16	11	21	6	32	5	16	9	15	19	25	5	13	6	18	11	31	14	35
		1				1	1	1		1		1		4		3	2	4	4	5	1	2	1		2	5		3	1	7	3	2	1	3	1
												1									1	1													
4	1	1	1	7		2	1	4	3	1	2	2	2		2	2	1	1	1	1	2		1	1	2	1	1		2	2	2	2	6	2	2
															1		1	1		1					1								1		
					1											1																	1		
				1		1		1		1				1																					
4		3	1	1	1				2	1	1	1	6	1	1		1				1	1	1	1	1		1		1					2
		1						1								1				2				1						1				
																				1						1			1	1				
		1		2		2		3	2	2		3	1	5		7	1	7	3	8		6	3	3	1	9	3	11	5	17	3	18	6	21	6
		1										1																							
													1		1				2						1		1								
5	8	4	3	4	3	2	6	2	5	2	3	2	7	5	4	5	5	1	3	1	3	6	11	4	4	5	9	1	5		5	2	11	6	6
		2		2	1	3	1		2		3			1		1	2	2	2	3	1	1		2	1	2	2	3	2	1	1		4	3	1
																														1					
1		1		2				2	2	3		3			1	3	1			1	1	1	2	2	5	6	2	1	2		3	1	3		1
11	5	3	6	10	16	18	12	21	25	12	18	14	32	18	27	17	34	18	43	21	39	8	47	7	43	18	69	6	73	20	66	39	60	35	62
2		5		1		10	1	6	1			5		1	1	5		4		1				4	1	5	3	2	3	7	7	4	10	6	3
11	4	4	3	8	7	4	5	4	2		4	3	3	2	5		8		2		4		3		1		3		2	2	3	1	1	2	7
1	2			1	1	3		3	1					1	1	3		1		1											1	2			2
9	9	11	7	16	18	10	16	16	16	16	25	15	23	9	26	7	16	5	12	5	23	9	16	11	19	8	27	3	28	5	39	8	39	20	38
						1	1								2				2										1		1		1		
																									1										
									1							1	1				1	1		1					1						1
														1		1	1	1			2	2	3	1	1		1					2	1		
2		1		2	2	6		2		6		2		6	2	7	4	13	4	10	1	7	3	5		15	5	6	6	16	4	16	6	25	8
2		1		1																															
	1							1		2		1														1									
								1																											
				2														1																	
20	16	18	14	7	16	3	15	21	11	9	14	16	17	7	21	10	14	5	24	2	14	7	13	4	16	13	11	8	15	11	24	10	18	10	26
2		1		1		1	1	1	1	1		1		2	1	1		3	1	3		3	1	6	3	3	3	2	1	4	2	1	2	2	
		1					2		1	2	1	1	2		1		2	2	2		2		1							2	4		2		5
																																	1		

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
杉野女子																														
成蹊										1							1		1						3	2	1		3	4
成城	1									1		1										1	1	4	1					2
聖心女子																			1										1	
清泉女子																													1	
聖路加看護																														
専修	1	1	1	1			2	1	5	2	2		2		7	2	5	3	5	4	3	4	2	8	5	1	9	1	5	2
創価																										1	1			
大正															1		1						1							
大東文化									1					1	3		2		1		2	1	1		2		1		1	
高千穂商科																														
拓殖							1	1			3		2		4		1		2		1		6		1			1	2	
玉川																									1	2				
多摩美術			1												1												1		2	1
中央	4	5	5	4	1	5	6	2	5	4	14	5	10	3	13	4	25	5	10	5	8	8	8	9	8	8	10	6	16	20
津田塾																														
帝京																														
東海	2						1		1		2	1	4		6	1	5		2	1	3	2	1	2	4	1	5		5	1
東京医科																														
東京音楽													1	1															1	
東京家政	1		1												1								3		1					
東京家政学院																	2													
東京経済				1						1					1			1	2		2	2	2		2		1	4		
東京歯科										1																	1			
東京慈恵会医科														1																
東京女子																											1			
東京女子体育										1																				
東京神学																														1
東京造形																														
東京電機								1		2			4	1	1		1		2	1	3				6	4	3		2	3
東京農業	2		2								2				5		2		1		1				1	2	1		1	1
東京工科																														
東京薬科			1	1									2	2									1	1		1				1
東京理科			1	1		1							2	1	15		5	1	2	4	1	7		3	2	4	6	1	4	13
東邦						1		2	1		1			1	1		1		2	1	2	1	1		1	2	2	1	3	2
東洋		1			2		3	1	3	1	9	1	2		5		7	3	2	1	3	4	8	6	10	3	12	7	9	10
二松学舎							1		1						1		1		3						3		4	1	1	
日本	7	3	10	6	11	5	13	4	10	5	13	6	19	3	29		28	5	40	7	27	6	13	14	22	7	23	6	7	8
日本医科																														
日本歯科																					1				1					
日本社会事業													1												1		2			
日本獣医畜産																														
日本女子				1															1						1	1				
日本女子体育																														
日本体育			2																		2						1		2	
日本ルーテル神学																														
文化女子															2															
法政	7	3	3	5	9	1	4	2	11	5	9	3	20	1	13	2	18	8	6	5	4	10	1	10	16	4	19	17	14	20
星薬科	2						1			1			1						2		1									
武蔵														1		1			1	3	1	2		4	1		1			1
日本赤十字看護																														

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
2	1	3	3	1		2	2	3	8	4			3	3	1		4		4		1	1	13	2	4	3	2	1	3		3	1	2	1	2
												1		1		1		1				1						1		1					
																													1						
1			2			2														1		1	1							1				2
21	11	17	18	11	17	19	14	18	25	15	16	20	24	17	24	20	31	19	30	14	54	16	51	14	61	32	51	10	46	22	61	25	47	26	55
10	5	3	4	5	5	5	3	5	5	1	13	6	6	15	12	3	10	2	6	9	6	5		3	9	10	11	6	18	6	22	12	9	13	12
		1								1				1		2	1	1		1		3	1	2	6	2			3	4	1		3	1	
																										1								2
12	15	11	13	7	15	10	10	10	14	7	17	5	7	8	15	5	14	10	20	9	30	12	22	5	16	15	12	10	12	17	23	18	24	20	21
																1													1						2
														1																					
4	9	7	6	11	24	11	16	11	16	9	39	10	29	19	32	19	45	25	39	24	59	26	60	13	71	36	51	24	77	37	56	32	72	31	56
																	1		2				1										1		
		1	3		1			1		1			3		1		1	2	2	1	2	1	1			1	2	1	1		1	1	1	2	4
	1						1	1																					1		2		1		1
									1																										1
																							2												1
															1											1								
1																										2							1		
											1						1							1								2		2	
												1													1								1		
																	1																		
																															1				
																	1																		
								1		1																									
																														1					
	1																																		
		1										1		2	1		1	2				1		1											
																					1								1						
																										1									
2	1				5	1	2		1	1	6	1		1	1	1	3	1		2	2		2	1			3	1	7	1	2	1	3	2	4
														2																					
														1														2							
																					1														
1				1		2	2	2	2		1		1	2	2	1	3	1	2		3	2	1		4	4		1	3		4	3	4	2	13
																																	1		
2	2																												1						
																	1									1									
1									1		1			1							1		1		1	1					1				2
																1																			
												1			1	1	1																			
																												1							

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
武蔵工業			1							1						1						1			1			1	1	4
武蔵野音楽														1															1	
武蔵野女子																														
武蔵野美術							1																		1					
明治	16	3	9	4	8	6	4	6	3	4	13	6	11	4	7	6	19	6	6	10	6	11	6	20	12	8	10	15	15	18
明治学院	1		2	3		1	1		2	2	2		2		2		1	1	1	1	3	3	4	3	5		4	4	3	6
明治薬科			1				1	1			1		1																	
明星													1		3											1				
立教	1	3	2			2		1			3	1	4		3		4		2	1	1	6		4	4	8	4	8	4	10
立正							2		2		1					1	1				1		2				1			
和光																							2		1					
早稲田	3	3	6	6	3	2	2	1	1	2	1	3	2	2		6	7	4	2	6	4	12		2	2	5	4	7	6	16
麻布																													1	
神奈川				1	1			1		1			1		1			1				2		1		2	1	1	2	1
神奈川歯科																											1			
関東学院	1																	1		1			1							
湘南工科																					1									
産能																														
聖マリアンナ医科																														
東京工芸																														
フェリス女学院																									1					
横浜商科																														
金沢医科																														
桐蔭学園横浜																														
東洋英和女学院																														
金沢工業																														
松本歯科																														
東海女子																														
愛知																			1											
愛知学院																			1				1							
藤田学園保健衛生																														
日本福祉																									2					
名城															1													1		
千葉経済																														
京都産業																									1					
京都薬科																														
光華女子																									1					
同志社				1											1			1		1				1	1			3	1	3
同志社女子																														
京都外国語																							2							
佛教																														
立命館		1																										1		3
龍谷																		1							1					
大阪芸術																														
大阪産業															1								1							
大阪薬科																														
関西																													1	
関西外国語																														
近畿																					1									
帝塚山学院																														

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
								1		1	3			2						3			1											1	2	3
														1														1							
														1																						
																1																				
		1																																	
																														1					
																												1							
																														1					
								1																				2			2				
					1																														
					1																														
																						1													

																				1														1	
				2	2	1			1		1			3	1		1	2	1	4		1	1			1	1								
															1										1										
										1	1						1			2																
													1																	1		1				
										1				1			1					1														
																		1		2		1														

																						1														
								1																				1							
												1		1		1																				
																																			1
																												1							
					1																														
												2		1				2		1				1												
																												1							
														3						1		3	2	2		1	1	2				1		1	
2		1			1			1																											
2																																			

																		1																		
																		1																		
		1																																		
														2		1																				
																						1														
												1																								
		1													1																	1				
2	2	4		2		2		2		3		2			1												1								

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
関西学院																			1											
甲南																														
甲南女子																														
神戸女子薬科																														
親和女子																														
兵庫医科																														
天理									1				1																	
岡山理科																											1			
エリザベト音楽																														
久留米																														
産業医科																														
西南学院																													1	
第一薬科																					1									
福岡																														1
別府																									1					
南九州																														1
放送																														
気象																														
防衛															1										1				1	
防衛医科																														
海上保安																														
水産																					1								1	
航空																														
航空保安																														
筑波大医療技術短																														
電気通信大短									1																					
福島県立会津短																					1									
埼玉県立衛生短																														
東京都立工科短																					1									
東京都立医療技術																														
東京都立商科短																														
東京都立川短																					1									
神奈川県立衛生短																														
神奈川県立外語短																														
山梨県立女子短																					1									
三重短																														
千葉県立衛生短																														
図書館短																														
千葉大工業短									1										3								4		1	
藤女子短																														
北海道武蔵女子短																														
酪農学園短																														
国学院大栃木短																							1				1			
尚美学園短																														
共栄学園短																														
昭和学院短	2										2				1										1					
聖徳学園短															3															
千葉敬愛短											1				4		7		1		3		1		1		2		6	1

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流	現	流
				3																													
								1										1							1							1	
5	1	11		5		9		7	3	14		8		6	1	15	2	4		8		8	2	10	2	13	1	3	3	2	2	4		7	
2		1		1		2		1				2		1		1		2		3		1		1		2		1					
		1																															
		1		1				3																									
																		1															
				4		5				3		6		5		4		1		2		2		4	1					3				2	
2		5		1		4		6	4	9		5		4		8		1		4		4	5	2		4		2	1	1		4		5	1
3		7	1	7		7		6		7		5		6		4	1	5		2		4		5	1	3		1		1				1	
		2																				1					1							
				1																													
						1		1		1						1	1	1		1													
1		4		1								1								1													
		1				1		3		1						2	1					1		3				1		1		1	
		2		1				1														1											
							1																										
										1												1					1			2				
											1																						
												1		1																			
										1								1															
				1																													
		1		1						1																							
																				1													
																			1	1											1		
1						1								1									1										
		2				7		3		4		2		1	2	3		4	2	5		12	2	8	1	7	1						
		1																															
																																	1
								1																									
		1																												1			
		1																															
		2				1				1				1																			
		2		1		3		1		2		1				3		4	1	1								1					
2		2						1		1																1	1						
								1																									
3																				2						1				1			1
		1																														1	
1		1																															
						1																											
1								1																									

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

卒業年度 / 合格校	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
日本キリスト教短									1															1						
和洋女子短							1		5		1		2				2		9				2							
青山学院女子短															2		3		1				1		2	1	4			
跡見学園短			1										1		2		3		6				1		2		1			
和泉短																														
上野学園大短															1								1				1			
桜美林短																														
大妻女子大短	2								1		1		2		6		2		5				4		1		2		1	
学習院女子短											1								1								1		2	
川村短															1															
共立女子短	1												2		4		2		6				2		5		4		6	
恵泉女学園短																											1		1	
国際短																														
国士舘短									1																					
駒沢短																									1		1			
実践女子短									1						3		3								4	1	1		7	
昭和女子大短							1		1				2				1		3					1	2		1			
女子栄養短									1				1		3				1						2					
女子美術短													2				2								3				1	
杉野女子大短													2				1		2											
成城短																														
聖徳栄養短											1																			
帝京短																														
戸板女子短							1		1		2								1											
東海大短																														
東京家政学院短													2		1															
東京家政大短											1		1						1						1					
東京基督教短															1															
東京経済大短																														
東京工芸大短									1				1		2															
東京女学館短													1																	
東京女子医科大看護																														
東京女子大短																											3		2	
東京成徳短																											1			
東京電機大短																														
東京農業大短																														
東京立正女子短															1															
東邦音楽短																														
桐朋学園大短																														
東洋英和女学院短																														
東洋女子短							1				2		1		4		5		1				4	1	1		3		4	
東洋大短											1																			
日本女子経済短									1								2		1											
日本赤十字中央短															1															
日本大短													1				3													
文化女子大短													1						1						1					
文京女子短													2		4		2		3				1		1		1		1	
宝仙学園短																											1			
武蔵野音楽大短																									1					
武蔵野女子大短																														
武蔵野美術大短																														

'73		'74		'75		'76		'77		'78		'79		'80		'81		'82		'83		'84		'85		'86		'87		'88		'89		'90	
現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
2		1		3				2		2		6		3				4		2	1	3	1	9		1	2	2	1	4	1		2	3	
1																								1										
1		1						1				3				2		2				1										1		2	
			1					1						1	1					1								1							
																			1															
										1														1										
																										1								
														1																				
			1											1																				
																		1																
												1																						
												1																						
																																	1	
8	1	8		7		7		7		3	1	8		6	2	4	2	6	1	3	5	6		2	5	1	5	3	1	2	1	2	2	1	8

'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90
43	55	79	77	100	113	97	171	157	154	158	181	122	230	184	196	204	167
6	2	4	4	3	4	7	12	7	11	13	15	11	17	10	20	21	21
345	304	379	354	469	432	443	516	493	496	581	574	519	726	630	775	877	908
		4	1	1	4	1	6	3	4	9	4	1	2	1	1		1
4	1	1	1	2		3	5	1	2	2	6	3	4	3		1	2
30	59	34	45	50	53	45	40	48	39	35	51	50	41	18	18	13	27
9	8	7	7	7	4	8	8	6	7	8	6	7	6	4	3	4	9
6	5	8	3	1	3	1	1			1	4	2	2				
363	361	362	360	359	359	360	360	366	364	362	361	362	406	399	415	425	424

(3) 千葉東高校卒業生の進路状況（普通科）合格者延べ人数

合格校＼卒業年度	'58		'59		'60		'61		'62		'63		'64		'65		'66		'67		'68		'69		'70		'71		'72	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
明治大短									1		4		1												1			1		
山脇学園短											1						1		4				2							
立教女学院短																														
京浜女子大短													1																	
相模女子大短													1																	
上智短																														
洗足学園短																														
鶴見大女子短																														
フェリス女学院短																									1					
日本福祉大女子短																														
京都女子大短																														
大阪産業大短																	2		1						1					
大阪電気通信大短																														
神戸山手女子短																														
武庫川女子短																														
西南女学院短																											1			
創価女子短																														
香川栄養短									1																					
杏林学園																									1					
駒込栄養短	1																													
白百合女子短											1																			
東洋青楽短															1															
日本女子衛生短	1																													
大阪交通短											1																			
専門・各種学校									5		14		19		32		42		30		25		27	3	39	1	24	4	20	1

(4) 最近33年間の卒業生進路状況の推移（年度別現浪延べ合格者）

設置者別＼卒業年度	'58	'59	'60	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72
国立大学	4	2	19	7	11	4	21	17	25	23	25	18	20	34	33
公立大学	1	2		1	3			1	1	1	2	1	2		4
私立大学	90	98	73	87	115	132	139	178	225	215	219	232	259	281	321
準大								1			1		1		2
国公立短					2					3	4			4	1
私立短	7	1		4	16	20	27	45	41	48	3	23	35	31	32
専門各種					5	14	19	32	42	30	25	30	40	28	21
就職	143	152	166	150	160	133	146	96	99	66	54	37	30	12	16
卒業者数	313	330	328	345	341	348	411	488	471	466	451	405	390	385	370

1991年度　進路関係行事一覧

（1991年４月15日）

千葉県立千葉東高等学校　進路指導部

月	日	曜日	行事	1	2	3	関連行事
4	16	火	進路集会（６限・格技館）			○	5/09　ＰＴＡ理事会
			第一回進路志望調査			○	5/21　２年コース説明会
							5/30　ＰＴＡ総会
5	7	火	進路適性検査		○		
6	13	木	第一回校内実力テスト（３教科）			○	６月　1･3年保護者面接
	18	火	進路集会（６限・格技館）		○		6/11　２年集会
			進路志望調査		○		６月　進路のしおり発行
							進路室だより発行
7	19／20	金土	第一回校外模試（記述）			○	7/02 2年コース志望調査
9	10	火	第二回進路志望調査（出願予定）			○	
	28／29	土日	第二回校外模試（マークシート）			○	
10	1	火	センター試験出願説明（６限Ｈ・Ｒ）			○	10/24　ＰＴＡ理事会
	3	木	第一回校内実力ﾃｽﾄ（３教科）	○			10-11　センター試験出願
			第一回校内実力ﾃｽﾄ（３教科）		○		10月　２年保護者面接
	26／27	土日	第三回校外模試（記述）			○	
11	１／２	金土	第一回校外実力テスト（３教科記述）	○			11月　進路室だより発行
			第一回校外実力テスト（３教科記述）		○		
	11／12	月火	第二回校内実力ﾃｽﾄ（５教科）			○	
	16／17	土日	センター試験模試(11/23？)			○	
	19	火	出願手続説明（６限Ｈ・Ｒ）			○	
1	10	金	入試直前注意			○	1/11,12 センター試験
	13	月	センター試験自己採点			○	1/23　ＰＴＡ理事会
			進路志望調査	○			1/22-31 国公立大出願
	22	水	第二回校外実力テスト（５教科記述）		○		
	24／25	金土	第二回校外実力テスト（５教科記述）		○		
			第二回校外実力テスト（３教科記述）	○			
	31	金	第三回進路志望調査(出願校)			○	
2	6	木	第二回校内実テスト（３教科）	○			3/09　進路室だより発行
			第二回校内実テスト（３教科）		○		

(5) 進路関係行事

1965年度　進路関係行事一覧　　(1991年6月15日)

千葉県立千葉東高等学校　進路指導部

月	日	曜日	行事	1	2	3	関連行事
4	10	土	進路指導計画説明			○	
	22	木	第一回実力テスト	○	○		
			第一回進学模試・就職模試			○	
6	6	日	第一回旺文社模試			○	6/05　PTA総会
	18	金	第二回実力テスト（英数国）	○	○		6/3-5　3年保護者会
			第二回進学模試（英数国）・就職模試			○	
	22／24	火木	第二回進学模試（社理）（6限～）			○	
	26	土	能研テスト（進学適性）			○	
7							7/20　全国進学模試大会
8	21～		夏期講習会				
9	12	日	第二回旺文社模試			○	
	13	月	第三回実力テスト	○	○		
			第三回進学模試（英数国）・就職模試			○	
	14／15	火水	第三回進学模試（社理）（6限～）			○	
10	12	火	第四回実力テスト	○	○		
			第四回進学模試（英数国）・就職模試			○	
	14／15	木金	第四回進学模試（社理）（6限～）			○	
11	6／7	土日	能研テスト（学力・就職適性）			○	
	14	日	第三回旺文社模試			○	
1	18	火	第五回実力テスト	○	○		1/20-22　3年保護者会
	20／21	木金	第五回進学模試（英数国）			○	
			第五回進学模試（社理）（6限～）			○	
3							3/3-5 国立一期校入試

'63～'65年版「進路指導のしおり」より作成

夏期講習会の実施学年は、不明

関連行事のゴシック部分は、'63年度の行事

三　留　学

本校の教育目標に「国際的視野を持つ人物の育成」が挙げられています。この目標をどのように実践してきたかを具体的に記すのが、この稿の主旨です。既に四十周年記念誌はそのような編集をされていますので、これを踏襲させていただき、この小稿を同じタイトル「海外交流教育小史」と名づけることにしました。

1　海外教育交流プログラム

留学は今や本校生徒にとって日常の一部になっていると言って良いでしょう。様々な留学機関があり、本人の能力次第で留学するチャンスを摑めるのですから、本校生徒にとって留学は身近なものと言って良いと思います。以下に挙げた海外交流プログラムは千葉県、千葉市、あるいは留学などを専門に扱う財団法人によるものと様々ですが、特に本校の海外交流の歴史に深く関わって来た内容です。

イ　カナダ、ノースバンクーバー市への派遣
ロ　千葉県高等学校生徒海外派遣
ハ　ロータリー留学生の受け入れ及び派遣
ニ　AFS留学生の受け入れ及び派遣
ホ　YFU留学生の派遣
ヘ　日米高校生交流プログラムによる短期留学生の受け入れ及び派遣
ト　その他

2　海外教育交流プログラムの内容及び略史

イ　カナダ、ノースバンクーバー市への派遣

ノースバンクーバー市と千葉市が姉妹都市関係を結んだ一九七〇年から、姉妹都市交流プログラムの一つとして高校生交流が行われるようになりました。毎年、五名前後の生徒を夏休みを利用して約一カ月間、親善使節として相互に派遣しあう企画です。千葉市では市と千葉市姉妹都市市民の会が派遣、受け入れ等を担当しています。派遣生は高校生から公募され、応募者から試験で選抜されます。試験は二次まであり、内容は面接（外人の面接も含まれている）、ヒアリング等となっています。応募者は一〇倍前後。本校からは一九七一年度、二名、七二、七三、七四、七八、七九、八一、八二、八三、八六、八七、八八、八九年度各一名、合計一四名の生徒が派遣されています。カナダの素晴らしい自然と人情味あふれる歓迎にすっかり魅了されて帰国し、大いに親善の実をあげているようです。派遣生が

毎年のように出るからか、ノースバンクーバーからの親善使節も本校を訪問することがありました。

カナダを訪ねて

菅原洋子

七月二十五日、羽田を出発して四週間の海外生活が始まった。途中でハワイにより、シアトル、バンクーバー、そしてノースバンクーバーに着いた。何度も言うようだけど緑がほんとにきれい、どこを見ても緑、緑、でも空は青かった。

カナダの自然は美しい。公園が多く、ほとんどが自然そのもの。人々でごったがえすということもないし、むしろ淋しくさえなる。広い公園に背の高い生々とした木々がうっそうと茂っている。よく見ると、野生のリスがするすると木を登っていく、小鳥はさえずりながら木から木へと飛びかう、自由そのものだ。でも残念なことに、いくつか見た公園の中にはかなり人工化されたものもあって、日本の庭を模倣した公園のいっかくを見て興ざめした。

カナダ人は概して大食だ。毎日同じようなもの（肉、芋、生野菜）を実によく食べる。また食べることを楽しんでいるようだった。テーブルクロス、食器、テーブルに飾られた花など、細かいところにも心を配っている。

カナダの若者はみんな同じ様な格好をしている。ヨレヨレのGパン、Tシャツ、ジャケットにバッシュみたいなくつはいて、ポケットに手を突っ込み、長い髪を風になびかしている。遠くから見ると男も女も見分けがつかない。バイクに乗ったり車に乗ったりタバコ吸ったり、それも五、六人以上で団体行動をする。カナダではタバコを吸うのは悪い習慣であるとしている。だから親の前では吸わないようである。子供は好き勝手なことをして遊ぶが、守るべきルールはきちっと守るし親には反抗しない。かといって、親の言うことをうのみにするのでもない。だいたい親はうるさく干渉しないのが気持ちいい。親子の断絶などという言葉は当分カナダでは生まれないでしょう。

国が広いせいか、人々はコセコセしてない。人を信頼し、自分のまわりにバリケードを張るようなことはしない。国が狭いということは悲しいことだ。カナダはあんなに土地を持っていてずるいョ。

何回か買物にも行ったけど、洋服のセンスはすごく悪い。値段は日本と同じくらいだけど、センス、質の悪さを計算に入れると日本の方が安いということになる。また、カナダには日本製のものが多い。あ、いいなと思って裏を見るとたいていメイドインジャパン。

カナダは広い。資源も豊富だ。これからどんどん伸びていく将来性のある国だ。日本の経済もカナダに進出し、さらにそれを広げつつある。そのせいか、カナダ人はかなり親日的であった。四年後にはモントリオールでオリンピックが開かれることですし（関係ないかな）、本当に静かでのんびりした

いい所ですから、暇とお金がある方は一度行ってみましょう。

（一九七四年度・派遣生）

（PTA会報・第二〇号より抜粋）

ロ　千葉県高等学校生徒海外派遣

千葉県が毎年夏休みを利用して、主として東南アジア方面に高校生を派遣するプログラムです。定員は五〇名。一九七三年度（昭和四八年度）よりスタートしました。費用は県費で負担されます。選抜方法は、地区の校長先生達によって行われ、二年に一度位の割で派遣割当が回って来ると言うことです。本校は一九七四年度に三年生が初参加。八月五日から一五日まで東南アジア地域、シンガポール、マレーシア、タイ、香港を訪問し、各国の青少年との交流がはかられました。以降、一九七七、八一、八九、九一年度に各一名、計五名の代表者を派遣することが出来ました。

研修旅行を終えて

岩崎　緑

夏休みの一〇日間を利用して、シンガポール、マレイシア、タイ、香港の四か国を旅行してきました。

二学期から始まって幾人かの先生方から「旅行はどうでしたか。」と尋ねられましたが、その時はまだ旅行から帰ってきて二週間余りで、レポートの作成にも追われ、落ち着いて旅の味を思うゆとりもありませんでしたが、近ごろじわじわと、ああいうこともあったと、何か捜しものがみつかった時のような喜びを感じています。

シンガポールは小さい国のせいでもありますが、すみずみまで美しく整った国で、彼らは自分の国に緑の多いこと、衛生的なことを大変誇りとしています。クアラルンプールでも同じで、ゴムの生産は世界一だとか、すず製品はマレイシアのが一番良いとかさかんに自分達の国の良さを主張します。私も日本のことをたくさん話しましたが、日本という国は知られているようで、実はあまり知られていないということがわかり、驚きました。彼らは皆陽気で、私達にも気軽に声をかけてきてくれます。が、バンコックの人々は私達に一瞥をくれただけなので、思わずシンガポールがなつかしくなってしまったのは、おかしなことです。

バンコックでは、メナム川の朝市を見学してきました。メナム川は川床が粘土質のために、いつも濁っていますが、ここに住んでいる人々は、入浴も、洗濯も、汚物処理もすべてこの川を利用し、聖なる川と呼んでいます。澄んだ川を知っている私達は、船がすれちがうたびにあがる水しぶきを、キャーキャー言ってはよけていましたが、船を動かしていたバンコックの人は、何やら不思議そうな顔をして私達の様子を見ていました。私は、聖なる川を汚したようで、悪いことをしてしまったと思います。こういう小さなこと一つ一つ

が、観光客の土足の足音なのかも知れません。

日本人観光客のマナーの悪さはバンコックでも目につくようです。しかし、そこに住んでいる日本人の評判は、悪くはありません。というのは、ほとんどバンコックの人々との交流の場がないからなのです。日本人は日本人同士集まって生活していますし、子供は、日本人学校へスクールバスで通っています。また悲しいことにタイ語を覚えても、日本へ帰ってからあまり役には立ちません。ですからお互いの交流は疎遠で、好感や反感をもたれるようなつきあいがないのです。これは私が一番気にしていたことだけに、がっかりしてしまいました。

私達の訪れた国は、すべて自動車優先で信号は少なく、横断歩道などはありません。現地の人々はタイミング良くさっさと渡って行くのに、私達はいつまでも渡れず苦労しました。ガイドさんの説明によりますと、道路の中央で車にひかれた場合、車の運転をしている人に責任はないそうです。言い方が大げさだとは言え、私達には信じられなくて、日本は歩行者優先で良かったとしみじみ感じました。

旅行から帰ってきて、アメリカの人幾人かと話す機会を得ましたが、私にはこの旅行で味わったバナナやパパイヤの香りのする英語が忘れられません。これからは、イギリス英語やアメリカ英語はもちろんのこと、アジアの英語も心に止めておく必要があるように思います。

（一九七四年度・派遣生）

（PTA会報・第二六号より抜粋）

ハ　ロータリー留学生の受け入れ及び派遣

ロータリー・クラブの地区と地区の交換で行われています。千葉県は二七九〇地区となっており、千葉地区独自に留学生の派遣、受け入れを行っています。千葉地区が交換の対象としている国は、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリアを対象としています。応募者は一般常識などの試験で選考されますが、派遣生の所属する学校が原則としてロータリー留学生の受け入れを承諾すると言う条件があります。本校がロータリー・クラブ留学生を最初に受け入れたのは一九七二年度。以降、八一年度までほとんど連年、多いときは二名の留学生を受け入れた年もあります。送りだしは一九七四年度に始まり七九年度までほとんど連年、多いときには一度に三人も送りだしています。送り出しは一九八〇年度以降、受け入れは一九八四年度以降途絶えています。ロータリー留学生が途切れた背景には、受け入れの場合の留学期間に問題があったようです。一年間という長期の受け入れですので、受け入れた留学生が本校の校風、生徒の生活リズムに合わなかった場合、互いによい結果を生まない点を勘案したためと思われます。アメリカの高校生が、一年間もの長きに渡って、典型的な進学

校である本校のリズムに合わせるのは大変なことと思われます。学校教育のあり方、文化の型の違いが、理解より苦痛を生むことを危惧したため途切れることになったものと思われます。

国際交流の時代へ

リン・ポールトンさん

本校で一年間勉学

去る二月十二日、オーストラリアのメルボルンから、ロータリークラブ国際交換学生として、リン・ポールトンさんが来校しました。来年一月末までの一年間、本校で机を並べて勉学することになり、現在一年七組（担任椿先生）に配属されています。

リンさんは、ビクトリア州メァリーバロー（メルボルン北西一五〇キロ余）の生れ、住所はメルボルン郊外のグリーンスバロー、年令十五才、ワトソニア高校第四学年（日本の高校一年に相当）に在学しています。健康で明朗、外国文学の研究を志望する、優秀な女生徒です。

千葉でお世話をされるのは、新千葉ロータリークラブ（会長中村作次郎氏）で、会員数名が順番にホスト家庭を引き受けることになっており、現在は森田勝彦氏のところで家族の方々と生活をともにしております。

まだ日本語がまったくわからないので、授業には出ていませんが、一刻も早くクラスの学習に参加できるように、日本語の特訓中です。言語、慣習、気候（南緯三十七度から北緯三十五度へ）など環境のまったく違うところに、たった一人で来ています。心細くいろいろと苦労も多いものと思われますが、情におぼれず、理性的に暖かく遇し励ましてあげたいものです。リンさんが日本及び日本人についての理解を深め、できるだけ正しい認識を得て帰国できるよう念願しています。

高校生の国際交流については、さきにもお知らせしましたように、姉妹都市ノースバンクーバー（カナダ）に千葉市青少年代表として、一昨年二名（森田雅義君・三年、山田雅子さん・昨年卒業）、昨年一名（菅原洋子さん・二年）が選ばれて派遣されました。それぞれ夏休み中の一カ月余、ノースバンクーバー市民の家庭に滞在し国際親善の役割をはたしてきました。また、昨年七月十八日には、ノースバンクーバーの代表生徒六名の親善訪問を受け、能楽鑑賞、クラブ活動の紹介、代表生徒との交歓会などが行われました。

さらに、本年は、米国の国際教育交換協議会（本部ニューヨーク）及び米国中学高等学校校長会の共催する、日米高校生交換プログラムに本校が参加することになりました。（千葉県では他に匝瑳高校が参加）相互に生徒十名、引率職員一名を交換派遣しあい、五週間滞在し、うち三週間は割当てられた高等学校で勉学し、二週間は地域見学にあてられます。滞在中はそれぞれの受入家庭で家族と生活をともにします。

来日は本年六月中旬、渡米は来年三月中旬の予定ですが、詳細は後にお知らせいたします。

若人が海外生活を体験し、相互の文化や国民を知り、国際的視野を広めることは有意義なことと思います。また、国際交流を通じて、世界の若人が友情を深めることにより、世界平和の実現にいささかなりと資することができるものと考えられます。

（曽根　記）

（一九七三、二～一九七四、一滞在）

（PTA会報より抜粋）

ニ　AFS留学生の受け入れ及び派遣

AFSの名称は、第一次世界大戦のさなか、傷病兵看護に当たったAmerican Field Serviceに由来しています。二度と悲惨な体験を人類が繰り返さないようにと、国境を越えた相互理解を目指して一九四六年より交換留学制度を推進してきています。留学期間は長期（一年間）と短期（夏休み中約一カ月）の二種があります。派遣対象国はアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、タイ、中国など。留学生は試験により応募者から選抜されます。留学生のホスト・ファミリーが決まると近隣の学校に受け入れ交渉をすることになります。ホスト・ファミリーはボランティアです。本校では一九七二年度に留学生を受け入れ、以降、八一年までほとんど連年、多い時は三名受け入れた年もあります。長期留学の例が無いわけではありませんが、受け入れの方は圧倒的に短期が多くなっています。受け入れは一九八六年まで断続的に続いていましたが、以降、途絶えています。派遣生は一九七三年度に始まり、四年間の空白期を置いて、七八年度以降連年、多いときは四名を送りだした年もあります。本校の生徒の場合、長期留学がほとんどです。

アメリカ留学の記

寺牛　由美子

私はAFS交換留学生としての一年間をアメリカ、コロラド州のモンテ・ヴィスタという町で過ごしてきた。人口約六、五〇〇人の小さな町で、ロッキーの山々をバックに、牛が草を食んでいる…そんなのどかな所だった。

ホストファミリーは私を家族同様に扱ってくれた。学校では、先生方にどれ程助けられたか知れない。留学生に対して理解のある先生方ばかりだった。また、ミュージカル活動に参加していたおかげで、友達も沢山できた。この学校には、私の他にもう一人、AFS生の男の子がブラジルから来ていた。隣町には、チリ、西ドイツから男の子が、トルコ共和国から女の子が、やはりAFSで来ていて、お互いの国

のこと等、話し合っているうちに仲良くなった。話題は、時には、核兵器や国際平和にまで及んだ。

また、AFS生の世話をしてくれる人達にもずいぶんお世話になった。私達留学生五人を色々な所に連れていってくれたし、何かと相談にものってくれた。私は、前々からアメリカ東部に憧れを抱いていたのだが、それを知って、彼らはAFSニューヨーク本部に事情を話し、手はずを整えてくれた。東部に住んでいて、私のことを数日間受け入れてくれる家族を探し出してくれたのだ。かくて夢は実現し、私は春休みをボストンやニューヨークで過ごすことになった。飛行機での一人旅に幾分不安はあったものの、何とかやってのけた。そこでは、私を受け入れてくれた家族が、色々な場所に案内してくれた。楽しい思い出の一つである。

私のAFS生としての役目の一つに「自分の国についてのスピーチをすること」というのがあり、次々とスピーチの依頼がきた。スピーチを頼みにくる団体も、小学校から老人クラブから、様々で、中には「日本の宗教について話して下さい」と、主題を指定してくるのもあったが、私は日本から持参したスライドを使い頑張った。私はスピーチをするのが楽しくて仕方なかった。自分の国について話したり、質問に答えたりするたびに、気休めかもしれないが、ほんの少しずつ、日本に対しての理解度が増していくような気がしたからだ。

アメリカでの思い出は沢山あるが、中でも忘れ難いのは、デンバー空港での出来事だ。それは、まだアメリカに着いて三、四日しか経っていない時で、私は自分が一年間をすごすモンテ・ヴィスタに向かうところだった。待合室で、一人きりで飛行機を待っている私にその航空会社の女性が色々と話しかけてきてくれた。日本へ来たことがあるそうだ。そのうち、突然の悪天候の為、私が乗るはずの飛行機がキャンセルされるかもしれないという情報が入ってきた。まだ英会話に慣れていなくて、ただでさえ不安なのに、私は困り果てた。もう夜だというのにどうなるんだろう。そんな私を、彼女は仕事場と待合室を何度も往復して、励ましてくれた。ハンバーガーを買ってきてくれたりもした。結局、その飛行機は予定より三時間も遅れて夜十時頃飛び発つことができたのだが、そこで受けた親切は決して忘れない。飛行機に乗り込む時「色々と有難うございました」と英語で言ったら、彼女は「どういたしまして」と日本語で答えてにっこり笑った。彼女の名前も住所も聞かなかったことが悔やまれる。

私がこの一年間で得たものは計り知れない。本当に沢山の人達のお世話になった。世界中に散らばった友達とは今でも文通が続いており、家へ帰るとまずポストをのぞくのが日課となっている。

（一九八二、八～一九八三、七留学）
（PTA会報・第五三号より抜粋）

ホ　YFU留学生の派遣

YFUとはYouth For Understandingの略称です。一九五一年にアメリカで発足しました。留学生がボランティア

の家庭に滞在し、高校生活を送ることを通じて国際相互理解を深めることを目標にしています。

留学経験者は会員となって、YFUの活動を支援する会員制度を採っています。留学対象国は世界四二カ国。日本では一九五八年から活動が始まりました。本校との付き合いは一九八一年に始まりましたが、受け入れ、派遣ともAFSより少ないようです。本校からのYFU留学生は一九八〇年度までは数えるほどしかありませんが、八三年度には三人の留学生が出るなど近年増加する傾向がみられます。

へ　国際教育交換協議会（CIEE）

CIEEは Council on International Educational Exchange の略。戦争の惨禍を繰り返すことのないよう国際理解を深めることを目的に一九四七年、アメリカでこの組織が設立されました。一九六五年、東京事務所が開設されて以来、日米間、日欧間の交流活動が展開されています。一九七三年に開始された「日米高校生交流プログラム」はアメリカと日本の高等学校が姉妹校関係を結び留学生交換を行うプログラムです。姉妹校の事情もあって派遣生徒は限定されますが、学校自体で派遣生を選抜できるところに特徴があります。本校は第二回目より参加、以来、姉妹校を変えつつも今日まで続いています。曽根先生（一九七四年度、引率者）の回想によれば、県指導課佐々木輝雄氏から紹介を受けた畠山一郎校長先生がこのプログラムに意欲的であったこと、国際交流の気運が高まっていたことなどが、実施に漕ぎつける力になったと言うことです。亀忠夫先生（第七回引率者、現東邦高校教諭）は「当時このプログラムには反対意見もあったんです。円高とは言え、どこの家庭でもこのプログラムに参加を希望できる状況ではなく、その点が今とは少々状況が違っていましたから。当時からみれば、今は随分と生活が豊かになったんですね。」と当時を懐かし気に回想されました。プログラムの期間は四週間で、三週間は家庭滞在しながら姉妹校に通学し、一週間は訪問国を旅行します。最初の提携姉妹校はカリフォルニア州、サンタクララ市にあるエミール・ブクサー校と決定しました。このブクサー校について、簡単に紹介しておきましょう。

ブクサー高校を訪ねて

去る三月十四日から四月十五日まで、日米高校交流プログラムにより、代表生徒十名とともに、カリフォルニア各地の見学とブクサー高校での三週間の学校生活を行なってきました。

カリフォルニア州では六・二・四制の教育制度をとっている地域が多く、学齢児童生徒の九〇%以上が公立の学校に通い、幼稚園から高等学校まで全部無償です。高等学校はほとんどが総合高校で、工業高校等は大都市にまれにあるていどです。

ブクサー高校は四年制で、生徒数約千二百人、授業料等の納入金は全くなく、教科書も学校で選定した本を市が購入し、生徒に無償で貸与します。総合高校ですので職業科目（金属・木工関係）・一般科目・大学準備科目にわたる、多数の科目が用意されていて、生徒は自分の能力・適性・希望によって選択し、それぞれの教室へ行って履習します。卒業に必要な科目数及び必修科目数が少ないので、好きな科目をじっくり勉強することができます。学期は前期・後期の二期制で、七・八月にかけて長い夏休みがあり、週五日制です。

アメリカの大学には、日本のような大学独自の学力テストはなく、全国一斉に行われるいくつかの学力適性検査の結果と高校からの内申書の評価によって学生の選考をします。有名私立大学にはエリートやお金持の子弟が進み、普通の生徒は沢山ある公立大学に入学することはむずかしくないようです。

サンタ・クララ市は新興都市で、自ら〝若人のスポーツ都市〟と名のるように、大変スポーツが盛んで、ブクサー高校でも、毎日のように放課後、野球・水泳・陸上競技・フットボール・バスケットボール・サッカーなどの学校対抗の試合が行われていました。

国際間の距離がちぢまり、国際社会はあらゆる分野で密接な関連性をもつようになります。ブクサー高校にも外国からの留学生が何名かおりました。これからの若人は外国語の力をつけ、海外事情についても大いに学んで、広い視野をもった人間性豊かな国際人として育っていかなければならないことを、痛切に感じました。

（曽根　記）

（PTA会報より抜粋）

日米高等学校交流プログラム第二回（本校初回）引率者は松本正子先生。先生は小柄ですが東金市境の千葉市（中野）から、自転車通勤なさるほどエネルギッシュな方でした。先生は学校へも和服でお勤めでしたが、渡米も和服でなさいました。このプログラムのパイオニアとしての先生の心意気が伝わって来る気がいたします。

アメリカから帰って

教諭　松　本　正　子

サンタクララでは三週間、学校と家を車で往復するだけの毎日でしたから、ほんの一部分のことしか見てきませんでしたが、車の中から見る街は実に平和でのどかなものでした。桜、杏などが咲きみだれた中に真紅の椿、バラがちらほら見られ、それは美しい眺めでした。道路にも草原にも紙屑一つ

落ちておらず、道端に咲いている花を折る人もないのは私共もまねしたいことだと思いました。

私はブクサー高校で毎日二時間ずつ日本語を教え、その際日本の風俗習慣なども話したりしましたが、一番強く感じたのは、生徒たちが堂々としているということでした。まちがえてあたりまえですから平気でまちがえます。おどおどしたところが全くないのです。堂々とまちがえ、堂々となおしていました。それに教室で習った日本語は、私と会うたびにつかいます。朝から『こんばんわ』などととんでもないまちがいをしますが、その場で訂正してやりますと、とても喜んでくれて次からはまちがえずに使っていました。私達が英語を話す時、まちがいを気にして、いつもおどおどしているのがおかしく思えてきました。

学校プログラムの間、ずい分いろいろの先生方と話し合い、授業を見せていただいたりしましたが、二人のすばらしい先生にお目にかかったことが、一番の収穫だったと思います。一人はパラハディア先生（音楽）で、彼女は日本に演奏旅行に来られたことがあり、横浜がとても好きだと言っておられました。その教え方のすばらしいこと、はじめから終りまで、すいこまれてしまいそうな気がして二時間授業を受けました。もう一人は、主に私達の面倒をみて下さった生徒指導部長のプリンクス先生です。先生は学校が生き甲斐だし、生徒が生き甲斐だと言っておられました。おどろいたことの一つは、千八百もの生徒の名前を殆んど知っておられることでした。プリンクス先生のオフィスにはいつでも生徒が入れかわりたちかわりつめかけています。生徒のよき相談相手であり、よき指導者です。このお二人の先生には教えられることがたくさんありました。

学校プログラムがすんでから十日程の西部旅行に出ました。一つの観光地から次のところに行くのには、時速百キロで走るバスに七時間位乗らないと着きませんでした。しかも砂漠のような何の変化もないところを毎日十時間程バスにゆられていたのですから、ずい分疲れたはずなのですが、いつも五人の息子と五人の娘にかこまれてさわいでおりましたので、楽しさの方が大きかったとみえて、殆んど疲れを感じませんでした。それにつけても、この十名の息子と娘はほんとうに立派で、どこへ行ってもほめられ通しで、特に私が感心したことは、アメリカかぶれをせず、



和服姿の松本先生と派遣生パイオニア10名の雄姿

よいところはよい―悪いところは悪い―とはっきり区別して受けとめていたことです。

五週間程では、アメリカはどうだとか、アメリカ人はこうだとかは言えませんが、ただ一つアメリカは非常に大きな国で、土地がありあまっている国だということだけは、はっきり言えると思います。

（一九七三年度・引率）
（PTA会報より抜粋）

松本先生以下一三名の生徒がブクサー校を訪れた翌一九七四年度に、ブクサー校より二名の先生に率いられて一三名の生徒が本校を訪れました。そしてその年度、第三回プログラム（本校二回目）派遣生一〇名が姉妹校へ向かいました。この時の引率者は社会科の曽根先生でした。生徒を率いての渡米とあって、英会話の猛特訓をなさったとお聞きしています。こうして日米交流プログラムは安定した軌道に乗ったかに見えました。ところが、まもなく姉妹校からの来校が途絶えがちになります。来校が途絶えがちになった背景には、次のような事情があるものと思われます。アメリカの高校生の留学先は日本だけではなく、ヨーロッパもその対象となっています。移民の国と言われるほどのアメリカでは、祖先をアメリカ以外（その中心はヨーロッパ）に持つ人が大半です。彼らが自分の祖先の国に関心を持ち或は郷愁を感じるのは当然と言えましょう。したがって、日本よりヨーロッパ志向になるのです。更に費用や言語の問題も絡んでいると思われます。日本と違ってアメリカの高校生は、留学費用は基本的に自分で負担します。アルバイトとか或いは親から借りるとか……とにかく自分で工面するのです。円高事情は彼らにはこたえるのです。一九七〇年代後半はまた石油危機が社会を直撃した時期でもありました。そういうことも間接的に影響していたかも知れません。

「交換」留学が成立しにくくなったこともあって、このプログラムの主催者CIEEに提携高校を変更してもらえないか、依頼・相談を持ちかけることになり、その結果、一九七八年度から提携姉妹校はペンシルベニア州にあるチャールズ・ベェーム、ミドゥル・ベア両校に変わりました。この年度、亀忠夫先生に率いられて一一名の生徒が新姉妹校を訪れています。生徒は両校に分散滞在し、引率者は週一回両校に分散した生徒とミィーティングを行って健康状態、ステイの状況を確認しました。

姉妹校が二校になったのはこのプログラム参加を希望している両校が同じカウンティにあること、また、一校だけ

では受け入れ・派遣を円滑に行うには不安があったためと思われます。しかし、それでも上記の理由から提携校で派遣生の募集、受け入れホストの準備などのプログラム運営が苦しくなり、隔年運営にしてくれるよう要請がありました。こうした事情を受けて本校では一九七九年度、日米交流プログラムを再検討することになりました。亀先生から一年置いて亀山先生（一九八〇年度）、亀山先生から一年置いて桜井功造先生（一九八二年度）、桜井先生から二年置いて金子先生（一九八五年度）と、この様に派遣に谷間が出来たのは相手校の事情によるものでした。隔年にせよ、こちらからの派遣は行われましたが、相手校の派遣生がそろわず、チャールズ・ベェーム、ミドゥル・ベア両校からの留学生を本校が受け入れることはありませんでした。

"A Nice Meeting!"

英語科　桜井功造

日米高等学校交流プログラムに生徒一一人と参加。ニューヨーク、ワシントンでの研修旅行を終えてペンシルバニアに入り、ここに三週間滞在。生徒達は驚くほどの変り身の早さで現地の生活にとけ込み、家庭でも学校でも実に伸び伸びとアメリカ生活を満喫。言葉の障害もなんのその、臆せず堂々と積極的に英語を使って自分自身を表現することに努力。そんな生徒達を現地の人々も高く評価、戦場から帰った我が子を迎えるような歓待ぶり。また家の人や先生方に対する礼儀正しさ、スポーツ、芸能面で見せた優れたタレント性は彼等に深い感銘を与えた様子。ともかくも親善使節としての役目を果し、想い出となる数々の貴重な体験をみやげに全員が無事帰国。——ここに無量の感慨をこめて報告できます。

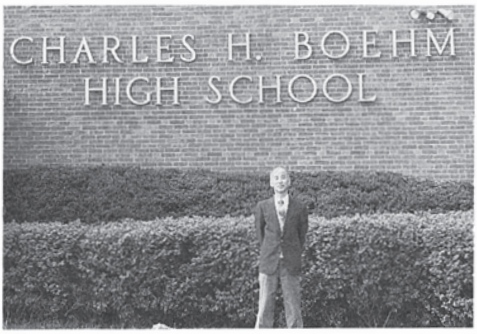
さて、この度の旅行は英語を母国語とする人々の生活・文化について多少とも見聞を広める上で意義のあるものでした。〈言葉〉は言うまでもなく各国それぞれの生活・文化を伝えるものとして独自の仕組みを持つ。私達はその〈言葉〉を私達の生まれ育った環境の中で自然と身につけてきた。だが、こうして身についた言語習慣が外国語の学習では一つの障害となる。原書を読む場合、私達はその内容を自分達の経験の範囲で理解する——つまり、異質の生活・文化であるにもかかわらず自分達のそれに置き換えて解釈し、これを一般化するきらいがあるということ。その意味で、彼等と起居を共にしながら生の英語に直接親しむことができたのは、私達にとって得がたい貴重な体験。人を送り出す時の"Have a nice day."初対面の相手との別れ際の"A nice meeting!"言葉は生きものだと言うが、彼等と交わしたその時々の言葉がその人達のイメージと共にどんな新鮮で感動的な響きをもって想い出されることだろう。

ここで想い出に残る人達の中から数人にご登場を願うと、ミスタJ——不断着に使い古したカバンが一つ、という仕

事本位の服装で終日生徒達のためこまめに立ち働く。紛失した生徒のトラベラーズ・チェックのことで関係方面と電話連絡、面倒な事務手続きを事も無げにやり終える。

ミスR――物ごし、言葉使いは日本女性を偲ばせるしとやかさ。体調が崩れかけた時に手作りのおむすびに励ましの手紙を添えて届けてくれる。私にはまさに異国でめぐり会えた〈良きサマリア人〉。

ミスタH――助言者。曜日によっては五時間の授業をやりくりする過密日程の中でも欠かさずに連絡・調整の労をとる。私の趣味に合わせて休日にはよく河畔へ散歩に連れ出してくれた。流木を集めてのバーベキュウも今は懐かしい想い出の一つ。



チャールズ・ベーム校にて。桜井功造先生

ミセスH――大学に勤めるかたわら家事をきりもり。感受性豊かでこよなく花を愛し、いつもにこやか。夫に寄り添っての喜びと感謝の日々。

字数の制約上、ここで私なりのアメリカ人観をまとめてみると、

◎気取らず率直で開放的。◎外来者に対するサービス精神旺盛。懐深く迎え入れる。◎形式にこだわらず、結果を重んじる。◎仕事を効率的に進め、仕事が終れば自分の生活に浸る。その切り換えが鮮やか。◎自分を卑下せず、むしろ自分の能力や生き方に自信と誇りを持つ。

その国民性を一言で言うなら、自由闊達、寛容にして協調的。一二五ケ国語が話されるという多民族国家では、互いの独自性を認め合うと共に、民主的手続きによって協調して国造りに励む必要があったろう。今日のアメリカ人気質にそうした歴史の重みを感じるのである。

（一九八二年度・引率）

（PTA会報・第五二号より抜粋）

ところで本校が提携姉妹校を変えながらもこの様にこのプログラムを継続させてきたのは、このプログラムにメリットがあるからだろうと思われます。それは既に述べましたように、本校の受け入れに関しては短期が合っているという点、また、学校が主体となれるプログラムであること、従って本校の教育の特徴の一つとして位置づけることが出来る……などの点が挙げられましょうか。現に本校を志願する中学生の中には、このプログラムを知っているものもあり、本校の一つのシンボルになっている感があるの

です。

昭和五十五年度、日米高等学校交流プログラムによる
派遣生募集要項
55・11・10

一　主催団体
国際教育交換協議会
○本部　ニューヨーク市国際連合プラザ七七七
○東京事務所　東京都千代田区永田町二―一四―二
山王グランドビル二〇五号室
米国中学高等学校校長会
社団法人　日米協会
※　後援　米国大使館

二　派遣先
米国　ペンシルベニア州　チャールズ・ポエム高校
ミドル・ベア高校

三　日程
昭和五十六年二月十二日～昭和五十六年四月九日
約四週間
派遣プログラムは一週間の研修旅行と三週間の姉妹校での活動と家庭滞在（ホームステイ）から成り立っている。

四　引率
指導のため、本校教諭一名が同行します。

五　費用
参加費　四三万七八〇〇円（小遣・渡米手続費用は除く）
※参加費は米国内での食費、宿泊費、交通費、航空運賃、保険料その他

六　派遣生徒
人数　一〇名
対象　本校一・二年生で交流プログラムへの参加を希望するもの

七　選考基準
㈠　学業成績が良好で、日常英会話があるていどできる生徒
㈡　健康で、外国での長期滞在、及び長距離の飛行機・バスの旅行に耐えられる生徒
㈢　千葉東高校の代表としてふさわしい良識をそなえ、進取、明朗、協調的で意志の強固な生徒
㈣　スポーツ・芸能などについて、趣味・特技をもっていることがのぞましい。

八　選考方法
書類選考、語学力テスト、面接等により、選考委員会がおこなう。

九　申込
別紙志願書により、十一月　日（　）～十一月　日（　）の期間にホームルーム担任を通じて、係に申し込む
以上

（註：提携姉妹校の変更、日程上の若干の変更はあるものの、

この内容は今も基本的に変わらない。ただ、参加費用の保護者負担金は円高効果により、現在は三五万円前後となっている。）

（本校四〇年記念誌より抜粋）

一九八六年度に再び提携姉妹校を変えました。この時は少々変則的な形を採っています。受け入れは単独の高校ではなく、ヴァジニア州フェアフックス郡全体からの派遣生で、本校を受け入れてくれるのはフェアフックス郡にある単独の高校、トマス・ジェファソン高校という形になったのです。これはもうおわかりかと思いますが、日本への短期留学希望者を単独の学校だけで編成することが困難であると言う事情を映したものなのです。この年度、フェアフックス郡からジャンゴチアン先生以下一一名の留学生を迎え、本校からは鶴岡先生以下一一名の生徒がトマス・ジェファソン高校を訪問しました。この学校は三、四倍の難関を突破してきた、科学的教養のある優秀な子供達が集まったエリート校でした。普通高校とは、科学、数学が単位数にして二年分、語学が一年分余計に組み込まれている点で違っています。この学校と姉妹校提携が成立し、実際に相互派遣が成立すれば、互いに良い刺激を得ることが期待できたであろうと思われます。

「当校の最大の特色は、地元有力ハイテク企業との強力なパートナーシップを基盤にしていることです。コンピューター四十台始め、最新鋭の通信機器、化学実験装置など研究施設のかなりの部分が地元から提供されています」とボルラス校長。レーガン大統領も創立直後に訪れ、科学教育の重要性を訴えたという。

三十人近くの生徒が各種プログラミングを自在に操るコンピューター・システム科、プロ顔負けの精緻（せいち）な航空機、戦車デザインがスクリーンに描かれていく工業グラフィック・コンピューター設計所など確かにこれが高校か、と思うほどの充実ぶり。そしてもう一つ、注目されるのが語学教育だ。

生徒はフランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語、ラテン語、ロシア語の中から一科目を必修科目とし、毎日一時間ずつの授業を受けるが、今月からは、フランス語、ドイツ語、日本語について、普通の会話のほかに「ハイテク語」がスタートすることになった。「入力」とか「変換」「実行」「文節」などのキーを自分で押すことを覚え、コンピューターに日本語で指示を出せるまで訓練を繰り返す。「競争率三倍、四倍の難関を突破して入学してきた英才たちだけに、のみ込みが早いですね。普通の日本語会話なら、ほとんどの生徒が一年目で、かなりのレベルに達します」とロリンズ先生。

たとえば、まだ十五歳のギャリック君、中学時代から成績がずば抜け、一年飛び越して進級、二年前、同校が創立され

ると、難関の試験をパスして入学した。昨年、学生交換で初めて日本を訪問して以来、日本語のとりこになり、みるみるうちにアメリカの大学で教材に使われている教科書までこなせるようになった。他の日本語生徒も、初級、中級含め三十九人に増えたが、出された英文問題を短時間にしっかりした日本文に書き換えていく。

日本は今日、ハイテク分野では、アメリカとほとんど肩を並べるほどの技術先進国に成長した。そして毎年、膨大な量の貴重な研究論文が発表されているが、そのうち英語に翻訳され、海外に紹介されている文献、リポートは、わずか一七%にすぎない。これでは、宝の持ち腐れである。



トマス・ジェファソン校を訪れた鶴岡先生と10名の派遣生

「アメリカには、川端康成や三島由紀夫文学だけでなく、日本の優秀な科学論文も学び、参考にしたい、という声が高まってきているんです。高校で直ちにこれらの論文を理解させるのは無理でしょうが、今のうちから、科学、ハイテク用語に親しんでおけば、将来、アメリカを背負う科学者や技術者に育っていった時に、日本の科学に対する理解度も一層増すのではないでしょうか」と、ロリンズ先生は目を輝かせる。

（一九八七、四、一一　読売新聞の記事より抜粋）

本校生徒を迎えてくれるトマス・ジェファソン高校は大変優秀な学校でしたが、一方的に本校がお世話になるのでは提携校とは言えず、また、本校を訪れる留学生は郡の「寄せ集め」であったため連絡が悪く、引率の先生が苦労する場面もあったりして、本校の方からＣＩＥＥに、アメリカで本校と継続的交流を持てる学校はないか探してくれるよう依頼することとなりました。こうして紹介されたのが現在の提携校ニューヨーク州、イロンデクウォイト高校でした。一九八七年度、石井栄先生に率いられて一一名の生徒達が新姉妹校を訪問しました。以来、渡辺隆先生以下一二名、清水攻先生以下一二名、吉田秀樹先生以下一〇名、先田賢紀智先生以下一二名と連年、順調に留学生を送り出しています。問題の、姉妹校からの留学生も一九八八年度：ハマースレイ先生以下七名、八九年度：バルー先生以下三名、九〇年度：アキューリ先生以下二名を迎えること

が出来ましたが、ここでも留学生の数が次第に減り、九一年度にはついになくなりました。さて、今後このプログラムの展開やいかに。

アメリカでの苦労

昆　大樹

アメリカへ行く前日、成田空港近くのホテルに泊まった。半分不安と残りの半分は、昔から憧れていたアメリカに行けるという嬉しさだった。けれども、次の日の出発が近づくにつれて不安の方が急に大きくなり始めた。まず、言葉が通ずるだろうか。そして、ホストファミリーの中にとけ込めるだろうか、という不安に襲われた。

アメリカに着いて、初めて英語で外国人と話をした。この事により言葉の不安は消え始めた。家に着き驚いたのは、庭が広くてきれいに手入れされ、家を取り囲むような大木に様々な種類の野鳥やりすが沢山いたことだった。

さらに、大きなショックは食べ物のことだ。到着の日、ピザが一切れ二切れ出てきた。僕は夕食の前にこんなものを食べるのかと思いながら、すぐに食べ終わったが、その後夕食は出てこなかった。不思議に思い聞いてみたら、さっき出てきたピザが夕食だと言われた。もちろん、それだけで足りるわけがなかったが、言い出せないまま朝まで我慢した。しかし、朝の食事にも驚いた。トーストがたったの二枚とコーヒーだけだ。しかも、そのトーストの厚さも日本の半分ぐらいしかなかった。また、アメリカ人の食事は少ないだけでなく甘いものがほとんどだった。僕は甘いものが食べれない。学校に持って行く弁当には、サンドイッチ一個、その中にピーナツバターがはさんであり、チョコレートやクッキー、キャラメルなどのお菓子が詰め込まれていた。

このような日々が何日か続いたある日、「食事が少ないと思ったら、何か自分で好きなもの食べていいよ。」と言われ、生活に慣れてきたこともあって、朝夕の食事はファミリーの倍以上の量を食べたので、大変驚いていた。日本人の食事の量と種類はアメリカ人から見ると驚くばかりのものだと思う。食事に関して言えば日本人は贅沢だと感じた。弁当については自分で作るようにして、甘いものは入れないようにした。

次に、アメリカの人はとても早



バス旅行。車中にて。1989年度派遣生とホスト生徒達

寝早起きだということである。夜は全員十時までには寝床に就き、朝は六時頃起床してシャワーを浴び、朝食後出勤していく。この規則正しい生活は当初とても辛いものだった。このような苦労はあったけれども、自由で明るいアメリカは魅力を感じるとともに、再び訪れてみたいと思っている。

短かった留学

池田麻衣子

一ケ月はあっという間でした。書くことが沢山あるので学校のことをここでは紹介したいと思います。私たちの高校は七時五十三分から授業開始―四十二分授業で休み時間はたったの四分。移動時間しかないのです。時間割は九時間目まであり、一と二時間目の間にホームルームがあります。そして、五―七時間目のどれかにランチタイムをとります。けれども、全ての時間に授業を入れなくてもいいのです。私のホストSusanの場合、一時間目―数学、二―ラテン語、三―英語、四―スペイン語、五―ランチ、六―体育か化学、七―化学、八―保健、九―社会、とびっしり詰まっていました。もちろん、語学の授業以外はすべて英語。少しは分かるかなと期待したのですがさっぱりでした。

ところで、アメリカと日本の授業は全く正反対―。日本では先生の講義を聴くのがほとんどですが、アメリカは聴くというのではなく、自分の思ったことをどんどん発言するのです。だから、授業は活気がありとても寝ている人などいません。人数もさまざまですが、十―二十人くらいです。また、向こうではじめて知ったのですが、授業は全て自分で決めるのです。必修科目もありますが、何時間目に入れてもいいのです。それぞれの授業はあまり楽しいとは言えません。二回ほどコーラスの授業を受けたのですが、それが一番楽しかったと思います。ホームルームは私たちから見てちょっと変わっていて、毎日アメリカの国旗に向かって忠誠を誓うのです。国旗はどの教室にも掲げられていました。ある日の保健の授業でおもしろいことをやったのです。自分の手を直接見れないようにして鏡を前に置き、それを見ながら星印の中をなぞるのです。これがなかなかできない。これは本当におもしろかったです。



アイス・ストームにみまわれた
イロンデクオイト校

私のランチはお弁当でした。この弁当は日本とは全然ちがいます。いつも同じメニューで、サンドイッチ一切れ、スナック菓子、ジュース、リンゴ丸ごと一個が私の弁当です。お弁当箱というものはなくこれらを袋に

入れて、毎朝持って来ます。食べる所はカフェテリア。登下校は毎日歩き、時々スーザンの友達の車に乗ることもありました。私にとってこの登下校が一番辛かった…。学校から家まで歩いて四十分近くかかるのです。その上アメリカ人は歩くのが速い―ので、話ながら歩くのはとても疲れてしまいました。まだまだ学校の中での書きたいことが沢山あるのですが……。

私たちは他にコダック社、小中学校、美術館、ナイアガラの滝、トロント、NY等、いろいろな所に行きました。このような体験を通して、アメリカ人の生活や文化が多少なりとも分かり、留学して一回り大きくなったようです。

（一九八九年度・派遣生）

（国際交流新聞・第一号より抜粋）

アメリカ研修記

吉田秀樹

この三月一日から二十七日まで生徒十名を引率し、ニューヨーク州ロチェスター市（人口二十七万五千人、州で三番目の都市）の郊外にある四年制のイロンデクオイト高校を訪問し、三週間の家庭滞在をしました。成田出発が三時間遅れたため、デトロイトで予定の便に乗れず、結局二十時間余りの長旅になり、ホストの家に着いたのは夜十一時を回っていました。

到着した翌日はこの時期にしては一一七年ぶりという記録的な暖かさ（二十度、ちなみに緯度は北海道の旭川と同じ）に恵まれ喜んだのも束の間、次の日には今世紀最悪のアイストーム（氷嵐）という大寒波に見舞われ、ロチェスターを中心として周囲一二〇キロ四方が完全に氷の町と化し、凍った木々が次々と倒れ、送電線を破壊し、道路を遮断してしまい、完全に都市生活機能を失ってしまったのです。四日からの期待していた学校も結局一週間休校となり、ローソクの生活を強いられたのです。この時の日中の最高気温が零下八度、最低は零下十八度ですからヒーターのない家庭は避難せざるをえません。幸いこの自然災害による直接の死者はありませんでしたが、私たちが去る時も道路脇には倒木があふれ、すべて取り除くには半年はかかるとのことでした。

ところでこの災害による大量の倒木の処理をどうするか御存じですか。日本ならば当然燃やしてしまうことでしょう。自然環境に対しては日本では考えられない程大切にしており、倒木や家庭から出るゴミなどすべて公害防止のため燃やすことは法律で禁じられているため木くずにして処理するのです。日本のようにところかまわずゴミを燃やす事など到底考えられません。もちろん学校も含めて焼却炉というものがありません。

こうした事情で結局通学は二週間ということになりましたが、私の場合、最初の日から、あちこちから声をかけられ、二十時間余りの授業を持つことになり、ビデオによる東高生徒の生活紹介、スライドによる日本文化を紹介する一方、ビジ

ネス科では離婚に関する日米の相違、又、日本の宗教観等、さまざまな問題を取り上げ、私にとっても非常に貴重な体験となりました。こうした授業を通して日米の生徒の大きな違いは、何と言っても授業に対して常に積極的に参加するという姿勢です。小学校のころから培われた当然のごとくのこの態度は大いに見習うべきものでしょう。

又、すべての教科で多量の宿題が出され、生徒はもちろん教師も宿題の始末に追われる毎日で、ほとんど休む暇がないほどです。例えば、私の場合、社会科及び英語科の部屋に席を置いていましたが、持ち時間数が多いので先生側は教材の予習に充てる時間は皆無と言ってよいでしょう。ちなみに日課は朝七時五十三分からすぐ授業が始まり四十二分授業が昼休みを含み九時間、休み時間は四分、終了が二時五十七分。終了のベルと同時に生徒は即座に退出してしまうのが習慣ですから、教師も、授業がすべて終われば、何か特別の会合でもなければ帰宅します。その点日本の教師の方があまりにも雑務が多すぎるというのが実感です。

（国際交流新聞・第三号より抜粋）



吉田先生とイロンデクオイト校コーディネーターのハマースレイ先生（左）

派遣・留学の記録

年度		ロータリー	A・F・S	日米高等学校交流プログラム	その他
昭和46	1971				カナダノースバンクーバー市に（市民代表として）2名派遣(森田、山田)(8月)
47	1972				岡　上（菅原　洋子)
48	1973		坂巻政明 (48．8～49．7)(米国)	米国エミール・ブクサー高校へ生徒派遣（3月～4月) (カリフォルニア州サンクララ市) (団長：松本正子教諭以下11名)	岡　上（上野)
49	1974	則安ゆかり (49．4～50．3)(豪州) 木戸秋圭一 (49．9～50．8)(米国)		岡　上 (団長：曽根正之教諭以下11名)	千葉県高校生海外派遣（岩崎緑)(8月) ノースバンクーバー市派遣（金城昭一) (8月)
50	1975	柴田玲子 (50．4～51．3)(豪州)		岡　上 (団長：原口与一教諭以下12名)	
51	1976	寺島洋子 (51．4～52．3)(豪州)		岡　上 (団長：西郡巌教諭以下11名)	
52	1977			岡　上 (団長：鈴木健生教諭以下11名)	千葉県高校生海外派遣(工藤浩子)(8月)
53	1978	有賀裕子 (53．4～54．3)(豪州) 青山和美 (〃　～　〃)(〃) 佐々木薫 (53．8～54．7)(米国)	井上裕雄 (53．7～54．6)(米国)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣（3～4月)(ペンシルベニア州) (団長：亀忠夫教諭以下12名)	ノースバンクーバー市派遣（生田裕人) (8月)
54	1979	井上希代子 (54．9～55．8)(米国)	時澤俊也 (54．7～55．6)(米国)		岡　上（平嶋篤美)(8月)
55	1980		佐藤千恵 (55．8～56．7)(米国)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣（3～4月)(ペンシルベニア州) (団長：亀山仁寿教諭以下12名)	
56	1981		津島緑 (57．1～58．12)(豪州)		ノースバンクーバー市派遣（大和田きみ子)(8月) 千葉県高校生海外派遣(浅賀裕子)(8月) YFU留学生牧みさ子(56．9～57．8) (米国)
57	1982		寺牛由美子 (57．8～58．7)(米国)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣 (団長：桜井功道教諭以下12名)	ノースバンクーバー市派遣（林智子) 四街道市交換留学生（深沢恵) (57．8～58．6)(米国)
58	1983		山下玲子(59．1～59．12) (オーストラリア)		ノースバンクーバー市派遣（山本浩子) YFU留学生（相庭美奈子) (58．8～59．7)(米国) 〃　(清宮美香) (58．8～59．7)(〃) 〃　(石川あゆみ) (58．9～59．8)(〃)
59	1984				ライオンズクラブ派遣プログラム (吉田結子)
60	1985		奥田毅 (60．4～61．3)(タイ)	米国チャールズ・ボエム、メディルベア高校へ生徒派遣 (団長：金子澄兄教諭以下12名)	HSC留学生（山崎佳子) (60．9～62．8)(米国) 国際青年交流委員会（松永敦) (60．8～61．7)(〃)
61	1986		白木トミ (61．9～62．8)(米国) 高山佳菜(61．4～62．2) (アルゼンチン) 鳴田　敏 (61．9～62．8)(米国) 横溝和枝(62．1～62．12) (オーストラリア)	ヴァージニア州、トマス・ジェファソン高校へ生徒派遣 (団長：鶴岡敏雄教諭以下12名)	ノースバンクーバー市派遣（早崎俊光) YFU留学生（澤田早苗) (61．9～62．8)(米国)
62	1987		佐藤由紀(62．9～63．8) (メキシコ)	ニューヨーク州ロチェスター市、イロンデクウォイト高校へ派遣 (団長：石井　栄教諭以下12名)	ノースバンクーバー市派遣（八田理江) 四街道市交換留学生（林菜保子) (62．9～63．8)(米国)
63	1988		曽我麗子 (62．9～元．8)(米国) 泥谷志保(元．1～2．1) (オーストラリア)	ニューヨーク州ロチェスター市、イロンデクウォイト高校へ派遣 (団長：渡辺　隆教諭以下12名)	AYUSA留学生（阿部ひろみ) (63．9～元．6)(米国)
元	1989			ニューヨーク州ロチェスター市、イロンデクウォイト高校へ派遣 (団長：清水　攻教諭以下13名)	ノースバンクーバー市派遣（青木　永) 千葉県高校生海外派遣（藤原邦雄) AYUSA留学生（井口裕子) (元．8～2．7)(米国) ECC留学生(桧山晶子) (元．8～2．7)(〃) UWC留学生(富倉　愛) (元．9～3．8)(英国)
2	1990		野副朋子 (2．9～3．8)(米国) 和田咲子 (2．7～3．8)(〃) 新田麻美(3．1～4．1) (ニュージーランド)	ニューヨーク州ロチェスター市、イロンデクウォイト高校へ派遣 (団長：吉田秀樹教諭以下11名)	YES留学生（神山葉子) (2．9～3．8)(米国)
3	1991		宮下朋子(4．1～5．1) (ニュージーランド) 佐々木理存 (4．1～5．1)(〃)	ニューヨーク州ロチェスター市、イロンデクウォイト高校へ派遣 (団長：先田賢紀智教諭以下13名)	千葉県高校生海外派遣（小川明巨) YFU留学生（福井三容子) (3．9～4．8) AYUSA留学生（伊藤雪絵) (3．9～4．8)

受入れの記録

年	度	ロータリー	A・F・S	日米高等学校交流プログラム	その他
46	1971				
47	1972	リン・ボールトン (48．1～49．1)(豪州)	フィリップ・シェルダン (11月)(米国)		ノースバンクーバー市より親善使節 (7月)
48	1973	リン・ウィリアムズ (49．1～50．1)(豪州)	メアリー・ヒートン (6月～8月)(米国) ジェームス・スンワルト (11月)(米国) ダイアナ・レイビイ (11月)(米国)		ノースバンクーバー市より親善使節 (7月)
49	1974	ジュディ・ハウエル (50．1～51．1)(豪州) マーナ・フレッチャー (49．9～50．7)(米国)	マリアーナ (6月～8月)(米国)	米国高校生来校（6月～7月) (カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校) (団長：スミス先生)	
50	1975	キャサリン・レイナー (51．1～52．1)(豪州)		米国高校生来校（6月～7月) (カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校) (団長：スペンサー・ヒンクル先生)	フィリピンより親善大使（6月)
51	1976	リン・ドネラン (52．1～53．1)(豪州)			
52	1977	デボラ・カーマイケル (53．1～54．1)(豪州) ジェニファー・ワッツ (〃～〃)(〃)	デニス・ベッカー (6月～8月)(米国) ルイース・エイムズ (11月)(米国) ブライアン・セシラー (〃)(〃)	米国高校生来校（6月～7月) (カリフォルニア州サンタクララ市ブクサー高校) (団長：ジェイムズ・タルート先生)	
53	1978	メアリ・ディビッドソン (53．9～54．7)(米国)	マーク・スワンバーグ (6月～8月)(米国) ディビッド・ポッター (11月)(〃) パネロープ・ボイド (〃)(〃)		カリフォルニア大学生、サラ・サンドフォードさん日本の高校の研究の為来校 (4月一杯)
54	1979	ミッシェル・ウエスト (55．1～56．1)(豪州)	サラ・ボイル (10月～11月)(米国)		マレーシアより教員2名来校（国際交流基金)
55	1980		ジェリー・レーサー (6月～8月)(米国)		
56	1981	ジョン・パターソン (57．1～58．1)(豪州)	ローリー・キング (6月～8月)(米国)		YFU留学生キャサリーン・ケント来校 (56．4～56．12)
57	1982				
58	1983				
59	1984	エミリー・ラング (59．9～60．7)	マーガリット・ヴァージニア・バイン (3月～5月)(豪州)		
60	1985		レミ・エレン・アボット (6月～8月)(米国)		
61	1986		ミシェル・ラスムッセン (61．4～62．2) (デンマーク)	米国高校生来校（7月) (ヴァージニア州フェアファックス郡の高校より) (団長ジャンゴチアン先生以下12名)	
62	1987			米国高校生来校（7月) (ヴァージニア州フェアファックス郡の高校より) (団長：トルーディ・トッド先生以下13名)	
63	1988			米国高校生来校（7月) (ニューヨーク州ロチェスター市イロンデクオイト校) (団長：ジョージ・ハーマスレイ先生以下8名)	
元	1989			米国高校生来校（7月) (ニューヨーク州ロチェスター市イロンデクオイト校) (団長：ケネス・バルー先生以下4名)	
2	1990			米国高校生来校（6～7月) (ニューヨーク州ロチェスター市イロンデクオイト校) (団長：パトリシア・アキューリ先生以下3名)	

四　特別教育活動

全日制課程

文化系部

文学部

顧問　坂井幸夫



出版された刊行物

文学部の歴史は古く、市立高女時代から同人雑誌「紫苑（しおん）」が発刊されていました。新制高等学校設置の翌年、昭和二十四年に正式にクラブとして発足し、手刷りの同人集「大樹」「若菜」「蠟人形（ろうにんぎょう）」等、数多く上梓されました。更に昭和二十七年から「小径（こみち）」をオフセットで発行、これと並行して手刷りの同人誌「壁嶺」、また不定期誌として「原点」が発行されていました。

ところが、昭和六十一年の夏ごろから、部員減少のため活動を停止せざるを得なくなりました。この様な活動停止状態はこれ以前にもあり、文学部のような小人数の部にとり、永遠の課題と言えるかも知れません。しかし、文学を愛する者もまた永遠に不滅らしく、そのたびに空白期間を置き、消長を繰り返しながら復活してきました。

このときも二年後の昭和六十三年に活動が再開され、その際に同人集も「カンパネラ」と名称を変え、今日に至っています。この名については、文学部という関わりから、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に登場するカンパネルラによく間違われますが、イタリアの哲学者の名前からとったものです。

活動の停滞時期とは別に、活動場所の移動などのために記録等も紛失し、更に手刷り時代を偲ばせる、ガリ版道具一式もこのほど処分され、しだいに昔のおもかげが消えつつあります。寂しいことではありますが、それでも矢張り、近代的な印刷機を使い、綺麗な上質紙で部誌を発行できるということはうれしいものです。また、昔はほとんどが実

名を用いていましたが、現在では全員が筆名を使うなど、時の流れを感じさせます。

これまで、文学部を御支援くださいました皆様がた、誠に有難うございました。今後もどうか宜しくお願いいたします。

物理部

顧問　澤井秀之

物理部では、ここ一〇年来、アマチュア無線の技術とコンピュータ技術の習得をその目的としております。このため日常の活動としては、アマチュア無線及びパソコンの実習と勉強会が中心となっています。

毎日、放課後になると待ち兼ねたように、三々五々と、部員が集まり、部室となっている工作室には生き生きとした雰囲気が漂います。同好の士の集まりでもあり、和気藹々と無線やパソコンの知識、学校内外の情報等が交換されます。

年に二回のアマチュア無線全国コンテストは校内に泊まり込んでの合宿です。二四時間内にできるだけ多くの、あるいは遠くの相手と交信するため、部員が交替でマイクに向かいます。手が空くと一息入れる時間で、参考書を広げる者、仮眠する者、イヤホーンで音楽を聴く者、様々です。交信の状況は、逐次パソコンに打ち込まれ処理されて行きますが、この処理用プログラムの作成と変更がなかなか大変で、アンテナの調整とともに準備段階での大仕事の一つなのです。この行事が無事に終わると、顧問はほっとし、部員は二四時間では物足りないと思いながら、次回のコンテスト及びハム（＝アマチュア無線）の資格を目指して翌日から通常の活動に戻ります。

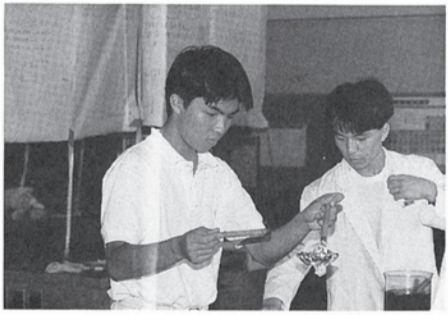
このような体験を通して、電気・電子関係の生きた知識や技術を積み重ね、自分の進路をその方向に決める者も大勢出ています。

趣味と実益を兼ねた物理部、ここにも、東高校における一つの青春像があります。

化学部

顧問　伊藤　毅

化学部は週四日の活動日に、東雲祭での発表と部誌「M



文化祭での実験

ＯＬ」の発行を目標として一〇数名の部員が思い思いの実験をしている。本校五〇年の歴史のおかげで、必要な器具等の調達はほとんど可能であり、非常に伸び伸びと実験ができる。「ＭＯＬ」も今年は六回めの発行となり、この冊子が我が部の歴史を築き上げていくものであることの自覚と責任感が出てきた。また、先輩方の数々の業績に彼らが支えられていることも事実である。新しいものでは、酒井友弘君、冨加見昌隆君による「簡易熱フィラメントＣＶＤ法によるダイヤモンド合成の研究」があり、本研究は第三二回日本学生科学賞第一等を受賞した。この研究は、高校の実験室にある器材でダイヤモンドを合成したことが反響を呼び、新聞、テレビ等でも取り上げられた。論文は、今でも準備室にあり、生徒達、先生方の努力と苦労がしのばれる。

ところで、先日私は本棚からこの部の部誌「るつぼ」という小冊子を取り出した。昭和四十二年二月創刊、とある。いつ「るつぼ」が発行されなくなり、「ＭＯＬ」になったのかは調べきれなかった。それにしても、一部活動の歴史を引き継いでいくことの難しさ重大さが感じられる。それで、開いてみた「るつぼ」の第一頁に当時の顧問高村永言先生が「科学する心」という文章を残しておられる。「『何故か？』という素朴な疑問を出発点として、少しずつ明らかにしてゆく過程が大切なのです。（中略）意外な事実を知ったときの驚きや満足を感じながら（略）思考の方法を体験してゆくことに科学を学ぶ意義があるのです。（略）自己の欲求の充足という立場から真に科学する心が生れるのだと思う。」化学部の伝統は形あるものより、むしろこの気持ちによって現在まで部員達の心に引き継がれている。

好奇心旺盛な生徒のある限り、再びあっと驚く何かがこの部から生まれるものと確信している。

生物部

顧問　中安　均
大迫　太

一九八一年度までの活動の概要は「四十周年記念誌」に記されているので、ここでは最近の活動状況を中心に、それ以降の一〇年間の記録をまとめておくことにする。


行川アイランドの磯で（1990年５月）

年間の主な行事としては、新入生歓迎会を兼ねた五月の自然観察会、夏休みの合宿、九月の文化祭がある。

五月の観察会では房総丘陵の山（三石山や高宕山など）や行川アイランド付近の磯によく出掛けた。磯に出掛けたときは魚やウニやカニなどを採集してきては、実験室内の水槽で飼育しており、その面倒をみるのも生物部員の役目である。

夏休みの合宿は、生徒たちにとっては最も思い出深い行事となっている。この一〇年間の合宿先は次の通りである。〔八十二年度〕湯の丸高原、〔八十三年度〕戸隠高原、〔八十四年度〕入笠山、〔八十五年度〕三宅島、〔八十六年度〕赤岳（八ケ岳）、〔八十七年度〕清和県民の森、〔八十八年度〕入笠山、〔八十九年度〕中止、〔九十年度〕麦草峠（北八ケ岳）、〔九十一年度〕三宅島

この他、土曜日の午後などを利用して東寺山町の谷津田やポートタワー付近の人工海浜にも時折出掛けている。

日常的な活動は、各生徒の興味に応じて行われており、年度ごとに変わる場合が多い。この一〇年の間の主な研究テーマとしては「オオバコの生態」、「校庭の土壌動物」、「ワカケホンセイインコのねぐら付近での生態」、「ジュンサイの生育条件」などがあり、千葉県生物学会主催の研究発表会で発表を行った。現在は「食虫植物の生態」に取り組んでいる。

部員数はここ数年一桁台が続いているが、部員間の仲も良く、和気あいあいとした雰囲気の中で活動が続いている。

なお、生物部顧問は八十一年度から八十八年度までは高橋重夫先生（現東邦大学附属高校）と中安が、八十九年度以降は大迫・中安が担当している。

地学部

顧問　鈴木　芳之助

地学部のこれまでの歩みは、地質分野の活動がほとんどであった。佐野先生や辻川先生の顧問時代は、地質見学や、化石採集等を夏休みに宿泊をしながら、あるいは日帰りなどで研究活動を行って、まさに地学部の名称にふさわしい活動内容を誇っていたということを聞いていますが、この数年間は、そのような〝地味〟な活動を嫌ってか、ほとんど天体観測だけに活動が絞られている様子で、部称も〝天文部〟に改めようという計画が部員たち（現在二年生四名、一年生七名）で進められているようです。

私が前代の古屋先生の後を受けてこの二年間、生徒たちと活動を共にしてきましたが、内容はやはり数回の天体観測と東雲祭へのプラネタリウム、天体写真、ビデオ、スライド等の撮影展示としての参加が慣わしで、これからもこのような活動が続きそうです。ただ、天体観測は、曇（雨）天には中止せざるを得ず、これまでも、二年間で計画が七・八回というのに実施はたった二回ほどという状況で、なかなか思いどおりにいきません。また部員はほとんどが他部との兼部ということで、天体観測ができるのがやっとというのかもしれません。ただ今年の一年生には気象観測も実施したいという希望もあるので、何とか百葉箱を設置し、気象機器を購入してもらって観測を続けさせたいと思っています。またこれからは本来の「地学部」として復活すべく、地質分野の活動への興味ある生徒の入部を願っている現在です。

音楽部

顧問　井辻紀一

音楽部の活動は、コンクールと定期演奏会を主な柱にして一年間の行事が成り立っています。すなわち、四月の新入生歓迎会とミニコンサート、六月の千葉県合唱祭、八月のＮＨＫ全国学校音楽コンクール千葉県大会、九月の文化祭と合唱連盟主催（朝日新聞社共催）のコンクール、十一



定期演奏会より

月の千葉県高等学校連合音楽会、そして三月の定期演奏会をもって一年間を締め括ります。現在、部員九二名の大所帯ですので、部の中で一人一人の存在感をいかに充実させるかが今いちばん大きな課題になっています。短い練習時間をいかに有効に使って充実させ練習をするか、そして一回一回満足できたか？年々受験体制が厳しくなっていく中で「部活と勉学の両立」は永遠の課題であるが、この多感な時代にしかできない豊かな感性を研くため日々努力しています。

なにしろ、ほとんどの部員が三年生の三月まで活動する希有のサークルですので必要以上に神経を使います。

この一〇年間の活動結果をみますと、NHK全国学校音楽コンクール千葉県大会連続一〇年金賞（県代表）。このうち関東甲信越大会、一都九県の代表として全国大会に駒をすすめたのが三回あり、銀賞一回、銅賞二回を受賞、一方、全日本合唱コンクール（朝日新聞社共催）のコンクールでは八年連続関東大会に出場しております。こう書きますとコンクールの活動が全てのように感じますが、ひとつの舞台にかけるためのプロセスを最も大切にして、その延長線上に結果があることを部員一人一人よく理解しているようです。わずか数分の演奏に対し、何十、何百倍もの時間をかけた集中力ある練習をしなければならないのです。ですから本番の短い演奏が一人一人にとってどれだけ大切なものかを感じているようです。次に、部員一同、最も力をいれて準備するのが定期演奏会です。八年前、ささやかな出発をしたこの行事も八回になりました。なにより嬉しいのは、この演奏会に学校の卒業式がすんだ三年生がほとんど参加することです。このことは、今の学校現場においては、どんな価値ある表彰より素晴らしいことだと思っております。これからも生徒一人一人の感性を信じ更に前進したいと思っております。

美術部

顧問　平松生夫

美術部を設置している学校は、県下ほとんどと言ってもいい程です。しかし、近年多くの学校で部員の減少を見ています。本校もその例外でなく、ここ五年間くらいは一学年平均四、五人という現状です。また、男子が非常に少なく、全員女子の年もあります。この傾向は何に由来するのか、確かには摑めませんが、学歴社会や将来に対する展望から、職業としては厳しい美術を敬遠しているのか、自己表現の創造力が乏しくなってきているからかもしれません。



美術部・陶芸同好会第９回校外展から

本校美術部は、創立十周年記念行事中に、「美術倶楽部展覧会」の記録が見えることからすでに設置されていたようです。部員名が記録されているのは美術教諭として五代目の草葉章先生の時代、昭和二十八年度入学生からで、特に六代目教諭田野英夫先生時代は三〇名を越える部員を擁した数年があり、美術部の活動としては全盛期と言えるかも知れません。七代目教諭秋吉匠先生の時代から、部員は夏・冬二度学生対象の公募展に大作の油絵を出品するようになり、多くの入賞者を出しました。この出品は現在も続けており、サイズ制限が小さくなったものの、四〇号五〇号の大きさを新入生から描き、伝統的な制作への熱を継承しています。

私が本校へ赴任した昭和五十六年度から、活動の一環として新たに校外展を画廊ジュライで開き、広く学校外の方々に活動の成果を見て頂く機会を設け、昨年度は「校外十周年記念展」を開催しました。

美術の年間活動は、七月学展出品、八月合宿制作、九月東雲祭展示、十一月県高校芸術祭出品、二月校外展・全日本学生美術展出品と間のない制作活動が続いています。

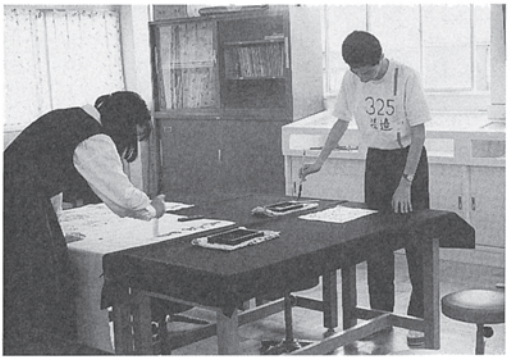
昭和五十六年度から今年平成二年度卒業生まで部員は九一名、内美術系へ進んだ者は一四名を数えます。現役部員

は一八名で、今年も学展に出品するため、現在制作に励んでおります。

書道部

顧問　宮負一昭

書道部の活動は、個々の自主性にまかせ、特に活動日など指定せずに自由に古法帖を中心とした練習を平素行なっています。



部員作品制作風景

主な活動内容は、四月（新入生歓迎展）、九月（東雲祭書作展）、十一月（高等学校芸術祭）、一月（小・中・高校書初展）、三月（成田山全国競書大会）等です。

大会成績は

○平成二年七月
小中高校席書大会
（知事賞）
一年　村山和郎君

○平成三年一月
小中高校書初展
（知事賞）
一年　村山和郎君

○平成三年三月
成田山全国競書大会
（成田山賞）一年　貝瀬隆男君
（読売賞）　一年　村山和郎君
（推選）　一年　西村幸恵さん

等々の成果を収めました。

現在の部員数は三年生三名、二年生三名、一年生一名と少ないのですが、それぞれに和気藹々、切磋琢磨し、毎日頑張っています。

マンドリン楽部

顧問　金澤正人
吉田正

マンドリン楽部の新年度は、定期演奏会の終った六月後半から始まる。半年以上かけて練習してきた六月の定期演奏会で三年生が引退し一区切りがつくからである。まずは文化祭が九月の第二土日にあるので、曲の選定から始め、大忙ぎで一、二年生で取り組む。そして夏休みの練習。以前は岩井海岸へ出掛けて合宿練習していたようだが、現在は校内で行っている。三泊四日のこの合宿は顧問、生徒共に辛いものである。夏の熱い日、一日中練習して部員は、夜息を抜くのであるが、合宿所であるセミナーハウスが隣家に近く、しかも西日が当る部屋であるために夜は非常に熱く窓を開けて話をする。それが隣家からの苦情となる。教室で合宿をしていた以前の方がまだ隣家に遠かったので気楽であった。顧問としては若い彼等の運動不足、ストレスの解消と、入学して半年の一年生が部に慣れる好い機会であるので大目に見たいが、そうもいかない。合宿は朝六時半から夕方の七時までのきつい練習が続く。途中半日OBとの交流草野球大会をやるが近年空き地が減って場所の確保が難しくなっている。これも他部顧問からは合宿して遊んでいると非難され、文系部活でのこうした活動の意味は理解されない。合宿最後の日の合同練習はOB達がその成果を聞きに来てそれぞれ感想を述べる。これが部員達にとってはけっこう厳しいものになっている。しかし差し入れも多くありこれを食べての解散も部員とOBとのつながりを増すのに役立っている。

文化祭は五曲ぐらいではあるが一年生にとっては初舞台であり、マンドリン楽部伝統演奏曲「引き潮」を演奏し、実質的な仲間入りを果すのである。

文化祭が終わると二年生は来年の定演を行うか行わないかから話し合いを始め、行うとなれば何部構成でどのくらいの時間をかけて、どれくらいの曲数を演奏するか。また会場は、パンフレット、ポスターはどうするかと十月に入ると急に忙しくなる。部室には過去三〇数年間演奏した楽譜が全て保存されているので参考にしながら前回よりは、先輩達よりはと工夫をする。近年は四部構成で行っており第一部はクラシック、マンドリンオリジナルでこれは年内のうちに編曲も出来上り、さっそく練習に入る。一部の曲

は半年かけて十分に練習し定演の聴かせどころでもある。

一月に入ると、一～四部のそれぞれの構成員が自分達の曲の編曲を先輩達に依頼したり、中には自ら編曲する者もいて出来上がった曲から練習を繰り返す。そして三月の学年末考査の終了した日から気が狂ったような猛練習が始まる。顧問はこの日より六月の定演の日まで、土、日、祭日、春休みなど一日もなくなる。平日でも七時の下校を守らせることに部員との戦いの日々が続く。しかも過熱した部員達は写譜、舞台装置作りなど時間外活動もしばしば行い先生方からは、マンドリン楽部の存在自体に害あるごとく問題視され、顧問は職員と部員との板挟みになり心身共に疲労する。それほど部員達は熱心に生き生きとした活動を展開する。

本校では音出しは六時半までなので、春休み中の合宿三泊四日は寸暇を惜しんで写譜、その他の準備をする。従って我が部の合宿は夏春ともに食事作りの時間を惜しんで全食弁当屋からの購入で済ませる。特に定演第二部、ギター演奏は少ない練習時間内では足りず五時半起床六時より練習と激しい。ややもすると平日は下校後公民館などに行って練習もしかねない勢いである。また早朝よりの朝練習は禁止されているがやってしまい先生方から叱られる。部員は運動部などの自主練が黙認されているのでこれにも不満が積り顧問として説得が難しい。

そして新学期、四月早々の新入生歓迎会でも数曲演奏するが、これまた手が抜けない。なにしろこの演奏会を聴いて一年生が部室に入部届を持って並ぶのであるから。これは主に二年生の仕事であり、演奏会用の曲は余裕があっても他に使用しないので、新入生歓迎会用の曲は春休みに別のものを練習しなければならない。こうして負荷を自ら背負い込むことにより部員達は基礎力を身に付けていくのである。

定演の三、四部は千葉東高校マンドリン楽部の特徴を示すステージで、ソロの楽器が多く入る。PA、照明、その他ツリカン、大小道具などを考え作る、さらにはステージで一年生がフリを付けるがこれも三、四部構成員の三年生が指導する。とにかく派手に一気に盛り上げて三年生は三年間の部活のしめくくりとする。

部員数は各学年それぞれ三〇数名おり、近年では一〇〇名を超える大所帯となり部員の名と顔を一致させるのも大変である。顧問は金澤正人（数学）と私吉田正（国語）の二人である。一〇〇名以上の部員とは二クラス以上の担任ということになり人知れず結構気を使う。我々顧問は専門

外で実技指導はできない。従って部員達の指導は卒業生が時々来てする以外にはなく、部の運営はほとんど生徒達の自主的な活動によるものとなっている。顧問教師とは、外部からの苦情受け付け係、暴走しがちな練習に歯止めをかける係ぐらいなものであり、しかも大きなイベントの責任者でもある極めて不安定な地位にある。とにかく生徒達は先輩から後輩へと伝統と技量の継承を実にみごとに行い、三〇数年途絶えることなく活動を続けている。マンドリン楽部の今日のこの繁栄は卒業しても後輩達を見捨てず、母校を愛する先輩達の力によるものが大であることも特筆し、感謝申し上げる次第である。



千葉県立千葉東高等学校マンドリン楽部　第29回定期演奏会(1991年６月14日　千葉市民会館大ホール)

そしていよいよ定期演奏会。中間考査後の一日、授業を公欠扱いしていただいてこれにあたる。今年は数えて二九回を終了したのであるが、これは本校の文化祭や体育大会より長い歴史を持つ。以前は県教育会館を使用していたが最近はずっと千葉市民会館を使用している。前日の仕込みは五時から一〇時までかかり、当日は朝から午前中ＰＡ、照明等の調整が行われ、午後一度通してリハーサルをやり、五時半の開演にこぎつける。例年満員で、立見が出、消防法に触れると会館から注意される盛況である。八時過ぎ三年生は花束を抱え感動の涙のうちに終了、二日がかりで準備したものを一時間余りで撤収しなければならない。そして学校へ荷物を運んで無事部員を帰宅させなければならない。顧問は翌朝まで電話が鳴らなかったことで胸をなで降ろす。巨額の会計収支、個々の反省の記録、各パートやそれぞれの構成員からの反省などを提出し、三年生は後輩へと引き継ぐ。頂いた花束、菓子類の整理をしてマンドリン楽部の一年は終る。

進学熱の高い中、環境問題もかなり話題となる中、我が部は難しい問題を抱えて活動している。年々こうした催が社会的にも派手になり、かつて三〇年前、我が部が演奏会を開いた時とは質的にも大きな変化があり、高校生の自主的活動としての部活動の中で他校の魁となったマンドリン楽部の定演も、これからまた変っていかなければならない

と思う。ともあれ千葉東高五十年の歴史の中にあって二九年間演奏会を続けてこられたのは関係各位の陰陽多大のご援助を戴いたことによるものと感謝申し上げる。来年は第三〇回の記念演奏会、部員達は今から夢を膨らませている。

吹奏楽部

顧問　秋山岩雄

創立五十周年誌に載せるということですが創立四十周年誌にも書いてありますのでそれ以後の歴史及び何人かの部長さんにそれぞれの当時のことを書いてもらい、また話してもらいましたので、それを書き綴っておこうと思います。

なお、歴史については昭和六十一年度の部長水留稔君の記憶によるところが大きい。

歴史

一九八一年（昭和五十六年）
六月　第九回定期演奏会
八月　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銀賞
　　受賞
九月　十九日　東雲祭参加
十一月　アンサンブルコンテスト出場　銀賞
一九八二年（昭和五十七年）　鈴木克彦（一三・三三）
三月　千葉地区音楽祭参加（千葉市民会館にて）
四月　新入生歓迎会参加
六月　十三日　第一〇回定期演奏会
八月二十一日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銀賞
　　受賞
九月　東雲祭参加
十一月　アンサンブルコンテスト出場　金賞
一九八三年（昭和五十八年）　鋤柄　竜（一三・四五）
三月　地区音楽祭出場
四月　新入生歓迎会参加
六月二十三日　第一一回定期演奏会
八月　九日　全日本吹奏楽コンクール千葉県予選　銀賞
八月　市立千葉高校吹奏楽部と交換会
十月　十三日　全日本アンサンブルコンテスト千葉県予選
　　サックス……金賞
　　金　管……銀賞
　　クラリネット……銀賞
一九八四年（昭和五十九年）　江頭正州（一一七・四〇）
五月　十一日　第一二回定期演奏会　三部形式
七月　十八日　野球部公式試合応援
七月二十一日　野球部公式試合応援
八月　九日　千葉県吹奏楽コンクール第三部地区予選出

場　銀賞

十一月　十七日　ラグビー部公式試合応援
十一月　十八日　アンサンブルコンテスト出場　金賞

一九八五年　（昭和六十年）　山田　材（一七・二九）
五　月三十一日　ソフトボール大会の開会式で演奏
六　月二十一日　第一三回定期演奏会　四部構成
六　月二十六日　関東高等学校ＰＴＡ連合会にアトラクションとして出場
八　月　十日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　創部以来初の金賞受賞
八　月　二十日　全日本吹奏楽コンクール千葉県本選
十一月　十日　千葉県アンサンブルコンテスト出場
サキソホーン四重奏　銀賞

一九八六年　（昭和六十一年）　水留　稔（一六・三二）
五　月　十五日　第一四回定期演奏会
八　月　十二日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銀賞
十一月二十四日　アンサンブルコンテスト出場
金管五重奏　銀賞

一九八七年　（昭和六十二年）
五　月　八日　第一五回定期演奏会
八　月　十日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銀賞
十一月ごろ　アンサンブルコンテスト出場
トロンボーン四重奏　金賞

一九八九年　（平成元年）
五　月　第一七回定期演奏会
八　月　十三日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銅賞
十一月　十八日　校内アンサンブルコンテスト

一九九〇年　（平成二年）
五　月　十五日　第一八回定期演奏会
八　月　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銅賞

一九九一年　（平成三年）
五　月　三日　第一九回定期演奏会
八　月　十三日　千葉県吹奏楽コンクール第三部出場　銀賞

部長を引き受けて以来、いかに部活を楽しくして、部員を来させるかということで、常に頭を悩ました。それというのも、コンクールや定期演奏会の時は全員揃うのだが、練習となると部室はがらがらという日が続いたからだ。これを何とか打ち砕こうとミーティングを何回か開いてみたりと努力はしたものの結局は伝統を引き継いでしまう形となってしまった。（文責　佐藤）

このころまではまだセミナーハウスが出来ていなかったので合宿は教室での雑魚寝であった。昭和六十一年度ごろまでは市川交響吹奏楽団から指揮者（山本さん、専門家で卒業生）をお願いし夏のコンクールには銀賞を取っていた。しかし、この昭和六十二年度当りから新入部員の数も今

までの二五人位から一五、一八人位に減り部崩壊の危機が訪れた。

部員が減ると出し合っていた一万二千円の支出も困難になり、部員の中から指揮者を選び夏のコンクールに臨むようになった。（文責　大塚）

「ミーティング」という集まりを何度開いたことだろうか。狭い部室に集まりくだらない問題に時間を忘れて激論を交わした。共に悩み、怒鳴りながらもいつも最後には笑い合った。知らぬ間に暖かな絆ができていった。

もし時を遡れるなら、あのころに戻って、また怒鳴りあいたいものである。（文責　中井）

昭和五十九年この年の定期演奏会は第一二回で、三部形式でした。夏の吹奏楽コンクールは高校三部地区予選で銀賞でした。

昭和六十年の第一三回定期演奏会は四部構成。一部でミュージカル、オズの魔法使いをやりました。初めての試みだったので、うまく行かない部分もありましたが、まあまあの出来でした。第四部前半では、東高校吹奏楽部としては初めて、小数の精鋭部員による「ビッグバンド」を結成し、ジャズを演奏。これが大変好評だったのを今でもよく覚えています。私もSnd.トロンボーンとして出演しました定期演奏会が終了すると同時に、私が部長に就任しました。

この年の夏の吹奏楽コンクールは、高校三部地区予選で金賞に輝くことが出来ました。東高吹奏楽部始まって以来、金賞を取るのは初めてだったので、部員一同、相当な喜びようでした。残念ながら、本選の結果、関東大会に進出することは出来ませんでしたが、それでもよい思い出となりました。昭和六十一年の第一四回定期演奏会は三部構成。前回好評だった「ビッグバンド」今回も実施、今回もなかなか好評で、以後、東高の伝統になると良いと思いました。

私は進学した大学の関係で、一五回以降の定期演奏会を見ることが出来なかったので、未だにビッグバンドが続いているのかどうか知りませんが…。

そしてこの一四回の定期演奏会が終わると、恒例の部長交代が行われ私は部長の役を終えました。すぐに退部して、受験勉強を本格的に始める予定だったのですが、後輩の頼みで、夏のコンクールまでは（親に内緒で）部活動を続けることになりました。部活動を続けた同期の三年生は私を含めて四人でした。コンクールの結果は銀賞で残念でしたが、充実感みたいな物がありました。（文責　山田）

全ての元部長さんに話を伺う暇もなく慌ただしくここに

この一〇年間の記憶を書き留めてみました。振り返ってみますと金賞、銀賞と大いに活躍していた事が偲ばれます。そのような先輩を見習いここ数年の間徐々に力を付けてきたので、また金賞を取るのも夢ではない、今年銀賞を取ったのだからと信じつつ筆を置きたいと思います。

平成三年七月

食物・手芸部

顧問　倉　内　くに子

食物・手芸部は、昭和五十九年度に衛生看護科が若葉看護高等学校に学習の場を移したことに伴い、それまでの被服手芸部と食物部が合併し、一人の顧問のもと、両分野の活動を行うことになった。部の名称も被服手芸食物部という長い名称になり、その後食物・手芸部と改名した。

部活動は毎年文化祭を成功させることに主眼をおき、一年間研究試作を重ね、他の食物団体とは違った手作りの、心尽くしの料理を賞味していただくのが部の心情である。五十九年度は、従来からのオリジナルから流行のケーキまでのメニューで、例年のように食堂経営を行ったが、新たに手作りの苺ジャムを販売した。目的に合う苺を市郊外の苺農家まで摘み取りに行き、学校に持ち帰ってすぐにジャムに加工保存するのである。翌年からは五月の出盛り期で値段の安くなるころ、新入部員歓迎を兼ねて摘み取りに行き、多い年には約五〇キログラムの苺をジャムに加工し、販売して、お客様から売り切れを惜しまれたりもした。

夏休みには合宿をして本番の内容を練習し、ジャムに火を入れ直して小ビンに詰め包装するのである。

しかし、ここ数年間は調理室関係の工事が夏休みを利用して行われ、部活動に支障が生じたが、部員自ら近くの公民館と交渉し、調理室を使わせてもらって、研究試作を積み文化祭を乗り切って来た。

部員は十数名から四〇名近い人数がいたが、文化祭当日ウェイトレスまで手がまわらない年には、オーディションに合格したウェイターに手伝ってもらい、一層盛り上がった雰囲気の中、家庭的な気分で賞味していただいてきた。

六十年度からお持ち帰りいただくケーキやクッキー等にも発展させ、安くて美味しい手作り菓子を喜んで買っていただき好評を博してきた。

手芸分野については、あまり活動していないが、どうしてもやりたい部員のいる年には家庭科の作品と合同で展示

をした。こちらは自分のアイディアを洋服等に作りあげ着用するという喜びが味わえる活動である。

最近部員が減少しつつあり社会の変化の影響を受けていると実感している。家庭には包丁や俎板のない家もあると囁かれ、万事金で解決できる世相のようであるが、美味しい食べ物、美しい物、好きな物を作る喜びや、それらを果たした満足感を体験して欲しいと願っているところである。

ＥＳＳ

顧問　子安雅博

テープを使った英会話練習、読書、フリートーキング、タイピング等、ＥＳＳの活動はさまざまでしたが、四十周年を迎えたころにはその活動に一つの方向性が生まれてきたようです。新入生歓迎会と文化祭で英語劇を上演することが活動の大きな柱となったのです。「足長おじさん」「ベニスの商人」「白雪姫」「かぐや姫」「青い鳥」「若草物語」「森の少女」「賢者の贈り物」「額田王」「アリババと四十人の盗賊」等、数少ない部員で一人数役をこなしながら作り上げる楽しみはなにものにも代えることのできない貴重な体験となったはずです。

その後、部員数は減少し続け、部員が全くいない学年もあり、ＥＳＳの存続それ自体も危ぶまれる時期もありました。

そして最近新しい動きが見られます。国際化が叫ばれはじめてもう随分経ちましたが、東高ＥＳＳにもその波がようやく訪れたようです。現在部員は一〇名。相変わらず小規模集団で、活動場所も定まってはいません。月に数回、水曜日の放課後ＡＥＴ（Assistant English Teacher）を招いて一つのテーマについて英語で議論、意見交換をしています。これまで、「北米と日本の文化の違い」「高校生の制服」などについて話し合ってきましたが、慣れてきたためか話し合いにも熱が入ります。もちろん、前もっての準備、話し合いの手順についての打合せも大切な活動となってい



社会科教室にて

ます。

今後百周年に向かって東高ＥＳＳが文化クラブの中心的存在として、部員数は少なくても中身の濃い活動を続けていかれることを願っています。

演劇部

顧問　沼尻幸男
　　北河貞治

活動記録

八十一年　東雲祭「人の気も知らないで」
　　秋季コンクール「イエス・たぶん」
八十二年　新歓「神無月」
　　春季コンクール「踏みにじられたペチュニア事件」
　　東雲祭・秋季コンクール「精霊流し」→中央大会出場
八十三年　新歓「足のある死体」
　　春季コンクール「ぶらんこ」
　　東雲祭「朝に死す」
八十五年　新歓「崖っぷち」
　　春季コンクール「テープレコーダー」
　　東雲祭・秋季コンクール「受付」
九十年　　東雲祭「ゲーム」

写真部

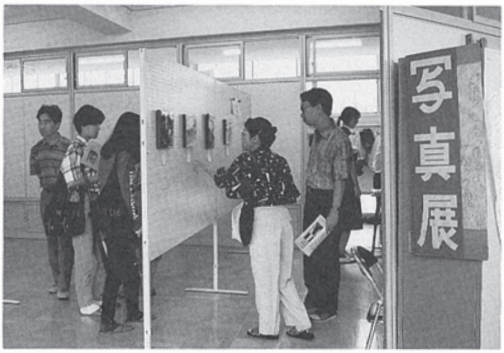
顧問　石田三夫
　　土屋修

写真部は昭和二十七年度、藤末篤二郎先生によって創設され部員は一〇名程度であった。「創立二十周年記念誌」には、部員の中に「小西六主催の写真展に入賞するものもいた」ことが記されている。漸次部員も増加し、昭和五十年代前半には三〇名を数えることもあったが、平成三年度の部員数は一二名である。

写真部の活動内容については、創部以来今日に至るまで、大きな変化もなく、東雲祭に出品する作品の制作を中心に、日々地味ながら着実な活動を続けている。

作品制作のため、以前は部の合宿として、校外へ出かけ、「テーマ」に沿って、各自思い思いに撮影をしていたこと

もあるようだが、少なくとも、ここ数年は部の中の有志で行き先も含め、詳細な計画を立て、自主的に撮影旅行を行なっている。同じ場所に泊り、同じように行動し、お互いにいろいろと検討し合いながら、瞬間のシャッターチャンスを狙うということで、とても良い刺激、良い思い出になっているようである。また、一方では、個人個人で、好みに応じた場所でいろいろな対象物を相手に悪戦苦闘している。



東雲祭での展示風景

放課後になると、設備、環境等、必ずしも恵まれていない暗室にこもり、試行錯誤を繰り返しながら、良い作品を目指し、時間が経つのも忘れて作業をしている。作品の評価は別としても、いずれも苦心作なのである。撮影から一枚のパネルにするまで自分の責任で作り上げるので、作品に対して愛着も湧くようである。機械まかせの時代の中で自分自身の手によるこだわりや温もりのある、そして、満足のいく作品が一つでも多く生まれることを願っている。

茶華道部

顧問　高橋勇雄

茶華道部はその名の通り、茶道と華道の両方の活動をしています。茶道はお茶のたて方はもちろん、すわり方、歩き方、ふすまのあけ方、用具の扱い方、そしてお菓子のいただき方などの基本を練習しています。お点前は単に美しいだけでなく、とても合理的にできているのには関心します。静かな部屋ではお湯の沸く音、歩く時の畳をすべる音が快く聞こえお菓子と一杯の抹茶で心が落ち着きます。放課後のひととき、落ち着いた気持ちになるのもよいものです。家庭ではポットのお湯で抹茶をたててもかまいませんし、お菓子のいただき方、箸の扱い方、となりの人へ挨拶をする心くばりなど茶道を心得ていると毎日の生活に応用できることがたくさんあります。

次に華道ですが、茶道と比較するとかなり創造的で使う材料もお花だけでなく、木やプラスチック、ガラスなどと幅広く、のこぎりで切ったりドリルで穴をあけたりまたペンキを塗ったりして、創造力、表現力を養うのに役立ちます。家庭でも玄関や机の上に花があるだけで心がなごむものです。立派な花器を使わなくてもジュースやウイスキーの空きびんにお花を生けてもかまいませんので、花を愛する心さえあればどこにでも生けることができます。

茶道と華道についてごく簡単にふれましたが、そのいずれも宮内美智子先生にご指導いただいております。宮内先生からは単に技術の習得だけでなく、人生の勉強になることがたくさんあります。

今後も楽しく有意義な茶華道部にしていきたいと思っています。

運動系部

陸上競技部

顧問　古市純久
　　平野俊幸

昭和二十年代に県総体陸上競技大会が開催されてから四十数年の歴史がたったが、本校陸上部の歴史もほぼ同年数を数えるに至った。歴代顧問の熱心な指導が実を結び、県大会はもとより、関東・全国大会においても優勝の栄冠を勝ちとるなど、数々の輝かしい成績を残している。



目指せ!!全国優勝!!

千葉県の高体連陸上登録生徒数も一〇年前の約二倍、六〇〇〇名を数えるに至り、この状況下、本校部員の体力・学力等の変化を考える時、県・関東入賞は非常に厳しいといわざるをえない。しかし、厳しい自己統制のもと、勉学とスポーツの両立を目指し、砂塵舞うグラウンドに青春をかけ、多大な成果を上げている。以下、一〇年間の成績を各年度ごとにまとめた。（県大会決勝入賞以上を記載）

年度	顧問	大会名・成績・期日・場所
57	古市	県高校総合体育大会　5月13～16日（天台） 県1位　円盤投げ46M10　宮沢直人　関東出場 県2位　砲丸投げ15M09　宮沢直人　関東出場 関東高校総合体育大会　6月10～13日（山梨） 関東4位円盤投げ44M80　宮沢直人　全国出場 関東5位砲丸投げ14M90　宮沢直人　全国出場 全国高校総合体育大会　7月30～8月5日 （鹿児島・鴨池総合運動公園） 予選落　円盤投げ43M30　宮沢直人 予選落　砲丸投げ14M60　宮沢直人
58	古市	県高校総合体育大会　5月12～15日（天台） 県5位　110MH　15秒8　佐々木正　関東出場 関東高校総合体育大会　6月9～11日（神奈川） 準決落　110MH　15秒8　佐々木正
59	古市	県高校総合体育大会　5月10～13日（成田） 県2位　400MH　55秒4　佐々木正　関東出場 関東高校総合体育大会　6月15～17日（千葉） 予選落　400MH　55秒7　佐々木正
60	武田 古市	県高校総合体育大会　5月9～12日（天台） 県7位　800M　2分18秒1　飯田洋子 県高校総合体育大会　5月15日～18日（天台） 県6位　100MH　16秒8　置鮎葉子　関東出場 関東高校総合体育大会　6月12～14日（山梨） 準決落　100MH　16秒7　置鮎葉子 県高校新人大会　10月31～11月2日（天台）
61	武田 古市	県2位　3000MSC　9分29秒4　石原崇也 県6位　5000M　15分6秒5　石原崇也 県高校総合体育大会　5月14～17日（天台） 県2位　3000MSC　9分21秒6　石原崇也関東出場 県3位　400MH　56秒4　松本泰祐　関東出場 県7位　1600MR　3分25秒7　江口・樋口・松本・斉藤 関東高校総合体育大会　6月18日～20日（神奈川） 関東1位　3000MSC　9分14秒7（大会新）石原崇也　全国出場　決勝レースでは2位以下を大きく引き離しての石原の独壇場であった。 予選落　400MH　57秒9　松本泰祐 全国高校総合体育大会　7月31日～8月6日
62	古市 武田	

平元		（北海道）
		予選落　3000MSC　9分40秒8　石原崇也　この年、異常寒波のためコンディションを崩し、実力を出しきれなかった。全国10位にランクされていただけに残念である。
63	古市	県高校総合体育大会　5月12～15日（天台）
	武田	県1位　400MH　54秒2　松本泰祐　関東出場
		県2位　400MH　54秒4　樋口　厚　関東出場
		県4位　400M　50秒5　樋口　厚　関東出場
		県7位　1600MR　3分23秒7　神社・松本・江口・樋口（接触のためバトンを落とし、上位入賞が可能だっただけに残念である）
		県7位　総合得点　14点
		関東高校総合体育大会　6月24～26日（千葉）
		関東4位　400MH　54秒3　松本泰祐　全国出場
		予選落　400MH　58秒2　樋口　厚　転倒失敗
		予選落　400M　51秒2　樋口　厚
		全国高校総合体育大会　7月30日～8月4日（神戸）
		予選落　400MH　55秒3　松本泰祐（予選3位で、胸の差で決勝進出ならず）
		県高校新人大会　10月28～30日（天台）
		県8位　200M　22秒66　五十嵐達也

3	古市	県高校総合体育大会　5月16日～19日（天台）
	平野	県7位　200M　26秒7　田中　光
2	先田	
	古市	
鈴木		

剣道部

顧問　富田慶一
松本　孝

本校剣道部の歴史は、県立移管により千葉第三高等学校と校名を変更し、男女共学が実施された昭和二十五年より始まる。当時は戦後日本の剣道復活期であり、それに伴った県下でも最も早い創部であった。

歴代の師範・顧問も（敬称略）第四代校長諸川芳雄・第九代校長畠山一郎・現千葉県剣道連盟会長佐藤清英をはじめ、綱島竹治（故人）・岩本層三・石川宏・高山孝・谷本茂・亘登志雄・本屋敷博・菱木道人・宮部浩司・時田和之・古屋純等々現在でも第一線でご活躍の諸先生方が名を連ねている。中でも平成二年度の人事により、県立検見川

高校に異動された本屋敷博先生（現千葉県高体連剣道専門部委員長）は一七年間という長きに渡り本校剣道部を指導され、現在の剣道部の精神・形を築かれた方である。現在は後任として県立佐倉高校より着任した富田慶一（錬士六段・体育）の他、松本孝（英語）鈴木富士夫（社会）吉田正（国語）といった豊富な指導陣の下、活発な活動が展開されている。また、卒業生も第三十七期四〇九名を数え、その中には現千葉大学教育学部助教授田島行夫氏（第二期卒）をはじめ、県内外で指導者としてご活躍中の方々も多数輩出している。



氣魄

現在の部員は年々減少する子供人口を反映してか、数年前にあった五〇余名の大所帯とはいかないが、男子二〇名、女子九名が良くまとまり、短時間であるが、日々熱心な稽古に汗している。

剣道は勝つことだけではなく、その理法の修練により、人間形成を行うことを目的とした競技であるが、それを常に旨とし、輝かしい伝統と栄光を残していただいた諸先輩方に負けぬよう、今後も活気ある活動を実践していきたい。

柔道部

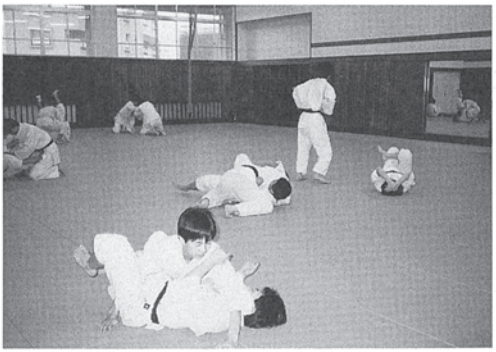
顧問　宍倉健司

本校柔道部は、昭和二十五年に千葉第三高等学校として男女共学が実施されたとき、共学による男子の女性化を防ぐ目的で、生徒会組織の中に、剣道部・野球部・ラグビー部とともに勇壮な男性的な部活動として発足しました。創部当時は部員も少なく、白帯だけで大会に出場していましたが、年々増加し、活動もますます活発化してきました。

昭和三十二年には県大会を勝ち進み、本県代表として第五回関東大会に出場し、本校柔道部の名を県下にとどろかせました。昭和三十九年には、松岡伸泰先生が顧問となり、その熱心な指導は着実に実を結び、昭和四十四年には、第十七回関東大会に本県代表として出場しました。昭和四十六年の本校三十周年記念の年には、県新人柔道大会第二部でみごと優勝に輝いています。

昭和四十七年から、江口憲治先生（現幕張北高等学校）にバトンタッチされ、昭和五十年ごろからの全国的な部員減少傾向と、加えて本校における柔道経験者の入学が皆無に等しいなかで、「文武両道」の精神をモットーとして、熱心な指導が続けられ、部員数も減少することなく現在に受け継がれています。

試合成績では、団体戦で県ベスト8をめざし、何度となく挑戦しましたが、ベスト8の壁は厚くベスト16が七回という記録を残しています（昭和四十七年～昭和六十三年の間、前顧問江口憲治先生談）。個人戦では、島崎泰君（昭四十九年卒）が無差別級でベスト8・大津山高司君（昭五十七年卒）が関東大会県予選（無差別級）で軽量級ながら、ベスト8・全国大会県予選（軽量級）で第三位の成績を残しています。



新武道館での練習風景（昭和62年）

本校柔道部を卒業して指導者として活躍している者の中には、昭和五十六年卒の黒川康宏君（現沼南高柳高校教諭）、昭和五十七年卒の大津山高司君（現松戸秋山高校教諭）、同年卒の石川靖君（現佐原津宮小）などがいます。

平成元年四月より、一七年間にわたり御指導をいただいた江口先生から宍倉健司（昭和三十五年卒の柔道部）が顧問となり、部員数二九名（女子一名）という大人数で、昭和六十年三月に落成した新武道館内柔道場において毎日熱心に活動を続けています。

サッカー部

顧問　大谷芳孝
　　長野一徳

昭和四十二年四月、二年生の三須博直君がその年着任した青山克先生に同好会の顧問を依頼。明確な返答は保留されたが、生徒たちは同好の友を集めて自主的に練習を開始する。学校側も職員会議で同好会を認めるか議論。グランドの手狭さ・既存の他部の練習への支障・危険であること

等、設置は難航したが、生徒たちが自重して練習を重ねたことが好感を持たれ、体育主任石川宏先生、生徒会顧問黒川泰治先生のお骨折で四十三年同好会として認められた。ただし、練習は朝練習に限られていた。

以下〔年度　主な戦績等〕を挙げると、

〔46　県総体準優勝・関東大会出場・7月部へ昇格〕
〔47　県新人戦ブロック優勝（県下3ブロック）〕
〔48　県総体ベスト8・県選手権ベスト8〕
〔49　県総体ベスト8・県新人戦ベスト8〕
〔51　県総体4回戦進出・県新人戦ベスト8〕
〔52　県新人戦第3位（この代の主将布啓一郎君は53国体に県代表選手として活躍）〕



第70回選手権大会県1次予選2回戦（相手ゴール前）この後3、4回戦とも勝ち県決勝トーナメント出場。

これ以後はサッカー加盟校の増加により、また特に千葉地区は県下の激戦地区として強豪がひしめき、ブロック予選を勝ち抜くことも難しい状況になる。

〔58　県総体出場〕

そして今日に至る。この間創設～五十五年までは朝練習のみ。翌年以後は朝練習は週一回だが、グランド半面をラグビーと共用する状況の中各代の部員たちはよく頑張っている。

（平成三年六月末現在部員数三年九・二年二六・一年二一）

各期の主な顧問は、青山克（43～57）、梶原由紀夫（50～51）、北河貞治（58）、渡辺隆（59～元）

なお現顧問大谷（3～）、長野（元～）は在任期間が短く、本稿は青山先生が「四十周年誌」に書かれたもの及び渡辺先生からお聞きしたこと等をもとにしました。不正確な記述、敬称の省略等、失礼の段お許しください。

卓球部

顧問　鶴岡敏雄

卓球の活動は、創立された昭和二十六年から既に四十年続いている。私が顧問になったのは昭和五十八年であるが、その当時卓球場は現在のトレーニング室だった。そこには

卓球台は少なくとも六台は置け、現在三台しか置けない格技館一階左半分のフロアの倍の台数で、床はがたぴし音がしたが、部員数には適当な広さであった。

当時から現在までの部員の練習状況を振り返ってみると、特にコーチはいないので、部長が大体部員の練習計画を作成し、実施しているが、その年度の部長の部員に対する態度が厳しいか穏やかかで部員の練習内容は異なる。すなわち部長が厳しい年は練習量が多く内容も厳しいが、逆の場合は練習量も少なく、のんびりしたものになっている。

またこの五、六年間に卓球部に全国的な異変が起こっている。それは女子卓球部員の数が年々減少していることだ。

女子には卓球の人気はなくなったのであろうか。極端な例では千葉女子高校では卓球部員は一人もいないそうだ。本校でも女子卓球部員ゼロである。もう一つの異変は、部が同好会的な雰囲気になったことだ。以前の部員は、時を惜しんでがむしゃらに練習したが、最近の部員は放課後のんびりと出て来て卓球を楽しんでいるようだ。今年は千葉県で世界卓球選手権大会があったが、その割に今一つ盛り上がりに欠けるようである。しかし今年度の部員はよく頑張り、県下でベスト16に入った。

戦績・記録（昭和五十八年以降）

年度	大会・成績
昭和58年9月	鈴木多美　県民体育大会秋季大会で、千葉市代表チームの選手になる。
昭和59年9月	須長祐悟　県民体育大会秋季大会の選手に選ばれる。
60年	総体男子W山口・渡辺組一回戦
	男子S渡辺　四回戦（ベスト8）
	男子S山口　一回戦
	男子S森　一回戦
60年	新人戦女子W永島・富沢組一回戦
61年	総体男子S土屋　一回戦
平成元年	総体男子S横田　二回戦
	男子S国平　二回戦
3年	関東大会学校対抗　二回戦（ベスト16）
	総体　学校対抗　二回戦（ベスト16）

テニス部

顧問　越川芳雄

ここ一〇年間におけるテニス部の最大の変化は軟式から硬式への種目変更であろう。変更の経過は次のとおりである。

当時の顧問であった北河貞治先生の話によると、昭和五十九年頃は軟式テニス部の部員が年々減少しつつあり、新人戦が終わると二年生が男女とも一、二名しか残らず、一年生が多数という状況が続いていた。一方で盛んになりつつあった硬式テニスへの潜在的要望は強く、この動向を見定めた顧問の野口宏、吉川哲、北河先生が協議し、昭和五十九年十一月十四日の職員会議に以下の提案を行った。

テニス部（男子）の競技内容の変更について

一、対象　テニス部（男子）

二、変更事項　軟式球の使用を、硬式球のそれに変更

三、趣旨　(1)　昨今の硬式球使用の隆盛による変更への強い期待

(2)　本校における数次の硬式テニス部新設の要望

(3)　現テニス部男子の硬式球使用の要望による機会の到来

四、部・同好会規約との関係

(ア)　新規手続の必要の有無について

新規とは次のような場合である。a、新たな部員予定者がいること。b、新しい顧問がいること。c、新たに活動場所があること。d、新たな生徒会予算を必要とすること。

今回については、現部員、現顧問、現活動場所、現予算のワク内での変更であり、以上の条件に該当せず、したがって部同好会協議会及び生徒会などの承認手続は省略されると思われる。また他の部・同好会活動への影響はない。

(イ)　廃止の手続の必要の有無について

(ア)に、準ずる。

(ウ)　前例として残る時の不測の事態の有無について

部員、顧問、活動場所、予算、他の部、同好会活動への影響の全てにおいて今回と全く同じ事態が生じる時のみ

前例となる。したがって、今回の変更を例として、今後に部同好会の存廃をめぐる大きなトラブルが生じることはないと思われる。

五、留意事項

(ア) 変更は当面男子テニス部のみとする。

(イ) 年度途中なので、新部員の募集は原則として行わない。

この結果、生徒会代議委員会での承認を必要とするという付帯条件つきで、原案どおり承認され、同委員会の承認を経て硬式球への競技内容の変更が実現した。

女子部は、なお軟式で一年余り活動を続けた。しかし、昭和六十二年には二年生が三名となり、一年生部員の硬式テニスへの要望も強く、同年六月五日に男子と同様の趣旨で、「テニス部（女子）の使用球種と競技内容の変更について」として、職員会議に変更申請がなされ、了承された。その際職員会議録には経過説明として、次のように記されている。

「男子の時と同様、軟式であることを理由に、年々入部希望者が減り、今回二年生は三人だけになり、内二名はまだ初心者並みの技術で、後輩を指導しきれない。この状態ではいっそのこと硬式にした方が将来性があるということで話し合いを重ね、五月上旬のミーティングで部員の圧倒的多数の賛成を得ている。ちなみに男子部員は現在一～二年で六〇名位居る」

変更後の男女硬式テニス部は部員も増え、めざましい活躍を続けている。男子は、変更後の初年度（昭和六十年度）から転校生の中町昭人君の活躍もあり、九月の新人戦ブロック予選で団体優勝を遂げ、以後ブロック予選では毎年のように優勝か準優勝を果たしている。また平成元年度の県大会と関東大会県予選、（部長・杉原寿史）及び平成二年度新人戦県大会（部長・石神幸一郎）では、ともに団体戦でベスト8という好成績を残している。女子も男子ほどはなばなしくはないが、昭和六十二年には九月の新人戦ブロック予選で男子とともに団体戦アベック優勝を果たしている。

設備の面では、平成元年度にテニス・コートの全面改修が夏休み前後一か月を費やして行われ、従来、一年生部員の苦労の種であった手引きのライン引きを行わないでも済む、テープ式鋲止めのラインとなり、水はけも格段に良くなった。

現在、平成三年四月末における部員数は男子六九名（内一年三五、二年一三、三年二一）、女子三七名（内一年一

四、二年一二、三年一一）である。この間の顧問としては、野口宏、北河貞治、吉川哲、向笠勝也、長崎清一の諸先生が担当され、現在は内田寛、越川芳雄、成澤尚子の三人で指導している。

バスケットボール部

顧問　西村　ひとし

バスケットボール部は市立高女時代より始まったが、定かではない。三高となり男子が入学し、活発化した。昭和二十八年卒の中沢袖男氏、山本泰道氏を筆頭にした男子部員名簿が残っているが、女子はまとめられていない。昭和二十九年度より松本貞雄先生が顧問となり、奥山浩先生（現県教育次長）・高橋（森吉）浩先生（現袖ケ浦高校長）と続いたころ充実期を迎え、昭和三十八年度卒の三上真人氏（現千葉市バスケットボール協会理事長）らを中心にOB会（三葉会）が活発に交流し、現役選手の激励をしている。昭和四十四年度より佐藤昭勝先生（現柏井高校）が顧問となり、県ベスト8の常連となり、昭和四十六年度仁藤正己主将、高村幸宏氏（県千葉高）らの活躍で関東大会へ出場した。女子では昭和四十八年度に高中智恵子主将のもと県ベスト8になったのが特筆されよう。

このころより大学進学率が向上し、学業との両立に悩む生徒が多くなってきた。昭和五十六年度より西村ひとしが顧問となり、一日二時間の集中した練習を心がけ、この一〇年間に男子九三名、女子七三名の卒業生を輩出し、各方面で活躍している。戦績では昭和六十三年度に阿部克信主将のもと県ベスト8に入り、当時全国レベルにあった市立船橋高校にさわやかな大敗した。平成元年度は福地輝至主将のもとベスト8で久々の関東大会を目ざすも台頭著しい拓大紅陵高校に惜敗した。県大会出場もむずかしかった女子は平成二年度に小



平成3年度総合体育大会県大会
第3回戦（対愛国学園と）

池朋美主将のもと元気な一一人が久々の県大会出場を果たし、ついで平成三年度は土原知子主将のもと五人だけの三年生でみごと県大会へ出場し、三回戦で元校長の畠山一郎先生引いる愛国学園に大接戦し惜敗し、先生からお誉めの言葉をいただき感激したのもつい最近のことである。

本校バスケットボール部は、その時その時を精一杯努力し、悩みのない高校生活にしようと日々がんばっている。

バレーボール部

顧問　青　柳　伸一郎

前顧問野村松三先生より部を引き継いで、はや一〇年の年月が流れてしまいました。いままで数多くの諸先輩と優秀な成績を残してきたバレーボール部ではありますが、ここ一〇年間においては、昭和五十六年の関東大会出場を最後に成績は不振を続けています。しかし、多くの諸先生や諸先輩の方々から受けつがれた基本に忠実なバレー、明るく活気のあるバレーボールについては、今もなお生き続けています。

この一〇年間で大きなことが二つありました。ひとつは、女子についてです。衛生看護科が分離独立し、県立若葉看護高等学校として発足したことです。そのため、部員は、幕張にある若葉看護から、毎日練習に駆けつけ、ともに汗を流し、時として涙しながら練習に暮れたこと、そして、昭和六十年総合体育大会の県大会において、初戦で敗れはしたものの、千葉東高等学校として、ひとつになってプレーしたのでした。また、その時に留学生エミリーがいたことも忘れられません。



昭和60年度千葉県高等学校総合体育大会バレーボール競技（5月11日～13日公園体育館その他）

今ひとつは、体育館の改修工事です。

昭和六十一年夏に小さいながらも、体育館の片側に二コートとれるようになりました。その中で、男女いっしょ

に練習をしています。ですから、今の生徒たちは、アウトコートでのスライディングレシーブや回転レシーブなどを体験することはないでしょう。

男子主将　宇都宮敦、女子主将　川森美奈子を中心に、総勢五〇名余りが、ところ狭しと活動を繰り広げています。

戦績

男子

年度	大会名・成績
56	県高校総体　四回戦（ベスト8）
	関東県予選　（ベスト5）
	関東大会　二回戦（於川越市）
	県国体予選　五回戦（ベスト8）
	県新人大会　一回戦
57	県高校総体　二回戦
	県国体予選　一回戦
	県高校新人　一回戦
58	県高校総体　二回戦
	県国体予選　二回戦
	県高校新人　一回戦
59	県高校総体　一回戦
	県国体予選　二回戦
	県高校新人　二回戦
60	県高校総体　三回戦
	県国体予選　二回戦
	県高校新人　三回戦（ベスト16）
61	県高校総体　三回戦
	県国体予選　一回戦
	県新人大会　二回戦
62	県高校総体　三回戦
	県国体予選　一回戦
	県新人大会　一回戦
63	県高校総体　三回戦
	県国体予選　一回戦
元	県高校総体　二回戦
2	県高校総体　二回戦
	県新人大会　一回戦
3	関東県予選　一回戦
	県高校総体　四回戦（ベスト16）

女子

年度	大会名・成績
56	県高校総体　一回戦
	県国体予選　一回戦
	県高校新人　一回戦

57	県国体予選	一回戦
58	県国体予選	二回戦
59	県国体予選	一回戦
60	県高校総体	一回戦
	県国体予選	一回戦
61	県高校総体	一回戦
63	県高校総体	一回戦
元	県高校総体	二回戦
3	県高校総体	二回戦

の御協力、御理解を頂いております。

全国高等学校野球選手権千葉大会

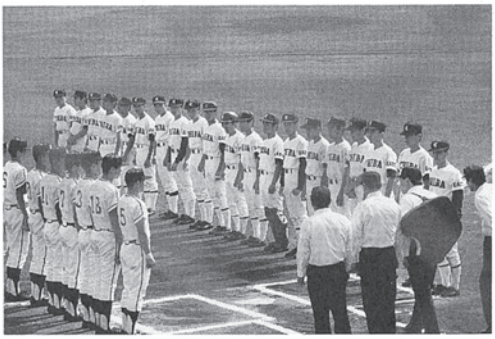
第33回（昭26年）	二回戦	千葉二	3対4	旭農
第34回（昭27年）	二回戦	千葉二	3対15	船橋
第35回（昭28年）	一回戦	千葉二	0対12	佐原一
第36回（昭29年）	二回戦	千葉二	2対3	山武農
第37回（昭30年）	一回戦	千葉二	6対1	一宮商
	二回戦	千葉二	0対4	成田
第38回（昭31年）	一回戦	千葉二	5対2	千葉経

野球部

顧問　津嶋英也

野球部の創部は昭和二十四年になってからと聞いています。夏の大会（全国高等学校野球選手権千葉大会）に初めて出場したのは、昭和二十六年の第三十三回大会からです。当時は三五校のチーム数であったようです。平成三年の出場校は一七四校となっています。

野球部が今日ここにあるのも、歴代の顧問の熱意と、OB各位の温かい御支援の賜と深く感謝いたしております。また、平成元年には野球部保護者会も発足し、多方面から



第73回全国高等学校野球選手権千葉大会
（平成３年７月）

二回戦　千葉二　6対8　船　橋
第39回（昭32年）一回戦　千葉二　0対2　商大付
第40回（昭33年）一回戦　千葉二　17対1　東　邦
二回戦　千葉二　2対3　市原一
第41回（昭34年）一回戦　千葉二　5対2　大多喜
二回戦　千葉二　4対2　千葉工
三回戦　千葉二　0対10　成　東
第42回（昭35年）一回戦　千葉二　11対4　千工商
二回戦　千葉二　1対4　市銚子
第43回（昭36年）二回戦　千葉東　8対2　安房農
三回戦　千葉東　3対0　市川工
準々　千葉東　1対15　茂原農
第44回（昭37年）二回戦　千葉東　0対6　佐　原
第45回（昭38年）一回戦　千葉東　5対3　君津商
二回戦　千葉東　6対11　成　東
第46回（昭39年）一回戦　千葉東　8対1　木更津中央
二回戦　千葉東　0対1　市　川
第47回（昭40年）一回戦　千葉東　4対3　佐　原
二回戦　千葉東　7対5　木更津
三回戦　千葉東　2対3　専大松戸
第48回（昭41年）一回戦　千葉東　5対0　柏日体
二回戦　千葉東　1対5　千　葉
第49回（昭42年）一回戦　千葉東　2対1　市川工
二回戦　千葉東　2対9　木更津中央
第50回（昭43年）二回戦　千葉東　16対0　県敬愛
三回戦　千葉東　1対6　木更津中央
第51回（昭44年）二回戦　千葉東　8対1　房総農
三回戦　千葉東　2対1　成　田
四回戦　千葉東　2対5　千葉商
第52回（昭45年）二回戦　千葉東　4対3　流　山
三回戦　千葉東　2対6　市立銚子
第53回（昭46年）二回戦　千葉東　0対6　天　羽
第54回（昭47年）二回戦　千葉東　2対1　下総農
三回戦　千葉東　1対7　国府台
第55回（昭48年）二回戦　千葉東　12対2　京葉工
三回戦　千葉東　3対4　成　田
第56回（昭49年）一回戦　千葉東　4対1　安房農
二回戦　千葉東　1対3　東総工
第57回（昭50年）一回戦　千葉東　0対7　匝　瑳
第58回（昭51年）二回戦　千葉東　2対0　大　原
三回戦　千葉東　1対8　柏
第59回（昭52年）一回戦　千葉東　1対11　佐　倉
第60回（昭53年）一回戦　千葉東　0対10　佐　倉
第61回（昭54年）二回戦　千葉東　5対9　鎌ケ谷
第62回（昭55年）二回戦　千葉東　2対3　野田北
第63回（昭56年）二回戦　千葉東　4対7　成田西
第64回（昭57年）二回戦　千葉東　9対8　船橋二和
三回戦　千葉東　5対0　千葉南

	四回戦	千葉東	2対4	天羽
第65回（昭58年）	二回戦	千葉東	0対2	市柏
第66回（昭59年）	二回戦	千葉東	11対3	流山中央
	三回戦	千葉東	7対3	古和釜
	四回戦	千葉東	1対5	成田
第67回（昭60年）	一回戦	千葉東	9対4	千葉
	二回戦	千葉東	3対5	松戸馬橋
第68回（昭61年）	二回戦	千葉東	0対5	木更津中央
第69回（昭62年）	一回戦	千葉東	8対1	下総農
	二回戦	千葉東	16対0	関宿
	三回戦	千葉東	1対4	東金商
第70回（昭63年）	二回戦	千葉東	5対11	昭和秀英
第71回（平元年）	一回戦	千葉東	1対2	千葉南
第72回（平2年）	一回戦	千葉東	6対2	沼南高柳
	二回戦	千葉東	1対12	君津商
第73回（平3年）	一回戦	千葉東	3対4	千葉北

ラグビー部

顧問　木村香住
　　外山貢

ラグビー部の創部は昭和二十六年にさかのぼり、千葉県高校ラグビーの歴史と共に発展して来ている。指導者も創部時の網島竹治先生から、野村典平、亀忠夫、小川武久（故人）、本城一隆の諸先生方と当時の部員たちの努力によりおのおのの時代が築かれ、今日まで受け継がれて来ている。

昭和五十六年までの記録については創立四〇周年記念誌に詳しいので、その次の時代を中心に書き記すこととする。この一〇年間は先輩からの継承と生徒の努力が大きく開花した一〇年であった。この間に全国大会へ四度出場し、三回戦に進出するまでに成長した。特に全国大会への出場は、そのバックアップ体制を整えるために、現役生徒、卒業生、保護者、学校や同窓会との関係を一層強めることにつながった。また、当時の卒業生を中心に県教育界に多くの人材を輩出しているのも心強いこ



2度目の全国大会出場。3回戦へ進出す。

とである。現役生徒も五〇周年の区切りに五度目の全国大会を目指し頑張っている。

主な成績、全国大会県予選優勝七回（内四回全国大会出場、新人大会優勝五回、県総体優勝十一回、関東大会出場二五回。）

ここ一〇年間の記録

年度	春県総体	全国予選	新人大会	
57	優勝	優勝	二位	
58	二位	優勝	二位	全国初出場　二回戦
59	二位	二位	ベスト4	
60	優勝	優勝	—	全国出場　三回戦
61	ベスト4	—	優勝	
62	—	優勝	—	全国出場　二回戦
63	二位	優勝	ベスト4	全国出場　一回戦
元	優勝	二位	—	関東大会選手宣誓
2	—	—	—	
3	—	—	—	

水泳部

顧問　谷口哲也
伊藤毅

プールの落成は昭和三十三年のことだった。それを待っていたかのように三十四年度の学校要覧には水泳同好会の文字がある。翌三十五年には部に昇格している。創部わずか二十余年の我が部であるが既にすばらしい記録が生まれている。昭和六十一年の三年生荒川秀明君は全国高校総体、国体にまで出場した。国体において彼がメンバーとなった八〇〇mリレーの記録は二年間県高校記録として残った。現在の我が部には県代表レベルの選



91年高校総体（於県水泳場）

手こそいないが、多くの部員が試合のたびに自己最高記録を更新し、周囲からも評価されている。部員は、各自が目標を設定し、その達成のための練習スケジュールに従い、毎日薄暗くなるまで泳いでいる。上級生、下級生は練習中気軽に互いに話し合い、指摘し、相談し合っている。このような伸び伸びとした雰囲気の中で練習できることが功を奏しているのかもしれない。毎年夏休みに行われる合宿では、今年も食事の準備からすべてを二〇名の部員が助け合ってしっかりこなした。

現在の部員が直接対面することはほとんどない先輩方の思い出の品に、部室では出会うことがある。戸棚の隅から試合の記録や日頃の思いを綴ったノートなどが出てくる。それを見ながら、部員たちは先輩の姿を思い浮かべ、伝統を感じているのだろうか。

山岳部

顧問　武田健之介
菅野政敏

山岳部の活動の五〇年の歴史を通覧するにあたっては、まず、「四十周年誌」で前顧問大沢先生がまとめられた資料を参考にしました。それに続く最近一〇年間の活動状況についてもほぼ同様の項目でまとめ、活動の変遷を辿ってみたいと思います。


北アルプス槍ケ岳登山

最近は若者が山から姿を消し、それに代わって中・高年層の登山がいよいよ活況を呈していると言われていますが、この傾向そのままに、本校山岳部でも嘗ての先鋭的で意気軒昂たる山への姿勢が影をひそめ、最近三、四年は山行活動が停滞気味であるのは残念です。以前のような山へのひたむきな情熱をもった活動・気風が伝統として培われるよう願っています。

年度	顧問	リーダー	主たる山行	備考
25				
26	佐々木		夏、三ツ峠	男女共学となる
27	〃		夏、上高地（西穂、焼岳）	初めて登山部の名称を用いる。ただしラグビー、野球等かけもち多し、右三年のうち一度岩原へスキー。
28	〃		夏、志賀高原	
29	木島	藤田	11丹沢（県大会）	高体連加盟。
30	〃	伊藤	春、丹沢（新人歓迎沢上り） 7鳳凰三山（県大会） 8後立山縦走 12～翌1不帰東面の偵察	この年と翌年女子の入部認めず。 部員の喫茶店、映画、スキーを禁止。
31	〃	有沢	7木曽駒（県大会） 8涸沢（前穂東壁、滝谷）	「ケルン」創刊
32	〃	山本	7尾瀬（関東大会、女子） 8涸沢（同前年）	「三高アルペンクラブ」発足。かけもち部員なくなる。
33	〃	小出	5房総（関東大会） 金峰（県大会） 8立山縦走	右を「シャロンアルペンクラブ」と改称。前年の会結成時カラコルム遠征を決議。
34	〃	釜石 石橋	8浅間（県大会）峯	
35	〃	河野	8赤城（県大会）	「ケルン」12号。
36	〃	古市	8北（剣、三俣連峰、槍）	
37	〃	石崎	8北ア（白馬、鑓黒部、剣）	以上夏合宿は10日から二週間程。
41	野村 長谷川		8北ア（剣、薬師、槍）	OB竹内氏カラコム遠征。
42	〃	矢崎	3北八ツ（双子池、横岳） 8南会津（朝日、丸山、北沢、銀山湖）丹沢（女） 12北八ツ（横岳付近）	以下46年頃まで部員は多い時で男子6～7名女子4～5名。
43	〃	本郷 伊藤	3北八ツ（同前） 8南ア（茶臼、聖） 尾瀬（女子）	
44	〃	秋山	3北八ツ（同前） 8南ア。北ア（槍、	OBヒマラヤ遠征

45	〃			穂＝女）
				3北ア（遠見尾根）
				8北ア（八方、唐
				松、五竜）
46	〃			3北ア（遠見尾根）
		斉藤		8南ア（山伏、赤
				石、聖）
				8笹ヶ峰、火打
				（女子）
47	〃	磯		3北ア（猿倉、大
				雪渓）
		斉藤		8南ア（山伏、塩
		（妙）		見、濃鳥間、北岳）
48	〃	中村		八ツ（女）
		友野		8北ア（栂池、白
				馬、唐松、五竜、
				鹿島槍、針の木）
49	中村	鈴木		8北ア（横尾―蝶、
	長谷川			槍、穂）
50	〃	阿部	栗原(5)	
51	大沢	吉海		3奥多摩
	長谷川			8北ア（常念、大
52	大沢	井沢		天井、槍）
				3奥多摩
				8飯豊（三国、大

				日、飯豊）
53	〃	山口		4飛竜、雲取
		吉田		8南ア（北岳、台風来る）
54	大沢	出石		8八ツ（天狗、硫
				黄、横岳）
	小沢	岡田		（赤岳、権現＝女子）
				〈男子台風で中止〉
55	〃	坂本		3八ツ（赤岳鉱泉、
				講習会）
		牧之瀬		4日光白根（五色、
				白根）
				8後立山（白馬、
				鑓、五竜）
56	〃	篠目		8北ア（常念、燕＝
				女子）
		莞倉		3八ツ（同前、女子）
				4尾瀬（至仏）
				8南ア（赤石、悪
				沢＝男女）
57	〃	古屋		8八ツ、北ア（剣、
				立山）北ア（蓮華、
		伊藤		針の木、鹿島槍
				＝女子）
				3尾瀬（燧ケ岳）

58	〃	田中	8飯豊(三国、飯豊＝男子)	1「ケルン」27号
		山口	北ア(燕、蝶＝女子)	1雪上講習会(安達太良) 個人山行13回
59	大沢	小山	7北ア(燕、槍、穂＝男子)	1雪上講習会(安達太良)
		田中	八ツ(天狗、硫黄、赤岳＝男・女)	1「ケルン」28号
60	〃	渡辺	3尾瀬(至仏＝男子)	個人山行14回 部員男子28女子8
			7南ア(塩見・仙丈＝男子)	11男子奥東大会出場(鳳凰三山)
			3日光白根(五色、白根)	1雪上講習会(安達太良)
61	石武田堂	小池	7南ア(荒川、途中撤退)	1「ケルン」31号
			11八ツ(赤岳、権現)	個人山行4回
62	〃	三浦	3尾瀬(燧ケ岳)	部員男子20
			7北ア(朝日、白馬)	1「ケルン」32号
			3日光白根(五色、白根)	個人山行4回 部員男子16

63	平元	小武澤田	7北ア(野口五郎、槍＝男子)	2「ケルン」33号
		若名	8北ア(蝶ケ岳＝女子)	個人山行6回 6安全技術講習会(丹沢)
		菅野	10八ツ(赤岳、権現＝男子)	部員男子20女子2
		吉田	3尾瀬(至仏)	
			7南ア(甲斐駒、仙丈、農鳥、北岳＝男子)	2「ケルン」34号 個人山行3回 5安全技術講習会(丹沢)
			8飯豊(三国、飯豊＝女子)	部員男子16女子2
			11会津駒(男子)	
			3尾瀬(燧ケ岳)	3「ケルン」35号 個人山行4回 5安全技術講習会(丹沢)
2	〃	大村	7北ア(薬師、黒部、五郎、槍＝男子)	部員男子13女子5
			8北ア(蝶、常念、燕＝女子)	
			9尾瀬(燧ケ岳＝女子)	
			11八ツ(硫黄＝男子)	
			3尾瀬(至仏＝男子)	
			安達太良(女子)	

ソフトボール部

顧問　犬田勝昭

ソフトボール部は、前顧問の安塚正明教諭（現八千代高教諭）が昭和四十九年四月に生徒とともにソフトボール愛好会として設立したのが始まりです。その後、校地の狭い本校において活動場所がない等の理由によりなかなか部へ昇格しませんでしたが、安塚教諭の熱意あふれる指導と生徒たちの地道な精進努力とが実を結び、昭和五十四年二月に職員会議において部として承認されたのでした。以来一三年、かつては輝やかしい活動の記録を残していることは創立四十周年記念誌にも記載されている通りです。



楽しくハツラツと戦い終えて

そこで、ここでは簡単に昭和五十七年度以降、今日に至るまでの一〇年間をふりかえって記録にとどめたいと思います。昭和五十六年度に三つの県大会（県総体・全日本予選・新人戦）でベスト4に入った本チームは、五十七年度には全日本予選でベスト8、勝又杯（県民大会二部）で準優勝をしています。五十八年度には全日本予選と新人戦でベスト8に入り、五十九年度には県総体と全日本予選でベスト8入り、勝又杯大会で準優勝という記録を残しています。しかし、このころより部員の人数が集まらず、また、せっかく入った部員が途中でやめてしまうといった事態にみまわれるようになりました。全県下一二〇チームを超えるチーム数で全国でも屈指の高校女子チーム数を誇る千葉県の中にあって、県でもベスト4やベスト8を維持し続けるためには、それなりの激しい練習が必要となってきますが、中学校での経験者や優秀な選手であった者もほとんどいないチームが、自らの努力でその力を維持し続けることへの一つの壁につき当たったのでした。そのため、平成元年度以降は、競技スポーツとしての激しくきびしい連日の練習から、生涯を通じて

のレクリエーションスポーツの展望をもった、新しい部の生き方をめざして、部員不足の危機をのりこえて、一生懸命、楽しく、生き生きとしたソフトボール部をめざして活動を続けている今日です。

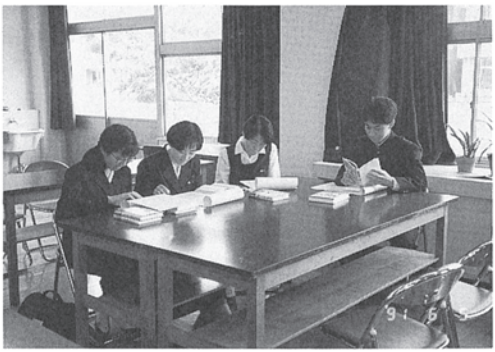


同好会

歴史研究同好会

顧問　須藤信夫
吉田秀樹

昭和四十七年十一月に地方史研究協議会が千葉市で全国大会を開催し、地方史研究に新しい刺激が与えられ県内各高等学校でも歴史研究の動きが高まりましたが、その流れの中で昭和五十年に我が東高でも歴史研究同好会が結成されました。発足当初は、土屋賢泰先生（現在県立千葉高校勤務）と斉藤健司先生（現在県立千葉高校勤務）のもとで、各地を調査のために歩いたり、それぞれがテーマをもとに討論をしたりと活発な活動が展開されたとうかがっています。研究成果は毎年の文化祭で発表されましたが、特に昭和五十四年度の文化祭では「イスラム世界」・「第二次世界大戦の戦場」・「南北戦争」・「坂本龍馬論」・など各分野入り乱れての発表があり、大変華やかな印象を与えました。このころまでの歴研の活動は、各自が自由な研究テーマを設定して発表するというもので



レポートを協議中の部員たち

したが、一方では、部員の間で共同研究の意義と必要性がたび重ねて議論されてきました。昭和五十五年度の文化祭では、この議論が実を結び、全部員による縄文式土器の製作発表が行われました。これは県立図書館での文献による勉強会や加曽利貝塚の見学、館員からの製作技術上の説明、などをへて達成されたもので歴研の活動史上画期的なことであったといえます。その後も文化祭での活動成果の発表は続きますが、ふり返ってみるとこのころが歴研の一番輝いていた時期だったようです。ここ数年は中心部員の多くが他の部活動とのかけ持ちであるということもあって文化祭での活動成果の発表さえできない状態になっているのは大変残念なことです。平成三年度現在、部員は三年生一名、一年生三名と小世帯になっていますが、毎週水曜日にはそれぞれのテーマをもちよって討論をし、自分達の研究成果を深めあっています。今後もこれまでのよき伝統を生かしながら、活動内容をより充実したものにしてゆきたいと考えています。

JRC（青少年赤十字）同好会

顧問　長谷川　充

本校のJRC同好会は昭和三十四年に発足した。伊勢湾台風のあった年である。

当時の校長・石毛貞雄氏の音頭で、「JRCを理解しよう」という小冊子を全校生徒に配布。秋には橋本祐子氏を招いて講演会を開催した。その講演に触発された生徒たちが赤十字の旗のもとに集うたのである。

ボランティア活動を学校教育の中に位置づけるという試みを、かなり早い時期に行った例として評価されている。

昭和四十一年には衛生看護科が本校に開設され、活動も更に活発になってくる。

昭和五十二年にＪＲＣ研究推進校に指定され、昭和五十五年には日本赤十字社より感謝状を贈られる。その活動も全県的に評価されるようになり、千葉県青少年総合対策本部の推薦でライトブルー少年賞を受賞した。

しかし、昭和五十九年、県立若葉看護高等学校の開設に伴い、本校の衛生看護科が生徒募集を停止。以後、ＪＲＣ同好会会員数が皆無という年が三年間続き、活動も中断された。

名目だけの同好会の整理が云々される中で、昭和六十二年、ＪＲＣの灯を消すまいと男子生徒三名が集まり、活動を再開。開発途上国への医療援助を目的とする古切手の収集、災害時の緊急援助のための一円玉募金を常時活動として設定。活動を続けるうちに意気に共鳴した生徒が加わり、その年の末には会員数一二名を数えるまでになった。



平成２年度、夏の他校との合同宿泊研修

平成三年現在、会員数一九名。常時活動としての古切手収集、一円玉募金にあわせ、ネパールの井戸掘り救援バザーを行うために東雲祭に参加したり、交通遺児育英募金や赤い羽根の共同募金に協力する等、活動の幅も広がってきた。

なお、夏・冬に行われる、県下のＪＲＣ加盟校との合同宿泊研修会（通称・トレセン）に参加し、日本代表としての海外派遣団に参加すべく研鑽に努めている。

漫画研究同好会

顧問　松本裕育

『漫画研究同好会！なんとなく時代の申し子という感じがしないでもありません。週刊漫画誌がはじめて世に出たのは、私たちが高校生のころであったように記憶しています。それ以来十年、それまではほんの子供の読み物――私たちの時代には、中学生になると漫画を卒業したものでした――であった漫画が一つの市民権を得るまでは、たいした時間を必要としませんでした。現在では老若

男女を問わず、実に幅広い読者層を誇っています。漫画研究同好会が誕生する由縁です。』これは、四十周年記念誌に当時の顧問の鈴木健生先生が、漫画研究同好会設立の背景を書き綴ったものです。

漫画研究同好会の歴史は古く、昭和四十七年に椿行雄先生を顧問に設立され、既に四半世紀が過ぎようとしている。この間には、アニメーション映画「スタージャッジ」がフリータイムス千葉社主催の8ミリフェスティバル「高校生の8ミリ映画祭」で技術賞を受賞したり、



東雲祭特集号の「東西南北」と「漫妖集」

「マップス」でおなじみの漫画家長谷川裕一氏（昭和五十三年度代表者）を輩出したりしている。現在に至る主だったことがらを掲げてみると、昭和五十四年「漫妖集」創刊。現在も東雲祭特集号として、印刷・製本を外注とした本格的な漫画本として出版している。昭和五十六年には会誌「東西南北」創刊。当時は月刊誌であったらしいが、現在では季刊誌として発行している。現在月刊発行の「パセリ」は昭和六十一年創刊である。これらの雑誌発行以外に東雲祭のパンフレット等のイラストや修学旅行のしおり等のカットの依頼を受けたりすることもある。学校改築等で活動場所が、部室から通信棟54番教室へ、更には51番教室へと移動したことも記しておく。

生徒会室の印刷機の故障等、さまざまな困難もあるが、部員は、熱心に作品製作に励んでいる。

フォークソング同好会

顧問　向笠勝也

フォークソング同好会の学校内における活動は四月の新入生歓迎会と、九月の東雲祭の年二回だけである。例外として、この一〇年間では、昭和六十二年七月、日米交換交流プログラムにおける留学生歓迎パーティーで演奏したという記録が残されているが、そのほかの校内におけ

る練習活動はいっさい禁止されている。したがって、フォークソング同好会は前述のステージに立つためだけの会という本校の同好会のなかでも変則的なものである。

同好会の発足当時の状況が不明で、正確なところはわからないが、日常の練習場所の確保ができず、近隣への楽器による騒音等物理的な問題により、校内における練習活動は一切禁止されていると思われる。

次に、会の様子は運動系の部活動に所属している生徒もみられるが、マンドリン楽部に所属している生徒が中心となって、グループごと（生徒はバンドと呼んでいる。）に外部のスタジオを借りて練習している。演奏曲目はフォークソングというよりもロック系の曲目が中心であり、フォークソング同好会という名前そのものは形骸化している。

このグループ（バンド）は毎年四月当初、一斉に会員を募集して、そのなかから編成するのではなく、前述の二回の演奏活動に合わせて結成するため、ステージの直前でなければその正確な数を把握することはできない。毎年、一〇グループくらい、五〇名前後という多数の生徒が集まるようである。

以上、フォークソング同好会は本校の同好会のなかでも所属する生徒は多いが、帰属意識が薄くまとまりがないため、その代表者となる生徒にはかなりの負担がかかる。そこで、最後に過去一〇年間の代表者を記して終わりとする。

昭和五十七年度	今留　謙一	（二―二）
昭和五十八年度	宮沢　明洋	（二―八）
昭和五十九年度	湯川　浩	（二―七）
昭和六　十年度	松井　浩一	（二―四）
昭和六十一年度	花田　健彦	（二―八）
昭和六十二年度	斎藤　努	（二―三）
昭和六十三年度	岩満　卓也	（二―一）
平成　元　年度	武藤　俊晴	（二―三）
平成　二　年度	白鳥　勝弘	（二―五）
平成　三　年度	市村　将太	（二―二）

陶芸同好会

顧問　平松生夫
　　大石恵子

陶芸同好会は、昭和六十一年度の入学生から、芸術の教

科に工芸を設置した時から発足しました。教科の工芸選択者の中から有志により、陶芸専門に作りたい希望者が四人でスタートしました。電動ろくろ五台と窯が設置された窯場で毎日泥にまみれて制作しました。初めは、ろくろに廻されていた者も三か月を過ぎると、まずは望むような形に仕上がるようになります。下級生が増え、ろくろが不足の折は、板作り、ひも作りなど手作業で作ります。

陶芸は経験した者でないとそのおもしろさが理解できないものですが、慣れるにつれ自分の思いのように作品ができる楽しみに、熱中する者が多くなりました。

設立以来六年目の同好会ですが、東雲祭と校外展の二回、美術部と合同で展覧会を開き、陶芸作品については販売もしました。特に東雲祭には、保護者の方々が待ちかねていて買って頂き、結構な売上額になりました。その売上でまた粘土や材料を購入し、作品を作るという循環のパターンも確立できました。

作品の種類はさまざまですが、殆どは実用品です。ろくろ作りによる基本は湯呑みですので、数では湯呑みが圧倒的に多くなります。筒型の練習から花びんや皿、徳利や変形物へと作品の展開が進むため、その基本練習で作る湯呑みが多くなる訳です。しかし、太さ・高さ・厚さ・高台の形を揃えて同じ形の物を作る事は、相当ろくろ慣れしないと作れません。そこで似たような形の物を二つ組合わせ、夫婦茶碗として同じ釉薬を掛け、なんとか作品にしているのが現状です。高台内のサインが夫婦であっても別のものであったりする事も良くあります。しかし、それでも、見に来られた方々に喜んで買って頂けるのは、生徒の作品だからでしょう。

活動日は特に決めず、出られる日に出て作るという風ですが、冬期には、水を使う作業なので生徒にとっては厳しいものもあったようです。

目立たない同好会ではありますが、実際に経験し、土から作品に仕上がった時の喜びを感じた者は、大きな創造の楽しみを知ったはずです。発足以来六年間の人数は四〇数名、学年平均七名くらいの会です。専属の会員は少なく、他の部活動との兼部者が多いのが特徴です。

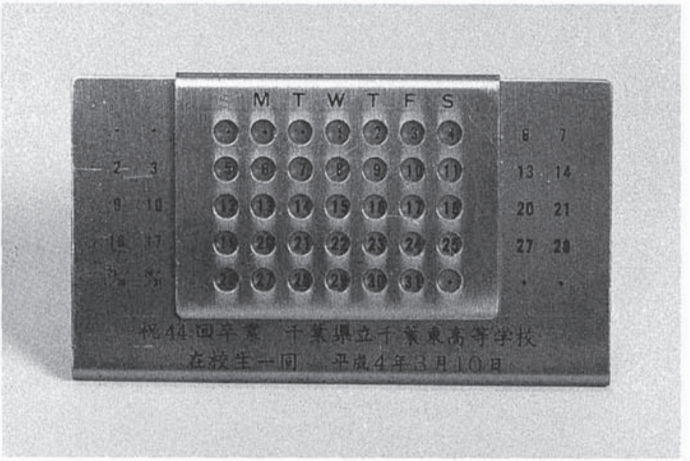
コンピュータ同好会

顧問　渡辺　陽
大迫　太

設立は平成三年度です。主な活動内容は、ＢＡＳＩＣやＣなどプログラム言語の学習及びそれらの言語を用いたプログラムの作成です。プログラムは学習に関連したものや、ゲームなどです。

コンピュータによるグラフィックや作曲（ＭＩＤＩで）なども行っています。現在は同好会所有のパソコンはありませんが、生物実験室にあるパソコン（一二台）を使って活動しています。

部が創設されて間もないため、生徒同士の援助や相談も十分にできない状態です。しかし、今後は社会のニーズとともに、部員の数、質ともに向上するでしょう。



通信制課程

野球部

顧問　菅原　武

野球部がいつから活動を始めたのか、はっきりとしたことはわからないが、手元には第二五回（昭和五十三年）の県大会のプログラムが残っている。このプログラムを見ると校長相川勝衛、教頭鵜沢武視、顧問柳生操、監督戸次恒治とある。選手は一二名。あるいは、この頃から活動が始まったのかもしれない。



第38回全国高等学校定時制通信制軟式野球大会
（平成３年８月13日～17日明治神宮野球場・他）

しかし、野球部の活動が活発になったのは、五十八年頃からであろう。前顧問の佐久間政也先生の話によると、それまではどちらかといえば同好会的な性格が強く、勝負のことよりもスクーリングの放課後好きな者同志が体を動かすことを目的に行なわれていた、とのことである。そのため試合の時でも、スクーリングと重なった場合、スクーリングを優先していたようである。それが変わったのは、五十九年初優勝した時からだった。この年は若い、野球経験者が何人か集まり、顧問の久保先生も最初から優勝を狙っていたようだ。それまでの練習内容も一変し、厳しい練習をかさねた。決勝戦は佐原高校。三対二で下し、念願の初優勝をとげた。全国大会では、島根県の米子東高校に惜しくも五対四で敗れた。しかしこの初優勝は、その後の部の勢いとなり、輝かしい成績をあげる幕開けとなった。その年の秋の新人戦でも優勝し、県内では無敵のチームに成長した。

六十年、監督が久保先生の転勤から菅原にかわった。一度優勝の美酒をあじわった者達は強い。部員達の間に積極性がうまれ、率先して自分達で練習をやるようになった。主将の石井実君のまとめ方もうまく、この年県大会で連続優勝を成し遂げた。全国大会では、一回戦広島の国泰寺高校と神宮球場で行なった。憧れの神宮球場の人工芝は美しく、爽快だった。試合も五対一で快勝。しかし二回戦は、

同じ日の第四試合となり、投手の上村君が連投の疲れのため後半生彩を欠き、四対二で敗れた。

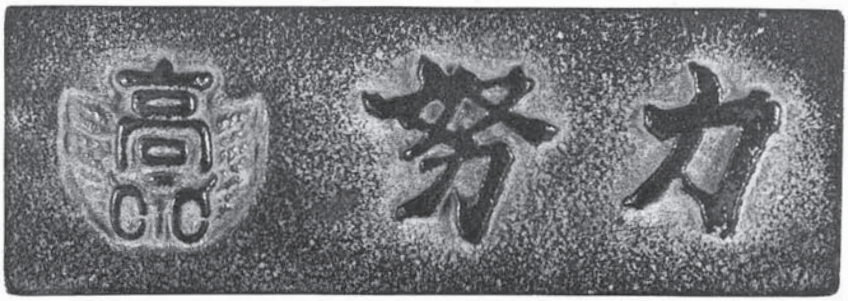
六十一年、前年の主力メンバーが残ったため、この年も優勝を狙った。優勝すれば県大会史上初の三連覇である。決勝戦は佐原高校。九回、三対二まで追い詰めたものの、あと一歩及ばず敗退、準優勝に終わった。実力的には、佐原高校以上の力をもっていたものの、試合では自分達の良い面が出せなかった。優勝を意識しすぎたのか、勝負のむずかしさを痛感した試合だった。

六十二、六十三年はメンバーの変わり目にあたり、一、二回戦で敗れている。しかし平成元年あたりからメンバーもそろい始め、この年は準決勝まで駒を進めた。

平成二年。この年は本校が抜きん出て強かった。速球派の新井君のボールに相手の打者は手も足も出ず、三振の山を作った。しかしその新井君も決勝戦の千葉商戦は肩の調子が思わしくなく、一度逆転されてしまった。だが、この年のチームには不思議な底力があり、再度逆転、八対六で優勝した。主将の綿貫君は涙を流し、監督のわたしもうれし涙で顔をくしゃくしゃにした。こういう選手達と野球ができることを幸せに感じた。全国大会では一回戦、大阪の成城工業と対戦し、新井君の肩も復調し、七対一で快勝した。二回戦はこの年全国優勝した筑紫丘と対戦し、十対二で敗れた。敗れたものの、この時のチームはいままでのなかで最強のチームではないだろうか。全国レベルでも高いレベルだった。それから何といっても綿貫君の主将としてのがんばりに敬意を表したい。彼には三年間主将を務めてもらった。部員が集まらず四苦八苦していた時も一緒にがんばってもらった。その彼にとってはこの年が最後である。どうしても彼のために優勝したかった。千葉商戦最後のバッターが三振した時、真夏のような太陽が照りつけていたのを忘れはしないだろう。

平成三年。この年のチームは監督のわたしでさえ、どのようなチームなのかはっきりとつかめなかった。一回戦ですぐに負けてしまうようでもあり、優勝してしまうようでもある。そんなチームが決勝戦までいってしまった。決勝戦の相手は千葉高校。千葉高校は最初から優勝を狙っていて、試合前から気合いが入っている。こっちは気楽である。せいぜい試合を楽しもうといった雰囲気だ。試合は二対二で九回裏、二塁に新井君がいた。盗塁のサインを出す。三塁めがけて走る。捕手の投げたボールがそれてレフトに。そのすきに新井君がホームベースを踏み、サヨナラ勝ちとなった。何だか信じられないことが起こった。このチーム

が優勝したのだ。それも二年連続優勝。勝負は下駄を履くまでわからない、という言葉を実感した瞬間だった。この年は試合予定の日になると雨がふり、三週間ほどずれこんだ、それがよかったのか……。全国大会でも雨にあい、開会式直後の試合だったのに、順延になってしまった。相手は京都の洛北高校。なかなかまとまった好チームで、記念的なせっかくの試合を勝利で飾れず、三対一で敗れた。



五　全日制課程　ＰＴＡ

ＰＴＡの歩み

本校ＰＴＡは、昭和二十四年（一九四九）五月二十九日に、それまでの父兄会を改組して発足した。幹事役が複数で仕事に当たり、この年は会長決定をしないまま過ぎている。翌二十五年には初代会長に並木辰男氏が選任され、以来、現会長の乾泰宏氏に到るまで二十三代を数え、学校との協力のもと、活発な活動をしてきている。（別掲資料一、参照）

草創期の様子については、資料が散逸していて詳しくは分からないが、現行のＰＴＡ会則は昭和二十七年五月二十七日の日付で、施行されている。その後、七回にわたって改正が行われ、最終改正は平成二年四月一日に行なわれている。それによって本校ＰＴＡ組織の概要をみると、保護者と教職員が一体となって生徒福祉の増進を図ることともに、協力して本校発展に資することを目的とし、会員をはじめ七名の役員と各クラス原則二名の理事を選出し、総会に年一回、理事会は毎学期一回（年三回）以上開かれ、全国大会に出場する部活動援助のためなど、必要に応じて臨時の理事会も開かれている。また事業遂行に必要な業務を担当することを目的に総務・学力向上・生活指導の三つの委員会がおかれていて、理事はどれかの委員会に所属することになっている。なお六十二年度から総務委員会に広報・研修・国際交流の三分掌がおかれ、六十三年度の改正で学力向上委員会を進路指導委員会に改称するとともに学年単位に学年委員会がおかれるようになった。昭和六十一年度には、はじめて学年ＰＴＡが「進路説明会」の名のもとに、第三学年によって開かれ、その後、六十二年度に第三学年が、平成二年度には第二学年がそれぞれ学年ＰＴＡを開いており、予想以上に多数の保護者の出席があり、大きな成果をあげている。

現在までＰＴＡがかかわってきた事業の概要としては、昭和二十六年十一月二日に創立十周年記念式典を挙行、この時には校舎本館とグランドが竣工している。三十六年十月六日に二十周年記念式典挙行、この年四月一日に現在の校名に改称されている。つづいて四十一年一月二十九日に、新校舎建築の動きを受けてＰＴＡ会員を主たる会員とする施設整備期成会が発足、翌四十二年から第一期工事が始まり新体育館の完成をまって四十六年十一月二日に、創立三十周年並びに新校舎落成記念式典が挙行されている。その

後、五十三年に施設整備第一期工事が始まり、五十六年には第四期工事が完了、この年十一月四日には、四十周年記念式典が挙行されています。次いで五十九年にグランド整備が完了、六十年には格技館が落成して、前後二十年間に及ぶ施設の整備が一段落することとなり、期成会はその役割を十二分に果たして、平成二年三月三十一日に解散している。それに伴って、平成二年度の総会で第七次の会則改正が行われ、期成会に代わって特別会計教育振興費が設けられて現在に至っている。そして今年、平成三年十一月九日には、現会長の乾泰宏氏を実行委員長に創立五十周年記念式典が挙行されたのをはじめ、個性豊かな各種の記念事業がとり行なわれている。

会員の研修と親睦を図る事業も積極的に進められてきており、県・市の主催する研修会はいうまでもなく、関東地区高P連大会・全国高P連大会にも早くから参加、特に六十年度からは複数の役員理事が毎年欠かさず参加している。また、毎年十二月には、音楽・演劇・古典芸能のうちから一部門を輪番で招き、生徒・職員とともに鑑賞する芸術鑑賞会が催されている。ただ平成三年度だけは、創立五十周年記念事業との関係で開催されなかった。研修事業の一環として、毎年、保護者と職員を対象に、保護者・職員の推薦を受けた各分野の専門家を講師に招いて講演会が開かれてきた。六十年度と六十一年度には生徒も含めて開催されたが、六十二年度からは、講演会に代わって、研修と親睦を兼ねた「大学巡り」が行われるようになった。筑波大学、横浜国立大学、それに早稲田大学を年度毎に順番に見学するという企画であるが、会員の間ではなかなか好評で、順調にいけば平成四年度には二回りすることになる（別掲資料二、参照）。

会報は昭和四十一年七月十五日に創刊号が発行され、以来、年三回、毎学期一回の割合で発行されており、今年度で七八号を数える。主に保護者と職員・生徒から原稿を寄せてもらい、ときには、「現代の教育を考える」「家庭教育を考える」などのテーマで継続して特集を組んだり、「東高を考える」といったテーマで座談会を開いたり、ＰＴＡ関係だけでなく広く生徒の生活全般、教育全般にわたり、討論を深める場としての工夫も凝らされていて、家庭と学校を結ぶ太いパイプとなっている。

年三回の理事会の出席率は、いつも九〇パーセントを越えており、総会の出席者数はどうしても一年生の保護者が比較的多数を占めるが、それでも毎年二〇〇名を上回っている。また、各種の研修会等への参加もかなり積極的であ

る。こうしたことからもお分かりいただけるように、会員・保護者の教育に対する関心はすこぶる高く、それだけに、本校教育への信頼と協力と批判には、良識的であると同時に、きわめて意欲的なところがある。PTA活動には、いろいろなあり方があっていいと思うが、教育の多様化とか生涯学習とかが何かにつけていわれるようになってきた昨今、その一つの範型を本校PTA活動に見ることができる、といっても過言ではないであろう。

資料一　歴代PTA会長一覧（敬称略）

昭和二四	未定	五〇	武本　吉浩
二五	並木　辰雄	五一	柴田　孝明
二六		五二	
二七	多田　勇	五三	木村　輝武
二八		五四	笹本　功
二九		五五	
三〇	鈴木　潤一	五六	坂井進一郎
三一	平山　滋春	五七	
三二		五八	笹本　功
三三	能勢　節郎	五九	
三四		六〇	赤星喜一郎
三五	小笹　精一	六一	
三六		六二	池田　憲彦
三七		六三	
三八	戸川　真五	平成　元	
三九	田畑　国利	二	乾　泰宏
四〇	中村作次郎	三	
四一			
四二	岩網　由雄		
四三			
四四			
四五	市川安太郎		
四六			
四七	下向　利雄		
四八	根本　貫修		
四九	友野　光弘		

資料二　年表「ＰＴＡの歩み」

3・1	多田顕教授
	会報第九号発行。
5・9	幹事会。
5・18	総会。「高校生の政治活動」
5・24	労網会長訪米。
6・15	会報第十号発行。
7・5	新旧幹事会。
10・7	幹事会。「生徒の政治活動、校舎新築工事」
12・3	会報第十一号発行。
12・9	千葉地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会。「生徒指導上の諸問題」
2・3	総務委員会。「表彰慶弔餞別規程」
2・6	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。「生徒指導」
2・28	会報第十二号発行。
5・19	幹事会。
5・25	会報第十三号発行。「第二期校舎落成」
5・26	総会。
7・2	新旧幹事会。
11・25	会報第十四号発行。
11・28	幹事会。
2・16	千葉地区高等学校ＰＴＡ研究集会。
2・23	総務委員会。「会員の研修」
2・25	会報第十五号発行。
5・8	幹事会。
5・22	総会。講演会「家庭における親子関係」
	千葉大学四宮晟教授

4・30	幹事会。
5・14	総会。「校舎全面改築工事」
5・25	新旧役員懇談会。
6・18	第一回教育懇談会。「当面する教育の諸問題」
7・15	会報第一号発行。
10・26	第二回教育懇談会。親と子の教育座談会「親の願い子の願い」
12・15	会報第二号発行。
2・15	幹事会。「新校舎建築第一期工事予算」
3・1	会報第三号発行。
4・27	幹事会。
5・13	総会。講演会「幸福の条件」お茶の水女子大学勝部真長教授
6・20	会報第四号発行。
10・25	幹事会。「新校舎建築二期工事説明」
11・30	会報第五号発行。
3・1	会報第六号発行。
4・25	幹事会。
5・11	総会。「新校舎建築第二期工事説明」
6・20	会報第七号発行。
10・28	幹事会。「新校舎建築第二期工事説明」
11・15	会報第八号発行。
2・7	幹事会。
2・22	講演会「最近の大学問題について」千葉大学

昭和46年度

6・19	新旧幹事会。
6・25	会報第十六号発行。
11・2	創立三十周年、新校舎落成記念式典。
12・20	会報第十七号発行。
2・9	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
3・3	会報第十八号発行。

昭和47年度

5・11	幹事会。
5・24	総会。
6・20	会報第十九号発行。
6・27	新旧幹事会。
12・7	会報第二十号発行。合同委員会。
1・23	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。「高等学校の諸問題」
2・1	研修会。映画「千葉教育百年」「高校生の話題―房総の文学―」講演「健康管理上の食生活の諸問題」眼科校医伊藤清夫氏
3・9	会報第二十一号発行。

昭和48年度

5・29	幹事会。
6・18	総会。
7・3	新旧役員懇談会。
7・5	第十九回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（水上）六日まで。
7・10	会報第二十二号発行。
8・22	全国高校ＰＴＡ協議会。（青森市民会館）
11・15	会報第二十三号発行。
1・21	千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会理事会。

昭和49年度

1・23	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。講演「高校ＰＴＡの課題と方向」文部省社会教育官本家正文氏
3・7	会報第二十四号発行。
5・22	幹事会。
6・13	総会。
6・27	第二十回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（水戸）二十八日まで。
7・1	新旧役員懇談会。
7・5	会報第二十五号発行。
8・20	全国高校ＰＴＡ大会。二十二日まで。
11・20	会報第二十六号発行。
12・11	研修会。講演「脳のはたらきと健康」千葉大学 萩原弥四郎教授
3・8	会報第二十七号発行。

昭和50年度

5・23	幹事会。
6・16	総会。
6・23	新旧役員懇談会。
7・3	会報第二十八号発行。
	第二十一回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（甲府）四日まで。
11・15	会報第二十九号発行。
11・21	合同委員会。
	研修会。講演「思春期にみられやすい疾患」千葉大学新見仁男講師
11・25	第十一回千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
3・3	会報第三十号発行。

昭和51年度	
5・31	幹事会。
6・14	総会。
6・21	新旧役員懇談会。
7・1	会報第二十一号発行。
7・8	第二十二回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（東京）九日まで。
8・19	第二十六回全国高等学校ＰＴＡ協議会（横浜）二十日まで。
9・29	千葉地区高等学校ＰＴＡ研究集会。
10・14	合同委員会。
11・8	研修会。講演「未来社会と青年の進路選択」日本経済新聞編集委員兼論説委員黒羽亮一氏
11・26	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
12・1	会報第二十二号発行。
3・7	会報第二十三号発行。

昭和52年度	
5・30	幹事会。
6・6	総会。
6・14	千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会定期総会。
6・21	新旧役員懇談会。
7・1	会報第二十四号発行。
7・6	第二十三回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（栃木）八日まで。
8・17	第二十七回全国高等学校ＰＴＡ協議会（広島）十九日まで。
9・29	千葉地区高等学校ＰＴＡ研究集会。

昭和53年度	
5・18	幹事会。
5・31	総会。
6・10	千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会定期総会。
6・26	新旧役員懇談会。
7・1	会報第二十七号発行。
7・6	第二十四回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会（千葉）八日まで。
8・20	第二十八回全国高等学校ＰＴＡ協議会（福岡）二十二日まで。
10・21	合同委員会。「校舎施設整備計画」
11・8	千葉地区高等学校ＰＴＡ研究集会。
11・28	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
12・1	会報第二十八号発行。
12・2	研修会。講演「高校生の心理と人間関係」千葉大学四宮晟教授
1・26	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
2・17	総務委員会・幹事会。「校舎増築とグラウンドの総合整備計画」
3・10	会報第二十九号発行。

10・19	合同委員会。
11・24	研修会。報告「国立大学共通一次学力試験について」進路指導部山川秦二教諭
11・25	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
12・1	会報第二十三号発行。
1・20	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。
3・8	会報第二十六号発行。

	昭和55年度		昭和54年度	
5・16	幹事会。	3・10	会報第四十二号発行。	
5・9	総会。	2・16	総務委員会・幹事会。「クラブ部室の建設」	
		1・22	第十五回千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会。千葉大学坂本教授の実態と高校ＰＴＡの役割」	
		1・20	千葉県高等学校ＰＴＡ研究集会。講演「高校生	
3・10	会報第四十五号発行。	12・8	研修会。講演「欧米の教育と新教育課程のねらい」相川勝衛校長	
2・21	座談会「東高を考える」総務委員他	12・1	会報第四十一号発行。	
12・4	研修講演会。「生きがいの今昔」ジャーナリスト多田実氏	11・20	第十五回千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会。	
12・1	会報第四十四号発行。	11・9	千葉地区ＰＴＡ研究集会。	
7・1	会報第四十三号発行。	10・13	合同委員会。「校舎施設整備計画」	
		7・9	第二十五回関東地区高等学校ＰＴＡ連絡協議会。	
		7・2	会報第四十号発行。	
		6・23	新旧役員懇談会。	
		6・5	千葉県高等学校ＰＴＡ連絡協議会定期総会。	
		5・19	総会。「会費値上げ三百六十円→四百円」	
		5・8	幹事会。	

	昭和58年度		昭和57年度		昭和56年度	
5・12	幹事会。	3・9	会報第五十一号発行。	7・1	会報第四十八号発行。	
		2・19	総務委員会・幹事会。	5・8	幹事会。	
3・9	会報第五十四号発行。	12・2	集委員青山保氏	5・22	総会。「機械警備導入」	
2・18	幹事会。	12・1	研修会。講演「英国人と家庭生活」産経新聞編	7・1	会報第四十九号発行。	
	作家田久保英夫氏	10・16	会報第五十号発行。	10・17	幹事会。	
12・3	研修会。講演「作家の生活、市民の生活」		合同委員会。	11・4	創立四十周年記念式典。	
12・1	会報第五十三号発行。	7・1	会報第四十九号発行。	12・1	会報第四十七号発行。	
10・15	幹事会・合同委員会。	5・22	総会。「機械警備導入」	2・20	幹事会。	
7・1	会報第五十二号発行。	5・8	幹事会。	3・9	会報第四十八号発行。	
5・21	総会。					
5・7	幹事会。					

昭和59年度

5・19　総会。「衛生看護科移転報告、旧体育館全面改築予定」
7・2　会報第五十五号発行。
12・1　会報第五十六号発行。
2・16　研修会。講演「人生の中のドラマ」東海大浦安高校内木文英校長
3・8　幹事会。
5・16　会報第五十七号発行。

昭和60年度

7・1　総会。「格技館落成報告」
10・17　会報第五十八号発行。
11・26　PTA・期成会役員会。
12・2　研修会。講演「明日の日本と世界を考える」朝日新聞社会部長柴田鉄治氏
3・8　会報第五十九号発行。
会報第六十号発行。

昭和61年度

5・8　役員会。
5・29　総会。
7・9　関東地区高等学校PTA連絡協議会（浦和）十日まで。
7・19　会報第六十一号発行。
8・28　全国高等学校PTA連合大会（奈良）二十九日まで。
10・16　役員会。
11・26　研修会。講演「明日の日本と世界を考える」朝日新聞編集局次長奥尾幸一氏
12・23　会報第六十二号発行。

昭和62年度

1・22　役員会。
3・10　会報第六十三号発行。
5・7　理事会。
5・21　総会。
7・20　会報第六十四号発行。
8・25　全国高等学校PTA連合会大会。二十六日まで。
10・14　理事会。
11・26　研修会。筑波大学見学。
12・1　臨時理事会。「ラグビー部全国大会出場に伴う募金活動」
12・24　会報第六十五号発行。
1・21　理事会。
3・10　会報第六十六号発行。

昭和63年度

5・12　理事会。
6・2　総会。
7・6　関東地区高等学校PTA連絡協議会（水戸）七日まで。
7・20　会報第六十七号発行。
8・25　全国高等学校PTA連合会大会（富山）二十六日まで。
10・13　理事会。
11・4　研修会。横浜国立大学見学。
11・28　臨時理事会。「ラグビー部全国大会出場募金活動」
12・24　会報第六十八号発行。
1・19　理事会。

平成元年度	
3・10	会報第六十九号発行。
5・11	理事会。
6・1	総会。「期成会解散」
7・5	関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会（山梨）六日まで。
7・20	会報第七十号発行。
8・23	第三十九回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会（青森）。
10・12	理事会。
11・16	研修会。早稲田大学見学。
12・22	会報第七十一号発行。
1・18	理事会。
3・10	会報第七十二号発行。

平成２年度	
5・10	理事会。
5・31	総会。
7・5	関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会（横浜）六日まで。
7・20	会報第七十三号発行。
8・27	第四十回記念全国高等学校ＰＴＡ連合会大会（東京）二十八日まで。
9・22	研修委員会。
10・11	理事会。「創立五十周年記念事業」
11・15	研修会。筑波大学見学。
12・22	会報第七十四号発行。
1・24	理事会。
3・9	会報第七十五号発行。

平成３年度	
5・6	理事会。
5・30	総会。「創立五十周年記念行事」
7・3	第三十七回関東高等学校ＰＴＡ連合会大会（栃木）四日まで。
7・20	会報第七十六号発行。
8・26	第四十一回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会（三重）二十八日まで。
10・24	理事会。
11・28	研修会。横浜国立大学見学。
12・24	会報第七十七号発行。
1・23	理事会。

六　通信制課程　振興会

千葉東高等学校通信制の振興会は、昭和四十一年九月十七日に発会した。前年度より、月二回のスクーリングを実施し、入学する生徒が四百名を越えて、いよいよ本校の通信制が本格化する時期でもあった。

本来、通信制で学ぶ生徒は有職青少年が多く、仕事と勉学を両立させなければならなかった。年令的には成人した生徒も多く、学校としては保護者の他、生徒の雇用主の理解と協力が必要であった。このことは定時制でも同様で、生徒の教育に関して教師と雇用主が連携する必要があったのである。

振興会発会時の規約には、次のように書かれている。

通信制振興会

(1)設立

昭和四十一年九月十七日

(2)目的

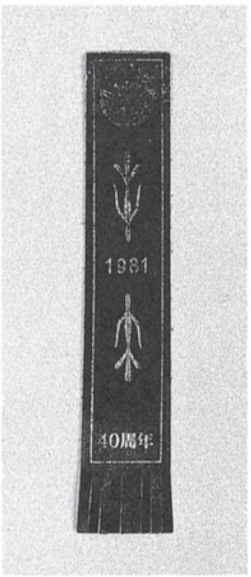
○本校通信教育の拡充、教化並びに啓蒙宣伝。
○生徒の福祉、厚生。
○本校の設備の充実。

(3)会員

○県内市町村および地方教育委員会関係者。
○生徒の父兄。
○生徒の雇用主など。
○卒業生。
○その他本校通信教育を理解し協力するもの。

現在では、通信制や定時制で学ぶ生徒の実態が多様化して、かつて振興会は雇用主と教師のイニシャルよりＥＴＡと呼んだが、そのイメージからは遠ざかった感がある。しかし、振興会としての役割が終わったのでは決して無く、通信制の教育活動は、振興会に負うところが大きい。

振興会の役員は、千葉市長・企業代表・元本校校長等を顧問として、卒業生・同窓会役員を中心として理事が運営し、毎年総会を開いて事業をすすめている。夏季宿泊研修等の諸行事や、部活動での全国大会出場等に振興会が助成している。



第五章　資料



第一節　現　況……413
1　総　記……413
2　歴代校長……413
3　教育方針……414
4　教育課程……415
5　年間行事計画と日課表……417
6　職　員　等……418
7　校務分掌組織……421
8　生　徒……421
9　生　徒　会……424
10　部・同好会生徒数……425
11　図　書　館……426
12　平成二年度学校運営費（決算）……426
13　卒　業　生……427
14　P　T　A……433
15　校舎配置図と平面図……435
16　通信制課程……436
第二節　歴代職員一覧……439
全　日　制……439
通　信　制……449
第三節　同窓会役員名簿……454

第一節　現況

1　総記

課程・生徒定員

課程	全日制	通信制
学科	普通科	普通科
学級数	二七	
生徒定員	一、二三三	募集二五〇

校地

校舎敷地	一六、三三一㎡	三三三、五九四㎡
運動場	一七、二六三㎡	

建物

校舎	九、三一九㎡	一二、九三一㎡
体育館	一、四九三㎡	
格技館	九九四㎡	
セミナーハウス	五五九㎡	
トレーニング室	一八八㎡	
窯場	三四㎡	

倉庫　一三一㎡
部室　三三三㎡）

通信教育棟（文系部活動施設を兼ねる。）一、一一一㎡

2　歴代校長

代	氏名	在職期間	前職
1	滝　熊之介	一六・三・二〇～二〇・八・九	県視学
2	楠原信一	二〇・八・二〇～三一・二・三五	県立木更津高等学校長
3	親泊朝晋	三一・二・三五～二四・三・三一	本校教頭（三三・三・六まで校長事務取扱）
4	諸川芳雄	二四・四・五～二六・三・三一	都立城北高等学校教頭
5	石毛貞雄	二六・四・一～四〇・七・一〇	県立銚子商業高等学校長
6	内藤貫一	四〇・七・一一～四二・三・一〇	県立国府台高等学校長
	鬼島正雄	四二・三・一一～四三・三・三一	本校教頭（校長職務代理）
7	沢田繁二	四三・四・一～四四・三・三一	県教育次長
8	村田泰次郎	四四・四・一～四七・三・三一	県立佐倉東高等学校長
9	畠山一郎	四七・四・一～五二・三・三一	県立東金高等学校長
10	相川勝衛	五二・四・一～五六・三・三一	県立木更津高等学校長
11	須田義男	五六・四・一～六一・三・三一	県立木更津高等学校長
12	森田　章	六一・四・一～六三・三・三一	県教育庁高校教育課長
13	齋藤志貴雄	六三・四・一～平二・三・三一	千葉市立千葉高等学校長
14	髙橋浩司	平二・四・一～平四・三・三一	千葉県総合教育センター所長

3 教育方針

教育基本法および学校教育法の趣旨にもとづき、人間性の豊かな、実践力に富んだ人物を育成することをめざす。とくに、本校の実情にそって次の諸点に留意する。

(1) 生活態度の確立助成

自律的、科学的な生活態度の育成につとめ、幸福な人生を創造できる、心身ともに健康で積極性に富み、国際的視野を持つ人物を養成する。

(2) 進路指導の強化充実

基礎学力の向上と個性の伸長をはかり、将来の進路を開拓し、社会に適応する能力を養成する。

(3) 男女共学の長所発揮

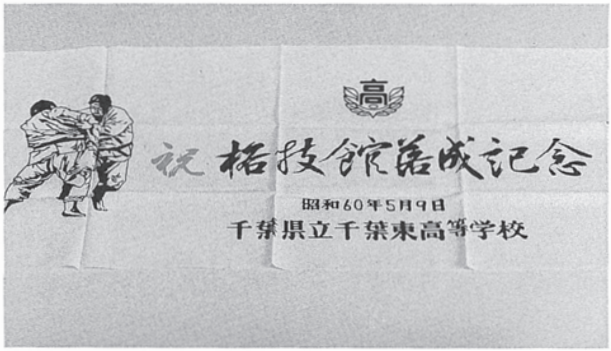
親和と、清純なふんいきの中に、男女がたがいに理解しあい、ともにその特性を生かして、社会の発展と福祉に貢献できるような資質を養う。

(4) 努力目標とその達成

つねに理想的なあり方を探究し、教師、保護者、生徒ともに考え、ともに語りあって、学校全体および個人としての努力目標をさだめ、その達成にはげみつつ、日日の向上進展をはかってゆく。

努力目標

学力の充実　自律的行動と責任　基礎体力の向上



4 教育課程

普通科

教科	科目	1年	2年	3年 A	3年 B	計 A		計 B	
国語	国語 I	5				5		5	
	現代文		2	3	2	5		4	
	古典		3	3		8～6	18～16	5～3	14～12
社会	現代社会	4				4		4	
	日本史					6～0		4～0	
	世界史		4	6		4		4	
	地理				4	6～0		4～0	
	倫理				2	2～0		2～0	
	政治・経済			2	2	2～0	18～16	2～0	12
数学	数学 I	5				5		5	
	数学 II					5～0			
	代数・幾何		3		※	3		3	
	基礎解析		3	3	2	3		3	
	微分・積分				3			3	
	確率・統計				3	3～0	16～14	3	19～17
理科	理科 I	4				4		4	
	物理		2		4	7～2		8～2	
	化学		2	3	4	7～2		8～2	
	生物					5～0		6～0	
	地学				4	5～0	13～11	6～0	18～16
保健体育	体育	男4女2	男4女2	3	3	男11女7	男 13	男11女7	男 13
	保健	1	1			2	女 9	2	女 9
芸術	音楽 I			※		2～0		2～0	
	音楽 II			2		2～0		2～0	
	音楽 III					2～0			
	美術 I	2				2～0		2～0	
	美術 II		2			2～0		2～0	
	美術 III					2～0			
	工芸 I					2～0		2～0	
	工芸 II					2～0		2～0	
	工芸 III					2～0			
	書道 I					2～0		2～0	
	書道 II					2～0		2～0	
	書道 III					2～0	6～4		4
外国語	英語 I	6				6		6	
	英語 II		3	2	2	5		5	
	英語 II B			4	4	6～4		4	
	英語 II C		2			2	19～17	2	17
家庭	家庭一般	女 2	女 2			女 4		女 4	
	食物			女		2～0	女 6～4		4
特別活動	ホームルーム	1	1	1	1	3		3	
	クラブ活動	1	1	1	1	3		3	
	計	33	33	33	33	99		99	

註1　A・Bはそれぞれ文科・理科類型を、※印は選択科目を示す。

2　男子の体育実技には格技（柔道・剣道のいずれかを選択必修）が、ふくまれます。

11月		12月		1月		2月		3月		4年4月		月日
金	中間成績F.D.提出(12時) 漢字テ㉘・1、2年校外実力テスト	⑪		㊗	元旦　冬季休業(～7)	土	3年自宅学習 (～3／8)	⑪		水	学年始め休業 (～4／5)	1
土	成績配布	月	後期生徒会役員認証式 ・ストーブ使用開始	木		⑪		月	1年清掃分担区変更	木		2
⑪	文化の日・創立50周年記念週間(11／9)	火		金		月		火		金		3
⑪	振替休日	水	期末考査時間割発表	土		火	漢字テ⑧	水	学年末考査時間割発表	土	新任者紹介・職会	4
火	合唱コンクール予選 (文化会館大ホール)	木	職会	⑪		水	マラソン大会(天白)	木		⑪		5
水	必ク⑨	金	部活動顧問会議	月		木	1、2年校内実力テスト②	金	職会（行事予定） 部活動顧問会議	月	新任式・始業式・㉙ 入学式会場設営	6
木	午前中授業	土		火		金	教科打合せ（3年関係）	土	卒業式会場設営	火	入学式	7
金	記念講演（文化会館大ホール）11／9と振替	⑪		水	始業式・㉙・職会	土	3年成績F.D.提出 (12時)	⑪		水	対面式・離退任式・1年オリエンテーション①	8
土	記念式典・合唱コンクール本選・11／8と振替	月		木	清掃分担区変更	⑪		月	卒業式予行 (授業1限)	木	1年オリエンテーション②	9
⑪		火		金	漢字テ⑦・3年センター試験直前注意3限授業	月		火	卒業式・会場復元	金	1年オリエンテーション③・新入生歓迎会	10
月	3年校内実力テスト② (5教科)	水	期末考査①	土	入試センター試験① 生徒臨休	㊊	建国記念日	水	学年末考査①	土	1年部活動見学 (放課後)	
火		木	期末考査②	⑪	入試センター試験②	水	必ク② 同和委員会③	木	学年末考査②	⑪		12
水	必ク⑧	金	期末考査③	月	センター試験自己採点	木	卒業認定会議 職会（卒業式）	金	学年末考査③	月		13
木	職会	土	期末考査④	火		金		土	学年末考査④	火		14
金		⑪		㊗	成人の日	土		⑪		水	必ク④	15
土	結団式・特別清掃分担区割・特別時間割　3年校外模試④(マーク式)	月	生徒臨時休業（成績処理）・救急法①	木		⑪		月	生徒臨時休業 (採点処理)	木		16
⑪	2年修学旅行	火	答案指導①・救急法②・歳寄整理	金		月		火	答案指導① 歳寄整理	金	部活動入部願提出締切	17
月		水	答案指導②	土		火		水	答案指導②	土		18
火	3年出願手続き説明 (6限)	木	答案指導③・教科打合せ・成績F.D.提出 12時	⑪		水	必ク③	木	答案指導③・教科打合せ・成績F.D.提出 (12時)	⑪		19
水		金	防災訓練 学年打合せ	月	職会(学検役割分担)	木	職会（学検関係）	㊋	春分の日	月		20
木	2学年代休	土	㉙・成績会議・職会	火	3年学年末考査時間割発表・2年学年集会・1年道路志望調査	金		土	生徒特別指導日・学年打合せ・新学年準備	火		21
金		⑪		水	必ク①（除3年）・2年校外実力テスト②	土		⑪		水	必ク⑤	22
㊍	勤労感謝の日	㊐	天皇誕生日	木	PTA理事会 役員懇親会	⑪		月	㉙・成績会議・職会 ストーブ格納	木		23
⑪		火	終業式	金	1、2年校外実力テスト②	月		火	終業式	金	部活動顧問会議	24
月		水	冬季休業(～1／7)	土		火		水	学年末休業 (～3／31)	土		25
火		木		⑪		水	2限授業・㉙ 学検会場準備	木		⑪		26
水	後期生徒会役員選挙	金		月		木	入学学力検査① 生徒臨時休業	金		月		27
木	PTA研修会	土		火	3年学年末考査① 2年清掃分担区変更	金	入学学力検査② 生徒臨時休業	土		火		28
金		⑪		水	3年学年末考査②	土		⑪		㊗	みどりの日	29
土	ストーブ設置	月		木	3年学年末考査③			月		木		30
		火		金	3年学年末考査④・3年集会・道路志望調査③			火				31
		転入学試験（下旬）				平成3年度生徒会決算案決定(下旬)・平成4年度生徒会予算案決定(下旬)		生徒会誌発行(上旬)・日米交流プログラム派遣（上旬)・転入学試験(下旬)学年末休業中部活動合宿		学年始め休業中部活動合宿		備考

職会＝職員会議　㉙＝大掃除　実力テ＝実力テスト　漢字テ＝常用漢字テスト

5　年間行事計画と日課表

(1)　年間行事計画

月／日	4　月		5　月		6　月		7　月		9　月		10　月	
1	月	学年初め休業(～4／5)	水	必ク③	土	教育実習（6／1～6／14）	月		㊐		火	漢字テ⑤・3年センター試験出願説明
2	火		木		㊐		火	期末考査時間割発表 2年コース志望調査説明会（6限・格技館）	月	始業式・㊒・職会	水	必ク⑤
3	水		㊗	憲法記念日	月	生徒会役員認証式	水		火	清掃分担区変更	木	1、2年校内実力テスト・職会
4	木	新入生歓迎会ステージリハーサル	㊡	国民の休日	火	耳鼻科検診（1年、2・3年の一部）	木		水	必ク①	金	
5	金	新任者紹介・職会	㊗	こどもの日	水	必ク⑥	金	部活動顧問会議	木	献血 職会（東雲祭関係）	土	
6	土	新任時・始業式・㊒ 入学式会場設営	㊡	振替休日	木	眼科検診（1年、2・3年の一部）	土		金	漢字テ④	㊐	
7	㊐		火	2年進路適正検査（6限）	金	中間考査成績F．D．提出12時	㊐		土		月	
8	月	入学式	水	必ク④ 歯科検診（2、3年） スポーツテスト	土		月		㊐	東雲祭ステージリハーサル	火	
9	火	対面式・離退任式 1年オリエンテーション①	木	漢字テ②・PTA理事会・学年委員会 歯科検診（1年）	㊐		火	期末考査①	月	土曜日の日課	水	必ク⑥
10	水	1年オリエンテーション② 尿検査一次①	金		月		水	期末考査②	火	3年学年集会（格技館）・進路志望調査②	㊍	体育の日
11	木	1年オリエンテーション③ 新入生歓迎会・尿検一次②	土		火	内科検診（1年・3年1～4） 2年学年集会（6限）	木	期末考査③	水	必ク②	金	中間考査時間割発表 同和委員会
12	金	1年授業開始・ 1年部活動見学(放課後)	㊐		水	内科検診（2年・3年5～9）・必ク⑦	金	期末考査④・3年学年集会（格技館）	木		土	
13	土		月	校内球技大会(天台)	木	3年校内実力テスト①（3教科）・漢字テ③	土	生徒臨時休業（成績処理）	金	東雲祭準備（3～6限）	㊐	
14	㊐		火	遠足	金		㊐		土	東雲祭①午後一般公開・PTA研修委員会	月	
15	月		水	創立記念日	土	県民の日	月	答案指導① 藏書整理	㊐	東雲祭②・敬老の日	火	
16	火	3年進路集会・進路志望調査①(6限)同和委①	木	職会	㊐		火	答案指導②	㊊	振替休日	水	
17	水	必ク①	金	前期生徒会役員選挙 中間考査時間割発表	月	職員身体測定（21日まで）	水	答案指導③・教科打合せ・成績F．D．提出12時・救急法①	火	15日の代休	木	
18	木	尿検査一次（追加）	土		火	2年進路集会・志望調査（6限） 教育相談研修①	木	防災訓練 学年打合せ	水	復元作業・必ク③	金	中間考査①
19	金	漢字テ① 部活動入部願提出締切	㊐		水	必ク⑧	金	㊒・成績会議・職会 3年校外模試①(記述)	木		土	中間考査②
20	土		月	X線（1年・職員） 心電図（1年） 成人病（職員）	木	職会	土	終業式 1年キャンプ結団式	金		㊐	
21	㊐		火	2年コース説明会（6限）	金		㊐	夏期休業(～8／31) 1年キャンプ	土		月	中間考査③
22	月		水		土		月		㊐		火	中間考査④
23	火	2年学年集会（6限）	木		㊐	同窓会総会	火		㊊	秋分の日	水	必ク⑦
24	水	必ク②	金	中間考査①	月		水		火	2年学年集会(6限) 教育相談研修会②	木	PTA理事会 学年委員会
25	木	職会・尿検査二次 貧血検査（1年）	土	中間考査②	火		木		水	必ク④	金	英語スピーチコンテスト
26	金	部活動顧問会議	㊐		水	必ク⑨	金		木		土	3年校外模試③(記述式)
27	土		月	中間考査③	木		土		金	校内陸上競技大会（天台）	㊐	
28	㊐		火	中間考査④	金		㊐		土	3年校外模試②(マーク式)	月	
29	㊗	みどりの日	水	必ク⑤	土	平成4年度教育実習申込締切	月		㊐		火	
30	火	生徒総会（午後）	木	PTA総会 新旧役員懇談会	㊐		火		月		水	必ク⑧
31			金	職員血圧検査			水				木	職会
備考	学年初め休業中部活動合宿		教育実習オリエンテーション（中旬）		1、3年保護者面談・東雲祭実行委員会発足（上旬）・東雲祭実施計画決定（下旬）		夏期休業中部活動合宿 転入学試験（8月下旬）		教育実習面接		2年保護者面談	

(2) 日 課 表

職員朝会	SHR	1	2	3	4	昼休み	5	6	SHR 清掃	下校
8：20 〜 8：25	8：30 〜 8：40	8：45 〜 9：35	9：45 〜 10：35	10：45 〜 11：35	11：45 〜 12：35	45分	13：20 〜 14：10	14：20 〜 15：10	15：15 〜 15：35	17：00 11月〜3月 16：30

〔備考〕 1．土曜日は第3時限、清掃は11：40〜11：55 2．LHRは火曜日第6時限
3．必修クラブは水曜日第6時限

6 職 員 等 (平成3年5月1日現在)

(1) 職 員

職名／性別	校長	教頭	教諭 国語	社会	数学	理科	保体	芸術	英語	家庭	養護教諭	小計	実習助手	事務長	事務職員	用務員	合計	非常勤講師
男	1	1	7	9	9	10	7	3	8			55		1		1	57	1
女			1						1	1	1	4	1		5	1	11	3
計	1	1	8	9	9	10	7	3	9	1	1	59	1	1	5	2	68	4

○印は主任・主事または部長

職名	氏名	担任	教科等	校務分掌	必修クラブ	部・同好会	委員会	着任年月日
校長	高橋 浩司		数学					H2. 4.1
教頭	大島 赳		国語					H3. 4.1
教諭	沼尻 幸男		国語		演劇	演劇		62. 4.1
〃	武田健之介		〃	○生活指導	山岳	山岳	同和	59. 4.1
〃	犬田 勝昭	○1年	〃		ソフトボール	ソフトボール		60. 4.1
〃	坂井 幸夫	2−5	〃	総務	文学	文学		H1. 4.1
〃	吉田 正	3-副	〃	○生徒指導	マンドリン	マンドリン		61. 4.1
〃	上野 一仁	3−3	〃	教務	吹奏楽	吹奏楽	新聞 同和	H1. 4.1
〃	長谷川 充	1-副	〃	生徒指導	JRC	JRC	文化	62. 4.1
〃	成澤 尚子		〃	進路指導	テニス	テニス		H3. 4.1
〃	桜井 久温		現社 倫理	○総務	文学	文学		52. 4.1
〃	鈴木富士雄		日本史 現社	○保健厚生	書道	書道		52. 4.1
〃	大谷 芳孝	3-副	地理	進路指導	サッカー	サッカー		H3. 4.1
〃	清水 攻	2-副	世界史 現社	図書	ESS	ESS	新聞	63. 4.1
〃	内田 寛	1−5	世界史 地理	管理	テニス	テニス		H3. 4.1
〃	馬場 勇	2-副	世界史 日本史	教務	バスケットボール	バスケットボール	同和	H3. 4.1

〃	越川　芳雄	2−6	日本史 世界史	総　務	テニス	テニス	同　和	H1. 4.1
〃	須藤　信夫	1−4	現社 政経	教　務	歴史研究	歴史研究		62. 4.1
〃	外山　貢	3−1	現社 政経	管　理	ラグビー	ラグビー	美　化	61. 4.1
〃	秋山　岩雄	1−9	数　学	生徒会指導	吹奏楽	吹奏楽		H2. 4.1
〃	金沢　正人		〃	○管　理	物理 マンドリン	物理 マンドリン		59. 4.1
〃	渡辺　陽		〃	○進路指導	コンピューター	コンピューター	コンピューター	55. 4.1
〃	松本　裕育	2−8	〃	教　務	バスケットボール・漫画研究	バスケットボール・漫画研究	コンピューター	63. 4.1
〃	高橋　勇雄	3−8	〃	図　書	茶華道	茶華道	放送 同和	57. 4.1
〃	北河　貞治	3−9	〃	進路指導	演劇 バレーボール	演劇 バレーボール	コンピューター	58. 4.1
〃	宮崎　賢一	1−3	〃	教　務	野　球	野　球		61. 4.1
〃	向笠　勝也	3−2	〃	生徒会指導	フォークソング	フォークソング	文　化	60. 4.1
〃	長野　一徳	2−1	〃	進路指導	サッカー	サッカー		H1. 4.1
〃	鈴木芳之助		地　学	○教　務	地学・野球・囲碁 ソフトボール	地学・野球 ソフトボール	コンピューター	H1. 4.1
〃	沢井　秀之	1-副	物　理	初任指導 生活指導	物　理	物　理	規律・コンピューター	57. 4.1
〃	小沢　誠	○3年	化　学		卓　球	卓　球		63. 4.1
〃	吉川　哲		物　理	管　理	地　学	地　学		H1. 4.1
〃	中安　均	1-副	生　物	進路指導	生　物	生　物		56. 4.1
〃	大迫　太	2−4	生　物	総　務	生物・コンピューター	生物・コンピューター	コンピューター	H1. 4.1
〃	土屋　修	1−7	化　学	教　務	写　真	写　真		59. 4.1
〃	伊藤　毅	2−7	化　学	管　理	化学・水泳	化学・水泳		H1. 4.1
〃	谷口　哲也		物　理	生徒会指導	水　泳	水　泳	放　送	H3. 4.1
講師	平野　俊幸		物理 地学	管　理	陸　上	陸　上		H3. 4.1
教諭	宍倉　健司	2-副	保健 体育	保健厚生	柔　道	柔　道		H1. 4.1
〃	西村ひとし	3-副	〃	総　務	バスケットボール	バスケットボール		56. 4.1
〃	古市　純久	1−6	〃	進路指導	陸　上	陸　上		53. 4.1
〃	木村　香住	1−2	〃	生活指導	ラグビー	ラグビー	規　律	63. 4.1
〃	津嶋　英也	2−3	〃	生活指導	野　球	野　球		H2. 4.1
〃	富田　慶一	2−9	〃	保健厚生	剣　道	剣　道	保健 体育	H2. 4.1
〃	青柳伸一郎	3−6	〃	生徒会指導	バレーボール	バレーボール	応援・体育・同和	56. 4.1
〃	井辻　紀一	1-副	音　楽	進路指導	音　楽	音　楽		54. 4.1
〃	平松　生夫	○2年	美　術		美術・陶芸	美術・陶芸		56. 4.1
〃	宮負　一昭	3−5	書　道	生徒会指導	書　道	書　道		H2. 4.1

〃	鶴岡　敏雄		英　語	○図　書	卓球 英文タイプ	卓　球	図書 同和	58. 4.1
〃	石田　三夫		〃	総　務	写　真	写　真		H2. 4.1
〃	吉田　秀樹	1−1	〃	生活指導	歴史研究	歴史研究	同　和	55. 4.1
〃	池田　和夫	3−4	〃	生活指導	バレーボール	バレーボール	文　化	H1. 4.1
〃	子安　雅博	1−8	〃	総　務	ＥＳＳ	ＥＳＳ		62. 4.1
〃	菅野　政敏	3−7	〃	図　書	山　岳	山　岳	放　送	H1. 4.1
〃	先田賢紀智	2−2	〃	生活指導	柔　道	柔　道	応　援	H2. 4.1
〃	松本　孝	2-副	〃	進路指導	剣　道	剣　道		H2. 4.1
講師	根井　伴子		〃	教　務	ソフトボール	ソフトボール		H3. 4.1
教諭	倉内くに子	3-副	家　庭	管　理	食物手芸	食物手芸	美　化	59. 4.1
養護教諭	大石　恵子			保健厚生	ＪＲＣ・陶芸	ＪＲＣ・陶芸	保　健	60. 4.1
非常勤講師	外山　智子		家　庭					H1. 4.1
〃	上林　美穂		英　語					H1. 4.1
〃	小出　和昭		国　語					H3. 4.1
〃	桜井　恵		〃					H3. 4.1
実習助手	玉上　玲子			教　務	化　学	化　学		55. 4.1
事務長	高浦　昌洸		事　務					H2. 4.1
副主査	佐瀬八重子	図書	〃	図　書			図　書	44. 4.1
〃	橋本　尚美	管理	〃					H3. 4.1
主事	田中　千香	給与	〃					H3. 4.1
〃	青木　恵子	会計	〃					H2. 4.1
〃	地引由紀子	庶務	〃					H3. 4.1
主任用務員	福田　昭雄							55. 4.1
〃	木村　幸枝							53. 4.1

(2) 委嘱講師

宮内美智子	茶華道	42.4.1

(3) 学校医等

茂手木直忠	内　科	57.6.1	山口　宗彦	耳鼻科	49.4.1
渡辺　勲	〃	41.4.1	磯貝　豊	歯　科	24.3.31
山田　晴彦	外　科	47.4.1	斉藤　暁	〃	55.4.1
武本　吉浩	眼　科	51.4.1	矢島　絹代	薬剤師	58.6.1

7　校務分掌組織

部	主任・主事等	分　　担	人員
総　　務	桜井　久温	学校要覧、儀式、職員会議、入学者選抜、奨学、渉外	7
教　　務	鈴木芳之助	行事計画、授業計画、教育課程、生徒異動、必修クラブ	9
管　　理	金澤　正人	施設使用、教室備品、防災、環境美化	7
生活指導	武田健之介	ＨＲ指導計画、規律、集会、同和教育、教育相談	7
進路指導	渡辺　　陽	調査、統計、進路相談、模試、課外	9
生徒会指導	吉田　　正	庶務、審議・議決機関指導、執行機関指導、会計、会計監査指導、学校行事への協力指導、部活動の連絡調整指導	7
図　　書	鶴岡　敏雄	購入計画、管理、読書指導、広報、視聴覚	5
保健厚生	鈴木富士雄	保健計画、身体測定、学校安全会、保健組合、購買	4

名　　称	構　　成	人員
職員会議	校長、教頭、事務長、教諭、実習助手、事務職員	66
運営委員会	教頭、事務長、各分掌・学年・教科の主任、主事等	23
学年主任会	教頭、学年・教務・生活指導の主任、主事	7
教科主任会	教頭、教務・教科主任	10
教育課程検討委員会	教頭、教務主任、教務部員２名、各教科主任、進路指導	13
学　　年　　会	学年主任、学級担任、副担任	14
同和教育委員会	教頭、教務、生活指導（２名）、生徒会指導、図書、社会科学年より各１名	10
コンピューター処理研究委員会	本年度は教務主任他、沢井、渡辺、北河、松本(裕)、大迫	6
初任者研究	指導教員（沢井）、教科指導員（沢井・吉田（正））	2

8　生　　徒

(1)　定員と現員

学　年	学　級	定　員	現　員		
			男	女	計
1	9	405	233	180	412
2	9	405	274	136	410
3	9	423	273	161	434
計	27	1,233	779	477	1,256

(2)　入学状況

年　　度		62	63	平成元年	平成２年	平成３年
募集定員		423	423	423	405	405
受験者数 A	男	359	355	386	357	320
	女	171	217	219	174	219
	計	530	572	605	531	539
合格者数 B	男	286	263	273	277	232
	女	140	167	158	136	180
	計	426	430	431	413	412
A／B		1.24	1.33	1.40	1.29	1.31

(3) 出身中学校別数（入学時）

市	中学校名	1年	2年	3年
千葉市	加曽利	5	6	6
	末広	1	2	0
	葛城	4	2	3
	椿森	4	4	4
	緑町	4	7	4
	小中台	8	12	14
	花園	7	13	12
	新宿	2	0	0
	蘇我	1	3	2
	犢橋	1	2	0
	幕張	5	4	4
	生浜	5	2	5
	誉田	2	5	7
	轟町	6	8	5
	松ケ丘	3	0	1
	白井	2	1	1
	川戸	3	1	4
	稲毛	7	11	16
	千草台	5	2	6
	花見川第一	0	3	2
	花見川第二	0	0	1
	幸町第一	4	1	1
	幸町第二	8	10	4
	土気	5	7	2
	千城台西	1	5	1
	星久喜	0	2	3
	こてはし台	2	1	4
	さつきが丘	6	4	6
	高洲第一	4	4	4
	高洲第二	4	5	6
	大宮	6	9	9
	草野	5	7	4
	真砂第一	5	9	11
	真砂第二	13	8	5
	幕張西	5	4	4
	千城台南	1	2	3
	都賀	10	11	7
	みつわ台	7	9	10
	緑ケ丘	9	13	7
	天戸	2	4	1
	若松	11	9	3
	高浜	8	7	4

市	中学校名	1年	2年	3年
千葉市	磯辺第一	13	11	18
	磯辺第二	9	5	2
	山王	16	5	9
	稲浜	6	4	2
	朝日ケ丘	11	8	9
	越智	0	5	2
	泉谷	2	2	0
	千葉大附属	11	25	29
	幕張本郷	3	0	0
	渋谷幕張	0	1	0
	貝塚	2	3	5
	計	264	288	272
八千代市	阿蘇	0	2	0
	高津	0	0	1
	勝田台	1	0	0
	大和田	0	0	2
	八千代台西	2	0	0
	村上東	1	1	2
	村上	1	1	2
	計	5	4	7
習志野市	第一	0	1	2
	第三	1	1	1
	第四	1	4	2
	第五	1	1	1
	第六	1	2	1
	第七	2	2	1
	計	6	11	8
船橋市	船橋	2	1	1
	法田	1	0	1
	二宮	2	3	1
	前原	1	1	1
	習志野台	0	1	1
	若松	0	0	1
	高根	0	0	3
	三田	1	0	3
	古和釜	0	0	2
	八木が谷	0	0	1
	行田	0	1	2
	七林	1	1	1
	芝山	0	0	2
	大穴	0	0	2
	葛飾	0	0	1

船橋市	飯山満	1	1	0
	海神	0	1	1
	高根台	0	0	3
	計	9	10	27
佐倉市	佐倉	4	2	4
	志津	0	2	1
	上志津	1	1	2
	西志津	1	0	0
	臼井	2	0	2
	南部	7	2	2
	井野	1	0	1
	佐倉東	0	1	1
	臼井西	0	0	1
	計	16	9	14
四街道市	四街道	6	7	6
	千代田	9	5	10
	四街道西	7	6	1
	四街道北	6	7	6
	旭	9	11	8
	計	37	36	31
八街市	八街	2	1	1
	八街中央	3	1	1
	計	5	2	2
市原市	八幡	2	3	0
	八幡東	2	1	4
	菊間	2	0	1
	辰巳台	8	5	2
	市原	0	1	3
	五井	4	2	4
	姉崎	5	0	3
	湿津	3	1	2
	南総	0	4	1
	有秋	10	11	11
	三和	0	3	0
	市東	1	1	2
	若葉	6	2	4
	双葉	3	3	2
	姉崎東	6	9	13
	国分寺台	1	4	4
	加茂	1	0	4
	東海	1	1	0
	千種	1	0	2
	国分寺台西	9	0	3
	計	65	51	65
学区外		0	0	2
県外		5	2	3
合計		412	413	431

(4) 居住地

	1年	2年	3年	計
千葉市	261	280	263	804
習志野市	7	11	11	29
船橋市	10	12	30	52
八千代市	5	7	6	18
佐倉市	17	11	14	42
四街道市	39	38	37	114
市原市	66	49	69	184
八街市	6	2	2	10
その他	1	0	2	3
計	412	410	434	1,256

(5) 通学方法

区分	徒歩	自転車	バス	電車	合計
人数	58	318	42	838	1,256

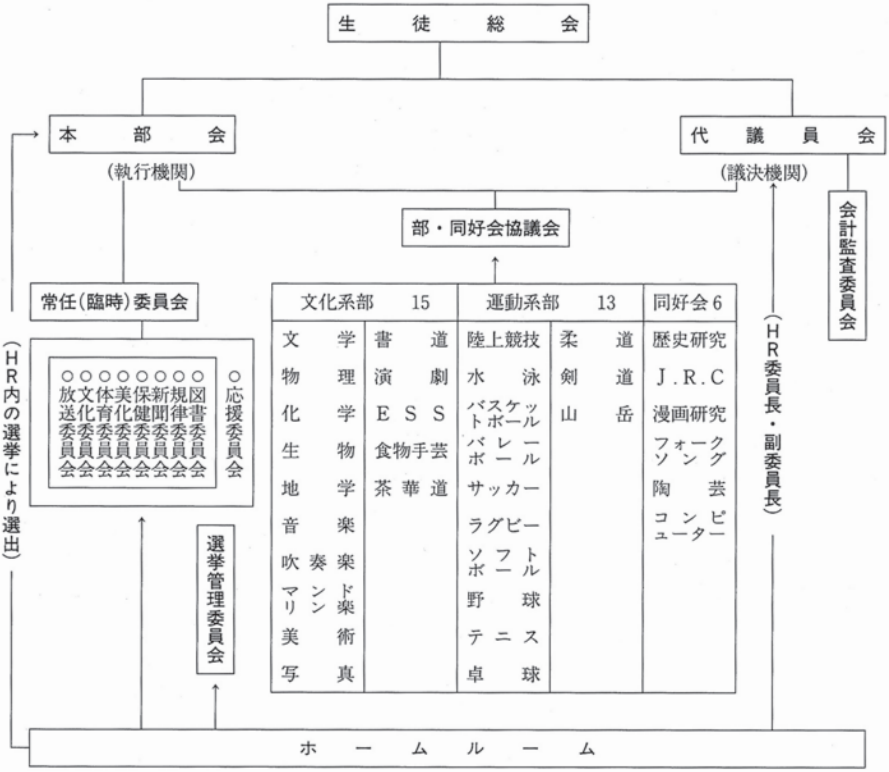
(6) 授業料と諸会費 (単位円)

学年	授業料	生徒会	PTA	教育振興費	保健組合	計
1	7,400	300	550	250	30	8,530
2	7,400	300	550	250	30	8,530
3	6,900	300	550	250	30	8,030

(7) 保護者の職業

区分／学年	農業	水産業	鉱業	建設業	製造業	商業	金融業	不動産業	運通信輸業	水道電気・ガス業	サービス業	公務	産その他の業	無業	計
1年	0	0	10	37	102	48	24	6	16	17	72	52	28	0	412
2年	1	0	7	34	93	33	26	6	14	15	92	57	32	0	410
3年	1	3	9	39	120	36	22	9	23	10	72	52	37	1	434
計	2	3	26	110	315	117	72	21	53	42	236	161	97	1	1,256

9 生徒会



10　部・同好会生徒数

	1　年		2　年		3　年		計
	男	女	男	女	男	女	
文　　学	1	2	1	2	3	0	9
物　　理	1	0	8	0	7	0	16
化　　学	9	0	5	0	9	0	23
生　　物	0	1	3	1	0	0	5
地　　学	1	0	3	0	0	1	5
音　　楽	5	24	17	16	15	17	94
吹　奏　楽	3	15	6	11	7	12	54
マンドリン楽	7	28	10	25	8	17	95
美　　術	0	7	0	5	0	6	18
写　　真	3	1	3	1	1	0	9
書　　道	1	0	1	1	0	3	6
演　　劇	0	0	0	1	1	4	6
E　S　S	0	3	0	0	0	4	7
食　物　手　芸	0	6	0	2	0	6	14
茶　華　道	0	11	1	12	0	4	28
文科系部計	31	98	58	77	51	74	389
陸　上　競　技	8	8	5	5	12	8	46
水　　泳	3	11	4	1	10	1	30
バスケットボール	22	19	6	6	12	5	70
バレーボール	16	13	13	11	7	12	72
サ　ッ　カ　ー	19	2	25	1	9	2	58
ラ　グ　ビ　ー	21	3	17	2	20	1	64
ソフトボール	0	3	0	10	0	5	18
野　　球	16	0	16	2	10	1	45
テ　　ニ　ス	35	14	13	12	21	11	106
卓　　球	8	0	12	0	7	0	27
柔　　道	6	0	17	0	6	1	30
剣　　道	4	6	8	3	5	2	28
山　　岳	9	0	5	3	4	0	21
運動系部計	167	79	141	56	123	49	615
歴　史　研　究	0	1	0	0	1	0	2
J　R　C	0	2	0	4	1	4	11
パ　ソ　コ　ン	1	0	7	9	0	0	17
漫　画　研　究	0	2	2	2	2	2	10
フォークソング	2	0	1	0	8	1	12
陶　　芸	1	1	0	3	0	8	13
同　好　会　計	4	6	10	18	12	15	65
総　　計	202	183	209	151	186	138	1,069

11 図 書 館

(1) 施 設　閲覧室 242.5㎡ (92名収容)　司書室 38.2㎡　書庫 9.0㎡

(2) 図 書

(平成３年４．１現在)

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
冊数	2,965	1,520	3,478	2,738	2,696	902	245	1,995	1,099	9,087	26,725
%	11.1	5.7	13.0	10.2	10.1	3.4	0.9	7.5	4.1	34.0	100.0

(3) 利用状況 (平成２年度)

開館日数　237日　閲覧者１日平均　200人　貸出冊数 2,074冊

(4) 書 架　660m

(5) 決 算　1,828,000円

(6) 購入雑誌　世界、中央公論、文芸春秋、蛍雪時代、暮らしの手帖、旅、太陽、栄養と料理、科学朝日、アサヒカメラ、装苑、新聞月報、芸術新潮、音楽の友、高１・２・３コース、レディブティック、ニュートン、山と渓谷、天文と気象、学校図書館、岩波ブックレット等

12 平成２年度学校運営費 (決算)

(単位 千円)

目	節	金 額	説 明
教育指導費	旅費その他	73	学力検査、研修旅費
高校総務費	旅 費	5,949	
高校管理費		44,816	
	賃 金	120	植木職人
	食 糧 費	260	
	需 用 費	27,872	電気6,374　水道5,172　ガス1,230　部活動1,268 修繕1,860　消耗、印刷、図書費等11,968
	役 務 費	966	電話361　切手57　ピアノ調律101　クリーニング29 ゴミ処理306　その他点検修理112
	委 託 料	599	構内電話保守91　樹木管理委託261 備品廃棄処分委託247
	使用料及賃借料	1,348	下水道料1,229　ＮＨＫ受信料76　タクシー43
	備品購入費	13,562	被服室机6,724　教材教具2,634　図書1,402 部活動1,400　一般備品1,402
	負 担 金	89	
学校建設費		39,569	
	工事請負費	31,941	防球ネット及び通用門設置4,738　体育倉庫兼部室17,922　仮設便所設置6,283　体育館天井補修999 書道掲示板取付690　部室塗装978　その他331
	備品購入費	7,628	生徒用ロッカー6,174　掃除用具入646 部室物品棚他808
合 計		90,407	

13 卒 業 生

(1) 進 路 状 況

	普通科			
年度	62	63	平成元	平成2
卒業生	399	415	425	424
進学	166	190	214	224
就職	0	0	0	0
家事家業	0	0	0	0
その他	233	225	211	200

(2) 普通科合格者延数

〔国公立大学〕　　(　) 内は女子を内数で示す。

大学名	62年度		63年度		平成元年度		2年度	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
北海道	1	4(2)	5	2	2(1)	2	2	4
弘前				1		1		1
岩手		1(1)		1				
東北	9(1)	5	4(1)	5	8(1)	8(1)	5	4
秋田								1
山形				3(1)		1(1)	1	
福島			1(1)			1		
茨城		2(2)	1(1)			2		
図書館情報					1		1	
筑波	2	3	4(1)	2(1)	8(2)	5	3	4
宇都宮		3(1)				1		
群馬		2				2	1(1)	
埼玉	4(1)	3(1)	8(6)	3(1)	3(2)	3(1)	5	2(1)
千葉	21(11)	12(4)	46(31)	21(8)	37(21)	20(7)	42(24)	17(2)
東京	1	4(2)	2	2	1	3		6
東京医科歯科				1	1(1)	3(1)	1(1)	1(1)
東京外国語	3(1)	1	4(4)	4(3)	6(6)	2(2)	8(8)	
東京学芸	8(6)	5(3)	14(12)	2	3(1)	2(1)	3(3)	
東京農工	3(1)	2(1)			2	2	1	4
東京芸術	2(1)		1	1			1(1)	
東京工業	2(1)	6	4	3	8	10	2	11(1)
東京商船			1					
東京水産	1			1				
お茶の水女子	4(4)	1(1)	2(2)	1(1)	3(3)	1(1)	2(2)	1(1)
電気通信	1	2	2		1	1	1(1)	3
一橋	1	8		2	2	8	1(1)	
横浜国立	5(1)	10	7(1)	3(1)	5(3)	4(1)	8(7)	5
新潟			1		1	1		

富山				1		2	1	
富山医科薬科				1(1)				1
金沢	2	2	1(1)	3		1	1	1
山梨				1		2		
山梨医科						1(1)		
信州	4(2)	3	4(1)	6(1)	4	2(1)		2
静岡		1	1		1	2(1)	1	
名古屋	4(1)	9	2	3	1	2		
名古屋工業								1
滋賀								1
京都	2	1		1	1			
京都工芸繊維		1						
大阪	2(1)	3(1)		2	2(1)			1
大阪外国語				1				
神戸	2	2						2
奈良女子					1(1)			
鳥取				1(1)				
岡山		1				1	2	
山口	1	1(1)			1(1)			
九州				1				1
九州芸術工科			1(1)		2			
佐賀				1				
佐賀医科					1(1)			
長崎	1(1)							
鹿児島					2(1)			
福島県立医科								1
高崎経済				1		1		1
東京都立	2	4(1)	1(1)	2	6(2)	2	2(2)	7(1)
横浜市立		2(1)	5(3)	1	2(1)	2		2(2)
都留文科				1		1(1)		1
岐阜薬科	1					1(1)		
名古屋市立								1
京都府立医科						1		
東京都立科学技術	1			5	2			2
釧路公立				1				
大阪府立			1			2		1
姫路工業								2
静岡県立			1(1)					1
九州歯科				1		1(1)		
(国公立大計)	90(33)	104(22)	124(68)	92(19)	118(49)	107(22)	95(51)	93(9)

〔私立大学〕

大学名	62年度		63年度		平成元年度		2年度	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
札幌						1		
酪農学園		1(1)						
東北学院						1		
自治医科			1					
跡見学園女子		1(1)					1(1)	
東京国際				1				
城西								1
明海		1	1(1)			1(1)	1(1)	
独協		2(1)	5(5)	1	2(2)		1(1)	1
文教			1(1)					1(1)
淑徳			2(2)					
敬愛						2		
千葉工業	1	7	1	4	1	3	1	5
千葉商科						2		2
中央学院				2				
神田外語	1(1)	2(1)	3(2)	1	4(4)		7(6)	1
駿河台		1(1)				1		3
和洋女子		1(1)						
青山学院	9(2)	16(6)	13(8)	15(1)	13(6)	24	16(10)	17(2)
亜細亜				1(1)				5
大妻女子	1(1)	2(2)	2(2)		2(2)		1(1)	1(1)
桜美林						1(1)	1(1)	2
学習院	5(4)	13(4)	14(10)	14(5)	4(4)	21(2)	7(7)	8(1)
北里		1(1)	1(1)			1(1)	2(2)	
共立女子	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	3(3)		7(7)	3(3)
共立薬科	1(1)		3(3)	1(1)	4(4)	1(1)	1(1)	
帝京技術科学				1			1	
八千代国際					1	1		
東京情報		1		2	1(1)			1
杏林		1						1(1)
国立音楽	1(1)							
慶応義塾	10(5)	27(3)	7(3)	18(2)	18(7)	27(3)	12(8)	25(3)
工学院		1		2		2		4
国学院	3(2)	2	3(3)	1(1)	3(2)	5(5)	3(3)	2(1)
国際基督教		2(1)	1(1)		2(1)	1	1(1)	1
国士館								2(1)
駒沢	1	5(2)	3(3)	12(3)	2(1)	15(1)	5(3)	15(3)
実践女子	2(2)		2(2)	1(1)	1(1)		2(2)	
芝浦工業		1	1	4(1)	2(1)	4	3(1)	7
順天堂				2(2)				1
上智	11(3)	15(4)	6(4)	20(3)	18(10)	30(4)	11(5)	17(4)

昭和		1	1			3(1)		1
昭和女子	2(2)	1(1)	1(1)		1(1)		4(4)	2(2)
昭和薬科			1(1)			1		1
白百合女子	1(1)				2(2)		5(5)	1(1)
成渓		5(4)	6(4)	6(1)	5(3)	14	5(5)	5(1)
成城	3(2)	10(1)	1(1)	10(2)	3(2)	4	4(2)	7(2)
聖心女子	1(1)		2(2)		8(8)		2(2)	2(2)
清泉女子	2(2)		1(1)		5(5)	1(1)	1(1)	1(1)
聖路加看護			1(1)					
専修	2(2)	2		9(2)	1(1)	9(1)	1(1)	6
創価					1			
大東文化		1(1)	1(1)			1	1(1)	6(3)
拓殖						1		
玉川					1(1)			
多摩美術		1					1(1)	2
中央	5(1)	13	6(2)	18	11(5)	31(4)	14(3)	35(3)
津田塾	3(3)	1(1)	7(7)	3(3)	2(2)	1(1)	3(3)	1(1)
東海		2	2(1)	2	2	6	2(2)	2(1)
東京医科						1(1)		
東京音楽						1(1)		
東京経済		1						2
東京歯科			1(1)					
東京慈恵会医科		1	1					
東京女子	11(11)	5(5)	17(17)	3(3)	18(18)	6(6)	21(21)	6(6)
東京電機	1	5		5	2	11(1)	6(4)	6
東京農業	3(1)	2(2)	1	1		4(1)	3(3)	1
東京工科				1				
東京薬科	1	2(1)		3(2)	1(1)	3(1)		1
東京理科	6(2)	73(2)	20(3)	66(12)	39(6)	60(9)	35(6)	62(6)
東邦	2(2)	3	7(7)	7(6)	4(3)	10(2)	6(5)	3(3)
東洋		2	2(2)	3	1(1)	1	2(1)	7(3)
二松学舎				1(1)	2(1)			2
日本	3(2)	28(4)	5(4)	39(7)	8(4)	39(4)	20(13)	38(8)
日本医科		1		1		1		
日本社会事業		1						1
日本獣医畜産						2(1)	1	
日本女子	6(6)	6(6)	16(16)	4(4)	16(16)	6(6)	25(25)	8(8)
日本赤十字看護						1(1)		
法政	8(3)	15(3)	11(7)	24(1)	10(6)	18(4)	10(3)	26(3)
星薬科	2(2)	1	4(4)	2(2)	1(1)	2(2)	2(2)	
武蔵			2(2)	4(2)		2(1)		5
武蔵工業	1	3		3(1)	1(1)	2	1	2
武蔵野音楽	1		1(1)					

武蔵野女子		1(1)						
武蔵野美術				1				2
明治	10(5)	46(11)	22(11)	61(9)	25(10)	47(4)	26(9)	55(10)
明治学院	6(4)	18(5)	6(6)	22(4)	12(9)	9(2)	13(12)	12(3)
明治薬科		3(1)	4(4)	1		3(1)	1(1)	
明星								2
立教	10(6)	12(4)	17(14)	23(3)	18(14)	24(1)	20(12)	21(3)
立正		1(1)						2
早稲田	24(6)	77(11)	37(14)	56(6)	32(11)	72(3)	31(10)	56(9)
麻布						1(1)		
神奈川	1(1)	1		1	1	1	2(1)	4(2)
関東学院		1		2(1)		1		1
相模工業								1
産能								1
東京工芸						1		
フェリス女学院					2(2)		2(2)	
横浜商科						1		
松蔭学園横浜								1
東洋英和女学院					1(1)			
東海女子				1(1)				
名城		1						
千葉経済				1				
同志社	1	7	1	2	1	3	2(1)	4
京都外国語	2(2)							
立命館	1	3(2)		4	3	4(1)	2(2)	13
龍谷						1(1)		
大阪芸術		1						
関西				1				2
帝塚山学院	1(1)							
関西学院						1	2(1)	3
兵庫医科			1(1)					
エリザベト音楽			1(1)					
久留米						1		
産業医科				2(1)				
(私立大計)	168(92)	462(97)	278(189)	497(96)	321(184)	556(82)	360(225)	548(102)

〔準　大〕

大学名	62年度		63年度		平成元年度		2年度	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
気象							1	
防衛医科								
水産	1			1				
(準大学計)	1	0	0	1	0	0	1	0

〔国公立短大〕

大学名	62年度		63年度		平成元年度		2年度	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
東京都立医技短							1(1)	
東京都立商科短	1(1)							
千葉県立衛生短	2(2)					1(1)		1
(国公立短大計)	3(3)	0	0	0	0	1(1)	1(1)	1

〔私立短大〕

大学名	62年度		63年度		平成元年度		2年度	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
聖徳学園短		1(1)						
和洋女子短							1(1)	
青山学院女子短	3(3)	3(3)	2(2)	2(2)	4(4)		7(7)	
跡見学園短	1(1)							
大妻女子大短			3(3)				2(2)	
学習院女子短	2(2)	1(1)	1(1)		4(4)		5(5)	1(1)
共立女子短	1(1)		1(1)				1(1)	
昭和女子大短	1(1)		1(1)				1(1)	
成城短			2(2)					
東京工芸大短						1(1)		
東京電機大短								1
東邦音楽短					1(1)			
東洋女子短	1(1)							
日本大短				1(1)				1(1)
文京女子短							1(1)	
明治大短	2(2)	1(1)	4(4)	1(1)		2(2)	3(3)	
立教女学院短					1(1)		2(2)	
上智短	1(1)							
創価女子短							1(1)	
(私立短大計)	12(12)	6(6)	14(14)	4(4)	10(10)	3(3)	24(24)	3(2)

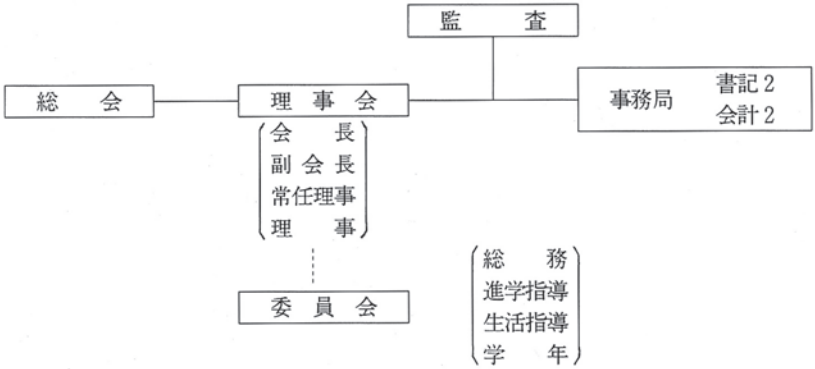
(3) 卒業者数

	全日制					通信制			合計
	市立高女	市立女子高	千葉三高	千葉東高	小計	千葉三高	千葉東高	小計	
男	0	0	1,124	7,378	8,502	30	984	1,014	9,516
女	763	37	1,936	※ 4,944	※ 7,680	28	3,245	3,273	10,953
計	763	37	3,060	※12,322	※16,182	58	4,229	4,287	20,469

※印は衛生看護科680名を含む。

14 P T A

(1) 組　　織



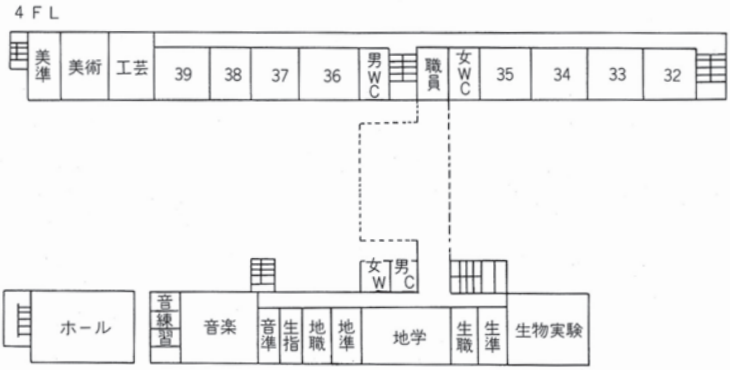
(2) 平成2年度決算

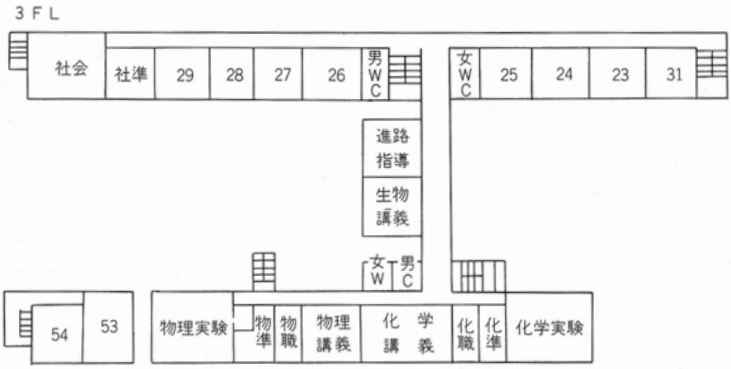
収　入　　(単位　千円)

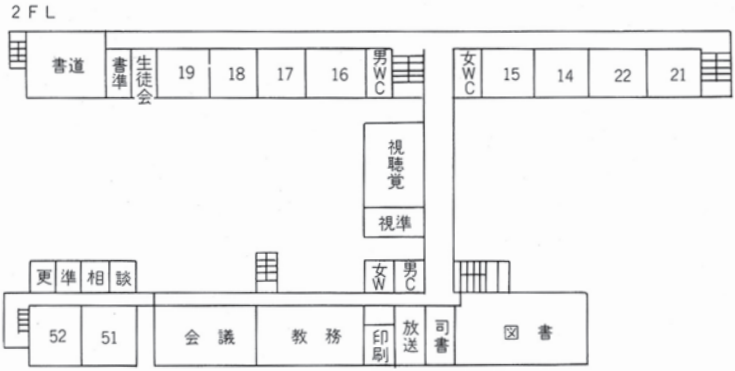
項	金　額
1．会　費	8,357
2．入会金	82
3．繰越金	984
4．雑収入	55
合　計	9,478

(単位　千円)

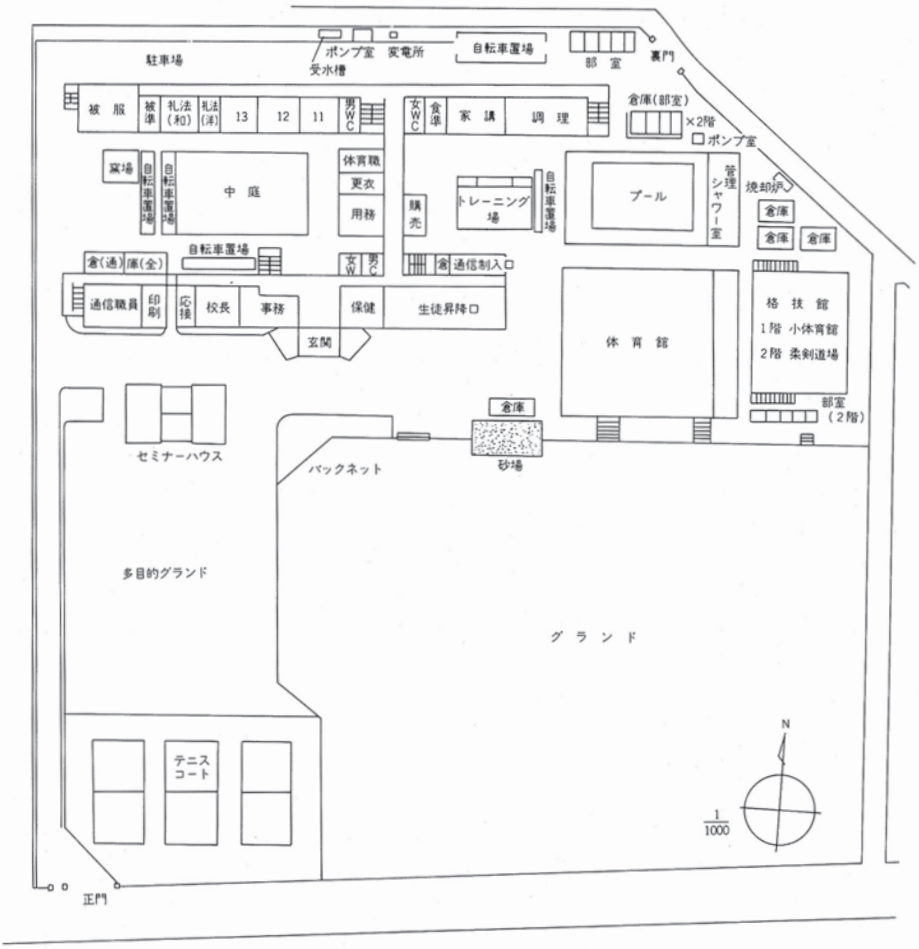
項	目	金　額
1．運営費		1,443
	事務費	158
	会議費	449
	活動費	700
	慶弔費	36
	諸　費	100
2．生徒指導費		4,162
	特別指導費	2,149
	学校行事費	501
	部振興費	1,512
3．研修奨励費		1,242
	研究奨励費	350
	研修費	627
	謝恩費	265
4．環境整備費		80
5．経営援助費		410
	需要費	149
	運営費	261
6．予備費		0
合　計		7,337


4 F L
美準
美術
工芸
39
38
37
36
男WC
職員
女WC
35
34
33
32
女W
男C
ホール
音練習
音楽
音準
生指
地職
地準
地学
生職
生準
生物実験


3 F L
社会
社準
29
28
27
26
男WC
女WC
25
24
23
31
進路指導
生物講義
女W
男C
54
53
物理実験
物準
物職
物理講義
化学講義
化職
化準
化学実験


2 F L
書道
書準
生徒会
19
18
17
16
男WC
女WC
15
14
22
21
視聴覚
視準
更
準
相
談
女W
男C
52
51
会議
教務
印刷
放送
司書
図書

15　校舎配置図と平面図



16　通信制課程

職員および生徒（平成３年５月１日現在）

1.職員（校長および事務長は全日制を兼務）

職名＼性別	校長	教頭	教諭 国語	社会	数学	理科	保体	芸術	英語	家庭	商業	小計	事務長	事務職員	用務員	合計	非常勤者
男	(1)	1	2	3	2	3	2		2		2	17	(1)		1	18	4
女			1	1				1	1	1		5		3		8	5
計		1	3	4	2	3	2	1	3	1	2	22		3	1	26	9

○印は主任・主事または部長、スクリはスクーリングの意味。

職名	氏名	担任	教科	校務分掌	必修クラブ	部・同好会	委員会	着任年月日
教頭	之香正友		社会				編集	平成 3. 4. 1
教諭	武純博泰貴清三謹正国生一哲博彦之雄子美子郎子次子子明二子子文	3B ④A 1E	○国語	指導 生徒会 図書 学習会 ○総務 試験	談書 バドミントン 囲碁・将棋	文芸 野球 合唱		平成元. 4. 1 昭和59. 4. 1 平成 2. 4. 1 〃 3. 4. 1
〃	一子道彦郎博貴清三謹正国生一哲博彦之雄子美子郎子次子子明二子子文	1C ③AC 3E	○社会	通信 視聴覚 総務 渉外 進路 生徒会 教務 試験	美術 郷土（歴史研究） テニス バドミントン	美術 社交ダンス バレーボール バスケットボール		昭和60. 4. 1 〃 63. 4. 1 〃 63. 4. 1 平成 3. 4. 1 〃 3. 5. 1 〃 3. 7. 1
講師	木沢野村田吉辺村曽村子野淵田本山守葉東駒内本崎岡地							
教諭	力	4C 2D	○数学	学習会 スクリ ○指導	談書 バレーボール	テニス バドミントン・柔道	風紀	昭和63. 4. 1 平成元. 4. 1 〃 7. 1
〃	根	①A 1B 2C 2F 1副	○理科	教務 教材 試験 図書 教務 視聴覚 特活 進路 指導 特活	卓球 ギター 卓球 バスケットボール バレーボール	卓球 サッカー 生物 バスケットボール 陸上	図書 体育	昭和56. 4. 1 平成 3. 4. 1 〃 3. 4. 1 昭和61. 4. 1 平成 3. 4. 1
講師	木	2副	○保体		バレーボール	陸上		昭和62. 4. 1
期講師	由		○芸術	生徒会 特活	書道 合唱	書道		平成 3. 4. 1 昭和63. 4. 1
講師	真宏紀							〃 62. 4. 1
教諭	由	②A 4BD 4B	○英語	指導 健康 ○図書 通信 総務 教材	テニス 英会話 音楽鑑賞	テニス 書道 バレーボール	図書	昭和60. 4. 1 平成元. 4. 1 〃 3. 4. 1
〃	宏		○家庭	指導 健康	手芸	社交ダンス		〃 2. 4. 1
〃	紀	2B					美化	〃 2. 4. 1
講師	由		○商業	○教務 スクリ 視聴覚	ソフトボール 珠算	珠算 バドミントン		昭和61. 4. 1
教諭	ま	5組 4D						平成元. 4. 1
〃	貴久							〃 3. 4. 1
養護	美美							〃 3. 4. 1
事務	奉		事務	渉外				昭和63. 4. 1
副主	文			渉外				平成 3. 4. 1
用務	菊			用務				昭和63. 4. 1

校務分掌	分担・内容	人員
総務	総務・儀式立案 議事録 要覧　渉外・振興会 同窓会　東高通信・発行	7
教務	教務・行事 公簿 コンピュータ等　教材教具・レポート等　試験・スクーリング・学習会	10
生徒指導	生活指導・相談 同和等　生徒会・規章等　特別活動・合宿 必修クラブ等　進路・健康管理	8
図書	図書・視聴覚	6
事務	予算　収入　支出　服務　報酬　文書　証明書　生徒事務等	3

2.生徒

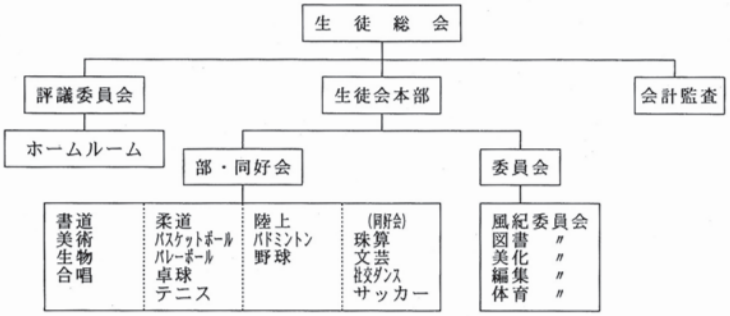
(1)現員

組	クラス	男	女	計
1	5	114	169	283
2	6	211	220	431
3	3	74	118	192
4	4	113	140	253
計	18	512	647	1159

この他に、科目別履修生として下の通り

本校履修生	12
県職員研修生	43
市原刑務所研修生	37

(2)生徒会

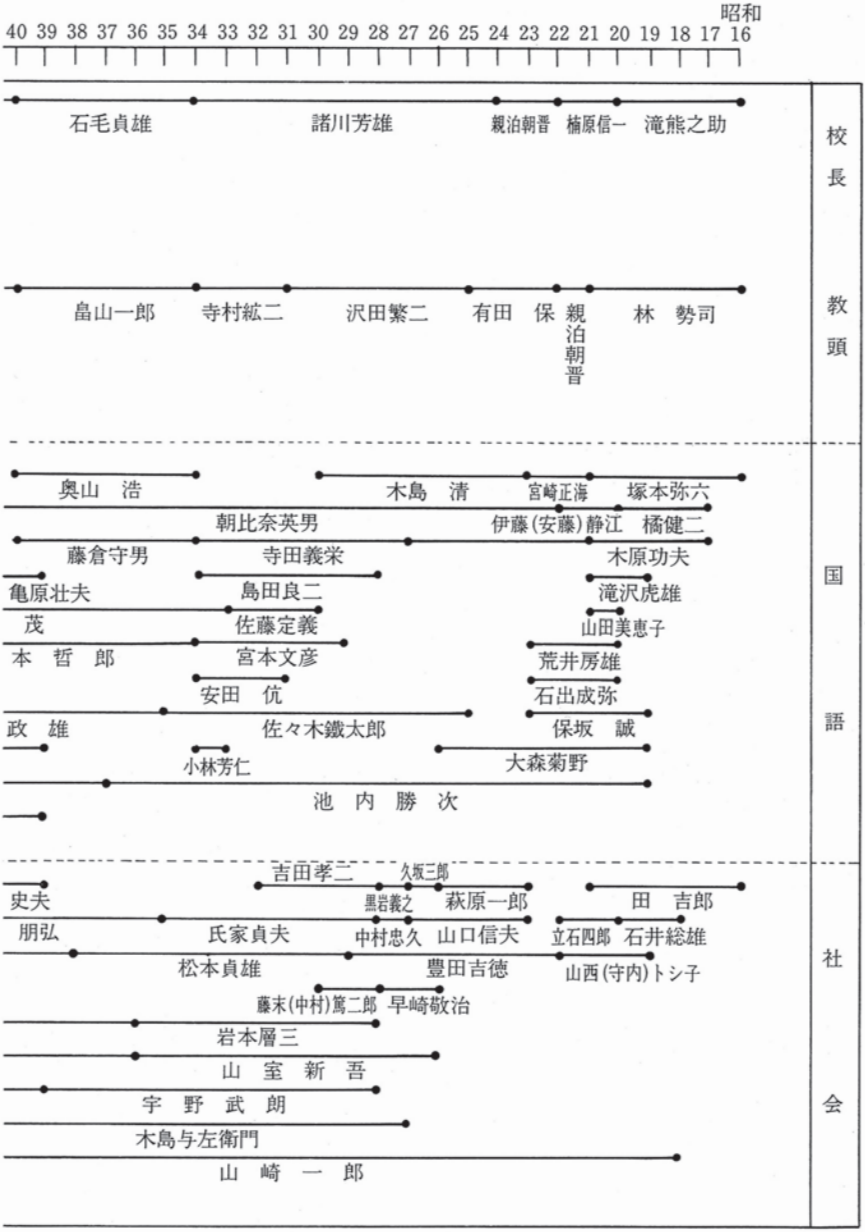


(3)在籍生徒の職業別構成



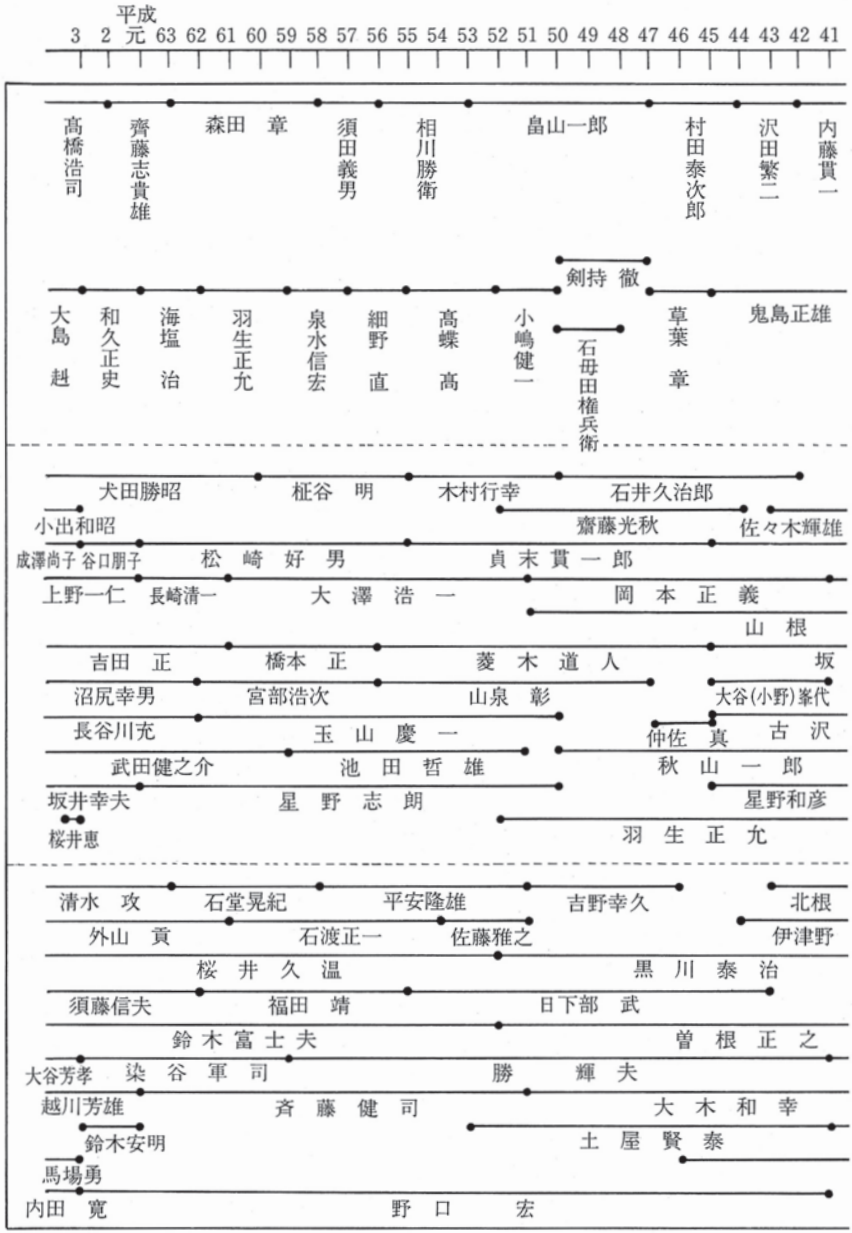
(4)年度別在籍数および卒業数

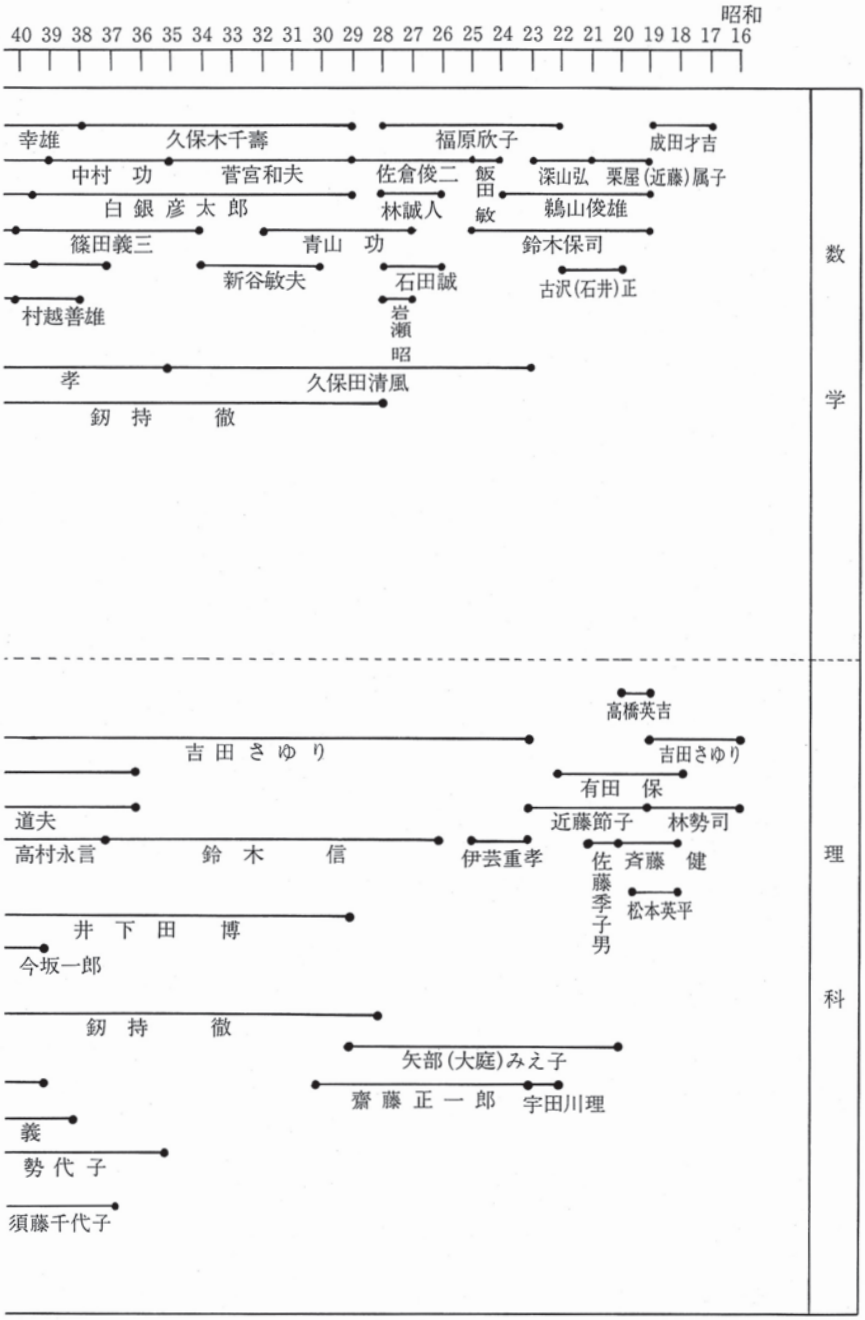
年度	在籍数	卒業数
昭和29	486	
30	842	
31	989	3
32	1014	9
33	1033	13
34	1012	11
35	1193	22
36	1325	25
37	1356	26
38	1313	40
39	1376	75
40	1414	80
41	1381	59
42	1395	134
43	1388	87
44	1327	161
45	1307	112
46	1379	181
47	1328	177
48	1429	143
49	1466	191
50	1549	214
51	1554	175
52	1643	202
53	1651	360
54	1367	272
55	1216	256
56	1020	189
57	797	137
58	826	144
59	854	108
60	849	103
61	936	110
62	1022	90
63	1055	94
平成 元	1068	111
2	1100	127
3	1159	133

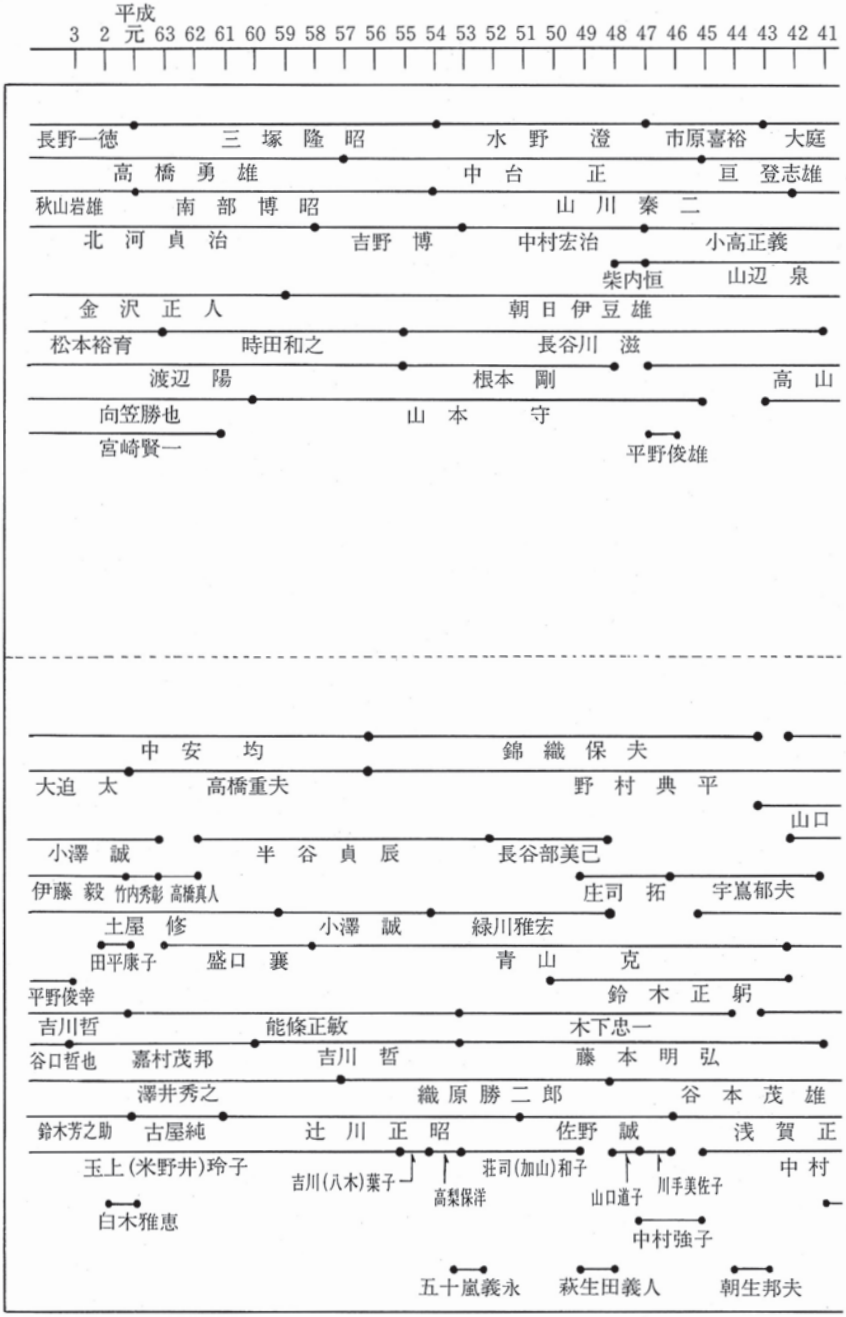

昭和
40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
校長
石毛貞雄
諸川芳雄
親泊朝晋
楠原信一
滝熊之助
教頭
畠山一郎
寺村紘二
沢田繁二
有田 保
親泊朝晋
林 勢司
国語
奥山 浩
木島 清
宮崎正海
塚本弥六
朝比奈英男
伊藤(安藤)静江
橘健二
藤倉守男
寺田義栄
木原功夫
亀原壮夫
島田良二
滝沢虎雄
茂
佐藤定義
山田美恵子
本 哲 郎
宮本文彦
荒井房雄
安田 伉
石出成弥
政 雄
佐々木鐵太郎
保坂 誠
小林芳仁
大森菊野
池 内 勝 次
社会
吉田孝二
久坂三郎
史夫
墨岩義之
萩原一郎
田 吉郎
朋弘
氏家貞夫
中村忠久
山口信夫
立石四郎
石井総雄
松本貞雄
豊田吉徳
山西(守内)トシ子
藤末(中村)篤二郎
早崎敬治
岩本層三
山 室 新 吾
宇 野 武 朗
木島与左衛門
山 崎 一 郎

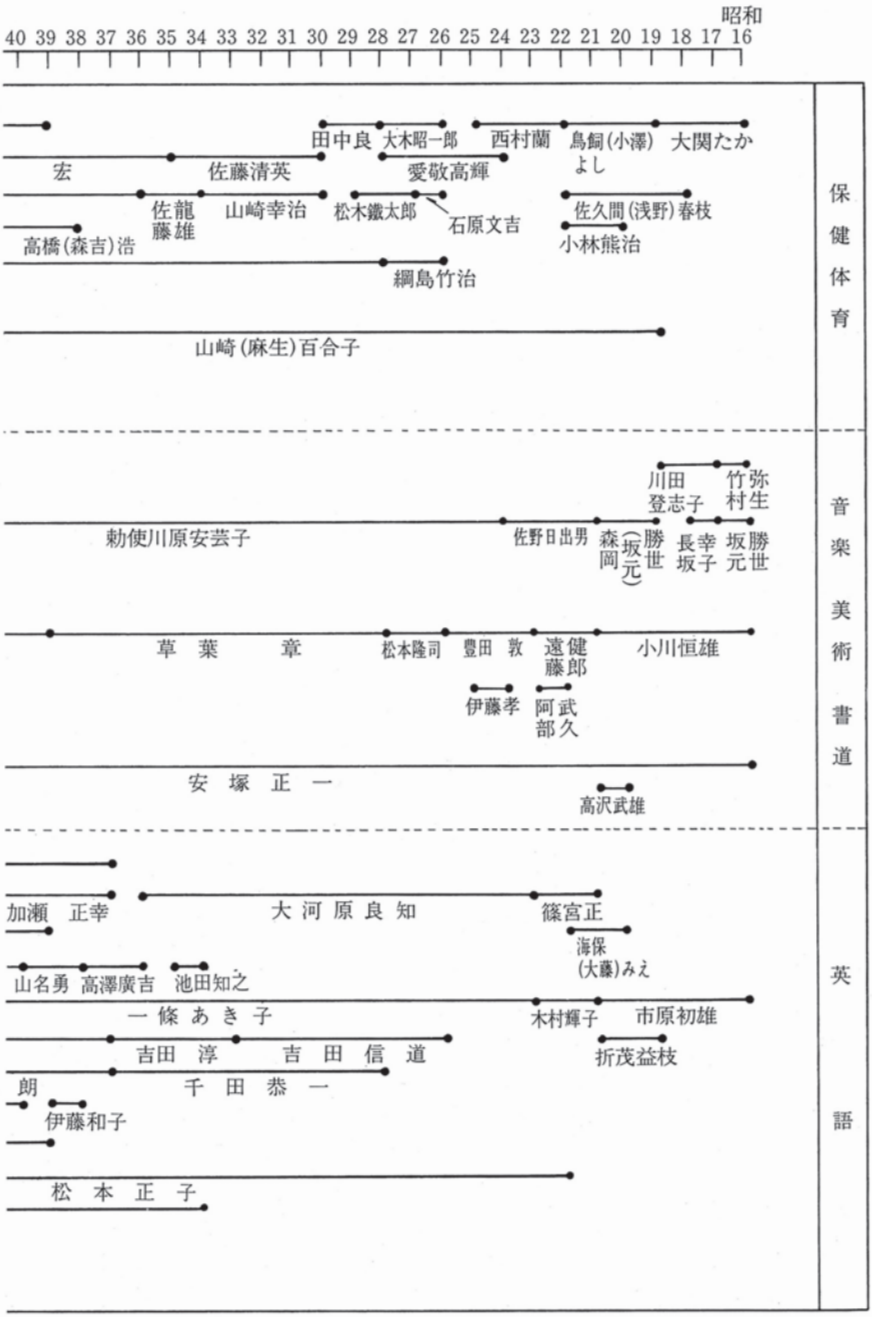
第2節　歴代職員一覧

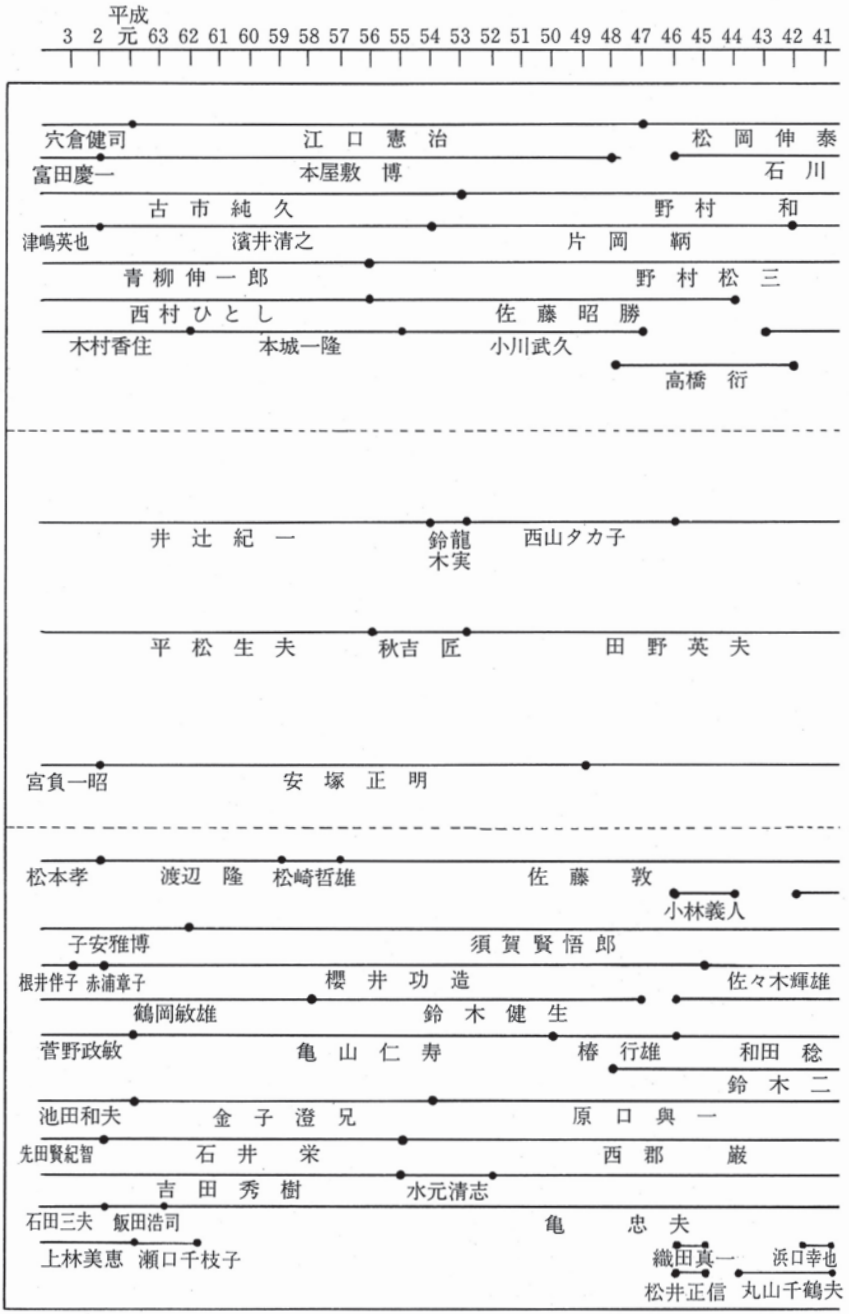
全　日　制



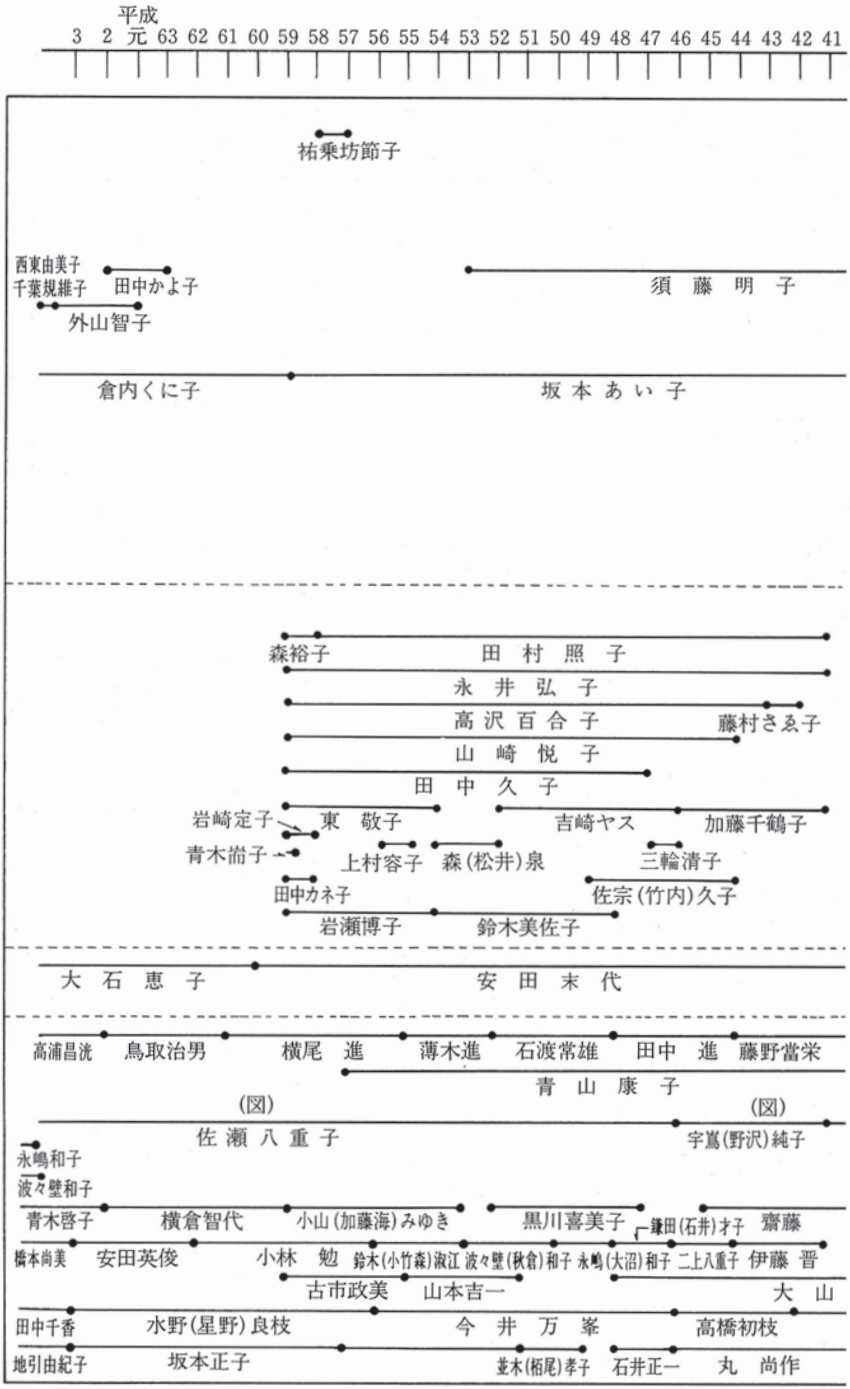

昭和
40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
幸雄
久保木千壽
福原欣子
成田才吉
中村 功
菅宮和夫
佐倉俊二
飯田敏
深山弘
栗屋(近藤)属子
白銀彦太郎
林誠人
鵜山俊雄
篠田義三
青山 功
鈴木保司
新谷敏夫
石田誠
古沢(石井)正
村越善雄
岩瀬昭
孝
久保田清風
釼持 徹
数学
高橋英吉
吉田さゆり
吉田さゆり
有田 保
道夫
近藤節子
林勢司
高村永言
鈴木 信
伊芸重孝
佐藤季子
斉藤 健
男
松本英平
井下田 博
今坂一郎
釼持 徹
矢部(大庭)みえ子
齋藤正一郎
宇田川理
義
勢代子
須藤千代子
理科

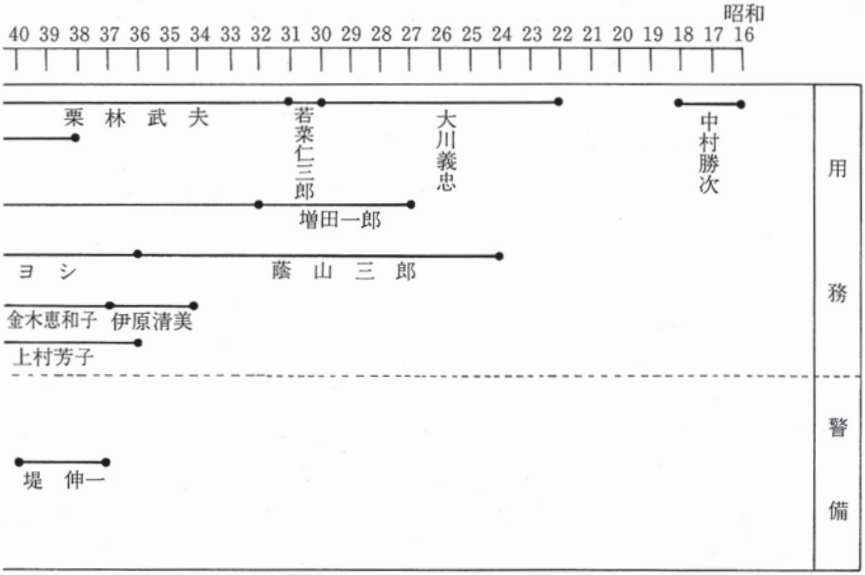

平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41
長野一徳
三塚隆昭
水野澄
市原喜裕
大庭
高橋勇雄
中台正
亘登志雄
秋山岩雄
南部博昭
山川秦二
北河貞治
吉野博
中村宏治
小高正義
柴内恒
山辺泉
金沢正人
朝日伊豆雄
松本裕育
時田和之
長谷川滋
渡辺陽
根本剛
高山
向笠勝也
山本守
宮崎賢一
平野俊雄
中安均
錦織保夫
大迫太
高橋重夫
野村典平
山口
小澤誠
半谷貞辰
長谷部美己
伊藤毅
竹内秀彰
高橋真人
庄司拓
宇嶌郁夫
土屋修
小澤誠
緑川雅宏
田平康子
盛口襄
青山克
平野俊幸
鈴木正躬
吉川哲
能條正敏
木下忠一
谷口哲也
嘉村茂邦
吉川哲
藤本明弘
澤井秀之
織原勝二郎
谷本茂雄
鈴木芳之助
古屋純
辻川正昭
佐野誠
浅賀正
玉上(米野井)玲子
吉川(八木)葉子
高梨保洋
荘司(加山)和子
山口道子
川手美佐子
中村
白木雅恵
中村強子
五十嵐義永
萩生田義人
朝生邦夫

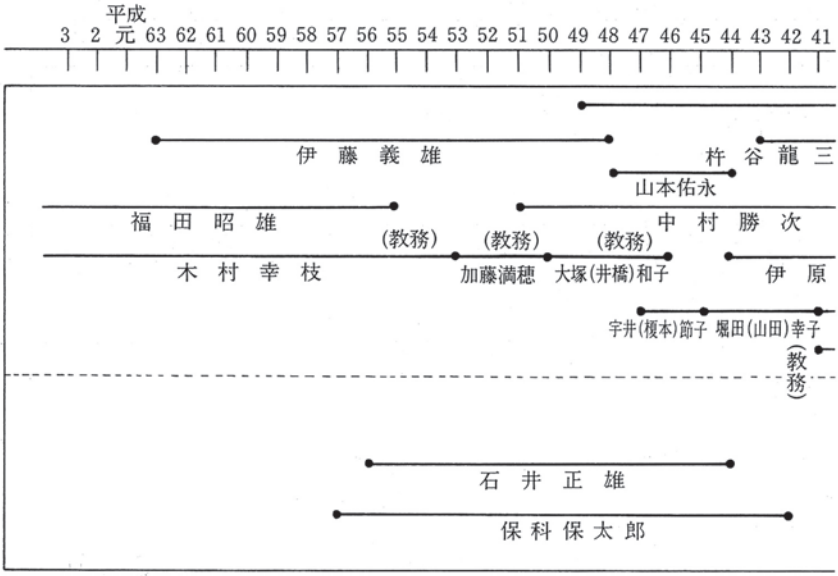

昭和
40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
田中良
大木昭一郎
西村蘭
鳥飼(小澤)よし
大関たか
宏
佐藤清英
愛敬高輝
佐藤龍雄
山崎幸治
松木鐵太郎
石原文吉
佐久間(浅野)春枝
高橋(森吉)浩
小林熊治
綱島竹治
山崎(麻生)百合子
保健体育
川田登志子
竹村幸子
弥生坂元
勅使川原安芸子
佐野日出男
森岡(坂元)
勝世
勝世
草葉章
松本隆司
豊田敦
遠藤健郎
小川恒雄
伊藤孝
阿部武久
安塚正一
高沢武雄
音楽美術書道
加瀬正幸
大河原良知
篠宮正
海保(大藤)みえ
山名勇
高澤廣吉
池田知之
一條あき子
木村輝子
市原初雄
吉田淳
吉田信道
折茂益枝
朗
千田恭一
伊藤和子
松本正子
英語

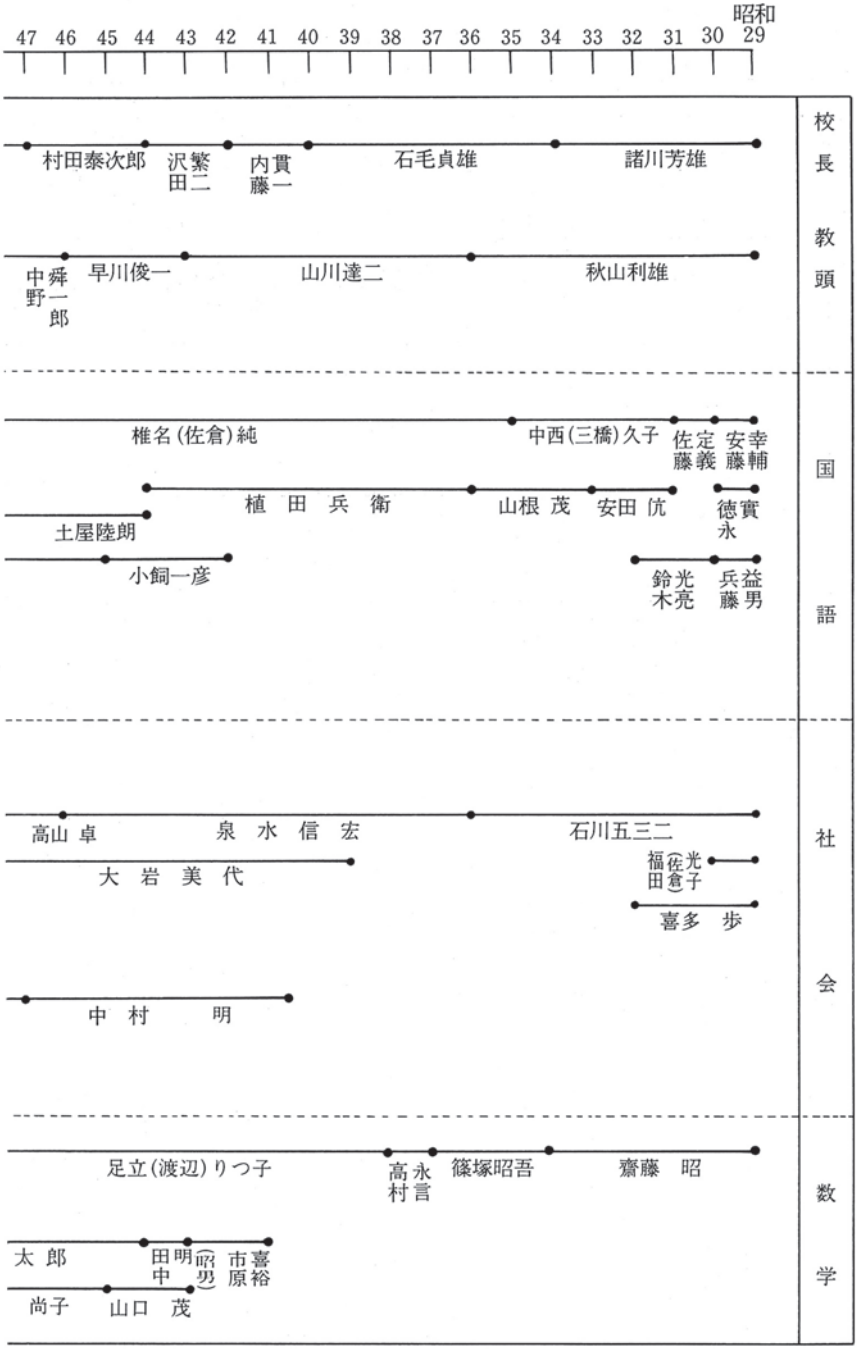

平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41
穴倉健司
江口憲治
松岡伸泰
富田慶一
本屋敷博
石川
古市純久
野村和
津嶋英也
濱井清之
片岡鞆
青柳伸一郎
野村松三
西村ひとし
佐藤昭勝
木村香住
本城一隆
小川武久
高橋衍
井辻紀一
鈴龍木実
西山タカ子
平松生夫
秋吉匠
田野英夫
宮負一昭
安塚正明
松本孝
渡辺隆
松崎哲雄
佐藤敦
小林義人
子安雅博
須賀賢悟郎
根井伴子
赤浦章子
櫻井功造
佐々木輝雄
鶴岡敏雄
鈴木健生
菅野政敏
亀山仁寿
椿行雄
和田稔
鈴木二
池田和夫
金子澄兄
原口與一
先田賢紀智
石井栄
西郡巌
吉田秀樹
水元清志
石田三夫
飯田浩司
亀忠夫
上林美恵
瀬口千枝子
織田真一
浜口幸也
松井正信
丸山千鶴夫

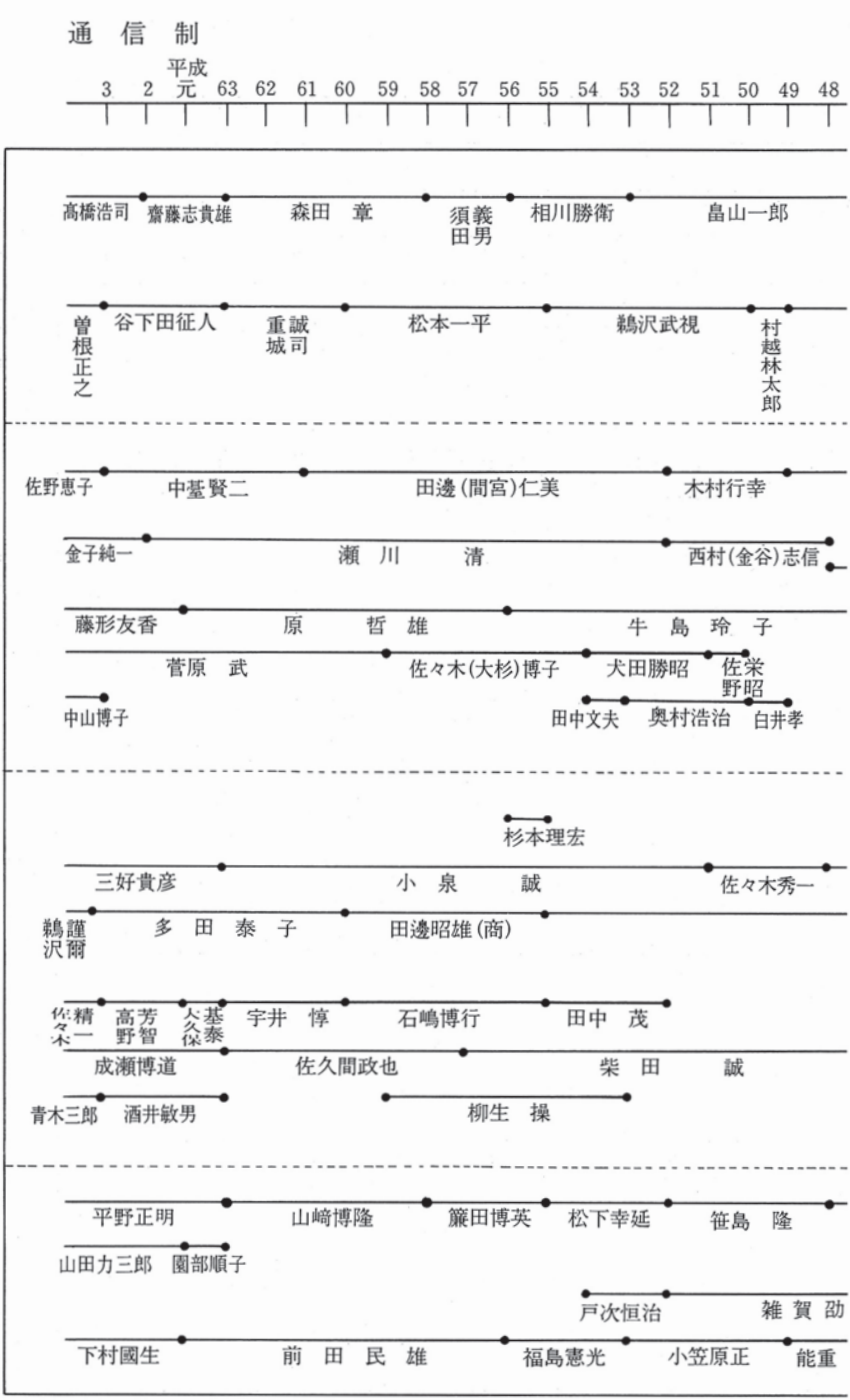

昭和
40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
田中かよ子
芳野(名児耶)千代
森(秋元)日出子
根本婦美江
真田(外山)富美代
加藤(吉野)幸子
飯高ヨウ
山越チエノ
川勝(兵藤)雅
木島(始関)道子
島田(金子)よね
愛敬(石田)順子
那須はる
名生はる
松本(鎌滝)富子
平山(鈴木)利枝
森谷(福地)芳子
扇谷(守内)キヌ子
柴田希子
伊藤(篠田)圭子
秋元あさ子
伊藤(中嶋)和子
望月(渡辺)てい
水澤(金子)静枝
堅田(浜田)フサ子
土田(佐久間)公子
秋元たま子
山本貴美代
家庭
衛生看護科
渡辺貴久
国分君子
桜井登美子
養護
柳川懋
宮崎紀文
小宮清治
石井恒之
(事務長)
(図)
細川(鈴木)悦子
(図)
松井(西浦)代利子
鈴木茂
章
吉武(波戸)昱子
関光衛
川又(西郡)玲子
孤田(遠藤)愛子
菊代
大森菊野
金親和枝
松葉昭
森俊雄
事務

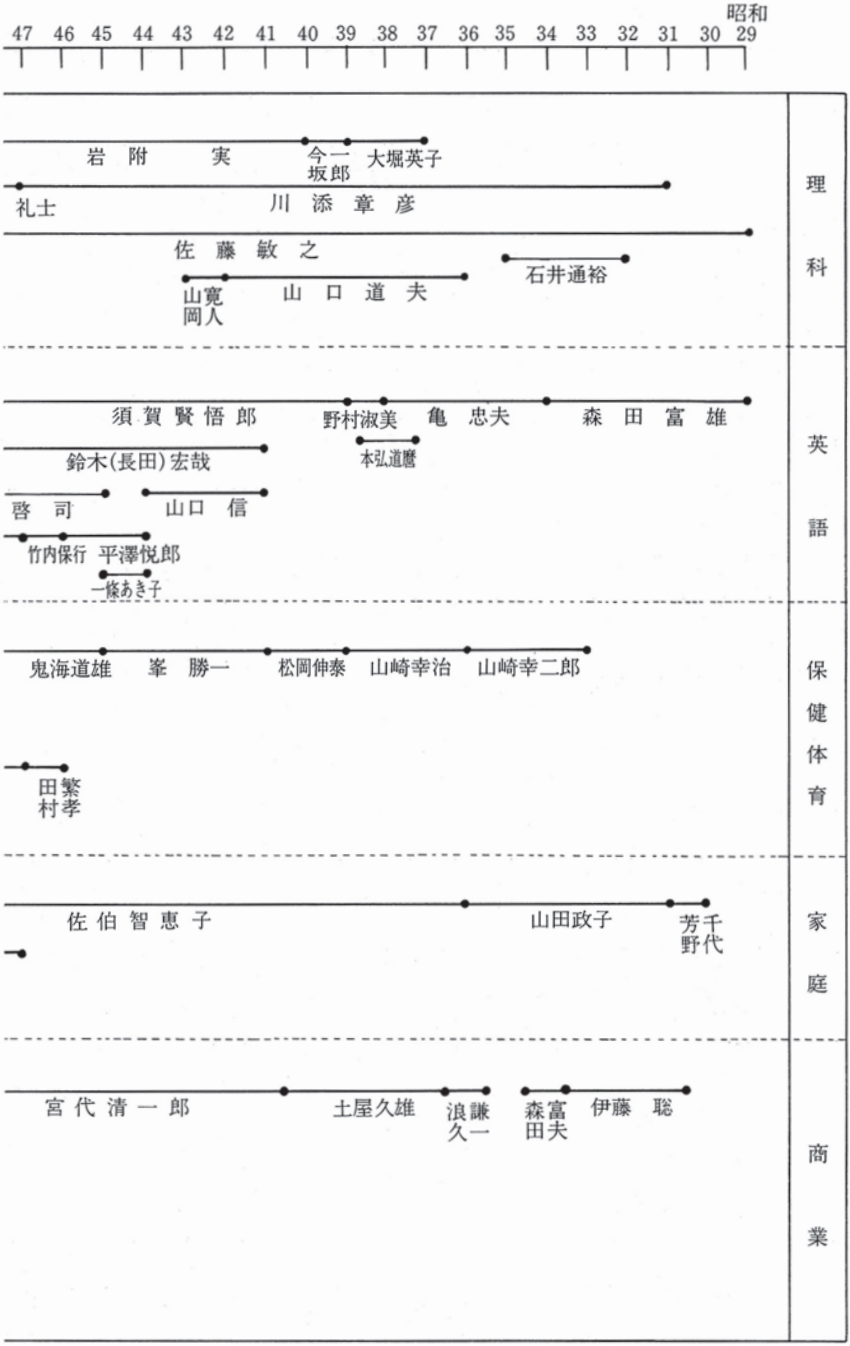

平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41
祐乗坊節子
西東由美子
千葉規雄子
田中かよ子
外山智子
須藤明子
倉内くに子
坂本あい子
森裕子
田村照子
永井弘子
高沢百合子
藤村さゑ子
山崎悦子
田中久子
岩崎定子
東敬子
吉崎ヤス
加藤千鶴子
青木尚子
上村容子
森(松井)泉
三輪清子
田中カネ子
佐宗(竹内)久子
岩瀬博子
鈴木美佐子
大石恵子
安田末代
高浦昌洸
鳥取治男
横尾進
薄木進
石渡常雄
田中進
藤野當栄
青山康子
(図)
(図)
佐瀬八重子
宇嶌(野沢)純子
永嶋和子
波々壁和子
青木啓子
横倉智代
小山(加藤海)みゆき
黒川喜美子
鎌田(石井)ヨ子
齋藤
橋本尚美
安田英俊
小林勉
鈴木(小竹森)淑江
波々壁(秋倉)和子
永嶋(大沼)和子
二上八重子
伊藤晋
古市政美
山本吉一
大山
田中千香
水野(星野)良枝
今井万峯
高橋初枝
地引由紀子
坂本正子
並木(栢尾)孝子
石井正一
丸尚作

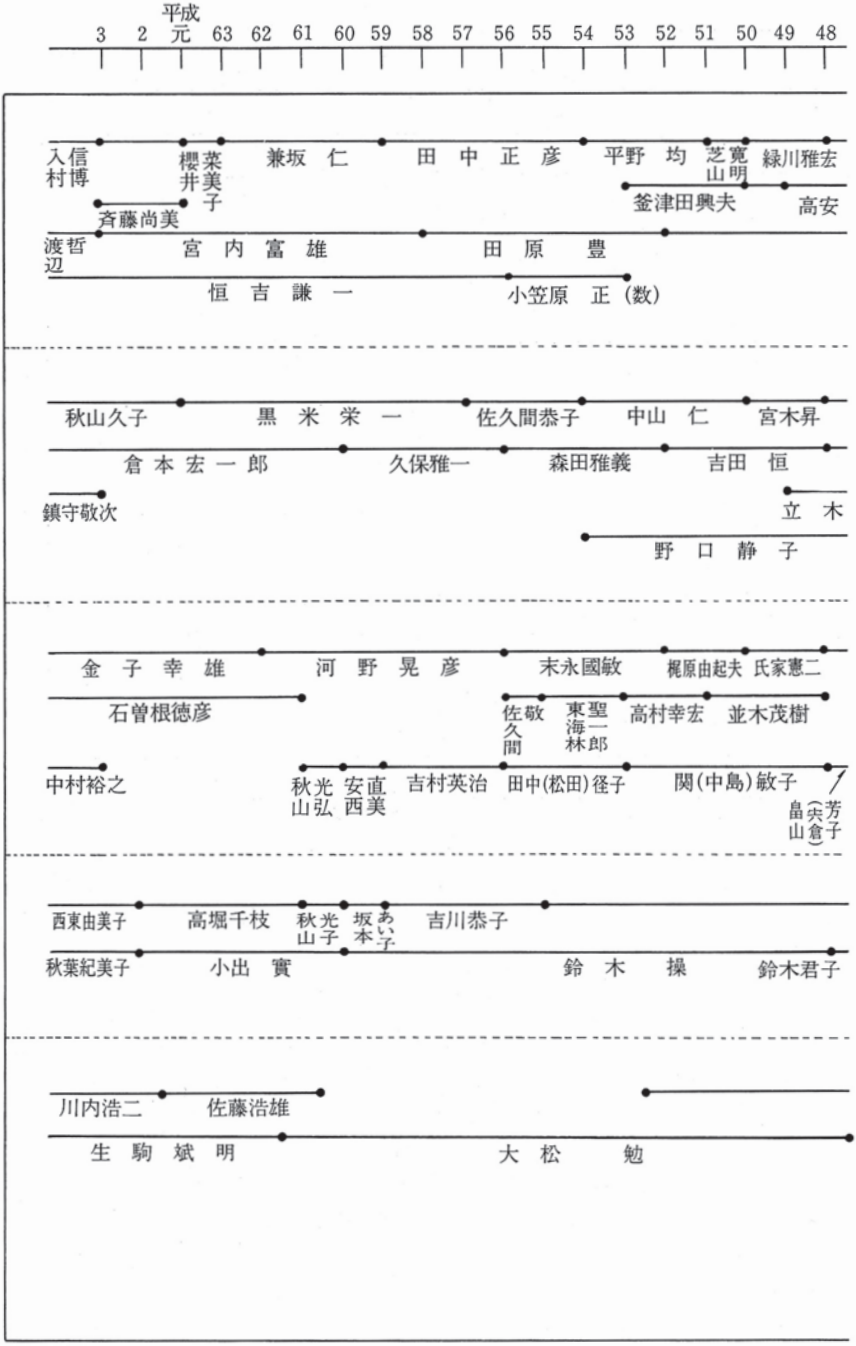

昭和
40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
栗林武夫
若菜仁三郎
大川義忠
中村勝次
増田一郎
ヨシ
蔭山三郎
金木恵和子
伊原清美
上村芳子
堤伸一
用務
警備

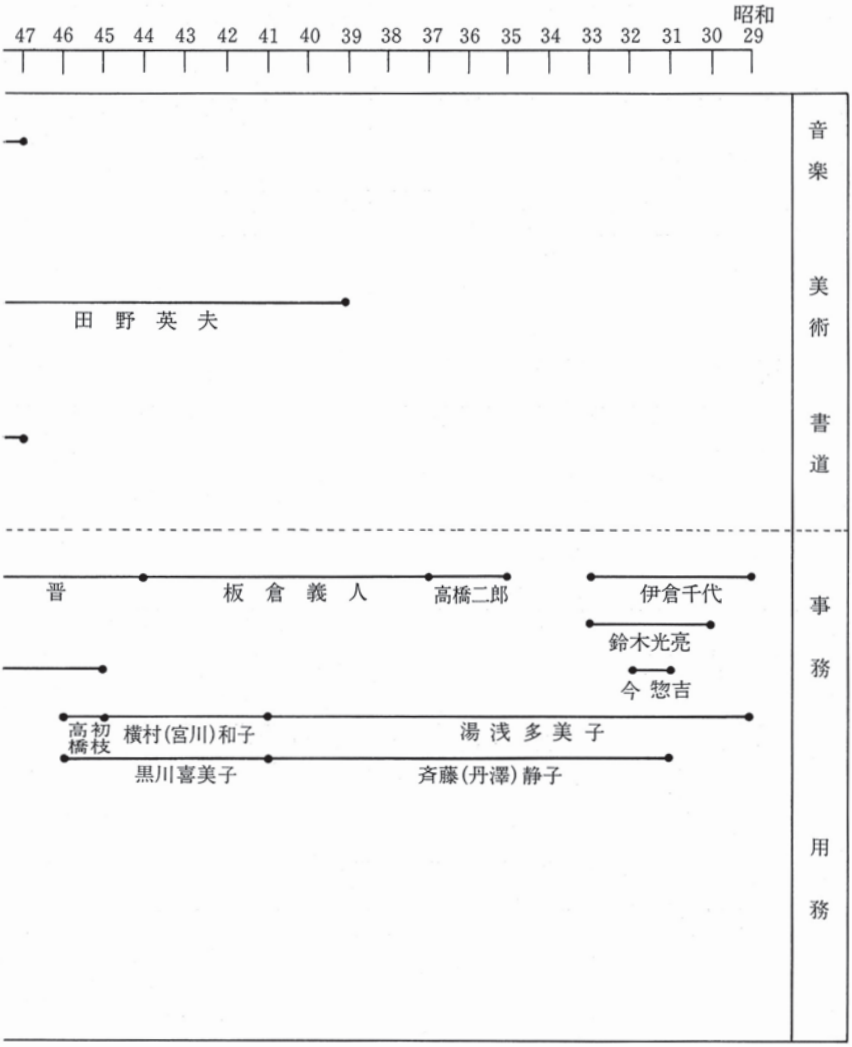

平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41
伊藤義雄
杵谷龍三
山本佑永
福田昭雄
中村勝次
(教務)
(教務)
(教務)
木村幸枝
加藤満穂
大塚(井橋)和子
伊原
宇井(榎本)節子
堀田(山田)幸子
(教務)
石井正雄
保科保太郎

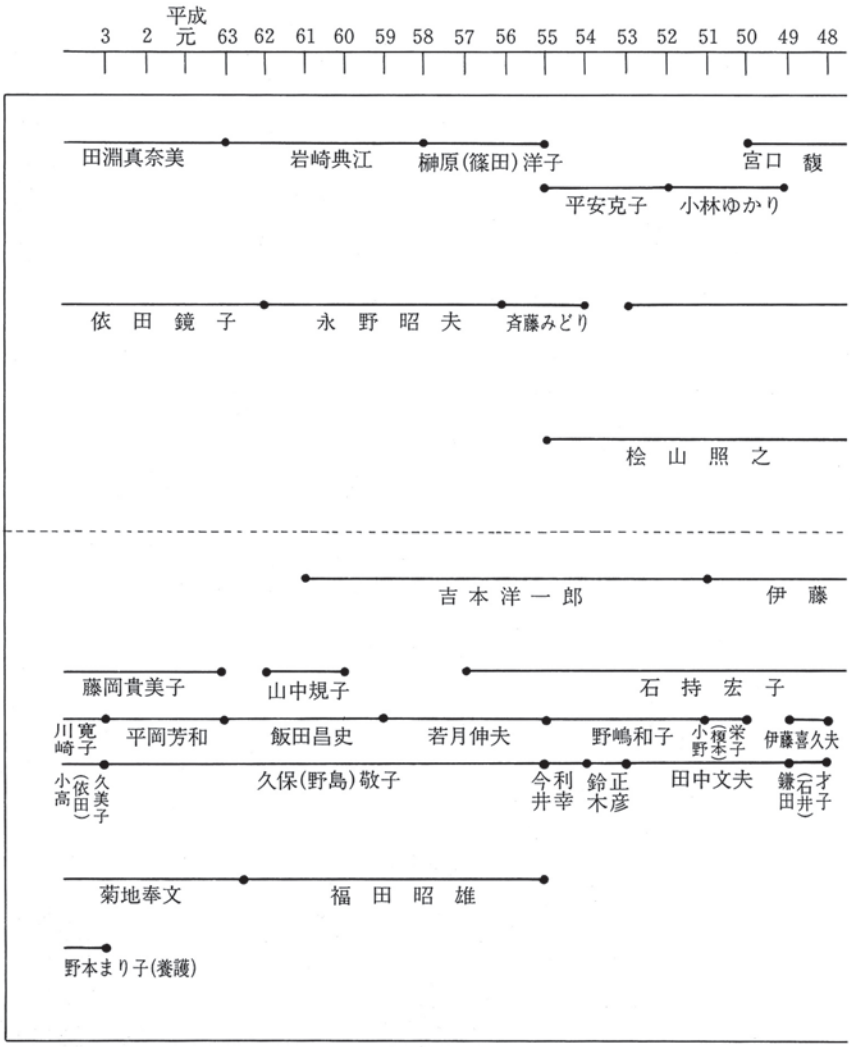

昭和
47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
校長 教頭
村田泰次郎
沢田繁二
内藤貫一
石毛貞雄
諸川芳雄
中野舜一郎
早川俊一
山川達二
秋山利雄
国語
椎名(佐倉)純
中西(三橋)久子
佐藤定義
安藤幸輔
植田兵衛
山根茂
安田伉
徳永實
土屋陸朗
小飼一彦
鈴木光亮
兵藤益男
社会
高山卓
泉水信宏
石川五三二
大岩美代
福田(佐倉)光子
喜多歩
中村明
数学
足立(渡辺)りつ子
高村永言
篠塚昭吾
齋藤昭
太郎
田中明
(昭男)
市原喜裕
尚子
山口茂


通信制
平成元
3 2 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48
高橋浩司
齋藤志貴雄
森田 章
須義田男
相川勝衛
畠山一郎
曽根正之
谷下田征人
重城誠司
松本一平
鵜沢武視
村越林太郎
佐野恵子
中基賢二
田邊(間宮)仁美
木村行幸
金子純一
瀬川 清
西村(金谷)志信
藤形友香
原 哲雄
牛島玲子
菅原 武
佐々木(大杉)博子
犬田勝昭
佐栄野昭
中山博子
田中文夫
奥村浩治
白井孝
杉本理宏
三好貴彦
小泉 誠
佐々木秀一
鵜沢謹爾
多田泰子
田邊昭雄(商)
佐々木精一
高野芳智
久保基泰
宇井 惇
石嶋博行
田中 茂
成瀬博道
佐久間政也
柴田 誠
青木三郎
酒井敏男
柳生 操
平野正明
山崎博隆
簾田博英
松下幸延
笹島 隆
山田力三郎
園部順子
戸次恒治
雑賀劭
下村國生
前田民雄
福島憲光
小笠原正
能重


昭和
47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
岩附 実
今一坂郎
大堀英子
礼士
川添章彦
佐藤敏之
石井通裕
山寛岡人
山口道夫
須賀賢悟郎
野村淑美
亀忠夫
森田富雄
鈴木(長田)宏哉
本弘道麿
啓司
山口信
竹内保行
平澤悦郎
一條あき子
鬼海道雄
峯勝一
松岡伸泰
山崎幸治
山崎幸二郎
田繁村孝
佐伯智恵子
山田政子
千芳野代
宮代清一郎
土屋久雄
浪謙久一
森富田夫
伊藤聡
理科
英語
保健体育
家庭
商業


平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48
入信村博
櫻井菜美子
兼坂 仁
田中正彦
平野 均
芝寛山明
緑川雅宏
釜津田興夫
高安
斉藤尚美
渡辺哲
宮内富雄
田原 豊
恒吉謙一
小笠原正(数)
秋山久子
黒米栄一
佐久間恭子
中山 仁
宮木昇
倉本宏一郎
久保雅一
森田雅義
吉田 恒
鎭守敬次
立木
野口静子
金子幸雄
河野晃彦
末永國敏
梶原由起夫
氏家憲二
石曽根徳彦
佐久間敬
東海林聖一郎
高村幸宏
並木茂樹
中村裕之
秋山光弘
安西直美
吉村英治
田中(松田)径子
関(中島)敏子
畠山(尖倉)芳子
西東由美子
高堀千枝
秋山光子
坂本あい子
吉川恭子
秋葉紀美子
小出 實
鈴木 操
鈴木君子
川内浩二
佐藤浩雄
生駒斌明
大松 勉


昭和
47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
音楽
美術
書道
事務
用務
田野英夫
晋
板倉義人
高橋二郎
伊倉千代
鈴木光亮
今惣吉
高橋
初枝
横村(宮川)和子
湯浅多美子
黒川喜美子
斉藤(丹澤)静子


平成
3 2 元 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48
田淵真奈美
岩崎典江
榊原(篠田)洋子
宮口馥
平安克子
小林ゆかり
依田鏡子
永野昭夫
斉藤みどり
桧山照之
吉本洋一郎
伊藤
藤岡貴美子
山中規子
石持宏子
川崎寛子
平岡芳和
飯田昌史
若月伸夫
野嶋和子
小野(根本)栄子
伊藤喜久夫
小高(依田)久美子
久保(野島)敬子
今井利幸
鈴木正彦
田中文夫
鎌田(石井)才子
菊地奉文
福田昭雄
野本まり子(養護)

第三節　同窓会役員名簿

会長　小西一三　高六（昭和二九）
副会長　小林美代子　高女二（昭和二一）
　高橋一郎　高九（昭和三二）
　長谷川直和　通六（昭和三七）
会計　細川悦子　高八（昭和三一）
　大木進　通四（昭和三五）
監査　永江栄　高女二（昭和二一）
　古市純久　高二二（昭和四四）
書記　小塚興作　高一一（昭和三四）
　木村行幸　高一八（昭和四一）



編集後記

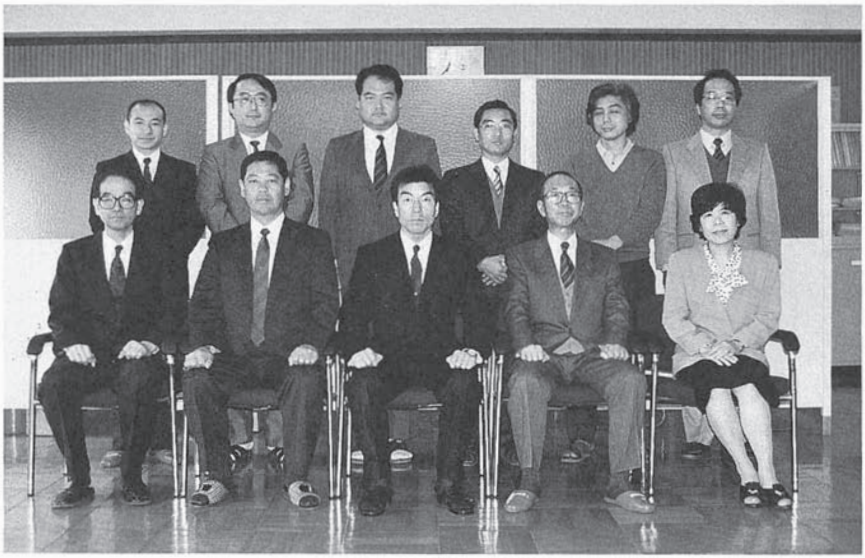
本校創立五十周年を記念して記念誌を出すことになり沼尻先生以下一一名の先生方が編集委員として任命されたのは平成二年の夏でした。編集委員会を開いたところ校史を作ろうということになり、資料を集めはじめました。ところが平成三年の春になって編集委員長の沼尻先生が病気で入院され、非力の私がその後任となりましたが、日常の勤務に追われ時間ばかりが過ぎてしまい仲々形にすることができませんでした。

とくに、校史ということでその中心となる沿革史を執筆していただくには本校に永く勤められた先生にお願いすることとなり、全日制では、野口宏先生、衛生看護科では永井弘子先生にご無理をお願いしました。野口先生は平成三年度より県立若松高校へご栄転になり実際にお書き下さったのは他校の職員となられてからでした。永井先生はご退職されてご家庭でお孫さんの子守の時間をさいてお書き下さいました。このお二人の先生のお力がなければ校史としてはならなかったものとこの場をお借りいたしまして、お礼申し上げます。創立三十年までのものは三十周年誌をほとんど引用させていただき、今回は、その後の二十年を四十周年誌を参考にさせていただきながら書き加えていただきました。

いざ編集に取りかかってみますと、文化祭や修学旅行など、行事の一つ一つの歴史や、校舎や校地などの建築関係などそれぞれの歴史を掘り下げたくもなりましたが、十分な資料がなかったこと、時間もなかったこと、さらには総ページ数に限りがあったことなどがあり、思い描いた物が出来ずに残念に思います。それでも、多くの方々から玉稿をたまわりお陰様でなんとか本校の五十年を記録するものにすることが出来ました。衷心より感謝申し上げます。

編集中に創立五十周年記念行事は盛大に滞りなく行われ、校史ばかりが出版出来ずにご心配をおかけいたしましたが、編集委員の先生方が忙しい校務の合間を縫ってご協力くださり、ようやく形にすることが出来ました。また出版社ぎょうせいの皆さんにはとりわけお世話になりましたことも併せて御礼申し上げます。

（吉田　正）



校史編集委員（写真右から）

清水　攻　佐瀬八重子
渡辺陽沼尻幸男
須藤信夫
上野一仁　吉田　正
土屋　修　犬田勝昭
青柳伸一郎　恒吉謙一（通）

平成二年度のみ

嘉村茂邦　菅原　武（通）

執筆協力者

野口　宏　永井弘子

五十年史

平成四年三月三十一日発行

編集
発行　千葉県立千葉東高等学校
〒263 千葉県千葉市稲毛区轟町一―一八―五二
電話　〇四三―二五一―九二二一

印刷　㈱ぎょうせい
本社営業所　東京都新宿区西五軒町四―二
南関東支社　東京都新宿区東五軒町一―二